THE CENTRAL REVIEW

中央公論

秋期大附録號

第廿九年第十號 第三百九號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

故田岡嶺雲譯並註

和譯漢文叢書

新時代の最大要請は時間と勞力との節約也 本叢書は此要請に應じたる者也

●全十二册完成 總クロース堅牢美本
原文の一字を換へず且懇切明晰なる註釋を加へたる者
●内容装釘等の詳細見本は郵券二錢を要す

- 第一篇 和譯老子莊子 正價壹圓 郵税拾貳錢
- 第二編 和譯韓非子 正價壹圓廿錢 郵税拾貳錢
- 第三編 和譯戰國策 正價壹圓廿錢 郵税拾貳錢
- 第四編 和譯荀子 正價壹圓 郵税拾錢
- 第五六編 和譯史記列傳 上下二册 正價各一圓卅錢 郵税各拾貳錢
- 第七編 和譯七書 附鬼谷子 正價壹圓 郵税拾錢
- 第八編 和譯淮南子 正價壹圓廿錢 郵税拾貳錢
- 第九編 和譯墨子列子 正價一圓拾錢 郵税拾貳錢
- 第十第十一 和譯春秋左傳 上下二册 正價各一圓卅錢 郵税各拾貳錢
- 第十二編 和譯東萊博議 正價壹圓卅錢 郵税拾四錢

◎批◎評

『譯文の簡淨、註解の明晰、亦嶺雲に非ざれば倣し得ざるの特色あり』（東京朝日）。『これならば譯と云ひても原文の妙を損せず且つ今の青年にも讀易からん』（萬朝）。『想ふに是れ譯者嶺雲の學と識との他に超卓せるに因るなるべし』（日本及日本人）。

中村不折、小鹿青雲共著

▼我國に於ける始めての新著

再版

支那繪畫史

寫眞版廿九葉及人名索引附

▼不折畫伯装釘意匠
▼菊判上製美本全一册
▼正價壹圓五拾錢
▼郵税十二錢

●時事新報評 『吾人は本書を目して本邦唯一の支那繪畫史として深く推賞する者也』

版元 東京神田區雉子町 玄黄社 電話本局二〇九二番 振替東京七九九五 ●全國書肆賣捌店

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

古今名著の全譯を極度の廉價にて頒つ一大叢書の出版！

■梗概に非ず抄譯に非ず一字一句を忽にせざる全譯也■

毎月二冊乃至三冊發行
定價一冊貳拾五錢均一
＝郵税一冊四錢宛＝
十冊前金貳圓參拾錢に割引す（外に郵税を要す）

■第一期 百冊刊行

新潮文庫

特製美本 ◎携帶に便なる袖珍型にて、金字入り色箔模樣の特製最美本也。近時頻出する粗惡なる叢書類と遂に其選を異にす。學生と云はず紳士と云はず。一切の階級の車窓机上に親しむ可きもの也。

文學哲學科學宗教歴史の各方面に亘れる◎名著の飜譯

低廉無比 總六號活字を用ゐ一冊優に二百五十枚前後の内容を有す。而して一部僅に貳拾五錢。普通圖書の定價の約三分の一に滿たず。是れ古書飜刻の叢書以外。我が出版界斷じて絶無の低廉價也。

九月中旬迄に出版すべき

新潮文庫の目次 (一)

第一 人生論 トルストイ著 相馬御風譯

トルストイ評論中の冠冕なる「人生とは何ぞや、」を譯せるもの也。この大偉人の根本思想は此編に盡さる。人生最貴の書にしてまた最大の書なり！

第二 はつ戀 ツルゲエフ著 生田春月譯

ツルゲエネフの戀愛小說、殆ど譯し盡されたるが中に唯一の海底の眞珠の如く遺されたるものの少女と、野の花と、甘き涙に充てる美しき戀物語也。

第三 マルコ 第四 ポーロ 旅行記 生方敏郎著

マルコ・ポーロは伊太利人にして元の忽必烈の顧問たりしもの、初めて日本を西洋に紹介せる人也。其の東洋旅行記は世界の珍書、今こゝに譯出さる。

第五 イブセン書簡集 中村吉藏譯

此の大作家の側面觀として裏面觀として、所謂イブセンの樂屋を語るものとして、最も暗示的興味と研究的資料とに富めるは卽ち此の書簡集也。

第六 白痴 (1) ドストエフスキイ著 米川正夫譯

北歐の聖者ドストエフスキイが人間心理の最奧に穿到して、其暗黑の底に一道の電光を觀取せるの記錄也。凄慘眼を掩ふ可く敬虔襟を正す可し。

第七 ウエルテルの悲み ゲエテ著 秦豐吉譯

近世浪漫主義文學の代表作として何人か此の名著の名を知らざらん。所謂ウエルテルズムは幾多の若き男女をして、熱烈なる戀に死なしめたり。

第八 種の起原 (1) ダアウヰン著 大杉榮譯

十九世紀の文明を根底より動かしたるはダアヰンの進化論にして、其の中樞を成すもの卽ち此篇。これ現代科學の基礎、また哲學の基礎也。

▼英にカッセルあり獨にレグラムあり。而して我れに新潮文庫あり！本文庫實に此抱負を以て生る。

▼本文庫の執筆者は現代飜譯界のオーソリティの殆ど總べてを網羅するの外、亦新進にして實力ある人々の最善(ベスト)を盡くせる名譯を出版す。飽くまで内容的、飽く迄實質的、斯くて始めて現代譯書の定本たることを得ん乎。

東京市牛込區矢來町中の丸 **新潮社** 電話番町二二二三 振替東京一四七二

田村とし子著

木乃伊の口紅

本書は現下の文壇に大問題を引起しつゝある大膽なる著者が告白にして有名なる、長篇炮烙の刑を修む外數篇

四六版特製箱入 紙數三百七十頁
口繪 淺倉文雄氏の木版畫及著者の肉筆
定價金壹圓
送料金八錢

牧民社藏版

戀むすめ

良家の令嬢、下町の娘、女學生、女優、其他の若い娘たちの燃ゆるが如き戀を著者獨特の筆に依て描る
▲定價九拾錢送料八錢

吉井勇著歌集

戀人

菊判藏形美本箱入
定價五十錢 送料六錢

五版發賣

海のロマンス

■夏目漱石先生序
■杉村楚人冠先生序
■鳥居素川先生序
■澁川玄耳先生序

■太刀雄著

■見返し……名取春僊氏圖
■裝幀……野口柾夫氏案

見よ快著は永久に眞價を有す。

■菊判上製函入美本 ■紙數六百餘頁
■口繪三色版『海』■挿圖寫眞版十數葉

■特價金壹圓八拾錢

■太刀雄夫れ何者ぞ突如として此の快著を出だし讀書界を驚倒し恍惚として耽讀を敢てせしむ

■漱石、楚人冠、玄耳、素川氏等が無名の一青年太刀雄の爲に序文を物せられたるは又以て内容の非凡を證すべし

■其の輕快洒脫なる筆致は能く破天荒の長航海に現はれたる非凡の痛快味を點綴して本書の光彩を倍加せり。

發兌元 東京市神田區錦町一丁目 誠文堂（振替東京六二九四番）
東京市神田區錦町一丁目十九 中興館（振替東京四一二三番）

會長 從四位文學博士 服部宇之吉先生

漢文講義錄

他に類例なき本會の特色

(一)本會は漢文研究以外國民精神の涵養を目的とし服部博士主唱の下に現代一流の碩學鴻儒を糾合して成る。(二)本會講義錄は東京帝國大學文科大學内支那哲文學研究室に於て諸講師合議の下に編纂執筆せらる。(三)會長初め講師諸先生に於て會員の質疑に對し懇切なる解答をなしまた其詩文は周到に添削し且つ諸先生署名して其の責任を明にせらる。(四)本會講義錄は解題、訓讀、字義、大意、講義、餘編の六項を設け說明懇切丁寧にして如何なる初學者と雖も容易に斯學の堂奧に入るを得べし。(五)本會講義錄は每號三百頁以上の尨然たる大冊にして會費は普通の雜誌を購讀すると同じき驚くべき低額なるは斯界の新例として世人の感嘆する所也。

名譽贊助員

市村文學博士
細川樞密顧問官
中島文學博士
井上文學博士

左記名譽贊助員諸氏は每號特に本講義錄の爲「青年訓話」の一章を講述執筆せらる

芳賀文學博士
星野文學博士
桑原文學博士
萩野文學博士
樺山海軍大將
三宅文學博士
新渡戸法農學博士
田中文學博士
澁澤男爵

▲修身 ▲論語 ▲孟子 ▲孝經小學 ▲十八史略 ▲皇朝史略國史略 ▲日本外史

文學博士 服部宇之吉
東京高師教授 宇野哲人
明治大學講師 今村完道
第一高等學校教授 安井小太郎
文學士 山口察常
文學博士 林泰輔
廣島高師教授 北村澤吉
東京高師教授 中島久四郎
中央大學講師 鳥山喜一
陸軍教授 川野健作
文學士 手塚宏壽

▲唐詩三百首 ▲古文眞寶後集 ▲明治中興詩文 ▲本朝名家詩文 ▲作文 ▲作詩法 ▲故事成語 ▲詩文添削

東京帝大助教授 塩谷温
文學士 佐々木平次郎
第一高等學校教授 島田鈞一
文學士 岡田秀夫
一高教授 安井小太郎
學習院教授 岡田正之
慶應義塾講師 佐久節
第一高等學校教授 今井彥三郎
慶應義塾講師 佐久節
明治大學講師 池田四郎次郎
安井、平井、佐久三先生

新學期開講

此際入會者には大特典あり見本付會則申込次第

無代進呈

東京市神田區西小川町二ノ三 **大日本漢文學會** 電話本局五四四〇 振替東京二五六二〇

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

秋季特別增大號

■歐洲空前の大亂と帝國の態度　立博士

・歐洲戰亂と列强の地位……諸家

▼歐洲大動亂の原因　長瀨鳳輔

▼歐洲列强の合從連衡　田中萃一郎

▼大動亂と日本經濟界　吉井友兄

■戰時歐洲の經濟關係　阪谷男爵

太陽

■黨首月旦　國民黨首領犬養毅氏　前田蓮山

・歐洲戰爭の支那に及ぼす影響　諸家

▼墨國ザパタの暴狀　橫山博士

▼各鎭守府及長官　滄溟漁史

▼航空機と潛水艇……

■歐洲の平和を攪亂せる獨逸皇帝　浮田博士

■現代の美術　上田博士

■城崎より橋立へ　久保天隨

■書齋の窓より　內田魯庵

秋季大附錄

▼弱虫　正宗白鳥

▼毒草　田山花袋

▼血に染む太陽　小川未明

▼百日紅　上司小劍

▼影　德田秋聲

▼栗山大膳　森林太郎

■戰爭と經濟　堀江博士

■普佛戰爭回顧　某史家

■其他時局の問題　を滿載す

九月一日發行

定價本號に限り

金五拾錢

東京本町

博文館

振替東京二四〇番

(前付の七)

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

南北社創立三周年紀念

大特賣

——（斯くの如き名著の斯くの如き大特價期間は僅に二個月間）——

書名	著者	定價	特價
新道德論	浮田和民著	一〇〇錢	八〇錢
婦人と道德	エレン・ケイ著 本間久雄譯	八〇	五六
第三帝國論	茅原華山著	一〇〇	七〇
南洋を目的に	南洋王江川薫著	一〇〇	七〇
殘飯（新青年道）	永井柳太郎著	一〇〇	七〇
智慧と運命	メーテルリンク著 大谷繞石譯	一〇〇	七〇
生の要求と文學	片上伸著	一二〇	九〇
此の人を見よ	ニーチエ著 安倍能成譯	九〇	六三
ルソーの眞髓	松本雲舟 原正男 共譯	一〇〇	八〇
早稻田生活	早稻田大學十二學士共著	一〇〇	六五
赤門生活	全國各帝國大學六學士共著	八〇	五〇
禮義作法精義	松崎雙葉著	二〇〇	一八〇

發兌元 東京牛込 （振替東京一九四番） 株式會社 南北社賣捌 全國到る處の書肆

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は絶謝す

一 當會社の保險料は低廉にして且つ利益金の百分の五十以上を五箇年目毎に契約者に分配す

一 當會社の保險料拂込方法は保險證券訂正の煩を要せず其變更契約者の隨意とす

一 當會社は拂濟保險の便法を設けあり

古河家經營

社長 男爵 中島久萬吉
專務取締役 小原元美
專務取締役 鈴木市之助
常任監査役 安達仁造

博愛生命

電長本局一八五六、五一五〇、一三八七番
振替貯金口座東京一七一七番

本店 東京市日本橋區本町四丁目十五、十六番地
支店 大阪市東區本町一ノ一三(電長本局二三一一番

一 當會社は低利なる金融機關の設あり

一 當會社は被保險者の年齡範圍最も廣く滿九年七箇月以上滿六十年六箇月迄契約す

一 當會社の保險金支拂は最も迅速なり是れ保險契約の目的を遂行せんが爲なり

[illegible]




12
1
2
3
4
5
7
8
9
10
11
營業品概目
○懐中時計　各種
○掛置時計　各種
○ダイヤモンド・並ニ各寶石
○指環手釦並ニ各種携帶品
○貴金屬美術工藝品製作
東京市京橋區八官町
小林時計商店
電話局新橋　一一〇三
　　　　　　一一〇四
振替口座　七八〇七

WINSLOW HOMER



Early Evening

嗚呼膠州灣

獨逸皇帝が遼東還附を首唱したる舌根の未だ乾かざるに、渺たる宣教師二名の横死を理由として兵力の威壓に依り膠州灣の租借權を獲得して、以て支那分割の端を開き、日露大戰の遠因を作りしことは尙ほ吾人の耳に熟する處たり、爾來僅かに十有七年甚だ久しからずと雖も獨逸の經營は着々功を奏し、港灣の設備、鐵道の敷設、礦山の開堀等綱擧り目張り、東洋に於て獨帝の雄圖を實現すべき策源地の基礎將に其完成に近からんとす、既に獨逸の勢力は經濟的に政治的に山東、河南を壓せんとし、又地形の關係上武裝せる膠州灣は直に北京の威嚇たらざるを得ず、即ち獨逸本國が歐洲の禍源たるが如く膠州灣は實に極東百年の危害なり。

嗚呼天なる哉命なる哉、獨逸皇帝は今や其多年精神を傾倒したる經營の貴重なる結果を放棄するを餘儀なくせられんとし、我帝國の一擧將さに極東平和の一大危害を一掃せんとす、誰か快心ならざるを得んや、若しも獨帝にして此際能く智者を學ぶを得ば必ず二十年前の我邦に倣ひ素直ほに帝國の勸告を納れて膠州灣の軍備を解き、支那に還附するの目的を以て其租借地を我邦に委托すべきなり、若しも然らざるに於ては極東の天地また要塞戰の慘擔を見るに至らんも、勝敗の數に於て毫も疑を容れざるなり。

憶ふに武裝せる膠州膠一變して平和の貿易港と化するに至らば、支那保全の主義は爲めに一段の保障を得べく、極東の天地爲めに滔天の妖雲を一掃し得たりと謂つべし。

中央公論



秋期大附錄號

第二十九年第十號
第三百九號

歐洲の大亂を論ず

(一) 均勢把持の爲め

歐洲均勢の把持は列國存立の保障にして、此均勢を破壞するものは歐洲の公敵なり、故に若しも或强國の君主にして獨り覇業を專にするを念とし、偉大なる兵力を擁して四隣に睥睨し、遂に國際間の公約を無視し小邦の權利を蹂躙し以て其飽くなき大望心を滿足せんとするものあらば、他の烈國は期せずして協同一致し四方より彼を攻圍し彼が雄圖を破碎せざれば止まず、十八世紀の始に當り佛國王路易十四世が富强文明歐洲に冠たるを以て足れりとせず、公約を無視して西斑牙の王位を其後裔の手に收めて以て西斑牙本國は言ふも更なり、伊太利、ネザランド及び中、南亞米利加をも佛國の勢圏内に加へんとす

るの野心を爆露するや、英王維廉三世は墺太利、普魯西、和蘭、サボイを誘ふて佛國反對の大同盟を組織し、名將マルボルロ(英國)及ユウギニー(墺國)の統卒の下に連合軍の運動を開始し、ブレンハイム、ラミリー、オウデナルデ等の戰勝により全然佛軍の勢力を破碎し、遂に一七一三年ユウツレヒト平和條約に依り永久佛西兩國王位の分離を確保するを得たる耳ならず、英國は加奈太の佛領を版圖に加へ、又地中海の咽喉を扼すべきヂブラルターの要塞を獲得せり、戰勝の結果英國の利得の最も多大なるは英が事實上佛國反對同盟の盟主にして、他の列國に向つては補助金を給して其出兵を助けたるに因る耳ならず、當時既てに海外殖民の必要を解し一定の方針に因り佛國の領地を占領することに大に努めたればなり、歴史に所謂西班牙國王位繼承戰爭とは即ち此の大戰爭を云へるものにして、其繼續十三年の久しきに及び、佛國は爲めに國努を空費し財政の大紊亂を來たし、後の大革命騷亂の誘因を作れり。

是より百年を過ぎて那勃翁大帝反對の列國同盟あり、想ふに一八〇九年前後は實に那翁の全盛時に屬し無盡藏の蠻勇ある露國は佛國の無二の親邦たり、歐洲第一の舊國墺地利は事毎に帝の指導を仰ぎ、普魯西は領土の一半を削られて事實上佛の附庸たり、北伊太利、ネープルス、西班牙皆な帝の近親者を奉じて王となし、全歐洲中帝の節度に服せざるものは僅かに東方に土耳古あり、西端に葡萄牙あり、北方に英吉利あるのみ、若夫れ帝畢生の願望たる英國討伐の業成るの日には地中海は一轉して佛の池沼と化し、埃及を始め東方一圓の地自ら帝の版圖に入るべきは看易きの勢なり、而して印度討伐の如き露帝の範圍に附屬されしも、佛帝の協力を借らざれば其事行はるべからず、即ち那勃翁大帝の下に世

界統一の成る近きに在らんとす、是れ實に列國の忍ふべからざる所なり、茲に於て那勃翁反對同盟は拗せずして成立せり、即ち英の外相カッスルリはピットの遺圖を繼ぎ、那翁の大陸封鎖策等に對する各國の不平を巧に利用し劃策大に努むる所あり遂に一八一三年には第六回にして最後の佛帝反對大同盟は締結せられ、英、露、普、墺、瑞典の同盟軍は各方面より攻進し、佛軍は一八一四年のライプチの戰に大敗し、更に翌年のワートルルーの敗戰により那翁の帝國は根蒂より覆へされたり、ヴィエナ會議に於て那翁のエルバ島より遁れ歸れるを聞くや、『人類の公敵にして公法の保護以外に在り』と決議せる誠に所以ありと謂ふべし、那翁の飽くなき野心、其背信侮慢の行爲、竟に公敵たるを免れざりしなり。

歴史は繰返す、一度あることは二度あり、二度あることは三度あり、第十八世紀の始に路易十四世反對の大同盟あり、其より百年後に那勃翁反對の各國大同盟あり、更に百年の後に於て今次の獨帝維廉二世及び其同盟國たる墺洪國に對する歐洲列國の大同盟を見る、豈亦奇ならずや、一七一三年の平和會議はユウツレヒトに開かれ、一八一五年の平和會議はヴィエナに開かれたり、知らず一九一五年に開かるべしと思はるゝ列國大會議は果して何の地に開かるべきか、倫敦か巴里か、將た又た伯林か、歐洲百年の安危は實に今の動亂の結著如何に繋れり、豈に唯た歐洲とのみ言はんや、東亞の安危亦た之に關する所誠に深且つ大なり、今や歐洲の均勢は益々擴大して將に世界一般の均勢問題と轉化せんとするの際にあり、日英同盟の關係上我帝國も亦た遂に今次の動亂に參加せざるを得ざるに至れり。

（二）歐洲均勢の由來及現狀

列國均勢は歐洲特殊の現象にして、五大强國と幾多の小邦とが同一大陸上に併立し、各自獨立の必要上、互に合縱連衡するの結果に外ならず、北亞米利加の如き合衆國と加奈多の二國ありて其勢力は毫も平均せざるも更に兩國相犯すの恐あらず、合衆國の富强は優に加奈多を威壓するに足れりと雖も暴力を以て加奈多を併合するは千載の禍根を遺すを知るが故に何人も斯る企圖を懷くものあらず、兩國その境を接すること數千哩の遠きに及ぶも互に自由に往來して、最も親善の關係を保てり、支那の如き幾千載の歷史に付て觀れば戰國時代の列國分立するあり、魏蜀吳の三國權を爭ふあり、南北朝時代あり、金と南宋と相瓜分するありと雖も、是等は寧ろ形勢の一時の變態に外ならず、古來支那の理想は國土を同一君主の下に統一するにあり、三代より秦、漢、唐、宋、元、明、淸に至るまで此理想の實行に努めざるはなく、而して統一の行はれたる場合に非ざれば、天下泰平の時代と謂ふ可らず、但し支那が彼れが如きの厖大なる國土を以てし永久分割立國の跡なきものは民族の統一に由ることもあるべしと雖も主として地形の狀態之を然らしめたりと云はざるべからず、地形狀態に關し殊に記すべきは古來支那人の所謂『中原』にして、即ち中原復た鹿を逐ふと詩人が歌ひし地方が政治上に及ぼしたる影響なりとす、此中原は北は北京天津より南は蘇州杭州に及び、西は河南省の西部に達し、南北の延長無慮七百哩、東西幅員百五十哩より三百哩に及ぶ、其面積二十餘萬方哩、世界中最も富饒膏油の地なり、古來此中原を征服し

得たるものは即ち天下を制すと思惟され、又た事實上然らざるを得ざりしは理勢上止を得ざりしなり、故に元代に入り首都を北京に定むるや大運河を開鑿して南方の貢米を北方に輸送するの便を計り以て經濟の基礎を固ふせり、蜀や、吳や、その他幾多の小邦亂世に乘じて樹立されしも一として永久なる能はず、必ず中原に國を建つる者の爲め遂に亡滅もしくは併合せられざるを得ざりしなり、歐洲に於ても往古羅馬帝國の起るありて宇内統一の業を全ふし、天に二日なく地に二王なしと云ふの理想を立てたり、中古シャリマン帝起りて神聖羅馬帝國の理想を回復したりしも、帝一代にして統一の業は廢れたり、十六世紀に至りチャーレス五世再び此の理想を實現せんと努めしも內、新教徒の反抗あり外、佛、英の妨害ありて其畢生の計畫遂に水泡に歸せり、蓋し歐洲も宗教改革時代に入りては列國對峙の勢益〻盛にして、國民性の發達も亦た頗る著るしく、假令或る一國の元首が他の列國の各元首中より卓然拔んで丶君主中の君主たらんとするも到底公論の許さゞる處となりたればなり、若し强ゐて兵力もしくは外交の詐術を以て獨り自ら高ふせんとするものあれば他の列國は必ず同盟聯合して之を斃ほし彼が傲慢無禮を懲らざれば止まざるなり。

歐洲の均勢問題は斯くの如くして起れり、其斯くの如くなる所以のものは歐洲の地形が各民族の分裂立國に便なりしより、大に國民性の發達を促がし、遂に今日の六大强國と幾多小邦の分立を見る所以なり、知るべし、近世歐洲の國家組織は永き歷史と深き國民的意識とに基づくものにして、容易に破壞すべからざるを、大なるは六國あり小なるは十有餘國ありと雖も、其國力强弱の區別こそあれ、獨立國と

しての尊嚴に付ては毫も上下あらず、帝と云ひ王と云ひ又は大統領と云ふも業と國内の事情に基き其名稱を異にする耳、元首相對の禮に於て少しも甲乙あることなし、瑞西、和蘭、白耳義、丁抹、瑞典、葡萄牙の如きは孰れも小邦なり、然れども若しも獨佛の如き大邦が其勢力に任せ無道に之を合併せんとすれば公法を楯として他の列强之を許さず、止むを得ずんば兵力を連合して無道の大國を膺懲して以て、列國の均勢を維持するの擧に出づ、十八世の初に當り佛國路易十四世は西班牙と其屬領を合併せんと欲し列國聯合の兵を受けて敗れ、十九世紀の初那勃翁大帝亦た歐洲連合軍に包圍されて世界帝國の基礎を破られ、空しく孤島に憤死せり、路易王や那勃翁や各其晩年に回復し難きの失敗を招きし所以のもの一に列國均勢の神聖を犯したるの罪に座するのみ。

故に近世歐洲の政治家は列國均勢の問題に向ひ最も周到の注意を拂ふ、是れ國を富强にするは寧ろ易く、永久に其盛運を持續するは至難なればなり、比公は獨逸が佛國と戰ひ勝つや必ず四隣猜疑嫉娟の標的たるべきを思ひ、墺太利及伊太利と攻守同盟を結びて以て自强の策を立てたり、更に英國の好意を維持するを必要なりとし、一方英が露佛と接近せんとするを百方妨害すると同時に特に英と利害の衝突を來さざらん爲めに努めたり、即ち比公が殖民地擴張に甚だしく熱中せず又た急激の海軍擴張をなさずして英の猜疑を遮けたるの深慮大に察すべし、蓋し比公思へらく陸軍國として中原に雄視し、三國同盟を以て佛露の二國に當るは是れ均勢の當然にして、獨逸の實力相應の程度のみ、一たび海軍國として英と雌雄を爭ふの志を立つるに於ては、寧ろ其事の獨逸の實力に超越する耳ならず必ず英吉利を驅つて露佛と

握手せしむるに至るべく、勢茲に至らは列國均勢は乍ち傾きて獨逸の一大不利とならんと、史家論じて曰く歐洲に覇たらんとするものは大陸の某陸軍國を味方とするか海軍國の英國を味方とする乎二者その一を擇ばざるべからず、兩者を同時に敵となし尙ほ勝を制するもの未てあらずと、路易十四世の失敗も那翁の亡滅も孰れも海軍國と陸軍國とを同時に敵としたるの失策に出づ、比公は能く歷史を讀めり、故に其執政中遂に英國の歡心を失はざりしが、維廉二世即位後は壯年氣を負ひ、英の老成着實を侮どりて與みし易しとなし、頻りに海軍を擴張し毎に『我チウトン民族の運命は大洋上に在り』と叫び、宛ら英國と爭ふて世界の海上權を奪はんとするの概を示せり、是れ實に英國の堪へざる所、故に斷然獨の一に對し一・六の海軍力を維持するの國是を確立し且つ佛、露と多年の宿怨を一掃して德義上の同盟を結び以て獨逸の飽くなき野心に備ふるに至れり、今次大騷亂の結果獨逸の大勝利に歸するに於てはカイゼルの大名譽たるべきも、若しも然らざるに於ては彼れは果して歷史の敎訓に能く耳を傾けたりと謂ふを得べきか、比公相位を去りて後ち祖國の前途を思ひ一刻も安んずる能はず、毎に才氣餘ありて短見淺慮なるカイゼルの個人政治に對し多大の危懼を抱きしかば、當時世人は稍もすれば比公の老婆心、私憤、愚痴を嘲けりしが、今後戰局の發展次第に由れば寧ろ吾人は公の先見を感歎するの日あらんことを思はずんはあらず。

(三) 今の大亂に至るの經過

上段論ずる處のものは大體の見解、大亂勃發に對する根本の理由なり、然れども今次の大亂が今日に勃發せるに對しては別に具體的の事情と理由なかるべからず、若し此事情と理由なからんには決して今日に歐洲大亂を見ること無かりしなるべく、既に勃發すべくして勃發せず延期に延期を加へ來りし列國開戰はもしも此事情と理由なく、又は歐洲政界の大立物たる一二の人々の生命に急に故障にても生じたらんに或は形勢一變して更に多年を延期したらんも未だ知るべからず、此事情と理由とは如何、墺洪國皇儲及妃の暗殺事件と獨帝の形勢誤算即ち是れなり。

墺洪國皇太子フェリヂナント太公及妃がボスニャの首府スラヰヴォに於て無殘の最後を遂げれれたるは實る近來の痛慘事にして、全世界の深厚なる同情を惹起したりしが、若しも其下手人が狂人か左もなくは無政府黨員たりしならんには、何等難問題を喚起すに至らず當人若しくは其連累の所罰を以て事は容易に落着したるべし、然れども墺洪政府は疾くに事の必ず汎セルブ運動に關係あるべきを推し嚴密の取締を行へる結果、果して皇儲暗殺者等の自白に因れば該暗殺が塞國首府ベルグラードに於て計畫せられ、暗殺用の銃器爆彈が同地ナロドーナ・オブラーナ協會に屬する官吏軍人より供給せられしこと、且右銃器爆彈はボスニャ國境にある高級の塞國軍人の媒介に依り輸送せられたること明白となりしを以て、墺洪政府は七月二十四日を以て霹靂一發左の通牒を塞國政府に送致し、之に對し否應の返答を二十四時間内に要求せり、曰く

一、塞國新聞紙の第一頁に塞爾維人の反墺的精神の不正不當なるを宣明し且之に伴へる行爲を禁止す

るの最も殿肅なる宣言を發表し、同時に同文の陸軍令を發して之を各軍隊に交付すべし。

二、塞國政府は塞國新聞紙が塞國民の墺國に對する憎惡輕蔑心を助長するが如き文字を使用するを取締るべし。

三、直にナロドーナ・オブラーナ協會の解散を命じ、尙將來同一性質の團體の再び組織せらるるを禁ずるの手段を採るべし。

四、塞國各學校に使用せらるゝ教科書より苟も排墺運動を助長するが如き事項を除外すべし。

五、排墺運動に參加せる總ての官吏軍人を直に免黜すべし。

六、塞國に於て行はるべき今次の暗殺陰謀の調査に當りては悉く墺洪國政府代表者の之に參加するを承認すべし。

七、暗殺關係者の所罰は墺國政府監督の下に行はるべし。

嗚呼皇儲の暗殺や其事悲慘にして其罪天人の許さゞる處、且塞國高官の偶々之に參與せるが如き實に墺洪政府の憤怒を買ふに價すと雖も、ウイエナ政府の要求また實に苛酷なりと謂はざるべからず、曰く排墺の不正不當なることを國民及軍隊に言明すべし、曰く汎セルブ協會を禁止すべし、曰く塞國に於て行ふべき暗殺陰謀の調査に墺洪國の官吏の參加し且つ所罰に際し墺洪國政府の監督を受くることを承認すべし、若し此等の要求を納れんには塞國は永久に墺洪國の藩屬たるを免れじ、殊に汎セルブ協會の如き政治上正當の運動に外ならず、獨墺に『汎獨逸』運動あると何ぞ擇ばん、是れをしも禁ずべしとせば塞國は

其立國の理想と生命を奪はるゝなり、茲に於て露國は形勢緩和の一手段として回答期の延長を提議せしも聽かれず、而して塞國が通牒を承諾するに躊躇するやウィェナ政府は期限の過ぎると共に宣戰を布告し陸軍の動員を命ぜり。

此の果斷にして毅斷なる墺國の處分に對し吾人其當時必ず獨逸の同意を經たるべきを信じたりしが、果せるかな後に駐獨英國大使の報告に由り吾人の推測の誤らざりしを知れり、即ち獨帝はウィェナ政府の背後にありて其對塞處分案に同意を與へたりしなり、想ふに帝は其當時英國はアルスター問題に由り殆んど內亂に瀕し、佛は陸軍腐敗の爆露に由り意氣沮喪し、而して露は勞働者大同盟罷工に苦めるを察し、到底露國は塞國を援けて開戰するの覺悟なく、塞國如何に憤激するも遂に墺國及び獨逸の威壓の前に屈服するの外なしと高を括くりしもの丶如し、然れども是れ大なる誤算なり、當時露佛英の關係は二州合併(一九〇八年)の時の如くならず、一代の俊傑たる佛國大統領がアンカーレ氏は既に能く英露と協議を遂げ萬一の變に備ふべき方略を一定し得たるに似たり、意滿ち氣驕れるカイゼルが此間の消息を察せざりしは返す〲も遺憾なり。

意外の强壓に接せる塞國は必死防禦の覺悟を示し、露國に至りては朝野憤慨、直に干戈を執りて起つの概あり、御前會議に於て皇帝は『獨墺は七年半の間盛んに吾人に戰を挑みたり是にて十分なり』と宣せられ、內閣は直に大動員令を發布すべく決定し、前日來同盟大罷工を舉行せし勞働者も乍ち正業に復し却て排獨運動に參加せり、斯くて歐洲大動亂の機は愈〻熟せるもの丶如く、英國は佛、伊、獨と謀り露墺

に對し調停を試みんとせしも、獨の拒否により終に調停の成案を得るに至らず、時局は日に時に進展し、英國內の輿論亦た大に動き朝野兩黨はアルトタル問題を中止して共に擧國一致の態度を採らんとし大に警戒する處あり、此間露墺協議し、獨佛意見を交換し、獨帝特使を以て露帝に親翰を送れりと傳へられしも、多くは誠意を披瀝して平和的解決を求むるの狀なく、寧ろ竊に開戰を覺悟しながら其口實を求め其責を他に轉嫁せんとするに過ぎず、但し英、佛、伊の調停運動は頗る誠意の之に伴へるを見るも、獨露已に開戰を覺悟せる以上、調停運動の遂に水泡に歸せしは止むを得ざりしなり、斯く墺塞は先づ戰端を開き、露獨競ふて大動員を行ひ、佛國之に倣ひ、英國亦た晏如たる能はず大に海陸軍戰鬪準備を行へり、而して全歐大亂の機日に近づくに際し、英政府は獨逸より一の內提議に接したり、其議に曰く獨逸は來るべき戰爭の結果として佛國の歐洲領土を割讓せしめざるべく又た一時白耳義國の中立を犯すべくも戰後必ず之を返還すべし、之を條件として英國は中立を守られたしと、初め此提議に接したる英國大使は佛國殖民地に對しても同一の保證を求めたるも獨逸首相は之を拒めりと云ふ、此獨逸の提議に對し英國外相は答へて曰く『斯の如き佛國を賣りて英國自ら利せんとするが如くんば英國は遂に拭ふ可らざる汚名を蒙るべし』と、想ふに此の回答は獨逸の稍々意外とせし處なるべきも、今や騎虎の勢奈何ともす可らず、七月三十一日伯林政府は露國に通牒して十二時間を期し動員を中止すべきを要求し、其答へなきや八月一日宣戰を布告せり、而して二日には獨軍は永世中立地と定まれるルクサンブルク大公領に侵入し、同時に白耳義に通牒し、白國が同國に於ける獨逸軍の活動に便宜を與へんことを求め五日朝までに回答を

與へんことを迫れり、憶ふに此間の獨逸の行動は頗ぶる機敏なり、其意必ずや機先を制し一擧にして大局を定めんとするに在りしが如きも、其結果寧ろ意外の感ありしなるべし、蕞爾なる白耳義素より獨逸の敵に非ざるも、毅然として獨逸の提議を退け中立を防禦すべく起てり、而して一方英國に訴へて中立維持の後援を求めたり、茲に於て列國の態度皆な鮮明なるに至れり、英國は白耳義の中立擁護を名として起ち、露國は塞爾比の後援として且つ祖國の名譽と國威の爲めに起つと稱し、佛國は同盟の誼を重んじ露國の爲めに起てり、露帝の宣戰布告中に曰く

　露國は其光榮ある歷史に於て宗教血族を同ふするスラブ同胞の不幸に際し未曾て看過したることとなし、今次墺國が塞爾比に對し獨立國として忍ぶべからざる要求を爲すに及び露國民のスラブ人に對する同情は强烈に發揮せられたり、墺國は謙讓にして穩和なる塞爾比政府の回答を蔑視し露國の友誼的勸告を退け俄かに戰鬪動作を開始し、防備なきベルグラードを砲擊せり、斯の如き狀態に依り朕は我祖國の防備の爲め餘儀なく陸海軍の動員を命ぜり、然れども朕は我臣民の尊き犧牲を思ひ事件の平和的解決に全力を盡せしも、墺國の同盟國なる獨逸は友誼的交涉中にあるに關はらず永年の信義ある隣邦の安寧を無視し、我行へる動員は獨逸に對し何等敵對行爲を意味せざるに關はらず直に之が中止を要求し我の之を拒絕するに及び俄かに露國に對し宣戰を布告せり、今や露國は獨り我同族の侮辱に對する耳ならず露國の名譽と威嚴とを發揚し以て列强中に於ける我邦の地位を鞏固にせざるべからざるに至れり、朕は朕の誠實なる臣民が協同一致以て祖國の爲めに盡すべきことを信じて疑はずと、

英國首相アスキス氏は一億磅(我十億圓)の戰費支出案を下院に提出し、演說して曰く

吾人豈戰爭を求めんや、然れども今回の戰役こそは獨逸實に之を我邦に强ゐたるものなるを奈何せん、吾人にして佛蘭西及白耳義に對し背信の名を甘んずるに非ずんば開戰するの外あらざるなり、獨逸が英國をして中止せしめんとする提案は實に佛國を除外し竊に『獨逸に歐洲以外の佛國領土を略取するの自由免許を與へよ』と云ふにありしなり、況んや復た獨逸は白耳義中立に關する英國の神聖なる約束をも破らしめんとするものなるをや、我外相サー・エドワート・グレイは已に獨逸に十分の警告を與へたり、英國にして獨逸と斯の如き取引を爲すが如きは寧ろ國辱たらずんばあらず、英國は國際的義務を履行し『或る强大の勢力をして小國を破碎せしめず』と云ふ主義を顯揚せんが爲めに戰ふものなりと。

斯の如く三國協商の諸國が相一致して獨墺に當らんとするに際し、何事ぞ三國同盟中の一國たる伊太利は其與國たる獨墺の期待に背き、世間一般の豫想に反し率然として局外中立を宣明せり。

(四)　三國同盟の破壞

同盟の嚴重なる規約に由り束縛せられず、單に利害共通の親善關係に外ならざる英國が多大の犧牲を拂つて、友邦の危急に赴くに際し、一八八二年以來こゝに三十有二年間同盟の誼を重ね來れる伊太利が其僚國の危急に際し之を見ること對岸の火を見るか如くなるもの、國際道德の輕薄なる一標本と見做し

了るを以て足れりとせん乎、如何にも伊太利は今次の歐洲大戰に參加するを國家の最大危險と見做せしなるべし、墺洪國の如く義憤と野心に驅られたるに非ず、獨逸の如く墺洪國が協議の上に劍を拔きしを見て助太刀せざるべからざる義理あるにもあらず、冷靜に四圍の事情を察すれば英國が愈々露佛と運命を同ふするに於ては少なくとも海戰に於て三國同盟は到底三國協商の敵に非ず、殊に地中海に於て伊墺の艦隊は佛英及露の艦隊と接戰して萬も勝算あるべからず、幸にして同盟三國は終局の勝を制し得ると假定するも伊國は其海軍を全滅せられ或は又た北阿トリポリの新領土を奪はるゝの危險を犯さゞるを得ず、而して歐洲に於て領土擴張の見込みにてもあるやと云ふに、僅かに一八六〇年ナポレオン三世に割讓せしナイス市を回復する位が關の山にして、伊太利が近年回復を夢み寤寐にも忘るること能はざるチロール、トリエスト（此等地方には約百萬人のラテン民族あり）は獨墺の味方たる以上は到底之を其版圖に收め得べきの望あらず、却て三國同盟を離るれば或は其志を達すべきの望なきに非ず、其他墺太利の巴爾幹政策に對しては伊は正反對の利害を感ぜざるを得ず、寧ろ巴爾幹問題に關しては露國、塞爾比、黑山國（因に伊國皇后は黑山國王の女なり）と共通の利益あり、故に墺の塞爾比壓迫を援けて、英佛露と開戰するは伊太利の殊に苦痛とする處ならずんばあらず、然れども同盟の責任輕からず、假令國際上の情誼輕薄紙の如き世の中と雖も、一片の申開きもなく伊が中立を宣して平然たるは必ずや一應の理由なかるべからず、吾人は倩ら三國同盟の近狀を察するに伊國をして稍々中立の口實を得しむるものあるに似たり、請ふ少しく伊太利の三國同盟に對する關係を語らしめよ。

獨、墺、伊の三國同盟は何人も知れる如く素と露國の威迫に對する獨墺兩國の同盟にして一八七九年に締結され、而して一八八一年比公の奬誘に依り佛國がチウニスを占領せるを憤慨せる伊太利は佛國僧侶黨が羅馬法王の領地回復を計るべしとの杞憂に基づき一八八二年を以て該同盟に參加せり、此三國同盟は一八八七年には最も嚴重なる攻守同盟の形式に改締せられしが、爾來二回の重締を經て一九〇二年改締の場合に於ける四圍の事情は頗る伊國の繼續參加に利ならざるものあり、蓋し此より先き伊太利は佛國と舊情を溫め双方に滿足なる通商條約を改締したれば、舊來の規定を持續せんとせば伊太利は同盟を脱するの外途なく、然りとて獨墺側に於ては伊太利に去られては同盟の威力を減ずること多大なるを以て大に讓歩する處あり、即ち伊と獨墺との同盟條文に於て一切佛國に敵意を表するが如き文句を除きたり、且獨の首相ビユロウ伯の言に由れば『新たに締約せし同盟條文には三國間互に維持すべき陸海兵力を規定せず』又『三國中の一國が同盟外の國と親善の關係を結ぶを妨げず』とありて、其規定甚だ寛大なるを察すべく、而して實際上伊太利は當時佛國に向つて奈何なる場合にも佛國に對し攻勢の態度に出でざるべく又た攻撃せんとする國を援けざるべしとい約束を爲せりと云ふ、而して此の三國同盟條約は昨年六月滿期の處更に重締せられて今日に至りしものなるが、之に由て觀れば伊太利の三國同盟中に在るは全く前年來の行き懸りに從ひ、獨墺の懇請退け難くして其仲間に止まれるものにして、其干戈を執りて獨墺の急に赴くは單に此二國若しくは一國が猥りに他國より攻撃せられし場合に限られたること知るべし、故に此事情を熟知する佛、英、露は墺塞事件の發生以來獨の態度強硬なるを見て各内に決する處あ

りしも、深く自重して容易に宣戰を布告せず寧ろ獨逸を挑發して先手を打たしめ、三國同盟側をして獨逸の攻勢態度に對し止むことを得ずして防戰するの態度に出づるに努めたり、之に反し獨逸が此般の呼吸を能く了解し居るべきに關はらず却て初めより威嚇的態度を採り、列國に先んして宣戰せしが如きは寧ろ伊太利をして其希望する通りの口實を得しめたるものに非ずや、獨逸にして若しも電光石火、機先を制し一擧して大局を定めんとの底意に出でたりとせば其策は悉く失敗に終り、徒らに歐洲平和の攪亂者たるの名を贏ち得たるのみ、其同盟國の伊太利さへ去りて中立を宣告するに至りては獨逸の非亦た敵はんとして敵ふ能はざるべく、世界の同情が翕然として協商三國の上に集らんとするもの故なきに非ず、而して此般の形勢を馴致し來り、伊太利をして同盟を離れて中立を宣言せしめ、英をして遂に友邦の急に赴かざるを得ざるに至らしめたるに付ては佛國大統領ポアンカーレ氏の行動態度最も與りて力ありしが如し、彼れは大言壯語を事とせず、佛國民を驅りて感情に馳せしめず、露英を花形とし獨逸を惡形として、自らは沈默して樂屋の計畫に任し、而して佛國民をして必死の決心を以て戰備に從事せしめたり、由來佛人は多感多情なり、而かも國家の大難に際し恐らくは今日の如く國論一致し冷靜にして秩序ある行動を爲せるはあらず、吾人は靜に事局を觀て佛國の爲め大に意を强ふせずんばあらず、伊太利の如きも必ずや今後益〻佛國に依賴するの念を深ふするなるべし。

（五）歐洲大戰の經過

開戰の初に當り軍事專門家の豫想に依れば列國の兵力に付ては露佛を六と四とすれば獨墺は五と三と云ふの比例なるべしと云へるは能く對戰諸國の兵力を示すものと云ふべく、而して墺は塞國の兵力に牽制せらるゝ處あり、佛は伊の壓迫を恐るゝ必要なきを以て、訓練、兵器等に於て大體に甲乙なしとせば獨墺の八を以て露佛の十に對することゝなり、露佛稍々優勢なるが如くなるも、東西に隔離するが故に作戰上協議の便宜なきも、之に反して獨墺は領土集團し又交通の便完備するが故に双方殆んと甲乙なしと見るを至當とせん、作戰に付ては獨逸は佛國の未だ備へざるに乘じ早く佛境に侵入し一二大戰に佛軍を敗りて巴里の死命を制し、引返へして露軍に當り長驅して聖彼得堡に殺倒せんとするに在らんと想像せられしが、果せるかな獨の先鋒部隊は先づ中立地たる太公領を占領し(二日)、進んで白耳義リエジユ市を攻めたり(五日)、抑も佛獨の境界は南、瑞西より北、ルクゼンブルグに至るまで約百五十哩に及び此間南方に偏してヴォッヅ山脈の險あり、若し南方瑞西の中立を犯さず北方ルクセンブルクの中立を尊重するとせば、ヴォッヅ山の南方ベルフォール要塞を犯して侵入するか又は其北方ストラスブルク、メッツ兩要塞に依り其の中間より進むより外途なし、然るにベルフォール方面は平地狹隘にして大軍を進むるに利あらず、普佛戰爭の例に傚ひストラスブルク、メッツ方面よりすれば到る處廣濶の平野多く大兵を動かすに最も便利なれども、佛國はナンシー、ウェルヅン等の難攻不落の要塞を構へて進路を擁するが故に此方面亦た容易に犯すべからず、是れ伯林の參謀本部が、敢てルクセンブルク、白耳義の中立を犯して迄も途を此方面に取り如何にもして北佛蘭西の平野に出てんと計畫せし所以なるが、然るに意外なるかな、

素より鎧袖一觸直に崩壞すべしと期待せし白耳義の防禦は頗る强固にして、リエジユは獨の三個軍團に攻圍せらる旣に二週間（二十日）餘に及ぶも尙ほ陷落せず、爲めに一氣に佛境に進入せんとせし作戰に多大の遺算を生ぜしは爭ふべからず、更に一方南方に於てはアルサース巳に全然佛軍に占領せられ、南ローレンの要害たるザールブルク亦た佛の有に歸し、ストラスブルクの包圍近からんとするに似たり、但し獨佛軍の主力は北方に在るを以て今後最も注意すべきは白耳義方面の交戰の前途なり、白耳義はリエジユが萬一にも陷落せばナムールに據り獨軍の前進を喰止めんとし、十五萬の白軍の外、英佛の聯合軍亦た必死の助援を爲すべければ、獨軍の白耳義を通過して佛境に入らんこと容易ならず、寧ろ未だ佛境に入らざるに先ちナムール方面にて一大決戰の日近きに似たり、百萬に近き獨軍は巳にシオンウイルよりルクセンブルクを經てリエジユに達するの一線に在り、獨帝また此方面に大纛を動かされたり、或は白耳義要塞の抵抗頑强なるが爲め、此方面は牽制運動に止め、稍〻方向を轉じ、アーヘン、シオンウイルより直ちにセダンの方面に殺倒すべしと云ふものあり、孰れにしても東北佛境の附近に於て雄雌を決すべき大決戰の行はれんこと決して遠からずと思はる。

眼を轉して露境方面を觀れば、墺國は大軍五十萬と稱すを以てレンベルグ方面より露國を壓し獨は五軍團を東普魯西に配置して露軍に備へしが、露國は主力をワルシャウ方面に集中しつゝ、其兩翼の兵を以て巳に獨墺の境內に入り要害を占むるを得たり、獨が白耳義に支られて數週間を徒費するに際し、露の動員は大に完成せしものゝ如く、而して波蘭の自治を許し猶太人の私權を回復せんとすと云ふが如き

露國の決心の程察すべし、要するに獨佛交戰の結果次第によりて大局は略ぼ決定するものと見做すを得べし、若しも獨軍にして一擧にして佛英白の聯合軍を破碎するを得ば、其大半を東境に還し以てその勝誇れる鋭鋒を露軍に向はしめは最後の勝利或は獨逸に在るべし、然れども西境の軍況獨逸の豫想の如くならず假令大敗を招かざるも對軍曠日彌久に及び容易に決戰を見ざるが如きに於ては、百有餘萬の露軍は續々獨境に進入し先づ墺軍を敗り次に獨軍を逐ひ長驅して伯林に殺倒せんも未だ知るべからず、吾人は戰局の前途に對し豫言者の役目を勤むるを好まず、只た八月中旬の情況に基き前途の如何を概論するのみ、但し獨逸の對戰に就て之を觀るに今回の情況は前年の普佛戰役と全く主客の勢を顚倒するに似たり、前後兩役とも八月初旬を以て開戰を見たるは頗る奇なり、前回に在りては八月四日獨軍は佛境に侵入し、六日ウェルトの戰勝を得、十八日にはグラウェロットの大戰に勝ちてメッツの要塞を封鎖し、九月一日にはセダンの大決戰に佛帝を俘虜にし同十五日には巴里を包圍せり、然るに今次の戰役に於て八月五日を以て白耳義を襲ひしがリエヂュの防禦意外に頑强にして容易に前進する能はずして戰局に多大の異算を生ぜしは、佛軍が前年國境に布陣して後ち初めて兵數の不足を知り大に狼狽したることゝ頗る相似たるの不覺ならずや、前回に於て獨軍の大砲が佛の大砲より優勢なりしに反し、現時の佛砲がクルップに優れるは巴爾幹及びリエージュの實驗に由り明白なり、獨兵が饑餓に迫り續々降服せりと云が如き前年の佛兵に有りそうなる話にして、獨逸軍隊輸送の不整備を思はざるを得ず、又た獨逸の捕虜が我等は何故に白耳義人と戰はざるを得ざるかを知らすと云へりと傳へられ、凡て今日の獨軍は作戰、輸送、軍紀

に於て四十年前の精鋭に比すべくもあらざるを察すべし。之に對し佛軍は最も秩序正しく、最も冷靜に、又最も秘密に或る方面に主方を集合しつゝあるに似たり、戰局の前途略ぼト知すべからざるに非ず。

兎に角前回の戰役には比公か白耳義の中立を尊重すべきを條件として英國の中立を購ひ得たるに反し、今次には獨逸帝の勝手氣儘なる提議を以て英國を憤怒せしめ、獨逸の海軍は地中海に於ては或は擊沈せられ或はダルタネース内に遁れて土國に賣收され、又た北海に於ては英國を威迫すと誇れるも其實ウィルヘルム港内(寧ろキールか)に壓迫せられて毫も英國の陸兵輸送を妨害すること能はず、一大海戰の結果を待たざれば獨逸艦隊の精鋭を檢する能はざるも數に於て到底英國海軍の敵にあらざるは明なり。

斯の如く觀察し來れば今次の歐洲大戰爭は流石に百年に一回の大事件なれば容易にテキパキと片付くべしとは思はれず、前年の普佛戰爭は平和克復までに七箇月を要したり、今次の戰爭は關係諸國の多きと双方兵力の伯仲するより察すれば今後益々局面の紛糾を見るに至るべく、佛境の戰況次第にては或は伊太利の中立も怪しくなるべく、巴爾幹にては第三次の戰爭開始せられんも知るべからず、北米合衆國と中、南米諸國だけは中立に安んじ得べしとするも、阿弗利加の如き殖民地相互間の戰爭を免れざるべく、東洋方面亦た獨艦の商船威迫に對し相當の防禦手段を取るの必要あるべし。

(六) 日本帝國の參加

今次の大戰爭は歐洲の大亂なり、其直接の機因は墺洪國の塞國强壓に在り其根本の動機は獨逸か墺國

を助けて獨り暴威を歐洲中原に振はんとするに對し均勢の把持上止むを得ずして列國の反對行動を執れるに在り、孰れより觀るも極東に偏在する我日本の如き之に參加するの必要なかるべく思はるれども、近年交通の道益〻開けて世界は比隣となり、戰局を歐洲に局限するの困難なるは識者の夙とに認めたる處なり、果然膠洲港を根據とする獨逸艦隊は頻りに支那近海に在りて露、英、佛の商船を拿捕し且我商船に對しても拘引を試みたり、甚だしきは我領海に出沒して露艦を拿捕せしが如きことあり、爲めに支那沿海の航海は殆んど中止され、中立國の權理は侵犯されたり、剩さへ獨逸の東洋艦隊中快速力の聞へある某々艦は其所在不明にして、或は南洋諸島の間に出沒すと傳へられ、又墨西古西海岸の警備に任しつゝある諸艦も何日何時東洋に來寇せんも知るべからずして、濠洲方面航海の危險少しとせず、英國の同盟國たる我邦は豈此際之を默視するに忍んや、

今や英國は挑發することなくして其特種の利益を獨逸より侵迫されたものなるが故に、我邦は同盟國として當然の義務を盡さざる可らず、殊に今次戰爭に關し吾人の大に考慮せざるべからざるは殖民地に關する獨逸の大野心是れなり、若しも終局の勝利遂に獨逸に歸することあらんか、獨帝は如何なる要求をなすべきか、佛國に對し歐洲の領土割據に意なきは四十年アルサス・ロルレーンの統治に困憊するに因り知らるゝ處なれども、彼れは大に佛國の殖民地を奪はんとするの意あり、即ち東京地方(印度・支那)の如き其第一に割讓を迫らんとする所なるべく、彼れは一方此方面に據り他の山東方面の經營と双々相應し、支那中部に於ける英國の利益及び臺灣並に其對岸に於ける我帝國の利益を侵害すべし、更に是の

みならず、獨逸全勝の後には和蘭國は必ず獨逸聯邦に加盟するを餘儀なくせらるべく、而して和蘭の東洋に於ける屬領諸島は事實上悉く獨帝の經營の下に置かるゝに至るべし、試み思へスマトラ、ヂャワを初めボルネオの大半、セレベス、モロッカス群島、ニウギニーの一半、之等を合計すれば其面積無慮七十三萬餘哩に及ぶ、茲に一躍して獨逸は南北太平洋上英國を除きて第一の殖民國たるべく、豈是れ英國及び我國の特種の利益に一大侵迫を加ふるものに非ざらんや、素より此等の變動は今後の歐洲大戰の結果として來るものにして、既に目前に現出せるには非ずと雖、獨逸の目的が略ぼ此等の邊にあるは察する難しとせず、英國が獨の白耳義侵害を怒りて蹶起したる其意中察すべく、帝國が此際一方に在りて此戰爭に參加して獨逸に一大打擊を與へ以て英國をして東洋に於ける後顧の患なく歐洲の戰局に全力を注がしめんとする亦た實に自他の特殊利益を防禦せんと欲するに在るなり、但た吾人が頗る奇異の感なき能はざるは在東洋の一部英人間に於て深く帝國の心事を猜し、種々の臆測を逞ふして以て本國の輿論を動かさんと試みるものあることにして、此種の猜疑はまた容易に支那人間に感染し、事毎に帝國の行動を困難ならしむるの恐れなき能はず、抑も帝國が此種小人輩の想像する如く、支那大陸に領土的野心を抱藏せざることは改めて辯明を要せざる所なり、支那の領土保全と門戶開放は日英同盟の基礎なり、又帝國が多年此主義の貫徹に向つて多大の苦辛を爲し幾多の犧牲を拂ひしことも英國識者の認むる所たるは吾人の疑はざる所、和蘭の東洋屬島に對しても吾人は唯だ其カイゼル一流の經營に歸せんことを恐るゝのみ、素より其永く友邦和蘭の有たらんことは吾人の大に滿足する處なり、

如何なる方面に、如何なる範圍に於て帝國が今次の戰爭に參加せんとするかは去十五日の日附を以て獨逸政府に致せし涌牒により明かなり、玆に於て吾人が憂とするは唯だ我外交の成績如何に在り、吾人は大隈首相及加藤外相が事局の艱難に顧み、機宜を誤らず、能く上下の希望に副ふに至らんことを冀はずんばあらず。

社會と感激

中澤臨川

〔一〕

一日一刻感激がなければその社會は遲滯する。感激のない社會は宛ど水の死んだ沼のやうなもので、孑孑がわき、枯れ葉の腐るに任せるほかはない。生命の源から湧き出す活泉の斷えた社會ほど慘めなものはなからう。『寧そのこと太く短かくこの世を送りたい』といふやうな嘆は、感激のない社會に生存する者の自然に洩す倦怠の聲である。社會は一種の大きな自動機械て、誰をてもその因習と機械律のもとに囚らへ搬ばうとする。多くの人は斯の社會の壓制に馴れて、無自覺に、一瞬の自由をも知らずに「自我」の面影を見る機會もなくて醉生夢死する。一人感激を欲し自由を希ふ者があつても、その人の力の餘程偉大でない限りは、彼も亦終ひには重もい軛を身に負はされて、同一の運命に終らざるを得ない。人は生命の感激に生き、人は社會の因習に死ぬ。

感激に生きる者の一刻は、いかなる富貴を以てしても代へえないほど貴といものである。陋巷に窮死する名匠の生活が能く之を證明してゐる。藝術家や宗教家の一生を憐む者は、憐む者の愚である。人は世間並に立派だと思はれる生活をして、他も羨み、自分も滿足してゐながら、或る動機から急に從前の生活が虛僞の

塊りてあつたことに氣の付くことがある。昔、アレキサンダー、セヴェラスの時代に、羅馬に一人の男があつた。彼は怜悧な工匠であつた爲めに、彼の名譽は擧り、其財嚢は常に滿ちてゐた。彼は樂しい家庭に住ひ、愉快な交際社會へも出入した。彼は日毎、滿足の朝に目覺めては、樂しく忙はしい仕事を迎へた。これほど安泰な生活がまたと世にあらうか。然るに一日或る不安が彼の心を襲つた。彼は急に宗教上の狂熱に捉へられた。生命の嵐が落附拂つた羅馬の街々を吹き捲くつて、その姿を一變させたやうに彼には思はれた。古い帝王の都はその一つの塵の位置をだに變へないのであるが、變つたのは唯だ一住民の心であつた。その日から彼の眼に映つるあらゆる事物が新しい意味を彼に齎して、彼自身が奇蹟と法悅の中心であるかに見えた。彼は長く囚はれてゐた皮層な社會的生活の滿足から遁れて、斷えざる感激の新生命に入つたのであつた。

誰が彼を羨んだであらう。恐らく當時の人はその後の彼の行狀を笑つたに違ひない。それほど社會的慣習と惰性とは世間の人の心に喰ひ入つて、彼等の感覺を鈍らせ、彼等の魂に目隱くしを施してゐるのである。然かしその癖彼等は無意識の間に何等かの感激を待ちこがれてゐる。彼等は且つ疑ひ且つ恐れながら、生命の慈雨を望んでゐる。社會的因習の牢獄は長く彼等の耐えうる所でない。そこで、或る者は感激の惠みを宗教に求め、或る者は之を藝術に求め、或る者はこれを直接行爲に求めようとする。求めて得ざる者の墮落は悲慘であつて、これ實に社會の日々行ひつつある罪惡である。

生命の源に遡り感激の泉を汲まうとするのは人性の當てある。然るに社會が之を阻止する。社會は廣い生命の爲めの方便でなければならないにも關らず、生命の直接要求と社會との間には常に何等かの間隙があり撞着がある。感激を阻止する社會は最も惡るい社會であり、共同的感激のない社會ほど住むに値ひしない社會はない。私は安惰な生活の百年よりも感激の一日の貴つとさを想見せざるをえない。私は我邦の維新前後

に逢遇した人達の幸福を羨む。進んでは元龜天正の戰**國時代に生れた人達の運命をさへ羨望しようとする。**

また、露西亞のやうな壓制國でも可いから、一八四〇年代から六〇年代へかけてのその邦に生れて見たかつた。あの狂熱した青年の群れに入つて理想の赤い旗幟を振つてみたかつた。我等の自由性は必ずしも身體財產の安全を以て滿足しえられるものではない。我等は高潮した感激に由てのみ求めえらるゝ眞自我の自由を欲つする。重ねて言ふ、感激のない社會ほど惡るい社會はない。

〔二〕

我等は今、千古未曾有ともいはれる歐洲の大禍亂を眼前に控へてゐる。流血の恐怖、戰爭の悲慘が切實に我等の胸に響く。斯樣な時、戰は我等にとつて最も有意義な問題である。私は茲に一例として戰の心理を考へてみよう。私は人道上から觀た平和論者を謳歌するが、その輕易な實行を危ぶむものである。私はまた經濟上から見た非戰論にも一部の眞理を認めるが、それ**が今後の爭亂を何れだけ制限する原因となるか、を疑ふ**ものである。安價な平和論をして未來を樂觀せしめるがよい。快樂的經濟論をして物質の力を誇大視せしめるもよい。然かし、それにも關らず、戰爭それ自らにはより深い眞理がある。さればこそウィリアム、ジエームスは、之に或る『道德的代用價』を置き換へない限り、戰爭は中止するものでないことを論じてゐる。然り、戰爭には實に一種の道德的價値が隨伴するのである。戰爭の酸鼻な結果は誰も知り且つ恐れる所で、能ふべくんば之を避けようとするのが人情でなければならない。實際我等が平生の常識生活を送つてゐる間は、我等の社會意識は堅たくそれを信じてゐる。然るに一たん戰爭の風雲が捲き起つた曉には、我等は平常の主張を忘れて、最も高價な租稅をも——血稅さへも——拂つて悔いないのである。歷史は實に碧血を湛へた水漕である。たび／＼繰返される斯樣な狂熱がたゞ歷代の國民の單なる妄想でありえたであらうか。それ

には君主や種族の野心のほかに何等の意味がなかつたであらうか。私はさうは信じない。私は平常社會的羈絆のもとに常識的生活を送つてゐる國民が、偶ゝ人種的意識に目覺めて、鬱々たる一種の感激を戰爭に由て晴らさうとするのであると見てゐる。勿論、これは崇かい感激てはないかも知れない。然かし社會的意識よりも人種的意識の方がより自然てあり、且つより生命の本源に近い。戰爭的感激は機械的な社會の桎梏を破つて、人と人とを直接な關係に結び付ける。その感激は、物質的經濟と社會道德のみが――常識と理智とのみが、必ずしも人間を支配する至上權てないことを訓へる。そして斯樣な狀態に於てこそ、人性は全體としての可能性を發揮することが能きるのてある。換言すれば、戰爭はその拂ふ所の高價な犧牲に値ひするや否やを問はず、兎に角一種の社會的興奮劑てある。これなければ社會は頹廢する。戰爭は共同的感激の最も卑近な例てある。

〔三〕

ニーチェに據れば、昔の希臘人は酒神ディオニサスを崇めて共同的感激の源とした、ディオニサス的世界とは宇宙的自覺又たは融合に入る世界てある。人間がその個性を滅却し社會を忘れて、大宇宙に瀰漫する意志と一體になり、自らもその意志の一部たることを感ずる時に生ずる心の狀態てある。即ち、その時彼は「生命」の故郷に歸るのてある。宗敎にせよ、藝術にせよ、戰爭にせよ、凡そ我等に來る感激は、深淺廣狹の差こそあれ、渾な同一な心の狀態を我等に齎らすのてある。社會は假宅てあり、生命は父母の家てある。我等は社會に棲息しながら、常に何等かの感激に由て之を超越し、その因習から逭れる方法を講じなければならない。

昔は宗敎が深い根底の上に立つて社會的共同感激の素地をなしてゐた。然るにその宗敎も時のたつにつれて一盛一衰を免れなんだ。人間は方便としての社會生活を送りながら、本然の生命の要求にうながされて宗

教に感激の泉を汲まうとした。然るに社會は方便としての自己の職責を忘れ、却てその因習の力に由て宗教を壓し、そして之を自家の機械律下に改變した。斯樣に捕虜となつた宗教は、最早本來の感激力を失つて、たゞ惰性的にその形式だけを維持するに過ぎない。凡そいかなる感激も長くは續かぬ。それほど社會の物質力は强大である。然るにそれが沈滯の極に達すると更に反動が起る。所謂「革命」とか「復興」とかいふ顯象がそれである。かうして人間は漸くその生命力を維持して行く。

〔四〕

感激は天外から落ちる慈雨ではない。それは人の世の谷から蒸發する氣息である。感激に於て結び附けられた人類は特殊にして且つ單一である。百千の無形な感情、思想、欲望が社會の谷から萌し、それが一種の蒸氣となつて山の頂きから空一面に被ひ覆さる。その一つ々々はどれだけ微細で無自覺の狀態にあるにしても、それが數限りなく重り合ふ曉は偉大な勢力を形成して、所謂先覺者に發言權を與へるのである。詩人も哲學者も天文學者も化學者も、政治家も軍人も、その勢力を無視するわけにはいかない。却て彼等はこの氣勢を利用して自分の性格を陶冶し、其處から精神的勇氣の滋養物を惠まれる。感激は醱酵的であり且つ傳染的である。例へば、一國の輿論か戰爭熱に侵されるや否や、如何に賢明な大政治家でも、平和好きな高僧でも、最早之を如何んともすることが能きない。要するに社會的感激は無名な萬象の共同的行爲である。そは何人もその時代に住む者の呼吸せざるべからざる空中に於ける或る神秘な力である。一時代を橫斷する衝動力である。それを歷史家は時代の「精神」とか「運動」とか「生命」とか「傾向」とか呼ぶ。

勿論、私は左樣な時代の先覺者たり表現者たる天才や英雄を全然時勢の產物であるやうに言ふのではない。彼等は生れぬ前から銘々賦へられた素質があつて、この世に出たものに違ひない。時勢や境遇や教育が偉

傑を造り出すのではない。然かし時代思潮から蒸發する眼に見えない氣息が、或る神秘な作用に由て、彼等を活かすことは事實である。時代は才能の人を根から造るのではないが、彼等を思ふ存分に發達させたり、または殺したりすることは能きる。それのみならず、時代は或る程度までは自己の鑄型に入れて同時代の人性を左右するだけの力を有してゐる。所謂先覺者さへ無自覺に偉きな仕事をする場合が多い。要するに社會は人間を生む力を持たないが、之を活殺する力をもつてゐる。活かすのは本來至當な任務であつて、如何に殺すかが問題である。我等は社會の功蹟よりも、その罪惡を研究すべきである。

閑話休題、前にも述べた通ほり、社會的感激の湧起する有様は一種の醱酵狀態である。宛うどそれは發生期に於ける水素瓦斯かオゾーン瓦斯のやうに、接觸するあらゆる物を化合せずんば已まざる勢にある。詩人もそこに情緒の泉を汲み、哲學者もそこに冥想の興奮を誘はれる。總ての物が新らしく見え、よろづの現象が珍らしき光に蘇りて、我等の心は何等かの不可解な期待に緊張する。譬ふるにそれは天來のインスピレーションを待つ藝術家の心的狀態である。クロポトキンが『一革命家の追臆』といふ書物で、農奴解放時代の露西亞の國民狀態を寫した中に面白い節々がある。一種の社會的感激の爲めに當時の青年が何れだけ興奮されてゐたかといふことが能く窺はれる。例へば以太利オペラの女座頭のボシオが病氣で休むだ時などは、幾千といふ青年が彼女の泊つてゐた宿屋を取卷いて、その容體を知らうとして、夜遲くまで立ち盡した話さへある。宛うど昨今英國や露西亞などで、人民が戰報を聞くために、新聞社を包圍するといふ外國電報の噂と同じである。當時その邦の以太利オペラと革命運動に熱中する青年との間には不思議な關係があつた。皇帝の侍童達が學校の制服を黑いマントルで隱して、他の青年に雜つて、『ウイルヘルム、テル』や『清教徒』の曲の革命的な吟誦の所へ來ると、熱心に拍手した。六階の見物席や、劇場の入口や喫烟室では、皆

んなが集まつて高貴な藝術に對する理想的崇拜の詞が取換はされた。これ等のことは如何にも小供らしく見えよう。然かし總ての高い理想と純な感激とは、多くの場合藝術の崇拜と結び附けられ、そのほかさまぐな崇拜熱となつて現はれるものである。

〔五〕

私は社會的感激の如何なるものであるかを述べた。古來から傳はつた宗教には一盛一衰があつたが、とに角それが幾世紀かの間人間と「生命」との交渉の媒介となつて、永續的感激の源を涸らさずに來た。然るに十九世紀に入つてから、基督教の神は死し、傳來の信仰は漸く地を拂つた。我等は之を科學の罪に歸すべきてあらうか。否な、我等が物質のあひだに幸福を求めようとした冒險には、おのづから正當視すべき努力があつた。また我等は之を佛蘭西革命の結果とすべきてあらうか。或はミルやラザリーやマルクスやバクーニンを責むべきてあらうか。否々。古い神と感激とは逝くべくして逝つたのである。同時にあらゆる熱誠な冒險は、その直接の目的に於て失敗したにしても、未來を產むために何れだけ貴とい獻貢をしたてあらう。即ち「嵐と惱み」の十九世紀は、昔の宗教的感激に代はるやうな大きな新價値を發見するために拂はれた犧牲の百年と見倣さるべきてある。

然らば斯樣な生命の新價値は我等に與へらるるてあらうか。誰が之を確實に豫言することが能きよう。しかし人間の活動の各方面から、かゝる時代の襲來を啓示する徵候の現はれてゐることは、多くの識者の認めて疑はざるところである。偉大な新感激の氣息が社會の谷から騰つて、しづくと森をこめ、山の頂きに這ひ上りつゝある。我等は用意せねばならぬ。そして如何に待つべきかを知らねばならない。

それにもかゝはらず、十九世紀の中葉から今日にかけての社會ほど感激に缺けた時代はなからう。我等は全く社會の機械律の捕虜となつた。人間の生命はその香ひを枯らし、世はパッションの水氣を失つた灰色の

天地と化した。所謂「冷静」がその誇となり、概ね痴鈍な人間のみが「精神的」の名を負はされてゐる。て斯様な傾向を最も能く體現してゐるものは今日の道德と教育である。

讀者も知らるゝ如く、デカルトと言へば近世理智哲學の開祖であり、ライブニッツと言へば機械的宿命論を最も赤裸々に表現した第一人者である。それにもかかはらず、之等の人達の一生に於て、宗教と社會道德とは、殆ど同じ源から出た二つの放射物であるかの如く、至て自然に調和してゐた。彼等はあらゆる云爲の感激を或る超自然の實在に求めた。そして自分自身も亦理性的動物として其感激の源から分れ、その一部分として全體の目的の爲めにより完全の方へ努力する必須の存在であるかに考へた。彼等は斯うして理智觀を守り立てながらも能く人間の理性の制限を知り、社會に生活しつつも別に高尚な感激を彼岸に求めることを知つてゐたために、迷ひなく純一生活を送ることが能きた。然るに再後二世紀ゝ經つまに、宗教と道德とは次第にその間に溝渠を築いて來た。前者は漸くドグマに汚され、後者は社會的因習に卷き込まれて理智の光にくらまされた。殊にローマンチックの時代になつてから、極端と對照と二律相反(アンチノミー)とを誇大視する人心の傾向から、社會生活と精神生活とを結び附けた羈絆(きずな)は全く斷たれて了つた。詞(ことば)通ほり、シーザーの物はシーザーに、神の物は神に返された。我等の肉體と精神とはみごとに離された。最近々世史の最も大きな特徵は、博愛から正義を、國家から教會を、個人生活から社會生活を、理想から實際を、信仰から理性を、宗教から道德を、叡智(ウイズダム)から常識を――約言すれば生命から社會を分離することにあつた。對立するものは勢ひ爭はざるを得ない。姑息な妥協には害があつても益する所がない。在來の宗教や哲學は實に斯樣な一時的の妥協を社會と致し、理智の足下に叩頭することに由つて、自ら汚がし自ら嫐れたのであつた。佛蘭西の狂兒ド、ミユッセーが、歡喜と悲哀の交も雜つた嘆聲を以て神の死を報じたのは。今から凡そ八十年の前であつた。その

後はたゞ物質の勢力が我等の社會を支配するに任せた。ビスマークの獨行する代(よ)に、トルストイやニーチエやイプセンの狂熱(ファナチシズム)は時代精神に反抗する偉きな犧牲として葬られた。

既に宗教を棄て、感激の源から離れた道德は社會に隷屬する一種の人爲的方便としてよりほかには存立の餘地をなくした。その研究は汎い意味の人生を離れて、法律や經濟と同じやうに、社會意識を對象とする一種の實利科學となり下つた。常識と理性が楯にとられて、我等の眞自我の世界にまで觀察と歸納が及ぼされた。『最大多數の幸福』とか、物質上の權利義務の尊重とかが人間を支配する最大善の動機と見做された。試みに現代政治家の懷く自由や憲政の意味を考へてみるが可(よ)からう。尾崎行雄氏は我邦に於て理想政治家の隨一と稱ばれてゐる。そして苦節多年、操持する所に堅固な人である。然るにこの人の憲政論は何(ど)うであるか。その自由はたゞ狹い意味に於ける政治上の自由であつて、これあるがために人間は初めて人間たるの價値を得、これなければ我等は禽獸に墮するかのやうに見られてゐるではないか。勿論、私とても所謂政治上の自由を輕侮するものではない。唯だ斯うした卑淺な意味に人性眞我の自由性が限られてゐるかの如く取扱はれるを不覺に思ふのである。

社會は人爲的方便の組織である。從て機械的に働く。傳習と隋性と反復とはその法則である。社會は突飛なもの、新しいもの、創(はじ)めらるるものを好まない。此に於てか社會の所謂教育(カルチユーア)とは卑屈な從順性の訓錬である。模倣性の傳授である。人間に猿眞似を教へるのである。今日の學校は我等の感能を鋭敏にしたり、自己省察、自己表現の力を開拓したりすることには無能である。それのみならず、官憲の力で强行し、公開市場て賣買する一般の教育なるものは、一面から見れば寧ろ本然の人性を遮斷させようとして積極的罪惡を行ひつゝあるのである。なぜなら、それは社會の因習と安寧に準據するいろ〳〵の規本(スタンダード)を我等に强ひ、いかに賢こく模倣すべきかを奬勵する結果は、人間本來の自由

性、創造性、感激性を萎靡せしめて悔ひないのであるか ら。教育家は菓子屋である。同一のたねを使つて、いかにいろ〳〵な型の煎餅を造りうべきかを問題にしてゐる。要するに現代の教育制度は社會的傳習のこのうへない武器である。

道德も社會的意識を至上とし、教育も社會的傳習に隷屬する今日、感激を說きインスピレーションを談るは寧ろ愚ろかな業であらうか。然かし斯樣な頽廢の時代を常態と思ひ、之に甘んじてゐるのは更に怯懦ではないか。反動の烽火は既に上りつゝあるではないか。我等は用意せねばならぬ。そして如何に感激の新時代を待つべきかを知らねばならぬ。

從來私は世界一般の狀態に就て談り、殊に歐洲の歷史を引例した。讀者の中には或は私の歐化主義を詰り、日本の事情を說くことの餘りに薄きを責めらるゝであらう。然し今日の物質文明の有樣は何處を通じても同じことである。歐洲禍亂の影響は數日ならずして我邦の山奥にまで波及し、生糸や繭の價を暴落せしめて、農民の經濟狀態に大變動を與へてゐるではないか。世界は共通である。その一端を上ぐることは即ち全般を上ぐることである。唯だ茲に一言すべきは、我邦昨今の狀態が西歐諸國のそれに比して、更に悲觀さるゝことである。先頃タイムス紙上に掲げられたといふ日本評なるものは、猶讀者の記憶に新しい印象を殘してゐるであらうが、要するにその論旨は公平であつた。て、『日本人は文明の皮相な模倣家である、彼等は西歐の戰術を解してゐるであらうが、平和的事業は僅に其表面を解してゐるに過ぎない、戰場の名譽を重んずるが取引上の名譽を知らず、成り上り者のあらゆる缺點を具備せる彼等は其往時の美德を喪つて、而も之に代るべき何等の新道德をも有しない』といふのであつた。物質的模倣文明のまた模倣文明を以て見らるる我邦の狀態ほど慘めなものはなからう。我等は如何なる方面から見ても、新しい感激を要求せねばならない。

〔六〕

然るに新感激は既に徴しつゝある。我邦でも思想家や藝術家の或る一群は夙にその風潮を取入れて、之が紹介に努めてゐる。斯の感激の性質の何ういふものかを研究するのが亦この論文の目的の一つである。然かしそれ以前に我等は社會といふものゝ本體、目的、作用を究める必要がある。

私は社會組織といふものに就て重要な疑を抱いてゐる。勿論我等が社會を組織し、その中に住はなければならないことは今日必須の條件ではあるが、それが人性本然の要求であるや否やが疑問である。人間に社會的意識乃至は意志と呼ばるべきものゝ存在することは、今では誰も措て問はないほど公準眞理と見做されてゐるが、それさへ私には疑はしい。笑といふことは人間獨特の顯象であるといふが、それが我等の社會組織と深い關係があるやうに思はれる。或る人は笑の作用を説明して、「社會的意識からみて缺點と思はれるやうな行爲を處罰し抑制するのがその任務である」と言つた。笑の技工的である如く、社會組織そのものも亦技工的である。社會を一種の有機體と見るは皮層な觀察である。人類は有機的であるが、社會それ自らは如何なる點からみても機械的組織である。平易に言へば、社會とは人類の一族を住ませる爲めの家屋である。たゞそれだけである。我等は外圍の自然、換言すれば物質と戰つて進まなければならない運命を負はされてゐる。人間の文明史は自然との鬪爭史である。物質の羈絆から超脱して精神的に自由であればあるほど、我等は光明の進路に立つのである。で、社會とは人類がその共同敵なる自然に對して自ら保護する爲めに造り上げた堡壘にほかならない。社會は方便であつて、進歩が人間の目的である。宛ど我等が狐を捕へるために罠を造り、距離に打勝つために汽車を造つたやうに、社會も亦間人の考案した一種の機械的製作に過ぎない。たゞそれが無形であり可撓性である所から、他に深い精神的の意味でもあるかのやうに受取られ易い。

我等は社會以外に或る大きな本然の目的を賦へられて生れて來た。そして其目的に向つて努力し進行して

ゐる。之は爭ふべからざる事實である。人類本然の目的なるものの如何なる性質であるかに就て議論の分れるのは已むを得ないにしても、斯樣な目的の存在を否定すべき些(すこし)の理由もない。譬へば、美の哲學的詮議が何れだけ空漠であらうと、我等の美的情緒の催起に微塵の影響をも及ぼさないと同じことである。或は斯樣な目的の原動力を我等の行く手に望んで、其處に「神」といふ偉人な全人格者を念想するも可からう。また或は生命の原始から我等を激勵する一種の傾向を實在と見て、我等の背後にある生的衝動力を認定するもよからう。兎に角我等には、存在の太初から我等を支配し、我等を激勵し、其處に我等が生命の泉を汲み、其處から我等の努力を促す感激の下だる或る目的の伏在するを拒むわけにはいかない。て、斯樣な目的、斯樣な感激のもとに動く行動こそ我等の眞の活動であつて、假りに之を、現代に適切な言葉を藉りて、「生命」の行爲と稱ぶてあらう。

此に於てか、我等の生命的行爲は主てあり、我等の社會的行爲は副てある。人類はその生命の增進を計るために、方便として社會を造つた。社會は精神と物質との闘爭に於て協力的蓄勢的作用を營むために我等の發見した最も重要な人爲的組織である。若し我等が社會を造つて協力的に自然に當り、且つ之に由て原始以來人類の爲し遂げた經驗を蓄積し利用することを知らなかつたら、我等が今日生命的行爲のために貯へたエネルギーは、或は物質と自己との間の非常に危險にして且つ不安定な平衡(エクイリブリアム)を支へるために殆んど全く消費されたかも知らない。實際、進化上に於ける他の動物の運命がさうてはないか。第一に社會の偉大な功蹟は言語を作つて思想を蓄積し且つ交換することてある。第二に社會は思想のみならず、我等の總ての努力を貯藏保存して、如何なる人間にも容易に到達しうる一定水準を備へて吳れる。この既存的刺擊により普通凡庸の徒も惰眠に陷ることなく、優秀の士は益々進步向上することが能きる。換言すれば、社會の機能は容易に自然を超越する方法を人間に與へ、我等をして無

益の努力を省き、生命的行爲に邁進せしむる利便を供することにある。

社會は人類の向上に利便を供するが、然かしその途を拓く指南はしない。社會は人類にとつて何れだけ必要な組織であるにしても、その目的は飽くまで手段であり方便であることにある。我等の生命を支配する感激は別に超社會的の源から來る。然るに人間は社會的生活を營む間に、知らず識らず其因習に囚はれ、そが人爲的法則に拘束せられて、安易な隋性生活に甘んずるやうになる。生命の意識の眠るにつれて、社會的因習が蔓こり、やがては社會的意識とも謂はるべき不自然な第二の天性が我等を占領する。いかなる世界に於ても、「自働作用(オートマチズム)は敵である」――斯うベルグソンが言つた。

〔七〕

以上の議論にして正しいものならば、特に社會的道德といふもののありえよう筈がない。社會の造つたものは唯だ便宜の約束であるべき筈だ。法律とか、公德とか、商業道德とか、自他の物質的利益を尊重する觀念から來たものだけが、社會組織に專屬する義務(デューティー)である。社會は唯だ「生命」の自由を尊重し、之が進歩向上を補ひ、生命の純なる發現たる宗教、哲學、藝術、文學、其他の有ゆる感激を奬勵すれば足りるのである。從て前(さき)にも述べた如く、物質以外のことでは、我等は社會の功蹟を云々する必要はない。寧ろその罪科――即ち如何に社會が人間の本性を殺し、生命の感激を阻害するかが問題である。宛ど我等が生物學で遺傳の理を研究するに當り、個體間の類似を拾ふよりもその相違點を物色するの至當であるやうに。であるから、社會は何時もその眼前に生命の道德を置き、之から得た感激に由て動くやうにしなければならない。かくすることにより、社會は自分の自働律を制扼し、惰性を壓服し、そが固定觀念に代ゆるに潑溂たる流動觀念を以てすることが能きる。

然らば如何なる態度を以て社會に對すべきであらう

か。之には昔から二つの相容れざる議論がある。即ちその一は利他主義(アルトルイズム)で、他は自我主義(イゴイズム)であるて。で、斯様な問題を決定する爲めには、我等は生命本然の要求から研(しら)べてかゝらねばならない。生命の要求に一致する態度が即ち我等の社會に對して採るべき態度てある。生命は絶對て社會は相對てある。我等はいかなる場合にも前者の一部分ても後者の犧牲に供する權利を有たないのてある。既に生命の要求が至上命令的(カテゴリカル、インペラチーブ)てある以上、そが如何に殘酷に見えようとも、我等は社會の因習的要求に耳を借してはならない。

個人が集合して人類を造る。人類の目的が或る完全の方への進化てあるならば、個々人の行爲も亦此の目的に添はなければならないことは言ふまでもない。個人は人類の一部として進化向上に努力する。然るに全體としての人類と個人とは些の撞突もなく同じ目的の爲めに調和して進み得るてあらうか。私は暫らく我等の肉體を比喩に借りるてあらう。有機體としての肉體は一の獨立した個體として存在し發達する。然るに生命界には斯様な個性的傾向と全然反對した一つの傾向がある。それは即ち繁殖的傾向で、前者の發達を阻害する獨立な個體としての我等の肉體の存在が完全に成し遂げらるゝためには、我等から分離し子孫が我等と同じく獨立した存在として發育するといふことを許されないわけてある。けれども設しそれが許されない場合には繁殖といふことが不可能になる。なぜなら、繁殖とは舊い有機體の一部が分れて新しい有機體となることてあるから。要するに個性の敵は個性そのものゝうちに宿つてゐる。時間的に自己を不滅ならしめようとする要求が、却て空間的に自己を滅ぼし、個體としての存在を失ふことになる。生活體の一生に發育と老衰との矛盾した二顯象の在るのもその爲めてある(この說明はベルグソンから借りて來た)。然らば斯様な二傾向のうち何れが強いかと言へば、勿論繁殖的傾向と言はねばならぬ。全體としての生命は或る程度までは個體を無視しうるが、個體は如何なる場合にも生命を無視するわけには可かない。

我等の肉體に、就て言はれた上述の原理は、また我等の精神に就ても言はれなんだか。即ち a soul としての個人と人類との關係は、後者をより重しと見るべきてないだらうか。人類は無形な流てあり、個人は之を傳達する媒介物のやうに見える。要するに、私の推論を端的に現はせば、個人の人類に對する態度は利他的でなければならないといふことに歸着する。「生命は幾多の死と復活との連りである、我等をして再び生れるために死なしめよ」――之はローマン、ローランの詞である。

我等の生命的行爲は利他的であるが、然かし社會對個人の關係の生ずるとき、そこに人性本然の要求は別な姿をとつて現はれる。我等は人類そのものに對してこそ服從乃至は犧牲の義務をもつが、社會に對して廣い生命の一部なる個性を屈從させる義務は少しもない。勿論、我等が社會にいろ〳〵の物質的義務を負ふのは事實である。然し生命の問題に就ては、飽くまでも自我を主張せなければならない。そして社會の傳習、固陋に打勝つために、斷えず鋭どく自我を磨かねばならない。これが生命の媒介者たる個人の義務である。我等が感激に生きる生命に生きる爲めには、眞自我の主張が最も必要である。即ち人類に對して利他的な我等は、社會に對して自我的でなければならない。

然かし、斯様に二つの態度を區別するものゝそれが具體的行爲として現はれる場合は、渾一した衝動に於て結び付く。感激に生きる者には利他もなく自我もない。なぜなら生命と一體となる行爲には自他を區別する客觀性がない筈であるから。たゞ私は社會對個人の關係を明らかにし、前者に適當な制限を置くために、便宜上この說をなしたまでである。

〔八〕

されば感激に生きる者の生活は强烈な個性の主張てあるとともに、また大膽な犧牲てある。我等は最早利他と自我との區別を忘れねばならぬ。そして今日の倫理學者の說くやうな重苦るしい「義務」の念を超越せ

ねばならぬ。我等の唯一の義務は感激に生きることてある。感激は生命本然の要求から湧く我等自身の力てある。『その擴大を求める溢れたる生命てある。行爲の能力を自己の内に感ずることとは、同時に自己の爲すべき義務を自覺することてある』――から少壯哲學者のグョーが言つた。各人が彼の内心に感ずる一種の切迫、昔から有ゆる神秘の色を以て彩どられた道德的義務の觀念とは、『畢竟、その實行を要求し、それ自らを與へようとする生命の充ち溢れに過ぎない。同時にそれはまた力の自覺てある。……行爲の力が行爲の義務てある』。義務即ち生命維持の條件は、生命そのものの擴大を計ることとてある。

私をして今暫くグョーの説明を藉らしめよ。斯樣な力の作用は至て無心てある。『植物は花咲くことを自ら制し能はぬ。時として、花咲くことは死ぬことを意味する。だが、決して迷ふな、何れにしても樹液(しる)は上(あが)る』。我等をして力を蓄へしめよ、そを撒かしめよ。かくて花咲く時に樹の死ぬやうに滅びしめよ。

新樣な生活が自我主義てあらうか、それとも利他主義てあらうか。『強くなれ、汝の一々の行爲に於て偉大てあれ、有ゆる方面に汝の生命を延ばせ、能(で)きるだけ勢力を富ませ。て、この目的の爲めには最も社交的な人間となれ、何時も充實した智慧に帆を孕ませて戰へ、危險を冒せ――危險にも大きな樂みがある――。汝が偉大て且つ善と信じた如何なるものに向つても、打算なしに汝の力を投げよ、汝の持つ有ゆるものを投げよ――その時汝は最大の幸福を味ふてあらう。民衆と合體せよ。然らば人生に於て何んな事が汝に起らうとも、汝の尊敬する人々の心が汝の心と共鳴することを感ずるてあらう』――これが自我主義てあらうか、それとも亦利他主義てあらうか。貴族主義てあらうか、それとも亦社會主義てあらうか。

否、その何れてもない。それはたゞ生命の感激から湧いた本然の行爲てある。一切の差別を施した行爲てある。充ち滿ちた力の自然に溢れて、智慧となり、情となり、行爲となるは勢ひてある。充つるも勢ひてあり、

溢れるも勢ひてある。強き思想家は四方の風に自己の理性を托する。インスピレーションに打たれた詩人は木の葉にも自分の詩を書く。明日知らぬ命と知りつゝ百年の大作に耽つたのは文藝復興期の天才てはないか。行爲の人と雖もまた變りはない。『我等はまだ我等自身に充分てない、我等は我等のなげきが要求するよりもより多くの涙をもち、我等の生活が與へるよりもより多き喜にむかつての能力を有つ』とはグョーの詞てある。『我等は我等の同胞を救けねばならぬ、人類に由て牽かれた重もい荷車に手を借す爲めに』。斯樣な『ねばならぬ』(need)は我等の『意志の多産力』の當然な要求てある。充ち溢れた生命が己を他に分たうとする切望は、一疋の猫を救ける爲めにさへ水の中へ飛び込むことを辭させないほど强いものてある。

感激に充ちた生命の豐饒がひとり生命の名に値ひする。生命の名に値ひするもののみが眞の自由てある。なぜなら、創作に耽る藝術家の態度、勇んで危地に踏み入る犧牲者の心事ほど自由なものが外にあるてあらうか。生命はまた喜びの泉てある。『生命の旗幟は喜悦てある』とベルグソンが言つた。

〔九〕

前にも述べた如く、十九世紀の後半から暫く頽廢のどん底に落ちてゐた社會は、漸く一道の光明を前途に見出すやうになつた。生命の哲學(ベルグソン)、新形像藝術(セザンス、ゴッホ、マチス)などは其先驅と見らるべきものてある。其他文學に於ても實行界に於ても同一の氣合が空に漲つてゐる。我等は斯樣な空氣の中に育くまれた努力主義、行爲主義を卑賤な成功主義と區別せねばならぬ。例へば未來派の始祖マリネッチの唱道する物質主義や女子侮蔑主義に附き纏つたパラドキシカルな熱望を看のがすことは能きない。その熱望は何よりも強く、如何なる物をも燒き盡さねば已まないやうな白熱てある。生命の火が如何に彼の愛兒『マファルカ』に燃えたかよ。更には、その昔レオナルド、ダ、ヴィンチが智的に熱した飛行機は、今日の人

の實行慾の象徴(シンボル)となつてゐる。空に仰ぐ勇姿、その騎者の膂力――これ等は向上、犧牲等の諸徳を偲ばせずに措くであらうか。『今日まで我等は思想を以て世界を壓した、この後の我等は空の飛行を以て世界を壓するであらう』――斯う言つて狂的な佛蘭西人が先づ熱した。て、斯樣な流行を一片の唯物主義とみ、または科學の勝利とのみ見做すのは皮相な見である。それに附き纏つた感激の毒息(いき)を呼吸して見るがよい。其處に我等は新しい氣運の萌芽、生命の樹液(しる)の上昇力を感ぜずにゐられようか。將に來らうとする復興の嵐を前兆する空の氣合(けはひ)の物々しさを感ぜずにゐられようか。

斯樣な社會の特徴の一つは思想界と實行界とが互に接近し合ふことである。雙方が些しの讓歩をもせず、相犯すこともなく、自然に同一の感激に溶ける。佛蘭西ては新哲學と宗教とが握手してネオ、カソリズムの運動を産んだ。更に新しい社會運動のサンヂカリズムが生命の哲學にその宣傳の聲を得た。彼等は今迄の先蹤者のやうに政治を說き政黨に手賴らずして、直觀の教へる行爲、『崇高(サブライム)を育くむ戰』を說く。彼等はマルクスの末流のやうに經濟を重視せずして、『勞働者の衝動』(élan ouvrier)を說く。凡そ直觀といひ衝動といふは明らかに一種の狂熱と感激を意味したものではないか。更に露西亞では政治と宗教とがより堅く握手して、宗教の政黨、社會主義の宗教を樹てようとしてゐる。ゴルキーの『懺悔』の主人公が最後に得た信仰は次のやうなものであつた。『汝貴き民衆よ、汝は私の神である、汝はその美しい精神から凡ての神を造つた創造者である……そして此世界には汝民衆のほかに神はないのである、汝は奇蹟を行ふ神であるから。』と。此處では宗教が社會化されてゐるやうに、ブルガコフでは政治が宗教化された。彼はその邦で現代有數の政治記者であるが、彼の理想とする政黨とは、『廣義に於ける――無神論をも包括した――宗教的團體でなければならなんだ。眞の政黨は渾然たる一個の精神的完體として、共通の心靈、共通の思想、共通の意志を持つた有機體であつて欲しい』と。

『諾威の無冠の帝王』ビョルンソンが死んでから、今度はそのマントルは詩人や思想家の肩に落ちなんだ。却てそれが實業界の人に投げられた。サミエル、アイド博士が今日の北歐半島を代表する無冠の帝王である。彼の宣傳を聞け——『わが國民は今や新しい思想と新しい目的を要する。彼等は進歩を欲し、より好き經濟狀態を望んでゐる。彼等は最早僧侶の御利益話やもろ／＼の希望だけでは滿足することが能きない。彼等は行爲を要求する。我等の國民は今光の方へ推し進んでゐる。……私は我等の前途に横はる偉大な未來を見る。我等は一日山の頂きから頂きへ、我等の國土の全長全幅に亘つて燃ゆる火を見るであらう。そして歡喜のうちに、遂に我等は相一致して我等の祖國を上げるであらう』。

凡そ斯様な社會的氣運は思想界の傾向と相待つて、將に來らうとする偉大な感激に先驅するものである。で、その總てが生命の充實、生命の要求から促がされた努力欲にほかならない。生命の充實は、何よりも先づ思想に於て情緒に於て行爲に於てその溢れ口を求めることに由て示めされる。而して、現代の哲學界、藝術界、實行界の形勢は明らかにその條件を充しつゝあるてはないか。

繰返して言ふ、新感激の時代は近づいた。一たび塞げられた生命の溝渠（キャナル）は新たに堀られつゝある。我等は用意せねばならぬ、そして如何に待つべきかを知らねばならぬ。て、その第一歩は個人に對する社會の關係を正當の位置に戻どし、如何に社會の因習力を超越すべきかを悟ることとである。第二は我等の中に潜める本然の生命力を目覺まして感激の交通に備へることである。

〔十〕

社會は餘りに長く囚はれなんだか。我等は今一度歩見る必要を感じなんだか。生命の神秘とローマンスを創造して、そこに感激の源に歸ることを願はなんだか。近代の我等は、『希はくば生命の行爲の爲めに』——か

う言つて『眞理』の門を辭するプラグマチストを羨むべきであつた。それほど我等は智慧の悲みの重荷に疲れてゐた。我等は我等の周圍に幾多の賢い人を見たが、しかし一人の崇高い思想家を發見することが能きなんだ。我等は我等の周圍に幾多の善人を見たが、しかし一人の行爲の人を發見することが能きなんだ。彼等の凡てが疲れてゐた。賢者は墮落し、善人は敗けた。彼等は幸福にも傷み、不幸には猶更その心を阻喪した。彼等はより善き或物の缺亡を感じながら、それを創造する力を持たなんだ。何處に新生命の必要を體現した謀叛者があつたか。何處に精神の復活を叫ぶ偉きな聲があつたか。何處に勇氣の實例があつたか。何處に我等の魂に翼を與へるやうな詞があつたか。『私は私自身の中にいろ／＼な善い感情や熱望を見出した。然し凡て是等のものを統一することの能きる一つの感情――生命の有ゆる顯象を包括して確かな基礎の上に立つた明析な思想――だけが缺けてゐた』とはゴルキーの詞であるが、それが洵に良く近代人の心理を穿つてゐる。

然かし斯樣な時代は最早去らうとしてゐる。現代の人は極端に懸け離れた二つの潮流の何れをか擇ばねばならぬ。我等は妥協を許されて居らぬ。なぜなら、革命は一大飛躍であるから、そして一方の世界の道徳は他方の世界の罪惡であるから。

我等の内心の聲が斯う囁く――

『若しも汝が社會の因習に囚はれてその儘死なうとするならば、汝が汝の内に力を自覺せぬならば、若しも汝の意志が、强い印象もなく深い悲も喜もない無味單調な生活にしか堪えないほど弱いものならば、よし、汝は從前通り虛僞と卑屈の生活を送るがよからう。つぶやき、呟き、訴へながら言分の生活を送るがよからう。然し人道は汝を無みし、汝を嘲けり、汝を後へに殘すであらう。その時、汝は汝の貴い生命を痲痺させた科を以て社會を怨んではならない』。

内心の聲がまた斯う囁く――

『然かし、若し汝が力と青春を汝の内に感じうるなら

ば、汝が眞に生きようとするならば、そして强い充ち溢れた生命を樂しまうとするならば――即ち自由の何物たるかを知らうとするならば、汝は强くあれ、偉大てあれ、勇敢てあれ、そして社會を超越して立て。今が汝の好時期てある。感激が汝の接待を望んでゐる。戰へ、戰ふことは生きることてある。行へ、行ふことは人生を富ますことてある。かくて、汝は腐れた沼地の百年の生活よりも、斯樣な感激の一日の貴いことを知るてあらう。然かし、汝の戰は汝自身を終局の目的としてはならない。汝が廣い生命から眼を離した時は即ち汝が墮落の勾配に掛つた時てある。人生の意義は自己滿足てはない。有ゆる値引をしても、人間はそれよりより善き物てある。尠くとも彼は或る高き目的に一致した生命を有つ。汝の意志をして總てを抱き總てを燃やす野火たらしめよ』。

我等はその何れを擇ばうとするか。取捨の權は我等にある。

犯罪と人權蹂躙

法學博士 小河滋次郎

一

囹圄空しとか、刑措て用ひずとか云ふやうな言葉が、天下泰平の世態を言ひ現はすものでありとなれば、刑訟繁くして獄舍頻りに賑ふと云ふが如きは、國家に取て甚だ憂ふべき不祥の事たるは固とより論を俟たざる所てある。然かも「犯罪は文明に伴隨す」と謂ふが如く、文明の進歩は生存競爭の激甚を促がすの結果として、勢ひ其の劣敗者、落伍者の一としての犯罪者の如

きを増加するに至らしむるを必然とすべき譯であつて、刑囚多くして且つ比年之れが増加の傾きあるを免かれざるは、殆んど現代に於ける文明各國の共通的現象なりと言ふことも出來る。昔者漢祖秦を破て覇上に軍し、父老と法三章を約し、唐祖また京都に入て法十二條を約す、イスラエル民族が法十章を制して以て約憲と爲したるものと東西其の簡樸の世態を同うしたることを知るべく、法簡なれば罪に抵る者蓋し少し、殆んど刑措に致すを得る所以の偶然ならざるに反して、今は則ち名も法治時代と言ふが如く、人事百般の復雑多端を加ふると共に、律法の微を穿ち細に入るもの雨注も啻ならず、田夫野人が常習行爲寧ろ勤勞の美風として行ひ來りし所のものも、一朝にして法令の禁止となり、之れに觸るゝ者は忽ち犯罪の名の下に處刑の不幸を見るに至らざるを得ず、謂ふ所の蚩々蠢々の民、一たび手を擧げ一たび足を動せば皆憲網の中に罹るもの即ち是れ、昔の忠良の人、若くは少くも一個普通の國民たりし所の者、其の人格の實質に何等の變化なきに拘はらず、知らず識らずの間に終に拭ふべからざる犯罪者の汚名を烙印せしめらるゝに至る者の例に乏しくない。法繁くして犯囚多し、各國到る所に犯罪増加の傾向を免かれざるの偶然ならざるを知るべきである。况んや此他に尙ほ經濟關係の變化、社會事情の異動、警察制度の發達等、犯罪増加の外的原因となるべきファクトルの屈指して數ふるに遑まなき程に多きものあるに於てをや、之が原因を詳かにすることを得るに至れば兼てまた今代に於ける犯罪増加の事實は、敢て此の一事のみを以て風教の弛廢、一般民性の墮落を示めすの徴象となすに足らぬと云ふことが分かる譯である。

此の理由に基き、世の或は今の時代の傾嚮を認めて、將さに仁義道徳のバンクロットを見んとする危機に頻するものとなすの悲観に對して、余は常に其の杞憂たり取越苦勞たるに過ぎざるを冷笑しつゝある次第である。併し物には一定の範例があり又相當の程度がなければならぬ。一般の原則として文明の進歩に伴

ふ犯罪增加の現象を認め、また之れあるが爲めに敢て世運の陵替を悲觀するの理由となすに足らずと斷ずべきも、然かも其增加の原因が不自然てあり、無智、拙劣若くは不注意なるが爲めてあり、且つ其の增加の分量が一定の範例則ち他の一般の振合程度に比して甚しく多いと云ふやうなことてあつたならば、此くの如き犯罪增加の現象は啻に其の文明國としての體面を傷くるの甚しきのみならず、人權の危機は言ふに及ばず、延ひて終に一國國運の萎微銷沉を將來するに至らしめられざるを得ざるは明らかてある。秦人刑を極めて而して天下畔き、羅馬は酷刑を以て其の國家を亡ふ。必ずしも峻刑刻法之れが因を爲しゝとは謂ふべからず、要は即ち執法の宜しきを得ざるものありしが爲めなり、執法其の宜しきを過まるが爲めに詔獄繁く、詔獄繁きが爲めに犯囚頻りに簇生し、所謂民欺て而して罪を犯す者益々多し。トヲマス・モーリユー曰く國家は自ら犯囚を製造して之を苦虐し之を絞殺するの獸慾を逞ふすることを敢てすと、酷評と雖も事實は即ち之れに近し。不法若くは拙劣の執法に基く犯罪增加は國家其れ自身の特に人工を加へて製造したるものと謂ふを得べく、此の意味に於て曾て英國大法官コーラリッヂが、司直の機關たる神聖なる裁判所を目して、國立犯罪製造所なりと喝破せしことの頗る痛切なるを感ぜざるを得ぬ。國家自ら人道を無視し禮敎を破壞すること此くの如くにして如何ぞ能く民生を安んじ國運の衰漸を防遏することを得んや。天下の患、獄より深きは莫く獄吏より甚しきは莫しと謂ふ所以のもの、古今を通じて過まらざるの金言なりと確信する所てある。

二

我國今日に於ける犯罪の實況は如何に。內地人口約四千萬に對して、年々輕重各種の犯罪に由て法の處分を受くる者約七十萬に近く、受刑又は審問の爲めに監獄に繫禁せられつゝある者、一日平均約七萬內外を數ふべしと云ふことてある。改正刑法實施後の趨勢に徵し、若し當時の執法有司の誤れる方針に一任したりしならば忽ちにして八萬となり九萬を超へ、十萬赭衣の

客を監獄に迎ふるの盛事?に遭ふの日の近きにあるべきを危ぶまれたる次第なるが、幸に人權蹂躙の名を以て、議會に新聞に若くはまた在野法曹の間に、執法の不法を懲艾せんとする世論の勃興ありたるが爲めに、急遽狼狽して卒然從來の方針を改むることゝなり、或は曰く微罪不起訴、或は曰く起訴の猶豫、或は曰く滯獄を少からしむる爲めの裁判の進行、或は曰く刑期裁量の斟酌、或は曰く特赦假出獄の勵行、或は何或は何、姑息――若くは滑稽ながらも兎に角罪囚減少策を講じて以て世論の迎合を努めたるを多とすべきも、之が爲めに一方にまた法權の獨立、執法の公平、行刑の至正、現行刑訟手續の根本主義等を危ふするに至らしめたる大なる損失を考ふるときは利害果して何れに多きものありやを判斷するに苦まざるを得ざる所てある。之が利害は姑く擱き、何れにしても我國に於て現に年々七十萬の受刑者、日々平均七萬内外の在監囚徒を有し、之が爲めに少くも國庫費約千五六百萬圓の支出を餘義なくしつゝありと云ふことは、獨り國家財政の現狀に照して過重の負擔たるのみてなく、人口其他社會的及び經濟的犯罪起生若くは增加の自然の原因となるべき各般の關係事情の上より之を見るも、所謂一定の範例を超過したる不自然の增加若くは不法拙劣なる人工を加へたる脱線的犯罪現象なりと認めざるを得ぬ。

我れと殆んど人口數を同ふし、其他の社會的及び經濟的犯罪の原因となるべきファクトルに至ては、寧ろ我れに優さる數倍の多きものありと認めらるゝ大英國の如きは、監獄拘禁の罪囚を數ふること平均僅に一萬四五千に過ぎざるが上に、尚ほ同國にあつては、他の文明各國殊に歐大陸諸邦の年々幾分の犯罪增加の傾向あるを免かれざるに反して、近く約半世紀を通じて獨り一般犯罪者のみならず、獄舍に繋禁せらるべき已未決囚の數に至ては特別に著るしき減退を實現しつゝある所てある。犯罪遞減の事實は、是を以て駸かに我れを律するの矩準たらしめ能はざるべしと雖も、彼れの在監の囚徒僅に一萬四五千なりと云ふに對して、我れにあつては無慮七萬の多きを有して居る、餘りに甚

しき懸隔なりと謂ふべく、假りに犯罪起生の原因となるべき彼我のファクトルを同ふすべしとして之を見ても、獨り我れに限りて此くまでに多くの犯罪者を有せざるべからざるの理由を見出ずることは出來ぬ、況んや彼我相比較して寧ろ彼れに有力なる犯因となるべき社會的經濟的關係事情のヨリ多きものあるに於てをやてある。尤も英國は文明列國の中にあつて刑制……殊に其の活用の優秀なるを以て他の模範となすに足るべき先進國と稱せられてをる所てあるが故に、之れと比較を取らんとするは、或は强て難きを求むるものなりとの感を懷くものもあらう。然らば米國は如何、佛蘭西は如何、佛國は在監者平均約二萬三千、人口一億と稱せらるゝ北米合衆國に於てすらも僅に八萬二千の在監囚を有するに過ぎざるの事實てある。獨逸の如きは由來健訟多罰の弊に堪へずと云ふを以て聞ゆる所なるが、然かも尙ほ其の犯罪者殊に監獄拘禁中の囚徒數を以て之を我れの實數に對照するときは、確かに其の割合の我れにヨリ多くして反て彼れに少きの事實を看取する次第てある。之を要するに犯罪の多き我國の如きは文明各國中、殆んど他に其の匹儔を見る能はざる所なりと斷言することが出來る。嘗て花井博士が我國を指して、犯罪の一等國なりと評せられたるの警句は、實に以て我が今日に於ける刑事界……犯罪現象の病的なる脫線的なる、而してまた常識を以て測るべからざる變調的のものたることを說明するに最も力ある雄辯となすに足るべしと信ず。

三

モンチエーが「吾人の總ては睡れる犯罪者なり」と謂へるが如く、正人君子と云ふと雖も、何時或る動機に觸れて犯罪者として醒覺せしめらるゝに至るなきを必することは出來ぬ、況んや吾々罪の子又は濁惡邪見の衆生と稱せらるゝ凡俗の身に於てをや、其の日常の行爲の中には設令無意識的なるにもせよ、大小必ず何等かの禁令に觸るゝものなきを得ぬ。國に賑士なく家に盜行無しと謂ふが如く、此の意味に於て吾々五千萬の同胞を擧げて一人として殆んど犯罪者たる資格を

備へて居らぬ者はないと思ふ。故に若し唯だ犯罪行爲あり若くは單純に犯罪者なるが爲めに之を摘發し之を處刑せざるべからずとなれば、七萬の囚徒、七十萬の受刑者、決して以て多しゝなすには足らず、彼等は即ちマノベールの所謂、不幸にして生洲の中より掬ひ揚げられたる群魚の一小部分なるに過ぎぬ。之れに幾倍若くは幾十倍する所の犯罪者を製造するの功名手を現はすこと決して至難の業でない。併し同じ犯罪者と稱する中にも色々の種類があつて、其の危險性の輕重を異にするのみならず、或は全く實害の作はざるもの又は危險性なきものもあり、若くはまた實害と危險性とを有する者であつても處刑の目的物たる能はざる所の者もある。刑罰の目的は社會の法的秩序を保全せんと欲するに在るが故に、實害又は危險性はなきものは言ふを俟たず、設令多少の實害又は危險性があるにしても、法的秩序の全體に及ぼすの影響を計校して、若し之を罰するの利の罰せざるの益に如かざるの場合には、其の犯罪は須く之を不問に付するを當然とすべきである。近く英國の政界に一大紛糾を極めたる愛蘭自治法案の出來事に就て之を見るも、有名なるカーゾン卿がアルスター市民を率いて一大示威運動……寧ろ組織ある謀反行爲と云ふを適當とする態度を敢てして憚る所なかりしにも拘はらず、政府當局者は之れに對して毫も國家の刑罰權を用ひんとするやうな景色もなく、偶々一部の者より政府當局の餘りに寛大に失するの不甲斐なきを非難する者あるに於てや、政府當局の一人は之に向つて辯疏すらく、彼れ(カーゾン)の行動の、立派なる犯罪を構成するの事實は余輩もまた之れを認めざるに非ず、然かも之を法に問ふの結果は、反て益々時局の紛糾を大ならしむるのみならず、徒らにカーゾンをして一層、偶像的崇拜の中心たる勢力を助長するに至らしむることを免かれず云々と。堂々たる謀反行爲少くも何人の眼にも國家の安寧秩序を紊亂する輕からざる犯罪行爲と認めらるゝものに對してすら尙ほ此くの如し、況んや其他の雜駁なる輕犯微罪に於てをや、又況んや實害なく若くは危險性なき各種の犯罪者

に於てをや。斯界の眞相を詳にかする所の者は、何人も能く謂ゆる犯罪なるもの丶大部分は、此種の性質のものに屬すると云ふことを知るべき筈てある。英國の如きは此の大部分のものをば、或は始めより全く不問に付し、或は刑罰以外の他の處分を加へ、或は刑罰を加ふるにしても懲役とか禁錮とか云ふやうな自由刑を課せずにすませるの方針を取て居る。英國全體を通じて在監囚徒僅に一萬四五千に過ぎずと云ふことの偶然ならざるを知るべきてある。

論者或は言はん、英國に於て右に述ぶるが如き機宜變通の執法あるを得る所以のものは、同國治罪の原則として所謂「ヲッポルチユニテーッブリンチップ」（便宜起訴主義）なるものを採用して居るが爲めてある。然るに我國にあつては歐洲大陸諸國と同じく、謂ゆる「レガリテーッブリンチップ」（法定起訴）なるものを以て刑訴立法の基礎となして居るが故に、苟も犯罪のある所、其の輕重の如何に論なく、決して之を不問に付すると云ふ譯にはならぬ、其間に如何に憐諒すべき事情あるも、また假令何等實害の伴ふものなしと云ふと雖も、若くは罰せざる利益の罰するに優さるの萬々なる事實を認むるの場合に於ても、所謂涙を揮て馬稷を斬るの措置に出づることが即ち法定起訴主義の要求する所てある。其の主義の可否は姑く擱き、現行法規の下にあつては、犯罪必告且つ必罰の方針を取らざるべからざること言ふまでもなく、其の結果勢ひ繁訟多罰、七萬內外の在監囚徒を有するの已む能はざる所以てある云々と。英國の便宜起訴主義なるに對して、日本や歐洲大陸諸國の採る所のものを法定起訴主義と命名し得べしと云ふことは余も亦之を知つて居らぬ譯てはない、然かも是は畢竟、比較的且つ科學的の命名に過ぎざる次第てあつて、其の實際に就て之を見れば何れも絕對的性質のものてなく、便宜主義にも法定主義が混合し、法定主義の中にも便宜主義の加味せられてをる點が少くないのてある。我が刑訴法が法定主義の上に成立せしめられてあると云つても執法の實際の上には、拙劣ながらも實に便宜主義が混用せられて居る。微罪不起

訴の聲を聞く所以のものは如何、長刑期主義が行はるるかと思ふといつの間にかまた短刑期の方針に激變する所以のものは如何、司法權の獨立とか何とか偉らそふなことを標榜して居るの一面には、司法大臣一片の訓令に由て忽ち一萬や二萬の處刑數を增減し得る所以のものは如何、吾々平民共の日常耳目に觸れる所のみに就ても、大小各種の犯罪及び犯罪者の不問に付せられつゝあるものゝ頗る多きを見る所以のものは如何、是等のこと一として皆、我國にあつても謂ゆる便宜主義なるものゝ實行せられつゝある明證にあらざるはなしてある。唯だ其れが執法當局の頭腦の惡さが爲めに、或は從來の愚なる慣行に泥み若くは過れる傳說に囚はるゝ所あるが爲めに、常に組織立ちたる而してまた徹底したる活動を見る能はざるまでのことに過ぎぬ。法定起訴主義の理由の下に、我國今日に於ける濫刑多囚の弊を免かれずと云ふのことは、決して以て識者を承服せしむることは出來ぬ。

四

犯罪は何が故に之を罰せざるべからざるか、曰く社會の生存的利益を害するの危險あるが爲めである。然らば其の謂ゆる危險性なるものゝ主體は何である、犯罪なるファクト即ち事實其れ自身なるか若くはまた犯罪を爲す所のペルソン即ち犯罪者なるかと云ふに、區々の學說は姑く擱き、兎に角昔は事實を問ふて人を認めず、ジヤスチース即ち正義の女神が白布を以て其兩眼を掩ふて善惡邪正を裁斷するが如くに、唯だ犯罪の事實だけを糺して之を處分するを原則となしたる次第であるが、今日に於ては、リストの所謂處刑の主體は犯罪に非ずして犯罪者なりと云ふことが是認せられ、若くは少くも處刑の目的物として最も重きを犯罪者の人格の上に置かざるべからずと云ふやうな風に刑罰理論の變化を見るに至つて居るのである。犯罪人格の研究が勃興し、進んで其の研究の結果を立法、司法、行刑等の各方面に實行し若くは實行せんとする試みの日に又新なるものある今日の時運に遭遇した所以のものは即ち之が爲めてある。刑法改正の行はれたも之が

爲め、監獄改良の聲を聞くも之が爲め、裁判所構成法や刑事訴訟法の改正論の唱へらるゝも之が爲め、行刑猶豫法の採用せられたるも之が爲め、少年感化事業の普及を必要とするも之が爲め、遲蒔きながらも少年裁判法の調査に着手したるを耳にする所以のものもまた之が爲めてある。然るに我國に於ては立法又は施政の方針の上に能く‥‥或は無造作に過ぐるまでに新說を迎へ新制度を採用する所あるに拘はらず、遺憾ながら殊に司法制度などの上には常に之れが活用の局に當るの人を得ざるが爲めに、是れまで刑制改良の名の下に指を染めたるのことにして、殆んど一として成功は愬か、失敗に終はるの歷史を貽して居らぬものはない、人格主義の改正刑法も此くの如く、刑の執行猶豫制度の如きも憐れや氣の拔けたラムネと一般なりとの評がある、將さに行はれんとする少年裁判法の如きも、前途蓋し同一の運命に陷るを免かれざることであらう。

古へに眚災は肆赦し、怙終は賊刑すと言ひ、又春秋の獄を治むる、心を論じて罪を定む、志善にして而して法に違ふ者は免し、志惡にして而して法に合ふ者は誅すと謂ふが如き、今の所謂人格主義なるものと、殆んど全く其の論據を同ふすと云ふて宜い。斯ふ云ふ考へが幾分でも執法者の頭腦の中にあるならば、敢て必ずしも便宜主義とか人格主義とか云ふやうな喧かましい議論を持ち出すまでもなく、決して濫りに刑獄を繁くして徒らに犯囚を多からしむるが如き結果を見るべき筈はない。涙を揮て馬稷を斬るの必要もなければ、勿論また貧苦に出でたる一羽の雞若くは一葉の郵便切手の盜用に對して四年五年の長期刑を科すると云ふやうな沒常識の措置の行はるべき道理も無い。人格の中心は心に存す、人格の危險なりと云ふは即ち其の心の危險なるが爲めてある、刑法の原則に意識なき行爲は之を罰せずとあるが、其の意味は即ち惡意なきの行爲は其の罪を論ぜずと云ふに歸する。有德の君子も時として法に觸るゝの行爲あるを免かれざることとてあるが、然かも其の多くは惡意即ち犯罪の意識なきの行爲てあつて、之れあるが爲めに敢て君子人たるの面目を

傾はさとるは勿論、固とよりまた之を處罰するにも及ばざる譯のものである。今の文明國の刑典の上には、一旦犯罪者として認定したるものに就ても其の總ての人格關係を考量したる上て或は條件を付して其の裁判の宣告又は刑の執行を猶豫し、或は刑罰以外の他の處分(例へば感化院、勞役場、酒癖所等の如き)に付し、或は行刑開始の後に於ても、若くは特赦、若くは減刑、若くは假出獄、色々寛典を施すの道あるのみならず、重患或は精神病に罹るとか(必要的理由)、監獄の設備が受刑者の健康狀態に適當なる處遇を爲すに不十分なる事情ありとか(便宜的理由例へば姙婦、產婦、傳染病者等に對するの場合)、若くはまた受刑者又は其の家族をして刑の目的以外の損害を加へしむるの虞ありとか(情義的理由例へば受刑の爲めに家產の倒壞、家族の離散、關係事業の紛亂等を豫想し得べき場合)云ふの理由は、是れまた以て一時、刑の執行を停止し得ることになつて居る。誰れか冷酷は刑の本質なり。刑罰の前には一片の情實あるを許さずと云ふ、眞正なる情實は人道自然の要求であつて是れまた立派なる正義てあり、エクイチーである。受刑の實質をして刑の目的以外に過重ならざらしむるのことは文明刑罰の本領て、此の本領を保全するは國家の義務である。受刑者をして刑の目的以外の苦痛を受けざらしめんとなれば、本人は勿論、其の家族、其の周圍の境遇の上にも相當の注意を加ふる所がなければならぬ。犯罪の責任年齡の如きも、今日では十五、十六乃至また進んで十八歲位までと云ふやうに上の方へ引き上げて成るべく青年者を刑罰より除外せしめんとする立法の傾向を見るに至て居る所であるが、行く〳〵は花井博士などの主張せらるる所の高齡の事實を不論罪又は處刑輕減若くは猶豫の理由たらしむる理想の實現を見る機會に到達し得ることてあらう。此點に就ては反て支那の歷史に例へば周代に於ける三赦の制(一日幼弱二日老旄三日惷愚)の如き、若くは後世にあつても、七十以上老人及十五以下兒男及大小女子及身有疾病、新遭重喪不係謀反大逆、同居親屬、倶不許擅拘倉禁云々と謂ふ

が如く、近代的人格主義の立場より之を見て、驚嘆に堪へざる程に進歩したる刑制の行はれしものあるを認むることが出來る。少年や老人は姑く擱き大小の女子を省き、重病者を除き尚ほ進んで重病者を除外し、新に重患に遭ひたる者をすら倶に擅拘倉禁を許さずと規定したる點の如き確かに現代文明國の刑典を淩駕したるものと斷言し得ると思ふ。要するに刑罰の人格主義なるものは、決して今日に始つた而して西洋に發見せられた新しい考へでないのみならず、本家は反て我れにあり、古く既に東洋に萌芽し、發育し、繁榮して居つたものである。之を我が政正刑法に採用したるのことは恰も逆輸入の國産物を使用して舶來品と思ふてをるやうなものである。

五

刑罰の萬能を信ずるは刑名家の通弊である。否な必ずしも刑名家と謂はず、刑事々件の局に當る官僚輩の多くが、早晩此に必到を免かれざる自然の運命と認むることも出來る。然るに刑罰なるものは獨り犯罪に對する唯一の而してまた有效の手段でないのみならず、反て之が爲めに有害の反應を現はすに至るの場合が少くない。犯罪に對する刑罰の效果を過信するのことは、恰も往古に一種の仙藥又は萬能藥なるものあつて四百四病の總べてを治癒し得べしと迷信して居つたやうなものである、或る疾病に對する特效藥も或る他の病氣には寧ろ有毒なるを免かれざると同じく、刑罰もまた犯罪人格の如何に由て大に其の利害を異にする所がなければならぬ。總ての刑罰皆然りであるが、就中自由刑即ち監獄拘禁の刑に於て其の影響の最も顯著なるものあるを見る所なるが、執法の當局、殆んど毫も此に顧みる所なく、千遍一律、犯罪のある所、自由刑を科すれば即ち能事足れりとなし、竊盜、詐欺、奸淫等の惡むべく賤むべき破廉恥行爲ある者を罰するにも自由刑、朴實なる農民が村社祭の酒興に乘じて犯したる一時の違法行爲或は農間隣佐相集り些少の財物を賭して輸贏を試みたる娛樂行爲、若くはまた彼れが炊爨の燃料を得んが爲めに、或は食膳一皿の香味を添へんが爲めに

何心なく山林に入つて、雜木菌蕈等を拾集するの行爲ある場合にも、之れが處分は即ち自由刑、其の結果、不完全極まる我が今日の監獄又は警察留置場の一房には常に一時の過誤の爲めに罰せられたる若くは抑留せられたる質朴なる農夫、勤勉なる車夫勞働者、無垢なる青年男女等の、窃盜、詐欺、掏摸、浮浪等の常習的惡棍無賴の徒と混同雜居しつゝあるを免かれざることになつて居る。是れ豈に精神的虐殺行爲若くは一種の國營犯罪製造業と相選ぶ所なきに非ずや。

我が今日の刑事界の實況は、確かに自由刑濫用の弊に堪へずと斷言すべく、而して其の原因の一として刑罰萬能の迷信を數ふることが出來る。前段述ぶるが如き事情の下に、罰せらるゝ者多くして益々醜變惡化して出獄する者の數を加ふるが故に、一般の犯罪者と共に殊に最も危險性に富める所謂累犯者なるものゝ驚くべき增加を促進せしめられつゝあることが即ち我が今日の事實である。されば我が今日の實況の如くに、世界無比の多數の監禁囚を有すると云ふことは、獨り不經濟の甚しきのみならず、また公安維持の上に何等の實益なきのみならず、寧ろ多ければ多き程、將來に益々危險なる累犯者、犯罪學を卒業したる習慣性又は職業性犯罪者の增加を豫期せざるを得ざる譯であつて、國家民人の不利實に之れより大なるはなしである。

自由刑濫用の弊を指して、精神的虐殺行爲なりと評することと前段の如くなるが、我が今日の實況は尙ほ之れに加ふるに肉體の上にも、曾て歐羅巴の或る學者が、不完全なる監獄に於て執行するの所の自由刑を指して「乾きたるギロッチン」(斷刀)臺と評したると同じやうな、慘憺たる破壞損害を蒙らしめつゝあるの事實を現はして居る。前に言へるが如く、我が執法の當局者も、人權擁護の世論に餘義なくせられて、澁々ながら刑罰濫用の時弊に顧みる所ありたるが爲めに、今日では少くも罪囚濫造の方針を制限して、在監者平均六萬乃至六萬五千位の所に昇降し得て居ると云ふことであるが、それにしても現に自由刑執行の爲めに設けられてをる我が監獄の規模は、精々四萬乃至四萬五千の收

容力を有するに過ぎぬ。謂ゆる收容力とは囚人の健康と行刑の實質を保全するの必要程度に監獄法規の定めたる標準より算出したるものであつて、法の命ずる所、苟くも之れに違ふ能はざるは勿論、違へば即ち忽ち囚人の健康と行刑の實質を破壞するを得ざることになる。監獄なる機關は決してゴム球の如き伸縮自在のものでない、之をゴム的ならしむるは即ち法律違犯であり、行刑機關の無視であり、而してまた人權蹂躪の最も甚しきものである。四萬五千の收容力に對して六萬以上の囚徒を拘禁すと云ふ譯であるから、到る所の監獄一個所として甚しき定員の超過を見ざるはなく、六百人を定員とする監獄に、常に——取除けが寧ろ原則となつて、千人乃至千五百人の囚徒を拘禁するの例に乏しくない。心性の荒廢墮落と共に肉體の上にも回復すべからざる多大の損害を受けしむるに至るべきは明かである。彼の聖王仁及囹圄と云ふことがあるが、何ぞ必ずしも仁と謂はん、囹圄に在るの刑囚と雖も、其の拘束せらるゝ所の自由以外に、他に謂はれなき人權の迫害を受けざるべき權利を有し、之を保全するは即ち國家の義務であり、執法者の職責である。人權保全の實際的設備の如何に顧みる所なく、唯だ法律に基て逮捕、監禁、審問、處罰する所あれば即ち人權蹂躪の非難を免かるべしと信ずるが如きは、抑も思はざるもまた甚しと謂はざるを得ぬ。

昔者、士大夫以上の人を治むるに努めて廉耻を養ふを主とし、罪あるも容易に之に刑を加へず、專ら禮儀を以て之を媿しめたりと稱せられて居る、今の所謂刑事政策なるものの本領とする所は即ち此に外ならぬ次第であつて、濡れぬ先きこそ露をも思ふの譬喩の如く、老少男女若くは身分教育等の如何に論なく、犯罪あるも成るべくは即ち刑罰以外、廉耻の保全又又は發揮に適當なる他の手段によつて之れが戒飾を試むるやうにせねばならぬ。之を要するに刑罰殊に自由刑は、犯罪なる一種の疾病に對する外科手術の如きもので、已むなき最後の療法として之を施すべく而かも其の十中八九分までは不良の成績に歸するものと覺悟せざるを得

ぬ。近年に及び再び反自由刑論の盛んならんとするの傾向を呈し、少くも刑の執行猶豫其他の立法的施設及び執法的方針に由て著るしく其の適用範圍を制限するの事實を、我が日本以外の他の文明各國に實現するに至りたる所以のものは即ち之が爲めてある。

六

有罪の決定した者に就てすら尚ほ之を監獄拘禁の處分に付するを愼むの必要あると此くの如く、實際また歐米にあつては努めて此の刑事政策の要求を充たさんとするの方針を取つて居る。况んや犯罪の嫌疑ある者に對して、審問の必要の爲めに、謂ゆる未決拘禁の措置を取らんとする場合に於てをやてある。一夫在囚擧家廢食と謂ふことは、未決拘禁のみに限つたことでないが、一朝の嫌疑の爲めに度日歳の如き囹圄の苦を受くる本人の不幸は言ふまでもなく、妻子眷族の憂愁措く能はざるの情殊に人生の慘を極むるものと謂はざるを得ぬ。本來、犯罪の未決者なるものは無罪純白なる良民として待つべき筈のものであつて、或る必要已む能はさる情狀の存在せざる限りは、容易に拘禁命令の下し得らるべきに非さるは勿論、犯罪の嫌疑をかけること其れ自身が既に重大なる迫害行爲に屬すべきものなるが故に、豫め愼密なる内偵を遂げ、殆んど動かざる犯罪證據の具備を認めたる後に於て始めて檢擧の事に着手すべき筋のものである。而して其所謂、拘禁命令を發するに已む能はさる必要の條件とは、犯罪嫌疑者に於て或は犯罪の證據を堙滅し、或は審問を免かれんが爲めに失踪をなすの虞ありと認めらるべき情狀ある場合を指すので、此以外の理由の下には決して自由拘束の處分をなすことは出來ぬ。されば此の近代的立法及び正義の要求が精神的に能く斷行せらるゝを得ることになれば、實際に未決者を監獄に拘禁する必要を見るの場合の如きは極めて稀有なるべきを期待し得らるゝ筈である。昔しは少しでも犯罪の疑ひあれば、取り敢へず先づ牢獄に打ち込んで而して後ち或は家宅捜査或は拷問の適用等を行ひ得たる譯であつて、未決者に對する監獄拘禁は此に由て專ら新たなる犯證又は口

供を得んが爲めの目的に出でたるものなりとも言ひ得らるゝに反し、今日に於ては唯だ消極的に證據堙滅の弊を防ぐと云ふの外に裁判と拘禁との間には何等の交渉をも持て居らぬ。外國に於ける未決拘禁の實況を見るに其之を必要とする理由の殆んど八分までは逃走の虞ありと云ふに存し、殘る二分が即ち證據堙滅の推定に基くものゝ如くである。重刑を豫期すべき犯罪ある者住所不定の者、外國人等の如きは、通例逃走の虞を推定するに足る場合を多しとすべきも、其他にあつては被告人其れ自身の利害より打算しても容易に逃走を企つるが如き愚擧に出づる者はない筈である。法理の要求より之を見るも、將た實際の事情より之を言ふも、何れにしても犯罪嫌疑者に對する事實の取調に就ては、之れに自由の拘束を加へざることを以て原則とし、實際已むを得ざる必要の場合に限つてのみ、之れが除外例を認むると云ふことにせねばならぬ。英佛等の文明先進國に於ては、さすがに能く此の理想の勵行を努むる所あるが故に、刑事事件の爲めに拘留を受けて居る被告人の如きは其割合極めて少數に過ぎざるの事實である。然るに我國の如きは原則と除外例と主客全く其位地を顚倒し、苟も犯罪の嫌疑あれば即ち之れに逮捕監禁の處分をなすを當然の順序なるかに考へ、世人も亦た恬として之を怪まざるのみならず、清淨無垢の被告人を待つこと罪囚の如く、輕々しく罪を豫斷して侮蔑を加へ、甚しきは即ち醜漢賊子等の名を下して凌辱の限りを敢てすると云ふ始末である。凡俗の雷同此くの如くなるが故に酷吏の増長底止するなき亦た已むを得ざる所であつて、前日堂上の尊、今日は則ち階下の囚、相當の位置名望を有する紳士先輩を被告人として法廷に召喚する場合等に於ても、法官輩の之れに對することと野人匹夫の囚と異るなく、役目の手前とかなんとか云ふやうな古い辭柄の下に、故らに呼び捨て等の不必要なる侮辱を加へて得得たる態度を取らしむることになるのである。英佛等のそれに及ばざるも、我國などに比しては立法の規定と法官の注意と兩々相待て遙かに未決拘禁に愼む所ありと認めらるゝ獨乙の如

きに於てすらも、識者は勿論、一般世人も亦た啻に現狀に滿足せざるのみならず、人權擁護の爲め盛んに法官の沒常識を非議して止まず、ペーテルソンの如きは、之を指して獨逸に於ける有機的刑制組織の深傷部分なりと歎じ、法曹界の老成大家として名あるワッハ敎授の如きすらも、此に滔々たる數千言の痛評を試みたる結論として我が獨乙に於ける不法不經濟なる未決拘禁濫用の事實は吾人の一日も傍觀する能はざる所の重大なる時弊に屬すとの斷案を下して居るやうな次第であるが、若し彼等をして、我が今日の實情を知らしめたらば果して如何なる感を起しまた如何なる評を下すべきか、ウヰルヘルム・テルの一節に曰く純潔玉の如き君子も何時酷吏の毒手に觸れて聞くも恐ろしき獄舍に其身を繫がしめらるゝに至るやも測るべからずと。恰も是れ我が不安心なる刑事界の現狀を諷ふたるかの感なき能はざる次第である。

今や我國に於ても、さすがに不備なる法令の規定と拙劣なる執法當局に原因する所の濫訴濫罰の時弊に堪ふる能はず、漸く人權擁護の世論の喧しからんとするを見る所なるが、若し世人にして尙ほ深く時弊の眞相を詳かにする所あらんには、益々人權擁護の急務を感ずると共に之れに對し救濟の方法を要求することまた一層痛切なるものあるを確信する所である。或は曰く陪審制度、或は曰く無罪拘禁の賠償、或は曰く起訴主義の變更、或は曰く檢察制度の改良、或は曰く刑事司法官の選敍を愼むこと、或は曰く檢事の勢力を過重するの時弊を矯むること、曰く何、曰く何、此の一を行ふもすでに以て奏效の著るしきものあるを期待するに足らん。他日機會を見て更に是等の救濟策に論及する所あるべし。

結局支那問題

石川半山

我輩は多年國民の間に警告して、日本帝國の前途は決して安泰でないと言つた、ウカ〳〵して居れば、歐米列强の爪牙に罹て、亡國の慘事を見るかも知れないと叫び、今日と雖も此の警告は止めない積りである、又支那の前途に付ても、我輩は幾度か悲觀の說を繰り返へし、其前途の運命は、歐米列强に依て分轄されるで有らふと言つたが、然かしながら此等悲觀的警告をなす時に、我輩は每に「歐米の形勢にして變化が無いならば」と云ふ但書を附することを忘れたことはなかつた、或る時は露骨に我輩の希望を述べて「歐米に大戰爭の起る事は日本の大幸で有る」と言つたことも有る、それがいよ〳〵今日開始されたのだ、政治家や外交官は外交の辭令で、此の開戰を悲むと云ふかも知れないが、我輩共はコンな喜ばしい消息はないと言ひたいのだ。

永く待ちたる戰爭

日露戰爭を終局したるポーツマウスの講和會議の後我輩は米國から太西洋を橫切て歐洲へ渡るべく、獨逸汽船に搭じたが、船中の上等客中日本人は我輩が一人で有つた、然るに同乘の獨逸中、日本が露國と早く講和したるを惜しみ、今回の講和は姑息の講和なれば、三年か五年の中に、日露の再戰を見るで有らふと言つた者が有つた、我輩は之に答へて、「日本は日清戰爭、義和團、日露戰爭と大分活動した、舞臺が常に同じ役者では、見物も面白くない、今度は獨逸が登場すべき番だからシッカリ賴む」と言つたことが有る、其の頃はモロッコ問題で歐洲の形勢も、頗る暗澹たる者で有

つたが、我輩は倫敦から巴里へ往つた時、平和の空氣が充滿して居たので失望した。

佛國の外務大臣デルカッセは、モロッコ問題を機會として、獨逸に復讐戰を試むべく、少からぬ努力をなし、密かに英國と握手して、一旦獨佛戰爭が開始されたなら、英國は軍艦を以て獨逸のキール港を占領し、且つ十萬の陸兵をシュレスウイッヒ、ホルスタインへ上陸して、佛國を助くべき約束をした、然るに當時の佛國には平和說が勢力を占めて、此の主戰主義のデルカッセは辭職し、ルーヴキエーが首相で外相を兼任する事になり、大統領の選擧にも對獨硬のツーメーは負けて、平和主義のフアリエールが當選と云ふ形勢で有つた、それにデルカッセと握手した英國のバルフォア內閣は、關稅問題で顚覆して、バンナルマンの自由黨內閣が成立し、平和黨のジョン、バーンスが入閣した、之れでは戰爭が出來るワケがない、今回は自由黨內閣で戰爭に參加したが、之れは一はウースタル問題で大に苦しんで居たから、之れを機會に內治上の困難に一段落を取る政略も加はつて居たらしい、若しウースタル問題でもなければ、平和主義の自由黨が大陸戰に參加するが如き破天荒の事をやるワケがない、且つ又十年政權を執て、自由黨內閣も理想ばかりで往かぬ事を發見し、多少海外發展主義の統一黨にカブれた傾向も有るかも知れぬが、バンナルマン時代には兎ても戰爭に參加する意向はなかつた、然らば獨逸の方は如何と云ふに、是れ亦眞に戰を決する勇氣はなかつた樣だ、盛に威嚇はするけれども、實際の腹は定まつて居なかつた樣だ、其の證據には、モロッコ問題をアルゼシラス會議で解決する事に同意し、其の高めた鼻を挫かれても怒りもせず、獨逸宰相ビューローが議會に於て、社會黨のベーベルから、失敗の急所を突かれて、憤激の餘りに卒倒する樣な結果を見ても、戰ひを決する勇氣はなかつた、それ故に當時識者の間では、歐洲列强は互ひに軍備を擴張して、互ひに威嚇は試みるが、實際戰爭はやらない者の如くに觀測して居た、彼等は單に威嚇に依て、其の獲んと欲する所の物を取らんとする

のでゝ決して刀は抜かないと思ふ者が多かつた、即ち歐洲列强は脅喝取財は犯すけれど、殺人迄は犯さない者と思はれて居た。

其の後墺國がボスニア、ヘルチエゴヴヰナを合併した時には、如何に神經の遲鈍な露國でも之を默過することは有るまいと思はれたけれど、何か言つて居る内に結局は「露國外相イスヴオルスキイが馬鹿だから、竦腕の墺國外相エーレンタールに一杯喰はされたのだ」と云ふ事で結了して仕舞ふた、伊土戰爭からバルカン戰爭、何れも歐洲列國の大戰を誘致すべき導火線になるだらうと思はれたが、總べてモノにならなかつた、それが今回はいよ〳〵大戰となつたのだから、我輩共に取てはコンな愉快なことはないのだ。

戰爭の永續は壓迫力の減少

さて歐洲大戰の結果は如何になるか、之れは天帝の外は誰れも豫言することは出來ない、獨逸皇帝ウヰルヘルム二世は若し此の戰爭に勝つならば、ナポレオン一世の如き威勢を揮ひ、和蘭と白耳義を併吞して、世界の大强國となるで有らふ、其の代りに若しも大敗北を取つたならば、ナポレオン三世の末路の如き悲慘な者となるかも知れない、或は又大勝利も大敗北もしない内に、算盤上から割り出して、多少の損害を忍んで、煮え切らない講和をやるかも知れない、前途の事は殆んど豫測することは出來ないが、何れにしても此の戰爭が永く續けば續くほど、日本の利益である、是れ迄歐洲の勢力が東洋を壓迫した事は、日本に取て至大の苦痛で有つたから、歐洲の列强が相戰ふて、其の壓迫力を減少する事は、日本に取て此上もない幸と謂はなくてはならぬ。

狼狽せる袁世凱

此の大亂に際會して、一番狼狽して居るのは、支那の袁世凱で有らふ、本來歐洲の强國が相戰ふて、其の東洋に於ける壓迫力の減少するを喜ぶの情に於ては、日支兩國民共に相同じかるべき理屈で有るが、袁氏が

現在の實情は此の壓迫を嫌ふよりも、寧ろ之を利用して自分の地位を保持して居たので有るから、此の歐洲の戰爭を聞て狼狽せざるを得ないのだ、抑も彼れが滿洲朝廷を倒して、天下を其の掌中に握る迄には、あらゆる機關を利用することを務めたが、其の最も多大の援助を受けた者は、歐洲列强の力で有つた、彼れは巧みに列國を操縱し、彼等の野心を利用して、自家を助けしめた、先づ財政の點に於て、列强が彼れを助けなかつたならば、彼れは今日迄其の政府を維持することは出來なかつたので有る、列强は大陸に於ける其の勢力を伸張せんが爲めに、爭ふて彼れに金を與へて、彼れを助けた、又其の行政機關を運轉するに付ても、彼れは列國から顧問を聘して、其の智識を利用して居る、更らに其の內地の民心を威壓する上に於ても、列强の兵力を利用して居る事は事實て有る、第一革命亂の時に、獨逸の將校は袁氏の依賴に應じて、湖北へ遠征したが、第二革命亂の時にも、英獨其他の列强は、間接直接に袁政府に應援の力を與へた、試みに今日北京天津の間から、列强の駐屯軍を全部撤退したならば、最早や此の地方の秩序を保持することは出來ないて有らふ、されば袁氏は列强の壓迫を恐れるよりも、寧ろ之を歡迎して居る實情である、特に此の列强の數の多いことは、之を操縱する上に於て、便宜が多いのである或る一國が强大になつて、單獨て彼れを壓迫するならば、彼れは最早や其の强國の奴隷となつて、唯命是れ從ふの外はない、幸ひに五六國乃至七八國の强國が有て互ひに野心を包藏して、相爭ふ者だから、袁氏は得意になつて其の間隙に乘じ、或は遠交近攻の法を用ひ、或は用夷制夷の術を施すことが出來るのだ、然るに今や此の列强が互ひに相爭ふ事となつて、東洋の事などは暫らく之を顧みるの遑がなくなつたと云ふのだから、袁氏は狼狽せざるを得ない、極めて卑近なる例を以て之を說明するならば、賤妓が多數の客を操縱して居る樣な者だ。客が多くして、彼女の歡心を買はんことを爭ふて居る間は、彼女は收利も多くして得意て有るが、其の客が互ひに喧嘩を始めて、彼女を顧みるに遑

がなくなつた時には彼女は狼狽せざるを得ないので有る。

得意の米國

歐洲の列强が大戰爭を開始した事は、日本に取て幸ひて有る如く、米國に取ても此上もない事だ、日本も貿易が一時杜絶したり、借金が出來なくなつたりして、多少困まることもないでもないが、大局から達觀して大幸て有る如く、米國も經濟上歐洲との關係に於て、困まることも有るに相違ないが、大局の上から打算したら、得意て有るべき筈だ、歐洲列强が互ひに爭へば、負けた國は勿論悲慘になり、勝つた國と雖も、其の創痍は三年や五年て癒える者てはない、特に一旦敵を打ち倒した上は、仇持ちとなつたのだから、決してウカ〲して居ることは出來ない、ソコて彼等は當分遠方へ手を伸ばす力が乏しくなる、此の時に乘じて世界を横行濶歩すべき者は米國て有る、歐洲の大戰爭で一部の米國人は打擊を受ける者も有るに相違ないが、多くの米國人は諸種の物品を賣り込んで、巨利を博し、其上に最早や自國の外は世界に强國なしと云ふ顏附きをして世界に雄飛する事になるで有らふ、袁世凱が逸早くも米國の鼻息を伺ひ、天下に信賴すべき者は、貴國の外にあらずとの甘言を以て、彼れに媚を呈して居るのを見ても、今後に於ける米國の勢力を想像するに難くはない、今は幸ひに平和主義のデモクラット黨の天下だから、未だ甚しい亂暴もやるまいが、四五年の後に共和黨の天下が來て、西半球のウヰルヘルム二世とも謂ふべきルーズヴエルトでも大統領になッたら、それこそドンな事をやり出すやら分らない、墨國などは瞬く間に潰されて、パン、アメリカニズムは實現され中米南米の諸國は悉く合衆國に併合されるかも知れない、若し今回の戰爭で英國が弱くなッたなら、加奈太も併合されるかも知れない、南洋方面に於ても僅かにヒリピンの一角で滿足することなく、其の手を諸方へ伸ばして來るで有らう、支那にも領土を求めて、星の附いた旗は、東洋に於て威風の當る可らざる者となる

かも知れない、自分の國へは日本人や支那人を容れることを拒絶して居るが、東洋へは無遠慮に押し込んで、其の靴の下に各地を蹂躙する事となるて有らふと思はれる。

日本の執るべき道

此時に當て日本は如何にして宜しきや。

現大隈内閣は膠州灣を其手に收める方法を執ッた、但し侵略主義に非ずして、支那へ還附する目的を以て之を其の手に收める事としたが、之れて日本國民は滿足して居られるだらふか。

或る突飛なる先生は曰く、此の際日本の陸兵四五個師團を歐洲へ送くッて、英佛露白を助けて、獨墺を撃たしめては如何と、然かし之れは餘まりに突飛な話で、我輩は賛成することは出來ない、それよりもモット何か良い智惠が有りさうに思はれる。

或は曰く、英露兩國をして南滿洲及び東蒙古に於ける日本帝國の優越權を承認せしむべしと、之れは良い考案て有る、外交當局者が今日に於て、之を行ふならば必ず成功すべき見込みは有る事だが、謙遜にして取る可き者をも取らざる美徳を有する我が政府が、果して之を行ひ得るや否やは疑はしい。

それに南洋が又一問題で有る、日本の南進論者は北方に於て日本の勢力範圍を擴張することはドウでも良いが、是非共南方へ伸びなくてはならぬと唱道して居る、然るに英國は日本の南方へ伸びることを希望しない、現に今回も臺灣以南は、英國に於て其の保安に任ずるから、日本から手を出して貰ひたくないと言て居るさうだ、特に米國と云ふ者が、ヒリピンに控へて居て、日本の南下に對しては、絶對に反對の眼を光らして居る、若し今回の大戰に獨逸が勝つて和蘭を合併するならば、南洋に於ける蘭領は自ら獨領に流れ込んで、日本の南方に進むべき路は、堅固に閉塞されるで有らうが、日本國民は決して北方ばかりに進んで滿足すべき者ではないから、此の際臺灣以南へ手を伸ばしてはならぬと云ふ制限を甘受するのは、聊か考へ物で

有ると思ふ。

膠州灣の價値

然かしながら我輩は決して獨逸領膠州灣の占領を非難するものではない、膠州灣の價値は何人にも讓らざるほどに十分に之を認識する者で有る、獨逸が之を租借して以來、其の經營に費やしたる所は、少くも二億マルクを下るまいと思ふ、我輩は明治四十三年に親しく此の地方を巡視したが、當時獨逸の官憲の語る所に依ると「同年迄に一億八千マルクを注入したが未だ年々不足で、收支を償ふことが出來ない、此の年度にも獨逸本國から七百萬マルクの補助をする事になつて居る」と云ふ事で有つた、されば其の以後の不足額を合算すれば、ドウしても二億マルクは下らない計算で有る、之れは獨逸政府が支出した額で、其の外山東鐵道會社、山東鑛山會社、屠畜所、絹糸紡績會社、麥酒會社等を初め民間の富豪巨商が、此等の地方的事業の爲めに費やしたる資本は、又多大なる者で有る、而して十七年間の努力を積んで作り上げた所の、此の一都會は東洋に於ては多く其の比を見ざる美しき市街で有る、道路、水道、下水道、公園、ホテル、會堂、學校、病院、政廳等すべて文明の諸都市に必要なる機關は、悉く整頓し、港埠も立派なれば、市街も立派な者で有る、香港が英國の都市のサムプルで、哈爾賓が露國の都市のサムプルでホノルヽが米國の都市のサムプルで有る如く、青島は確かに獨逸の都市のサムプルで有る、而して此等のサムプルの中では、最も注意されたる者で、それだけに善く出來て居る、アレを日本人が占領して、支那から其の租借權を繼承するとすれば、決して惡るい話ではない、特に夏季などは良い海水浴場が有て、大磯や逗子よりも諸般の設備が整ふて居るから、日本の富豪などが此地へ別莊を設けて、夏季の避暑地にしたら、定めし愉快な事と思ふ、或は曰く、山東省は地が瘠せて居て、過剩の人口を養ふだけの物資がないから、滿洲への出稼人は、多く山東人で有る、アンな所を貰らふた所が却て厄介で仕方が有るまいと、滿

洲へ出稼人の多數が山東人で有ることは事實だ、然かし山東省の土地が、物資に乏しいと云ふことは事實でない、之れは支那人が開拓の道を知らないからで、現に獨逸が採堀すれば濰縣でも博山でも、立派な石炭が澤山に出て、市場の一勢力となつて居る、獨逸人は山東省の禿山へ殖林をして、百年の長計をして居る、昔は文明の彬々たりし齊魯の地豈物產の開拓すべき者なからんや、之を開拓して良い政治を施すなら、一大王國を建設することも出來る所だ、舜の耕した歷山は、濟南府に在りと山東人は言て居る、顏眞卿は平原縣から出て、諸葛孔明は沂州府より現はれた、何れも山東人て有る、有名なる泰山も有り、泰山の麓の曲阜からは大聖人孔子も生れた、昔から立派な國て有つた山東省は、今ても立派な山河て有る事は、我輩が實地を踏査した實驗上から保證する所て有る。

或る軍人は曰く、山東省を取つた所が、軍事上格別の必要を感じないと、コンな馬鹿な事を言ふ軍人は、支那の事を語る資格はないと謂て宜しい、北京を衝くに最も近い所は山東省だ、故に山東省の向背は、天下を制するに足ると謂ても良い、義和團は山東省から起て、北京へ乘り込み、終にアレだけの大亂を起した、袁世凱が革命亂に乘じて、天下を取り得たのも、彼れが曾て山東巡撫として、山東の民心を收攬し、當時山東の第五鎭が彼れを助けて居た力が多大て有つたてはないか、或る强國が山東省を手に入れたら、支那大陸を制すべき大なる勢力を得た者と見て良いのだ、現に獨逸が此の地方を占領して以來、津浦鐵道の北段を手に入れ、漸次に河南へ伸びて往かふとして居たてはないか、此の膠州灣を起點として、山東省一帶の價値が、軍事上からも經濟上からも重大なる者て有ることは、天下の公認する所て、今日之を必要がないなどと云ふのは、全く支那を知らざる者の言て有る。

支那動亂の兆

今回歐洲の戰亂が如何に發展するやは、今後の問題て、それに依て支那大陸の情勢も、激變を來すて有ら

ふから、何人も豫言は出來ないが、さし當て袁世凱は第一に金に困まるて有らふ、日本も外國から借金をすることが出來ないので、少からず困却するだらふが、袁に至ては日本以上の困難て有らふ、何はさて置き兵隊の給料だけは遣らねばなるまいが、若し此の戰爭が半年以上も繼續したならば、袁は兵隊の給料を拂ふ金にも困まりはしまいかと思はれる、多少は米國にても泣き附いて融通もするかも知れぬが、米國も店は未だ新らしくて、昨今金貨が盛に大西洋を横切て歐洲へ飛びつゝ有る所だ、支那へ貸すだけの餘裕が有るや否やは覺束ない、日本ても貸してやりたいは山々だが、此の貧乏世帯ては纒まつた金を貸すことは出來まい、袁氏にして既に借金の道なしと來たら、それこそ其の光榮ある地位を保持することは出來なくなるて有らふ、彼れ既に金力なくして兵を養ふ能はずとなつたら、大陸の動亂は又手が着けられない者となるで有らふ、或る人の調査に依れば、本年一月一日より六月三十日に至る半年間に、支那大陸に起つた大小の變亂は、七百七十九件となるさうだ、詳かに之を表示すると、一月が九十八件、二月が百〇四件、三月が百十七件、四月が百三十七件、五月が百六十件、六月が百六十三件て有る、之を日割にすると一日平均四件强と云ふのだから、支那大陸の變亂は、決して珍らしい者ではない、之れは政府へ報告の有つた者ばかりて、此の外僻遠の地て、ドンな騷動が有るやら分つた者ではないから、支那の動亂と云ふ事は、日本人の頭腦ては一寸理解の出來ない者だ、此の現象は今日に始まつたことでなく、滿洲朝廷の時代から同じ事て、地方の暴動は年中絶へた事はなかつた、然かしソコは支那式で、極めてノン氣で悠々たる者て、日清戰爭の時ても南方の支那人は、少しも知らず、我れ關せず焉と濟まして居た位だ、況んや內地の小暴動位は何とも思ふては居ない、巡査が人民と喧嘩をしても、大騷動になる神經過敏な文明人ては、殆んど理解の出來ないほど、ノン氣を極めたる人民だから、少々の變亂ならば、敢て驚くに足らないが、いよ〳〵袁政府が持ち切れなくなつて、又

もや革命の動亂が起ると云ふ事になると、四百餘州はさながら麻の亂れたるが如くなり、殆んど手を着くるに由なき情態となるかも知れない。

日本の大責任

事已てに此に至れば、東洋の平和を其の双肩に荷ふて、十分責任ある活動をなすべき者は、日本帝國の外にはないワケて有る、獨逸が膠州灣を失ふ事は、既定の運命て有る、彼れ既に其の根據を失ふた以上は、東洋には發言權が無くなつたと見て宜しい、縱令歐洲大陸に於て戰勝を博したとしても、其の勢力を東洋に迄も伸ばして、我が日本に一擊を加へる事の、當分不可能なるは明白だ、英佛露の三國も若し今回の戰ひに豫定の如き大勝を博收した所が、獨逸墺太利と云ふ大敵を前に控へて居て、其の復仇戰が何時開始されるかも分らないと云ふ形勢の時に、東洋に於て強い發言は出來ない筈だ、獨り手の着けられないほどに威張り出すべき虞れの有るのは米國てある、何しろ突飛を以て知られ非常識を以て名高い此の國の事て有るから、ドンな事を發言し、如何なる無法なことを行ふやら分らないが、然かしながら米國の恃む所は、其の海軍ばかりて有る、陸兵はマルてお話にならない、特に其の海軍にした所が、噸數ばかり巨大でも、海戰の實力に於ては、大して恐るべき者とも思はれない、故に大概の事は忍耐して米國と協同して、大陸の秩序を保持するに務めても良いが、いよ〳〵無法の事を言ひ出せば、止むを得ざる場合には、斷乎たる決意を以て、日本が單獨に支那問題を解決する責任を取る事にしても良いと思ふ。

列強と支那

露國は負けても負けない國て有る、消極的に強い事は世界第一て有る、若し獨逸が佛國を打ち破ぶる事は有ッても、ザア、ニコラス二世を降服せしむることは、絕對に不可能の事と思はれる、されば此の戰局が如何に結着しても、彼れが勢力範圍とせる伊犁、蒙古の方

面から、北滿一帶に於ける勢力は、牢乎として動かし難い者と見て宜しい、英國も陸上ては獨逸を制する力は有るまいが、其の優勢なる海軍力は、孤島を守るに餘り有る事と思ふ、然かし獨逸が若しも大陸の陸戰に大勝を占めたならば、埃及や印度は或は危ふいかも知れない、埃及は土耳其が煽動し、印度は煽動者なくして爆發するかも知れない、何れにしても英國の西藏經略は此の戰爭の影響を受けて、近き將來に大なる發展をなし得ない事となるて有らふと思はれる、其の代りに獨逸の東方に於ける勢力が失墜する結果として、揚子江沿岸に於ける英國の勢力は一進するかも知れない、佛國が此の戰爭に勝てば、雲南一帶に手を伸ばすて有らふが、不幸にして失敗したならば安南、東京及び廣州灣を維持する事は、必ず困難になツて來るて有らふ。

日本の覺悟

此の如く世界の大勢を觀測して見たなら、日本の執るべき道は、第一に北方は南滿と東蒙を勢力範圍となし第二に山東省の獨逸の勢力範圍を其儘讓り受け、第三に南洋に進展すべき方略を講究すべき者と考へる、而して若し袁世凱が其の統一の政治に失敗して、大陸の大動亂を惹き起すと云ふ場合が來たならば、猶豫なく此の四百餘州の秩序を保持すべき方法を執らなくてはならぬ、玆に一の注意を要する事は、日本の政府當局者が先天的に恐白病に罹て居る事だ、彼等は日本國民の力を自覺することなく、常に列强の鼻息を伺ひ、一々歐米列强の指揮を受けて進退して居る、之れては何事も出來るワケがない、日本は須らく東洋の盟主て有ると云ふ自覺の下に、思ひ切て進展する方策を定めなくてはならぬ、若し此際姑息な考按を抱て、グズグズした量見て居るならば、折角國運を發展せしむべき機會を逸して、永かく大和民族の頭が昂がる時がない事になるかも知れぬ、我輩は歐洲大戰の報を喜び、其の東方に及ぼす影響を考へ、此の機會に於て日本國民が大活動を試みんことを望んて止まない者て有る。

文明史的國際史的に觀察したる歐洲戰爭

（維廉二世を中心として立論す）

茅原華山

第一　民族的生活競爭

「豫期した如くに」歐洲戰爭は起れりといふは、聊か強いて自ら先見の明を衒ふものではあるまいか、去りとて苟も少しく國際政治を學んでゐた者には、決して「全然待設けなかつた戰爭」ではない、獨逸のベルンハーディ將軍の議論の一節を聞いたものは、歐洲戰爭が起つたとて假に驚く必要はない、要するに百年の前、ナポレオン戰後維納會議以後に蓄積せられた歐洲に於ける民族的葛籐、經濟的競爭が遂に此戰爭を惹起したものだといへる、然り私は民族的葛籐、經濟的競爭といふ、ボスニヤ州のサラウエヴオに於ける塞耳比亞刺客の二發の彈丸が墺國の皇嗣フエルデイナンド太公及びホーヘンベルヒ公女の肉を貫いたのが、即ちこの戰爭の口火であつた、何故に塞耳比亞は墺國皇嗣を喜ばぬか、塞耳比亞人はオブロナ、オドブラナといふ秘密大結社を結んで、墺國に於けるスラヴ人を併せて新なる大塞耳比亞國を作らんとの雄心がある、夢想がある、然るに墺國は Drang nach Asten（東方强進）を標語としてサンジヤク、オヴ、ノヴイ、バザーから今は巴爾幹亞土耳格を其掌握の中に收めんとする雄心がある、夢想がある、之を普通に總獨逸主義といふ、戰爭の原因は全く民族的競爭ではないか、何故に民族的競爭が起

るか、民族的生存競爭の劣敗者と爲つて日に凋落して行くアイヌの如き、若くは全く民族的自覺のないラプランド人とかエスクイモウとかいふものはいざ知らず、苟も民族的自覺のある者は一民族としてヨリ強くヨリ自由にヨリ豐富にヨリ充實した生活をしたいといふ一念禁ぜられない、故に民族的競爭は究竟するに民族の經濟競爭である、民族の經濟競爭は之を民族の生活競爭だといへる、此意義は近世に至つて益々明に爲つて來た、古に於ては帝王英雄の個人的雄心が戰爭の動機であつた場合は決して寡くはないが、其根底には何處にか乾度其帝王英雄の率ゐる民族の生活があつた、近世に於ては民族の生活が主に爲つた、故に古の戰爭は或帝王或英雄が或民族を率ゐて戰ふ戰爭であつたが、今の戰爭は或民族が或帝王或英雄をして戰はしむる戰爭に爲つた。

此點から言へば、銃殺せられたと傳へらるゝリープクネヒト等に率ゐらるゝ獨逸の社會黨は姑く置き、獨逸國民は其向上的生活の爲めに戰つてゐるのだと言へる、そして維廉二世は此獨逸國民の雄心を人格化したるものだと言へない譯はない、私は心からして獨逸人を好まぬ、維廉二世は天才と見られないでもないが、狂人と見られないでもない、然れども歷史家として文明批評家としての立場からは、之を認識して置くだけの雅量がなければならない。

第二　莽として秋ならんと欲す

今に於て歐洲の戰局及び政局を揣摩せんとするは、恐らく維麗二世が露英佛白を向ふに廻はして戰ふよりも突飛である、私は此言論に對して將來私が拘束せらるゝものでないことを斷つて置くと共に、私は「中央公論」の爲めに私の手で蒐集し得るだけ材料を蒐集し、之を咀嚼し得られるだけ咀嚼して、始めて筆を執つたものであることを明言する。

私は七月二十四日新潟縣に招聘されて講演に行つた、越後だけで濟ます積りであつたが、佐渡へも行かねばならなくなつた、毎日々々揮毫と講演と懇親會と

で忙しく暮らした、勿論新聞などを讀む暇はなかつた、佐渡は相川の客樓で七絶を作つた、今から思へば或は戰爭を直覺したものかも知れない、相川は金を産するので有名である、其詩に曰く『萬里玄溟百尺樓。星斗近傍ニ斗牛ニ流。夜空金氣連レ雲動。靺鞨俄羅莽欲レ秋』夜空しく金氣雲に連つて動き、靺鞨俄羅莽として秋ならんと欲す、全く戰爭の預言である、八月五日新潟市に戻つて始めて歐洲戰爭が始まつたことを知つた。

第三　意外の事で又豫定の計畫

この戰爭は維廉二世の豫定計畫であるであらうか、將た彼れ自身に取つても意外の時に意外の事を仕出かしたるものであらうかといふのが、先づ何人にも起つて來る最初の問題である、私は維廉二世に取つても意外の事であるが又同時に言ふまでもなく豫定の計畫でもあると言ひたい、何故に意外の事であるか、誰か墺國皇嗣が其妃と共に某月某日（六月二十八日）ボスニヤの首府サラウエヴオなるフランツ、ヨセフ町に於て刺客の彈丸に斃るべきを豫知するものあらんや、然れども維廉二世が歐洲戰爭を豫期しなかつたといふは、彼れをナポレオン三世以下に見縊る所の議論である、露國と開戰すれば、佛國の之に加はる位は、日本人で新聞を讀むの能力あるものは之を知つて居る、ベルンハーデー其他獨逸人の歐洲の國際戰局國際政局に關する著述論文を點檢すれば、英國が獨逸對露佛の戰爭に參加した場合には如何するといふやうな戰略を詳しく論ぜられてゐる、例へば獨逸の北海岸は水淺くして大艦隊の侵襲に便ならず、獨逸は其艦隊をウイルヘルスハーヘン、若くはエムデン、若くはキールに潜め、機を窺ふて水雷の攻撃を試むべしといふやうなことである、加之ならず、維廉二世が其海軍大臣チルピット提督と共に鋭意海軍を擴張せられたのは、専ら英國と衡を海上に爭はんが爲めなるのは、維廉二世が固より熟知するのみならず、英國も亦固より之を熟知してゐる筈だ、維廉二世は英國が傍觀者たる態度を取ると考へて此大戰爭を開始したものと何うしても受取れぬでは

ないか。

伊太利が此場合中立の態度を執るといふことも維廉二世が全く豫期しなかつたことゝは言へないのは、現に私が歐洲に居つて國際政局を學びつゝあるに際しても、伊は歐洲の戰爭にして若し夫れが獨墺對露佛英の戰爭ならば、寧ろ獨墺に負くも誓つて露佛英に負かずと日記に註釋して置いた位だ、羅馬の外交を動かすものは倫敦だと言はれてゐる、北阿非利加のチュニスが佛の手に歸した當時は伊は深く佛に銜む所あり、ビスマルク公之に乘じて伊を獨墺同盟に誘ひ入れたのであるが、伊は既に北阿非利加のトリポリに於て志を得た、伊佛は均しく羅典民族である、其意氣相投ずるは爭はれない、墺伊は歷史的に宿怨のある國で、墺國のアドリアチック沿岸には伊太利民族が生活してゐる處がある、トリエストは即ち其中心である、伊國は之を稱してイレデンタ、イタリアナ(未だ恢復せられざる伊太利)と言つてゐる、墺國人は此地方に於ては他のスラヴ民族よりは伊太利民族を虐待するの風がある、巴爾幹に於ては墺伊は一つの利益を二つに分たうとするのであるから無論利害の衝突がある、アルバニャ公國は墺伊の協議で樹立せられたのであつたが、塞耳比亞の南下を防ぐまでは一致したが、公國を樹立して見れば、互に反目することに爲る、殊に先年、露國皇帝は伊王をラゴニギに訪問した時には、態々近路たる墺國を通らないで、獨佛を遠廻りせられた、墺國は怒る、伊國は喜ぶ、これが同盟國とは何うしても見えなかつた、クリミヤ戰爭に際し、英佛聯合軍が露と戰ふや、人あり伊國最大の政治家カーヴールに問ふに伊國の態度を以てす、彼れ答へて曰く「伊太利は伊太利自身の爲めに活動せんのみ」と言つた、伊太利が事あるに方つて伊太利自身の爲めに活動すべきは維廉二世の知らない譯がない、獨墺伊三國同盟の内容は秘密に附せられてあつて、私は之を知らないが、三國が一つ紙に記名してゐるのではない、獨墺同盟の外別に獨墺伊の同盟があつて、之が普通に獨墺伊三國同盟といはれてゐるので、而も伊太利は獨墺が攻勢を取る場合には之を援助する

義務はない、獨墺同盟は攻守同盟だが獨墺と伊との同盟は防禦同盟だといふことをして異ならしめば、伊太利が此戰爭に對して埒外に立つのも決して不意の出來事とは言へぬやうだ。

此春のことゝ覺ゆ、刺客の彈丸に斃れた墺國皇嗣が獨逸の海軍大臣チルピッツを維納に呼寄せた、或新聞はこは單に皇嗣が獨逸海軍の元勳たるチルピッツの顏を見たい爲めに過ぎないと言つたが、他の新聞はさうではない、一旦歐洲に事あるや、獨墺は其食料品工業原料品をアドリヤチック海から輸入せんとし、又佛國の阿非利加ザアーヴ（兵の名）を佛本國に輸送するを妨害する計畫を研究するが爲めだといつてゐる、然るに開戰と爲るや否や、獨逸の地中海艦隊に屬するゲーベン、ブレスラウの二艦がアルジエリヤのボーンヌを砲擊したではないか、獨り獨逸といはず、歐洲の列國が大戰爭を豫期して其計畫に餘力を餘さゞりしは、唯此一事を見ても之を知るに餘師があるではないか。

獨逸が三年後に成就すべき露國の軍備擴張に先ち、佛國の三年兵役案が未だ實現せざるに先ちて、一擊を兩國に加へんとするの心ありしは、公然の秘密であつたではないか。

第四　狂を生じた豫定計畫

去りながら維廉（カイゼル）二世が此刹那、露佛と併せて英國までも相手にして戰ふ積りであつたか何うだか、第一に露國はボスニヤ、ヘルツエゴヴイナ合併當時の如く、獨逸の一喝に會うて避易すると侮つて、反つて自ら宣戰を布告せざるべからざる羽目に陷つたのではあるまいか、縱し露國との開戰は期して居つたとするも、英國まで之に加はるとは思はなかつたではあるまいか、此疑問に對しては私は俄に答へられない、獨逸の新聞記者ウルフ氏は一九〇八年以後の露國は復た曩昔の露國にあらず、何時にても乾坤を一擲するの用意と精神とありと言つたのを見れば、獨逸は如何に倨傲なりとも此回も亦恫喝で露國を引込め得るゝのとは想像しなかつたかも知れないが、英國には愛蘭自治問題が遂に

内亂までも醸さんとする狀態に立到つてゐたのであるから、聰明なる維廉二世(カイゼル)も英國は或は戰鬪に加はらないであらうと速斷したかも知れない、要するに之は歐洲の新なる報導を點檢しない間は何とも斷言するヿが可能ない、若しこゝに維廉二世の手落ちがあるとすれば、私は歐洲大火(ユーロピヤン、コンフラグレーション)の責任者たる維廉二世の立場から觀察して、此戰爭は彼れに取つては意外の機でそして豫定計畫で而も其豫定の計畫に狂ひを生じた豫定計畫であると言ふて置くのが最も安全だ。

今年に至つて英國皇帝が巴里を訪問せられる、佛國の『强き大統領』(タイムスの形容を用ゆ)ポアンカレーは露都を訪問する、佛國は露國と海軍の協約までも締結した、歐洲の風雲は私が歐洲に居る時分から動いてゐて、何時火藥庫に點火せらるるかも知れなかつたのだ、今に於ては二發の彈丸が歐洲の大火を惹起すも決して怪しむに足らない、序でながら私は英露の間には海軍協約があるとは信ぜられないが、三國協商が近ごろに爲つて益々鞏固を加へて來たのは明かで、英國が露佛の戰爭に參加すべきは、モロッコ事件の際でも既に克く證明せられてゐる、露國は二州合併の怨恨が骨髓に徹してゐる、佛國は一八七〇年の事は言はず、近くモロッコ問題がある、獨逸皇帝の爲めには其外務大臣デルカッセを免ぜねばならなく爲つた、英國が獨逸海軍の勃興、獨逸商業の發展を忌むこと一日にあらず、折があつたならば、其羽翼を削いで遣りたいといふ氣分が滿ちてゐた。

第五　戰局と政局との貫徹的觀察

何人も先づ知りたいのは、獨墺が勝つか將た三國協商側なる露佛英が勝つかといふことである、何人も到底これを知り得ることは出來まい、且つ獨墺が勝つか露英佛が勝つかと考へるのは、或は餘りに單純なる思想(イオナ、シンキング)の方法ではあるまいか、佛英白の聯合軍に對しては、獨逸が敗けるか聯合軍が敗けるかといふ豫斷を下せぬことはないとしても、露國に對しては墺は敗れ獨

は勝つといへぬことはない。

戰爭を單純に考へてならないのみならず、國際の關係をも決して單純に考へてはならない、獨墺は何處までも進退を共にすべきものとするのは、猶一理があるが、其れさへ到底二國である、最後まで屹度利害を一にすべきものとは考へられない、私は固より獨墺が進退を共にするのを希望してゐるが如くに、三國協商側も終始一國の如くに戰闘して首尾よく獨逸を征服せんことを祈つてゐるが、伯林會議の例を見ても、列國は各々その利害に依つて動くものであるから、戰爭の進行に依つては三國側と雖も自然その利害を異にするに至るかも知れない、戰爭の勝敗を見るのは一つの大事であるけれども、張膽明目して國際關係の推移變遷を察するのは更に他の大事である。

第六　天才か狂人か

維廉二世は果して天才であるであらうか、或は狂人であるであらうか、天才と狂人とは似て非なるものであるが、そのよく似てゐることは爭はれない、或る新聞記者が維廉二世を評して『彼の存ずる限り、世界は新聞種の少なきを憂へず』と言つた位で、彼は實に八面玲瓏の天才であると評せられた、そして維廉二世の一生はこの歐洲戰爭に於てその絕頂に達したと言つて差支はあるまい、彼は自ら狂人に似たる天才であると自證するか、或は天才に似たる狂人であると自白するかは、この數日、この數週、この數箇月にある、この點から言つても歐洲の戰爭は深い深い興味のある戰爭と言はねばならない、第一は、維廉二世が即位以來二十六年祖國の爲めに努力をしたその努力の蓄積が、烟になるか物になるか言ひ換へれば、二十六年の努力と計劃と經綸とを棒に振るか振らぬかといふ九死一生の場合である、七轉八起の時代である、第二は、ホヘレッオルレン家の興亡を賭した戰爭である、維廉二世は死の手の上にその王冠を載せて戰ふてゐるのである、若し戰の好運が維廉二世の上に落ちて來なければ、維廉二世は帝王の身をもつて江湖の間に流落しなければならなくな

るかも知れぬ、ブールボン王家の如くならなければならなくなるかも知れぬ、ナポレオンにならない中に、セントヘレナになるかも知れぬ、第三は現代の獨逸帝國は普魯西（フロイス）を中心とした聯邦組織である、今の維廉二世の如く歐洲列國を敵として七年の戰爭を續けたフレデリック大王の昔は暫く措き、現代の獨逸帝國は、今の維廉二世の祖父なる維廉大帝（ヰルヘルムデア、グローセ）に至つて始めて實現されたのだ、一八六四年丁抹と戰ひ、一八六六年墺國と戰ひ、一八七〇年佛蘭西と戰ひ、所謂鐵と血とを以てこの獨逸帝國を築き上げたのだ、維廉二世は更に鐵と血とをもつてこの帝國を大にするか將た鐵と血とをもつて普魯西の兵を窮め武を瀆し權威を剝落せしめて少くとも獨逸帝國の改造を餘儀なくせしむるに至るであらうか、何人もこの瞬間には答へられぬ問題であるが、何人も一瞬間も早く知りたいと焦る問題であらう、獨逸國民は假りに伯林城下の盟を爲すべく三國聯合軍の爲めに餘儀なくせられたとして、獨逸國民はナポレオン一世の爲めに蹂躙せられた後の普魯西（フロイス）の如くに、スタイン、ルーンの如き英雄を出し嘗膽臥薪の態度に出づるであらうか、然らずして國民の浪漫的雄心茲に消滅して和蘭人の如く白耳義人の如く瑞西人の如く瑞典人の如きに個人的自由を享受して、平和且つ豐富なる市民的生涯を營むを以つて滿足するに至るであらうか、何人もこの瞬間には答へられぬ問題であるが、何人も一瞬間も早く知りたいと焦慮（あせ）る問題である。

第七　維廉二世の宿志

蓋し維廉二世が胸中に蓄ふる平生の志は斯うである、祖父維廉一世は獨逸を歐洲の强國にした、歐洲の最大陸軍國にした、我は獨逸を世界の强國に爲さねばならぬ、世界の最大海軍國に爲さねばならぬ、祖業を繼承して更にこれを恢弘するといふのである、一八九五年三國干涉の記憶があり、我々の同情は獨逸に赴き難いとしても、帝王としての維廉二世の志はこれを諒としてやらねばならぬ。

果して然らば維廉二世の指す敵は露に非ず、佛に非

ず、全く英國に在りと言はねばならない、この戰爭に英國の參加したのは、維廉二世の意外とした所か否かは別問題として、彼が平生の志からして英國が當の敵であるといふことは何人も爭へない。

第八　維廉二世の戰略如何（一）

獨逸の戰略に就いては世論は大抵一致してゐるやうである、維廉二世は先づその最も快速なる動員機能を利用して一氣に佛國を屠り、再び巴里城下の盟を爲し、勝に乘じて馬首を回し、露國と決戰して聖彼得堡(セントピータースブルグ)に至るのである、白耳義に於て容易に白耳義の要塞を拔く能はざるは、即ち彼が戰術的遺算であつた、私は今これを細かに分析研究して見ねばならない、白耳義に於て戰術的遺算のあつたことは、獨逸の平生の傲慢な態度から推測して見ても、容易に打ち消されぬやうである、獨逸の傲慢を以つてしては、白耳義の如きは一氣にして屠るべしと爲したかも知れぬ、然しながら戰術的遺算は必ずしも戰略的遺算ではない、且つ維廉二世の戰略は世論の一致してゐるが如く果して巴里城下の盟を爲し、併せて聖彼得堡城下の盟を爲すのであらうか、彼は果してかゝる浪漫的な夢想を抱いてゐるのであらうか、かゝる中世紀的な幻影を追ふて走りつゝあるのであらうか、巴里城下の盟を爲した所で、獨逸に取つて果して何の利する所があらうか、重ねて五十億フランの償金を取つた所で、獨逸の物價は騰貴して、それ丈けの黃金は直ぐ國外に流失するに相異ない、若し得る所ありとすれば、佛國の殖民地を讓與せしむるに過ぎないが、然し獨逸は佛國をしてその殖民地を讓與せしむるまでに打擊を與へることが出來るであらうか、私は曾つて維廉大帝が一八七九年に於て比斯麥(ビスマルク)公に與へた親書を讀んだとがある、その意味は斯うだ、モルトケ將軍は將來佛蘭西と戰ふには獨逸一國で足りると言つてゐるが、朕は是非墺國の同盟がなければならないと思ふ、一八七〇年の戰爭は決して繰返へされるのではない、佛國の堤上には新に幾多の堅固なる要塞

が設けられた、我々が重ねて佛國と戰つてこれに捷つとするも、前度の戰に於けるが如く、直ちに長驅して巴里に入る譯にゆかぬ、長驅する代りに包圍せねばならない、「長驅する譯にはゆかぬ、包圍せねばならぬ」維廉大帝は既にこれを知つてゐた、誰れか維廉二世にしてこれを知らずと言ふか、獨逸は既に白耳義に於て要塞攻擊の艱難なるを經驗してゐるが、或る日本の參謀官の言ふが如く、白耳義を攻むるは、所謂陽攻である、その眞意は英佛の兵を玆に集中せしめて、別にその主力を以つてメッツ又はストラスブルグ方面よりして巴里を衝かんとするに在るのであらうか、白耳義の要塞に於てすら獨逸の艱難斯の如しとすれば、獨佛の國境に於ける獨逸の艱難亦察すべしだ、白耳義よりも艱難であるといふのが當然の推測である、假りに白耳義人の勇敢なる防禦に對して名譽を與へるとしても、白耳義と同樣に艱難なるに相違ない、私にして維廉二世の老耄しないことを信ぜしめたならば、私は彼の目的が巴里城下の盟に在るとは信ぜられない。

獨逸の作戰は所謂內線作戰といつて先づ佛國を破り、更に露國に對して攻勢を取るのであると言はれるが、佛國を破るすら難し、況んや露兵を破るに於てをや、白耳義の要塞すら難攻不落なり、佛國の要塞すら難攻不落なりとすれば、最も死守に長ずる露兵をその要塞に纒めておいて、これを短刀直入的に打破するとは殆ど不可能なことである、維廉二世がこれを知らないとは何うしても想像されない、北地寒來る早し、八月の末には北の歐洲では最早その道路の並木に秋風がそよそよと訪れて來る、十月には霜を降らす、軈て北極洋から吹いて來る北風が天に滿つる黃雲を捲いて大雪が紛々として大地を銀化する。

若し獨逸にして果して世論の一致するが如き戰略を取つたとしたならば、私は殆ど斷言するに苦しまない、獨逸は佛國にも捷てない、露國には尙更捷てない、伯林城下の盟を爲すや否やは別問題として、獨逸には全く勝算がないと。

斯の如くにして、獨逸には全く勝算がないと言へば、

通り一遍の世論に裏書きしたまでゝ、何も私が故らに書き立てる必要はない、私は更に別箇の觀察點から一瞥して見なければならない。

その前に一寸言つて置かなければならないことは、獨逸は海上の交通を斷たれ、大陸に孤立する結果として先づ胃の腑が日々空虚になるのに耐へられなくなるであらうといふ觀察である、これも先づ何人の頭にも上つて來る問題であるが、若しこの戰が三兩年も繼續する事となれば自ら別箇の觀察をしなければならぬが、この戰は歐洲に於ける生活狀態、經濟狀態から觀察して、或は半年位で濟むかも知れない、半年經たぬ中に仲裁が入るであらうといふ說もあるが、決して一年と費るものではない、獨逸は英國と異つて今尙ほ農業國である、麥も出來れば、ポテトも出來る、その同盟國たる墺匈國から肉類と穀類とを輸入するに自由である、獨逸と地續きなる丁抹は英國人からブレーキフアスト、テーブル、オヴ、イングランドと言はれる小さなる大農國である、獨逸がこの國から食物を持來すは、何人も能くこれを防ぐことは出來ない、この外に密輸入が澤山ある、海上の交通を遮斷せられて最も苦しむものは英國であつて、獨逸ではない、最も獨逸が百三十億圓の海外貿易を犧牲にするのであるから、その經濟上の打擊は算定すべからざる程であらふが、これは今問題とはしない。

今一つ言つて置かなければならぬのは、獨逸に於ける非戰熱の勃興である、曩に伯林のウンテルデン、リンデンに於て、非戰黨の示意運動があつたといふが、これは時節柄容易に信ぜられない、英國にも戰爭を罪惡なりとするトルストイ一流の論者もあれば、自分の利害から打算して戰爭を非とするものもある、モーレー卿は辭職した、バーレスも辭職した、非戰議員は自由黨に二十名勞働黨に五十名あると報ぜられた、然しながら英國人は一方に於ては極めて打算的の人間であるが、時としては戰爭精神が火の如くに燃へて來る、さうなると、マイカントリイ・ライト・オア、ロング（善くも惡くも我國）て何處までも戰はんとする、非戰黨は

決してその聲を擧げられない、帝國主義の英國に於てのみならず、社會主義の佛國に於てもジヨーレスが戰神の犧牲に供せられてから、シンヂカリストもソシアリストも殆ど閉息したらしい、獨逸に復讐するとあつては、さうでなければならないが、獨逸に於てもその非戰熱の勃興するのは、第一に獨逸が戰場で大敗した場合であらう、第二に戰爭が永續した場合であらう、之を要するに歐洲一般に非戰熱の勃興し、平和論の高調せられるのは、戰爭の終局せんとする間際、若しくは戰爭の終局以後であらう。

猶一つ、獨逸は戰費に窮するであらふといふ說てある、そして細かい計算を立てる人もある、然しながら私は玆に倫敦エコノミストの說を引用する、『古來如何なる戰爭でも一方の相手が戰費に窮したからとても戰爭を中止したものはない』、戰爭は賭博のやうなものである、賭博師が賭博をしようとすれば乾度何處からか持つて來るといふ諺がある、私はフエヤープレーの主義からして、獨逸が財政で窮死するのを望まない、協商三國も同盟二國も堂々と雌雄を決するが宜しい。

第九　維廉二世の戰略如何（下）

然らば之等の心配を無用として、私は維廉二世が胸中に描くところの戰爭の秘密をX光線にかけて見なければならない、この戰略は到底獨逸皇帝の胸中に描かれてゐる政治の秘策と相離しては正鵠を得られない、我々は維廉二世の政策と戰略とを綜合してその秘密を計かねばならない、維廉二世の志は既に獨逸を以て世界の最大海軍國たらしめんとするに在れば、『獨逸の將來は海上にあり』との言を、自ら欺きたるものならざらしめば、維廉二世の戰略の根蔕は英國を征服するに在りと斷言するより外はない、この戰爭は即ちその第一着手であると斷言するより外はない。その證據は何處にあるかと言へば、獨逸が先づ軍を進めて白耳義を屠らんとすることである。

私は何うしても獨逸の維廉二世は白耳義を合併せん

とするのがその主たる目的ではあるまいかと思はれる、ルクサンブルグの如き小公國は言ふにや及ぶ、白耳義を合併さへすれば、和蘭は自然に獨逸の手に落ちて來る、英國と海上に於て決戰するや否やは、必ずしも獨逸から見てこの戰爭に就いて必要なものではない、白耳義と和蘭とを合併さへすれば、英國征服の目的は既にその大半を達したものと言ひ得るのである。

若し私の無責任で且つ暗中模索ではあるがこの推測が命中つたとすれば、白耳義に於て獨逸と英佛白の聯合軍との間に於ける勝敗さへ決すれば、この戰爭は少くとも一大段落を劃するものではあるまいか。

白耳義は阿弗利加にコンゴー自由國（フリーステート）を持つてゐるが多くの殖民地はない、然しながら白耳義は資本國である、鐵の國である、石炭の國である、工業の國である、白耳義は町ばかりあつて村がないと言はれる位な繁華な國である、獨逸がこれを取れば、四十四年前にアルサス・ローレンを取つたよりも大いなる利益である、白耳義のアントウエルプは宛も釜山の日本に於けるが如く、直ちに英國を望んでゐる、ナポレオンがアントウエルプは英國の心臟に擬したるピストルであると言つた、其處で私は獨逸がその主力を白耳義に集中するの偶然ならざるを知る。

白耳義にして既に獨逸の手に入れば、和蘭は地圖を見れば能く分るやうに、全く甕中の鼠のやうである、獨逸は白耳義を取つてその富を得るとすれば、和蘭を取つてその殖民地を得るのだ、和蘭はその十七世紀に於ける强大の名殘を止めて、世界の海上到る處に殖民地を持つてゐる、その最も著名なのが所謂ダッチ・イースト・インディス＝和蘭領南洋群島である、その散在したる島嶼ではあるけれども、南洋諸島の面積は支那本部と匹敵してゐる、その重な島嶼は皆和蘭領である、最も名高いのがジャバ、スマトラ、セレベス等である、支那本部の富源も無限であるが、南洋諸島も亦熱帶だけに無限である、支那に勝るとも決して劣りはしない、日本がこれに垂涎してゐるが如く、獨逸も亦特にこれに垂涎してゐる、英國と和蘭との間に、和蘭の

殖民地は他に決して割讓買却しないといふ約束があるが、英獨が既に開戰したのであるからそんな約束は反古になる、苟も獨逸にして勝たんか、和蘭の各殖民地＝日本を距る程遠らぬ炎南の水に横り、海は珊瑚の爲めに赤く、山は椰子の爲めに綠なる南洋諸島は遠き北の國なる獨逸に歸して、伊達正宗が圖南鵬翼何時奮、久待扶揺萬里風と言へる詩に依つて表現されたる日本人の雄心(アムビシヨン)と方面(ダイレクシヨン)とは玆にまた一大頓挫をしなければならなくなる。

私は曾て倫敦に於て、獨逸の或る外交官と國際政局に關して大論議を戰はしたことがある、丁度五時間ばかりも繼續した、その際獨逸の外交家の言ふやう、獨逸が和蘭白耳義を合併するのは極めて容易である、日本が朝鮮を合併するやうな無理をする必要はない、日本の國體では人の國を取らんと欲すれば、先づその國の帝王を廢さねばならぬが、獨逸は聯邦國であるからそんな無理は要らない、白耳義ならば王をその儘にし、和蘭ならば女王をその儘にし、その法律も制度も習慣も市役所も郵便局もその儘にして聯邦に加へれば可いのだ、獨逸は唯外交と軍事の大權を收めればそれでいゝのだ、合併するのも容易であるが、合併せらるゝのも容易だ、そして一度此等の諸國を聯邦に加へれば、その屬領は自動的に獨逸の有に歸する譯だと、白耳義は戰爭が證明してゐる通りに、獨逸聯邦の一たることを好まぬが、白耳義には二つの人種がある、一つはウオーレンといつて佛蘭西語を話すが、一つはフレミッシュといつて獨逸と同じくチユートン民族であつて、獨逸と相似た言語を用ひてゐる、その獨逸を最も好まぬのは前者である、後者は徹底非獨逸とは言はれない、和蘭に至つては、獨逸を好くも好かざるも、獨逸の歡心を結ばねばならぬ位置にある、女王の皇婿アルバートは獨逸の或る聯邦の皇族で、獨逸の勢力は上下からしてこの國を浸潤してゐる、獨逸人は何處でもあまり好かれぬ如く、和蘭でもあまり好かれぬかも知れぬが、和蘭はその殖民地の關係から日本を怖れること實に甚しい、そして日本は英國と同盟してゐるから、

自然に獨逸に依つてその殖民地を防禦しようといふ心持ちがある、現につい近頃のことだが、獨逸に於てクルップと竝び稱せられるフルカン會社が、和蘭の一港たるロッテルダムに於て會社私營の上陸地點を得ることになつた、始めてこれを聞いたロッテルダムの市民は大いにこれに反對し、その市長及びその參事會員に迫つてこの契約を取消させやうとしたが、中央政府の命令で遂に許可になつた、この代償として獨逸は和蘭に供給するに最も有力にしてまた最も廉價なる殖民地防禦艦隊の築造を以つてしたとのことだ、孰れにしてもこの戰爭に對し、白耳義の熱烈なる反對と和蘭の微溫的態度とは好箇の反對(コントラスト)を爲してゐると言へる。

維廉二世にして若し能く白耳義と和蘭とをその聯邦に加へることが出來たとすれば、アルサス・ローレンに勝る萬々、これで一先維廉二世も滿足せねばならぬ、獨逸國民も滿足せねばならぬ、

第十　文明史的に觀たる勝敗の曆數

偖て然らば維廉二世は果して其志を逞しくし得るてあらうか、將た聯合軍の爲めに沮止せらるゝてあらうかといふことを眞面目に慮らねばならないが、日本の新聞に現はれてゐる軍人の觀測談は全く舊るい形式と思想とに囚はれてゐて、少しも要領を得ぬ、私は巴里城下の盟も伯林城下の盟も聖、彼得堡城下の盟もないと思ふが、これは何より今少し辛抱すれば解る譯てあるが、私は此問題を決するは、文明史、人間生活史の上から判斷して見るより外はないといひたい、英にせよ佛にせよ、獨逸國民の如くに勇猛精進生命力の橫溢する新なる民族てあるてあらうか、そして英にせよ佛にせよ、果して維廉二世の如くに國民的理想、國民的向上心を人格化してゐる中心人物があるてあらうか、私は英國に人なし佛國に人なしといふのではないが、維廉二世は此點に於て斬然として頭角を顯はしてゐる

は、何人も爭へない所であらう、縱しそれが狂人であつても天才であつても、一方ならぬ狂人である、一方ならぬ天才である。

露國は自ら別に論ずる必要があるが、佛國は最早既に二等國に落ちた國である、近ごろナポレオン以來の休息から起つて、新なる佛蘭西將に生れんとし、ゴール精神は新なる勇氣を以て復活したと言はれる、私も其然らんことを望む、そして實に然りてあらうと信ずるものだ、然しながら私は佛國民の使命は寧ろ獨逸や露國の如き新興國民と共に覇を歐洲に爭ふのではなく、歐洲最古のそして最高の文明國として文學、藝術哲學、法律、發明、科學、趣味、修養を以て更に世界の生活に貢献するのではあるまいかといひたくてならない、帝國主義の國民は自然に武骨に爲る、粗野に爲る豪慢に爲る、物質的に爲る、その婦人までも男化する、古來、其文明を以て世界に貢献したものは、多くは小國である、希臘は其適例である、猶太も亦其適例である、印度の如きは大國なるも、其無邊の哲學は少數貴族の產物である、國家の盛衰興亡、若しくは國威國權とかいふことを規準として見れば、佛國には是非勝たせたい、勝つてアルサス、ローレン二州を取返へさせ、巴里のコンコルドに在るア、ロ二州の女神像から其喪章を取らせたいが、私は佛國が軍國として復活再生するよりも、更に他のベルグソンを產まんことを熱望する、之には佛國はその帝國主義、軍國主義より覺めねばならない、此戰爭に於て佛國の勝は固より人情として祝はねばならないが、敗れたとても佛國は決して大に損ずるものではない。

而も佛國民族は其田園に於て今に尙剛毅なる人間を藏してゐるが、大體に於ては或露人の評した如く藥を以て其生命を持續してゐる民族であることは爭はれない、勝つて又勝ち、敗れて又敗るといふは、何うしても差引勘定が合はない、露國のザールが『我等は七年有半此恥を忍べり』と叫ばれたのは、第二十世紀の痛楚なる雄辯である、獨逸は勝つて又勝たんとするもの、露國は戰には敗けなかつたが、外交では幾回か戰敗以

上の侮辱を被ふつてゐる、佛國に至つては則ち戰敗國である、今度は勝たねばならない、これが戰敗國の意氣込みである、これぞ佛國の獨逸に對する强味であると言へる、が、私は唯是れだけて佛國の大勝を豫言するのは早計ではあるまいかと思ふ。

英國に至つては現狀維持を主とした國である、苟も英國に遊ぶものは、そして虚心に日英兩國の位置を考へるものは、何うして兩國民の意氣が斯くまで投合するかを怪まざるを得ない、然り英國は現狀維持を主義とする國で、日本は現狀打破を主義とする國てあらねばならない、英國には大なる過去がある、そして大なる現在がある、若し英國にして更に大なる將來がありとすれば、後進諸國は地球の表面に膨脹する餘地がない、これ天將に英國に幸せるもので、世界は英國の爲めに造られたもの、アングロ、サキソンは天の選民と言はねばならない、日本人として日本と英國との觀察は此通りであるが、此觀察は更に强き程度を以て獨逸と英國とに當て箝まる、英國は獨逸の商工業の發展に對し海軍力の發展に對し民族の發展に對して、之を喰止めんとする力である、現狀を維持せんとする力である、即ち過去に蓄積した此力は固より英國の强味である、英國が一たび占め得た日輪の沒することなき帝國を維持したいといふ決心は固より英國の力である、然しながら之を喰ひ止めやうとする力は、若し之を打ち破らうとする力にして多く之と相劣らず、若しくは斷えず增進して行く力だとすれば、喰ひ止める力は終に打ち破る力に路を讓らねばならない、現狀維持の力は終に現狀打破の力に路を讓らねばならない、固より是を以て戰爭の勝敗を預言するには不適當だとするも、獨英終局の輸贏は、苟も獨逸にして患中より生じて自ら崩壞したやうな場合を除き、畢竟獨逸に在るものと見ねばならない。

ベルグソンの語を藉りて言へば、英國は空間を代表してゐる、獨逸は時間を代表してゐる、英國は其生命を愛惜し以て横に空間を保守せんとし、獨逸は其生命を飛躍せしめて縱に時間を突破せんとす、英人は落

附いて居る、滿足を代表してゐる、獨逸はキョロ〱と斷えず四邊を見廻はしてゐる、不滿不足を表現してゐる、四十餘年前、佛國に勝つて、佛國などは眼中にないといふやうな顏附をしてゐるが、決して滿足した民族ではない。

人間生活史の順序からいつて、先づ大に興るべきは獨逸民族なのではあるまいか、そして其次ぎに大に興るべきはスラブ民族、露西亞國民なのではあるまいか、メレジスコスキーは『西歐は既に言ひ盡くした、露國は新しき言葉を以て新に言はねばならない』と言つた、チエホフの人生觀は、人間は飲み喰ひ寢て死ぬるものであるといふ頗るデカタン的であつたが、猶『生活上に於ける各種の變化を有する露國は更に大なる運命を有すと信ぜざるを得ず』といつた、露西亞は自然に第三帝國＝東西一致の第三帝國を實現すべき素質を有つてゐる、ナポレオンが露國の將來を恐怖したのは、慥に其先見である。

第十一　露獨の運命

然しながら露西亞の前に獨逸があるのではあるまいか、ユーレシャ大陸(亞歐大陸の總稱)の歷史は、帝國が東より西に進行する歷史である、米國の生れたのは即ち東より西に進行する歷史が大西洋を飛越したまでゞある、そして此米國を生んだ重なる民族は英國民族である、其英國民族は歐洲の西端の孤島に生活してゐるが、米國より見れば勿論東である、そして此英國民族たるアングルス、サキソンス、ジユーツ等皆今の獨逸の海岸から移住したものである、英國は獨逸の西である、從ふて獨逸は英國の東である。

西へ西へと進行すといへば、其源は東に在りと謂はねばならない、獨逸が今度は東から西に進むべき順序なのではあるまいか。

又他の方面から觀れば、世界民族の歷史は南下の歷史である。白人種が西へ西へと進行したのは、直接南下することが出來なかつた爲めであるとも言へる、古い

歴史は今反覆せず、英國の歴史は西進してそして又南下した歴史でなる、獨逸も亦英國と同じく歐洲の北に位してゐる、西進して更に南下せねばならない運命に居る、和蘭白耳義を其聯邦に加へんとするは、即ち其西進である、更に一たび西進して英國で衝突せねばならない、その上は最早西に進む必要はない、更に世界の天然の富を包藏する南方に下らねばならない。

更に他の點よりいへば、白人の運動は東に還らんとする運動である、其故郷なる亞細亞に還らんとする運動である、南方といつても世界の富は亞細亞に集中してゐる、私は之を名けて白人の還東本能といふ、コロムブスが亞米利加を發見したのは、その還東本能の然らしめたものである、十字軍の運動でも、ヴアスコダガマの喜望峰を迂回して印度の航路を發見したのも、蘇士運河の成功も巴奈馬運河の開通も皆此還東本能の發現である、亞細亞に關するものは、一日も之を忘れてはならない。

獨逸は其位地よりして先づ西に進まねばならない、これ先づ白耳義を攻撃する所以、露國は果して獨逸の趾を趁ふて更に西に進むの必要があるであらうか、露國は其位地からして直接東に還へることが可能る、是れ嘗て滿洲に於て日本と戰ひし所以、直ちに東に還らねば、直ちに南に下ることが可能る、コンスタンチノプルがある、小亞細亞がある、波斯がある、波斯灣がある、印度がある。

私は三國協商側が最後まで進退を共にするであらうかといふ疑問を發したのは之が爲めてある、英佛白はいざ知らず、露國は何の必要があつて、獨逸の西進を妨げて、以て英佛白を助けるの必要があるであらうか、私は之から國際史的に歐洲に於ける近い將來に於ける形勢を揣摩して見ねばならない。

第十二　國際史的に觀たる歐洲の政局（上）

私は巴里城下の盟も伯林城下の盟も聖、彼得堡の盟もないと言つたが、戰前第十九紀雜誌の寄書家が歐洲

戰爭を豫言して、戰爭にして來るとするもそは恐らく現狀維持に終るてあらうと爲した、現狀維持に終ると言つても、巴爾幹の方面は今言はず、西歐洲の戰局に於ては、獨逸が白耳義に破れた場合には或は全然現狀維持となるかも知れない、勿論維廉二世がウォータールーのナポレオンと爲つた場合には局面に大變化を來たすが、私は今斯る極端のことを想像しない、若し聯合軍にして敗ぶるれば、勢ひ白耳義、和蘭は獨逸聯邦に入り、從つて世界地圖は大いにその色彩を變化せねばならない譯だ、私は先づ英佛聯合軍が何處まで進退を共にし得るかを考へて見ねばならない、英國は地中海の防禦を佛蘭西にまかせてある代りに、北海に於ける佛國の利益は英國の艦隊を以つて防禦せねばならない、之は最近英國の外務大臣サー・エドワード・グレーの演說で明白てある、然しながら、英國は佛國の同盟國てはない、陸上に於て佛國と協同戰鬪をする義務を持つてゐない、一八七〇年普佛戰爭の後、時の首相グラッドストーンは獨佛兩國に對して、白耳義の中立條約を提議した、その要に曰く「若し獨佛孰れの一國にても白耳義の中立を破つた場合には、英國は他の一國と協同して白耳義中立の爲めに戰鬪を開始する」と、英國は唯白耳義中立の爲めにのみ戰ふので、兩國の一般戰鬪には加はらない、アスクイスの自由黨內閣が今も猶グラッドストーンの精神を奉體しておりはせぬかと信ぜらるゝ理由がないとも言へない、して見れば、英國が今回の戰鬪に加つたその正味を言へば、北海に於ては佛國の爲めにし、大陸に於ては白耳義の爲めにするといふのてはあるまいか。

私は英佛の關係はこれより以上の推測が出來ないから、兎に角英國は佛國と終始するものとして置かねばならぬ、茲に我々が記憶して置かねばならぬことがある、英國の大陸に於ける傳習的政策（トラディショナルポリシイ）は、一言以つてこれを盡せば「權力平均」の四字てある、英國は獨逸の敗を欲するのは言ふまでもないが、同時に露國の大捷を冀ふものであるとは言はれない。

茲て問題は結局露國の態度如何に歸着して來る、全

證この戰爭は日露戰爭がその大なる原因であると言ふのが、最も國際史眼のある見方であらう、日露戰爭以後に於ける歐洲の波瀾は、露國が日露戰爭で大敗した波動に外ならない、維廉二世がモロッコに上陸して、佛國のモロッコ改革案に向つて大膽なる批評を試み、其れが終にアルゼシラス會議となつたのも、佛國の同盟國たる露國が弱められた結果である、墺國の外務大臣エャレンタール伯が露國外務大臣イズヴォルスキイを出し拔いて二州合併を斷行し、維廉二世の一喝、露國忽ち辟易し、拔かぬ刀の功名を見せたのも、露國が弱められた結果である、此等の事件が積り積つて今回の歐洲戰爭を惹き起したのである、故にこれを露國の立場から言へば、露國は徒らに復讎戰を爲すのであらうか、さうてはない、利益戰を爲すのてあらうか、若し復讎戰たとすれば、獨墺を相手にして戰ふもさることながら、先づ日本と戰はねばならぬ、近世の戰爭は徒らに帝王英雄の武威を輝すのではない、民族生活の爲めに戰ふのを主とするものだとしたならば、露國男兒には意氣がある、一二回は大打擊を獨墺兩國に與へたいと願ふてあらうか、露國は何の必要あつてか飽くまで獨逸と戰はんや、我々は先づ冷かにこれを打算して見る必要がある、國民の感情と政府の打算とは往々に齟齬するものだ、例へば日露戰爭に對して獨逸國民の同情は全く日本の上に在つた、然るに獨逸政府は百方露國の爲めに計る所があつた、一般人民は感情に馳せ、政府は打算を以つて動く、そして一般人民は結局政府が打算て動いたことに異議を言はない。

私が歐洲諸國を歷遊して國際政治を學んてゐた時に、獨逸人からも露國人からも及びその他の國際政治研究者からも、獨露は決して相戰ふものではない、獨露相戰ふも互に利する所なし、相戒めて兵火相見ゆる勿かれとは比斯麥克の遺策なりと聞された、獨逸が露國を侵略して果して何の得る所がある、それと反對に、露國が獨逸を侵略しても何の得る所がない、徒らに金力と兵力とを費すばかりである、露人が獨逸を惡むの念は頗る强いが、露人をして言はしむれば、北海一名

獨逸洋が獨逸の海にならうと英國の海にならうと、露國には何等の痛痒がない、若し英獨が北海に戰ふに當つて、露國が東より獨逸を牽制すれば、これ英國の爲めに栗を火中より取り出すものである、然るに維廉二世が露國に宣戰したのを以つて見れば、獨逸は這回も亦恫喝て濟むものと倣して強いて怖ろしい言辭を弄したが、露國がこの恫喝に脅へなかつた爲めに、餘儀なく戰爭を始めたものだといふ推測が出て來る譯だが、露國は果して忠實に東よりして獨逸を攻撃し、以つて英佛白三國に義理を立て通すであらうか、露國政府にして若し感情の爲めに驅られないで、打算中心主義て動くとしたならば、或は敵は本能寺に在るといふやうなことになりはしないであらうか。

先に墺國のエャレンタール伯に欺かれたるイズヴォリスキイ氏は今は巴里駐剳の大使であつて依然露國外交の重鎭である、彼は露伊兩帝がラコニギて會見した後、墺國の希望を入れ、維廉二世が書を露國のニコラス二世に送つて外務大臣を辭職させたのだといふ説さへあるから、彼が獨逸を好まぬのは言ふまでもないが、彼はエャレンタル伯と約して露國は二州の合併を承認し、その交換條件として墺獨をして露國の黑海艦隊のダーダネル海峽の自由通航を承認せしめんとしたのだ、然るにイズヴォルスキイは英佛の胸中を計りかね、兩國の承認を得た上にエャレンタル伯との密約を實現しやうとしたのである、然るにエャレンタル伯はイズヴォルスキイが未だ佛蘭西にさへも行かぬ間に、二州合併を斷行してしまつた、イズヴォルスキイは心大いに驚いたが、其れにもかゝはらず巴里、倫敦を歴訪したが、彼は倫敦に於ては頗る冷遇された、私はその實地の目撃者であつたのだ、イズヴォルスキイは深く英國は決して露國艦隊のダーダネルの自由通航を許すものではないと心證されて歸つたに相異ひない、今春英帝が巴里を訪問するやイズヴォルスキイは英露海軍協約を締結せんとの提議を持ち出したと傳へられる、その眞意は苟も英露にして海軍の協約を締結すれば、英國は勢ひ露國艦隊のダーダネル自由通航は承認せなけ

ればならなくなるからてある、その終に成らざりしを以つて見ても、英國が依然これを喜ばざるを見ることが可能る。

露國最後の利益はダーダネルの自由通航に在るのてはないか、オットマン帝國に代つてコンスタンチノープルに據るに在るのではないか、波斯の北部より南部に出て、波斯灣に於て氷より自由なる港を得るのてはあるまいか、若し獨逸の利益が西に進むに在るとすれば、露國の利益は南に下るに在るのてはあるまいか。

獨逸が英佛白聯合軍の爲めに大敗せしめられたならば、露國は或は最後まて英佛と共に道行をするてあらうが、若し之に對して獨逸が大勝を博したとすれば、露國はこの機會に乘じてその南下の方針を斷行するのてはあるまいか。

第十三　國際史的に觀たる歐洲の政局（下）

私は少しく獨墺の關係を述べなければならない、普魯西と墺太利とが獨逸帝國の主權を握らうとして相爭ふた當時は言はないとしても、獨逸最後の利益は西に進むにあり、そしてこの戰爭に於てその目的が達せらたとすれば、墺國は事實上自然に中央歐洲に孤立せねばならなくなる、墺國は他の佛蘭西てあつて、然も佛蘭西よりも生命力の缺乏した國柄てある、墺國の軍隊は人間の軍隊てはない幽靈の軍隊てあるとさへ言はれる、墺國の國脈民命は既に盡きたものだと言つても差支はない、唯骨と皮ばかりなるフランツ、ヨセフ皇帝の力に依つて維持せられるのてある、また匈牙利がスラヴ民族を喜ばない爲めに、墺匈二元帝國が纔に維持せられてゐると言はれる、墺國は地理上西の方佛蘭西の方へは進めない、曾て一度伊太利と戰つて南地中海に出んとしたが、脆くも戰に敗れた、それから北の方普魯西と戰つて又敗れた、西と南と北とは既に閉塞された、是に於て乎ドランク、ナハ、オステンと稱して東に進まんとしつゝあるが、塞耳比亞、黒山國のスラヴ民族を始めとし、大いなる露國が控へてゐる、伊太利も控へ

てゐる、勃牙利も控へてゐる、獨逸なくしては、墺國はその十六軍團の兵を以てしても實は何事も可能ない、墺國の膨脹は全く墺國皇嗣フェルヂナンド太公の夢であつたのだ、此の戰爭に於て若し獨逸が破るれば全く夢である、若し獨逸が勝つたとしても、和蘭、白耳義を取つたならば、復た墺國や巴爾幹を顧みて居られないかも知れない、維廉二世は本より墺國の運命を知らないものではあるまい、露國が單獨なる墺國を破るは朝飯前の事だ、然しながら、歐洲の均勢上、列國は縱ひ削弱されても、墺は國として保存して置きたいといふに一致してゐる、そして露國もこれを知らないものではあるまい、果して然らば獨逸の西進は適々露國の南下する障壁を拂ひ去るものではあるまいか、外交界に一つの格言がある、『コンスタンチノープルに達せんと欲すれば伯林を經由せざるべからず』といふのだ、然るに獨逸が西進すれば伯林を經由しないで、一路直ちにコンスタンチノープルに達せらるゝ。

世間では佛蘭西は長く露西亞と同盟すべきものと考へてゐるらしいが、國際史の上から見れば、露佛同盟は寧ろ變態であつて、露獨墺同盟が寧ろ第十九世紀に於ける常態であつたのだ、神聖同盟はドライブンド即ち三帝同盟であつた、普佛戰後、比斯麥克(ビスマルク)は佛國を孤立せしめんとして再び三帝同盟を計つた、但し一八七八年露土戰爭に際し伯林會議に於て、露が當然獨逸の同情を豫期したりしに、比斯麥克(ビスマルク)は却つて英のビーコンスフィールド伯を援けて露土の間に締結せるサンステフアノ條約を破壞し、露國の外務大臣ゴルチヤコフを憤死せしめた結果、露佛が自然に提携するに至つたのである、露國にして若し遠識達見の外交家あらしめば、時に及んで露佛同盟を辭して、別に新らたに露獨同盟を訂するであらうとまで豫言するものがある。

私の此の豫測は獨逸が勝つた場合に於ては或は早く實現するかも知れない、敗けた場合には或は晩く實現するかも知れない、要するに獨逸の勝敗如何は、文明史の上からも國際史の上からも深醇絶大なる注意と興味とを以つて觀ねばならない出來事である。

露國にして若しこの歐洲の大亂を機會として南下するならば、露國は孰れコレスタンチノープルに出づるか、波斯に出づるか、或は兩方に出づるか、兎に角土耳古といふ國が全然地圖の上から抹殺せらるゝやうな結果を生ずかも知れない、さうなれば、この戰爭は獨墺と英佛露との衝突に始つて、英露の衝突となつて終る、縱し此戰爭中に此變局を生じないとしても、戰爭後に於て英露の角逐を復活するであらうといふことは豫じめ心に留めて置くべきものだ。

英國と和蘭とが相拮抗した時代は既に古し、その以後は專ら英佛の角逐であつた、英佛の角逐は更らに一轉して英露の角逐となり、更に一轉して英獨の角逐となつたのだ、當時英佛は人爲の敵てあるが、英露は天然の敵であると言はれた、佛國は最早英國と對抗する必要はない、復た其力もないかも知れないが、英露の關係は決して一九〇七年の英露協商を以て解決されたものではない、英露協商は畢竟するに露國が日露戰爭て受けた痛瘢を回復するまでの休戰條約である、故に英國は露國の回復するまでに獨逸を平げ、更に露國の南下を沮止せねばならない位地に居る。

第十四　日本を中心としたる國際政局

日英同盟は事實に於て變質した、加藤現外相が倫敦て私に話したことがある、此前英國に公使たりし際は、英人は唯露國を反覆してゐたが、今度大使として再び來て見れば、唯獨逸を反覆してゐると、日英同盟は始めは露國に對抗して訂結せられたものてあるが、後には日露協商と爲り英露協商と爲つて、此同盟は轉じて獨逸に對抗する同盟と爲つた、日本は露國を敵とする場合よりも、寧ろ米國と戰ふに際して此同盟を利用したいとするかも知れないが如く、英國は獨逸に對して之を利用してゐる、英國は之あるが爲めに、其艦隊を極東から引上げて之を北海に集中し、此戰爭に於て獨逸の艦隊を壓迫し得たのである、英國は之あるが爲めに、濠洲、ニユージーラント其他太平洋に在る

英領に對して後顧の患なくして獨逸と戰鬪し得るのである。

英國は獨逸と對抗せねばならぬのみならず、更に露國と對抗せねばならない位地に居る、此戰爭の結果如何は更に日本の國際上に於ける位地を再考せねばならなくなるであらう。

この歐洲戰爭の結果として、日本は少くとも當分日露の再戰を演ずる虞がなくなつたといへる、これ實に日露兩國の爲め東洋平和の爲めに深く祝福すべきものである、日露再戰の虞なしとすれば、第一に日本の朝鮮領有は其堅固を加へる、朝鮮人の或者が日露再戰の機會を待つてゐたのは、全く空頼めと爲つた、そして日本は今後必ずしも軍隊を以て朝鮮人を威壓するの必要がなくなるであらう、日本は新に進歩したる朝鮮統治策を案出するが可からうではないか、第二に滿洲も當分は日露の間に兩分せられて濟む譯である、第三に支那共和政府は好むも好まざるも日本に信頼せねばならなくなる、從つて日本の勢力は支那に普遍するであらう、日本人が之を善用するか將た惡用するかゞ問題である、支那の將來に就いては、私は別に一篇の論文を草するの必要があるを感ずる。

日露戰爭が誘因と爲つて十年後に歐洲戰爭を惹起したとすれば、或は此歐洲戰爭が日米戰爭を惹起さないとも限らぬ、日本は支那ありとも必ずしも大陸軍を維持するを要しない、日本は痛切に海軍一元主義、解り易く言へば海主陸從主義を徹底せねばならなく爲るであらう。

若し獨逸にして大敗すれば、獨逸の新大陸（アメリカ）に於ける權威地に墮ちて、始めて英國政治家の久しく渇望した英米同盟は實現するであらう、それが所謂英米仲裁條約といふ形式を取るであらう、左すれば日米戰爭の際英國は日本を援助するの義務を負擔せずして濟むことに爲る。

若し獨逸にして大勝したならば、啻に陸に於て大勝するのみならず、海に於て大勝したならば、日本は最早英國の力を藉る能はずして、反つて獨逸と米國とを

敵とせねばならないであらう、英が獨を破つた場合は、英米の接近となり、獨逸が英を破つた場合は獨米の接近と爲る、これが自然の勢ひである、且つ英が大敗したならば、私が嘗て論じた如く、大英帝國分割の勢は此に全く成就するのである、加奈陀、南阿、濠洲、ニユー、ジンランドは獨立を布告するであらう、埃及、印度は自立するであらう、其他の植民地は或は列强に分取せられ、或は舊の持主に還へるであらう、然しながら此戰爭は或は此極には到らないで結局するかも知れない、私は獨逸は此際其建設の途中に在る海軍を犧牲にしないで、戰後に保存して行く積りではあるまいかと感ずる。

第十五　結論

この戰爭は必ず武器に對する信念に動搖を與へるであらう、大艦巨砲主義が可いか、或は水雷艇、潜航艇が可いか、飛行機、飛行船の得失も必ず實地に經驗せらるゝであらう、列國の經濟政策にも必ず變化を與へるであらう、將たヨリ自由なる貿易が可いか、國家的ヨリ保護的の政策が可いか、そして其思想の上の影響感化は更に興味があるであらう、私は此戰爭は大體に於て鮮血で洗はれた新しい平和の曙光を胚胎し來ることを祈るものである、武裝的平和は到頭戰爭に到着するものであるから、新に武裝でなく愛を以て好意を以て人情を以て自由貿易を以て各國民を結合する平和を欲しい、此戰爭は生命が形式に對し、創造が傳說に對し、進化が因襲に對する勝利であつて、世界の文明史、人間生活史は此戰爭を一期として一大回轉をして欲しいと禱るものである。

最後に言はざるべからざるものは、日本は決して熱狂する必要はない、日本は決して多くの生命と財富とを消磨する必要はない、寧ろ冷靜に日本の將來を案じて、大計を定むべき一時である、私は英國は如何なる場合でも容易に日英同盟を破棄するものでないことを信ずる、日本を制するに日英同盟位都合の可いものはない、日英同盟は制度上日本をして英國に從屬せしむ

るものである、英國が開戰をする場合には日本に相談をすべき筈ではない、獨逸と開戰をするのに日本に相談をしたといふことは聞かない、唯東洋に於て日英同盟の規約を實行して吳れろと註文すれば可いのだ、然るに日本は何れの國と開戰するに當つても、必ず先づ英國の同意を得ねばならない、彼は開戰して後に日本をして英國の利益を擁護せしむることが出來るが、日本は事實に於て開戰の可否を英國政府に問はねばならないわけだ、日本は英國に對して何故に獨逸と開戰するかと質問する權利はないが、英國は日本に對して何故に辰丸事件に關し自由行動を取るか、自由行動とは何ぞやと質問する權利がある、この回の膠州灣問題に對しても、英國が著しく日本の態度を緩和せしめたといふことである、日米戰爭には加らない、然しながら艦隊を北海に集中せしめて英獨戰爭を便にし、開戰しての後は英國の爲めに其東洋に於ける利益を擁護し、更に若し露國が印度に侵入した場合には英國を援助して協同戰鬪をせねばならぬとすれば、日英同盟は英國にのみ利益なる片務條約である、或る獨逸人が私に言つた "Where is the Foreign Office of Japan? It is not at Kasumigaseki, Tokio, but on Dawning St. London."（日本の外務省は何處にある、東京の霞ケ關にあらずして倫敦のドーニンク街にあり）私はこれを獨逸人の言として一概に斥けることは可能ない。

日本は既に再び露國と戰ふの機會が無いとすれば日露の關係は永く圓滿であるであらう、然しながら、日露各々その進行すべき方向を異にしてゐるから、積極的に攻守同盟が成立する機會もあるまい、日本は日英同盟を繼續するか或は飜つて米獨と接近して以つて萬里の波濤を開拓するを得策とするであらうか、これは遽かに決せられるものではないが、要するに歐洲戰爭の成行を見て場合に依つて閑中の大飛躍を試みなければならないかも知れない。（大正三年八月十七日）

歐洲列强の大會戰に對して

歐洲大戰亂の遠因、近因及び其結果

法學博士　戸水寛人

東歐に於ける人種問題

先づ今度の戰爭の原因に就いて話して見れば、原因には遠い原因と近い原因とある。其遠因とは何であるかと云ふに、歐羅巴の東部に於ては、スラヴ人種と獨逸人種とが互に相競爭して居る。それについて墺太利匈牙利及び巴爾幹に於ける人口に就いて少しく述べて見ると、墺太利の人口は二千八百萬强である。其中獨逸人種は九百萬强であつて其他は大抵スラヴ人である。尙之を小別けして見るといふと、ボヘミア人及びモラビア人は概算六百萬弱、波蘭人は四百萬强、ルゼニア人が三百萬强、それからスローベンスと稱するものが百萬强である。であから墺太利に於ては、獨逸人の數よりもスラヴ人の數が遙かに多い。然るに獨逸人が社交上及び政治上に於て牛耳を執つて居る理由は外ではない、獨逸人は知識に於て富力に於て勝つて居るからである。然しながら獨逸人とそれ等のスラヴ人との間には大いなる競爭が無いではない。之が爲めに今より六七十年前に、ボヘミアのプラグ市に於てスラヴ人大同盟を企てゝ特に大集會を催うした事がある。此スラヴ人種大同盟に對しては獨逸人も亦大同盟を企てゝ居る。墺太利の首府維納に於て發行する有名なるノイエ、フライエ、プラッセの如きは其機關紙である。而して之が獨逸の伯林朝廷と氣脈を通じて居る事は知る人ぞ知るである。加之伯林に於ても亦獨逸人大同盟の機關新聞があるのである。

又匈牙利に於ては人口二千萬强の中、一千萬强がマギアールである。此マギアールと云ふのは蒙古人種に屬して嘗て支那の領土まで侵入して來た匈奴の子孫だと云はれて居る。マギアールの外は、五百萬許りの各種のスラヴ人と、三百萬のルーマニア人とがあり、獨逸人は僅かに二百萬强である。斯の如く匈牙利に於てはマギアールの數が他の人種の數より超越して居るが爲めに、匈牙利に於てはマギアールが牛耳を執つて居る。そして獨逸人の數が僅少であるが爲めに格別の勢力が爲い。

然し墺太利匈牙利は聯合して居るから之を一つと見て、獨逸人の數を

調べて見ると、先づ一千百萬人である。而してスラヴ人の數は遙かに之よりも多いのである。

又巴爾幹半島について一言して見れば、セルビア人はスラヴであつて、其隣りのモンテネグロも亦スラヴである。ブルガリア人は本來は蒙古人に屬するがスラヴの血液が餘程澤山之に混入して居る。ブルガリア人とセルビア人とは言語相通ずるまでにスラヴの血液が澤山ブルガリアに入つて居る。巴爾幹半島に於ては此澤山のスラヴ人の外にアルバニア人あり、希臘人あり、其數も少いとは云はれない。其外に土耳古人あり、アルメニア人あり、ワラキア人あり、猶太人がある。けれども此等の數は左まで多くない。而して獨逸人の數に至ては實に晨星の寥々たるに過ぎない。巴爾幹半島は斯の如く種々の人種の混合して居る所である。之は今日に始まるにあらずして巴爾幹半島が羅馬に屬して居る時から此通りであつた。而して羅馬帝國時代に於ては、スラヴ人が多大なる勢力を有して居つた。加之皇帝の中にもスラヴ人の血液の入つて居るものがあつた。即ち羅馬から都をコンスタンチノープルに移した所の彼のコンスタンチン大帝は母方に於てスラヴの血統を享けて居る。彼の母はニッシュの旅館の娘である。此ニッシュは先日セルビア王がベルグレードを引上げて轉居した場所である。コンスタンチンの父はイリリア人と稱して居るが、此イリリア人が如何なる人種に屬するかは明瞭でない。今日のアルバニア人は此イリリア人の子孫であるといふも之も亦明瞭でない。アルバニアの北部の人は往々容貌骨格に於てセルビア人によく似て居つて、南部の人は希臘人とよく似て居るのである。だから今日に於てはアルバニア人は果してイリリア人の子孫なりや否や明瞭でない。又東羅馬帝國に於て有名なるユスチニアン法典を編纂したるユスチニアン皇帝、兵を四方に派遣して亞弗利加、伊太利までを征服した豪傑のユスチニアン。彼は即ちスラヴ人である。ダニューブの北に昔時ダーキヤと稱した地方がある。其處に澤山のスラヴがあつて、其地方からユスチニアンの伯父ユスチヌスが東羅馬に來て皇帝の近衞兵となり進んで將官となり更に智力と武力とに依りて終に東羅馬の皇帝となつた。此ユスチヌスは元是れダーキヤの農夫で眼一丁字無き人物であつたが終に東羅馬皇帝の位に登つたのである。而して其參謀は即ちユスチニアンである。ユスチニアンは其後ユスチヌスに繼て東羅馬皇帝の位に即いて英名を四方に輝した。此のユスチヌスもユスチニアンも血脈から論ずればスラヴ人である。

之を要するに歐羅巴の東部に於てはスラヴ人の數が甚だ多くして、或時代には多大の勢力を有し、或時代には羅馬皇帝までも出した事がある。今日に於ても歐羅巴東部に於てスラヴ人と獨逸人と互に相競爭をして其競爭の結果、墺太利が自分の有して居る所の鐵道を地中海まで頭を出させうとした事がある。どうして斯くの如くするかと云ふのにボスニアの首府のサラエヴオーからノビバザール地方を通過してミトロビッツサまで鐵道を布くとする。さうすると墺太利の汽車は直ちに地中海のサロニカまで來ることが出來る。何故と云ふにミトロビッツサからサロニカまでは已に土耳古の鐵道がある。其資本は佛人から出したものが多いと云

ふ事である。それで若しも墺太利がノビバザール鐵道を作れば墺太利の勢力を地中海まで及ぼすことが出來るから、嘗て此事を土耳古政府に交渉して、鐵道建設の承諾を得た事がある。先達の巴爾幹騒動の結果としてノビバザールがセルビアの權に歸し、今後セルビアが此鐵道を建設するや否や疑問であるが、初め墺太利の爲した所の計畫に獨逸皇帝の關係あることは論を俟たない。而して此鐵道計畫に對して、露西亞人はオデッサから巴爾幹半島を經てモンテ・ネグロのアンチバリー港までの鐵道を敷設せんとする計畫があるのである。而して此道筋には已に處々に鐵道が敷設せられて居る。之をよく連接して鐵道線路を利用したならば露西亞の汽車がモンテ・ネグロまで來る事が出來るのである。

それ斯くの如く東部歐羅巴に於ては種々の事物に關してスラヴ人と獨逸人とは互に相競爭して居る。

爭亂の基をなす政治的原因

而して更に之よりも少しく近い原因について述べて見ると云ふと、千九百〇八年の十月に墺太利よりボスニア及びヘルツェゴヴイナを自分の領土とする旨の宣言を出した。之が甚しくセルビア人及び露西亞人の感情を害した。先づセルビアの事について之を述べると云ふと、セルビア人は之まで所謂大セルビア主義なるものを抱懷して居る。それは如何なるものであるかと云ふに、セルビアと同じ國語を話す所の同じスラヴ人を統一すると云ふ事である。スラヴ人の數が甚だ多しと雖も此等が悉く同一の國語を話して居る譯でない。露西亞語を話すものあり、波蘭語を話すものあり、ボヘミア語を話すものあり、其外にセルボークロアットと稱する言語を話すものもある。セルビア人の如きは即ち其セルボークロアット語を話すものゝ一であつて、モンテ・ネグロ人、ボスニア人及びヘルツェゴヴイナ人、ダルマチア人、其外に墺太利領内のクロアチア州及びスラヴォニア州の住民が同じ言語を話して居る。此外にも亦セルボクロアット語を話すものが往々ある。セルビア人は此等の人民が互に氣脈を通じ、都合がよければ同一政府の下に立つ方がよいと考へて居る。詰り同じセルボークロアット語を話す人種を打つて一丸となして大帝國を作らんと欲して居る。之が即ちセルビア人の所謂大セルビア主義である。

然るに墺太利がボスニア及びヘルツェゴヴイナを領有する事にすれば之はセルビアの主義に反して居る。大セルビア主義の企を害するものであるからして、此併合に對しては少からざる惡感を抱いて居るのである。

又露西亞人が右の併合に對して惡感情を抱く理由を述べて見ると、露西亞と土耳古と戰爭をして、一八七八年三月三日にサン・ステファノ條約を結んだ。之によるとブルガリアの面積が非常に大きくなつて、露西亞人が其上に大勢力を有するの仕組にしてあつたのであるから、此條約が行はれることになれば歐洲列強の利益に反する。夫れ故に列強が之に干涉せんとして墺太利を消其に使ひ、此條約に故障を申込ませ、更に條約

の爲直しをすることにした。そこで同年直ちに伯林に於て列國使臣の會合を催して遂に七月十三日に伯林條約なるものを締結した。之によるとセルビア、モンテネグロ、ルーマニアの三國が獨立になると云ふ事にした。ブルガリアは土耳古の屬國であるが之には自治を許すことにした。ボスニア及びヘルツエゴヴイナは土耳古の領土であるが墺太利が其上に政を行ふ事にした。即ち墺太利が土耳古の委任を受けてボスニア及びヘルツエゴヴイナを統治する事にしたのである。サン・ステフアの條約に比較すると此條約は露西亞にとつて甚だ不利益である。從つて露西亞人は此條約に滿足せない。殊に此條約に大關係ある露西亞のゴルチヤコフの如きは憤慨極つて悒々として樂まず遂に疾を得て死んだと云ふ事だ。事情斯くの如くであるから千九百〇八年に於て墺太利が突然ボスニア及びヘルツエゴヴイナを領有するのは露西亞人の同意を得なければならぬ筈である。然るに墺太利は此擧に出でずして、ブルガリア人と相談をして、ブルガリア人は其舊都のチルノヴオーに於て獨立の宣言をした。そして墺太利人は右二州を併合することにした。此時に露西亞人は何故に之に對して故障を唱へなかつたかと云ふに、日露戰爭の瘡痍未だ癒えざるが爲めである。けれども故障を唱へることが出來ぬからとて其れに滿足して居つた譯ではない。否故障を唱へることが出來ぬ程一層憤慨して居つたのである。人に頭を抑られて不平をいはれぬ時、其不平が益々鬱結すると同じである。之を要するに墺太利が一九〇八年にボスニア及びヘルツエゴヴイナを領有したが爲めにセルビア人も露西亞人も甚しき惡感情を抱いたのである。

爭亂の最近原因

今度の大騷亂の一番近い原因を述べれば、それはセルビア人は陰謀によつて墺國の皇儲エステの大公フランツ、フエルヂナンドを殺したと云ふ事である。墺太利人は自國の皇太子が殺されたのであるから甚だ怒つてセルビアに對して色々要求する所あるのは敢て非なりと云ふ事は出來ない。寧ろ當然であると云つてよい。然し其原因を云へば元、墺太利人がボスニア、及びヘルツエゴヴイナを併合したと云ふ事である。此併合の爲めセルビア人は常に墺太利人を仇敵と見て居る。何か折があれば墺太利人に復讐したいと思つて居る。其矢先に今度の暗殺事件が起つたのである。だから墺太利人がセルビア人に對して多大なる要求をなした時にセルビア人が之に應せないのは一方からいへば不當なるが如きも、其原因に遡れば又多少の道理がある。而して墺太利人がボスニア、及びヘルツエゴヴイナを領有するに至つたと云ふ事柄は、墺太利の背後に獨逸皇帝があるからである。實際を云へば、前に述べた所のノビバザールの鐵道の敷設と云ひ、ボスニア・ヘルツエゴヴイナの併合といひ、悉く獨逸皇帝の教唆に基いて居るのである。斯くの如き事實を綜合して見ると云ふと實際は此戰爭は獨逸皇帝が惹き起されたと云つても可いと思ふ。實に獨逸皇帝は覇氣滿々たる人物であつて、獨逸帝國の權力の增大については甚だ心志を勞して居つたので、之が爲めに今度の大騷動が起つた

のである。

此戰爭の結末如何

此戰爭に於て獨逸人が勝を制するか、露西亞人及び佛蘭西人が勝を制するかは、豫言すること甚だ六つかしい。然しながら大體の形勢を云へば獨逸人は甚だ窮地に陷つて居るものと思ふ。而して其窮地に陷れる所以を見れば、獨逸皇帝は戰爭の當初に於て外交を過れりと思ふ。

獨逸が露西亞及び佛蘭西を敵として戰はんと欲すれば英國を中立せしむるの必要がある。然るに獨逸皇帝の遣り方が甚だ亂暴なるが爲めに英人の感情を害して英人を獨逸の敵に廻はした。此戰爭の初まりに獨逸人は先づ以て兵をルクセンブルグに入れ、遂に白耳義を脅迫して自分の味方にせんとした。此行動が甚だ英人の感情を害して居る。歐洲に於ては永世中立の國が三つある。ルクセンブルク、白耳義及び瑞西である。永世中立國の權利義務については人が皆知つて居るから委しく云ふ必要はないが、歐羅巴に戰亂があつても中立國に之に關係しない事になつて居る。即ち中立國は交戰者の孰れをも助けることが出來ざると同時に交戰國は中立國を利用することが出來ぬことになつて居る。一八七〇年の普佛戰爭の時に、獨逸人は白耳義に交涉して、白耳義に兵を入れて佛蘭西を征めようとした。併し白耳義は斷乎として應じなかつた。それで獨逸はせめて傷病兵丈けでも通過することを求めたが之にも同意しなかつた。而して其時白耳義の後ろには英國があり、白耳義は英國の同意と後援とによつて中立國の權利と義務とを全うした。然るに獨逸は今回中立國の權利を蹂躙してルクゼンブルグに兵を入れ、白耳義を脅迫した爲めに英人は甚しく不滿の念を抱いた。元來英國の統一黨は主戰論者である。兵を擧げて獨逸を討つ方がよいと云つて居る。然し今の政府黨即ち自由黨は平和論者である。故に獨逸人が旨く之を操縱すれば中立を守らしむることが出來たかも知れない。然るに獨逸人の舉動が剛慢なるが爲めに英國民は擧げて戰爭熱に犯され、遂に之と戰ふに至つた。又獨逸皇帝は巧みに伊太利を操縱すれば、或は獨逸及び墺太利と行動を共にしたかも知れぬと思ふ。獨逸、墺太利及び伊太利は三國同盟である故、此三國が一團となつて佛露と戰へば、餘程の强味がある。然るに獨逸皇帝の遣り方が拙であり、又剛慢であつたが爲めに遂に伊太利も中立を宣言した。斯くの如く獨逸人は世界列國の同情を失して、單に墺太利のみを自分の味方として、露西亞・佛蘭西及び英吉利の三大强國と干戈を交ふる事になつたからして獨逸は餘程不便の位置に立つて居る。平時に於て獨逸は穀物の一部を露國に仰いで居るが、此度の戰爭の爲めに露西亞から輸入することが出來ぬ。戰爭久しきに亘れば穀物の價が騰貴するに違ひない。さればといつて之を海外に求めんとすれば英吉利人は强大なる艦隊を以て之を防ぐからして獨逸人は窮地に陷ると思ふ。

獨逸人の考では、此戰爭に於て速かに佛蘭西人をヘコマシて、其兵を引返して露西亞に入れば露西亞にも勝つことが出來ると思つてゐる。或は此計畫通りに行くかも知れぬが、なか〳〵容易に行はれにくいものと

思ふ。一八七〇年の普佛戰爭の時は佛蘭西の歩兵は獨逸に劣らなかつたけれども、佛蘭西の大砲は著しく獨逸の大砲に劣つて居た。獨逸人が巴里を圍んだ時に巴里の丸は獨逸人に屆かなかつたけれども、獨逸人の丸は優に巴里に達した。而して巴里人は傳書鳩を放つと獨逸人は鷹を以て之を捕へ、巴里人も大いに困却し、大敗した。けれども今日佛蘭西の大砲と獨逸の大砲とを比較すれば、佛蘭西の大砲は獨逸のに優るとも劣りはせぬ。又佛蘭西の兵隊は品質に於て必ずしも獨逸の兵隊に劣らない。一八七〇年の戰爭に於ても佛兵は必ずしも獨兵に劣らなかつたが之を率ゆる將官其人を得ず、遂に敗を取つた。佛蘭西人は先年の失敗に鑑みて大いに奮闘努力して居る如く見える故に、今回獨逸人は容易に佛蘭西人に勝を制するとは思はれない。單に兵數のみを比較すれば獨逸兵は佛蘭西兵よりも多いけれども、全國の兵を悉く持つて行くことが出來るとは思はれない。勝敗は固より分らないが恐らくは一八七〇年の如くには行くまいと思ふ。

獨逸人は先づ佛蘭西に勝つて置いて、直に此兵を以て露西亞に行く積りであつたが、斯くの如くする前に、露西亞人は露獨の境に兵を集中することが出來る故に、之は獨逸人にとつては甚しき苦痛であらう。獨逸人は露西亞人のみと戰ふならば、獨逸人の方は露西亞よりも早く國境に兵を集中させることが出來る。何故と云ふと露獨の境に臨んで居る鐵道を比較すると、獨逸の鐵道が多くして露西亞の鐵道が少い。だから獨逸の方が露西亞よりも軍隊を其國境に早く集中させることが出來る。今回の戰爭に於て獨逸人は先づ以て佛蘭西に心を用ひ、露西亞を後廻しにしたが、佛蘭西の方面が豫定の如く勝を制することが出來ればよいが、豫期の如く行かなければ獨逸人は非常の困難に陷ると思ふ。若しも獨逸皇帝若くは其將官に兵を用ふること神の如きものあれば或は那翁の如く自分の敵を粉碎することが出來るかも知れぬが、之は甚だ豫期しにくい。戰爭は時として運命によつて決せらるゝものであるから獨逸が必ず敗を取るとは斷言出來ないが、獨、墺の實力と露、佛、英の實力とを對照して見ると、獨墺の實力稍々劣るの感がある。然しながら獨逸皇帝が今回の如く乾坤一擲の擧に出でたのは通常人の爲し得る所でない。之が果して如何になり行くか、我々の刮目して觀んと欲する所である。

（八月十四日）

佛國の愛國心とポアンカレー氏

五來素川

若し歐洲大戰が如何にしても避け得られないならば、此度は佛國に取ては甚だ好い時機であつたに違ひない、何となれば現今の大統領ポアンカレー氏は有爲の人物で且つ愛國家を以て聞え、佛國々民も亦甚だ愛國

心の勃興して居つた時であるからである、今其顛末を玆に述べて見やう。

日露戰爭に露國の敗北した結果として、歐洲各國の權力平衡にくるひが生じ、露佛同盟の威信が減じて、獨墺以三國同盟の勢力が増した、其結果として千九百五年から千九百十一年迄は有名なるモツコ問題なるものが歐洲に起り、佛國は甚しく獨逸の爲めに苦められ、亞弗利加の殖民地コンゴーの一部を割き、且英國の勢援を得て、僅に獨逸の攻撃を免れた、其間佛國人が獨逸の横暴を怒り、其無理無體なる言ひ掛りに切齒扼腕したことは非常であつた、從てモロツコ事件が濟むと同時に、佛國々民の間には一種の覺醒が起り、最早や今迄の如き平和の夢に醉ふの愚を覺り、大に獨逸に對して備ふる所がなくては爲らぬと云ふ精神が奮起した、其處で千九百十二年一月にカイヨー氏の屈辱內閣が倒るゝや、此に愛國內閣なるものが起つた、それは今の大統領ポアンカレー氏の組織したものである。

もとポアンカレー氏は巴里の辯護士で、上院議員で、佛國文學院の會員である、彼は其生國がロルレーン州なので、其一半は普佛戰爭の際獨逸に取られ、且つ戰爭當時には獨逸軍の侵入も見て居るので、非常に愛國心強い人であつた、彼は既に三十二歲の時文部大臣になつたことがあるので、其政治的手腕は略察することが出來る、然し其政治的見解が溫和共和主義なので、急進主義全盛の今日には容れられず、唯上院豫算委員長として時々大藏大臣等になることもあつた、資質剛毅精確な人で、謙遜の外貌に自信力を包んで居る人である。

ポアンカレー內閣の特長は、其中に當時第一流の佛國政治家を網羅したことであつた、有名なる外相として知られたるデルカッセ氏海相たり、國家敎會分離法案起草者として知られたるブリヤン氏法相たり、哲學者政治家として世界に知られたるレオン、ブルジョア氏勞働大臣たり、社會主義者、行政的手腕家として知られたる辯護士ミルラン氏陸相たり、多くは是れ既に屢々首相たりし人々である。

ポ氏內閣の第一の努力は陸海軍の改革であつた、啻に陸海軍を改善したるのみならず、倘佛國民の愛國心鼓舞策を講じた、即ち毎土曜日の夕、軍隊をして軍樂隊を先き立てゝ、佛國の市中を練り行かしめた、其効果は意外に大であつた、其頃飛行機隊新設の爲めに義捐金を募集したが、旬日にして三百萬法を得た、是は佛國民が愛國的に覺醒した第一の證據であつた。

ポ氏亦自ら軍艦に乘じて露國に行き爾來疎隔を來して居た露佛同盟を調停し共に外交界に活躍すべきを約して歸つた、時宛もバルカン問題勃發し、戰勝國セルビアの野心を抑ゆる爲めに墺が動員して之に迫り、露國亦動員して將に世界の大亂たらんとした、其時ポ氏は大に歐洲の外交界に活動し、英國倫敦に大使會議を開いて、事を平和の間に解決せしめ、一方に於ては、大に佛國の威信を歐洲に輝かした、氏の此外交上の成功は、佛國民をしていたくポ氏の手腕に信賴するの念を生ぜしめ、必ずや大に氏に報ゆるの氣あるを示した。

時宛も大統領改選の期に際し、千九百十二年一月を以て上下兩院議員

より成る國民議會に於て新大統領を擧げんとす、蓋し英佛崇拜を以て有名なる佛國民をして、大統領を直選せしむるは、再び新那翁を顯出せしむるの虞なきにあらざるが爲に、佛國大統領は必ず議員が選擧することになつて居る、其選擧前日共和黨全體（社會黨、帝王黨を除く、兩院の全議員）を集めて、大統領の豫選會を開かんとした、此時多數黨なる急進共和黨は無能の好人物なる農相パムス氏を擧げて之を禮服大統領とし、自分達の傀儡として、自由に頤視せんとした、けれど國民の輿論及び温和共和黨は、有爲の人物を擧けて國家の難局に當らしめんとし、ポアンカレー氏を其候補者に揚けたのである、然るに豫選會の結果はパムス氏に利にして、ポアンカレー氏に不利であつた、然しパムス氏の投票絶對過半數に達しない、亦翌日の本會議には社會黨は獨立し、帝王黨はポアンカレー氏に投票すべきを以て、勝はポアンカレー氏にある、然し大統領が帝王黨の爲めに選擧されると云ふことは共和制度の威信に關すると云ふので、急進黨は委員を擧けてポアンカレー氏に候補者辭任の提議を申出した、其委員と云ふのは曾て皆首相たりしことのある人物のみで、コンブ、カイヨー、モニー、クレマンソーの諸氏であつた、殊にクレマンソーは猛虎將軍と稱し、一たび其嚴拳を振へば當る所のもの粉碎せざるなしと云ふ人物であつた、然るにポアンカレー氏は其政友の勸誘に從て、是等名士の忠言を斥け、嚴として動かなかつた、是か爲めにクレマンソーの如きは、嘗を發つてポアンカレー氏を詈倒するに到つた。

翌日ヴェルサイン宮の選擧會は此事件の爲めに非常に重大なるものとなつた、國民は急進黨の横暴を憤つて、ポアンカレー氏に同情した、選擧當日は選擧場の四面は結果を待ち焦れた人民を以て充滿した、一たびポアンカレー氏投選の報傳はるや、群集の歡呼は天を撼す程であつた、其夜巴里市中はポ氏の投選を祝する示威運動を以て雜踏し、ポ氏の邸宅は國民歡呼の中心となつた、是れ皆ポ氏が國民の愛國心を一身に代表して居るからである。

然し此時から急進黨とポアンカレー氏とは不倶戴天の敵となつた、爾來ポアンカレー氏は愛國的政策を遂行し、二年兵役を三年兵役に改めて、現役兵數を增すの政策を取つて來たが、是が急進黨の激烈なる反對を受けた、去る五月の總選擧には、急進黨勝利を占めて、三年兵役制の將來も如何やと氣遣はれて居たのである、然るに俄然此度開戰になつたのは、此有力なる首領を得たる佛國の爲めに賀すべき所である、ポアンカレー氏は必ず國民の信賴を得て、此國難を幸福に解決すべきこと我輩の疑はぬ所である、何となれば彼は佛國民愛國心の表徴（シムボル）となつて居るからである。

獨墺の違算

マスター・オブ・アーツ　米田實

一

墺領ボスニヤ州サラエウオに於ける墺國皇儲フランツ、フエルヂナンド殿下の暗殺は、端無く奈翁戰爭以後歐洲未曾有の大戰亂を惹起するに至つた、何人も之に對して遺憾の想を催さぬものは無からう、勿論墺帝フランツ、ヨセフ陛下は氣の毒な方だ、皇弟マキシミランは墨西哥革命に殺され、唯一の皇子ルドルフ親王は一八八九年頓死し愛后エリザベツト陛下も一八九八年無政府黨の手に仆れ、唯た賴みとせらるゝは皇甥たるフランツ、フエルヂナンド殿下であつたが、之さへ今はボスニヤ及び塞爾比の大塞爾比主義者の爲めに慘死の運に會せられた、之に同情せる墺國官民が、過酷なる要求を塞爾比に致し、今回戰亂の端緒を開いたのも、一應無理ならぬ所もある。併し又た多少無謀に過ぎた點もあるやうに思はれる。

蓋し墺地利には二千五百萬のスラヴ人があつて、國家統治上一大難問題を生して居る、殊にクロエシア、ダルマシア、ボスニヤのスラウ人は洪牙利で優勢であるマヂオル人と軋轢又軋轢を重ねたる行懸りから、昨年巴爾幹戰爭で勝つた塞爾比國民と合併し、大スラヴ國を造らんとの熱が益々高まつて來た、故に墺地利も夙に「塞爾比を破碎し、又た起つ能はざるに至らしめざる限り、到底自國の安全を期せられぬ」と考へて居たのである、而して此考へが皇儲暗殺の爲め起れる對皇帝の同情と人民自身の激昂と相待つて遂に今度の大事を惹起したものと見られる、單に感情ばかりで起つたものでは無いのである、併し一轉、國際政局を見れば汎スラヴ主義の頭梁たり、近東スラウ民族の保護者を以て自ら居る露國は最早や之を默許し得ぬ境遇に立つて居た、即ち一九〇八年墺國のボスニヤ、ヘルツエゴヰナ兩州合併の際にも、墺國の爲め甚しき屈辱を蒙り、昨年巴爾幹戰役の際、塞爾比にアドリアチツク海港を得せしめんと試みて、再び墺國に阻止せられた、此上猶ほ墺國の跋扈に一任するに於ては、露國はスラウ族保護者たる地位を失ひ、其勢力は巴爾幹より一掃せらるゝこと明瞭である、露帝とサゾノフ外相は到底之を忍び得可くも無かつたのである、而して墺塞衝突延いて露墺戰爭を惹起し一國對二國の戰爭とならば、墺地利の同盟國たる獨逸の參加は自然の事であり、又獨逸の參加は露國の同盟國たり獨逸の仇敵たる佛國の參加を促す可さは明瞭であつた、墺國政府は少くとも之丈けの覺悟が必要であつた、若し此覺悟無かりしとせは、墺國政事家の愚や及ぶ可からず、此覺悟ありたりとせば、聊か無謀の謗を免れないと言はねばならぬ、而して此責任は墺國の後見たりし獨逸も之を分たねばならぬこと勿論である。

二

然かも兩國の無謀は獨り之のみでは無い、其英國をして露佛と共に戰**爭に參加しむるに至つた拙劣な遣り口と、伊太利が三國同盟の一として**獨墺を助くるだらうと考へた呑氣さ加減とは、益其無謀の甚しきを證明するやうに考へられる、予は此二點につき少しく述へて見たい。

第一、英佛の關係は、一九〇四年四月八日成立した英佛協商の結果親密となり、一九〇七年英露協商と相俟つて三國協商(アンタント)を形成したことは、世人の知る如くであるが、此關係は同盟關係では無い、人或は一九〇六年アルヘシラス會議に於て英國か極力佛國を援助し、一九一一年摩洛哥アガヂル事件につき英國藏相ロイドヂョルヂ氏が飽く迄佛國を援助す可しとの演説をなせるを見て、英佛の結托を說くが、由來英佛協約は埃及を英國に與ふる代りに摩洛哥を佛國に與へたものである、是れはその根本條件である、從つて英國が摩洛哥に於て佛國を助くるは當然と言はねばならぬが、歐洲本土に於て佛國を助く可き約束は無いのである、勿論之迄英佛同盟論も屢起つたが、何時も英國陸軍力の微弱なる、到底大陸戰爭に當り難く、之に當らば自國の防備を危うすとの理由の下に成立せなかつた、即ち英本國の現役兵數は十二萬七千、印度七萬七千、殖民地四萬九千合計二十五萬三千たり、此外に豫備兵二十萬、地方軍二十六萬五千あるが、印度及び殖民地の軍隊は、其れ自身の防備にも必要であり、豫備軍及び地方軍は、能力足らざるもので、外征に當り得るは在英本國現役兵及豫備兵第一種より成る遠征軍隊十七萬である、之とて全部外國に使用し得可きか太た疑問で、之が爲め英佛同盟は今迄成立せなかつたのである、次ぎに英國統一黨内には佛國援助論も强いが、現政府黨即ち自**由派には、其反對論即ち非戰論が有力であつた、之れは今度英國が戰爭に**參加するや、モーレー卿、ジョン、バーンスの兩大臣か辭職したのでも分明である、然らは如何にして英國の戰爭參加を促かした乎と言ふに、之れ獨逸は白耳義中立を侵害した爲めである、抑も白耳義は一八三一年十一月の倫敦條約で墺普英佛露か國より其永久中立を保障せられて居るが、實際此の保障に熱心なるは英國である、之れは白耳義か英國の對岸に位ゐする爲め、他の强國之を占有する如きことあらは、英國それ自身に取りて危險なからである、左れは一八七〇年普佛戰爭あるや英國は普佛兩國と別々に條約を締結し佛國若し、白耳義の中立を侵害すれば、英普相合して佛を攻擊すへく、普若し侵害せは、英佛合して普を攻擊することに約定したのである、之等の事情は今日も矢張り同樣である、獨逸が如何に戰略上白耳義國土を經て佛國に進軍するを可としたればとて、之に依つて露佛てふ兩强敵の外に英國を加へた遣り口は巧妙とは言はれぬ、況んや白耳義中立侵害だになかりしせは、英國内閣の戰爭派は非戰派に打勝つを得たとは言へないに於てをや。

三

併し英國戰爭參加の問題は幾分獨逸側にも理窟があるのだから、多少恕するとして、其伊太利が三國同盟に屬する關係より、獨墺と進退を共にすると考へたる一點に至ては、予は辯護の辭無きに苦むのである。

抑も獨墺伊三國同盟條約は一八八二年五月即ち佛蘭西か突尼斯（チュニス）を合併して伊太利の惡感を買つた翌年成立し、一八八七年、一八九一年、一九〇二年、一九一二年に之を繼續し、今日に至つたのである、從つて今度開戰と決するや、獨墺兩國は伊太利の味方すへきを豫期し、其躊躇の色あるを見るや、盛んに壓迫を試みた、然かも伊太利は局外中立策を執り、遂に之に應せなかつたのである、其理由は今度の戰爭が獨墺攻勢を執つたのだから援助の責任か無いと言ふことらしい、併し之は口實で、眞相は伊墺の惡關係と伊佛の接近が根底であると考へる。

第一、伊墺兩國は地理上互ひにアドリアチック海の競爭者たる立場にある。アルバニア方面にても利害相衝突する場合が多い、從つて仲惡い同盟國で、此間に斡旋する獨逸の苦心も一通りでは無かつたのである、現に近年の墺伊關係を見ても一目瞭然である、六七年前墺伊兩國間にはトリエスト港伊太利人教育の伊太利大學設置問題で矢釜しい紛議起り、伊國民は非常に墺國の伊太利人排斥を痛慨すること、日本人の米國排日問題に對するよりもより以上であつた、又た墺國ボスニヤ、ヘルツエゴヰナ兩州合併に對しても、伊國議會の激怒一方ならざりしを、外相チツトニ氏の斡旋僅かに之を緩和し得たのである、次て一九〇九年十月露帝の伊太利訪問あるや、伊國官民狂喜之を歡迎したが、殆んと之と時を同うした墺獨條約（三國同盟の母となるもの）三十年祭に對しては冷淡極る態度を示した、一九一一年伊國議員ナヅー氏等盛に日耳曼人の伊太利に侵入するを攻擊し排墺的演說をなし、伊太利は墺國を壓倒する準備無かる可からざることを叫んだ、就中一九一一年伊土戰爭起り、同年九月伊太利軍艦がプレベサ近海に於て土耳其水雷驅逐艦を擊沈するや、墺國外務省は、伊太利が歐洲土耳其に地盤を得んことを恐れ、之に對し「アドリアチック海東岸に於ける戰爭を中止せよ」と勸告し爲めに伊太利はエヂアン海及びアドリアチック海方面にて土耳其を攻擊するを得す、唯だ亞弗利加と紅海にのみ活動するに止まつた、此時伊太利官民が墺國の得手勝手な要求を怒つたのは一通りでは無かつたのである、要するに伊太利は地望上、人種上、經濟上其利益が隣國たる墺地利の利益と相背馳し、從つて之を助くるの不利なることを熟知して居る、加ふるに國民一般の感情も墺國民の排伊的なるが如く、排墺的であるから、到底墺獨と協力して戰ふことは出來無かつたのである。

第二、伊太利はトリポリ獲得と共に佛英と接近して來た、又た實際接近せねばならぬ必要も生して來た、元來伊太利は經濟的關係に於ても人種的感情に於ても獨墺よりも佛國と親善なる可き筈である、然るに伊國が獨墺の手に奔つたのは、佛國に突尼斯を占領せられた爲めであつたが、此怨みは今度英佛が伊太利の北阿弗利加トリポリ占領を默許したことに依つて消滅した、即ち埋め合せが付いたのである、殊に此トリポリ占領の結果、伊太利の地中海に於ける利益關係は、重大となつた、本國と殖民地と海上交通安全、殖民地の保護は其重大なる義務となつた、然るに此保障は三國同盟之を與へず伊佛協約之を與へたのである。

最初三國同盟條約は陸上に限り海上に及ば無かつたので、伊太利は別

に佛國と海上の協約を締結した、一昨年三國同盟條約再締の擧あるや、墺獨兩國ては、該條約を擴張して海上に及ぼす可しとの議論多く、獨逸海軍のカラフウ、フオン、ホツフエ提督など盛んに之を唱道したが實現するを得なかつたのである、是れ畢竟、獨逸海軍が地中海に勢力を及ぼすを得ず、墺伊兩艦隊のみにては、到底地中海英佛艦隊に敵するを得無い爲めである、斯くの如くなるに、伊太利若し墺獨と合し英佛を敵せは直ちにトリポリを失ふ可きは明瞭である、即ち英軍は埃及より、佛軍はアルゼリアより各々トリポリに向け進擊し、地中海の伊國艦隊は破滅の運に會して用をなさず、伊國よりは一人の援兵もトリポリに入ることを得無いであらう、伊國政治家如何に愚なりとも、其將來の仇敵たる可き墺國を助くるが爲めに、新殖民地を犧牲にして奮鬪す可しと思はれぬのである。

斯く觀し來れば、何人も伊太利の戰爭不參加を當然と見る外はあるまい、獨墺にして其參加を豫期したりとせば、そは愚なる逆算であつたと言はねばならぬ、予の所思は、先つ上述の通りである、唯た今度戰爭に向つて猛虎の如く突進した獨帝陛下、此難境に立ちての御活動振り如何、是れ恐らくは最も興味ある問題であらうと思ふ。

外交と戰略との調和を缺ける獨軍

陸軍少將　山口圭藏

早晩必ずや實現せらるゝの時あるべしと、吾人の豫期して疑はざりし歐洲の大戰亂は、本年六月、塞國に於ける墺國皇儲殿下及同妃殿下の暗殺事件を動機として遂に勃發したり。

抑々千八百七十年に於ける普佛戰爭以來茲に四十有餘年、歐洲の平和を保ち得たる所以のものは、畢竟露佛對獨墺伊の兵力常に平衡を保ち、其均衡を失はざりしに因る事何人も之を首肯する所なるべきを信ず。然るに千九百〇六年、英國の之に參加するありて、露佛英の親善は茲に三國協商の形と成つて現れ、加ふるに國家自衞の利害關係は漸次伊國をして從來結び來たりし三國同盟の聯結を脱れしめ、寧ろ離墺親佛の傾向を現はし來るに及んで、兵力の均衡に漸く其度を失せんとするの兆候を示せり。

獨國は玆に見る所あり。益々軍備の擴張を圖つて須臾も怠る所なければ、列國亦已むを得ず之に對する策を講じ、其備を堅めて相讓らず、近年に至りては軍備競爭其極度に達し、最早今日以上の擴張は孰れも殆ど其國力の耐ゆる能はざる狀態となれり。而して常に歐洲に於ける軍備競爭の中心となり、竊かに各國の隙を窺へるが如き獨國に對しては列強爭で之を坐視するに忍びんや、乃ち一旦機會だに到來せん歟、歐洲全土の禍を

醸す此大腫物に對して快刀一閃の大手術を加ふるの亦已むを得ざるを覺悟するに至れり。斯く觀じ來れば、這回の大戰亂も其因つて來る所深く、之を今日に於いて毫も異とするに足らざるを知るべき也。

開戰後の經過は奈何、獨國は今や周圍に敵を受け、甚だしく不利の狀勢に陷れるものゝ如し。恐らく獨國の政略並に戰略は毫も今日の如き成行を豫期せざりしなるべし。而も事の玆に到りし原因は一にして足らずと雖も、數へ來れば當初獨國が露國に戰意無しと誤認したりしが如き、伊國の聯盟甚だ不確實なるを顧みざりしが如き、英國をして遂に劍を執つて兵渦中に投ぜざるを得ざらしめしが如き、又最初墺國が塞國に對して宣戰を布告せし爲め、墺軍の一部を割いて之に當てざる得ざるの不利を思はざりしが如き、是れ皆獨墺の聯合軍をして今日の窮地に陷らしめたる原因となす。要するに獨國は外交と戰略との調和を缺き、多年の經營割策を遺憾なく遂行するの未だ其機に至らず、周圍の事情極めて我れに不利なるを知りながら、遂に行き懸り上已むを得ず開戰を決行するに至りしにあらざるなきやを思はしむるものあり。果して然らば是れ大勢に於いて既に獨國は敵に一籌を輸するものと謂ふべし。

伊國の中立は、實に獨國の爲めに大なる打擊にして、戰略上の致命傷と謂ふも必ずしも誣言にあらざるべし。何故ならば、獨國は伊國の全體を擧げて佛國に向はしめ、其右側背を脅威して爲めに佛國をして之と略同等の軍隊を割きて之に備へしむるは、獨軍が攻勢を取る上に最も有力なるのみならず、實に最大の必要事たりし也。然るに今日となりては、佛軍をして其全力を集めて悠々獨軍の主力に對抗せしむるを得しめたる是れ其第一步を誤れるものにして、加ふるに佛國は白英兩軍の來り參加するあり、愈々其士氣を盛にして獨軍に當らんとす。而も況んや佛國國境の要塞甚だ堅固にして獨のそれに優れる、之を突いて容易に陷るゝ能はざるの素より論なきをや。

形勢斯くの如くにして、猶獨國が英國を敵とするに至りしは、「泣き面に蜂」とも謂ふべきものにして一大痛恨事たらずんばあらず。之に依りて英國陸兵の參加は獨にとりて未だ必ずしも介意するに足らずとするも、海上に於ける英國の壓迫は獨國の能く堪ふる能はざる所なり。知らず、獨國は何故に斯くも多くの敵を招いて、自ら好んで窮地に陷らんとはするぞ。

歐洲よりの戰報は區々にして信ずべからざるもの多く、頗る戰況の判斷に苦しましむと雖も、獨國の作戰が露國に對して守勢を取り、其一部を割いて之に備へしめ、主力を率ゐて佛軍を擊破し、一擧にして巴里を屠り、然る後徐ろに露軍に當らんとするにありしは、最早疑ふの餘地なし、而して佛國に對する獨軍の動員及集中運動の迅速敏捷なる驚歎に値ひし、軍國の好模範として推奬するに足るものあり。獨軍が「ルクセンブルグ公國」及白耳義の中立國を侵して進軍せんとしたるは恐らく獨國既定の計畫たりしならん。蓋し、佛國國境の要塞完備し、加ふるに地勢峻險、此方面より侵入せん事至難にして、到底急速の成功を期すべからず、故に之を避けて、「ルクセンブルグ」公國及白耳義を經て佛軍の左翼に當り

比較的平夷なる地勢を選び、之に捷路を取りて巴里に向はんとするの計畫に出でしは露國との關係上極力作戰の進捗を急速ならしめんとする獨國に取りて至當の事と謂ふべく、是れが爲め世界各國より中立國蹂躙の非難を受くるもまた已むを得ざる所たるべし。只獨軍が白軍の價値を誤認しいかに急速の進軍を要すればとて、リエージュの如き永久築城に對し强襲を以て一擧に略取せんとせしが如きは抑々吾人其意のある所を解するに苦しむもの也。

元來兵器の進步は攻者に利する事尠くして防者に利する事多きもの也。殊に佛白兩國は築城術の最も進步したる國にして、「リエージュ」要塞の如き彼の有名なるブリアルモン將軍の苦心慘憺たる研究の結果に成れる完全なる永久築城にして、之に最新式の兵器を備へたることなれば、いかに獨兵の眼中白兵莫しと謂ふと雖も、之を强襲して目的を達するの難きは智者を俟つて初めて知るべきにあらず、夫の日露戰爭に於いて日本の强襲が旅順の要塞に於いて屢々失敗し、遂に正攻法を採るに至つて辛うじて其目的を達し得たる事は專門家にあらずとも能く人の知る所たり。然るに獨軍の司令官は戰局の開展を急ぐの餘り、永久築城に對して强襲を敢行し、爲めに意外の不覺を取り、却て作戰の遲滯を招き、大局をして愈々不利の狀勢に陷らしめたり。若し最初より正攻の陣を張るか若くは之を包圍したる儘野戰軍の前進を圖りたらんには、今日如斯き苦境に陷る事無かりしなるべきを。

戰局の開展は獨對英佛白の全線に亙りて遠からず大會戰あるべき狀勢なるを以て、其結果を見ざれば未だ俄に大局の勝敗をトする能はずと雖も、六分の勝味は英佛露聯合軍に在りと謂ふべく、獨軍は縱令此大會戰に於いて勝利を博するを得るも、當初豫期の如く作戰を進捗せしむる事到底出來なかるべく、況や形勢彼に利にして此に不利なるに於いてをや。

轉じて露獨墺の國境方面を觀るに此方面も亦獨墺軍の爲めに有利ならざるものゝ如し。墺國が塞國に對して攻勢を中止し防勢を取りたるは當然なるも、少くとも此方面に五六個軍團を割きて塞軍に對峙せしめ置くの必要あらん。是れ獨墺軍の爲めに甚だしき不利を釀すものといふべき也。目下墺軍の主力（約十二軍團）と獨軍の約五個軍團は露軍に對しつゝあり。此方面は濕地多くして活動に不便なるも、露軍は既に兵力に於いて著しく優勢なるが如し。故に露軍にして若し急遽猛烈なる前進攻擊を爲さんか、獨墺軍は決して晏如たるを得ざるべき也。或は獨軍の白佛方面に於ける作戰の進捗するに先だち、露軍の伯林及維納を壓迫するが如き事無きや、未だ知るべからざる也。今の場合獨軍は內線の利を占むと雖も、こは素時日と距離との關係之を許すに非ざれば佛軍と露軍を逐次各個分別に擊破する企圖は恐らく畫餅に歸し、却て敵の包圍合擊を受くるに至るやも圖るべからず。

之を要するに、近き將來に於いて開かるべき白國及佛獨國境に於ける大會戰の結果は軈て今回の大戰亂の大局を裁決するに足るものにして、吾人は只刮目して次の戰報を待たんとするもの也。（八月二十日）

問題となれる潜航艇と飛行機

海軍少將 佐藤鐵太郎

此頃は歐羅巴で、榊舞臺の戰さが始つて、戰術上いろ〳〵の研究が行はれて居る事と思ふが、英吉利と獨逸との間にまだ大海戰が無いので、今日までは花々しい結果を見ることが出來ない。然し戰術とか戰略とか云ふことは、時代によつて多少違ふけれども、根本の原理に於ては左程に違ふものではない。此度の戰爭が果して如何なる結果を齎らすか、固より斷言は出來ぬのであるが、海戰上の戰略又は戰術の原理に大なる相違を來たすやうな事は先づなからうと考へる。

此頃人によつて潜航艇萬能論に近き議論を唱ふるものがある。又飛行機の効用を實際以上に誇說して、飛行機の爲めに從來の戰術や戰略が根抵より刷新を來たした如く論ずるものがある。此等の人の云ふ所を聞けば、今後は潜航艇と飛行機との世の中で、海戰の勝敗を決する最大條件は此潜航艇と飛行機の威力如何にある如く思はるゝのである。然しながら之は理想に走つて實際に遠い議論と自分は信じて居る。

彼の英吉利の有名なるスコット將軍が潜航艇の恐るべき事を說いて、海軍の兵略界に理論の華を咲かせたのであるが、之が議論の本は、ナツローシー（狹い海）を論據として云うて居るのであつて、總て狹い海峽を通らずに大作戰が出來ぬと云ふ英吉利の地理學上の位置を顧みて論じたもので、中には若干首肯すべき點がなきにあらざるも、之を以て直ちにハイ・シー（海洋）の戰術にまで持ち込む事は出來ぬのである。"Britania rule the waves."（ブリタニアは波を制す）と云ふのは決してナツローシーの意味でなくして全世界の上に於ける海洋戰を云ふものとすれば潜航艇萬能論は英吉利に於てさへ到底其儘に受け入れることの出來ぬものである。

未來の事を想像して見れば、少し奇矯な事を土臺として議論すれば何時でも多少適中するものである。然し之は空論家の云ふ事であつて實地家の云ふ事でない。そこで今一番よく潜航艇と飛行機の立場を軍人以外の人に分らせる爲めに手取早い說明を試みて見やう。

潜航艇の恐るべきは、自分の知らない中に敵の潜航艇から魚形水雷を發せられるからである。夫れ故に若し水雷防禦裝置が完全に行はれたならば何等怖い事が無いのである。昔、鋭利なる大砲が出來て、それが非常に進歩した時代には、裝甲艦（鋼鐵艦）の存在が危まれた事がある。然し之は最も鋭利なる大砲を防禦すべき鋼鐵板が無いとの前提から割出された杞憂論で、其後鋼鐵板に大いる改良が加へられ、其れ等の鋭利なる大砲に堪へ得るやうなものが出來、今日では三萬噸以上の大艦も出來て、戰鬪艦の價値は少しも減ぜず、鋼鐵艦無用論は一時の空論となり了つたのである。之と同じく水雷防禦裝置が絕對に出來ないとすれば、

潜航艇ほど恐ろしいものが無いかも知れぬが、之れは必ずしも出來ぬ事がないと思ふ。矢張り攻むるものあれば禦ぐものも出るものであるから、そんなに短氣に考ふる必要が無い。我々は近き將來に於て、水雷防禦裝置を施した立派な戰艦が出來るだらうと思ふ。要するに潜航艇は「薮枯し」のやうなもので、「薮枯し」は薮を枯らせば自分も亦枯れると同じく潜航艇は戰鬪艦があるから存在するが、若し戰鬪艦が無くなれば潜航艇もなくなるのである。潜航艇が海軍を支配すると云ふ事は此點から見てもあり得べからざる事である。一つの問題は、潜航艇と潜航艇と戰ふ時に如何なる結果を生ずるかと云ふ事である。潜航艇同志の戰さは暗闇の果たし合ひであるから双方共不便を感ずる。で潜航艇同志の戰さは必らず浮いてやる。元來夜戰と云ふものは無いものではないが、本當の戰さは夜戰を本とするものではない。潜航艇同志も默暗劇(だんまり)では本當の戰さは出來ぬのである。それで浮いて戰ふと云ふ事になれば、一種の新らしい、沈むことの出來る戰鬪艦が出來たと云ふ事になる。然し此場合には戰鬪艦は自ら沈む必要がなくなつて了ふ。之から後、潜航艇は段々發達して段々恐ろしいものになるには相違ないが、其恐ろしさは水雷防禦裝置の完全すると同時に亡くなつて了ふのである。詰りは艦隊戰の補助兵器として必要なりと云ふ程度以外には出ることが出來ぬものと私は信じて居る。

日本國の如き立場より見て、潜航艇を以て國防を全うしようと云ふやうな事は、思はざるの甚しきものであつて、日本の海軍が若し退嬰主義を採るならイザ知らず、若し如何なる場合に於ても世界の海上に濶歩して國利國運を進暢せんとするならば、潜航艇萬能論の如きは、極めて不祥の論であつて、苟も國を憂ふるもの丶贊する能はざる所である。

又飛行機は此頃大分流行つて來た。又實際驚くべき進歩をなした。然し之を以て非常に恐るべきものとは海軍では認めてゐない。恐るべき補助武器ではあるが、其れ以上のものとは思はれない。大體から云つて見ても、空を飛ぶもの丶大きなものは鷲である。地を走るもの丶大きなものは象である。而して海を泳ぐもの丶大きなものは鯨である。空を飛ぶものは餘りに重きことを許さない、又地を走るものも餘り大きい事を許さない。物理學上の此二つの制限は海上に於ては比較的寛やかである。で、此鷲と、象と、鯨との比例は恰度飛行機と陸上武器と海上武器との關係を代表さしてもよいやうに思ふ。それで飛行機と云ふものは其本來の性質上重いものを持つことが出來ぬものである。爆烈彈を持つ込むにしても大なる砲彈のやうな重いものを發射することが出來ない。詰り若干の爆發藥を落とすことに過ぎない。夫れ故に此爆發藥は無論大なる鋼鐵艦の甲板を貫いて底まで行くと云ふ事がない。上甲板で爆發して多少の損害を與へるに過ぎないんだからして、大艦の生命に關することは多くない。且つ速力の早い艦に對して高い處から落し込むと云ふ事は非常に六かしい事であるし、又高くなければ、甲板を打ち込む力が弱いのだから、從々恐ろしい事はない。夫れ故に飛行機も攻擊武器としてはたまで恐ろしいものとは海軍で認めてゐない。偵察用としてはなか〳〵効力

があるのであるが、之とても長い間飛が事ぶ出來ぬから、殊に日本の如き地勢より見て、敵國が長く飛ぶことか不可能であるから左まで恐ろしいとは思はれない。歐羅巴では國と國とが相接し、都と都とは近い。英吉利と佛蘭西でも僅かに二十浬を隔てるのみで、他の國は皆陸續きである。こう云ふ場合では飛行機でもなか〳〵有力なものであるが、日本は何處から來ても數百浬を隔てゝ居るから、今后飛行機が餘程進歩した後でなければ十分に其効果をあらはすことが出來ぬと思ふ。例へば膠洲灣の飛行機について考へて見ても、日本へ來るには五六百浬も飛んで來なければはらぬので、而かもそれが日本の西の端れまでゞある。國の端れまで來るに往復千浬以上飛ばなければならぬ。それはそれでよろしいが、今の處ではそれがなか〳〵六つかしいのである。朝鮮を經て來れば四五十浬で來るが、朝鮮は日本のものである以上は中繼の場所にはなすことが出來ぬから、日本は先づ當分は飛行機に對してはそんなに恐るゝ必要が無い。只外國の艦隊が日本の艦隊を押し附けて近海を縱横に飛行することになれば、軍艦の放つた飛行機は相當に恐慌を起すであらう。

今日では偵察用として　、餘り遠くへ用へられぬ原因よりして、甚だ多くを期待することが出來ぬが、兎に角從來の偵察艦などの行ひ得ない任務を十分に果たし得ると云ふ點は大分恐ろしいものである。而し之も矢張り補助武器としてであつて、飛行機が戰闘艦の代理をすると云ふやうな事はあり得ない。兎角人は新らしいものを見れば、それを實力以上に見る癖がある。此點を考へぬと飛んでもなき誤りをする事があるから、餘り遠き未來に空想を馳らせずして、實際的の事實に據つて眞摯なる判斷を下すのが何事に對しても必要なる事と思ふ。此意味に於て自分は潜航艇萬能論を唱へたがる人々の意見を重んじて見るとが出來ぬのである。

今後の歐羅巴の戰さで陸上に於ける飛行機は大分大きな効能があるであらう。殊に捜索の意味に於て大功をあらはすであらう。英獨の間の海戰も主としてナッロー・シーで行はれるであらうから驅逐艦と潜航艇の花々しき働きを見るであらう。然し之を以て總てに推して、我國に於ても亦直ちに潜航艇と驅逐艦は戰闘艦よりも有力なりと考ふるのは大早計である。假令ナッロー・シーの戰でも戰闘艦の偉大なる力があつてこそ此等の武器も働けるのであつて、或は此戰闘艦の權衡を破らんが爲めに一種の詭計として驅逐艦潜航艇が盛んに用ひらるゝことがあらんが、目的は互に敵の戰闘艦にあるので、海軍の主眼はどうしても戰闘艦にありといはなくてはならぬ。餘り浮か〳〵した判斷で軍備を誤らぬやうにしなければならぬ。強ち今度ナッロー・シーで行はるべき結果で日本國の軍備を律せんとするとなきやうにしたいものである。

歐羅巴の海戰の事について話せとの御註文であるが、實戰上のお話をするのは、話した方の國に對しても、又其敵對國に對しても少からざる不利を感ぜしめるとがあると思ふ故に、海軍の將校として之を口にすることを憚るから、只僅かに今回の海戰に問題となるべき潜航艇と飛行機の事について一言卑見を述べ、世の海軍に對する輕薄なるハイカラ者流を戒めんと欲するのである。(八月・七日)

（中付一の一）

小島烏水先生新著　中澤弘光先生裝幀及彩畫

浮世繪と風景畫

高野鷹藏君印畫

邦人の手に成れる

▲菊判數紙五百頁木版畫鳥の子裝幀美函入全一冊定價金參圓五千部限り

特價金貳圓五拾錢 郵送費十八錢

挿繪五拾葉は著者蒐集所藏の浮世繪版畫に依り錦繪、繪本、草双紙より、張交、短冊、狀袋、表紙、摺物、千社札の小藝術品までを網羅し之を複製するに當り正しく原畫の色調情趣を出ださんため全紫色乾板を用ひたれば**精巧なる浮世繪畫集**として見るべし**附錄**として、年表、浮世繪目錄、浮世繪研究書目等を添へたり。

日本を歐米に紹介し日本人の藝術として最も廣く世界的に研究せられ日本の近代藝術史上に最も燦爛たる光輝を放ちたるものは江戶時代の浮世繪なり、浮世繪の線と色と形の三つの調和は歐洲の新藝術に刺戟を與へ、反響漸く故國を見舞はむとす、しかして歐米に於ける浮世繪研究著述は數百種の多きに達したれども邦人の夫れに至つては極めて微々たり本書は文化文政以後、天保安政の浮世繪爛熟期を區域とし、その末期に達したる風景畫を主とし、浮世繪唯一の風景畫家にして江戶末期の色彩的叙情詩人なる歌川廣重を中心とし北齋、英泉、初代豐國、豐廣、國貞、國芳等の新風景畫、又は美人役者風俗畫に關する民衆藝術を著者が多年拾收せる豐富なる新材料と嚴正なる選擇と判斷とに依りて緻密明快に研究し、叙述し、詳論したるものなり、是れ一面は近代美術史也、木版畫史也、風景畫史也、摺と彫と色彩の工藝史也、一面は江戶時代の文明史也、人情風俗史也、浮世繪に對する智識の缺陷を補ひ、欲望を滿たすに、最も必要なる良書として、文藝美術工藝及び近代史の愛好者に一本を薦む。

浮世繪研究の大著肇めて出づ!!!

(中付一の二)

發兌元　東京市京橋區中橋廣小路六番地　振替口座東京四一〇九番　前川文榮閣

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

刮目して看よ愛國の士

最新刊發賣

英國フランクフォックス原著　今西嘉藏譯

將來の大問題　太平洋の爭霸戰

菊判上製　美本全一冊　金八拾錢　郵税八錢

本書は先年英京にて出版せらるゝや英米讀書界の注目を惹き多くの新聞雜誌は盛にこれを論評せり。內容は近世最も世界の注目する太平洋の問題を諸方面より說きたるものにして我日本に關する所多しされば本書を熟讀し自ら警め自ら覺醒するを以て愛國者の義務なりと信ず、今や世界の强國は數百の艨艟と數百萬の精英とを動かし有史以來の大事變起る。戰雲全歐の天を蔽ひ東洋亦多事なり是人類歷史の一大轉機に非ずや。舞臺一轉せば實に太平洋は世界の爭霸戰場なり其の意義を知らんには本書に依らざるべからず。そして本書の價値は愛讀者の再讀三考を以て初めて明らかなるべし。

海軍造船大監　櫻井省三校閱　鈴木周作譯

三版

ペルリ提督日本遠征記

菊判上製　正價金壹圓廿錢　郵税金八錢

本書はペルリ提督が條約締結の始末より日本の國情風俗習慣其他見聞せし百般の事物を記述し米國々會より出版せし物を譯者が更に史實と興味とを旨として譯せしもの譯文流暢些の澁滯なし乞御愛讀を給へ

發行所　東京市神田區表神保町六番地　振替貯金口座東京八七貳番　大同館書店

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

(中付一の四)



探訪奇譚

女の面影

松崎天民

一、お艶の行く方

瀧田樗蔭君足下、面倒臭いから貴君に宛た手紙風にして書き初めませう。私が最初に附けた題は、「探訪日記」と劃つたのですが、――「日記」では面白くないから、「奇譚」としたら何うですか。その「譚」も普通の「談」よりは、言偏に西の下に早の字の「譚」の方が宜い――などゝ、萬事貴君のお指圖に從つたのだから、若し此の「探訪奇譚」に、奇譚的妙味が無かつたにしても、それは私の知つた事ではないと云ふ事だけを、先づ以て斷つて置きたいと思ひます。――とは云ふものゝ、何も本篇一切の責任を貴君に嫁して、私は知らん顏で澄まして居らうなどゝ云ふ、そんな横着な考へは毛頭無いことゝ、序にお斷り申して置きます。

さて重ねて樗蔭君足下、私は先づこの「探訪奇譚」一篇を、何う云ふ形式で書かうかと、君と朝日新聞の倶樂部で別れた時から、いろ／＼と思ひ惱んで居ました。一つ大膽に小說風に書いて、氣の小さい小說家仲間を驚かして遣らうかとも考へましたが、餘計な事をして憎まれては大變だと思ひ、これまで通り溫順に月

並に、一人稱で遣付けることに極めました。誰かに宛た手紙風に書く（形式は、誰の發明した事か知らないが、實に此の上も無い便利な方法で、見渡せば今の小說にも、大分この手が流行して居る樣子ですね。私なんかも言文一致と此の手は、今の時代に生れ合した仕合せだと考へて、隨分古くから使つて來ましたが、何時まで經つても便利なものは便利で、少しも倦怠を感じないから可笑しいてはありませんか。「探訪奇譚」も、實は材料を生の儘でさらけ出して、そのまゝ並べてもものにならぬ事は有りませんが、日記と手紙とをちやんぽんに繋ぎ合して、それで一篇の文章で御座いも、隨分古くからある手てすからね。歐洲の大戰亂に東洋の時局切迫と云ふ時節柄、人並に心持だけは忙しいけれど二晩ほど餘る時間を割いて、改めて書きなぐることに極めました。

　こゝで又、楞陰君足下と來なくては、氣が轉らなくて面白くないけれど、やはり面倒臭いからズン／＼進みませう。本篇のヒロインお艶と云ふのは、前著「淪落の女」に出た一人に能く似て居ますが、全然別人の別事件で、別の觀察と別の感想が有る譯なんですから、何うか其のお積で御覽を願ます。

　時代も今から八年前の明治四十年、舞臺は銅山の暴動事件を背景にした足尾の雪景色、下手寄に通洞坑へ行く道を見せて、上手に煤氣た「だるま屋」の入口と云ふ構へ。「あか金のウ、元をたゞせば通洞坑内でエ、掘り出す鑛石選鑛してエ、燒いて溶かしてねエ、金にイしてエ、又も溶かしてエ、金エにするうる、サノサ」なんかのサノサ節で幕が開けば、至極くお誂へ向きてすが、事實はさう注文通りに參りません。

　思ひ起せば八年前の二月十日、世間を驚かして遂に兵卒の出動となつた足尾の暴動事件も、一先づ落著したと云ふので、兵卒や巡査は吹雪の中を引揚げてしまう。同事件のため東京から出張した各新聞の特派員達も、二人三人と出發して了つて、殘つたのは中外商業新報の尾崎君と、當時國民新聞特派員たりし私の二人

きりでした宿屋の二階の枕頭にまで、雪が吹き込むと云ふ寒い世界で、相應に働いた後の慰勞は、先づ何よりも酒だ〳〵と云ふので、とある飲食店で馬肉鍋の對酌を遣りました。この所活辯の説明に依りますと、「哀れお艶も憂きは流れの漂泊に、戀知り初めた吹雪の夕、足尾の風の身に泌みて……」ピリピリピリー。

尾崎君は最う忘れて居るかも知りませんが、其の時お酌をしたのが、當時十九か二十歳であつたお艶と云ふ女なんです。何でも色の白い丸々と肥滿した小柄の女で、前髮が少し縮れて居たのと、笑ふ度に左の上の金齒がピカ〳〵光つて居たのだけは、八年後の今日でもチヤンと覺えて居ます。御承知かも知りませんが、その頃足尾の料理屋や曖昧屋の表口は、障子に「しるこ」とか「うどんそば」とか書いてあつて、入口は頗る狹いけれども、裏の方は廣い客座敷になつて居ました。私等も裏二階の六疊の室に通されて、呼べば藝妓も參りますと云ふのに、たゞお艶を相手に酒を飲て、何でも吹雪の十二時頃に、やつと宿屋へ歸つて寢ました。

こゝでお艶の身の上話を聞いて、同情の涙をそゝいだとか、「東京へ來るが宜い、何處かへ世話してやらう」とか云つたのなら、「淪落の女」その儘の舞臺になる譯ですが、お艶には其の晩別れたのみで、杳として何の消息もなく、一年二年と關守の無い月日が過ぎました。

「この間八年經過いたし候」と云ふ、幕外の掲示が引込んで、馬子唄か何かで賑はしく幕が開くと、時は大正三年七月二十何日となつて、舞臺は翠緑滴る山中の稍低き所に變ります。正面上手寄りに華嚴の瀧の遠見、轟々と云ふ響が物凄く聞え、下手花道寄に掛茶屋、正面に筧から水の落る仕掛があつて、そこへサイダー五六本を冷してあります。舞臺一面涼しき光景。

茶店　老婆、小娘、學生、印絆纏などの仕出大勢が、口々に涼しいとか凄いとか物語つて居る處へ、荒い縞の浴衣にパナマ帽と麥藁帽をかむつた男二人が登場しました。齡の頃何れも三十七八歳、一人は痩せて一人は肥滿つて居ると云へば、最う大概お判りでせう。要

するに小說家德田秋江と新聞記者松崎天民とが、大汗ダラ〳〵で遣つて來た譯なのです。此の茶店は五郎平茶屋と云つて、華嚴の瀑壺へ行く道を開拓した男ですが、その婆さんと云ふのが五十餘、切髮にした人柄で、愛想好く、いろ〳〵の話をしました。私は何だか「何處かで見た事のある女だ」と云ふ樣な氣がして堪らないので、いろ〳〵と問題を持掛けては、强てその婆さんから華嚴の瀑の話やら、瀑て死んだ男や女の話などを聞きました。

「何處かで見た事のある女だ」と思つたのみで、五郎平茶屋の婆さんは、初めて逢つた女に違ひありませんが、驚いてはいけません、その話の中に「八年前のお艶」が、幽靈の樣に出て來たてはありませんか。いや、八年前の吹雪の宿に、足尾の曖昧屋て逢つたお艶と、少しも異らぬ一人の女が、去年の夏、この瀑て死んだと云ふてはありませんか。もとより婆さんの話は、斷の頃二十七八の女が、女には珍しく瀑の落口から飛込て、アッと云ふ間もなく底の藻屑になつたと云ふ事、及び其の女は東京吉原で女郎を勤めて居た者て、その前には足尾のだるま屋て稼いて居た事もある、とたゞそれだけてした。

けれども私は其の時、ふと八年前の雪の足尾を思ひ起して、婆さんの云ふ去年飛込んだ女が、あの時のお艶てあらう、何うもお艶に違ひ無いと云ふ樣な氣がして堪りませんてした。この事は直ぐ德田秋江君に話す積てしたのに、何う云ふ譯か忘れて一言も話さずに歸りましたが、私は幻覺とか妄想とかて無く、足尾て逢つたお艶の行く方は、華嚴の瀑壺より他所には無い樣な氣がします。道理には合はなくとも、私の直覺がさう極めて了うのだから、仕方が無いてはありませんか。笑つてはいけません。

瀧田樗陰君足下、こゝて又思ひ出の一斷片を語らねばなりません。それは足尾暴動事件のあつた翌年、何ても新緑の頃てしたらう、同じ國民新聞に居た今の讀賣新聞記者澤田撫松君が、吉原遊廓に心中があつたと

云ふので、二人曳を走らした事があります。

その頃澤田君は鼠色がゝつたメルトンか何かのモーニングを著て、始終山高帽をかむつて居たので、風采如何にも堂々として、その出入する場所に依つては、醫師にも見ゑ、裁判官にも見ゑました。それが二人曳の掛け聲勇ましく、心中のあつた女郎屋に乘込んだのですから、樓内の者はそれ其筋の御臨檢だとばかり、下へも置かず心中のあつた現場へ御案内申上げたものなんです。澤田君も去る者、「うん、さうか」などゝ納り返つて、心中の光景を仔細に觀察し、いざ引揚げ樣とする處へ、どや〳〵と入つて來たのは警察官の一行。

とう〳〵新聞屋さんなることが發覺に及んで、放々の體て歸社した事がありましたが、その時澤田君の目擊した心中の相手の娼妓が、實はお艶てはないかと思つて居たのてす。女は越後生れて、栃木縣下て酌婦になつたまゝ江戸一の何とか樓に六年四百圓とかて身を賣り云々と、當時の新聞に出た樣に記憶して居ます。私は雪の降る晩足尾て逢つたお艶が、娼妓になつて心中したとのみ合點して、その事を尾崎君に話した事もありますが、尾崎君は「人違ひかも知れないよ」と云つたのみて、別にお艶の行く方に就て、興味を有つて居る樣子はありませんてした。僅に一度逢つてお酌をして貰つたのみて、別れてしまへば路傍の人であるけれど、私は何う云ふ譯かお艶の身の上が忘れられず、雪の足尾の暴動事件を思ひ起す毎に、お艶の姿は何時も幻の樣に、眼前に浮んて居ました。

お艶と云ふのは世間の通り名て、親から貰つた名前は別に有つて居たに違ひありません。澤田君の見た心中した女郎が、其のお艶の成れの果か何うか、最う少し突込て調べさへすれば、何もかも判つたてせうが、私は心の中て「お艶に違ひ無い」と極めて人知れず、さうした流れ渡りの女の運命を、世にも哀れな者の樣に眺めることに、一種の小説的興味を有つて居ました。「お艶は死んだ！」私は其の頃からさう信じて、既に「淪落の女」の第一ページを人知れず推敲して、腹案成りぬと喜んて居た位てありました。

月日は又それから二三年過ぎて、私は東京朝日新聞社に入り、或る夏の初め避暑地めぐりをした時に、不思議にも亦お艶らしい女の噂を聞きました。それは日光から大洗の方へ廻つて、寄せては返す波の音を聞きながら、金波樓の三階で夜を更かした時の事です。

人の好さ相な若い巡査が訪ねて來て、平磯や湊の夏場の景氣を話す間には、何うしても「女」の話が興味の中心になりました。毎年夏季になると避暑客が多く入り込むので、宿屋でも料理屋でも臨時に女中を雇入れるが、いやもういろんな女が來ますよと云つて、若い巡査は變な笑い様をしました。東京を食詰めた女も來るが、田舍の町々を流れ渡る女も入込て、兎もすれば風俗を亂して困りますと云つて、巡査は憤慨に堪えぬ様な顏色を示した。「先日も下野でだるまをして居たと云ふ莫連者が來ましてね、酒に酔うては死ぬる〱と騒いで居ましたよ」と云つて、若い巡査は「一巡査の酌婦觀」なるものを、相應に興味ある口調で語り續けました。

その女はお梅とか云つて、男を相手にして生活して居る女の多くが持つて居る病氣のために、人並以上に苦しんで來たらしい様子があつたと云ひます。色のドス黒い髮の薄い縮れ毛で、例の人柄を卑しく見せる様な金歯を光らせて、恐ろしく自暴な物言ひをしては、男と云ふ男を呑んでかゝつて、何とも早や始末に終へなかつたさうです。酒に酔ぱらつては誰彼の差別なく、「心中しないか」とか「妾と一所にお死によ」とか云つては、相手が恐がつて逃げるのを見ては、「あゝ男てものは弱いねえ」としみ〱と云ふのが癖だつたさうです。その内に二十何圓かの前借を踏倒して、房州邊へ逃げて行つたさうですが、「私もこゝで足掛五六年巡査を勤めて、隨分いろんな男や女を見ましたが、お梅の様な奴は初めてゞした」と云つて、若い巡査はまた變な笑ひ様をしました。

其の足尾で逢つたお艶とは、似ても似つかぬ別人であるかも知れませんが、私は其の時にも、お梅が「足

尾のお艶」ではないかと思ひました。それがお艶で無いにしても、お艶の様な女が通つて行く道であるものを、全體お艶は生きて居るであらうか、それとも吉原で死んだのであらうかと、いろ〳〵と思ひ惑ひました。生きて居やうが、死んで居やうが、私自身には何の關係もない女ですけれど、私は「お艶の行く方」が、何う云ふ譯か氣掛りになつて仕方が無いのでした。

樗蔭君足下、雪の足尾から華嚴の瀑になるまで、八年の月日の間に、私はまだいろ〳〵とお艶らしい女の話を聞いたし、お艶らしいいろ〳〵の女にも逢ひました。けれども私の記憶は、あの吹雪の夜に逢つたお艶にのみ殘つて、今頃は何うして居るであらうと、其の行く方が氣懸りになつて居ました。

吉原で心中した娼妓も、大洗で暴れたお梅も、また五郎平茶屋の婆さんが話した投身者も、實は皆別々の女であつて、當のお艶では無いかも知れません。お艶はあれから曖昧屋を出て、然るべき緣あつて人妻となり、今頃は子供の二三人も生んで、納つて居るかも知れません。或はまた大洗から房州へ逃げて行つた女が、當のお艶であつたかも知れないし、吉原で死んだ娼妓がお艶であつたかも知れません。けれども私は五郎平茶屋の婆さんが話した投身女が、何うもお艶に違ひ無い、いやお艶であつて欲しいと云ふ樣な氣がしてなりません。

こゝで少しお艶の思ひ出を語りますが、雪の足尾で初めて逢つたお艶は、若いに似合ずしんみりとした處のある女でした。何んな事を話したか、今は最う忘れてしまつたけれど、斯うして彼の雪の足尾の一夜を想ひ起して見ると、お艶には其の時から「死の影」がありました。何でも古河と銅山とを詠み込んだサノサ節を唄つた事と、雪の降る寒い晩だのに、「旦那、ビールは如何……」と云つた事だけを、漸と思ひ起す事が出來ました。私も其の晩は酒に醉つて居ましたが、宿に歸ると覺めてしまつて、蒲團の中にもぐり込んで、お艶の樣な女の行末をいろ〳〵と空に描いて、涙をこぼし

たことなどが、次第に思ひ浮かんで來ました。「こんな女が方々を流れ渡つて居る間に、男を屁とも思はない捨ばちの女になるんだ。そして知らぬ他國の冷たい土に化るのだ」私は斯う云ふ風にお艶の行く末を眺めて、八年の月日を過ごしたのです。

記憶に殘らねばならぬ足尾の銅山、雪の細尾峠、暴動事件、爆裂彈の響、坑夫飯場、暗黑な坑内などは、少しも思ひ出に浮かばず。僅に其の舞臺の片隅に、小さく人目を忍ぶ樣に現れた「お艶」だけを、八年後の今日まで忘れずに居るとは、何う云ふ譯でせうか。お艶の幻は私の心の奥深く殘つて、或は死んだり或は生きたりして居ますが、當の本人は其の後何うしたでせうか。華厳の瀑で死んだ女――それがほんとのお艶であつてくれゝば、私も安心して「幻影のお艶」を忘れることが出來るのに。……華厳の瀑に問へども、たゞ轟轟として、答ふる處無しだから困ります。

實に茫漠とした愚かな事々話して、何とも早や御恐縮樣でした。多忙な探訪記者の生活にも、斯うした淡い、悲しい思ひ出はあると云ふ――たゞ其の一例を上げたのに過ぎません。

二、汽車乘のお玉

「お艶の行く方」は夢の樣な捉へ所の無い、たゞ私の感興を主とした話でしたが、これから申し上げ樣とする「汽車乘のお玉」は、そんな生柔しい物語ではありません。色氣あり、艶氣あり、妖氣あり、毒氣あり、堂々たる男を手玉に取つて、その生血まで吸うたと云ふ、謎の樣な女の身の上話なんです。

申すも畏多い事かも知れませんが、大正元年九月十四日、先帝陛下御大喪の通信任務を帶びて、私は他の同僚達と一所に、京都へ出張しました。宿屋の二階に寢て居た午前一時頃、東京の本社からの電話に依つて、乃木大將自殺の事を知り、床の上に起上つて、ハラ〳〵と落涙したり、親しく御斂葬の大儀を拜して、未だ曾て經驗した事のない敬虔な感に打たれたり。往復一週間の短い旅でしたけれど、新聞記者たる私の生涯には、

忘れることの出來ない深い感銘を刻まれました。「汽車乘のお玉」は、その歸途の汽車中で見聞した「探訪奇譚」の一つなのです。

京都へ行く時は同僚五六人と一所でしたが、歸途(かへり)は皆ちり〳〵ばら〳〵になつて、私は大阪の妻の實家へ逗留して居た二男達郎を連れて、大阪を八時何分かに出る一二等の臨時急行列車に乘りました。この列車は乘客の輻輳した時にのみ仕立る汽車ですから、二等の寢臺は殆どガラ空で、二人床に入つた達郎と私とは、餘りの寂しさに物恐(ものおぢ)する程の有樣でした。それでも京都を過ぐる頃から、一人二人と寢臺車に入る人があつて、名古屋に着いた眞夜中の十二時過には、寂しかつた寢臺車も何となくザワついて、プラットホームには見送りらしい女の名古屋辯が、浮ッ調子の濱葉に聞えたりしました。達郎はウト〳〵と寢入りましたが、私は汽車中では熟睡の出來ない質(たち)なので、名古屋を出ると直ぐ喫煙室に入つて、莨を吹かしたり、ビールを取寄せて飮んだりして、折柄來合せた車掌君を相手に、四方山の話を初めました。

その車掌君は三十前後の快活な男で、少年の頃から列車ボーイになつて、殆ど汽車の中で人と爲つたとも云つても宜い程の男でした。私は先づ東海道を股に掛けて歩いた箱乘の今昔に、談話の端緒を開いて、いろいろと根掘り葉掘り尋ねますと、その車掌君も餘程の話好きだと見えて、社會部の探訪記者たる私の耳にも不思議な珍奇ないろ〳〵の事件を話してくれました。その車掌君は私が東京朝日の記者だと判ると、「あの淪落の女の……貴君(あなた)が左樣(さう)でしたか」と云つて、終(しまひ)には二人とも懇意な友達の樣な氣になつて、汽車の話も殊に「汽車中の女」の話に興じ合ました。

然し車掌君の話を聞いたと云ふだけでは、普通の物語になつてしまひますが、不思議な事には車掌君の話した女主人公が、偶然にも私と同じ二等の寢臺車に、然も私の二人床と斜に向ひ合つて乘つて居たではありませんか。この話に若し捉へ所があるならば、それは其の女と私とが、同じ汽車に乘合せたと云ふ、不思議

な樣な、何でも無い樣な一種の因緣だけです。

樗蔭君足下、名古屋から二等の寢臺車に乘つたのは、五十前後の商人風の男と、六十餘の人柄な老婆の二人連と、三十前後の大丸髷に結つた一人旅の女と、たゞ二人だけでした。古い形容ですが汽車は眞闇な世界の中を、猛獸の樣な唸り聲を上げて、東へ〳〵と凄じく進行しました。

商人風の男と老婆とは、食堂車に近い端の出口の方の下へ、向ひ合つて席を取り、大丸髷の女は私等の二人床の向側の下に、大きな信玄袋を一個置きました。小柄の女でも大きな丸髷に結ふと、背が高く見えるものですが、その女は五尺二寸位はあつたでせう、中肉のスラリとした姿は、見上げる程でした。色白の面長な派手な容貌で、眼と口許に男を惹付ける力を持て居る上に、黑つぽい地味な衣服を着た姿が、何とは無しに意氣に見えました。左樣、金持に根引されて御素人樣になつた藝妓の果か、又は割烹店の女將と云つた風て、人柄な中にも世話にくだけた風がありました。

その女は汽車が名古屋を出ると、直ぐボーイを呼て寢床をつくらせ、紅入らずの友仙の長襦袢の上に、中形の浴衣を重ね着して、寢床の中に入りました。「新橋まで」とか何とか云つて、ボーイに銀貨を二つ三つ握らせた風など、如何にも旅馴れた女の樣に見えました。こんな事を云つても何の興味もありますまいが、私は其の女が誰かに似て居ると思つて、あれかこれかと考へたまゝ私の妻の知合であつた大阪の落語家曾呂利新左衞門の細君の姉か妹かにそつくりだと云ふ事を思ひ浮かべました。若く見えて三十前後ですから、最う五六になつて居たかも知れませんが、僅の時間に見た身の擧止の色ッぽいことや、大丸髷の意氣に見えたことなどを考へ合すと、何うしてもたゞの女ではありません。男のためやら自分の慾やらで、普通の女の思も寄らぬ樣な道を、歩いて來た女であると云ふことだけは、一時間も經たぬ間に看破して了ひました。

私が喫煙室に入つて、話好きの車掌君と四方山の話

を初めたのは、もとより大丸髷が寝臺に入つてから後のことでした。車掌君は先づ其の列車ボーイ時代の思ひ出に微笑みながら、藝妓と素人とは直ぐ見分けが付く事、祝儀は藝妓の方が餘計にくれる事、素人の女の方が圖々しくて、能く奥様らしい身分の女に手を握られた事などを語りました。そして「何んな身分の女でも、一人旅をすると男を賴るものですな」と云つて、車掌君はこゝへ書くことを憚らねばならぬ様な、「汽車中の女の秘密」を、詳しく聞かせてくれました。

静岡を中心として、東京と名古屋の間を稼いで居た箱乘に就いては、殊に面白い不思議な話をしました。「顔を見知つた列車ボーイに逢ふと、箱乘の方でも仕事が面倒だと見えまして、十圓紙幣などを默つて握らせたりしたものです」と云つて、車掌君は「箱乘の技術」までも、詳しく説明してくれました。

同じ箱乘でも男の方は、紳士紳商に扮して出沒したさうですが、女は令夫人や令孃に化けて、色仕掛て仕事をするので、見て居ても面白かつたさうです。仕事をする區域は、名古屋から静岡までの間か、静岡と東京間かで、女の方は主として此の兩區域に跨つて、獨得の妖術を振つて居たさうです。

梛蔭君足下、また面倒臭くなりましたから、これから以下は總て其の車掌君の談話を、そのまゝ取次ぐことにしませう。私は豊橋から濱松、濱松から静岡までの間、喫煙室で莨を吹かしながら、淺からぬ興味を以て其の話を聞いたのです。車掌君曰く「女の箱乘では、何と云つてもお玉と云ふ奴が女王で、男の仲間にまで幅を利かして居ました。お誂へ通りに十六の春から手癖が惡く、二十歳で萬引、二十五歳で立派な箱乘になつて、五六年が間は無暗矢鱈に活動したもんです。容色が好くて品があつて愛嬌があつて、男好きのする何だと云ふんですから堪りませんや。」

「僕は其の仕事をする處を、たつた一度しか見ないのですが、遣り方に二つは無かりさうです。新橋を夜行で立てば、夜明けの名古屋まで、名古屋を深更に出れ

ば、國府津か新橋までの間が、その妖術の舞臺なんてす。先づ最初はボーイを呼て、「何の邊て夜が明けませうね」なんかと云ひながら、それと目星を付けた男の顏を見てニコリとしたものです。正面から女に見られて、心あり氣な笑を浴せかけられると、大概の男はグニヤリと參つてしまうと見え、直ぐボーイの答へを引たくつて、「沼津の手前て明るくなるてせう」などゝお出なさるんてす。女は投げ掛けた探りの糸に引掛つたとばかり、「ては富士山が拜めますね」なんかを端緒にして、馴々しく話し掛けるのが序幕の段取てす。以前は能く僞せ病なんかになつて、藥を貰つたり介抱されたりするのを、接近の動機にしたものてすが、月並ても話掛けの手を使ふ方が容易なんてすね。」

「それから後の局面發展は、實に見て居てもハラ〳〵するほど急速力に進みます。靜岡ては最う夫婦か何かの樣に馴々しくなつて、箱根の隧道の中ては何んな巫山戲方をするやら、國府津てはチヤンと新婚旅行か何かの樣に、箱根行の電車の場となる譯なのてす。實に圖々しいもので、顏を見知つたボーイが居て、わざと前に立つて凝視てやつても、平氣の平左衛門て納り返つて、「ボーイさん」なんかと猫撫聲の秋波を送るのです。さうして喰へ込みからたらしと秘術を盡して、卷上げと云ふ段取になるのてすが、何と云つても女仲間ての名人は、「奥さんお玉」と云ふ奴てしたつ」

こゝて車掌は聲を低うし、「名古屋から乘りましたてせう、大丸髷に結つた女が……、貴君は何と見ました彼の女を……。驚いてはいけません、彼奴が「奥さんお玉」と云つて、三四年前まて東海道を股に掛けた箱乘なんてす。今は最う足を洗つて、名古屋の女郎屋の妾になつて、昔の事なんか、けろりと忘れた樣な顏をして居ますがね」と笑ひました。

椰陰君足下、私等の筋向に乘合した大丸髷が、昔の「箱乘お玉」てあつたには、實に驚いてしまひました。箱乘にそんな女があつた事も、「奥さんお玉」と云ふ名前も、初めて車掌君から聞いたのてすが、意氣な人柄な

大丸髷が、其の當人であると聞いた時には、容易に信じられない事實として驚きました。

夜が明けてから新橋へ着くまで、私は大丸髷の一擧一動を仔細に注意して觀察しました。何んなに身境が變遷して居ても、若い時から暗い道を歩いて來た女には、一生涯拭ふことの出來ない一種の曇が、容貌や風釆や言語や擧止の何處かに、必ず一つ二つは殘つて居るものです。「あの細君は藝妓だつたさうだ」と云ふと「道理で衣服の着こなし方が違うと思つた」と答へる樣に、誰にでも其の前生涯を成程と合點させるだけの特異な點が、一つや二つは殘つて居るものですが、大丸髷には「成る程、箱乘であつたか」と首肯せる樣な點は一つもありませんでした。

無論、監獄の飯も食つたでせうし、女は女だけの危い道も度々歩いたでせうが、私の見た大丸髷の顏や姿には、そんな恐ろしい前半生の暗い影は、少しも宿つて居ませんでした。如何にも「箱乘を稼いで來た女らしい」と、卑み見るべき點は一つも無いにしても、「あんな顏や姿をして居るが、昔は箱乘の惡人であつた」と云ふ、淡、憎惡の念が起りさうなものであるのに、そんな心持さへ起らなかつたのは、何う云ふ譯でせうか。男でも女でも、過ぎ去つた月日の影は、何時までも其の心と身とに喰ひ入つて、現在の月日と隔れば隔るほど、昔の影が其の身に附き纏ふものですが、不思議なことには、私の見た大丸髷の顏や姿には、少しも過去の影が見えませんでした。大浦兼武子爵には警察官吏の面影があり、大倉喜八郎翁には行商人の姿があるのに、大丸髷のお玉には、奥さんお玉の箱乘時代の名殘を、何うしても見る事が出來ませんでした。

朝、洗面所の前で車掌君は私の肩を叩き、「何うです、あれが箱乘だつたとは見えませんでせう。お化けの上手奴、とう／＼ほんとに化けてしまいやがつた…。女には廢物が無いとは、實に能く云つたものですね」と云つて、カラ／＼と笑ひました。「あの女が箱乘であつたとは、何うしても思はれないよ。君の思ひ違ひか、或は他人の空似ではないか知らん」と私が云ふと、車

掌君は「貴君も羂にかゝる御連中さんですね。御覧なさい、あの眼の色を、あの眼の光を……。顔や姿は變つても、あの眼の工合だけは爭はれませんよ。箱乘の眼……」と冷かに笑ひました。

箱乘に一人の知人も無い私は、箱乘の眼が普通人の眼と違つて居るか何うかを、明かに確める事は出來ませんでした。大丸髷の眼だつて、男を惹付る一種の魔力は持つて居ましたけれど、それを箱乘の眼だと極めてしまうのは、少し慘酷な樣に思ひました。

昔は汽車稼の惡婦で、箱乘お玉と云はれた莫連者であつたかも知れませんが、私の見た大丸髷は、押しも押されもせぬ女房振りでした。遊廓で育つたらしいそれ者の匂はして居ましたが、その全身には「安心」と「幸福」とが、漲り渡つて居る女の樣に見えました。

大丸髷は靜岡で買つた鯛飯を國府津で食べて、やがて梨の皮を剝き初めました。達郎の姿を見ると、大丸髷は初めて私の方に向いて、「坊ちやん、お幾つ、おとなですね」と云つて微笑みました。そして皮を剝いだ梨を一個、食堂車から取寄せた皿にのせて、「坊ちやん、召し上れ」といつて達郎の前に持て來てくれました。その時、何とも云へぬ好い香水が匂つて、如何にも女と接近して居る樣な氣持を起させました。大丸髷の昔は知らず、貰つた梨の一片を私も食べましたが、何とも云へぬ甘味がありました。

私はたゞ「有難う」と云つたのみて、世間話一つもせず、大丸髷と別れて了ひました。別れて三年、今はその安否も知りませんが、今年も梨の季節となつたので、梨を食ふ毎に、「大丸髷」を想ひ起し、車掌君を想ひ起し、「汽車乘のお玉」を想ひ起します。車掌君から話を聞いた時には、それても奇異の感に打たれましたが、今は何う云ふ譯か、あの大丸髷とお玉とは、別人てある樣な、別人てあつて欲しい樣な氣持がして堪りません。「箱乘なんか稼いだ事のある女が、あんな美味い梨をくれるものか」、そんなことさへ思はれるのです。こんなことを車掌君が聞いたなら、「貴君なんか甘いもの

さ、梨一個で罪に陷つてしまうとは、實に脆いもんですね」と云つて、冷笑するかも知れませんが、罪も美しい甘い罪なら、一度や二度位は自分から進んで行つて掛つて見ても宜いと思ひます。

樗蔭君足下、大丸髷は車掌君が話した樣に、箱乘お玉の復活した姿であつたかも知れません。私の眼に昔、惡い事をした女の樣に見えなかつたのは、大丸髷それ自身が前半生の罪を悔いて、その恐ろしい思ひ出から脫け樣として、努めた結果に他ならんでせう。けれども車掌君の話を何處までも非難して、「私の見た大丸髷の過ぎ來し方に、箱乘など、云ふ惡事があるものか」と解釋し、箱乘お玉と、大丸髷とは全然別人の樣に認めるのは、一種の觀察であり、同情ある見方であると思ひます。それにしても、大丸髷や車掌君は、今頃何所に何うして居ることやら、思へば旅路の邂逅ほど果敢ないものはありません。

面白かるべき筈の「汽車乘のお玉」も、遂に要領を得ぬ無駄話になりましたが、明治天皇大喪儀と云ふ、崇高至大な事件を背景にして居るだけに、淺からぬ思ひ出があります。當面の舞臺に登場して、事件の中心になつて居る主要人物よりは、何の科白もない仕出しの端役の方が、何時々記憶に殘るのは、何う云ふ譯でせうか。私はこれを「探訪記者の變態心理」の一つに數へて、自分一人の「詩」と「小說」として、一種の興趣を味つて居るのです。

三、自殺者の女房

何の奇も無く、何の怪も無い愚な物語が續きました。奇も無く妙も無いだけに、平凡ではあるけれども、眞實であると云ふことだけは、承知して頂きたいのです。「自殺者の女房」も亦、標題だけは面白さうですが、中味は實に詰らないもので、たゞ女と云ふ動物は、如何なる大事の場合にも、「嘘」と「淚」を忘れないと云ふ、其の一例を語りたいのです。

時は明治四十三年、所は赤坂區とのみで、詳しい事は何も彼も忘れて了ひました。何でも蠣殼町邊へ出沒

して、相場を遣つて居た男が、主家の金を費消して申譯なさに、自殺した事件がありました。何でも無い警察事件でも、針小棒大に騷ぎ廻つて居た頃のこととて、各新聞社から敏腕の探訪記者が出掛けて、自殺者の家の附近には、十人餘の同業者が集つて居ました。そして恰度警察の臨檢中だから、最少し待つた方が好いと云ふので、仕事には競爭しても、用の無い時は極めて心安く暢氣なもので、大きな聲で馬鹿話をしたり、莨の煙を吹かして笑ひ興じてたりして居ました。

その間に臨檢が終つて、警察官が引揚げてしまひますと、自殺者の家は内から戸を閉めて、一切の訪問者を寄せ付けぬ様にしました。如何なる場合にも突付かつて、事件の眞相を探究せねば承知の出來ない連中が、十人餘も集つて居るのですから、「怪からぬ」と云つて憤慨する者あり、「人を馬鹿にして居る」と云つて嘲る者あり、「戸を叩き壞せ」と叫ぶ者あり、その騷ぎと云つたらありませんでした。中に氣の利いた老探訪者は、横手の垣根を破つて裏口から訪問し、何人も居ないのを幸に、ズン／＼二階へ上り込で、未だ生々しい血が流れて居る自殺の現場を見て、逸早く歸つてしまひました。或る者は又表口から大きな聲で、「新聞屋に話をしないと、嘘を書かれて反つて迷惑しますぞ」と怒鳴るなど、それほどの大事件でもないのに、何う云ふ譯か、探訪記者連中は其の時興奮し切つて居ました。

さうして騷いだ所で、新聞に依つて多少の異同はありますが、長くて一段半か短くて半段位の記事にしかならぬのに、事件に突付かつた探訪者の頭には、行數の長短などは問題になりません。たゞ一刻も早く事件の眞實が知りたい、姓名、年齢、時日、場所、原因、經過、結果が知りたいと、其の事にのみあせつて居ました。斯うした場合に、老巧な者は新聞記者なることを標榜せず、勿論名刺を出す樣な愚な眞似もせず、有耶無耶の間に相手を煙に卷いて、鎌を掛けたり探りを入れたりして、有りと有らゆる探訪の秘術を盡したものです。

某社の某君が威猛高になつて、「新聞屋に逢はない

と、嘘を書かれますぞ」と怒鳴つたのが功を奏して、やがて表戸が開かれました。應對に出たのは眼を泣き腫した女で、齡二十七八の束ね髮、「たゞ今取混で居ますので……」の紋切形に、同情したり氣の毒がつて居る樣な弱いことでは、到底、社會部面の探訪記者などは勤まりません。

然し考へて見れば氣の毒なものです。人一人が自殺したと云ふ事件の裏には、並大抵ならぬ事情が潜んで居る上に、豫期せぬ不幸な事件が起つたのですもの。其の家族が上を下へと狼狽して、新聞記者などの相手になつて居られないのは、決して無理な事ではありません。そんな事は何も彼も承知して居ながら、非人情らしい顏をして、人の內事にまで立入つて種々の事を探聞せねばならぬとは、如何に商賣とは云ひながら、探訪記者も決して容易な仕事ではありません。

出て來た女は、自殺者の女房でした。二世を契つた可愛の良人が、我と我が咽喉を突いて死んだのですもの、何うして死んだか位の事は、もとより知つて居たに違ひありません。けれども其の女は潜々と泣くのみで、何事も語らず、強ひて尋ねると「氣が狂うて死にましたのです」と答へるのみでした。そして「出來ますことなら、何うか新聞に出ませぬ樣にして下さい」と云つて、又も潜々と泣きました。氣の毒ではありましたけれど、私は少しも同情が起らず、たゞ女は如何なる場合にも、涙を唯一の武器にして、男と云ふ者に反抗する動物である、と思つたのみでした。

翌日現れた各新聞の自殺記事は大同小異で、中には自殺者の妻の談話を、長々と書いた新聞もありました。この頃の樣に社會部面の內容が變化して來たり、大事件が相次いで起る樣な時節ならば、名も無き市井の一商店員の自殺などは、六號活字で五六行に疊み込まれるが、新聞社に依つては一行も掲載されずに事濟になるのが例です。けれども前申した通り、三面記事を編輯する人々の頭に、未だ警察事故が重きをなして居た時代ですから、「自殺」事件なども興味の外に捨る譯に

は行かなかつたのです。私は其の事件を探訪し、その事實を書きましたけれど、今は最う何も彼も忘れてしまつて、頭に殘つて居るのは、自殺者の女房が泣いた顏と、何事も知らぬ存じませんと言ひ張つた、その殊勝氣な嘘の言葉のみです。少し手を廻して調査すれば、苦も無く判つた「自殺の原因」であるにも拘らず、新聞に書かれるのを恐がつて、「知りません」の一點張で逃げた其の哀れな女の顏を、何うして忘れることが出來ませうぞ。

自殺者の女房は、色の淺黑い瘦せ形の中背で、泣き腫した眼に何とも云へぬ風情がありました。「知りません、存じません」と云つたのは、强ちに新聞記者を欺くためのみで無かつたことは、其の悲し氣な表情でも判りましたが、事件の要領を得ないで苦んで居る場合には、相手の人柄などを見て、一々同感を寄せて居る譯には參りません。たゞ新聞記者の職責を誤解した者の上に落る氣の毒なる結果を思ふて、「宜い氣味だ」と云ふ樣な、一種の痛烈な反感を覺えるだけです。世間の人々が新聞に現るべき事件の當事者か、又は其の關係者の位地に立つた時、報道機關の一たる新聞記者に對して、何故に正直に爲り得ないのか、私はそれが齒がゆくて仕樣がないのです。

樗陰君足下、大切な亭主が自殺した場合にも、尙且つ「涙」と「嘘」の二つ道具で、私等を誤摩化さうとした「自殺者の女房」は、其の後何うなつたと思ひます。如何にも昔の小說の樣な話ですが、私は去年の春四月或る所で、端なくも其の「自殺者の女房」の變り果た姿を見て實に驚いてしまひました。

手ッ取早く云へば、其の女は操を賣らねば立行かれぬ樣な、或る場末の曖昧な飮食店の酌婦になつて居たのでした。何の用件であつたかは忘れましたが、東京市內でも郡部に近い其の場末へ行つて、日が暮れて社へ歸る途中、餘の空腹に堪え兼て、私はとある一軒の「御料理」とした家に入りました。三疊や四疊半の小室が二つ三つある、煤氣た天井に破れ壁、新聞の新年附

鎌が疾に張つてあつたと云へば、最う大概の事は想像されるてせう。お酒一本に生卵と海苔、何かの煮魚て御飯を食べて、この御會計六十五錢の處へ一圓置いて茛を一吹と云ふ其の時てした。

今までお酌をしたり給仕をして居た女、三十前後の色の淺黒い痩せた女は、「人違ひだつたら御免なさい、妾、何處かて旦那にお目にかゝりましたよ。さう、さう、彼の時てす、ねえ旦那、あなたは新聞屋さんではないこと……」と、突然斯う云ふてはありませんか。私は「左樣だね、新聞屋さんかも知れないが、お前に逢つた事は無いよ、今晩初めてお目にかゝつたのぢやないか」と氣にも止めずに笑ひました。女は私の顏を一心に凝視て居ましたが、「あら厭だ、あなただよ、あなたに違ひありませんよ。亭主が自殺して泣いてるのに、人を捉まへて餘計な事を根掘り葉掘りしたのは……。ね、てせう、赤坂の、相場に失敗して主人の金を費ひ込て、剃刀て自殺した男のあつた家……。妾が彼の時お目に掛つた女ぢやありませんか」と云つて、默つて私の煙草を一本取つて、別に極が惡るさうな顏もせず、スパ／＼と煙を吹かすてはありませんか。

私は其の時ほど驚いたことは有りません。「え、あの時の……あなたが……、さうだ、さうだ、あの時の……あなたはさうだつたねえ。それにしてもハイカラに結つて居た奧さんが、何うして斯んな所て、銀杏返しなんか結ふ樣になつたのてす。一度逢つた人の顏は、滅多に忘れる樣な事は無いのに、あなただけは忘れて居た、實に驚いたねえ、一體何うしたと云ふのてす。」私が疊み掛けて斯う云ふと、女は「新聞屋さんには怨恨があります。けれども妾がこんな身分になつたのは、新聞屋さんにも判らない運なんてす。ね、旦那、驚いたてせう」と云つて、髮のほつれを掻き上げました。

笑つては不可ません、私は此の「自殺者の女房」のために、更に櫻正宗と刺身とを注文して、十一時頃まで飲みました。女も相應に飲んで、膝をくづしたりしましたけれど、何うして此んな所へ流れて來たかは、「新聞屋さんは書くからね」の一語に逃げて、何うしても

打明け様としませんでした。

昔の「自殺者の女房」、今の「淪落の女」たる彼は、瀕に「泊つておいてなさいよ」と云ひましたけれど、私は事無きを得て歸りました。そして金に困つて自殺した男の運命と、男に死なれて墮落した女の身の上とを思ひ合せて、悲痛慘苦の情に堪えませんでした。

其の女にはそれ限りで逢ひませんが、思ふに今も尙場末の小料理か、田舍の飲食店で、いろんな男の相手をしながら、酒に醉つたり、唄つたりして居ることでせう。「自殺者の女房」から、「飲食店の酌婦」へ落るまでには、女の胸には思ひ餘る程の苦勞もしたでせうし、女の歩くべきで無い暗い道も歩いたでせう。時には亭主の後を追うて、自分も亦剃刀で咽喉を突かねばならぬ程の、憂い苦しい目にも逢つたことでせう。女が「奥樣」から「酌婦」に爲るのは、男が思ひ詰めて死ぬよりは、幾倍も悲しいでせうし、幾倍も苦しいでせうし、幾倍も忍び難い事でありませう。

それにしても、世に女ほど幸福な者は無いと思ひます。切迫詰つた男の逃げ場は、自分で自分を殺す道がたゞ一つ有るだけですが、女は自分を殺さなくても、「貞操」を殺しただけで、生きて行くことが出來るのは或る意味での幸福かと思ひます。男の生命は、自分の全身そのものが生命であるのに、女の生命は、自分の一部分だけを生命にして、過して行くことが出來るのは、一種の幸福に違ひないと思ひます。女よりも男の方が遙に多い自殺者の統計を引照する迄もなく、これが男ならば死なねばならぬと云ふ樣な、切迫詰つた境涯に落て居ても、女は大抵の場合に自殺する者ではありません。たゞその一部分のみを投げ出したのみで、死の刑罰から免れることが出來る樣な、便利な「身體」を有つて居るのは、女が女として生れた刹那に授けれた幸福かと思ひます。男の全生命も、女の生命の一部分にしか價しないと思ふ時、私は男の不幸を悲むよりも、女の幸福を呪います。

然しながら私の言ふ幸福が、女の爲めの眞の幸福で

あるか何うかは、考へるまでも無いことてせう。私等は一面に於て自殺し得る男の幸福を思ふと共に、自殺し得ぬ女の不幸を憫れむ様な實例が、世間に澤山あることを、忘れてはならぬと思ひます。生きて居たいと云ふ生存慾の方から見ると、「貞操」を實物にさへすれば、死なずに濟む女の方が、如何にも幸福に思へますが、生死を超越した大自然の眼て眺める時には、それが何の幸福になりませうぞ。「生きた屍」にも等しい女を見る時、私は何時もこんな事を考へて、小説を讀む様な興味を覺えて居ます。

生きた屍！「自殺者の女房」の現在が、恰度それてはありませんか。世に生きて居ると云ふことが、何よりも絶大な幸福てあるならば、其の女も幸福と云へるてせうが、そんな幸福に何の價がありませうぞ。私の望む眞の幸福は、「生きる」外にあります、「食ふ」外にあります、「寢る」外にあります、「樂しむ」外にあります、「遊ぶ」外にあります。

梧蔭君足下、「自殺者の女房」が飛だ理窟に流れて、何とも申譯がありません。たゞ斯うした話の中にも、人間の歩いて行く道や、世相の一面が現はれて居る點を、私は興味深いことに眺めて居るのてす。斯うした「淪落の女」は、世間が何んなに遷り變(かは)つても、終に其の姿を絶つ様なことは有りますまい。

歐州大戰亂の影響を受けて、東洋の風雲も日一日と險惡になり、現に今日＝八月十四日も、正午から夜に入るまて、永田町の首相官邸て、元老大臣會議なるものが開かれました。私は社命を帶びて首相邸に詰め掛け、元老や大臣が退散した後社に歸つて、大隈伯の所謂「待遠しき馳走の膳立」と題する雜談を、二段足ず書いて歸宅しました。宅に歸つたのが十時半、それから飯を食つて風呂に入つて、今＝十五日午前三時＝恰度こゝを書いて居る所てすが、萬年筆がスラ／＼滑るに從つて、種々雜多な感慨が、さながら走馬燈の様に、クル／＼と頭の中を走り廻つて居ます。

日本も亦、戰爭の渦卷の中に泳ぎ出す以上は、其の

戰爭の影響が、現在よりも强く烈しく、私等の日常生活にまで波及することを、豫じめ覺悟して居ねばならぬと思ひます。斯うした時代に起る樣々の生活悲劇の舞臺面には、「赤坂の自殺者」も登場するかも知れないし、「自殺者の女房」も亦登場するかも知れません。そして私が今書いて居る思ひ出話よりも、より悲慘な思ひ出話を、五年か十年の後に書かねばならぬ樣な事件が、隨時隨所に起るものと豫期して居ねばなりません。そんな事を斯うして取止もなく考へて居ますと、首相官邸と場末の飲食店とが隣り合せになつたり、大隈首相と「自殺者の女房」とが、戯談口を叩き合つたりする不思議な光景が、幻の樣に浮かんで見えます。果は私の考へねばならぬ事や、働かねばならぬ事が、俄に私の周圍に押寄せて來た樣な心持さへして、全身の血が熱して、燃える樣な一種の快感を覺えます。

私の思ひ出に浮かんだのは、たゞ一人の「自殺者の女房」ですが、世間には其の女と同じ道を歩き、其の女と同じ境涯を經て來た女が、決して尠い數では無いと思ひます。戰爭でも初つて、世間の景氣が惡くなつたり、失業者が續出する樣になると、そんな類の女は益々殖えて、生活悲劇の舞臺面を彩るに違ひありません。切迫詰つても死ぬ事が出來ず、生きて行かねばならぬ女の幸福が、眞の幸福で無いことは、さうした舞臺面を想像しただけでも合點されます。そんな類の女は、遂に「生ける屍」を抱いて、「生」に執着して居るに過ぎない、不幸な哀れむべき人間でせう。

午前三時二十五分、こゝに此の恐なる「探訪奇譚」の一節を終るに當り、取止もない自分勝手な放談を、恣にさせて下さつた足下に對して、聊か尊敬の意を表します。いや最う實にくだらない事ばかり申上げて、皆樣もさぞかし御退屈樣の事で、恐縮、恐縮。

此の秋

黒頭巾

其一

◉今夜、吾輩、筆を載せて伊豆の大嶋に航せんと欲す。昨日、靈岸嶋の東京灣汽船會社に到り、種々の條件に就いて研究するところあり。靈岸嶋に帆檣林立するを見て、征意勃々、自から禁ぜず。蓋し吾輩、東西南北の人たりと雖も、汽車よりも汽船を好み、陸行よりも航行を喜び、扶搖萬里風を待つこと久し。

◉吾輩の航游を聞き、一友、笑つて曰く、君の船、夜半、僅かに東京灣を離るゝの時、黒き艦影現はれ、停船を命ずること無きを保せんやと。「黒き艦影」は、此の頃、吾が帝國の領海に出沒して、頻りに吾が商船を脅迫しつゝあり。蓋し『黒船』の名は、五六十年前の泡影となりしと思ひ居りしを、今、再び「黒き艦影」は、夢にもあらで幻の如くに海上に現はれ來れり。

◉吾輩の恐るゝは、停船の信號に非ずして、低氣壓の北進に在り。小笠原嶋附近に發生せる低氣壓の中心は十一日を以て、諸嶋に雨を送りつゝ、漸々、北西に向つて進み來り、其の翌、則ち昨日は、高濤既に房總の沿岸を拍ち來り、雨雲低く垂れて往來すれども未だ雨を降らさず。夜、三更にして、雨聲、兩三聲。やがて大雨、沛然として來り、風勢次第に加はり、今曉、大風雨の帝都を現出し來る。

◉今年の土用ほど謹直なる土用は極めて稀に見るところなり。土用の前、既に久しく雨無く、全く乾燥したる天地を、土用に入りて以來、炎熱ます〳〵昇騰し、天は僅かに數滴の雨を送りしことあるのみ。炎塵は涼風を驅逐し、水道も漸く枯渇せんとし、山ノ手の井戸は水底、遠く地中に向つて去ること、汽車の窓より長き洞道の出口を望むが如く、或は、大正博の美人嶋の井戸の底を望むにも似たり。水少きが故に氷價暴騰し製氷の供給、尚ほ需要に滿たず、庭園に濕潤の氣、拂底して、樹下の土ボロ〳〵となり、木葉悉く瘠せたり。

甚は郊外にも涼意無く、帝都の涼意は、唯だ煽風器に依つて貧しく供給せらるゝのみ。今年の土用は、土用らしき土用、極めて熱つく乾はき切つたる土用、則ち尤も謹直なる土用なりしを、立秋の後、炎威尚ほ逞しきに、今日の大風雨、襲來して忽ち餘炎を一掃し、人をして悉く縕袢を著けて暖かき茶を思はしむ。

◉夜來の雨、斷え間無く降つて、朝に至つて尚ほ井水の量を加へず。雨の音ばかりして、未だ道路に雨水の横流するを見ず。渴ける土は、渴者が水を飲む如くに、半日の雨を飲みたる也。大風、大雨を吹くこと更に半日、今日、午砲の響く頃、庭上にも雨水溜まりて落葉を漂よはす。牆を隔てゝ鷄鳴く。

◉朝、大風、横さまに雨を吹いて、萬木皆叫ぶ。園中の草木、揉まれ〳〵て狂舞し、枝葉の先より水を迸らす。逞しかりしダリアは折れ、婀々としたる女郎花は手を突き、身を傾けたるのみにて、却つて倒れず。

◉狂へる草木の中に尤も可憐なるは、昨夜、庭中に置きし鉢植の姫柘榴の細き絲のやうなる枝頭の小さき紅花が、其の枝と共に雨を浴びつゝ跳躍して、花は火を揮る如く眞紅に輝きて、枝と共に千切れて飛ぶ可く見ゆ。

◉吾輩は、風雨を衝いて、姫柘榴の鉢植を板椽の内に運び入れ、手を洗ひ、裾を下して、硝子戸を透して、悠然として、大動亂の庭園を見る、世界の風雲は、吾が眼中に映じ來る。

◉今、吾が帝國の領海は如何ならん。吾が戰備は既に十分に成る。吾が首相は、新聞記者に語つて、御馳走は近日の中に在りと言へり。御馳走は嶋か灣か。いづれ海の彼方に在るならん。吾が弩級艦上に揭ぐる軍艦旗は、堂々として、東洋を壓すべし。昨夜來、吾が近海の莽濤萬重、高く天を蹴つて、海上の魑魅、魍魎、悉く影を沒せずんばあらず。遠く根據地を離れて浮浪する彼の「黑き艦影」は、或は波間の泡と漂ふらん。彼、獨逸の軍艦は尚ほ存在するを得るや。

◉朝來、風聲、雨聲、ます〳〵怒號して屋を撼かす。日々、樓に登りて琴を搔き鳴らしつゝある左隣の女も今日ばかりは、窓を閉ぢて、コロリンシャンの聲を送り來らず。

◉此の頃、日日、炎天、夜々、則ち月明、頻りに詩情を動かす。吾輩、乃ち今夜を以て、月明に東海を過ぎ、風露滿身、以て、飽くまで舷頭の吟懷を縱まゝにせんこと期待したるを、昨來、大風雨、吾輩、頭中のイル

ージョンは一變して未見の夢となりぬ。遮莫、數日後、天候回復の後、東京灣を出帆するを得ば、尚ほ篷窓に、缺月の明かなるを見るを得ん。

◉大島には、近來、避暑の客甚だ多く、旅館殆んど空室を剩さず、吾輩、到るの日、或は島の人の座敷に寓居して筆を執るの已むを得ざるものあらん乎。大島には蠅と蚊と多し。蔬菜は甚だ少なし。島の主婦が、何も無けれど、蚊遣火ばかりが御馳走といひて、緣先に、燒物の摺鉢を持ち出す可くも想像さるゝなり。

◉今日の如き大風雨の日、閑に、書齋に坐して讀書を事とするは、神澄み、體伸び、感興集注して、胸中、頗る綽々たる閑日月を生ず。此の如き日、筆硯を事とするも可なり。然れども讀書は更に可なり。蓋し客觀の興味なり。古來、卓識の士、大動亂の世に、往々、草廬に高臥して、風雲を靜觀する者あるは、則ち、這般の客觀の興味に耽りつゝあるならずんばあらず。

◉午餐の後、暫らく椅子に横はりて、臥して書を讀む。風聲、雨聲の中に、知らず識らず手中の書を落として、睡鄉に入る。偶、婢來りて、呼び覺まし、客の至れるを報ず。驚き起てば、窓外の光景頗る變ず。雨聲已みて風聲のみ高し。吾が睡鄉の淹留の長かりしを知るなり。

◉吾輩、平生、午睡の習慣を有せず。然れども此の如き日、天地多忙に、吾ひとり閑に、家居して身體無聊に腹ひとり膨る。此の時、横臥して書を讀めば、睡魔、枕より直ちに吾が頭に通ふ。伯大隈、老軀、國事に當り、午睡の時を得ずと聞く。戰機、今日の如き、殊に精神を勞するあらん。吾輩の適意の午睡境を得るを以て、却つて彼を憐む。

◉午睡足るの後、顏を洗ひ、再び卓に向つて筆硯を事とす。神舒び、筆飛ぶが如し。雨伯は既に去れる乎。風伯は尚ほ留まれども、屋を遶つて、早く既に蟬聲湧く。

◉日暮、暫らく衆兒女と門外に出て、雨に復活したる天地を見る。樹蔭の蜘蛛の巣は健在なるもあり。里芋(サトイモ)の葉は青々として碧を凝らす。垣の牽牛花は燎亂して表の葉、裏の葉と錯雜し、莢の熟せる豆の蔓は捲き上げられたり。風向に立てる唐黍は算を亂して横斜したるも、垣の隅なるは、偃月刀、青龍刀を陳ねたる如くに、巍然として林立せり。高く伸びしチサは皆倒れ、蠅取草は頑に、ピンとして咲けり。竹垣の間より、今日は、朝より未だ見ざりし右隣の白狗、チヨコ〳〵と

して尾を振つて入り來る。

◉晩に、蟬聲已み、風聲も亦た漸く遠し。空、なほ陰暗、涼風ソヨ〳〵と肌に觸れて、時々、蟲聲を交ふ。何の蟲とも知れず、蚯蚓の鳴くにやあらん。まだ宵ながら大風雨の後は森閑として、夜は靜かに深け行く。軒の風鈴、澄みて響き、凉意、次第に骨に透る。窓を排すれば、數點の星、空に見ゆ。

其二

◉秋は多感なりと稱す。然れども此の秋ほど多感なる秋は、古來稀なるべし。過去の歴史にのみ見る可かりし歐洲の大戰亂は、卒如として吾等の眼前に現はれ來る。歐洲の大戰亂は、東洋に波及して、やがて世界の大動亂となれり。吾が大正の維新を以て、此の大事機に遭逢す。誠に、千歲一遇の秋といふ可し。

◉此の如き大事變に遭遇して、各人まさに各樣の感慨を爲す可し。劍を執る者、算盤を執る者、筆を執る者、執るところ同じからずと雖も、要は此の大機運に觸れずんばある可らず。風雲に際會すといふは、廟堂の權を執るに非ず、各人、各種の中原に向つて、時勢の大精神を鼓吹するに在り。

◉優曇華の花は咲くこと有りと聞けるのみ、未だ見ず。埋もれ木と見えし老木に花咲けるは伯大隈なり。花咲いて、大正維新に首相の印綬を帶び、大難關たる可く見えし冬の議會を眼前に控へて、更に、また、華やかなる歐洲の大戰亂に逢へり。此の如くして三十年不遇の彼は復活したるのみならず、實に、多幸の境遇といはずんばあらず。

◉吾輩を以て見れば、此の如きは、啻に伯大隈の境遇の多幸といふに留まらず、千載一遇の秋に、七十七歲の老軀を以て、吾國未曾有の老首相を以て、一國の運命を擔つて、世界の大事變に當る。眞に風雲兒の快心事、地下の古英雄をして、悉く羨殺せしむるに足る。彼の感懷、果して如何。彼は自から菅公の後裔なりと稱す。菅公の『此秋獨爲我身秋』の感慨、今、彼の胸中にも存せずんばあらざる可し。

◉兎角の批評は暫らく措き、伯大隈は公伊藤、公山縣と併せて、維新三傑の後の第一流者たるを失はず。西鄕、木戶、大久保の三公は、維新の大舞臺に、新日本を造り出し元勳なるも、未だ世界に於ける日本を見るに及ばずして逝けり。伯大隈は明治の功臣なれども維新の元勳には非ず。然れども彼は明治の功臣を以て大正の元勳となる。寧ろ多幸ならずとせず。

◉維新三傑は世界の大勢が日本を動かすを見たり。生前、空しく、日本が、世界の日本と爲るの日を夢想したりしのみ。日本が世界の日本となるに當り、伊藤、山縣多く事に當り、三十年の間、此の二人者の舞臺にして、大隈は、ひとり多く與らず。これ所謂大隈の沈淪なり。而して最年少者たる公伊藤、世界的に、燦爛たる最期を遂げて、先づ薨じ、公山縣老ゐて元老となり、最年長者たる伯大隈、尤も健壯にして首相たるの時、日本が進んで世界の大勢に干與するの舞臺に立つ。是れ彼の全盛にして、計らざりき、此の如き老年時に來れり。此の如きは、稍、逆緣なるに似たりと雖も、稀有の大才者をして、各、全盛時を分有せしむるの天意にして、公平なるコムペンセイションの理法は、伯大隈の一身に於ても象徵するに足らずんばあらず。

其　三

◉吾輩は、伯大隈と伯山本と、二人者の身上に、此の秋の對照の興味を覺えずんばあらず。一は失意の秋にして、一は得意の秋なり。而して得意、失意の分るゝところ、殆んど人力を以てす可らずして、全く天意に屬するを感ず。

◉伯山本は、既に、新聞に忘れらる。彼は今、悲憤滿腔、或は切齒扼腕するなるべし。彼は大器に非ずと雖も、また固より一奇才也。彼をして今、首相たらしめば、吾が海軍、東洋の制海權を發揮するの時、彼は一代の英雄となり了せん。彼は飛ばず鳴かざること多年、一朝、得意の海に浮び出るの時、リヒテル電報は、沈設水雷の如くに、彼の腹部に破裂して、彼を葬り去れり。

◉海軍收賄問題の攻擊は、紛々として國內に在ること多年。然れども其の爆裂するは、天外の飛報に依り、海軍の奇才、始めて首相たるの時に當る。其の事、海軍の爲に太だ惜む可きが如くにして、實は、天意、吾が帝國の海軍を眷遇するの極めて厚きを見る。這般の問題に、海軍の妖雲は一掃せられ、恰も豫め垢を洗ひ潔齋して以て今日の大使命に當るに似たるものあり。且つ昨日、其の垢を奪ひ、今日、光榮の使命を與ふ。天の、吾が海軍を寵遇する所以に非ずして何ぞや。吾輩は、吾が海軍の士氣、今、大に振ふものあるを信ぜずんばあらず。

◉久しく權力を握れる伯山本が局に當つて忽然として埋沒し、久しく權力に離れたる伯大隈が檜舞臺に立つて忽ちにして全盛の人となる。此の失意は彼の得意を

致す。而して得失の間、因果の聯絡するものあるに非ず。此の二人者の身上は、初より互に沒交渉にして、ひとり運命の手のみ暗に、緊密に結び付けられて、人の眼には見えざりしなり。

其　四

◉此の夜、五更、殘雲暗澹、月を擁するを見る。既に寢に就くの後、密雲、再び天に漲るらし、雨聲澎湃として枕を撼かし來る。天明、低氣壓、既に帝都を過ぎて北に去り、赫々たる炎威、舊に依つて草木を照灼しつゝあり。

◉昨日、帝都の被害は左まで大ならず。東京灣の波濤十丈、家よりも高く、高く品川臺場を越えたるを聞く。東海道、箱根の線路、例に依つて破壞甚だしく、鐵車を通ぜざること一週間に及ぶ可しといふ。此の間一髮の戰機に際し、此の如き交通の障害を來たす。また以て、人をして憤悶せしむるに足る。吾輩は、此の機會を利用して、此の大動亂の回復の後、軍國の爲に、箱根線を捨てゝ、速かに熱海迂回線の實施を斷行せらる可きを主張せずんばあらず。

◉昨日、大風雨の中、首相官邸に内閣會議を開く。諸公の勞するも亦た甚だし。然れども列國大動亂あり、天に大風雨あり。此の時に於て、内閣諸公、何んぞ評議を是れ事とするや。

◉大海の一部に波瀾起る時、航海法は安全に、海の大部分に行はる。然れども大海を擧げて大風波の洶湧する時、何くにか航海法を云爲するの餘地ありや。理想的の堅艦を以て、風濤を壓するに非ずんば、陸上より風濤を觀望するの外ある可らず。此の時、唯一の問題は唯だ力に在り。國際法といふは、世界列强の一部に戰鬪ある時に於て行はる可し。世界を擧げて大戰亂の衢と化するの時、何の處にか國際法は行はれん。唯だ一の力あるのみ。

◉平和を破るものは力なり。平和を克復するものも亦た力なり。黄金時代は人間歷史の前にも後にも在り。中間の今の世界は、すべて力の時代ならずんばあらず。

◉白耳義の永世中立といふものも、歐洲大動亂の前に

は、アスパラガスの尻尾の如し。道を立て主義を行ふといふ事は、大有力者に非ずんば能はず。箇人に於て然り、一國に於て殊に然り。永世中立は唯だ精兵强馬に依つて行はる。

●兵は拙速を貴ぶ。カイゼル之を能くす。巧遲に非ずして、拙遲に强味を有するは、ザアの特色なり。歐洲の陸戰は、拙速と拙遲との勝敗ならずんばあらず。拙速に非ず、拙遲にあらずして、而して巧遲を事とするものは、人後に落ちん。

●碁戰は、實戰を象徴すとはいへども、盤面は尙ほ死物なり。碁戰に於ける十全策は、必ずしも實戰に適せず。若し趙括をして碁を學ばしめば、或は碁伯たるを失はざる可し。

●吾輩、今夜、盤面に向つて二三戰す。或は勝ち或は敗る。其の敗るゝも勝つも、往々、豫期の外に出づ。勝敗の興味ある所以なり。兵は危道を求むるを要せずと雖も、亦た危道を恐る可らず。要は千載一遇の活機を捕捉し得るに在り。

●千載一遇の機は、杜鵑を聽くが如し。杜鵑一聲、裂帛の如し。卓上の文書を按排し、徐ろに窓を開いて見る。杜鵑、旣に見えず。

●今夜、諸友と會飮、盛んに大戰亂を談ず。澄空一碧、靜かなる夜なり。半輪の月、中天に懸る。電車を下りて、家に近くして、富士神社の森に梟の啼く。

其五

●紅旭赫灼として、天、燒くが如し。一たび大雨を經過して、風物、頓に秋に入る。空朗らかにして氣は健やかなり。濕潤に復活したる木葉は、欣々として晴日を樂むが如く、朝の鳴蟬は、沈靜なる人の心に輕く響く。吾が門内の山吹の一重花なるが、一杯に、朝陽を受けて返り咲す。

●盆栽の木槿を、東京の人は、玉椿といふ。此の頃、なほ絢爛として開く。朝、步して、玉椿の梢に、木葉蟲の、青葉を貪り喰ひつゝあるを見て惡む。指を以て彈いて地上に落す。

●木葉蟲の青を吐いて死するを見る。吾が小兒女が、

枯葉と思ひて、知らず識らず踏み潰ぶしたるなるべし。彼も木葉を被りて、世を欺かざりせば、小女の塗下駄に蹂躙せられざりしなる可きを。

●今朝の新聞を讀むに、信州より越後路に、風水の被害甚だし。信濃川、到る處に汎濫す。長岡の如き、長成橋落ち、堤防決潰して、濁水、城市を浸す。或は、水、二階に及ぶところありといふ。信越の地方、吾輩、知人多し。諸君は幸に健在なるべし。今、水の跡を眺めつゝ、歐洲大動亂を談じて、戰前の氣慨を發揮しつゝあるならん。

●長岡の町に、舊家の一紳士、太刀藤あり。趣味の人なり。其の家、巨勢金岡の佛畫の一大作を舊藏す。小川に近くして低き巷なり。昨日の大水害に、此の一大藝術は、圓滿無障なるを得しや。吾輩、去年、一たび觀賞して因縁を結びたるの故を以て、印象、なほ眼中に在り、安否、甚だ吾が心に關するなり。

●卓に向つて筆を執りつゝあれば、風鈴の音、一聲、二聲、斷續して、單衣の裏、冷やかに吾が肌に觸れ、清風、窓より流れ入る。竹牆を踰えて後隣の向日葵(ヒマワリ)の大輪、二つ、吾が庭に向つて開く。

其六

●大動亂の影響は、吾が經濟に關するものに於て、尤も研究の趣味あるを覺ゆ。其の大者は甚だ顯著、其の細小なるものに至つては、また事情の一篇、哀詩を爲すもの無くんばあらず。

●横濱に於ける經木眞田の輸出、全く杜絶するの故を以て、女工の解傭せらるゝもの六千人に及び、隨つて眞田つなぎの內職を失ふものは、二萬人の多きに達す可しといふ。此の一區劃に於ける二萬六千の女工は、大數ならずとせず。

●緇銖(シシュ)の利に活きたる是等の老少婦女は、此の秋を、如何に冷めたく暮らすらん。或は母飢ゑ兒叫び、秋燈光無く、相擁して陋巷に悲しめるもあらん。或は明眸、薄衣、双涙、眞珠の如く雙々として月中に墮るもあるやらん。吾が國、未だ一兵を動かさず。世界的大戰爭の悲劇、早く已に婦人の身上に來る。

◉歐洲列國の新刊書、輸入の途塞がり、洋書に活くる丸善は、爲に困阨に陷る可しと傳ふ。丸善の窮するは、學者文人の窮するなり。秋燈親しむ可きの時、吾が國の書齋は、貧しきを免かれざるべし。然りと雖も、世界的大戰亂、今日の如きは、千載一遇の活機。活機を目睹するは萬卷の書を讀むに勝さる。學者文人、まさに此の活機の活書に自得せずんばある可らず。

◉秋燈の親しむ可きは蠟燭に在り。電燈の光は冷やかに、蠟燭の光は情味あり。

◉古人の書は、すべて古人の「糟魄」なり。泰西人の書は、新と雖も、吾が日本人の頭腦より出るに非ず。世界有數の大事變に際會し、吾が國、及び吾が國人、自から此の大渦中に投じ、古人外人の新舊書を捨てゝ、己の頭腦を以て、此の大機運を咀嚼し得て、始めて吾が新思想、新機軸は發生す可く、則ち大正維新の新文學は、此の秋の燈火の下に起らん。

其　七

◉此の秋に新らしき花は「菊もどき」なり。黄光鮮明、風情甚だ愛す可し。此の千載一遇の秋に、「菊もどき」を得る。吾が地氣の爲に瑞祥事とせずんばあらず。

◉先日、颱風襲來の前、葉山御用邸の西、富士山を含んで、海上、波濤高し。極めて雄偉壯大なる落日、大光彩を照映しつゝ海に入る。日本海大戰勝の前、此の光景あり、今、再び見るといふ。其の翌、富士山、雪ふる。

◉吾輩は茉莉花を愛す。枝幹甚だ樸雅、飾らずして姿致あり。清香楚々として、白花、夢の如し。此の花、支那の名花にして、古來、詩人の詩に入るのみ。世間多く知らず。近年、帝都に漸く行はれ、此の秋、殊に多く、忽然として茉莉花の秋となる。

◉支那の美人、茉莉花を花冠として雲鬟を飾る。當年、西太后、また此の花を著けて列國使臣を見し事あり。今、支那海を環ぐりて雲濤、洶湧す。吾が東洋制海權の發揮も亦た數日の中に在らん。知らず上海の少婦、茉莉花の花冠を著けて、參々伍々、團扇を弄しつゝ、殘月に徘徊して、海濤の往來を、心無く、看つゝあるや。

其八

●人は皆、戰前の氣分にてあり度し。緊張の態度、四肢に磅礴す。猫も杓子も戰亂を語らざるはあらず。絃妓も亦た三絃を彈ぜず。客に向つて號外を誇說す。

●戰前の氣分といふもの、此の秋は、特地に、感慨あり。日清、日露戰と異なり、正面、敵の迫り來るに非ず。世界の大氣運は、吾をして戰線に入らしむ。吾はまさに勝利の運命に乘ずるなり。此の氣分は、吾が國、開闢以來、吾が民族が始て味ひ得たる光榮ある氣分ならずんばあらず。

●小學の小兒女も、セルビヤを說き、露佛を說き、獨逸、白耳義、日英同盟を說く、歐洲地圖の新刊、頻々として新聞に廣告せられ、歐洲の地名、吾が國人の耳に親しまる。此の如くして、吾が國民は、此の秋、世界的國民となれるなり。

●東京駐劄の獨逸大使館、昨來、引揚の準備に忙しと聞く。三國干涉以來、歐洲に、東洋に、覇者の雄圖を逞しくせんとせし獨逸人の感懷、如何。

●元老大臣會議、昨午後を以て完了し、軍國の一大事崇嚴なる形式を以て發表せらる可く、今上陛下、今日、日光より還幸し玉ふ。吾輩も亦た稿を收め、筆を投じ、奔りて、上野驛に歡迎し奉らんとす。(完)

大正三年八月十五日、陛下還幸を奉迎す可く、筆を投じて起つ、庭前の雄鷄、眞白に美しきが、ククとして鳴く。　黑頭巾記

歐洲戰爭雜話

櫻井忠溫

○詩的戰爭

獨軍の一大縱隊はライン河をストラスブルヒに於て

渡橋し、黒煙を立てゝ前進しつゝある。

その前線は既にエピナール方向より侵入した佛軍と衝突した。

佛軍が無念の歴史の添ふアルザス。熱と血潮と焔の如く燃えつゝある祖先埋骨の地――アルザス。佛は實に四十年目に、こゝで獨と顔を合はした。

アルザスのある二少年が、蛇蝎の如き獨人の支配下に生息するに忍びずとて、住み馴れた土地を去つて國境まで來た時、今は獨領となれる故國を振り返つて『僕等が大きくなつたら屹度取り返してみせる、』といつて手を取つて泣いた、といふが、この思ひは四十年來佛人の胸に血と流れ、火と燃えてゐたのだ。佛蘭西もこの一戰に敗れたらモウ破滅だ。アルザス、ローレーヌを代表する巴里公園の大理石像の喪章は永久に取り去ることは出來まい。恨は永きライン河畔、再び河水を紅にして祖國のために一大復讎戰を試むるの時機は必ずや近き日にあらう。祖國の血を最後の一滴までも流すを辭せざるの覺悟は必ずや佛人の胸にあらう。

この戰爭は佛軍に勝たしたいものと思ふ。イヤ必ず勝つに違ひない。

つい近頃曉星學校にゐる、ある佛蘭西人が、ある日本の小供――獨逸帽を冠つてゐる――を見て『小供は可愛いゝが帽子が惡い』といつたことがある。何も帽子にいらぬ御世話だが、佛蘭西人は『獨逸』といふ名を聞いてもムカ〳〵するさうだ。小供が、

『お母つさん、こんな缺けた茶椀では御飯をたべないよ』などゝいふと、

『そんな我儘をいつてはいけません』と、だけてはすまぬ。

『何をおいひです。お祖父さんの時は、獨逸の兵隊が、この家へ這入つて來て、お祖父さんを追ひ出した。お祖父さんは居るところがなくて羊の小屋へ這入つて、コンナ缺けたお茶椀で御飯を召し上がつて居られた。お前も大きくなつたらお祖父さんのかたきを取るんですよ。』

と、一個の缺茶椀にも、なほ普佛戰爭が伴つて來る。

日露戰爭後、ある露人は『日本人をして曾て我れに大敗を與へて却て勝利の道を敎へたる瑞典人たらしめんことを切に望む。』といつたが、佛人が失敗の後を受け却て意氣冲天の勢あるは、謂はゞ獨人の賜物である。ライン河畔、若き血に燃えつゝある佛軍の詩的戰爭、これは世界の觀物だ。

○力の强味

獨の大兵團は白耳義、ルクセンブルグ方面より最捷路を取つて佛の國境に進襲しつゝある。蟷螂の首を捻るくらゐに思つてゐたところ、意外にも白軍の逆撃にあつて大に鼻つ端を折られた。兜の星を輝かし、陣列整然、威風凛乎か何んかで大に殺到のつもりのところ、手もなく白軍の粉韲するところとなるなど、みじめなものといはねばならぬ。

獨軍戰はざること四十年、世界陸軍の覇を以て自任したる獨軍も、あはれ弱小白軍のために一蹴せらる。醜態實に言ふべからざるものがあるではないか。

獨軍が其の主力を動かし、白、ル兩國を侵したのは豫定の計畫を實行したのだ。獨が兩國の中立を尊重するものとしても、佛の國境大要塞ツール以南の地に於て作戰するは不利の最も大なるものである。即ち此の方面の防備甚だ堅固にして、包圍のため多大の兵力を要し、設令野戰に於て勝利を得るも、佛軍はツール要塞に退却し、獨軍の大部は再び要塞の牽制するところとなり、爾後の作戰を挫折するに至るの不利よりして、獨軍がツール以南——佛軍の右翼に向つてする攻擊は、兵力絶對に優勢ならざる限り奏功の見込がないのである。

之に反し白耳義國境に近きベルダム要塞以北に向つてする攻擊は、防備不完全なるよりして、獨軍が巧妙に作戰せば巴里に通ずる連絡を遮斷して、諸道路を獨軍の前に開放するに至るのである。併しこの攻擊實施は白、ル國境のために制限せられ、最も狹小の地域に於て作戰するの餘儀なきに至らしめる。これ獨軍の忍ぶ能はざるところなるを以て、白、ルの侵犯せらるゝ

ことは、正に然らざるを得ざるものであるので、獨軍の苦心も亦思ふべしである。

かつ佛軍を撃破し、然る後露軍に當らんとするのが、獨が年來の主張である。ツールの如き堅要に引つかゝつて、徒らに時日を遷延するは、策の最も得たるものでない。白、ルの如きは問ふところにあらず、最捷路佛境に進襲せんとするが至當の策である。白、ルを侵すは窮餘の策にあらずして、豫定の計畫を實行したるに過ぎないのだ。

かうなると中立の嚢もあつたものでない。ルクセンブルグの如き要塞もなにもないところを、隱居を嚇かしてやれくらゐに思つて、呑平々々と御出掛けになるのだから滅茶々々な工合だ。併し一體戰爭といふものが滅茶々々なものなのだ。文明の德義のと、そんな野暮の通らぬのが戰爭だ。蠻氣なところに戰爭の眞味があるのだ。力の强味――これがあれば何でもとほる世の中だ。

八面六臂の獨軍からみれば、『そんなコセ〳〵したことをいつてくれるな。』などゝいつて居るかも知れぬ。

今や獨軍の大兵團はリエージユ、ナムール、附近で英佛白聯合軍と對峙してゐる。驚天動地の大決戰蓋し近きにあらう、イヤ予の稿を草しつゝある時、必ずモウ火蓋を切つて居らう。獨軍がムーヅ河を越へて佛軍を壓迫しやうなどゝは、昨日の夢かも知れぬ。其の内ソロ〳〵背中の方から砲彈が飛んで來ないとも限らぬ。

獨の白を撃つこと、恰も鐵槌を以て、卵子を碎くが如きのみと信じたるに、意外にも獨軍の敗報連りに世人を驚かすものあるは、獨軍のため實に今昔の感に禁へぬところである。ビスマーク、モルトケ若し靈あらば地下に泣いてゐるだらう。この一戰に於ても、砲彈の力、器械の力は遂に人肉の力、精神の活力に及ばぬことを證明してゐる、兵の勝敗は兵器の精鋭に非ず、戰術の巧妙に非ず、實に銃後の人にあることを著大に證明してゐるではないか。寡弱軍を以て優勢軍を破りし戰例は尠くないが、白軍の光輝ある戰捷は永く戰史

に光彩を添えるてあらう。併し獨軍は即ち獨軍て、逈がに世界の大陸軍だ。其の眞價を發揮して大に人目を驚かすは今後にあらう。

○兵隊氣質

獨逸の兵隊は、右を向いて居れといへば一日でも右を向いて居るといふ質(たち)てある。士官が營庭へ水を撒けと吩付て置くと、雨が降り出しても仔細構はず水を撒くといふ風てある。これてはチトのろまの方だが、こんな他愛もないところに兵隊は兵隊としての價がある。

日本軍が戰捷の一動力は日本兵の神經の鋭敏なるにあるといつた人がある。露人も『日本人は吾人がボアー人と戰ひし如く狡猾なりしため多大の損害を蒙れり。』といつて居る。日本兵はなるほど小悧巧に立廻る方てあるが、獨斷的材能のある兵隊といへば、日本兵を措て他にあまりあるまい。指揮官の多數を失ひ、非常な苦境に陥つても、日本兵は現狀を維持し、若くは頽勢を挽回することの出來る兵隊である。

露西亞の兵隊は呑平々々とした男の揃ひて、其のボーとしたところに可愛味がある。どこへでもゴロ〱と寐轉んて、臂を曲げて枕す、樂此の中に在りといつた風にやつてゐる。

佛蘭西の兵隊は露營などテンからやらぬ風てある。二三年前始めて陸軍大臣が、火器の間斷なき改良、航空機の進歩よりして、晝間の行動の秘密を保つため、夜間を利用するの要益々增加するを以て、屢々夜間演習を實施すべきことを警告したくらゐてある。豫定の宿營地へは細君や小供が來て待ち受けてゐるといふやうな風て、夜間の行動はあまり演習しないやうだ。これから見ると日本兵は夜戰最も得意だ。支那人は『日本兵は蚊のやうだ。』といつた。暗くなると、劍付鐵砲てチク〱と刺すからださうな。露西亞人は『日本兵は虱のやうだ、潰しても〱、暗所から暗所を傳うていくらても出て來る』といつた。虱はチト恐れ入る。

併し、佛軍の意氣は勃々たるものがある。決して『文

明』が彼等を腐蝕しては居らぬ。普佛戰爭で、戰傷のため盲目になつたある兵卒が、入院中知己となつた看護婦を娶つたが、妻も亦多病で家計を支ふること出來ず、小額の恩給にては到底渡世が出來ぬので非常な窮苦を嘗めつゝあつた。時に一獨人突然彼れの家に來つて、君は細君と共に我獨逸へ來り、君の實戰談を講演しつゝ、各地を巡回し、君が戰場に於て拔群の功を樹て、勳章を受領したるに拘らず、佛國政府が君の如き勇士に酬ゆるに金額の殆んど零に等しきことを、我國人に知らしむるときは、予は巡講料として君に五萬フランを呈せん、といつた。哀れなる盲目兵は之を聞くと、鐵の如き拳を固めて彼を毆りつけ、戶外に突き飛ばしたといふことである。この意氣は今日佛人がアルザスに弔合戰をしやうといふ意氣であるのだ。

阿米利加の陸軍が戰場に現はれるなどゝいふことがあつたら、とんだ愛嬌だ。鬼ごつこのやうな米西戰爭を鼻にかけてゐると、死んだ馬が笑ふくらゐのものだ。

七八年前米國の太平洋艦隊が橫濱に、五重塔みたやうな、ヒヨロ／＼とした軍艦とも遊覽船ともつかぬものを持つて來て、女小供を嬉しがらせたものだが、あれでも海軍としてはかなりの勢力を持つてゐる。殊に米國海軍の射法は御自慢だけに、先輩面をして兵器界を牛耳つてゐる。

黴臭い話だが、南北戰爭に何とかいふ提督は、水雷布設面の上を『何！糞！全速力：』といつて、ヤケに飛び越へたとかで大に其の勇武を賞賛されたものだが、米國海軍は負けた歷史を持つて居らぬといつて、軍人は意張つて居る。

○露國の新勢力

遙かに英佛と策應して大に獨逸を突かんとする露軍の眞價は日露戰爭後大に面目を一新してゐる。露國の一志士は『戰役の苦痛を忘るゝことあらば、西は獨逸より、東は日本より奴隷の軛を以て威嚇せらるゝに至らん』といつたが、失敗と損害のために、露國の勢

力は却つて益々其の力を加へつゝある。露國の終世忘るべからざる同胞の死が、彼等の心中に永く記念して忘られざると共に、全露民の創痍は已に業に癒えて其の勢力は實に畏るべきものがある。

近頃、露都の到る處の公園に、大きなボールを拳固で毆ぐると、其の力が數字で現はれるやうな仕掛になつてゐる腕力計が据ゑつけられてあつて、其のボールが日本兵に形取つてあるさうだ。それを露人が面白がつて毆つてゐるといふことだが、獨逸帽い嫌いな佛蘭西人と面白い對照であると思ふ。併しそれも今頃は獨逸兵くらゐに塗り替へてゐるかも知れぬ。

露兵は兵卒として申分ないものである。『餘りに冒險ならざるべきを勸告するに多大の勞苦を拂はざるを得ざりき。』といふことさへ、露西亞側の記事には見えるくらゐである。併し獨斷的の材能に至つては零だ。露兵は感覺が鈍いのである。『何々せよ』と、いはなければ、何もしないでボーとしてゐる。カタリン女王が或時庭園に牡丹の綺麗に咲いてゐるのを見て一兵卒に番を吩付けられた。ところが女王はそのまゝ番兵のことを忘れてしまはれた。やがて花も散り、樹も枯れ、其の後女王も崩御せられたが、彼の番兵は花の所を去らずに、石像の如く立つて居つたといふことである。命令とあれば命を棄てゝやる。なければ何もやらぬ。露兵は本能的に『命令には從はねばならぬ。』と思つてゐる。露兵の强味は即ちこゝにあるのだ。

日露戰爭にも『我れ未だ命令を受けず』といつて、戰鬪に參加してゐない部隊がいくらもあつたとは實に驚くべきことである。何んでも物に頓着しない兵隊である。『困つた』などゝいはぬ兵隊である。『構はん、仕方がない』といつてゐる。これが露國の大をなしてゐる所以でもあるのだ。

露國は從來極度の銃劍信仰主義で、『彈丸は愚なり、獨り銃劍は賢なり。』といふ筆法でたゝき上げたものである。露兵は一人としては甚だ頑强である。一地を固守して銃劍で突き捲らうといふには以て來いである。ところがこの銃劍戰術が、日露戰爭に於て、猛烈なる

日本軍の攻擊を支へることが出來なかつたので、戰後大に射擊教育に力を盡して、攻擊戰術を奬勵するに至つた。日露戰爭が教訓したる露軍の新戰術が、這回の戰爭に如何なる結果を齎すか、是は大に觀物であらうと思ふ。

又た從來露國の獨逸に對する作戰方針が既に守勢的であつて、國軍主力の集中地を遠く國境より離隔したる地點に撰定し、國境要塞線を後退配備となし、全兵力は殆んど要塞防禦のために用ゐられてあつたのだが、軍備擴張、鐵道網の增設、動員を迅速にするの處置等によつて、退嬰的作戰に一大革新を來したのである。露軍の先進隊が獨境に墺境に、其の守兵を驅逐して前進しつゝあるなど、新戰術が頭を出したのである。

露國は既に動員を完結した。疾雷急雨獨境に侵入し、一大會戰ヶ試るの日亦近きにあらう。

○戰場の武器

獨の飛行船と、佛の飛行機と衝突したの、獨の飛行船が白軍の榴彈に中つて墜落したのといふ報道がある。プロペラの音勇しく數十數百の航空機が、國境を越へて敵國の空中を驅りつゝある光景が眼に映るやうだ。獨は二十餘隻の飛行船、佛は五百臺の飛行機を有してゐる。こんど佛の飛行機が獨の飛行船を襲擊したやうに、飛行機で一々飛行船のどてつ腹へ突擊して、共々何千米突の空中から落ちてしまへば、瞬く間に飛行船は全滅だ。さう旨くは行くまいが、飛行船と飛行機と戰術上の優劣が事實を以て證明せらるゝ譯だ。

獨軍の一部隊、白軍の地雷に命中して全滅などゝいふ報もある。白國の地雷は世界に聞えたものである。殊に其の布設法に妙を得て居る。たとへば谷の最も狹いところへ自發裝置の地雷を埋めて置く、縱隊の先頭が之に引つかゝつて、大爆音が起ると、忽ち隊列は兩側に分れて谷壁に寄りかゝる。足下からでも爆發しさうに思ふ知覺神經の鋭敏な働きであらう。すると谷壁にはペタ一面に地雷だ、火が吹き出る、白黄色の烟が舞ふ、頭が裂けて地に埋る、胴が切れて空中に飛ぶ。百人が百人、千人が千人一束だ。

佛の大砲は有名なものである。露軍も日露戰爭後新式砲を使用してゐる。佛には近戰用として、手投彈の外に、小銃爆裂彈といふ恐ろしいものが發明されてゐるといふことである。この間に在つて最も威力を逞しくするものは、例の機關銃といふいたづら者だ。パリ〱と噴水のやうに彈が出る。彈の棒が出るやうなものだ。一瞬間ヂッとしてゐると、前の彈痕へ、次の彈が飛び込むくらゐの早さて飛び出す。機關銃ては日露戰爭て日本軍も辛い目に逢つた。

火の戰爭だ。火と熱と力の戰爭だ。赤い砲煙、赤い土煙、坩堝の中の火のやうにドロ〱とした太陽、野火のやうな火焔、其の中に血に飢えた人の群はワー〱と渦巻いて燒け死ぬるのだ。灼熱したる鐵片が空を截つて飛ぶ。その落つるところに人肉は燒けるのだ。

グル〱と地を持ち上げて土煙か濛々と渦巻く、砲彈が落ちたのだ。そこに赤く爛れた肉、頭のないの、手のないの、足の千切れたのが胡麻を振り播いたやうに散かつてゐる。虚空を摑んで藻掻いてゐるのや、痙攣を起してヒク〱してゐるのや、アーと大きな口をあけてベットリとした血を吐きながら生唆びをしてゐるのや、鳥の羽ばたきするやうな手つきて躍つてゐる氣狂ひや、皆な半燒けの奇怪な肉がうめくのだ。

かうして砲彈や、銃劍や、鍬が墓穴を堀つて、その死骸を埋めるのだ。（八月十五日）

日本の登り坂

澁川玄耳

●日本はモウ下り坂とタイムス通信員に悲觀された大正の御代も、今日より又新なる希望の坂を登るのである。

今日、大正三年八月十六日午後四時、獨逸に對する

最後の通牒といふものを、號外に依つて讀む予は、二十年前を回顧して隔世の感がある。予は其の頃纔に法律學校の課程を卒へたばかりの青年であつた、一二冊國際法の教科書の大ざつぱな知識が頭腦に入つて居たので、斯樣なる干涉の先例を知らないでもなかつた。

一八七八年寒い露西亞は、其の多年求めて居た暖かい窓口を土耳古の壁に開くべき有利の條約を戰勝の威を以て土耳古に強ひた、所謂サンステフワノ條約である。モンテネグロ、ルーマニア、セルビアは弦月旗の支配を脱して完全な獨立を得、ブルガリヤは領地を擴げた上に、土耳古には名譽的の宗主權を認むるのみで、其實露國の監督の下に立つ獨立國と爲り、償金及びアルメニヤの北部とドブルヂヤの地方を露國が獲ることが條約の主要項目であつた。

此の條約は露國を地中海に泳ぎ出させるものである上に、東は印度民族、西はゲルマン民族に對する割込みである、而かも露西亞の大きな臂を割込むのであるから、兩側の英國と墺太利は甚しい壓迫を感ずる。伊太利佛蘭西獨逸も迷惑である、そこでバルカン半島の諸國間に於ける不平と相俟つて、此の條約は殆ど歐羅巴各國に不人氣であつた。丁度其の頃油の乘つて居た鐵血宰相ビスマルクは列國會議を唱へて、彼と英相ビーコンスフィールドがシテ、ワキとして晴れの舞臺が開かれ、伯林條約を以て、露國が鋒尖の獲物は遂に此の兩雄の舌端に嘗め盡されてしまつた。日清戰役の馬關條約の運命は恰もサンステフワノ條約に似てゐた。

露國の東歐經營の此の一挫折は、轉じて東亞經營となつた。箱の鼠の何處かを咬み破らうとすると同じである。朝鮮と支那と日本は露西亞の牙を受けねばならぬ迷惑な廻目となつた。予輩の少年時代は朝野を擧つて露西亞を恐るゝとペストよりも甚しかつた。予は中學時代を長崎の語學校、及商業學校に過ごしたが、長崎に於ける露人の勢力は英米佛獨の孰れも比すべきものはなく、稻佐といふ一區域の如きは殆ど露國の植民地といふべき狀態で、丁稚も下女も若干の露語を操らざるものはなく、店舖の招牌は必ず露字を以て記され

てあつた。港内には常に露國の軍艦の二三艘碇泊して居ないことはないくらゐだが、日本の軍艦は滅多に見ることが無いのだから、予等が少年の頭腦にはどれだけ露西亞の壓が重かつたか知れない。序に想ひ出したが、其の頃今の山本大將だ、彼の人がまだ少佐で艦長をしてゐるのを訪問したことがあつた、其の軍艦は大分前に廢艦となつた天城といふ木造の小砲艦であつた艦長室に半日遊ばして貰つて、山本少佐から歐洲諸國の話を聞いたり、英吉利から持つて來られた二連發の獵銃を見せられたり、カステラの馳走に與つたりしたことがあつた。

五年が間長崎に居て朝夕露艦の雄姿に脅かされた予は、何時か此の長崎も露國に捻ぢ上げられるのではあるまいかといふ杞憂を懷くのであつた。其後二十年ならずして、あの時の少佐艦長が大臣となり大將となり、天城や磐城に依つて心細がつてゐた日本海軍が、遂に彼の露西亞の全艦隊を滅盡せしめようとは夢にも想はなかつた。

◉日清戰役の數年前まで予は長崎に居たので、鎭遠、定遠、七五〇〇噸の甲鐵艦を主とし北洋艦隊の精鋭を擧つて示威にやつて來たのも目擊した。其の頃日本軍艦は浪速高千穂の二千何百噸が最良のものであつた、（山本少佐から浪速回航の話も聞いた）、松島、橋立、嚴島の三艦は其跡に出來て、黃海海戰の主力となつたのであつた。今想うて見ると淸國の海軍は到底吾が敵し得べからざるものであつた、陸上に於ては物質的計數に於て勝算に乏しかつた、開戰の當時に心細かつただけ、戰勝の喜は甚大であつた。

遼東半島の割讓を聞いた時の日本人は、建國以來の祖先たちが曾て知らなかつた歡喜を味つた。神功皇后よりも北條時宗よりも豊太閤よりも明治の日本人は偉い仕事を仕上げたのであつた。

其が、例の三國干渉に依つて「東洋平和の爲め」といふので還付せなければならぬことになつた、其落膽、遺憾といふものは、前の歡喜に比して反動的に甚大であつた、晝の歡喜は忽ちに消えて、祖先が曾て覺えの

ない大屈辱を吾等は負はしめられたのである。

遼東還付の原因の一は露國である、露國の東方經營策に害があつたからである。露國の東方經營の原因の一はサンステフワノ條約の廢棄であつたのである。そして遼東還付勸告の主動者は獨逸であつた、獨逸はサンステフワノ條約廢棄の爲め露國を壓迫したものである。而して又、今回歐洲の戰亂がやはりバルカン問題に關係して生じ、遼東還付斡旋の事より支那に對して威力を振ひ、膠州灣を占領するに至つた獨逸の、其の膠州灣が、「東洋平和の爲め」といふ獨逸僞造の辭柄の下に、此度は日本から還付を要求せられるといふのは國際鼬ごつこ因緣の錯雜實に甚しいのを感ずる。

●對淸宣戰も東洋の平和のためを理由とした、對露宣戰も東洋の平和のためを理由とした、今や獨逸に對する威嚴ある要求も亦東洋の平和のためを理由とするのである。東洋の平和を維持するは日本の使命である。

獨逸が何と返答するか、東洋の平和を念として遼東の還付を强ひた獨逸が、同じく東洋の平和の爲めにする日本の要求を拒絶することは出來まい。或は何等かの條件を付して來るかも知れない、支那に還付する期限、方法等の如きに就いて。

期限の如き勿論獨逸の意見を參酌する必要はない、日本が必要と認めて還付を要求する以上、其還付は亦た日本が必要と認める時期に於てするのみである。此の點は支那に於ても能く承知して居なければならない。所謂東洋平和の爲め、還付を適當と認める時期の到來如何は日本の判斷に在る、判斷の當否は日本の實力如何に依つて決せられる。東洋の平和を維持すべく日本は今後益々多難であることを覺悟せねばならぬ。

獨逸が任意に引渡すと、日本が强制に引取るとを問はず、兎に角膠州灣が日本の管理に屬するは近い內である。さて日本の管理に屬して他日他年支那に還付するまでの間に於ける膠州灣は、國際法上如何なる地位に在るか、一考すべきものである。

支那に於ける租借地といふものが一時、國際法上の疑問であつた。あの樣な奇態な領土關係といふものは、

從來の國際慣例に無いのだから、其法律的解釋にまでついたのは無理もない。獅子と猿が獲物に就いて權利爭議を生じた時は、双方の腹加減と爪牙の力とに決定せられるものである、國際法上の疑議も亦同樣である。

膠州灣の保管中に於ける法律關係は、租借地に民法の貸借の法理を適用す可らざると同じく、民法の保管の法理を以て解釋してはならない。日本の法律家、外交官は既存の法理を尊重し過ぎる、過去に拘泥し慣例に束縛せられるから、取調べだ協議だといふことに手間をつぶして機宜を失する例が是迄に多い。此後の膠州灣問題の如きは、我より自ら古を爲す底の意氣を以て處理して行かねばならない。

獨逸が獲得して居た權利の如何などに頓着することは要らない、獨逸の租借權を繼承したのではない、民法上に生ずる權利繼承とは權原が違つて居る。全く新しい權原に因るものであるから全く新しい法理を構成せねばならぬ、膠州灣が支那、日本、其他外國と如何なる領土的權利關係を有すべきかは、是亦一に東洋の平和を顧慮して決定すべきものである。保管の原因が此に在るから保管者の權利もやはり此に依るべきが當然である。

◉東洋平和のため日本の爲すべきことは今後ます〱多端であらう。差當つて歐洲戰亂の繼續中に爲すべきことだけでも少くあるまい。宗社黨か、革命黨か、草賊の横行か、軍兵の掠奪か、いづれ支那に騷擾が頻發しようとは誰しも想像する所である。袁世凱の現在の準備を以てしては財政は窮乏、兵力は不足、武器彈藥は補給困難で、到底擾亂を鎭壓することは出來まい。必ずしも擾亂の發生するを俟たずとも、其の生じさうな形勢があると見れば豫防の目的を以て、北京漢口濟南開封南京上海其他の要地に派兵することも出來る。

日本は支那人民が袁に支配されようと孫黄に支配されようと將た又張三李四が王たり帝たり總統たり大元帥たるとは毛嫌ひするに及ばぬ、たゞ治平を保つて吳れゝば可い、外人の生命財産が安全で通商貿易が妨害されなければ、支那の主權の所在憲法の有無など吟味

する必要は無い。

併しながら支那の治安が保たれなければ東洋の平和に害がある、强ち擾亂に及はずとも、餘り虐政が行はれて人民の自由が失はれ、發達が妨げられるのは、支那自身の不利益のみならず、延いて隣國に惡影響を及ぼし或は他國の野心を誘發するの虞あるが故に、やはり東洋の平和に害ありと謂ふことが出來る。

日本は此の東洋の危機に際し、袁世凱に善政を施すべく要求することも亦出來るわけである。若し我が勸告を容れなければ必要なる强壓を加へて其政治を監督することも亦東洋平和のため日本は要求して差支ない。眞に東洋平和のためならば日本は、袁世凱の嘘の數をも制限することが出來る。况んや袁政府が妄りに諸般の利權を米國其他に割讓するが如きは、他日の紛議の種を蒔くもので、最も東洋平和のために虞るべきものである。

歐洲戰亂の長びくのは、南北兩米洲のために利する所が多い。英佛露が勝つても、獨墺が勝つても、何の國も非常の損害を被り、租税は益々苛く生活は愈々困難となる、之を脫離せんが爲め大西洋を渡る者が戰後劇增するに違ひない、南北兩米洲の廣野は之が爲めに開拓の便宜を得て其富力は急速に增進しさうに思はれる。特に其の北米合衆國が發展する爲めに、吾人が東洋の平和を擾ることのなかれがしと祈る。

米國も時々東洋平和のためを思ふ國である、先年滿洲鐵道中立の提議をして見たり、此度も何か、ためを思つてゐる樣である。米國が、眞個、東洋のためを思ふならば、フイリツピンを完全に獨立せしめることである。朝鮮に盛に傳道したり、支那の利源開發を勉めたり、日本人の皮膚の色を氣にしたり、あまりやかましく十二支膓蟲の世話を焼いたりするのは、東洋平和のためを思ふ所以の道でない。

◉獨逸は好きである、學ぶべき國である、カイゼルが敎育、軍備商工業の發達を計つた遣り方は、今後も日本の師とするに足りる所である。ガイゼルが獨逸を利口にし强壯にしたのは好かつたのだが、利口な爲めに人

を馬鹿にし、强壯な爲めに人を虐めようとしたのが惡かつたのである。カイゼルは漫畫書きか、一騎兵下士か、一個の獨逸人として有用の材である、惜しいとには彼を帝王に戴ねばならない獨逸人を眞實氣の毒に思ふ。

此度の獨逸は三面六臂の働きで實に氣味が好い、若し戰の原因が一通り正しかつたならば、負けても恥にならぬ天晴の勇氣であるが、ゆすりがばれて袋叩きに遭つた樣な形で、どうしても同情が集らない。

局部々々の戰爭は有利であつても、大局に於て獨逸の負となりさうだ。カイゼルは縱しセントヘレナに幽せられたとしても、獨逸民族は此で衰微には陷るまい。國民の氣風が頹廢しての敗戰ならば希臘、羅馬、西班牙の末路の如くなるであらうが、獨逸の剛健な氣風は諸敵國に優つてゐるのだから、此度敗戰したとて再興の日は必ず來るであらう。

さうすれば歐洲の禍亂は遠からずして復た見舞ふわけである。此度の戰役が終了しても、ほんとの終了でなく休戰期に入るのである。それともカイゼルの戰敗の爲め今後獨逸の帝權が削られて、民主政治に傾いたならば、政爭が劇しく、金持が威張り、華奢になり、遊惰になり、虛榮に流れ妥協を事とする樣になつてしまふであらう。

◉佛蘭西が勝つても、其は佛蘭西が强いのではない、獨逸が强過ぎて威張りすぎて惡まれたからである。英露の伯父さんにおぶさり白耳義の若い衆に尻を押して貰つて勝つたとて佛蘭西は威張るに當らない。

寧ろ此度勝軍をして、其の中の或る將軍が眼さましい手柄をして佛蘭西人を醉はしてしまつて、すつかり人氣を背負つた拍子に、ばた／＼と帝政にしてしまつて、政治の中心を巴里から他に遷したら面白からう。數世頹廢の都人士氣質に充つた巴里では百の拿破翁が再生しても、堅實な政治は行はれさうにない。何の國の歷史でも舊い都で新しい政治はなか／＼施されがたいものである。

普佛の爭を將來に減ずる爲めにも佛蘭西の首都を地中海寄り西班牙寄りに遷したが好い。併し帝政を作る

よりも巴里から首都の誇を奪ふとは一層困難であらう。
　白耳義は金が有る上に力もあつた、此ですつかり男を揚げた、今後歐羅巴の一强國として取扱はるゝに至らう。アルサス、ローレンは喧嘩の種で、昔から取つたり取られたり近所迷惑の土地である。今度佛國が勝つても歐洲平和の爲めには佛國に與へず、むしろルクサムグルグと共に白耳義に附屬せしめたらばとおもふ。さすれば瑞西から白耳義と連つて歐洲を中立國で中斷することになり、佛獨の垣根越しの喧嘩が減る。
　それに、ポーランドを小さくとも復興して、露獨墺の中間に介在せしめ、中立國としたいものである。中立國は此度の戰爭で何の役に立たなかつた樣なもの、强國と强國と接壤してゐるより確かに爭因を少くする効がある。又、此度の白耳義侵入は獨逸に同情を失はしめたといふ制裁は有つたから、中立國を設けるのは無益ではない。

●露西亞の動員も既に完結して、續々南下しかけたといふ。滿洲の野に我と戰つた勇士達が、軍は斯樣するものだと、カイゼルの健兒に教へてやる日を待つのは吾に取つて甚だ愉快な興味多いことである。
　佛蘭西が戰に幸運であらんことは熱禱する所なれども、佛蘭西が勝つて、今迄の獨逸崇拜にかはり、どしどし吾國に巴里風を持込むやうになるのは、望ましいことてはない。
　露西亞が勝つて、日本と同盟して、支那を誘掖して行くといふことは、東洋の平和のため最も望むところである。さうして日英同盟が繼續されて行くならば此の世紀の世界は平和であらう。（八月十六日の夜）

美人通信

東京日日新聞記者　小野賢一郎

其一、萬龍物語

一、新福富町

私と萬龍との因緣も隨分久しいものである。と云つ

て別に個人としての關係がどうの斯うのといふ譯ではないが、新聞記者としての關係は隨分久しいものである。今では恒川夫人靜子として美くしい家庭の女王だが、私が記者生活に入つてから、筆にしてきた美人のうちでは萬龍が最初の第一人であり、また萬龍の記事が一番讀者にうけたから、從つて『萬龍の話』は私の記者生活に深い根ざしをもつてゐる。お氣の毒ではあるが暫く名前を借用したい。恒川夫人としての名譽を別に傷るやうな譯合でもないから。

確か明治四十二年の春場所の歸りだつたと思ふ。兩國橋を冷洋君とぶら／＼話し乍ら渡つて電車で淺草に行き我々の間に「かにや」と稱する處で飲んでゐた。大槻如電翁などがよく醉つ拂つてゐた處で、酒を愛する上に於て私の味覺はまだ／＼幼稚な廿一歲の頃だつたが、それでもこゝの酒は口あたりがよいやうに思つてよく通つたものだ。何かよいつゞき物をといふ事から私は萬龍をやつてみてはといふ話をした。冷洋君も贊成して春場所千秋樂次第すぐ其準備にとりかゝる事にした。

その頃、私は朝鮮から東京に出てきた許りで東京の花柳界の樣子も知らない、新聞のつゞき物を書く呼吸もよく知らない、愈々書き出すまでには隨分氣を揉んだものだ。「東京日日」に合併する前の「毎日電報」に「萬龍物語」の第一回が出た中には「朗詠集」の文句が出たと云つて笑はれたが、それ位に私は堅くなつて調べ且つ書いた。

赤坂の春本の戶籍謄本といふものは、たいへんなもので、養女制度をとつてゐたから、養女だけの名前を書くだけでも一仕事であつた。赤坂區役所では一週間かゝらねば謄本は出來ないと私を脅した位であつた。萬龍の蛭間靜子もその養女のひとりである、それに依ると淺草の新福富町二番地に實母、即ち田向ハマがゐる事になつてゐる。そこで私は毎日新福富町へ通つた同じ二番地でも二百軒からの家があつて、マッチの箱はりやら、傘の骨けづりやら飴屋やら、ごた／＼住んでゐて、路次は蜘蛛手に岐れてゐた。毎日根氣よくド

ブ板からドブ板を歩いて一軒づゝ聞て歩いたが夫れらしい家はなかつた。病みほうけたお婆さんや腰のぬけたおかみさんなどから、隣の娘の行衛やら、藝者に娘を賣つた家の話を聞いたが、どうも田向ハマらしい人は住んでゐなかつた。

二、お母さん

淺草の區役所の寄留屆の出入を調べた。濱町にゐるといふ事を突止めたのは夫れから一ヶ月も後だつたがやつと探しあてると其家には「田向靜」といふ萬龍の名札はかゝつてゐるが、その家を借てから誰も住んだ事がないといふ。また半ヶ月もして漸う蠣殼町のある横通りに「田向ハマ」を探しあてた。

私がいつた日は椽先で氣管を病んでゐるらしい五十近い男が日向ぼつこをしてゐた。これが萬龍の母の後添の夫て朝倉某といふものだつた、その朝倉との間にできた子供が玩具をいぢつて遊んでゐた。萬龍の母親のお濱は二階からをりてきて、私の話を聞いてびつくりしたらしかつた。

『まアよく分つたもンですね、實はわざと分らない處に許り籍を置いたのですよ、春本の方からも賴まれたものですから、エヽ話しますとも、あなたの根氣に對しましてもね』となかなか捌けた下町風のおかみさんである。黑襦袢の襟をかけた事と、色の淺黑かつた事と、顏に薄い雀斑（そばかす）があつた事を今でも覺えてゐる。

話はいろいろあつた。萬龍が七歲の時、二十圓で春本に貰はれる記念の寫眞やら、萬龍の父親が死ぬる前に一家族揃ふて撮つた生別死別かたみの寫眞などを前に置いて、お濱さんはいろいろの話をして聞かせてくれた。お濱さんは三代つゞいて江戸の水を呑んだ家の娘で亭主――即ち萬龍の父の田向初太郎といふのは銚子の川向ふ東下村字舍利の生れて、日本橋の箔屋町で運送屋の下請（したうけ）をやつてゐたさうだ。

初太郎は萬龍が七歲の時肺病で亡くなつた、郷里の舍利に轉地してゐる間に死んで了つた、萬龍は父の死目にもあへなかつた。――話はいろいろあつたが、私の此記事を進める上に餘りあとは必要がない。

私は寫眞を借てきて直ぐ複寫させた。それから冷洋君と相談して萬龍の父の郷里を訪ふ事にした。萬龍の身のまわりは、それから後に調べる事にして旅に出た、寫眞機を肩にして。

三、おばあさん

銚子に着いた夜は大時化だつた。あくる日松岸へ引返した處が漸う船が出るまでに大刀根は波がしづまつてゐた。松岸には遊女屋がある、水樓のあたりは、いつぱい葭が繁つてゐて、大刀根の水がひた〱と根を洗つてゐる。葭の間から船が出る、川向ふ一帶は松林の丘がつゞいてゐる。朝がへりの嫖兒がざれ話に興がつてゐる間に船がつく。松林の中に入つてざく〱〱砂をふみ乍ら舍利の里をさしてゆく。和服ばかり着てゐる私は前夜銚子の宿で呉服屋と間違へられたが、こんどはどう見られるだらうと、ひとり笑ひをし乍ら小徑を辿つてゆく。

舍利の村は松林の間に靜かに横はつてゐた。田向といふ姓は幾つもあつた、田向儀右衛門といふのが、萬龍の祖母の再緣先である。その家は大きな榎の蔭にあつて軒が傾いてゐた、私は萬龍の從妹といふのに案内されて庭先に入ると、ひとりの老婆が絲繰車を廻してゐる。これが萬龍の祖母だつた、七十幾つとか云つてゐたが、黑い痘痕い、目のしよぼ〱したお婆さんだつた。東京から初太郎さんのお墓參りにきたと云つたらお婆さんは大變よろこんで、奥の佛壇から位牌を持つてきた、椽先にその位牌を置いて念佛を稱へ乍ら「これが初太郎です」と云つた。私も拜んだ。

お婆さんは泣き乍ら私に初太郎の事を話してきかせた。瘠せ衰へて此間て死んだと云つて六疊の暗い座敷を指して又泣いた、萬龍の話に移ると「娘は大臣さんや公卿さんとお話する身分になつたさうですが未だ父親の墓まゐりにもきません」と云つて又泣き〱愚痴をこぼした。そこへ儀右衛門老人も歸つてきたので私は寫眞機をとり出した。念の爲め二枚とつた、生れて初めての寫眞であるから、社の丸茂君から敎はつた通りにしてとつた。

儀右衛門老人は折角東京からきてくれたのだから、是非初太郎の墓に詣つてくれと勸めた、墓までは十町もあつて夫れに短かい日は落ちかゝつてゐるが、折角のすゝめてはあるし、老人に案内されて田舍道をとぼとぼ歩いていつた。

四、父の墓

卵塔場はもう暗かつた。卒都婆がすく〳〵と叢の間に立つてゐて、末枯れた草が夕風にざわ〳〵鳴つてゐた。

初太郎の墓はなんにもなかつた。私の心は暗くなつた。なんにもない、たゞの土饅頭がそれかとあるばかり、なんにもない、これが美妓萬龍の父親の墓である。遠くてボーンと寺の鐘が鳴る、あゝ鐘が鳴る、お誂向の鐘がボーンと夕暗にひゞく。――私も老人も默つて突立つてゐた。

暫くして私はそこにあつた野生の萬年青をぬいてきて、土饅頭の前に植ゑた、それからそこに轉げてゐた茶碗を前に供へた、これが切めてもの香華である。寫眞機を出して見たが光線は暗い、切めてもの心やりに暗に白く見ゆる茶碗をあてにレンズを向けた。――鐘は猶も鳴つてゐた。

儀右衛門老人とはお寺の近くて別れて、暗夜を渡場に急いだ。松岸の水樓の前にある茶屋では、榾火を焚き乍ら私をもてなしてくれた。新聞記者だといふ事も知らない、道樂に寫眞をうつしてゐる「東京の人」が明る朝早い〳〵汽車で立つといふので、夜あかしゝて榾火を振舞つてくれた。

霜の朝、私は慄へ乍ら松岸の停車場に汽車を待つた。これから土浦に出て萬龍が小猫といふ名で土浦にゐたといふ――その噂は嘘だとは思ひつゝも念の爲めに確かむべく汽車を待つた。

汽車の中も寒かつた。土浦で下りるとやつと日がさして口も利けるやうになつた。通信員といつしよに御飯を食べ乍ら土地の藝者から話を聞いたが、私の期待してゐた事は皆外れた。それでやつと安心した、實は私は萬龍をこの土浦などに置きたくはなかつたのだ。

「萬龍物語」は出た。――私は更に萬龍贔負の人々やら、萬龍の美貌を初めて紹介した柴田寫眞師やら、その他いろ／＼の人からいろ／＼の話を聞いた。しかし夫れはもう皆すてに人が知つてゐる事て、今更こゝに繰返さなくともよからう。私は美人としての萬龍をこれから追憶しなければならぬ。美人なるが故に萬龍てある、私は美人だから萬龍に筆を染めたのてある。

五、恒川君

新橋の名妓ぽん太の半生涯は美くしい、ぽん太は鹿島清兵衛の宿の妻として少しも恥づる處のない良妻てあつた、子供は餘り出來がよい方てはないが夫れても坪内博士の養女坪内くに女を生んだ。ぽん太の舞姿をみても猶昔の面影があつてそゞろ全盛時代を思はせるものがある。先達「日日」主催の新富座の「かたおもひ」の總見の日、多くの見物の中に彼の姿を見たが、整つた彼の顔の輪廓と美くしい目とは、見物の視線を惹いてひそ／＼話の種となつた。私は萬龍が恒川夫人となつた時に、願くば一代の美妓萬龍をして、ぽん太のやうに節操ある妻たらしめたいと思つてゐた。

恒川君は銀座のウーロンチーて一度お目にかゝつたとけてある。その時は何も私は知らなかつた、恒川君の方から谷崎潤一郎君と同窓だつたと名乘られて名刺を下さつたやうに思ふ。それ位だから恒川君について私は何も知らないし又何も云へない、けれども何かの雜誌て靜子夫人と並んてにこ／＼笑ひ作ら撮つてあつた寫眞をみて、私は何となく氣の安まるのを覺えた。また人傳の噂を聞ても靜子夫人はまことにをとなしやかて姑のお氣に入りださうだから、まづ／＼おめでたいとお祝ひ申します。

私は何度となく萬龍をみた、けれども靜子夫人としてまだ一度もお目にかゝらない。半玉時代の萬龍は世にも美くしいものてあつた、美人の萬龍として見るならば其半玉時代を措て花やかさを語る事は出來まい。御守殿風に裝ふた、姿からして目ざむるまでに美くしかつた、他の藝者に見られない品があつた、ふくよかな開してしまつた顔の肉と大きい涼しい目とは濃厚な

色彩の中て更に濃く光つて見えた。私は萬龍が盛装して或る大官に抱かれて撮つた寫眞をみた事がある、その大官は金モール美々しい大禮服を着てゐた。實に萬龍の花やかな姿は燦として輝く大禮服とても對照しなければならなかつた。

繪葉書美人としての萬龍も亦逸する事の出來ない話題てある。彼の初代の葭町の奴の如きも繪葉書美人として賣れた、ぽん太も亦持囃された、けれども萬龍のやうに賣れた美人はない、今も猶外國にまて盛んに賣出されてゐる。萬龍は美人繪葉書界の立物てあり今も亦下火になつたとは云へ賣れてゐるので玆て繪葉書美人として話したいと思ふ。

六、繪葉書美人

私が嘗て「日日」に「美人記」を書てゐるとわざ／＼繪葉書屋がきてくれて美人研究の材料にもがなと云つていろ／＼話してくれた。その時にかういふ事を聞いた。繪葉書にするには顏の筋肉の或部分に光線をあてるあてないに依つて非常に美醜が違つてくる、今の藝者て少しも修整をしないていゝのは新橋の照葉てある。美人繪葉書は本人にそつくりといふよりも成るべく美くしう見える方がいゝから隨分手ひどく修整をする、新橋の靜江は頤をすこし切て落せば美人になるし赤坂の萬龍は鼻を少し削ればよいと、こんな意味の事を實驗上から割出して話してゐた。

萬龍の鼻を修整するといふ事は赤坂の或寫眞師からも聞いてゐた事てある。なる程鼻は大きい、大きいには大きいが私は之れ位の鼻は是非萬龍に持たせなければ嘘だと思ふ、萬龍は鼻があつてこそ濃厚てある、閑子鼻が目立つてこそ彼の印象は强い、この點に於て性の研究をしてゐる小倉淸三郎君と甚だ意見の一致してゐるのを嬉しく思ふ。

繪葉書屋はたゞ美くしく見ゆればいゝといふ事を本位にして修整してゐるから勝手てある、繪葉書屋は昔から美人として言傳へてゐる口もと締つて目パッチリ、鼻筋通つて――の規條に一々當て箝るやうに寫眞をとり修整をしようとしてゐるのてある。繪葉書屋は

盛んに萬龍の鼻を削るが私はあらずもがなの努力てあつて又萬龍に對してハナはだ失敬な仕打だ思とふ。

萬龍の特徴は鼻と目と睫毛と口と頬と頤と夫れと長い美くしい黒い髮にある。それだけて充分てある、それだけに彼の品を添へたら夫れが萬龍の總てゝある。繪葉書屋に喜ばれるのも萬龍の其總てが美くしいからてある、萬龍は全身の美人てはない、半身の美人てある、いや顏面の美人と云つた方がよい、繪葉書屋は多く顏面の美人を喜ぶ、萬龍の總ては顏面にある。

萬龍の美を語る上に於て之れ以上は蛇足てある、彼は姿勢といふ上から又全身の美人として見ては全然其價値を失ふ、餘り多くを語らず以上にとゞめて置いた方がよいやうに思ふ、そして萬龍の半生を思ひ萬龍の目を思ひ鼻を思ひ髮の長さを思ふて、靜かに萬龍と恒川君との戀物語を思ふのが一番話を美くしくし又話すにも氣持がいゝやうに思ふ。

七、命の恩人

萬龍の戀ごゝろは非常に美くしう働いた。引手あまたの中から恒川君に走つた、恒川君は實に萬龍の命の恩人てあつた。

箱根の椿事として傳へられたのは萬龍の行衞不明といふ事てあつた。東海道出水、箱根の山くづれ、東京も水に浸されてゐる中に、萬龍が宿屋と共に押流されて行衞が分らないといふ噂が東京に傳へられた。萬龍の美貌に憧れてゐた者は勿論、一度ても萬龍の繪葉書に手を觸れたものは皆美妓彼の爲めに驚き且つ惜しんだてあらう。私はその頃、やはり社命て沼津から機關車に便乘し濁流鐵橋を洗ふ中を乘切つて靜岡に急行し、靜岡から燒津、藤枝と歩いて、屍體の累々たる慘狀を視察してゐたが、靜岡に歸つて此噂を聞いた時にはどれだけ驚いた事か、私は萬龍と斯樣に因縁が深いだけに一入心を暗くした。

すると間もなく萬龍の無事な事が傳へられた、而も恒川君の手に依つて萬龍の一命は救はれたといふ勇ましい話と、それといつしよに美くしい戀仲となつたといふ艶聞も傳へられた。美男と美女が嵐と濁流の間に

結んだ戀は艶種記者の筆を伸ぶるに恰好の舞臺と人物と背景とをもつてゐたらう。

この戀物語はこれでおしまひである、何だか呆氣ないやうであるが筋書はこれだけである。萬龍の戀ごゝろが動いて恒川君にゆき、恒川君も亦熱して春本の蛭間そめの養女靜が恒川君の妻となるまでの事は、人々の想像に任せなければならぬ。私はこの物語を書く間に萬龍の祖母の寫眞を探してゐると、寫眞の間から春本の戸籍抄本が出てきた。蛭間靜と明かに記されてあるが、今では蛭間姓を許さぬ恒川夫人である、而も恒川當主夫人である、おめでたいと再びお祝ひ申さゞるを得ない。

萬龍を捉へて或者は薄のろであるとまで極言した。併しこれは間違つてゐる、春本の采配を振てゐるお蝶などは、あれであの妓はなか／＼悧巧だと云つてゐた。萬龍は品があつてをつとりしてゐるから、バラガキ仲間から見たら薄のろにも薄馬鹿にも見えたであらう、併し彼の顏に品があると共に彼がをつとりしてゐる事も亦彼の身上と云はなければならぬ、彼が家庭の主婦となり得たのもをつとりしてゐるからである、此點は新橋の照葉などゝ餘程違ふ、照葉の戀がいつも狂的で血腥いのに比べて萬龍の戀は床しい優婉なものであつたらうと思はれる。

八、大丸髷

とにかく萬龍は家庭の人となつて了つた。萬龍去り照葉去つた今日の花柳界はどんなに淋しい事か、美人繪葉書に新顏の出ないのを見ても分る。春本は萬龍を失つて了ひ、あとに菊龍や一龍があるし小萬龍などもゐるがとても萬龍の全盛時代を再び見るやうな事はあるまい、菊龍の顏はいかにも悧巧さうで、筋骨のどこにも才氣があるらしいが、決して大きい美人ではない、からくり仕掛の人形のやうなものである、春本の大姐の鹿の子のスケッチをよくし、見事な筆の跡を座興に見せるが何にしてもたいしたものではない。その外はもう云ふまでもない、たゞ筆の跡で思ひ出したが曾て萬龍と菊龍と一龍と三人がそれ／＼署名したのを見た

事がある、ところが皆同じ手本を稽古した故によく似てゐる。萬龍が赤坂の小學校に通つてゐる頃、餘り美くしいのと風裝が花やかで、他の兒童に見せてはよくないといふので學校から春本に交渉して學校を退らせた事がある、その後春本で教育してゐるといふ事を聞いたが、この筆蹟が似てゐるのも或は春本でそんな教育をしたのか、一寸思ひ出したまゝ書き添えて置く。

あゝ萬龍は去つた、美妓出でず名妓なしの聲を聞く事久しい、あゝ萬龍は去つた、彼のふさ〳〵とした髮の毛は大きな丸髷に結はれてゐるだらう。併し萬龍はよい時に去つた、ありていに云へばよい汐時に引あげたものだ、萬龍は美人薄命といふ慣用語から免れた、彼の生命がどこまでつゞくか實は疑問だつた、私は彼の後藤猛太郎伯の寵妓であつて猛さんと一緒に流れ歩き、いつも大芝居を打てゐた新橋のお鈴の晩年を思ふと、萬龍の引あげ時を喜ばざるを得ない。新橋で鳴したお鈴も今では浪花節の三味線ひきとなつて小田原邊を流れ歩いてゐるとやら——あゝ萬龍はよい時に引あげた、ほんとに悧巧だつた。

私の「萬龍物語」もそろ〳〵引あげる時がきた、家庭の萬龍を描くのは失禮だからそろ〳〵引あげねばならぬ、曾て萬龍の爲めに卦を立てゝ新聞で占つた事があつたが、彼の半生涯は左樣に幸福であらう、名妓の多くが悲慘な晩年を送るのに比べて萬龍は豐かな天運に浴するであらう、また恒川夫人の爲めにしかく祈らざるを得ない。

世間の女は皆さう云つてゐる——萬龍はよい月日の下に生れた——おめでたう。

世間の男は皆さう云つてゐる——恒川君はいゝ女房をもつた——これもお目でたう。ほんとに、おめでたづくめの記事を書くのは賑やかでいゝ。（八月十七日）

——次は照葉の行衛——

動物の戰爭

理學博士 丘淺次郎

動物の生活は徹頭徹尾戰爭であつて、戰爭無しの動物生活と云ふ事は、殆んど考へられない事柄である。然し斯う云ふ具合に云ふ時には、戰爭と云ふ言葉の意味を、普通の意味よりも少し擴めて云ふのであると云ふ事を斷つて置かねばならぬ。

動物の生活は徹頭徹尾戰爭であると云ふ、此戰爭と云ふ言葉の中には、互に噛み合ひ、殺し合ひ、そして其肉を喰ふと云ふ、いはゞ直接の戰爭とでも云ふべきものと。又同一の需要品を甲の動物も求め、乙の動物も求める、其爲めに甲乙の動物の間に其奪合ひの戰が起る――之はいはゞ間接の戰爭とでも云ふべきものであるが、此直接と間接の兩方を合せて戰爭と云ふならば、動物の生活は徹頭徹尾戰爭であつて、戰爭なしの動物生活と云ふものは一つも無いと言ひ得るのである。

どうせ動物が生きて居る以上は、其必要なものがいろ／＼ある。先づ第一に食物が要る。或は休息む時の隱れ家も要る。動物によつて水が無ければ生活の出來ぬものあり、濕氣が無ければ忽ち死んで了ふものもある。すれば水とか濕氣とか云ふものは其動物の生活には必要條件となるのであるが、それを幾つかの動物が取り合ひをすれば、詰り戰爭をしなければならぬ事になる。此狀態はいろ／＼の動物について見れば明瞭に分る事で、どんな動物をとつても、其生活を調べれば何時でも戰爭のみである。

尚然しながら茲に區別しなければならぬ事は、直接の戰爭は論外として、間接の戰爭の中には、少し人間らしい言葉遣ひであるが、意識的の戰爭と無意識的の戰爭とがある事である。同一の需要品を爭ふ時に、其

目的物を目の前に置いて取り合ふ時には、人間で云へば意識的であるが、動物の中には動かぬものがある。水の中などに棲む物の中には、根が生えて固着して、一見植物の如く思はるゝものがある。此等の動物は、敵に向て進むとか、又は退いて逃げるとか云ふ事が出來ぬ故、普通人から觀ると、丸で戰爭など云ふ事が無く、極めて平和的の生活をして居るやうに思はるゝが然しさう云ふ動物も生きて居る以上は需要品はあるのであつて、それが得られねば死ぬのである。例へば其動物の食物にした所で無限にある譯ではなく、或一定の廣さの所には一定の量しかないのである。固着の動物は餌さへあれば體も大きくなり、又繁殖して數も多くなるのであるが、數が多くなれば從つて食物が缺乏する。缺乏すれば、其中の幾らかゞ生存出來るが、他のものが死ぬ事になる。此等は敵に殺されるのではないが、若し他のものが居なかつたならば、生き得べき筈のものが、他のものが居る爲めに死ぬ事になるのであるから、結果から見れば明かに戰爭であつて、戰爭が只無意識に戰はれた丈けの相違である。此等の事實をも戰爭と云ふ言葉の中に含めると、動物の生活は徹頭徹尾戰爭と云ふ事になるのである。

同じものを甲も欲しがり乙も欲しがる時に爭の起る事は、一家の中の兄弟の子供が始終喧嘩をするのを見ても分る。あれは咬み合ひ殺し合ふ譯ではないが、甲乙の間に起る多數の動物の戰爭は、恰度兒童の玩具の取り合ひと同じものである。

動物の生活は徹頭徹尾戰爭であると云つたが、さすればどの動物を見ても戰爭をする仕掛が備つてあるべき筈であるが、之は實際を調べて見ると、必らず皆備つてあることが分るのである。どんな動物でも防禦の仕掛の無いものがなく、又攻撃の裝置の無いものもない。即ち武器の無いものが一つもない。只武器の形狀や、働きが樣々である故、一寸見ると武器が無いやうに見ゆることもあるが、生活上の狀態を詳しく調べて見れば、事實上武器の働をするものが必らずある。攻撃に用ゐる武器と云ふものは多くは防禦の時にも用ふ

るもので同じ鐵砲、同じ槍を攻める時も守る時も用ふる事が出來ると同じ事である。動物をずつと調べて見ると、攻擊防禦に用ふるものがいろ〳〵あるが、一つ二つの例を擧げて見ると、獸の牙、爪。蟹の螯。蜈蚣、蜘蛛の毒顎。蛇の齒の如きもので、此等は動物を捕へる事を商賣にして居る人のよく知つて居る通り、之を捕へんとする場合には、此等の武器にひどく惱まさるるが常である。

　攻擊に用ふる武器は動物の種類によつて樣々で、非常に巧みに出來て居るものもたんとあるが、中には小さい爲めに人が知らぬものもある。例へば水母の如きは其一つである。夏、海水浴に行つてよく水母に螫される事がある。之は小さな顯微鏡的のもので百倍、二百倍位のを用ひねど見えぬものだが、其代り數が無數にある爲めに、其働きがなか〳〵著しくて、泳いで居る中に水母の或種類に螫されると、其爲めに三日も四日も惱まされる事がある。此等は小さいから見えぬ丈けで實際なか〳〵有力なる攻擊武器を持つて居るのである。

　防禦の器械と云へば、之はどんな動物に備はつてゐるかと云ふに、その最もよく目立つて見えるのは、敵から攻めらるゝ事の多い動物であつて、此等は植物を喰ふ動物若くは小さな虫位を喰ふ動物であつて、人間が捉まへようとしても抵抗の出來ないやうな動物に多い。著しい例を云へば龜の甲。山荒の棘。針鼠の針其他澤山にある。此等は皆防禦に用ふるのである。

　今擧げたものの如きは最もよく防禦の裝置の分る動物であるが、中には一見防禦の武器が無いやうに思はるゝものもあるけれど、それ等は外の事で防禦の働きをするのである。例へば疵に堪へる動物があつて、鐵砲に打たれて體に穴があいても構はぬと云ふ忍耐力を備へた——寧ろ無感覺とも云ふべき動物がある。其爲めに咬まれても一向平氣であるし、又一部分を喰ひ取られても元の通りになる動物——動物學上の所謂再生力を備へた動物がある。此等は防禦力が無くても再生力によつて生命を守ることが出來るのである。

又動物によつては攻撃力も防禦力も再生力も全くないやうなものも無い事はない。此頃の庭を見ると、菊の芽に一面に居る、又よく薔薇の芽に附く所の油虫一名ありまきの如きはどう調べて見ても攻撃の武器がない。只植物の汁を吸ふ仕掛丈けで、防禦の力もないやうに見える。若し動物の生活を戰爭であるとすれば攻撃力も防禦力も無い動物は一瞬間も生活出來ぬ譯であるが、此油虫にはそれに代る力があるのである。即ち其防禦力となるものは此虫の備へて居る繁殖力であつて、非常なる速度を以て堪へず子を産むのである。外の昆虫ならば、例へば蠶の如きは卵を産み、翌年孵へると云ふ手間を取るのであるが、此ありまきは卵を産まず親の體からドシ／＼子を産むのである。五分なり十分なりじつとして見てゐると、十疋位の子を産むのが分る。軸も葉も分らぬ程に油虫が附くのは全く此虫の繁殖力の甚しい結果であつて、假令此虫を喰ふ動物から攻撃されても、生殖力で以て補つて行く方が多いので、草花を培ふ人は餘程よく注意して驅除しないと植物を枯らして了ふ程に多くなるのである。此繁殖力の强いと云ふ事が一つの防禦力であると見てよい。個體個體について見れば代の入り變りになるけれども全體としてはなか／＼數が減じない。此等も戰爭と云ふ言葉の意味を廣くすると、繁殖力即ち防禦力で、矢張り戰爭に與るべき防禦力を備へて居るものと云つてもよいのである。

以上は攻撃、防禦の器械についてのザットしたお話であるが、次に動物が相爭ふ時には個體同志のものあり、團體同志のものがある。今團體同志の例を一つ二つ擧げて見やう。

團體をなして敵に當ると云ふ事は、社會を形造つて生活する動物とのみ限らず、單獨の動物でも場合によつては一時團體を作ることがある。一個體で出來ぬ時には一時團體を作ることがある。そんな例は獸類などには澤山にある。例へば狼などは狼より弱い動物を攻める時には狼が幾匹も集ることがない。狐を取るとか鷄を取るとか云ふ時には一個々々に働くが、牛を攻め

るとか馬を攻めるとか云ふ時には數匹乃至數十匹、多い時には百匹も集ることがある。然し之は團體とはいへぬ。何故かと云ふに、其獲物を喰ふ時になれば、狼同志の間に爭が起つて又各自バラ〳〵になるからである。本當に團體を作つて居る動物はどんなものかと云へば、之にも澤山に例がある。同じ團體の中に親子兄弟身體が繋がつて一團體をなすものもある。池の中や海の中などにはそんな動物が澤山にあるが、之は人が餘り知らぬ。人の知つて居る高等動物について云へば象、膃肭臍、海豹の類で、此等は何千も何萬も寄つて團體をなして居る。又猿なども種類がたんとあるが、隨分可なりの數が集つて團體をなして居る類もある。けれども獸類の團體に比べて一層完全なる團體をなして居るものは昆虫類である。獸類は團體をなしても其團體内には動もすると個體と個體との細かい爭が免れぬけれども、昆虫の團體の中には爭と云ふものが丸で無い。例へば蟻とか蜂とかの團體は團體を作る一個體〳〵には殆んど慾と云ふものがないやうに見える。

團體の慾が即ち個體の慾で、生れながらにして全團體の利益になることばかり考へて居る。總ての個體が皆團體の慾と一致するが故に、團體内には丸で爭が無い。其代りに團體が他の團體と爭ふ時には文字通りの一致協力で、最後の一匹が死絶えるまで敵に降參しないやうな團結の働きが出來る。蟻や蜂の生活については面白い事が澤山にあるから之を調べた人が甚だ多い。殊に素人でも好きな人は誰でも出來る故、歐米では動物學者でない人で研究した人が幾らもある。或は建築の技師だとか、或は基督教の坊さんだとか、又ラボックのやうな銀行家だとかいろ〳〵ある。又蟻の生活を調べる爲めに道具なども賣つて居る。即ち人造蟻の巣など云ふ專賣特許のものが獨逸佛蘭西等に賣つて居る。之は素燒で蟻の巣を造り、中に濕氣を入れる裝置がある。それを硝子で張り、黑い羅紗を被せ、研究する人は黑羅紗を上げて蟻が中で何をして居るか見ることが出來るやうにしてある。斯う云ふので見ると、蟻の一團體の中には爭と云ふものが丸で無い。其代りに他の

團體とは先天的の仇敵同志で、一の組の蟻を數匹捉へて他の組みの團體に入れると、直ぐ寄つて集つて咬み殺して了ふ。こちらの蟻を向ふへ持つて行つても、向ふの蟻をこつちに持つて來ても、持つて行かれたものが必らず咬み殺されることが同じである。或一つの團體のものを捉へて、之を暫く他處に置いてから、元の巣に入れても之を攻撃することがない。暫く他處に置いたものと直ぐ力を合せて働く。之は何處で識別するか分らない。或人は臭ひで分けるのぢやないかと云うて、捉へた蟻に香水を撒りかけて放して見ると、近邊の蟻は初めは少し疑はしいやうな態度をして居つたが又直ぐ一所になつて働くことを確めた。詰り自分の仲間のものならば一時他所にやつても、直ぐに同じ團體の中に働くのである。

二つの團體でも、同じ種類の蟻ならば本を正せば同じ一つの團體から分れたものであらうが、それが二つ三つと別れゝば、矢張り敵同志になつて一方の團體のものは容赦なく殺して了ふことになる。又黑い蟻と赤い蟻と云ふ風に種類が違へば勿論敵同志であるが、斯う云ふ風に種類が違ふと、小さくても强いのがあり、大きくても敏活でない爲めに負けて了ふ事がある。黑い蟻が一面に居つた所に赤い蟻が代ることがあり、又其反對に赤い蟻が居つた所に黑い蟻が代ることがある。之は砂地であるとか、濕つた所だとか、乾いた所だとか、又は苔が生えて居る所だとか云ふ點から勝負の定ることもあるだらうが、違つた蟻の間の戰爭では一度ある蟻が勝利を得て巣を作つても、何時までも安全に居られなくなることがある。こんな具合で、團體があれば、其團體と他の團體との間には必らず戰爭が絶えない。只蟻などについて見れば一つの團體中には決して爭が無いけれども、其無いのは人間の體の中で肺の細胞と腸や胃の細胞などが爭はないと同じで、團體全體としての戰爭を有効にする爲めに個體同志が相爭はない丈けである。

こんな具合に考へると、動物は單獨生活をなすものも、團體生活をなすものも、絶えず戰爭をなして居る

ものであつて、動物の生活はすべて戰爭であると云つて差支ない。尤も其戰爭に間接と直接、意識的と無意識的との區別はあるけれども、詮ずる所動物の生活は徹頭徹尾戰爭の繼續であるといひ得るのである。

次にどんな動物の間に最も戰爭が激しく行はるゝかと云ふのに、互に咬み合つて敵の肉を喰ふと云ふものもあるけれども、之は寧ろ少數である。動物界で一番に多いのは、共同の需要品を奪ひ合ふ戰爭である。直接に敵の生命を取つて喰ふよりも間接に敵の需要品を奪ふて自分の生命を持續する方の戰爭が多い。

然らば共同の需用品の奪ひ合ひはどんな動物の間に行はれるかと云ふのに、甲の動物の要するものを乙も要する、即ち其需要が重なり合ふ所に原因するのであるからして、異つた動物の間よりは寧ろ同じ種類の動物の間に多い事になる。若し草の葉ばかりを喰ふ動物と、木の實ばかりを喰ふ動物とがありとすれば、他の關係を入れずに、食物ばかりの點から論ずると、此二つの動物の間には戰爭が起らぬ事になる。需要品が違つて居るからして相爭ふ必要が無い譯である。處が同一種類の動物は、其食物を甲が取れば乙は取られぬ理屈になる故に、其競爭が激しくなる。

然し最も其戰爭の激しいのは、同じ種類の動物の中で、極く僅か相違して居るものゝ間に行はるゝ戰爭である。例を擧げて見ると、鼠などはどの鼠もよく相爭ふもので、同じ籠の中に幾匹かの鼠を入れて置くと、食物爭ひの爲めに直ぐに疵だらけになる。然し同種類の鼠であればどつちが勝つても負けても、同じ種類のものが殘る譯であるが、同じ鼠の中でも一寸毛色が變ると、其戰爭が非常に激しくなり、若し兩種類の間に全體として力の優劣があると云ふと忽ちの間に、一方の方が蔓つて了つて稍々劣勢の方が次第に影を隱すことになる。鼠の中に鳶色の鼠と黑色の鼠とがあるが、此二種類は僅か毛色が違ふ丈けであるがよく何處でも喧嘩をやる。平均して鳶色の方が幾らか強いやうであるが、此兩方が出つくわすと鳶色鼠はずつと殖える。昔は歐羅巴では黑鼠のみであつたが、食物か何かの關

係で、鳶色の鼠が、中央亞細亞からヴォルガ河を渡つて歐羅巴に出て行くと、土着の黒鼠と亞細亞の鳶色鼠との間に猛烈なる戰爭が行はれ。今日では歐羅巴の鼠は多くは鳶色で、黒鼠が甚だ少くなつて了つた。

こんな具合で、戰爭の最も激しい動物は、同種類の少し相違のあるもの丶間に行はれるもので、此間に多少の力の優劣があれば、一方が全盛となり、一方は衰滅することになる。又ずつと種類が離るれば共同の需要品が無い故に戰爭が激烈で無くて濟む。どうしても戰爭の一番激しいのは、殆んど同種類の中の、極く僅か違ふものである。其間の戰爭では、戰爭の結果が最も明瞭に分り、盛衰の運命が忽ちあらはれるからである。そんな具合であるからして動物の生活の續かん限りは、戰爭は絶えないもので、そして其戰爭は互によく似て居つてそして少し違つて居る動物の間に殊に激しいものと思うて置かねばならぬ。

丘博士の話によると、東洋の動物で西洋の動物に勝つて全盛を極めて居るのは、前頁に書いてある鳶色の鼠と油虫（厨などに居る）であるさうな。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

■文學博士遠藤隆吉先生校■

人の道

クロース綴函入頗美本五百餘頁
正價壹圓五拾錢 送料金十二錢

(中付二の二)

好評如湧

本書の眞價は天下の公論に開け！天下は擧りて『人の道』を讀ぬ人は人の道を辨ぬ人と激賞せらる!!!

今!!此時し——

玆に說く『人の道』は道學先生の道德論、輕薄才子の世渡り法でない、言々句々皆活社會に對する處世の良道、常識の根幹智識の寶庫、修養の箴言である。此書、宇宙を狹しとした英雄豪傑の心胸言行を咀嚼し、新智識新思想の眞髓を採りて處世上のあらゆる實際問題に對し直截果斷よく人情の機微と社會の表裏を穿つて居る。人、若し處世上の疑問あらば本書に問へ、悲觀煩悶すべき事あらば本書を繙け、必ず天地神明と交り光風霽月に接するの想あるべし。故に青年諸君が之處世の金科、修養の玉條なるべく、學者・軍人・教育家・實業家之に接せば靜思深省せしむる所多かるべく、新人之を繙かば猶ほ新らしき聲を聞くの想ひあるべし。進んで活社會に雄飛するか退いて沈思默想するか、兩者に適確なる解答を與へ處世上の秘鑰を授くるもの本書あるのみ。

(目次大要)

人格、品性、常識、自重、自任
克己、自彊、執着、機智、大膽
堅實、持久、精力、周到、熱誠
廉恥、知足、恭讓、儉薄、公德
敬虔、社會、忠良、孝悌、慈仁
友誼、義勇、奉公、公憤、敵愾
愛國、尊皇、信仰、貞淑、婦功
等皆書下しにて近來流行の雜誌の切拔談片の集輯に非ず

忽ち參版

太田文學士著 伊藤靜雨畫伯釘

すねもの

金八拾錢 送料八錢

滑稽にして奇拔・皮肉にして痛快なるすね方をして當時の人士を吁ッと云はせた快人物を捕へ來りて縱橫活躍せしめたるもの本書也。是れ近來出色の快著!!!

發行所 東京市京橋區松川町 振替東京二四八〇〇 榮文館 一手賣捌 全國各地著名書籍店

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新装せる國民必備の聖典

東洋大學教授
宗教大學教授
島地大等師虔修

紙數約八百頁

漢和對照 妙法蓮華經

(上製)クロス製天金 定價一圓四拾錢 (特製)總皮製三方金 定價一圓九拾錢 小包料各八錢

内容見本 無代贈呈

法華經は聖德皇太子親しく之を講註して立教開範の基を拓き給ひしより、我が國民性を開發啓沃し來れる一大聖典にして、宗教、道德、文學、藝術等有らゆる方面に多大なる影響を與へたるは、今呶々を要せざる所。本書は斯道の名匠島地大等師が苦心の結果に成り、本聖典の漢譯、和訓を上下二欄に別掲して互に對照に便ならしめ、共に正確なる振假名を施し、殊に和訓は聖典の尊嚴を損せざらしめんことを欲し、專ら古來の相傳に憑れりと雖も、而も新に段落を設けて語句を巧妙に配列し、且科文を本文の傍に分註する等の新意匠を凝せるのみならず、附錄として、師が獨特の筆に成れる本聖典の大要梗概たる法華大意、法華略科、並に聖典中に現はるゝ難解の字句に簡明なる解釋を施せる法華字解を添へ、以て如何なる階級程度の人にも容易に之を讀誦し領得し得らるゝやう努めたり。時恰も諒闇期正に新秋、一般僧侶信徒は勿論、苟も燈下に親まんとするもの、精神修養を計らんとするものは、必ず本書を机上に備へて、佛陀矜哀の垂訓に心耳を傾けずんばあるべからず、敢て一本を薦む。

(中付二の三)

東京神田錦町一丁目十番地
株式會社 明治書院
振替東京四九九一
電話本局二四三八

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

東京朝日新聞記者 松崎天民著

同棲十二年

四六判總布綴函入

正價金八十五錢 送料八錢

(中付二の四)

赤裸々なる感情と、赤裸々なる文章とを以て、文壇に一地歩を領するは、松崎天民氏なり。その近業「亡き妻の骨を抱いて」一篇が、中央公論に掲出さるるや、同誌十萬の讀者より深大なる同情を得たる、眞に故ありと云ふべし。ここに校訂して「同棲十二年」と改題し、装を新にして讀者の清覽を請はんとす。事實と實感とを描いて、小説以上の興味と同感を強ゆる所に、天民氏獨歩の壇上あり。何人の上にも共通し、何人の心にも共鳴ある「人生一報告書」として、敢て江湖讀書子の愛讀を乞ふ。

■天民著 社會觀察 萬年筆■

忽再版發行 ▼正價金七拾錢 ▲送料金八錢▼

發行所 東京市日本橋鐵砲町六番地 振替東京壹五〇五六番 磯部甲陽堂

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

人物評論（五十二）

カイゼル論



△ナポレオン一世歟將た三世歟

福本日南

巴爾幹半島の伏魔殿は破れて、百八の妖星天に飛び、今や世界の大戰亂とはなつた。併ながら此亂源の其の又亂源は墺國皇太子を殺害した塞爾維人の兇行でも無ければ、之を彈壓せんと蹶起せられた墺國皇帝の憤激でも無い。偶事端を此に藉り、世界列强を驅りて總立ちに起たせ終に世界を大亂に陷らせた

大魔王は、即ち獨逸皇帝ウヰルヘルム二世である。

全體帝が現代のナポレオン一世とならんと腐心せられる事は、一朝一夕の希望では無い。御即位以來二十餘年間一日の如く、其胸間に鬱勃たる所である。而うして此大野心を當世に實現せられるには、陸に於ては、歐洲の列强を征服し、海に於ては、英國の海權を奪し、海陸に覇を稱せられねばならぬ。帝が出來父祖相傳の陸軍を更に擴大し、同時に帝國の海軍を建造して、英國の前に抗立するに至らしめられたのは、畢竟是が爲なるに外ならぬ。

從つて帝が權謀術數を弄し來られたことも、亦爽の思ふ所ではない。試に之を今十年以來に徴しよう。日露戰爭に當り、露國を煽動して、大難を我國に構へさせられたのは誰であつた。言ふまでも無く渠カイゼルである。蓋し當時渠の方寸には二箇の畏る可き陰謀を蓄せられた。其一は、渠の雄圖を歐大陸に逞せんとするには、第一に露國の兵力を殺弱して勢力を巴爾幹半島に扶植せられねばならぬ。それには極東に勃興した日本と戰はせるより善きは莫しだ。何となれば、其れをして一たび日本と難を構へさせれば、好し勝つても、負けても、力を此方面に分たねばならぬから、それだけ獨逸の權力は歐洲に加はり來るのである。是が其の當時好意を露國に示し、獨境に接備する露のワルソー軍團までも極東に置發させんとせられた第一である。次は露國にして勝てば、之に連なつて、日本を抑制し、力を支那に伸べんと欲し、其れにして負けたらば、創痍の癒えざる間に乘じ、巴爾幹に討つて出て、あは好くば波斯邊までも獨の勢力圏内に納れんと欲せられたのである。然るに露國は海陸に利を失うて、全然敗者の地位に落ちた。カイゼルは是に出つて一半の希望を遂せられたのであるが、其歡びを色にも見せず、事實不可有なる黃禍說などを捻り出して、露國の歡心を收めながら、早くも其困憊に乘じ、徐々諸方に猿臂を伸ばし始められた。

之を帝が巴爾幹政策のみより觀塊も、其意は實に顯然である。全體巴爾幹半島中で、東は塞爾維に接し、西北は墺國に境するボスニヤ及ヘルゼゴヴイナ二州の住民は、塞爾維と同じくスラヴ民族に屬するので、露國は之を塞爾維に併合せしめんとの希望を有して居たのである。然るにカイゼルは露國の敗餘爲すなきを見窺り、千九百八年即ち我明治四十一年、其同盟たる墺國をして暴斷にも之を其本國に併合させられた。それで當時露國の外務大臣イスボルスキーの如きは極力之を爭うてみたが、墺國の背後には獨逸の在るあり、露國の力は此際所詮獨墺に匹敵し得ないので、涙を飮んで、墺の暴斷に委せたのであつた。是が爲に露國は從來半島に有した重權（プレポンデランス）の一半を失墜したのである。

次は千九百十年即ち明治四十三年以來發生した巴爾幹戰亂の結果である。最初塞爾維は勃牙利と密約して、豫め各自の擴大す可き地域を定め、土耳其に對して兵を擧げた。それで塞爾維はアドリヤチツク海に瀕するアルバニヤ一帶に力を伸ばし、一旦此地方を制して、國域・國力を植扶しようとしたのである。是と申すも、此アルバニヤ人の大分は、塞爾維人と同じく、亦スラヴ民族に屬するからであつた。處が墺國は亦カイゼ

ルに聴き、此アルバニヤ人を煽動して、中途から獨立を唱へ出させたのである。それで露國は塞爾維を助け、初目的を貫徹させようとすると、墺國は國内に動員令まで下して、飽くまで敵對行爲を示したので、露國は泣々獨墺の意に委せ、終にアルバニヤ國の獨立を承認するに至つた。

次が便ち今回墺國の塞爾維彈壓である。それで以上看來れば、千九百八年墺國がボスニヤ及ヘルゼゴヴイナの二州併合以來、獨墺の眼中には露國なしともいふ可きである。露帝ニコラス二世が此大亂の初に當り、『隣强の逼迫に對し、我露國の隱忍するや此に七年半、最早國家の能く耐える所に非ず』と宣せられたることの偶然でないのが知られよう。

カイゼルは斯くの如く一方に墺國を援けて、之を自家の羽翼とせられる傍には、又其同盟の一なる伊國にも亦一臂を假して、其利權を阿弗利加の北岸に伸張させられた。即ち露佛同盟の善く爲すあるに足らざるを括つて、千九百十一年即ち我明治四十四年、伊國をして土耳其に對し戰を宣せしめ、埃及と亞爾塞の中間に介在する土領トリポリを占領させられた。

斯くの如く墺伊兩國に恩與を分つた渠カイゼルは、此間己の本國獨逸の爲に如何に直接の利權を收められた歟と顧みれば、千九百五年即ち明治三十八年、日露戰役の終を告げるか告げざるかの間から、佛國の勢力範圍に屬する摩洛哥に對し大干渉を開始し、大難題を佛國に吹掛けられた。是は言ふまでも無く、佛國唯一の恃みとする露國の雌伏して起つ能はざるを看取し、佛國を抑制して、此大廣土を獨逸の新勢力圏内に納れんとせられたのである。當時若し此折衝に他國を交へなかつたなら、摩洛哥は恐らく佛國の有ではなかつたであらう。が、地中海の咽喉に當る此要地を獨逸の手に放委するは、英國の能く忍ぶ所で無い。そこで佛國の外務大臣デルカッセーは英國に協商し、之を誘うて其局に投ぜしめた。所謂摩洛哥問題は是である。而うして事實同盟に幾い今日の英佛協商の成立したのも、實に此際である。それで此問題は紛糾に紛糾を重ね、有名なるアルゼジラス會議となり、結局カイゼルは佛國の勢力を此地に認める代償に、佛領公果の大地域を割かせて、之を獨逸に收められたのであつた。是が千九百十一年即ち明治四十四年中の出來に屬する。

それで獨逸の獲得した利益は尠少で無い。が、貪婪飽くことと無きカイゼルに在つては、中々是れくらゐな利權に滿足されぬ。蓋し渠の意は露國の未だ勢力を恢復せぬ間に、佛國を叩きつけ、其れをして再たび起つ能はざるまで屈伏せしめ、此方面に對する多年の希望を充たさんとせられるに在る。前の摩洛哥問題を捕捉して、横に車を押されたのも、畢竟は佛國をして破れかぶれの戰爭に出させようが爲であつた。

自分は最近に之が一眞因を發見した。事は少しく精細に亙れど、獨逸がカイゼルの名譽好きなる野心と一致し、如何に佛國に逞うせんと欲するかを概見するには、勢之に言及せねばならぬ。全體獨逸が今日の富强を贏ち得たる所以の重なる一因は、同國の製鐵事業である。試に之を列强のそれに比看せよだ。近く世界の産鐵額は一年約六千三百餘萬噸であるが、其中の二千四百萬噸は米國に屬し、壹千五百萬噸は獨逸に屬す

る。即ち世界の產鐵總額の三分の二弱までは米獨の手に在る。中に就いて、米國の二千四百萬噸は、彼が如き大面積を有する邦土であるから、面積に視てさまで不思議も無けれど、獨逸の產額が之が一半以上を占むるに至つては、實に驚かざるを得ぬ。彼國の富强を致せる所以のもの、是を以ても知る可きである。從つて獨逸國民六千萬人の中、二千萬人は直接若くは間接製鐵事業に衣食する。然るに過去の半世紀間に鐵鑛を採掘すること餘りに多量であつた爲に、そろ〳〵鐵床の稀薄を告げて來た。悲觀論者の言ふ所に聽けば、今後三十年許りにて、大概は採掘し盡されるといふ事である。是に於て同國人の憂慮は尋常では無い。一言以て之を蔽へば、是れ實に二千萬人の死活問題である。

是に於て乎獨逸は今より豫備鐵田を準備し置くの必要を感ずる。處が[illegible]南部は流石に南蠻鐵の產地なる西班牙國に相對するだけ、同じ地質と見え、其地方には極めて豐富な大鐵床を含有する。是が前に佛國の手から此地を横奪しようと企てられた主たる原因であつたらしい。然るに是は英國の干涉に由つて、其目的を達することを得なかつた。是に至つて、更に一新代地を求めねばならぬ。すると近頃世に隱れなき大鐵田となつたのが佛國のムールト及モーゼル州である。看て此に至ると、直ちに千八百七十年に獨逸が佛國からアルザス及ローレンの二州を割取した事情に想到せしめるものがある。何となれば此二州は昔時獨逸の領內であつたといふ歷史的關係なども割取の一因なるには相違なきも、二州中ローレンは殊に鐵の產地である。是が獨逸に割取の必要を一層深く感ぜしめた他の一因であつた事を疑はぬ。然るに其頃までは、一方には未だ餘りに鐵の原料に渴しなかつたのと、亦他方には未だ獨佛間にモーゼル地方の地質調査が屆いて居なかつたので、之を其儘に閑却したものと見える。處が近年に至り、此地方こそ實に洪大なる鐵鑛を藏する地底の大寶庫であるといふ事が分つて來た。其道の學者が報ずる所に據れば、ムールト及モーゼル州の首府ブリエーの近傍に在る鐵だけでも、現在獨逸で一年に使用するだけの分量を採掘しても、優に二百五十年間は大丈夫であると保證して居る。現在の處でも佛國製鐵の四分の三は此から材料を供給しつゝあるとの事である。カイゼルたる者及獨逸人たる者之を視ては、さうと知つて居たら此處まで取つて置けば好かつたにと悔恨せざるを得ないのである。惟ふに此地は直ちにローレン州の後ろに連接するだけ、現在の萊因沿線地方の鐵床を採掘し盡くした後、それに代る鐵田として、位地上、便宜上、經濟上これに優る處は無い。斯くの如きは餘り世人の多く知らざる所又言はざる所であれど、獨逸國民中の三分一即ち二千萬人の未來生存問題に觸れる大要件であるから、獨逸の國情は名譽好きなるカイゼルの野心と一致し、一層貪食の慾念を昂騰せしめたことを疑はぬ。

斯かる痛切なる實益問題をも伴ふが故に、カイゼルは更に大兵力の必要を感じ、昨年開會せられたる獨逸帝國議會に對し、大々的軍備擴張案を提出し其協贊を得て、之れが實行に着手せられたのである。之を傍觀しては、露佛兩國たるもの自衛上手を袖にして其の爲すが儘に委するを得ぬ處から、何れも之に對應するだけの軍備を新たにして來たのであ

る。就中、露國に於ては、由來常設の三十五箇軍團を四十三箇軍團まで擴張するの計畫を立て、厳然として獨逸の前に抗立しようと稱揚し來た。斯うなるとカイゼルは却つて自家の野心の反映に驚いた。古諺に所謂鬼を一車に載すとは、此事である。露國にして四十三箇軍團の設備を完成した曉には、獨逸の方で防勢の地位に立たねばならぬ。それこそ忌々敷大事である。是れは是が非でも今日大難を挑發し、三國同盟の力を以て二國同盟を痛撃し、此際一擧に宿昔の企望を必達せねばならぬと深感せられたのが、抑今回の大亂を激成させた大魔王の心算也と、自分は斷信する者である。

さりながら川立ちは川に果てるの習ひ、詐術を尙ぶ者の往々自ら誤るは古來來例に乏しからず、カイゼル亦其一人たるを免かれぬ。渠は今回の大難を發するに當り、豫め思惟せられたであらう。墺國に對しては、ボスニヤ及ヘルゼゴヴイナの二州を其版圖に併合させ、又アルバニヤを立てゝ、申さば墺の藩屛とさせた特恩があるから、無論墺匈國は渠の頤使に從ふものである。次に伊國にも亦嘗てトリポリ占領の際援を與へて置いたから、必らず我を德とす可く、況んや昨年三國同盟の協約を更に向ふ五箇年延長したから、乃公にして一たび足を擧げれば、墺伊倶に獨逸と同一の步調に出るものであるといふのが、其の初算の基本であつたらう。然るに其一國の伊太利は當初からさまでに獨逸に信服せぬのみか、經濟上の利害に絕えず墺匈國に反撥する。それで設ひ獨逸の使嗾に從つて事端を發したとはいへ、墺國が主となつて構成した難局などに捲込まれて堪まるものかといはぬばかり、冷々然として中立に出でた爲に、三國對二國戰の豫期は瓦然として破壞し、二國對二國の太刀擊となつた。是が渠カイゼルの大なる第一違算と認める。

次は則ち英國である。彼國は摩洛哥問題以來佛國と親善し、遂には延いて露佛と倶に三國協商の關係を現出したるも、英の國となりたる、去來戰爭となれば、容易に力を他人に假すものならず。加之現在其國の國政に當る者は、保守黨にあらずして、自由黨の內閣である。尙ほ其上に國內は愛爾蘭の自治問題の爲に紛擾を生じ、人心乖離の際であるから、一端露佛と開戰をなすの曉に至るも、調停の任ぐらゐには當るとも、當初から露佛の兩國に加擔し、獨逸の前に抗立し來るまでには至るまいとは、亦カイゼルの豫算する所であつたらう。處が事實は全然之に反し、彼海王は大陸均衡の破壞し去らるゝを坐視しては居らず、公然起つて露佛と相連なり、陣頭に進み出た。是に至つて戰前の心算とは反比例となり、獨・墺・伊三國對露・佛二國戰の代りに、獨・墺二國對露・佛・英三國戰の大變勢とはなつて來た。是が則ち渠カイゼルの第二違算と思はれる。

次に獨逸は極東の方面就中支那に對し尠からざる利害を有する以上、一たび英國と戰爭を開始すれば、其英國の同盟たる日本が如何なる行動に出づ可き歟は、渠カイゼルたる者の豫め計較せねばならぬ處である。之に關し、渠が米國をして日本を控制しめんことを計畫したりとせば、其擧だけは智ならざるに非ざるも、餘り優勢でも無き此方面の自國海軍を頻りに飛躍させ、日本の領海を摩して、やたらに英露の商船を追擊し、爲

に日本をして極東平和の保障上劍を拔いて起たざるを得ざるに至らしめたるは、渠が第三の違算では無い歟。

それから渠が極東政策上唯一の頼みとするのは、米國である。成程此國が支那に於て大なる利權の獲得に熱衷するは、掩ふ可からざる事實なるも、由來此國の平和を保ち富力を增進し來つた所以の大本は、歐洲政爭外に超然たるお蔭である。從つて彼は近頃一寸〳〵チョッカイは出せど、ドン底に於て是れだけは容易に忘れるものでは無いから、設ひ彼は此際日本の活動を喜ばざるまでも、一旦太平洋面に日本を敵とすれば、同時に大西洋面に英國を敵とせねばならぬといふ事は、分り切つた必至の勢たるを顧みぬ筈が無い。すれば此際彼果してカイゼル最後の期待に副するや否やは、大なる疑問である。恐らく此に出でぬであらう。すれば是れカイゼル第四の違算である。

故にナポレオン一世を以て自ら任ずる大陸王のカイゼルは世界政策上、先づ大ナポレオンの脚下にも寄りつかざる事を、事實に證見した氣味がある。

さらば戰略・戰術に關する渠カイゼルの技倆は如何。渠が平時陸海軍の大演習に當り、或は龍騎兵の前頭に馬を躍らせて、假想の敵陣に突入せられたり、或は御座艦ヨットの檣下に見はれて、假設の敵艦隊を追走らせたりされる、其態度なり顔色なりは、演劇的に一代の英雄豚の觀はあれど、其平生舉用せられる將帥を看れば、概ね寵人主義（ファボリチズム）の發作に外ならぬ。一例を擧げれば、由來獨逸軍中に在つて、學識・實驗に富贍なるゴルツやベゼレルやワルデルゼー等の諸將軍を擱きて、未だ俄に槪括とまでは言ひかぬれど、少壯の寵臣小モルトケを參謀總長に任ぜられたるが如き、大ナポレオンは勿論、大フリードリヒ、大ウキルヘルム等の嘗て爲すを肯ぜられざりし所。只是だけでも渠が鑑人の明は大概想見することが出來る。

併し是等は平生の事。今回渠の戰略は恰も大ナポレオンが慣用したるが如く敵軍の勢力の未だ和合せざるに先だち、最初に一軍を破つて、それを雌伏させ、而る後ち他の一軍を擊擢かんと志されたる可きは、露軍の大動員時間を利用して、其方面は墺軍を援けて、押への軍を置き、鋭鋒を移して、先づ佛國に嚮はれたので知れる。是は獨逸今日の軍略上、此に出でざるを得ざる可し。從つて此佛國方面に於ては、言ふまでも無く、利は速戰に在る。即ち能ふだけ短日月間に主戰を戰はせ、全勝を博されねばならぬ。渠が戰時の國際法規を無視し、白耳義の中立を干犯して、其國內に攻入られたのは、悖道も實に甚しけれど、巴里襲擊を目的とする渠としては、平陸坦々たる白耳義に道を取らんとせられるのは、戰略上から視れば、亦已むを得ぬものがある。從つて渠の無法は別問題として、此處までの戰略は其當を失はぬ、が、扨其作戰は如何である。大敵露西亞を背後に控へながら佛國に手套を投ぜられてから、既に半箇月を經過するに、大軍をリエージュの一寨下に頓し、之が攻擊を繼續せられるとは何事ぞ。是れ恰も我西南の役に叛軍が熊本城の攻圍に齷齪し、坐して官軍の勢力集中を專らにせしめたるに似たらずや。甚ぞ最初から

一支軍に此方面を委し、本軍を目的に向つて進められざるやといひたくなる。渠が居常自ら比する大ナポレオンに之を諮させたら、豎子與みし易きのみと放言するであらう。

それで今後渠は陸戰に於て、好し其武を墜されぬ迄も、自國の地位を失はれぬくらゐが、高々關の山なる可く、それにしても海戰に於ては本國に植民地に將た其海軍に、多大の損害を受けられるであらう。而うして渠が生來の大野心は此一擧に由つて一層世界に證明せられ、此野心を滿たさんが爲には、人道も公法も顧みる君主で無いといふ事も、亦同時に公證せられて來たから、列强は今より一段渠に對する警戒を増し、それだけ對抗同盟の結合力を加ふ可き事も、亦必然である。

若し又此役に負けられたと來たならば、渠が敵にした列强の要求の如何に嚴酷なる可き歟は、今より豫想するに難からぬ。由來の史家は大ナポレオンを評し、帝にして今少しく自ら謙抑し、あれほど列强を凌轢しなかつたなら、今日までに遺留した佛國の利益は洪大であつたらうが、彼の實此に出でなかつた爲に、一時其領土を數倍にした代りに、敗退後の佛國は事前のそれよりも實に削小せられるに了つたといつた。カイゼル日頃大ナポレオンを以て自ら比せられるが、此點だけは帝の蹟に似た結果を見られねば、責めてもの幸であらう。

之を綜べるに、世界政策に於ても、戰略・戰術に於ても、渠カイゼルはナポレオン一世の比ではおはさぬ。强ひて陛下の儔匹をボナパルト家に求めれば、天分不相應な野心を燃やされる點から、鼻元思按狡智に長ぜられる點、虛榮に憧憬れて、浮ける名譽に渴せられる點などが、一々ナポレオン三世に活寫しとも謂はう歟。併し三世が落莫たる一辯護士からあれまで遣著けたのは、倚ほ豪とす可きものがある。知らずカイゼルは生來の帝冠を頭上に戴いて、何ほどの事功を遺さんとせらるる歟。ナポレオン三世を回顧すれば、連想は續々として倚ほ此の外迸隨し來るものもあれど、不祥を豫めするは禮に非ずといへば、カイゼル論は一先づ此邊に止め、徐ろに帝が今後の活躍を拜見しよう。

日月は實に流電の如しだ。思へば何時の間にか三年を經過したが、去る大正元年一月初刊の中央公論を讀まれた人は今倚ほ記憶せられるであらう。自分は同誌上に於て「カイゼル」の公私生涯を概見し、最後に左の一言を留めて置いた。

『帝の御祖先フリードリヒ大王の起されたポッツダムの離宮の正門には、今に〝Sans souci〟の二大語が揭げられる。譯して是れは「莫愁城」の名によつて、東洋の端までも聞えてあるのである。此宮名は何によつて起つたかと顧みれば、フリードリッヒ大王が此處に離宮を置かれた際に、王宮の前面に風車を以て麥を精げて之を商賣にして居る老翁が居た。此爺極めて暢氣な爺である。當時宮中には大詩人のヴォルテールが大王の招聘に應じて滯留してゐたので、此詩人が右の風車翁を捉へて命名したのが初まりである。日本語で言つたら「暢氣爺」といふことである。處が其風車は普通の屋根よりも高く聳えるので、離宮から前面の眺望を遮るのである。そこで一日

大王は爺を召されて『貴樣の持つてゐるあの風車は如何にも目障りである。早々あれを取除けるやうに』と命じられた。處が此爺暢氣なだけに、又極めて無遠慮である。『それは陛下のお言葉とも存じませぬ。此爺にあの風車のあるのは、大王にプルイスのあるやうなものでは御座りませぬ歟。今、人があつて、大王にプルイスを立退かれるやうにと申したなら、大王は何となされまする。陛下のお定めになつた國法は、決して個人の財產を取上げられることを許しませぬ。左樣な無理を仰しやつても、此國法が許さないといふ事を御承知下され』と言放つた。流石に創業の君主である。之を聞いて大に感嘆せられ『爺は朕が國法を其處まで深く信賴する歟。風車を取除けよといつたのは、全く朕が誤りであつた。其方と朕とは是から隣家の交際をして、お互に長く此プルイス國に安んずるであらう』といはれた。そこで直ちに爺の渾名〝Sans souci〟を採つて、離宮の名とせられたのである。此離宮にはカイゼル陛下も月に幾度となく入らせられるが、扨カイゼルの今の御狀態では、身は設い〝Sans souci〟の宮城にゐられても、それが「莫愁城」にあらずして、事實は〝Souci〟即ち「煩悶城」である。〝Sans souci〟を〝Souci〟にせられて、陛下自ら憂ひられぬかも知れぬが、寧ろ見物の方が氣に掛る今少し安らかな道を行かれて、獨逸帝國を〝Sans souci〟にせられる方が、寧ろ得策であるまい歟。といふのが世界一般の閑評である。遠い處から斯樣な事を申しても、所詮お耳には達しまい」と言ひて置いたが、今や果して〝Grand souci〟即ち大煩悶の境涯に落ちられた。是と申すも身から出た錆、誰を怨みられよう方も無い。東洋の格言では斯くの如きを『己に出づるものは、己に反るもの也』と申し候。

因みに附加へる。今年の春初に、山口小太郎といふ人の飜譯に由つて、佛人アレンといふ男の著した「獨逸皇帝」と題する一書が刊行された。が、著者といひ、譯者といひ、近頃是れほど氣樂人揃の書を看た事は無い。其の言ふ所に聞けば、本書は帝御自身の演說・親翰・勅諭に據つて、帝の眞相を觀察したのであるから、是れほど正確なものは無いといふのである。ハ、斯かる見當で、眞相を發揮されるなら、本人の中立は何時でも神聖なる可く、世に批評家も歷史家も裁判官も辯護士も要つたものでは無い。論より證據に一例を擧げれば、今の世界に渠カイゼルほど多く平和を口にせられる方は無い。僅に一二人の宣教師を土匪が殺害したのを口實にして、膠州灣を支那から橫奪せんと志し、皇弟ハインリー親王に艦隊を授けて、キールを出發させられた時の只僅な十五分間演說中にさへ、十有餘回平和平和を繰返された。而うして今回世界の大亂挑發は如何である。それでも御本人は倘ほ平和の爲といはれるから、平和の保障者と信ぜねばならぬ歟。何程贔屓目に辯護せんとしても、最早辯護の辭もござるまい。

終りに自分はアリストートルの語を借用しよう。

『詩は歌うてて歌み、劇は圓圖を見る』

カイゼルの英雄歟非英雄歟は、活劇が追々に著く世界の觀客に合點せしめるものがあらう。(八月十五日草)

△カイザー

○○○生

流石に勝誇つた奈翁を擊破して普墺露積年の怨を報いた「ライプチッヒ」の大戰以來年を閱すること茲に百年懸軍長驅巴里城下に迫侵擊して茲に普國の帝權の樹立を見てよりも亦已に四十年を經過した、今日の獨逸は文治に武備に無比の發展を續行し先進諸國をして驚異の眼を瞠らしめつゝある有樣であるかの對佛戰役の祝捷紀念祭、昨秋柰府に於て新に建設された巨大なる凱旋塔下に非常な盛儀を以て擧行された父皇帝治政二十五年祝典は昨夏を以て伯林に催され滿都は歡呼の裔に變じた斯くして獨國は一方には向上の努力に日も惟れ足らざる間に他方には漸く泰平の好夢に醉ひ物質文明の弊竇醸成する樣になつて來たことは何人も之を否認し得ない所である此間に立つて此新進國を指導して愈々目的の彼岸に急進せんと試むるものは實に「カイザー」其人である「ビスマルク」公逝いて以來「カイザー」は益々萬機を親政せらるゝの趨勢となつた溫良の中に機略を藏して克く帝政を翼贊した「ビユーロー」公去つて後は所謂「ホーヘンフイノー」の哲學者「ベートマン、ホルヴエヒ」が千九百九年を以て帝國宰相の印綬を帶びたのであるが「カイザー」輔弼の臣として能く其の施政の缺陷を補遺し其の偏見に對して苦諫する氣慨ありや否やは疑はしい其れが爲「カイザー」獨裁の形勢は年を逐て昂り行く實狀である然し世なる哉「カイザー」も今や寶算已に五十五、半白の御齡に達せら 覇氣漸く銷磨して圓熟の境に入られた爲壯時の輕躁な態度を見受けない樣になつた從て今や人は呼んで「ウイルヘルム、デル、フリードリッヘ」即ち維廉平和帝と稱するに至つた然らば現在の「カイザー」は果して平和愛好の溫良な君主であらうか、世人の想像するが如き好戰的武辨の典型で無いであらうか。

由來「カイザー」は所謂將に聖ならんとして又多能な御資質を有せられる爲有らゆる方面に其趣が表現されてゐる「サルダナパール」の樣な「オペラ」の脚本を書下ろされる又樂譜も作られたことがある帝國議會議事堂の設計圖には皇帝直筆の朱線が入れられてある。每夏地中海上の「コルフー」で古器物の採掘をやられる、「キール」の波濤に御用快遊船を操縱される每早曉御乘馬は日課の樣になつてゐる又暇があれば始終「テニス」を試られる。御用土器製造所では御意匠になつた日用品を賣り出してゐる、獨逸諸軍艦の「スケッチ」を作られて現に「ベルリン」の外務省にも掲げられてゐる、芝居は一週に一二度は必らず缺かされたことがないのみならず深夜遠方へ御發途の際等にも御旅裝の儘發車間際まで觀劇されることもある、又水夫を集めて說教をされる、地主の前で農業專門の演說を試みられる、所謂往くとして可ならざるなき有樣で何に

も斯道の專門家をして賛嘆せしむる程に深き研究の結果であるに至つては實に他人の企及し及ばざるものがある之れが繁多な政務軍務の御本職の餘暇であると云ふに至ては實に驚嘆に値すると思ふ。

之等御嗜好の多き中でも尤も好まるゝは御旅行である一年中で帝京に滯在せらるゝは數週に過ぎない「オイゲン・リヒター」は皇帝の施政を評して旅先政治と名付けた、宰相始め各大臣等は常に其御旅行先に出張して主管政務を上奏すると云ふ有様である此の匆忙な御生活は御即位以來渝つたことがない、其の御活動の劇しきことと他國の元首には到底比類を見ない所である先づ之れを求めれは「ルーズベルト」位なものであろう。此「ルーズベルト」すら皇帝の活動的なるには一驚を喫したと云ふ話てある、嘗て米國の「エヴアンス」提督が「キール」の獨逸艦隊演習を參觀するや一日皇帝は其旗艦を訪問せられ水兵の操練から機關の組立に至る迄巨細に見學せられた爲御退艦は已に深夜の二時となつた總て同提督は疲れ切つて就寢した、すると幾許もなくして船窓外を疾過する船響を聞いた時正に四時である、立つて扉を排して其の方角を眺めると、豈計らんや白服の輕裝せる皇帝は悠然として快走船の舵器を握り波を下ろうとせらるゝ所であつた之れを見た提督は『人力以外の「エナージー」を有せる稀有の人格である』と評したと云ふ、此等の點は皇帝の負けず嫌ひの御氣質が然らしむる所で日常の御生活は其の忙しそうな裡に如何にも「パライナー」があつて愉快な享樂的な處が見える然し此敢爲の御氣性を以て大政を總攬せらるゝことが果して獨逸にとつて幸福を齎らす所以であるか、暫く之れを最近の史乘に徵して見やう。

西曆千九百九年即ち明治四十一年十月二十八日倫敦發刊の「デーリー、テレグラフ」は「カイザー」と一英人の會見談を發表した其要に曰く

(一)獨逸國の中下流には排英思想の根帶深く一朝にして拔き難い朕は之れに反抗して兩國の親善を計るに努むと雖も寧ろ少數なる最良獨逸人を代表するに過ぎないのである。

(二)南阿戰爭、酣なるや可成速かに戰局を終了せしめ「ボア」共和國を救濟し英國をして屈辱的に閉塞せしむるが爲露佛兩國は獨逸の援助協働を希求した、然るに獨逸は英國の如き優勝なる海軍國と交渉を開くが如き政策を避けんと欲し其提議を峻拒するに至つた。

(三)千八百九十九年十二月朕は祖母君たる英國の「ヴイクトリヤ」女皇陛下に「ボア討伐に關する自己の作戰計畫を獻策したがこは普國參謀本部の討究を經たもので其後「ロバーツ」卿は其儘之れを其征討に採用した。

(四)獨逸が海軍の擴張を企圖するのは日進の商業關係を保護する爲で之れが爲には今後東洋に於ける事態の推移をも考量する必要がある、從て日本の勃興支那の覺醒等が出現し兩國が世界の大勢に容喙し來る曉には英國は必ずや、我艦隊の有力なるを喜ぶてあろう。

と云ふのであつたが始めの獨英關係論は兩國中其接近に努力してゐた人々の辛勞を無視し皇帝獨り其功績を恣にする趣があつて一般不平を惹起し第二の露佛の提議に對する拒絕事情は皇帝が英國に恩を沽らんとす

る野望の發露だと目せられ千八百九十二年千九百四年、同七年の英佛露接近に對する離間中傷の小策だとして攻擊された、又第三の點は英國人の自負心を傷つけ獨國人の「ボア」人に對する同情心に逆抗し是亦頗る不評判を招いたのである、最後の東洋時局に關する意見も亦日支兩國は固より米國迄も獨逸の圖南の大志を聽み皇帝の誇大妄想的企畫を嗤笑した斯くの如くにして其豫期しなかつた惡影響が獨逸國內に及ぼした結果は如何であつたか時の宰相「ビューロー」公は輔弼の責任を盡さゞりし故を以て辭表を提出し擧國民の「カイザー」攻擊は實に未曾有の高潮を示した實に此失言は皇帝施政以來の最大失態で敗戰により被るべき慘害よりもより大なる惡影響を獨逸全邦に及ぼすものだとは一般批評する所であつた之れに對する獨逸帝國議會の質問演說は有名な自由黨領袖「バッサーマン」を急先鋒として數日に亙つたが「ビューロー」公は平生の能辯に似ず極めて莊重に事件の經過を述べた後「陛下は將來一私人として談話せらるゝ場合にても統一的政略の利益と帝國の威嚴に必要なる謹愼の態度を執らるゝにあらざれば吾人及吾が後任者は到底責任を負ふ能はず、本件に關し辭表を提出することに余にとりては容易の事なりしが聖意に基き留任に決したる瞬間は余にとりて曾て經驗したることなき苦痛を感じたり」と赤裸々に皇帝の言動に對する自己の不平を議會に訴へ皇帝を藉口せずんば將來何人も輔弼の任に當る能はざることを極言するに至つたのは實に稀有の出來事である其後「ビューロー」公は此顚末を陛下に伏奏したのであつたが皇帝も痛く御自身の失言を遺憾とせられ國民の非難は過大不當なれども憲法に遵據する責任に鑑み帝國政略の鞏固を計るは實に朕の義務なりと思考す」と述べられ今後の言動を愼まるべきことを誓言せらるゝに至つて漸く結末を結んだのである、其際皇帝の御双眼には淚痕を止め萬感交々至つた御様子は其御平生を思ひ合せて實に異常の感があつたとは當時新聞の報導する所であつた。

要するに此發表によつて皇帝の對外意見は遺憾なく表明されたのである。先づ佛露を制して大陸の霸權を掌握すること英國と親昵して東洋に駿足を延し黃禍の根柢を殺ぐこと等劇烈な例の「カイザー」一流の筆鋒を窺ふことが出來る然るに此一擊に遭ふた後の「カイザー」は宛然別人の觀があつた。演說には必らず草稿を携へて之を朗讀し決して放論を試みらるゝことが無くなつた或人は「シルレル」の「精氣何處へか去りて面影のみぞ殘れる」との詩句を引いて皇帝の近狀を評したが誠に恰當の形容である常に活氣橫溢していた「カイザー」は形影相憐むと云ふのも少し誇大だが兎に角全然意氣銷沈の樣子に見受けられた。爾來二年は頗る穩健な態度を採られたので欣び合つてゐたが越えて千九百十年即ち明治四十三年八月二十六日普國祖業の地たる「ケーニーグスベルグ」の祝宴に際し、群臣に對して試みられた乾盃辭は更に端なくも非常な物議を醸すに至つた其の內容は「デーリー、テレグラフ」事件が、外交關係であつたに反し全然內政に關係して居たが其の輿論に及ぼした影響は兩者殆ど伯仲の間に在る、其の演說の要旨は

「朕の祖父「ウイルヘルム」一世が國威漸く弛廢した秋に生れて遂に祖國を中興し王國たらしめ其本來の權利を以て普漏西國の王冠を戴いたのは偏に天祐の然らしむる所である從て決して議會とか國民會議とか或は人民の決議等に基いたものではない、大帝は王位を以て神授となし其確信の下に統治の權を行使したのである、又大帝の事蹟を陳ぶるに當つて圖らず想起するのは大帝の母「ルイゼ」后の功業である、皇后が祖國の危急存亡の秋に於て繊手國事に盡瘁した功績の偉大なのは何人も知る所である吾人は當時の國歩艱難の有樣を追想して近隣諸國の顯著なる武備の進歩に鑑み我國は殊更に軍備の充實を圖らなければならないことを感ずるのである、吾人の平和は吾人の武備の上に存在する從て武備の充實は普國の當さに努むべき所である、又婦女子は出でゝ、社會の戰鬪場裡に男子と角逐するが如きは決して其の本分ではない必らず「ルイゼ」后を龜鑑とし退いて内助の功を積み祖國の爲後繼者の教養に任し擧國一致して國運の伸張に資するの必要がある。朕は自ら天命を受けて此位に在るものとの信念を有して居る祖國の康寧の爲には時論に顧慮せず朕の信ずる所によりて邁往するのみである、之れが爲には固より諸卿の翼贊を要する次第であるから卿等克く其意を體し朕を輔けて其目的に副はんことを希望する此精神の永く東普漏西州に磅礴し朕の藩屏として輔翼の實を擧げんことを望んで止まざる次第である」云々

此演説が新聞に發表せらるゝや人民は先づ帝權が神授であると云ふ、皇帝獨斷の説を攻撃し其創め人民等の擁立に係ることを忘却して天賦の特權の如く思量せらるゝを非難すること甚しく又輿論を蔑視するの非立憲にして恐るべき惡果を齎すべきを痛論し或は婦女子の就業に反對し家庭裡より出づるを喜ばざるが如きは舊套に捉はれたる固陋の思想なりとて現に就業中の女子等が反抗の氣勢を示す等種々の影響を惹起した、其の結果政府の半官報は「此演説は皇帝が私人格に於てなされたもので獨皇帝としての意見を發表せられたのではない」と云ふ苦しい辯解を試みたが、其の後、皇帝が他所で夫れとなく親しく辯疏的の演説をされた爲漸く大事に至らずして止むことが出來た此の演説に徴すれば皇帝は外交に於て頗る侵略的傾向を代表し新しき試みを企てらるゝに對し内治に關しては最も頑固な舊套に據つて帝權神授を説かれ自家防衛の爲極論せらるゝの反對現象を見るのは甚だ奇異なことである。殊に婦女子の新傾向を抑壓する爲頻りに内助の急務を説かるゝ邊りは流石に倚歐洲の偉達國たる獨逸氣質を露はして面白い、兎に角此の狂激な演説に皇帝が曾祖母たる「ルイゼ」后の遭遇せられたる艱苦と其能く之れに打克つて祖國の危急を救はれたをとを想起せられ感激の餘り前後を忘れられた結果である之れに依て見るも皇帝は冷かなる計算に長ぜられたる爲政家にあらずして、感情の爲めには總てを犧牲に供せらる熱情的人格であることを知るに足るのである、此の演説以來皇帝は更に愼言の人となられた從て先づ大過なくして今日に及んだが前述の如く齡漸く老境に進まれた結果餘程穩かになられたことは皆人の認むる所である然るに四圍の事情が漸く緊

迫し露佛を腹背に控へて白英を側面に受け然も三國同盟中伊國は遂に中立以上の好意なく墺國又巴爾幹の備へに充分他を顧みる餘裕の少なき時に當り孤立して萬敵に當るの止むなき場合に立到つた今日克く獨力を以て此難關を切り抜けられるであろうか時艱にして英雄を憶ふ、此秋に當りて一比公なく一「モルトケ」が無い徒に皇帝の頤使に從ふ廟堂の諸卿は到底大事を托するに足らず遣外使臣又英佛のそれの如く有爲の資を缺いてゐる其等の人々より送致して來る報告に基いて樹立された廟算は果して正鵠なものであろうか。人は云ふ皇帝は自ら戰爭の質なるが下に侃々諤々の士を包擁する度量を缺いて居ると比公の寵を失つたのもそれである「ビユーロー」公の永く頭に立つたのも其反證である、又先きの外務大臣「キデルレン、ヴエヒター」が「ベートマン、ルウエツヒ」の推奨により其任に就かんとするや皇帝は彼が剛骨なるを知り宰相に注意して曰く「卿が恣楊に虱を殖やさんとするか」と不同意の意を仄かされしも「ベ」宰相は珍らしくも强硬に彼を推し遂に舉用を見たと傳へられたが其後千九百十三年一月同外相死去するや現任「ヤゴー」氏の温柔なるを見て之れを起用し「ベ」宰相又自己の外交的手腕を發揮するに支障なき無爲の外相を得たるを喜んでをると傳へられてゐる。斯くして皇帝の親裁は何處迄も親裁にて遂に今日に至つたのである然るに前述の如く「カイザー」は圓熟の境に進まるゝに從ひ其明敏な頭腦と該博の識見とは却て決斷を鈍くし所謂左顧右盼して、機宜を失するの弊を生じた觀がある昔日の果斷は是が非でも押し通す所謂武辨の體を得て居つたが今や躊躇逡巡取越苦勞をせらるゝやの趣がある從て泰平の君主としては實に好箇の典型で萬般の事情を顧慮せらるゝが上に廣汎にして然かも深淵な趣味を有せられ往くとして可ならざるなき好天子であるが一旦緩急あるや果して如何であるかは疑問である之れを輔翼するに鐵血宰相なく、只此元首の欲する處に任せて獨逸人六千萬の危急を其儘に放置するは果して危險では無かろうか今や白佛境の戰報獨に不利なるを報ずること頻りである固より三國協商側の通報のみを以て速斷するのは倘早きに失するも始め獨帝の豫期せる如く容易に巴里城下に肉迫することの不可能なるは明かである、兎に角此の旬日が注目に値する所である。皇帝、「アーヘン」親征の其眞僞も確かではないが國難を痛心せらるゝ皇帝の御近狀は其平常からの過敏なる御性質に鑑み實に目に見える樣である。

實に二十世紀の元首中最も異彩のあるのは「カイザーウイルヘルム」二世陛下であること丈けは何人も首肯する所であろう、倘陛下の逸事に至ては實に無數であるが御平生の一端は以上を以て覗ひ得ると信じて一先づ玆に筆を擱から。(八月十六日稿)

△何と申しても不世出の英主

田川大吉郎

○カイゼル陛下には、いろ〱、氣の毒な感を懷く次第である。

◎陛下は、何と申しても、不世出の英主であられる、歐洲随一の名君であられる、容貌を窺つて、もさうだし、文藝の嗜みも深く、繪畫も上手、演説も上手、學問もお好きで武事にも達者、宗敎の信仰にも篤く、先づ、文武兼備、稀有の人と申すべきである、

◎或軍人の話に、陛下は、軍人としても、傑出の方である、それだけの才幹、伎倆を十分に備へて居られる、普通の民籍から起つても、此度、師團長位ゐ迄は、經上られたであらう、而して師團長の中でも優秀な、異彩ある方であらうと申して居た、兎に角、左様な人である、

◎歐洲に、犬牙錯綜せる、各國家の中で、殊に、各皇室の中で、見渡した所、陛下が我れ及ばずと嘆ぜらるゝ相手は、誰であらう、僕は、失禮ながら、その眼中に人なき有樣を想望せざるを得ない。

◎獨逸は、普漏西から言へば、大きくなつた、ゑらくなつた、ゑらく、榮へある、日の出の光景となつた、然し乍ら、不世出の才氣、眼中に人を見ざる陛下の心から考へれば、到底此儘には閉居し難き、まだ〱、爲さねばならぬ、而して相應に領略し得べき功名の野が、廣いであらう。

◎此心、外に洩れて、また〱詩と爲り、畫と爲り、演説とも爲れば、世界は、忽ち驚異の目を以て迎へ、且冷嘲の情を以て迎へて、一世喧々、好戰の人、平和の賊、文明の敵とまで罵る而してその所謂非平和、沒情理の、陛下に限れる殊異の行動は、現に何處に在りや、想へば、カイゼル陛下の胸中の悶々も、察して上げねばならぬ。

◎そは兎に角に、今度の戰爭は、陛下が負けだ、罷り間違へば、その社稷を危ふすることにも爲る、僕は、之を以て陛下一生の最大失策だと觀る、窃に、陛下のため、獨逸のため、憂心に堪へない。

◎目下の處、戰報は獨逸に有利である、獨逸大使館の人は、現に、さう言つて、誇り勇んで居る、それでも、こんなに、世界の人氣を喪つては駄目だ、世界を總て敵方に廻して仕舞つては駄目だ、歐洲の內でも、現に、獨逸と進退を共にして居るのは、墺國だけである、伊太利でさへ、既に、三國同盟を脫して仕舞つた、これでは駄目だ、こう、人氣を喪つては駄目だ、目先の戰爭は如何にあらうとも、獨逸は、人氣の上で、既に敗れて居る、大勢の上で、敗れて居る、恢復の見込が無い。

◎ナポレオンは、古今の第一人である、戰爭は、大概勝つた、歐洲の國々は、いづれも、その馬蹄にかけられた、一國としては、いづれも皆勝たなんだ、佛國は、實にその頃の、最大強國であつた、然し乍ら、歐洲の人氣は、期せずして非ナポレオンと爲つた、而して結果は知るべし、ナポレオンの敗竄と爲り、佛國の縮小と爲つた、どうしても、大勢は致し方が無い、一人、一國の力を以て、防ぐべからす、阻むべからず、只、それ防ぐべからず、阻むべからず、それが勢ひである、それだから、大勢畏るべしといふのである、古今の第一人たるナポレオン既に然り、況や、今日のカイゼル陛下をや、大勢は、明かに獨逸は不利である。

◎付て、伯林の宮城を拜觀した、拜觀したのに珍らしい事は無い、希望者は誰でも拜觀し得らるゝのである。當日は、御座であつた、その門前

の小廣場を隔てゝ、敎會堂があつた、その敎會堂に參した、退散がけの會衆は、雪崩れを打つて、宮城見物へと出かけたのである、僕も、即ち其の一人と爲つたのである、而して、その多勢の見物人が時を定めて、案内者に引つ張り廻される、以て、その見物の方法を察すべし、見物の容易さを想ふべし、又見物の風を想ふべし、伯林に赴く人は、誰しも、之を、名所見物の一つと心得て、らくに、勝手に、拜觀するのである、

◎僕は、今、その拜觀せる内部の樣子、それに就ての感じを申すのでは無い、只、その宮城に就てのみ申す、太した宮城では無い、隨分、廣かつたけれど、太した構へでは無い、第一、その位地が町續きである、而して高く無い、隨つて、少しも嚴めしく無い、而して、立派で無い、問はずして、宮城かと氣づく、特別の構へも、作りも、裝ひも、何にも無い、平民の家だといはるれば、さうかとも首肯かれる、學校だといはるれば、さうかとも首肯かれる、兵舍だといはるれば、又さうかとも首肯かれる、つまり、尋常有り觸れた、煉瓦造りの家であつた、而して門としての門があるで無く、僕の入つた所は、恰も農商務省の入口のやう、建家の軒下に、仕切つた無雜作の入口であつた、而して中庭も、煉瓦類で敷き詰めて、守衛の兵士が練習をして居た、而してその入口の前は、近く軒下の壁際まで、群集の車馬が旁午して居た、而して僅の廣場を隔てゝ、前に申した敎會堂である、これが、別の種の建物だけ、宮城よりも、寧ろ、目に着く程であつた。

◎前年、青山御所落成の時であつて、一陸軍士官は、僕に語つて、こんな莊大な御所は歐洲には無い相な、歐洲には社會主義が勃興して來た、それで、皇室に於ても、相戒めて、成るべく、その宮室を卑くして居られる相なと申して居た、僕は、それを全信した譯でも無かつたが、矢張記憶して居つたと見え、右、拜觀の時、猛然として憶ひ起した、成程、こんな所から、彼等は、此く評判したのであつたらうかと思つた、歐人から見れば、如何なるやを知らず、東洋人から見れば、實際、その宮城は、高く、床しく、尊く、壯んなりとは謂へない。

◎近電に由れは、陛下が露臺に現れ、演説し玉ふたとある、たゞさへ、熱し切つた國民、戰爭好きの國民である、而して陛下の雄辯宏辭をもて、之を鼓舞激勵されたのだから、國民昂奮の狀思ふべし、彼等の愛國的意氣は、今、確に赤熱を呈して居るだらう、而して此露臺の一事は、伯林のみならず、聖彼得堡にもあつたとあり、倫敦にもあつたとある、歐洲の君王は、東洋に較べて概して頗る手輕である、能く人民と一所に爲つて動かれる。

◎僕は、此に於て、我が戰國時代の諸豪を想ふ、歐州の君王を、我戰國時代の諸豪の如に思ふ、例へば、彼は蒲生氏郷たり、彼は伊達政宗たり、彼は黑田長政、上杉謙信たりといふやうに、當時の諸豪が、家の子郎黨と、相交歡し、イザと爲れば、自ら陣頭に立つて、暗啞叱咤したその頃の情態が、恰も、この頃の歐洲の狀態である、形に於ても、思想に於ても然らしい所がある、昔は燕人張飛は、長板橋上に立つて、丈八の矛を揮つて、百萬の敵を吹き靡かせたといふが、露臺演説も、カイゼルとし

ては、又その位ゐの意氣であつたらう、何にせよ、その頃の、群雄應酬の狀が偲ばれる。

◎宮城の話から、不圖、乃木將軍を想ひ起した、因て、書き添へて置く明治三十年の春、將軍の母堂が、臺北で亡くなられた、その通夜の一と晩である、總督府の高官連、その他民間の人々、十六七名も居並んで通夜をした（僕は其の内に居なかつた）夜深けて、色々の話が起つた際、將軍は、その人々に向ひ、諸君は、世界の國民の中、どこの國民が、皇室に對し、一番忠愛の情が深いと思ふて居るかと問はれた、人々は、一議も無く、それは日本國民だ、日本國民の、忠君愛國の至情は、天性に出づ、彼れ、外國人などの、到底夢想し得る所で無いと答へた、殆んどそれが滿場一致の意見であつたが、中に、只一人のみは、默して語らず、別に思ふ所ありげな樣子をして居た、將軍は、それを聞いて、暫時、打ち案じて居られたが、軈て、口を開いて、諸君は、中心から、さう思はるゝか、自分の思ふ所は、必らずしも、然で無いと、滿場は先づ度膽を拔かれた。

◎將軍は、前年、伯林を訪はれたことがある、その時は、丁度、先帝陛下御危篤の折であつた、一日、將軍は、宮城寄りの公園を散歩せられた、そこに、多數寄合つて居る者の樣子が、いづれも、憂はしさうな、重く沈んだ面目をして居るので、將軍は、不思議に感ぜられた。

◎軈て、公園に面して、宮城の窓下に掲示が出た、その掲示は、陛下の御容體書きである、群集は、その掲示が出ると、孰れも、身を起し、早足で、其の方に近寄り、ぢつと、それを見終つて、御容體幾分でも輕いとなれば、喜び、重いとあれば、打沈んで還る、互に相戒めて、聲高にも談らない、足音をも立てない、それで幾千の群集が、集り散ずるその間に、針の音でも數へらる程の、靜かさであつた。

◎將軍は、之を看て思つた、成る程、これは偉ゐ、これは、感服の外は無い、日本國民の皇室に對する至情は、之に較べれば、未だ優劣を言ひ易からずと、將軍が、此話を爲し了られた時、先の、沈默して居た一人は、直に之に和し、自分も、常に、さう感じて居たと稱した、而して自餘の諸氏も、成程、さうですかな、さう、何つて見れば、日本ばかしが、ゑらいのでも無いやうですと語つた。

◎これは、僕が、其の翌日に聞いた話である、而して數日の後、之を將軍に質したら、將軍も、之を頷いて居られた（先年、明治陛下御不諱の時、將軍は之を如何に感ぜられたか、僕は、之を質したいと思ひ乍ら、遂に果さなかつた）僕は、伯林に遊んだ時、又自然に、此話をも憶ひ起したのである、獨逸の君臣の間には、矢張、人の言ひ囃す以上の、精神的連絡、情誼、氣味が存して居るやうである、陛下は、必らずしも、力を以て壓して居らるゝので無く、力と共に、又能く德を以て、撫けて居るのであらう。

◎その帝國議事堂に連つて、チャ公園がある、此邊一帶には、戰勝の氣が溢れて居る、その記念が滿ちて居るのである、その大路の兩側に、歷代の君王の大理石像がある、君王の立像を前に、當時に有名なりし、牧

師、學者、政治家、何人等の二三者を、その輔佐者として、役に配した、思い出多き大理石像がある、それが幾十となく相並んで居る、如何にも、意義ある企てゞ、立派な眺めだと思ふた、聞けば、これが、今の陛下の建設に成つたといふ、陛下御用意の存する所、以て窺ふべしてある、

◎そこを、低徊顧裡して、感慨に耽つた時、僕は、同行の一友人に申した、立派な企てではあるが、見玉へ、こゝの臺石、かしこの敷石の、繼ぎ目は、既にくるつて居る、こゝがあいて居る、こゝが凹んで居る、こゝに凸凹がある、出來てから何年に爲るかは知らないが、今日にして既に然り、故十年後には、如何に爲るであらうと、想像せらるゝかと、僕は、更に言つた、倫敦の各處を驅け廻つた時は、僕は全く此樣な批評を起し得なかつたと。

◎そこに、英獨の優劣がありはせぬか、倫敦は古くて、伯林は新しい、古い倫敦に百年相傳の堂々たる舊家があつて、新らしい伯林の家が、どこか、俄普請、間に合せ普請の、廉ッポい、永持のしさうもない趣のあるのは、獨逸人といへども、爭ひ得ぬ事實であらう、その家の如く、その人も、此くなりはせぬか、戰爭には强からう、一時は勝てもしやう然し乍ら、獨逸國民は別に戒むる所が無くてはならぬ、カイゼル陛下こそ、眞つ先かけて、之を勵み、努めらるべきである、然らざれば、折角の功名手柄も、水の泡だ。

◎且今度の、白耳義の敗戰の如きは、幸先よしとも謂へない、これが今日迄の（八月九日）一番大なきな戰ひであつて、一番大きな敗北である、その初め、國交斷絶、一擧にして、バルチック海に露と戰ひ、北海に英と爭ひ、池中海に佛と爭ひ、日本海に於ても鵜の目鷹の目、寥も油斷せず、而して露境に、佛境に、ルクセンブルグに、白耳義に、和蘭に、瑞西に、四方八面に、兵を動かして、猛攻急擊、英風颯爽たる態度は、流石に、日ごろ自慢の腕前、既に奇氣ありと思ふた、然も、孱弱たる白耳義に阻まれて、一時にもせよ、進擊自由ならず、反つて此大敗を招いたのは、何たる輕擧盲動ぞや、何となく、前路の危ふまる心地がする、これでは、陛下中宵の夢、一層氣がゝりである、

△東洋君主國の 獨乙皇帝

五來素川

今回の歐洲大戰亂の中心人物が、獨逸皇帝なることは云ふ迄もなし、今日彼の地位は殆んど百年前の歐洲大亂に於ける那翁のそれに髣髴たり、那翁の[illegible]的野心か歐洲各國を合同せしめたる如く、現獨逸皇帝の傲慢心は遂に英佛露白塞諸國を聯合せしめたり、此故に獨逸皇帝の人物思想との研究は、此戰亂か如何にして始まりしか、亦其如何に終結すべきを知るに甚だ必要なり。

世人の既に知る如く、今の皇帝は普魯西王にして、且獨逸皇帝なり、普佛戰爭の勝利の結果、普魯西の武力が遂に他の獨逸二十三聯邦を凌駕

して、普魯西王が其盟主とはなりしなり、然るに普魯西王室には古來一貫したる國粹國風と稱すべき一種の政治的傳說(トラヂシヨン)存在し、世々其君主は此精神に基きて敎育せられ、從て今の皇帝の如き、自ら此國粹の保存者たることを主張して已まざるなり、然るに普魯西の國風なるものは頗る東洋的臭味を有し、其美點に於ても、弱點に於ても、支那日本を思はしむるものあり、從て今の獨逸皇帝も亦其思想人物に於て甚しく東洋君主に類似したるものあるなり、今其一般を述べん。

第一、皇帝は自己の權力の神より來るを信じ、所謂る近世の自由主義的民主々義的見解を排除せり、彼は曾て演說して曰く、『王位は獨り神恩の賜物にして、決して國民代議院、國民會又は國民決議等の賜物にあらず換言すれば普魯西國王は自ら全く天意に依て選まれたる器具なる事を信じ、其精神に本づきて國君のなすべき當然の義務を遂行すべきなり』(千九百十年八月廿五日演說)と、此文意に依りて之を見れば、獨逸の立憲政體は全く空文にして、其權力は人民より來りしにあらずして、直接に神より來りしなりと云ふなり、此くの如きは一見歐洲に有り振れたる帝王神權說の如く見ゆれども、之を細查する時は、自ら之と選を同うせざるものあるを見る、そは普通の帝王神權說は、其權力の神より來るを說きて、其責任の神より來るを說かず、乃ち權利を先きにして義務を後にしたり、然るに獨逸帝の神權說は、先づ其義務を先きにして、其權利を後にしたり、彼は明白に此意義を說明して曰く、『ホーヘンツオルレルン家は常に神より置かれたる其帝王たるの地位の自覺より、其人民の幸福の爲めに盡す所の其責任を神及び良心のみに對して負ふなり』と、此くの如き君主の義務心は實に普魯西王室獨特の觀念にして、其由來は之をフレデリック大王の主張に求む可し、大王未だ其位に即かざるの前、有名なる『マキヤベリ』なる一書を著はし、宣言して曰く、『君主は國民の第一の奴僕なり』と、蓋し一言克く君主の義務心を穿てりと云ふ可し、此確信は永く普魯西王室に傳はり、遂に現皇帝の前述の演說ともなりしなり、此君權の天より來るの思想、殊に君主の義務の觀念は、是れ東洋的思想にあらずや、卽ち天の有德者に天下を與ふる書經の思想、殷紂を以て一夫となすの孟子の觀念、悉く君主愛民の義務唱導せるものに外ならず、必竟獨逸皇帝の君主權說は、乃ち東洋的なるを免れざるなり。

第二、此の如き君主の義務の觀念の結果として、君主を以て民の父母と爲すの思想も亦獨逸皇帝の唱導する所なり、彼は實は君主は民の慈き父にして、慈愛に滿てると共に、亦嚴格、正義、公平にして日夜國民の幸福の爲めに盡力せざる可らず、君主は亦父と同じく權力を有し、時として人民の意思に反しても、彼等の利益の爲めに之を用ゐることあり、となせり此の如き君權は無限なり、されど君主は唯民の利益の爲めの外は之を用ゐることを許されずと云へり、

此くの如き君主の義務の觀念が、仁政を以て君主の目的とする結論に達するは當然なり、彼は即位の初め其人民に對して詔書を下して曰く、『朕我が祖宗の傳ふる所の位に登り、今や王中の王なる神を目前に仰ぎつゝ政務を執らんとす、朕は祖宗の例に本づき神に約するに、民に對して

仁にして義に、主に對して信にして虔に、平和を維持し、國家の繁榮を計り、困窮を助け、法令の實行を監視するを以てしたり』と、而して此くの如き仁政の觀念は決して一朝にして生ぜるにあらず、祖先フンデリツキ、ウエリヤム大公(十七世紀)以來の實行と、フレデリツキ大王(十八世紀)の哲理的解釋とに基づき此域に達したるなり、大王は曾て論じて曰く、君主とは其始めに於て、人民が其幸福安寧の爲めに、人間中の尤も賢明、公平無私、仁慈勇敢なるものを選みて此難域を托したるなりと、此くの如きは明に孟子が君主の權力を以て、有德者を選んで『天之に與へ、人之に與ふ』となすの觀念と同一なり。(萬章篇上)

普魯西に於て古より農民解放、勞働者保護等の社會政策が、國務の重要事たるに到りし所以の者は、偏に此仁政の觀念に本づくなり、然かも其之が東洋的なりと云ふものは、此仁政が專制的權力の下に行はるゝものにして人民に自主自由を與へて之を幸福にせんとの西洋的仁政と同じからず、殊に尤も面白きは、其所謂る社會政策の如き物質的仁政の目的が人民の生活を容易にして、而して後に之をして道德的進歩を計らしめんとする、精神的仁政にあるの一事是なり、是れ孟子の恒產なきものは恒心なしの主張にあらずして何ぞや、要するに普魯西の仁政思想は益東洋的臭味を混ずるを知る。

第三、其敎育思想に於ても亦皇帝は東洋的なるを示せり、彼れは其宗敎的信念より出發して、宗敎を敎ゆるを以て國家の重要なる事務となせり、是れ政敎一致の觀念にして、決して近世的西洋思想にあらず、然かも彼れの宗敎と云ふは、其敎義を云ふにあらずして、其倫理的、道德的方面を指すものなるが故に、君主は實に國民を敎化するの職務ありとなすなり、此意味に於て皇帝は獨逸國内に宗敎を維持するの義務ありとなす、否啻に國內に宗敎を敎ゆべきのみならず、亦實に地球を敎化し、人類全體を救ふことを以て自家の使命と信ぜり、是れ彼れの汎日耳曼主義(パンゼルマニズム)、帝國主義の理想的方面なり、此に於てか吾人は全く儒敎の道德的世界(ユニヴアーサル)帝國(エンパイア)の觀念を想起せざるを得ず、書經に所謂る『道洽く政治り澤生民を潤す、四夷枉を左にするも皆賴らざることなし』(畢命編)は亦實に獨逸皇帝の理想たるに似たり。

而して彼の所謂る道德敎育なるものも、重に國民の義務心を養ふことを主とし、殊に力を極めて服從心を敎ゆるなり、此目的の爲めに彼は宗敎をも利用せんとしつゝあるなり、是既に甚だ東洋的なり、況んや、其年長者を尊敬することを敎ゆるに至ては、殆んと是れ孟子の『長幼序有り』の敎を想起せしむるをや、亦彼は婦女敎育に付き演說して曰く『獨逸婦人のなすべき重なる義務は彼の集會結社の事にあらず、彼の男子と同等なる權利の取得に從事するにもあらず、卽ち靜肅なる家庭內の事務なり、卽ち尤も子女の敎育に從事し特に之に從順と年長者を尊敬すべきことを敎ゆ可し云々』と、是れ明に東洋流の敎育思想にあらずや、要するに彼れは徹頭徹尾專制主義の敎育法に從て其國民を敎へんとす、彼は到底東洋主義の人物なるを免れず。

第四、彼れの所謂る軍國主義も亦甚だ東洋的なりと云ふことを得可し、

彼れの帝國主義は一面に於て經濟的の膨脹を意味し、從て平和的の性質を有するは爭ふ可らず、然れども彼は此目的の爲めに武力を用ゐんとす、是れ近世文明の一般的傾向と相容るゝこと能はざる所以なり、抑ゝ普魯西の軍國主義は其建國以來の國是なり、其領土擴張は全く軍隊の力なり、フレデリック、ウエリヤム大公然り、フレデリック大王然り、ウエリヤム大帝然り、此故に現獨逸皇帝は亦軍備の擴張に力を用ゐ、殊に士氣の振肅に心を用ゐること大なり、其海軍に於て將に英國に及ばんとし、其陸軍に於て露に次ぐものあるは萬人の知る所なり、每年春秋二期に催さるゝ觀兵式が其十萬の兵數に於て、其華麗なる軍服に於て、甚だ人目を引くものあるは、如何に皇帝が軍隊を重ずるやを示すものなり、亦軍隊の規律を重じ、其弊の極る所彼の有名なるケープニック大尉の如き事件を生ずるに到れり、ケープニック大尉事件とは、伯林の一靴工大尉の古制服を購ひ、之を着けて伯林近郊の小都ケープニックの市役所に到る、途上一群の兵卒實彈演習より歸るに逢ひ、是をして自己の護衛の任に當らしむ、即ちケープニク市役所に赴き勅命と稱し其金庫内の公金を押收し、市長を伴ふて伯林軍團司令部に行かんとし、途上自己逐電し去りたる珍事を指すものなり、此一事は當時世界の笑話となり、普魯西軍隊の規律の餘りに嚴格に過ぎたるを嘲れり、由來普魯西士官は其軍服着用中暴力を以て無禮を加へたるものに對しては、直に之を殺傷するの權利あるのみならず、亦實に其義務を有せり、若し此報復行爲をなさゞれば彼れは國王の軍服を汚したるものとして直に軍職を免ぜらるゝなり、亦平服の場合に於ても、名譽を害する發言に逢ふ時は直に訴訟を提起せざる可らず、亦なぐり合ひをなす時は、必ず始め手出しをなさゞれば不可なり、亦血闘を申込まるゝも其申込人が軍人又は學生にあらざれば、之に應ずることを許されず、亦士官たるには貴族又は相當の身分あるものに限り、下級の人民には其權利を與へず、此くの如き種々の軍人に關する特權と義務とは悉く是れ我が維新前の武士のそれに類して、徹頭徹尾東洋的臭味を備へるなり、此故に獨逸軍が歐洲の他の軍隊に比して必ず武勇なる可きは決して爭ふ可らざるなり。

此くの如くにして、獨逸皇帝は甚しく東洋的臭味を有せる人なり、若し彼をして我が日本に生れしと假定せば、蓋し理想的君主ならん、然かも彼れが如き專制的思想が克く我が、國民の 忍ぶ所となるや 否やを知らず、是を以て之を見れば、彼れは東洋人以上の東洋人なり、彼れの侵略主義も亦此東洋的趣味の結果ならずんばあらず、此故に彼は今日到底西洋文明の諸國と併立すること能はず、必ずや其間に一大衝突を免れざるなり、此故に今回の戰爭は、一面より見れば東洋と西洋との爭の觀なきにあらず、若し獨逸皇帝にして勝てば、軍國主義、專制主義は勝利を占めて平和主義、自由主義は五十年の退步をなさん、若し彼にして敗るれば、西洋の文明は始めて平和の曙光を仰ぐを得んなり、吾人は此意味に於て尤も興味を以て現戰爭を見つゝあるなり。(完)

△獨逸皇帝は英傑也

仲小路　廉

獨逸皇帝ほど世の中に毀譽褒貶の甚しい人が無いと思はれる。一擧一動常に世界の耳目を聳動せしめ、一言一行必らず世評の中心となつた。盛んに褒めるものがあるかと思へば、又盛んに貶なすものがある。其褒める方の側から云へば、實に近來の英雄的皇帝であつて、不世出の大才を抱いて居る人である。ゼルマン民族今日の興隆を來たしたのは畢竟此皇帝の力であると嘖々として之を賞揚する。處が又他の一面から非難するものは、實にカイゼル程分らない人はない。一種のヒステリー的性格の人で、神經は極めて過敏、徒らに人氣をのみ氣に掛け、又必要もなきに大言壯語して世の喝采を博する事にのみ腐心する。而して甚しき獨斷的の人で、今日の世の中に陳腐極れる帝王神權說などを唱へて居る。いはゞ一種の迷信者であつて、恰かも自分は天の使命を奉行する如く吹聽し、其驕慢の極は遂に今日自己の虛榮の爲に天下の大亂を惹き起し兼ねない人である――と云ふ風に毀譽紛々として止る所を知らざるの有樣である。

然るに今日端なくも巴爾幹の問題よりして世界の大騷亂となり、其大騷亂の原動力者の最も有力なるものは實に此カイゼル其人に外ならないと云ふ事になつて見れば、世界の耳目は益々此人に集り、毀譽褒貶の度合も一層甚しきを加へ、之に同情する人よりも嫉視する人多く、カイゼル罵倒論、カイゼル攻擊論が總て痛快なりとして歡迎せられ、カイゼルは殆んど世界無援の地に居るの有樣であるからして、今日此人を冷靜に批評すると云ふ事は餘程六つかしい事であるが、然し今日の時局とカイゼルとの關係は暫らく措き、單純にカイゼル其人はどう云ふ性格の人であるか、どう云ふ生立ちと、どう云ふ經歷を持つて、どう云ふ志望を抱いて居る人であるかを考へて見るのは、人物研究の上に極めて興味もあり、又極めて有益な事であると信ずる。

暫く善惡の問題を超越して、只世界の狀勢を轉換させる大動力となると云ふ點より見れば、今の世界に於て獨逸皇帝の右に出づる者が無いと云ふ事は爭ひ難き事實である。又ゼルマン今日の興隆は、カイゼルの功績極めて多きに居る事も何人と雖も認めざるを得ぬ所である。而してかゝる有爲にして積極的なる性格を有するに至つた原因は、其來る所遠いと思ふ。今より百年前に第一世那翁が歐洲の山河を蹂躙し、プロイセンの如きも甚しき苦境に陷つた際に、ゼルマンの北境微々たる一地方より憤然起つてプロイセン勃興の業を成し遂げた人はフリードリッヒ大王である。即ち今のカイゼルの曾祖父である。又其フリードリッヒ大王の素志を繼いで遂にゼルマン聯邦を形造り、以て今日の獨逸帝國を出現せしめた所の人は、カイゼルの祖父に當るウヰルヘルム一世である。而して此ウヰルヘルム一世が甚しく寵愛して居つた孫は即ちカイゼルであつてカイゼル自身も亦ひどく慕らて居つたのは祖父のウヰルヘルム一世で

ある。ウキルヘルム一世も我が志を大成せしむるものは蓋し此孫ならんと喝破し、カイゼルも亦祖父の志を繼承してゼルマンをして益々興隆せしむるの使命を負へるものは我を措いて又誰ぞやと意氣込んで居つた。それで幼少の中より祖父と最愛の孫との間には一種の傳統的精神が相貫流して居つた。イヤ、もう一歩遡れば獨逸の此傳統的精神の根源は實に曾祖父のフリードリッヒ大王から流れ出して、而してウキルヘルム一世、今のカイゼルと繋がつて居るのである。フリードリッヒ大王の皇后即ちカイゼルの曾祖母に當らるゝ皇后ルイゼは實に婦徳の鑑であつた、其辛苦艱難實に一種の悲劇である。然し何處の國でもよくある事だが、悲劇の中より國運興隆の種が植え附けられ、嚴冬白雪の下より新春若草の萠え初むるが如き光景を呈するのは、又人をして運命の奇且つ妙なるに驚かしむるものがある。此皇后ルイゼがあらゆる辛酸と戰つて育て上げたものが即ちウキルヘルム一世で、ウキルヘルム一世の幼時の狀態は實に古今東西を通して稀に觀るの一大悲劇である。而して此間に養成せられたる精神血脉は、ウキルヘルム一世よりして直ちにウキルヘルム二世たるカイゼルに及んで來た。

斯くの如く傳統的精神、血脉の中に生れ來つて而かも獨逸帝國を創造したるウキルヘルム一世が心を籠めて教育したのは即ちカイゼルである。實に帝の教育は、極く幼少の時よりして文に武に、あらゆる點に於て、殆んど皇帝若くは皇族としての取扱でなくして單純の一市民若くは僅かに貴族の一人位として取扱はれたに過ぎない。萬事が極めて質朴簡易で而かも剛健な教育を以て、各課程を踏み、遂に文事としてはカッスルの大學を卒業し、更に武人としての修養としては、最下級の勤務より小隊長中隊長と段々各階級の何れの點をも親しくそれに當つて、遂に大元帥の地位にまで立たるゝことになつたのである。

カイゼルの位に即かるゝまでは殆んどウキルヘルム一世の指導の下に立たれ、ウキルヘルム一世は又自分の功勞の臣、文勳武功あるものをして心を盡してカイゼルの教養に當らしめた。而して此カイゼルは又天資極めて萬能である。此萬能と云ふことが一面に於て却て世の非難を招く原因ともなるのであるが、さりながら武事は勿論の事、文事の萬般、——治國經世に必要なる學問はいふまでもなく、更に進んで文學藝術にまでも達せられぬ事はない。兎に角何事にあれ、國家に必要なる事業には、カイゼルは總て身を以て當らるゝと云ふのが此皇帝の特徴であつて、又之は賞讃して差支ない事と思ふ。殖産興業に關する事、軍事外交に關すること、教育學問に關すること、文學美術に關すること、總て帝が身を以てあたられ、獨逸國民上下相協力して、國運の發展を計ると云ふ事になるのは全くカイゼルの力といつてもよいと考へる。而して帝の爲す所を見るに、決して空理空論にあらず、突飛氣紛れにあらず、悉く學理に基き、學理を應用せらるゝことは全く感嘆に値する。さればこそ天然としては極めて瘠土たる獨逸、又交通不便なる獨逸を化して、陸に海に四通八達、又極めて豐沃なる國土とならしめたのは、カイゼルが學問科學を活用して治國經世の要具たらしめたる功績に歸せざるを得ないのであ

る。今より四十年前には一の寒村僻邑に過ぎざりし伯林が、今や堂々たる世界の大都府となつたのを見ても實に獨逸の積極的施設の如何に目覺ましきものなるかの一證左となすに足るのである。

カイゼルが最も心を籠めて其目的を遂行せんとしたものは、陸海軍であることはいふまでもないが、殊に驚くべきは帝が獨創の見を以て商船の建造を奬勵せられ、世界の航路に向つて獨逸の商權を擴張し、以てハンブルヒ、ブレーメン等を初めとし、世界的航路の第一位にならんと努力せられたる事である。夫れ故に獨逸の商權は年を逐うて盛んになり、而して其後ろには强大なる陸海軍の護衞あり、國內に於ては殖産工業、文學美術悉く興隆して萬事に於て世界一たらんとの雄心勃然として湧起し、遂にゼルマンの一森林をして世界文明の源泉たらしめんとせられたる事は爭ひ難き事實である。いろ〳〵の非難は兎も角も、國を此れ丈けの狀勢まで高められたといふの一事、已に之れ尋常一樣の人の爲し得ざる所である。而して國內及び國外に於けるあらゆる非難を受けつゝ百折不撓、一に祖國を興隆せしめてゼルマン國民は優良なる民族なることを確信せしめ、國民を率ゐて世界の大舞臺に雄飛せんとした事は其善惡是非の論は暫らく措き、人類として共有するエナージーを極度まで發展したる好模範として、研究し且つ反省するの價値があるものと信ずる。世の中にはカイゼルを以て只一口に平和の攪亂者の如く云ふものがあるが、若し、人が蠢蠕をして居る時に起きて働くものあり、而して蠢蠕をして居るものが自分等の蠢蠕の邪魔であると云うて働くものを罵るが如き氣分が、少しでも帝を罵るものゝ間にありとするならば之は必ずしも賛成出來ぬ話である。虎は假令忌むべきものであるとしても、箇樣なものが已に世にあるからには、矢張り之を研究して、之に喰はるゝ羊や鳩の如き運命を脫しなくてはならぬ。油斷も隙もあつたものでない。

繰り返して云ふ、獨逸皇帝の行動の是非善惡は暫らく之を措け。兎にも角も、彼が如き勢力の旺盛な、勤勉努力殆んど一刻一秒も懶惰怠慢に費さない其精神は、世界の人類に對して一大刺戟を與へ、人間は其天賦の才能を如何程まで發揚し得べきものであるかを感ぜしめるに足ると思ふ。

又カイゼルには一種の確信があることは事實と思ふ。即ち彼は力の信者である。力によらずんば正邪の判斷もつかず、又眞の世界の大平和を保障せんとすれば、矢張り大平和を維持するの大威力がなければならぬと云ふことを深く信じて居るらしい。又國民は統一されて進まなければならぬ。統一して進むについては、國民自ら自信力を持たなければならぬと信じて居る。又實際カイゼル程自ら信ずるとの厚いものがないのである。蓋し彼の信念によれば、天地間の萬物は總て生々發育すべきものである。飽くまでも積極的に發育するのが天地の努である。而して天地の此の生々發育の氣を助長し、補翼するのが——即ち所謂天地の化に參するのが、大偉人たり、大宗敎家たり、大政治家たるものゝ大責任であると考へて居るのである。

世人は多く人物を論ずるに單に成敗の跡のみを以てするは、我輩は之

は間違であると思ふ。如何なる英雄も敗るゝ事あり、又如何なる大宗教家も現在に於ては非常なる不遇に沈淪することがある。成功必ずしも憧憬すべきものにあらず、失敗必ずしも悲嘆すべきものでない。假令其身は死しても其精神、氣魄遠く後人を奮起せしむるに足る事がある。蓋し英雄崇拜の念は深く人心の根抵に横はる所の精神であつて、之は何時如何なる時代でも其跡を絶つことが無いものと考へる。夫れ故に今日の獨逸國民もいろ〳〵の陰口を云ふものもあるけれども、實はカイゼルの如き英主より、一定の方針を與へられ、それに從つて國民一致して、ゼルマン民族の進路を開拓しつゝあることを誇りとして居るのであつて、其の證據には、上に一カイゼルあるが爲めに下殆んど悉く小カイゼルにならんとしつゝあることを以ても分る。此點は米國のルーズベルトも稍々似た趣があるのであつて、ルーズベルトが盛んに米國民を指導しつゝあつた時代には、米國民殆んど悉く小ルーズベルトたるの觀があつたのである。小カイゼル、小ルーズベルトの多いのがよいかわるいかは別問題として、兎に角一人の力よく萬民を化するの力ある點は認識せざるを得ぬのである。我々は如何に平和を愛し柔順を愛するも、近所隣りのものが皆羊や鳩の如きものばかりではない。虎もあり、狼もあるんだからして我々も亦常に此事をよく考へて置かねばならぬのである。實は大觀すれば、世の中には羊もあり鳩もあり、虎もあり狼もあるので、變化あり活動あり、從つて進歩あつて、生々發展して行くのであつて、之れ即ち天の妙配劑であると感嘆せざるを得ないのである。

今日は正に世界の大動亂となり、而かも其原動力にはカイゼル自身の力が大いに與つて居るのであるが、今日まで彼は幾度か劍把を按じたが、而かも未だ曾て鞘を拂はなかつた。從來の遣り方には隨分ひどい事もあつた。何時も刀を拔かずして威力を以て敵を屈服せしむるのを最上の策と考へ、幾度か之を試みて利益を占めて來たのである。然し何時も〳〵其手では行かず今度は遂にイヤでも應でも、乘りかゝつた船には乘らなければならぬ事になつた。之が果して素志であるか、意外な事であるか逆算であるか、今我々には斷言し兼ねる。世の中には獨逸も三代目に賣家と書く流義であると云ふものもある。然し又一方より見れば三代目の將軍が果して如何なる事を仕出來かされるか、之も亦分らない。國運一擲、兎にも角にもウオートルローの百年目である。のるかそるか。獨逸國の一大運試しであつて、又世界全體の一大賭博である。さりながら其敵對國の佛蘭西でさへも、セント、ヘレナに英雄の末路を弔ひ、セ ンヌ河畔一帶、老幼男女の別なく皆那翁の遺業に對して追懐と感激の涙を流すのを見れば、英雄の事業は其成敗の如何に拘らず、後人の景慕を値することが分る。カイゼルの行末が果して、如何になるべきか固より豫言は出來ないが、さりながら、英雄崇拜の念は常に人心の奧底に潜み又英雄の出現も時代として絶ゆることが無いものと考へる。西に出でざれば東に出で、南に出でざれば北に出で、而して一代の人心之に率ゐられ、後世の人之を景仰する。若し果して然りとすれば、英傑は必らず之を研究するの要あり、又英傑の資質あるものは、敵と雖も之を褒めても共攻

なからうと思ふ。而してそれと同時に我も亦緊褌一番、人に後れを取らぬやうに奬勵努力、其目的に向て精進邁往すべきである。而して各々天賦の能力を發揮し一刻一秒も怠慢せぬ點のみについて云へば、カイゼルは實に其好模範であることを深く信ずる次第である。

△謁見を賜つた時の記憶

理學博士 田中正平

獨逸皇帝が私に謁見を賜つたのは、明治二十三年の事であるから、もう今から二十四五年前の事になる。獨逸皇帝のお生れになつたのは確か一八五八年と記憶するから、それは恰度三十二三歳の御時と心得る。何でも御即位後二年ばかりの事で、當時世界を驚かされた事は、彼の有名な鐵血宰相ビスマルクの官を罷めさせた事である。之については全世界舉つて意外とし、獨逸の輿論は皆自國の前途を危んだのである。一體獨逸皇帝は皇太子の時までは一向世界に頭角をあはらされなかつた。即ち其御性行が殆んど世の中に知られてゐなかつたのである。一般に温和な方——中には誠に無能な人であるとの評もあつた位である。處が御即位間も無く、此ビスマルク解職事件で世界の耳目を聳動された。此事を決行された直接の動機は、何でも社會政策についてビ公と意見が衝突された結果であつたと記憶す。獨逸皇帝は三十になるやならずで、非常なる理想家で、何でも、自分の思ふ事を實行しようと云ふ念が心の中に滿つて居つたらしい。それで御即位になると忽ちに社會問題を解決しよう、之までは各階級の間に十分に意志の疏通が出來てないから、之を一つ自分の力によつて疏通の途を開かう。それについて農工商初め勞働者の代表者をも出して會議をする——と云ふやうな考で、之がビ公の意見と衝突し遂にビ公を罷免することになつたらしい。尤も其外にいろ／＼の錯雜した原因もあり、宮中内にも外にもいろ／＼黨派的關係などもあつて、ビ公の激き勢力に打擊を加へなければ新らしき帝の志望を實行し難いと云ふやうな理由もあつたかも知れないが、直接の動機となつたものは社會問題に對する意見の相違であつたのである。若い時は誰しも一種の理想を抱くものであつて、世の中から理想の實現を困難ならしむるいろいろの壓迫を感ぜぬ中は皆理想家たる如き趣があるものであるが、殊に獨逸皇帝が皇帝の尊貴を以て、且つ獨逸大國民を率ゐて、新たに自己の抱負を實行せられんとするのであつたからして、御即位後早く理想に馳せらるゝと云ふ事も自然の勢であらうと思ふ。

獨逸はそれ迄に大いなる戰爭を二回も續けて居るので、軍國としては非常な名聲を世界に轟かして居つたのであるが、然しながら世界の一等國たるものは單に武力ばかりではいけぬ。又文明も物質的方面ばかりではいけぬ。必らず精神的方面をも大いに發達せしめなくゝはならぬと云ふ御心であつたものと見えて、精神的の事業に對しては非常に廣く注目されたものである。

私は丁度其頃獨逸に居つて、該國物理學の泰斗ヘルムホルツ氏に就いて修業をして居つた。此ヘルムホルツ氏は無論物理學の全般に亘つて大發見をなし、非常に學界に貢獻した人であるが、殊に音響學の大家である。私は音響の方に趣味を有つたものであるからして先生について其方面の訓薫を受け、新らしい樂器を一つ作つた。其樂器を作るについては勿論師匠のヘルムホルツ氏も贊成して吳れたが、樂器となれば實際之を演奏する音樂家の贊成をも得なくてはならぬので、其方面にも之を話して見ると、フオン・ビユーローとかヨワヒムとか云ふ斯界の大家も皆非常に賞讃して吳れた。さう云ふやうな事から話が傳つて私の樂器の事が、時の文部大臣フオン・ゴツスレルの耳に入つた。處が此ゴツスレルは非常に見聞の廣い人で、殊に學術技藝等の蘊奥を極めんとする人であるので、それは面白いといつて皇帝に話されたものらしい。皇帝もそれは一つ見たいものだと云ふ事を云ひ出されて、私の處へ其旨を御下命になつたのである。當時私は廿七歳の時で、且つ其頃は日清戰爭の前であつて、日本などは半野蠻國であると云ふ風に思つて居つたものゝ多い時代であるから、皇帝も日本から來た若い男と云ふやうな事にも多少興味を起されたものであらうとも想像される。

尤も前以て豫告らしいものはあつたけれども、四月十五日かに俄かに**今日持つて來て見せて吳れとの御下命があつた。私の止宿へ御通知のあつたのは何でも**十時頃であつたと思ふが午后の一時に來いとの御命令であるから、それ迄に僅かに三時間しかないのである。器械は勿論伯林にあるが、それを宮中に搬ばねばならぬし、又其れを演奏する相當の音樂師をも頼まねばならぬと云ふやうな事でなか／＼目が廻る程忙しかつた。が、どうやら形を附けて都合よく正時に伺候した。其頃私共は所謂一寒生であつて上流社會の作法など云ふものは少しも知らない。殊に帝王の前にどう云ふ敬禮をするものかも分らない。尤も私の知つて居る人で宮中に出入して居る人から前に少し聞いては置いたが、イザ皇帝の前に出るとなれば少からず逡巡されたのであつた。よくは分らぬが其時のお座敷は皇帝の御學問所の隣の應接間風の處であつた。其處に樂器を据ゑて、御命令通り畏る／＼控へて居つた。其時皇帝が出御さるゝについて陪席された人は文部大臣、式部長、侍從武官、帝室附の牧師(大僧正)等で皇帝の出御さるゝ前に其部屋に來て控へて居た。さうすると隣の室の戶が開いて、皇帝は確か騎兵の軍服で出御になられた。次いで皇后陛下が御出になる。それから皇太子と王子がお二人ばかりお出になつた。いはゝ純然たる家庭的の御催してあつた。お出になつて、直ぐに私を御覽になつてお進みになつて握手を命ぜられた。そして仰せらるゝには、今日はよく來て吳れて誠に嬉れしいと云ふ事であつた。皇后陛下も默禮された。私も式の通りの敬意を致した。それから皇帝に、此頃面白い事を始められたさうだが豫て聞いて居りましたが、何時か一遍見せて頂きたいと思うてゐました。丁度今日は此機會を得て誠に幸福でありますといはれた。**直譯すれば以上の通りで餘り御丁寧過ぎるお言葉で以て話しか**けられたのである。それで私も大體今迄の樂器と異つて居る點を申上げ

た。すると文部大臣は更に之を敷衍して、私の樂器と、從來音樂界で大問題となつて居つた事柄との關係を說明して呉れた。それが濟むと一つ奏樂して貰ひたいと仰せられる。それで頼んで置いた樂師が出て奏樂をした。それからいろ〳〵のお話があつた。私は前に皇帝の前に出ることさへ逡巡して居つた程で、お話などは到底出來ないと思つて居たのであつたが、こんな風に皇帝の御懇篤なるお言葉を頂戴し、且ついろ〳〵樂器の事についてお話せらるゝので、私も不知不識の間に皇帝の前にあることを忘れ、丸で普通の若いプロイセンの士官とでも談じ合ふやうな心持になつて、實に打解けたるお話をすることが出來た。此事を考へると私は今でも其有難さを忘るゝことが出來ないのである。

いはゞ東洋から渡つた一寒生の私に向つて、丸で同等のお取扱をされて、極めて禮儀を重ぜられ、殊に優渥なるお言葉の數々を賜つたのは實に格外の思召と存ずる。之は或は私が外臣であるから殊にそれ丈け鄭重になされたのか、或は學問藝術を尊重すると云ふ上より優渥なるお言葉を賜つたのかよく分らぬが、私の身にとつては實に此上もない光榮であつたと信じて居る。

此等のお話が濟むと珈琲が出て、此事業が將來有望なりや否やなど問ひ訊され、どこまでも遣り遂げ玉へと云ふやうなお言葉もあつた。又文部大臣に向つて援けてやらうぢやないかと云ふやうなお言葉もあつた。それで私はお暇を申上げると、又帝はお進みになつて握手を命ぜられ、今日は御苦勞であつたと仰せられた。皇后からも同じやうなお言葉があつて、それで私は引下りました。

あちらの作法については私はよく知らないが、大帝國の元首であると云ふ處は少しも見えなかつた。そして學問藝術と云ふやうなものに對せらるゝ時は丸で普通人と少しも違はれないと云ふことを深く感じた次第で、今日になつて思ひ出せば實に昔が偲ばれるのである。

その後に獨逸の文部省からもう少し大きい樂器を作つては如何かと云ふので、同じ式の大きなものを一つ作つて文部省に納めた事がある。又いろ〳〵試驗をなし、之を伯林に持つて來て音樂會などを催した事があるが、其時にも伯林の帝室寺院附の伶人方をわざ〳〵お遣はしになつた事もある。

斯くの如く皇帝は私に向て非常に優渥なる御待遇を賜はり、且つ御奬勵のお言葉を賜つたのであるが、其後の事業は豫期通りに成功しなかつたのは返す〳〵も遺憾に思ふ。然し學問上に於ては自分の研究は多少世人に認められ、又將來此事業を復興することも出來るやうになつてゐるから、此れ丈けはいくらか心を慰むるに足ると考へて居ることを申上げたいと思つて居る。

△獨逸に居て觀たカイゼル

△△生

⊙獨逸皇帝は兎に角エライ人だ。野心もあり、抱負もあり、學問もあ

り、手腕もある。只腰が据つて居るか、本當に膽力があるか、之が問題だと思ふ。獨逸皇帝に關する僕の考を簡單に纒めて云つて了へば、只此れ丈けである。

◉只獨逸皇帝はエライと云つても、いはゞ坊つちやん育ちであつて、本當の苦勞をした人でないんだから、彼得大帝とか、フレデリツク大王とか云ふ苦勞と困難で鍛へて來た人と角力が取れるかどうかは問題だ。始終毒藥をポケツトの中に忍ばせて、擒になるやうな敗戰になれば何時でも自殺しようと覺悟して居つたフレデリツク大王の眞似などは恐らくカイゼル陛下に出來ぬ藝當ぢやないかと思ふ。

◉今度の戰爭で若し獨逸が負けたら、どうなるだらうと云ふのかね。一體獨逸國民は日本人などゝ違つて血氣に逸るなど云ふ事はない。日本人ならどうしても一發やらなければならぬ所でも、獨逸人はジワリ〱してゐる。それに獨逸國民は國民として隨分苦勞して來た國民で何回も叩き附けられて困まつて來て居る國民だから、皇帝の御一身はどう變化するか分らないが、獨逸國民と云ふものは負けても亡びるものでないと思ふ。

◉人によつては獨逸國民の中に今のカイゼルに對して非常に不平不滿を持つて居るものが多いやうに噂するものもあるが、我等が獨逸に居て觀た所では、皇帝に不平を持つて居ると云ふやうな人間は殆んどないやうだ。只イヤナ奴だとか、キザナ奴だ位に思ふものは可なりあるやうだが不平といふやうな不平はないやうに思ふ。其證據には獨逸皇帝ほど僅かのお伴を連れたのみで市中を平氣で通らるゝ帝王は餘り澤山あるまい。帝を見ようと思へば誰れも容易く出來る仕事である。

◉又日本人あたりの考の間違つて居ると思ふのは、獨逸の政治は一切萬端總て皇帝一人の思付通りになるものと思つてゐるらしいが、之は餘程間違つた觀察と思ふ。皇帝の背後には多勢の地主と貴族とが居つて、此等のものゝ意見には、皇帝と雖もどうしても屈服しなければならぬ場合もあるし、假令屈服せぬまでも、其等のものゝ意見と調和し、若くはそれ等のものゝ贊成を得なければ何も出來ぬことが餘程多いやうに思はるゝ。カイゼルを以て其思ふことは何でも心の儘に實行し得る地位に在るものと考へて居るのは餘程淺薄な觀察と思ふ。此事はカナル問題から遂にビユーローが辭職しなければならぬのを見ても分ることで、詰りビユーローがカナルを開いて商工業者の保護をしようとしたのが農民黨及び地主の反對を買つて遂に辭職の止むなきに至つたのである。

◉ビユーローといへば、皇帝の下に宰相となるものは隨分いゝ迷惑である。何か自分でやり出したいやうなものは皇帝の氣に入らぬから、何でも大人しく皇帝の命ずる通りにして居らなければならぬし、其上に皇帝が度々やらるゝやりしくじりの尻拭ひばかりをやつて居らなければならぬのである。

◉兎に角獨逸皇帝は陽氣な、華やかな事が好きな性質で、帝の失敗多くは餘りに圖に乘つて愛嬌を惜氣もなく振り撒かるゝ所から出て居るのが多い。

◉眼が据つて居るか、本當の膽力があるか無いかゞ唯一の疑問であると云つたが、此點も今度の戰爭によつて多分確かめらるゝ事になるでせう。若し此點さへしつかりして居るならば、カイゼルは本當の英雄であると思ふが、此點には私は今はどうしても？（クエッシヨン・マーク）を附けて置かなくてはならぬ。

△興國の才か亡國の才か

早川鐵冶

カイゼルは御一代の間にいろ〳〵變化された方だから、只簡單に一口に許し去つて了ふことは六つかしい。初めは兎に角ビスマルクが頻りと祖國（ファーテルランド）主義で教育した人であるから、ビスマルクとは決して仲のわるい事はなく、寧ろビスマルクはフレデリック帝が御存生では其御姻戚のビクトリア女皇陛下と仲がわるい爲めに思ふやうに手腕を揮ふことが出來ず、今のカイゼルが出られたなら却て自分と提携してやつて行けるものと心得て居つたのであつた。さうすると即位すると間もなく社會問題で忽ちカイゼルとの間に大衝突をなして、カイセルは國家の元勳たり帝國の柱石たる比公を追ひ拂つて了つた。之は何でもカイゼルの三十四五の時だが、當時比公の官邸と日本の公使館とは隣仝志であつたので、皇帝が辭職勸告の爲めに比公の官邸へ馬車で來られた時などは我々は何の爲めに來られたのだらうと噂し合つて居つたものだ。

それからカイゼルは登極の初めには非常に旅をなさつたものだ。トウベラーカイゼルといはれた程だ。カイゼルは其體は歐洲人としては寧ろ小柄な人で、それに右の手はリウマチスか何かで自由に利かぬのであるが、然し歐羅巴人の眼から見れば非常の美男子で、炯々たる其眼光と、何人をもソラさぬ應待振りは實にエライものである。

どうも國の起る時の君主と國の亡びる時の君主には非常な才子が出るものと思ふが、兎に角カイゼルは非常の才子で、各國の使臣を引見されても、皆其國の最も新らしい出來事について話される。私などが西園寺公使に隨つて行つた時などは、恰度日本で議院が燒けた時であつたが、カイゼルは西園寺に向て、どうだお前の所の議會が燒けたさうぢやないか、頑固黨でも多いのかなどゝ話し出されると、西園寺もさる者、極めて輕く受けて、イヤあの建築は獨逸の建築師が建てたものだが、設計に手落ちがあつたものか、電氣が洩れて燒けたのですなどゝ洒落をいつてみんなでアハヽヽヽと笑つたりしたものだ。歐米の大國の近狀を知つて居らるゝ丈けなら、そんなに驚くこともないが、墨西哥であれ、伯剌爾西であれ、波斯であれ、どこの國の事でもよく新らしい事を知つて居られて、其國の人でも見えると直ぐ話の種子にされる。之は常に世界の新聞をよく讀んで居らるゝ爲めだ。

又實に趣味の廣い人で音樂は上手、狩獵の名人、騎馬に堪能、文才はあるし、辯舌がある。殆んど何から何まで通達せられて、而かも萬機を

親裁される。それであの人の平和と云ふものは皆凡庸で、此公の如く少しても此命令に服せぬやうな人では到底勤まらない。

又カイゼルはエライ服道樂で大禮服の如きも何着あるか分らない。又自らフレデリック大王を以て任じて居られて、お若い時に參謀總長のモルトケなどゝ、フレデリック大王時代の服裝で寫眞を撮された事などもある。

功名心の非常に强いお方で、遂に今日の大戰爭を惹き起さるゝやうにもなつたのであるが、平和的の事業にもなか〳〵心を用ひられたもので學術を進め、領土を廣め、商業を盛んならしめ、凡そ獨逸の興隆今日の如きは建國以來未だ嘗て見ざる所である。廿四五年前まで二等國であつた獨逸が今日の如く阿弗利加にも大地所を持ち、南洋にも領地を持ち、或は支那にも足掛りを拵へる、商賣繁昌、工業勃興、先帝時代までは亞米利加などに年々移民しなくてはならなかつた獨逸が、國内に工業が勃興した爲めに國外に移動するものがなくなつた。而して殖民地と本國との貿易は益々盛んになる一方であつた。世間では極めて危險の人の如く云つたが、事實に於て廿餘年間は平和で、國内に學問、技藝、文學、工業等平和的の事業の非常に興隆したのは全くカイゼルの力である。それで我輩などは此分ならば今后も久しく大亂になるやうな事がなからうと思つて居つたが、圖らずも今回の大動亂が起つた。而して一度動亂が起つて見ると實に其行動たるや電光石火眼にも留らぬ敏捷さである。目下の狀態では連戰連敗の報知があるに拘らず、我輩などは實にエライものと思うて居る。

あれ丈けの才人で、美男子で、而かもラヴ・マッチユよりもポリチカル・マッチユであつたらしい自分よりも年上の妻君を持ちながら品行頗る方正で未だ一度も醜聲の外に洩れたるを聞いた事がない。之などは餘程感服すべき事と思ふ。のみならず御夫婦仲が極めて睦しくお子さん達はみんな利巧な立派なお方ばかりで、實に羨ましい次第である。

初めに興國の君主と亡國の君主は何れも才子であるといつたが、例へば朝鮮の李太王でも、波蘭のスタレルスローでも皆立派な才子だが、才子遂に國を亡ぼして了つた。然し今のカイゼルは朝鮮王や波蘭王の如き只一遍の才子ではなく、なか〳〵氣魄もあり。抱負もある。果斷決行の性質もあることは今度の動作でも分る。然し果して其才を利用して益々興國の業を大成するか、或は才が矢張り其身を誤つて、遂に亡國の非運に遭遇するか、今少し先きを見た所で無ければ斷言は出來ぬのである。

●●●●●●本號の用紙に就て

本誌の本文の用紙は播州赤穗の三菱製紙會社の特製に係る靑菱にして本誌專用の製紙なるが、八月中旬東海道線の故障の爲め着荷後れ、約三分の一ほどは本號印刷まで間に合はざりしを以て、止むを得ず他の紙を以て之に代へざるを得ざるに至れり。本社に於ても遺憾の極みなれども、事天災に出づるを以て偏へに讀者諸君の御諒察を乞はんと欲す。

新刊批評と紹介

△ルードルフ・オイケンの哲學

三並良著　警醒社發行

著者は嘗て獨逸に在りて親しくオイケン教授の教を受け、今や平易に且全般的に氏の哲學を紹介せんとして此著あり。認識の根本問題に始まりて宗教宇宙人生の諸問題を說く所稍肯綮を得たりといふべし。(定價金七拾錢)

△椿御前

太田三次郎譯　春陽堂發行

本書はデュマの「ラ・ダーム・オウ・カメリヤ」の譯にして、嘗て我國にて演ぜられたることもあり。熱烈なる愛情と已み難き義理との葛藤が生む悲劇にして恐ろしく日本的なれば、一般婦女子の泪を誘ふに充分なるべきを信ず。(定價金壹圓廿錢)

△婦人問題早わかり

高野重三著　警醒社發行

婦人問題の起因と性質とを一般何人にも了解し得るやうに趣味ある筆致にて說けるものにして、通俗的に日本現在の男女の覺醒を促さんとせるもの也。尙附錄としてシュライネル女史の「婦人と勞働」を抄譯して卷末に附せり。(定價金七拾錢)

△社會觀察萬年筆

松崎天民著　磯部甲陽堂發行

天民氏の才筆は他人の追隨を許さず、其觀察必ずしも奇警ならずと雖も、亦模すべからず、社會觀察に於いて夙に一家の風をなし、天下多數の讀者を有する所以亦玆に有りとなす。此書「續淪落の女」「蠻カラ列傳」、「現代女學生」觀、「新女優の運命」觀等皆夫れ〲に興味あり。(定價金七拾錢)

△ベルグソンと現代思潮

野村隈畔著　大同館發行

本書はベルグソンを中心として現代哲學を硏究したるものにして、ベルグソン硏究者勿論苟も思想問題に頭を惱す者の爲めには嘗て得べからざりし良參考書たり。先づ現代哲學の意義を明らめ、生命と哲學を論じ、ベルグソンの認識論に入りて詳述する所、何人にも了解せしむる事を期し、而して能く其目的を達せる斯學の蘊奥に徹せざれば能はざる所、洵に欽ぶべしとなす。(定價金壹圓三十錢)

△新譯榮華物語・(上卷)

與謝野晶子著　金尾文淵堂發行

源氏物語の新譯によりて江湖の歡迎を受けたる晶子氏は更に榮華物語に其才筆を揮つて今此上卷を得たり。此新譯の或一部に持囃さるゝは其故ありと言ふべく、裝幀倶に美麗にて内容に相應はしく、紳士淑女の書架を飾るにも適せり。(定價金三圓、特價二圓五十錢)

△洗心錄

幸田露伴著　至誠堂發行

鹿爪らしからぬ修養教訓の書也。世を渡るに讀みて裨する所素より尠からざるべく、綠陰樹下、赤汗を洗ふに適すべし、(定價金壹圓二十錢)

△最新育兒法講話

長尾美知著　東亞堂發行

育兒に關する注意を科學的に說明せるものにして、發育狀態、生理作用、發育の注意、疾病豫防手當等に至る迄精細を盡したれば家庭に備ふべき必要書たり。(定價金壹圓五拾錢)

△自然の妙趣

石川成章著　東亞堂發行

自然の妙趣を說いて其自然界の立場より人間界を觀、該人間の修養に

及ぶ。完政論あり、演劇觀あり、信仰論あり、又聽くべきものなしとせず。(定價金壹圓廿錢)

△波　藤本成吉著　中興館發行

記者は未だ此小說を一讀する機會を得ずと雖も、著者は已む難き內心の要求に依りて書き、それによりて舊き自己を棄て新らしき自己に生れ歸るを得たりとなせり。眞摯なる態度と告白とには何人の胸にも響應する何者かを見出し得べし。(定價金壹圓)

△戰後露國の外交及軍事　外交時報社編並發行

此書は日露戰爭後露國の外交並に軍事を硏究して、露國の軍事的經營は極東を目的とするにあらずして獨乙を目的とするにあらざるなきかと言へり。然るに今や其豫言は現實せられて歐洲の大動亂を目の當り見るに至れり。此際此書の硏究せる所に依りて露國の現狀を知り、且つ今後の趨勢を知るは最興味ある所とす。(定價金壹圓)

△向上論　南條文雄著　東亞堂發行

本書は宗教道德に關する著者の講演にして、徒らに幽玄なる理論にのみ走りて實行の之に伴はざるが如きを避け佛教の敎ふる立場より偏へに實際的修養の道を說けり。(定價金貳圓五拾錢)

△基督と人生　柏井園著　北文館發行

基督の敎を聽き、基督の愛に浴するには聖書より入る門あり。然れども亦斯の如き基督を渴仰する著者の頭を通して入るの道もあり。要するに道也。心靈に生きんとする者の善き手引たるべし。(定價金壹圓二十錢

△ジャン・クリストフ　闇を破つて　三浦關造譯　警醒社發行

或批評家の評して「二十世紀の最も高價なる傑作」と言ひし、ロマン・ローランのジャン・クリストフ、の前二卷「曙」と「朝」とを譯せるものを本書となす、原書は十大卷にして、尙八卷を餘す必ず吾國民の一讀すべき藝術品にして此譯書の提供を歡ぶと共に一日も早く全部の完成を待つもの也。(定價金壹圓三十錢)

△國民經濟學原論　山田伊三郎譯補　富山房發行

本書は『シュモラー原論の譯補にして、マーカンテイリズムの陋と、フジオクラットの奇と「スミス」の短と、社會主義者の僻と皆收めてこれが適所に配す』となせり。其說く所「國民經濟の大觀現象及要素と觀たる土地、人民及技術」を項を頒つて詳論せり。(定價金壹圓五拾錢)

△機械工業一斑　津久井平八著　東亞堂發行

本書は我國現在の機械工業に從事する者にして該智識を缺ける者の多きを憂ひ、一般理論を平易に總括的に實際に從業する者の參考たらんとして著されたるもの也。斯くの如き參考書の殆ど絕無なる今日、其急を救ひ、斯界を益する事尠少ならざるを信ず。(定價金壹圓五拾錢)

△實用氣象學　中川源三郞著　裳華房發行

坊間氣象學に關する著書必ずしも無しとせずと雖も、概ね專門的數理論に涉り、未だ一般的實用的の物あるを見ず。本書は實に其缺を補へるものにして、何人にも必要なる天文に關する一般知識を平易に通俗に說明して殆ど餘す所無し、數十葉の挿繪は趣味ある本文と共に讀者の了解を助けて興趣多し。斯學の知識を普及するに適する良書といふべし。(定價金三圓五十錢)

空想乎 豫言乎 次の一戰？

此の世界の大動亂の雲蒸龍變する時
日本の男の中の男が讀むべき唯一の快著

一海軍中佐著

日米軍艦比較表（六葉）
太平洋一般圖（石版）
列國海軍實力表（石版）
巴奈馬運河地圖（二葉）
日米海軍比較圖（石版）
列國海軍比較圖（二葉）
日米開戰寫眞版（廿一葉）

十二版 菊判クロス綴箱入堅牢美本
金壹圓貳拾錢
小包料十二錢 清鮮台十六錢

大警報來る！小說は最早小說に非ず豫言は將に眼前に展開せんとす

次の一戰を讀め！徒らに倉皇する勿れ、悲觀する勿れ、我が武力の足らざるを考慮して**決死的沈**勇を養へ！

飛行機は飛び、航空船は進行し、爆彈は落下し、潛水艇は突擊し、山の如き弩級艦は一瞬間に沈沒し、探照燈は波濤に漂ふ勇士の最後を照らす、新らしき船艦軍器の戰爭は愈々猛烈にして悽慘を極む、シカモ此悲運が戰勝に馴れて準備に油斷する國民の頭上に落つるに到つては慘の又慘、讀み終つて毛骨悚然、滿身粟を生ず、嗚呼、平和を空想して軍備を怠たるものは禍ひなる哉、五千萬の國民は**此權威ある匿名の作家**が爛々たる專門的軍事眼を以て數字の基礎に由て構想したる**次の一戰**の如何に恐るべく戰慄すべきかを固く頭腦に膠着して深く猛省考慮する所なかる可らず、是れ實に國家の深憂大患を教ふる經國の大文章也。

發兌元 金尾文淵堂
東京市麹町區平河町五丁目五番地
電話番町二〇九三・四九二五番
振替貯金口座東京三八一七番

（中付三の一）

國語調査委員會編纂

周代古音考及韻徵

國語調査委員會は曩に委員大矢透氏に囑するに假名通考の編纂を以てせられ其本篇第一篇假名源流考を公にせられたりき。本書は其の外編第一編にして假名源流考に於ける推古期遺文中の假名の音の周代古音の留存せるものなることの論定を更に明かにせむが爲めに編述せられたるものなり。且周代古音論定の根據は正確なる古韻の分部に在るを以て別卷に韻徵を編して對照比較に資せられたる等學者教育家は須くこの不朽の研究を一讀せられざる可からず

四六倍判全二冊
定價金四圓
郵税金拾六錢

發行所
東京市日本橋區新右衛門町一六
株式會社 國定教科書共同販賣所
振替貯金口座東京三三九六番

同 大阪出張所
大阪市西區阿波座上通一丁目一
振替貯金口座東京一五〇三五番

○本書は全國各地の著名書肆にあり

（中付三の二）

百科精英 文明叢書

ポケット形美本、一篇百頁、全六號活字一頁六百字以上

内容の充實價格の低廉前古無比

定價 壹篇に付き拾錢 郵税二錢

注意 本廣告中決闘の如く一册二篇を包有するものは定價廿錢飛行機の如く三篇を有するものは三十錢となる

九月刊行 十三篇以下續刊

一編・サメロ（全譯） ワイルド作 生田長江譯
二、三編・決闘（全譯） チエホフ作 小山内薫譯
四、五編・マグダ（全譯） ズーデルマン作 藤澤古雪譯
六編・御者ヘンセル（全譯）（舞臺協會九月興行台本） ハウプトマン作 秦豊吉譯
七編・カイゼル（評傳） 福本日南著
八編・朝顔（小品集） 鈴木三重吉著
九編・戀を知る頃（縮刷） 谷崎潤一郎著
十、十一編・飛行機（圖入） 永島春夫著

（中付三の四）

新刊 鈴木三重吉著 珊瑚樹

三重吉傑作選集 縮刷

津田青楓氏裝幀 煤煙同型美本 全六號活字兩百餘頁 一頁七百卌餘字詰

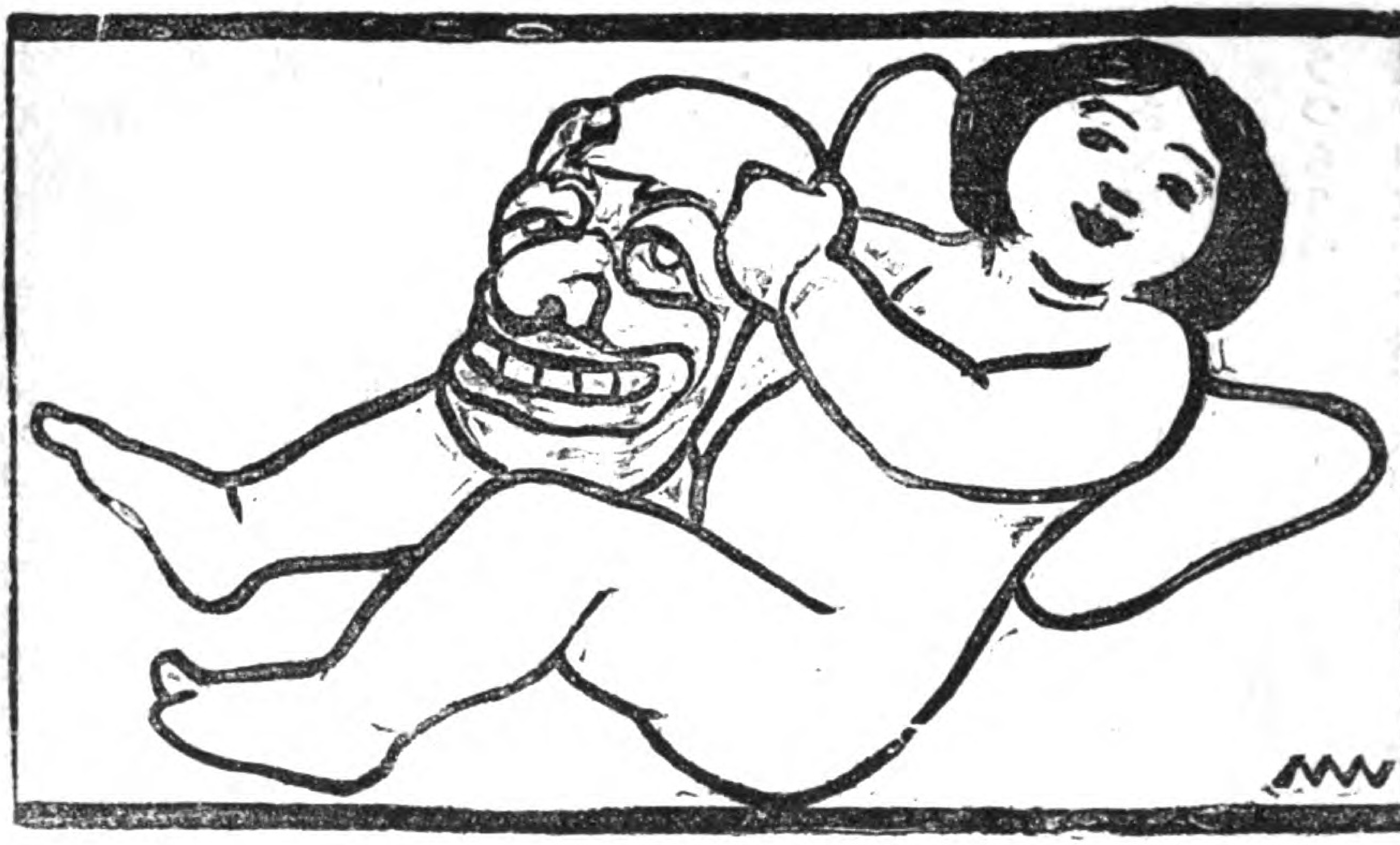
定價九拾五錢 郵税八錢

内容

■箭■一枚の瓦■桐の雨■小猫■穴■女■お三津さん■赤い鳥■黒血■

集むる處すべて著者自身、既刊の十數册の小説集の中より、會心の作のみを選り集めたるもの、讀者は本書一册を讀みて、赤門派隨一の作家三重吉氏の精粹を會得するを得べし

發行所 東京神田佐久間町四ノ二十三 植竹書院 （電話下谷三四一九番）（振替東京一二九五三番）



饒太郎

谷崎潤一郎

一

饒太郎が此の世に來てから、丁度二十七年目の夏の事である。

尤も、未だ五月の中旬であるから、晩春と云ふのが適しいかも知れないけれど、同じ事なら夏と呼んで了ひたい。試みに彼の書齋に充てられた茶の間の障子を明け放てば、庭前の木々の葉裏は光り輝いて、苔蒸す石燈籠や、飛び石や、土塀の白壁や、赭黑い土の面などに、ぎらぎらと浮かび漂ふ日光の斑點は、恰も藻をくゞる金魚の片鱗のやうな、水面を流れる油のやうな、重い眩い、さうして新鮮な反射を見せて、誰

の心にも「また例の夏が來たな。」と思はせる。

鏡太郎は今、何を考へて居るのでもない。莚の代りに敷いてある豹の皮へ胡坐を搔いて、紫檀の机に頰杖をついて、ぼんやりと庭を視詰めて居る。此の部屋の三方は壁や襖に劃られて居て、眞晝い明りは纔かに庭の一方から入り込むばかり、それもこんもりした木立の枝に遮られて、茶の間の中は水族館の廊下程の青暗さである。鏡太郎は丁度、船室の窓から海の底を覗ふやうな夢心地で、恍惚と庭の森葉を眺めて居る。其の夢心地より外に、彼の頭腦を占領して居る何者もないのである。云はゞ彼は、あの燈籠や白壁や木々の梢と同じやうに、歡ばしげな日の色を無心に味はつて居るのである。

午餐の後の、食慾の滿足と四肢の倦怠とが、彼を生れたばかりの嬰兒の如く無邪氣にさせて、時々とろとろと……怪しい睡魔に驅られながら、他愛もなく机にうなだれる。わりに人氣のない邸内の庭は晝も夜も森閑として、點滴のしたゝるやうに間斷なく啼きしきる小禽の聲を別にすれば、何處やらの工場の機械の音が、遠く幽かに耳に入るだけである。ちん、ちん、……と、地袋の上の置時計が二時を打つて、オルゴオルの不思議な音樂が一としきり鳴り續いたあとは、再び沈默が室内を占領して、東京の深川といふ大都の一隅とは考へられない靜かさに支配される。

「あゝ何と云ふ懶い日だらう。……」

さう思ひながら、鏡太郎は襲ひ來る夢魔を振ひ落す可く、急にぱつちりと眼を見張つたが、直ぐにまたうつらうつらとして、さも睡さうな表情になる。机の上に展べられた原稿用紙は、今朝からまだ一行も書かれない。否、實を云へばもう四五日前から、全く一枚も捗らない。今日も昨日もおとつひも、彼は

ペン軸を持つ手に煙草を燻らして、蛙の如く重い眼瞼をしばたゝきつゝ、空しく朝夕を送つて居る。「ひよツとしたら、己は白痴になりかけて居るのではあるまいか。」――などゝ危ぶまれるくらゐ、此の頃の彼の頭腦は散漫で薄弱で愚鈍で、或る一つの思想を五分と考へ續ける力がなくなつて居る。殊更創作などに取りかゝる際は、一層精神の働きが曇つて、何事かを考へようとすればする程、揮發油の發散する如く心が四方八方へ散らばつて消え失せて了ふ。彼は元來恐ろしい遲筆家であつたが、それでも昨今のやうに澁滯し、窘束する事はあまりなかつた。

「一體どうしたと云ふのだらう。ほんたうにどう云ふ譯なんだらう。」

彼は自暴になつて、石塊のやうな無價値な空虛な頭から、何かを絞り出す積りなのか、神鬮の箱を振るやうに頻りと頸筋を動かして見る。けれども勿論、そんな事が何の效果を奏する筈もない。――饒太郎と云ふ人間の値打は、象や豚と同じく、其の肉體を形成して居る物質の總量以外に、今や全く何者もない譯なのである。あのいろいろな人間じみた、高尚な複雜な、さうして優雅な理性だの感情だの微妙な作用はピタリと止まつて、唯肉體ばかりが其れと無頓着にムクムクと肥滿し、多量の血液を充實させ、いつも活氣の横溢した盛んな生理狀態にある。

しかし、饒太郎は此れ程になつても、決して自分が馬鹿になつた結果であらうとは思はなかつた――己の頭が空虛なのは、己が馬鹿である證據にはならない。其れは世の中に己の頭を充たすに足るだけの、立派な、實質のある思想が存在して居ないからだ。つまり人生其の者が無意味で空虛であると云ふ證據なのだ。――彼は自ら斯う辯解して居るのだが、此の辯解は他人には兎に角、自分の良心に對しては充分

有力であつた。

「新しい哲學」「新しい宗教」などゝ云ふ世間の聲に不安を感じて、彼は不承無承にジエームスや、オイツケンや、ベルグソンの著述を繙いて見るが、いつも通讀しないで投げ捨てゝ了ふ。其の癖どんなに難解な書物でも彼には難解だと感ぜられた例がない。二三行讀めば、先の先までスッカリ洞見する事が出來て、忽ち輕蔑の念を起す。

「此れて何が新しいのだ。こんな理屈は己だつて百も承知して居るのだ。」

と、彼は私かに傲語する。實際彼等の哲理と云ふものは、いざ讀んで見ると、大概今迄に印度人や希臘人や乃至饒太郎自身が朧ろげながら感じたり考へたり聞いたりした事ばかりで、其れを新しく系統的に論理的に陳述したと云ふだけの話、格別破天荒な發見もなければ、自分の心を引捉へて湲つて行く程の能力も價値もありはしない。幾何學の根本に通じて居る人間は、細かい定理を一々暗誦する必要がないと同じく、彼も亦此れ等の哲學書のペエヂを追うて、論理の階段を一々蹈みしめて、結局わかり切つた結論に到着する必要はない。だから彼の無學は、彼の賢明なる所以なのである。賢き無學！然り、まことに賢き無學と呼ぶ可きものなのである。——

彼は飽く迄も斯く信じ、斯く斷じて、自ら安んじようと努めて居るが、卑怯にも自分の「賢き無學」を世間へ堂々と發表し、宣言する事を恐れて居る。それでやつぱり、藝術家——文學者と云ふ地位に對して少しは物識りを裝つて行く都合上、いやいやながら、無益と知りながら、稀には理屈つぽい書物を手にする事がないでもない。ところが悲しい哉例の傲慢に妨げられて、物を鼻先で理解する代りに、シツ

かりと記憶するだけの注意力を失つて居る。あれ程賢明を誇つて居る彼が、をかしな事に何を讀んでも其の場限りて、あとはケロリと忘れて了ふ。

斯くの如くして、——空虚な頭て考へても「空虚」より外に出て來るものはないのだから、彼の小說の草稿が渉らないのは當然である。彼は今迄、「世の中はからッぽである。」と云ふ事を、繰り返し繰り返し小說に作つて居た。其れより外に彼の語る可き何物もないのである。もう少し丁寧に說明すれば、「世の中は美しいからつぽである。」と云ふ事——此れが彼の小說の基礎をなして居る、幼稚な、簡單な、無精極まる哲學てあつた。彼と雖も藝術家てある以上は、何等かの「美」と云ふものに憧れる素質を持つて居る。若しも此のからつぽな世の中に眞實らしいもの、せめて眞實に近い値のある者が存在するとしたら、「それは美てある。」と、饒太郎は答へるかも知れない。——然るに、彼の所謂「美」と云ふものが全然實感的な、官能的な世界にのみ限られて居る爲めに、小說の上て其の美を想像するよりも、生活に於いて其の美の實體を味ふ方が、彼に取つて餘計有意味な仕事となつて居る。つまり、彼には實感を放れた美感と云ふものが殆んどないのである。彼は實感と美感との間に何等の區別をも設けようとしないのである。だから彼には小說よりも繪畫の方が、繪畫よりも彫刻の方が、彫刻よりも演劇の方が、演劇よりも舞臺に現はれる俳優の肉體自身の方が、一層痛切な美感を齎すのてある。此の傾向がだんだん著しくなつた結果、今日彼の小說に書かうとする事柄は、單純なエロチシズム以外に、もはや何者もなくなつて了つた。

——「小說が書けないから、己の藝術家たる天分が涸渇して了つたと速斷するのは、大いなる誤りてあ

る。己のほんたうの創作は著述よりも實生活にあるのだ。己の藝術家たる所以は、己のライフ其の者に存して居るのだ。」——

眞面目なのか負け惜しみなのか、彼は近頃日に一遍づゝ、必ずこんな獨語を呟くのが癖になつて居る。其れても全然執筆を思ひ切る事は流石に不安を感ずると見え、此の一週間ばかり机に向つて、書いても書けないでも毎日ぼんやりと考へ込むのである。

兎に角今日も朝の十時から、今しがた二時の鳴るまで、一生懸命に端坐して居るのだが、相變らず彼の頭はからッぽである。どうかすると、自分が生きて居るのか死んで居るのかさへ判らなくなつて了ふ。かうやつて、日の暮れるまで考へ續けて、庭の面が眞暗になつて了ひさへすれば、彼は始めて安心したやうに徒勞な日課を終へるのであるが、初夏の長い長い一日は、容易に暮れて行かなかつた。二時半、……三時、……三時半、……四時になつても、庭はまだ頻りにぎらぎらと明るく光つて居る。石燈籠の周圍を繞る數本の木槲の梢が、柔かさうな新芽を吹いて青い硝子玉のやうに日に照つて居る。丁度その時、南天の葉蔭にある枝折戸がぎいと動いて輕く滑らかな靴音と一緒に、「今日は」と云ふ快活な聲が聞えた。

「這入り給へ。」と答へたまゝ、饒太郎はやつぱり机に凭れて、片手に頰杖を衝き片手に煙草をくゆらせて、身動きもせず一方を凝視して居る。庭に現はれたのは十八九の、背の高い、高等學校の制服を着けた優雅な風姿の青年であつた。植ゑ込みの隙を縫ひながら、物靜かな足取りて、飛び石傳ひに此方へ進んで來る間、目鼻立ちの涼しい、蛾のやうな瓜實顏から爪先へかけて、細かい絲葉の蔭が鮮明な斑點を印しつゝ、活動寫眞の開展する如く一歩一歩に彼の全身を這ひ上つて行く。

「御勉强中ですか。」

室内へ入らうとして、上り端へ腰かけた青年は、饒太郎があまりぼんやりして居るのを訝んだのか、暫く躊躇してから尋ねた。

「いや構はん、上り給へ。」

此れて助かつた！　と云ふやうに、彼は机上の原稿用紙を徐ろに片寄せてホッと一と息ついた。さうして、靴を脱ぎかけて居る青年の後ろつきを眺めて、いかにも後輩に指圖するやうな調子で、

「君、靴足袋を脱いで上つてくれたまへ。部屋の中が埃だらけになるからね。」

と云つた。

饒太郎がこんな事を要求したのは、强ち彼の潔癖に原因して居るのではない。――實はふと、此の青年の生き生きした素足の血色を想ひ出して、是非共其れが見たくなつたのである。青年は大人しく云ふ事をきいて、淺い半靴を脱ぎ捨てると、やがてアラビヤ馬の脛のやうな、捷敏らしくすらりとした兩脚の踝の上から、肉に密着してゐる紺のスコッチの靴足袋を、生皮を剝ぐやうに强くズルズルと引き剝いて行つた。足の肌は饒太郎の想像した程綺麗ではなく、五本の趾の股には砂塵が入り込み、甲は一面に靴足袋の紺の色に染まつて、全體が脂の爲めにどす黑く汚れて居たが、其の汚れ工合が却つて餘計彼の心を惹きつけるやうに覺えた。其の垢だらけな足の色つやには、いかにも奔放な、自由自在に山野を馳け歩いて思ふさま遊んだり、歌つたり、叫んだりする青年時代の活力が潛んで居るやうに感ぜられた。

「斯う云ふものを見せられると、己はいつても自分の少年時代の、晩春から初夏へかけての愉快なさうし

て何となくうら悲しかつた腕白時代を回想して、堪へ難い懐かしさに襲はれるが、一體誰でもこんな風に感ずるものか知らん。」……と、饒太郎は獨りて考へた。……丁度十二三歳の少年の時分、四五月頃の暖い慵い季候になると、彼は屢々友達を誘つて學校の歸りに丸の内の原つぱへ遊びに行つた事がある。其處には今と違つて立派な建築も公園もなく、雜草が茫々と生ひ茂つて菫だの苜蓿だのが一面に咲き亂れ、ところ〴〵に涼しさうな綠蔭の丘があつたり池があつたりした。或る時は腹這ひに臥ころんで陽炎の燃えたつ地面の草いきれを嗅ぎ、或る時は老樹の幹に凭れて碧空を流れる綿のやうな白雲の影を仰ぎ、或る時は二三人て鬼ごッこをしながら嬉々として蝶々の如く飛び廻り、日の暮れるまて夢中になつて遊び拔く。さうして、あたりがいつの間にか薄暗くなつて叢の青葉が陰鬱な表情に充ち、大木の枝が魔者のやうな形相をし始めると、漸く心付いてそわそわと家路を辿る。……彼が未だに忘れられないのは、その黄昏の我が家へ急ぐ歸り路の、何とも云へない悲しい、なつかしい、鈍い疲れてある。甘い倦怠の感覺が體中へ行き亘つて、麻裏草履の底に粘ッこい泥の塊が重く附着し、兩手の指の爪の間には赤土が茶色に乾いて糊のやうに硬張つたまゝ、今日の遊びの名殘を留めて居る。……其の時の夢のやうな追憶が、今此の青年の垢づいた足を見ると共に、彼の胸の中に蘇生へるのてあつた。

「要するに、若々しい人間の肌膚の汚れは、湯上りの美しさよりも却つて趣の深い、一種の甘味を持つて居るものだ。」

彼はそんなことを思つたが、今しも畏まつて据わらうとする青年に向つて、

「さあ君、自由にあぐらを搔き給へ。」

と、何氣ない體で云ひながら、自分の敷いて居る豹の皮の餘りの半分をすゝめた。若い男が二人で對坐す可く、四疊半の一と間はあまり狹隘であつた。キラキラした戸外から、急に庇の低い、うす暗い室内へ招ぜられた青年は、暫く眼をしばたゝいてハンケチで頭や頸の脂を拭いた。黒く艶のある五分刈の髮の毛を拂ふと、汗が霧のやうに吹いて、蒸し暑い臭ひを漂はせる。饒太郎は、自分の席から三尺ばかり離れて居る若人の靜かな胸間の喘ぎを聞くと、新鮮なる生の力に接觸する事の快味を覺えて、まじまじと其の容貌を見入つた。いつもは肌理の細かい滑かな顏が、今日は脂のために黒く光つて、小鼻の横に紅く小いさな腫物が一つ出來て居る。

「此の男の輪廓も大分くづれて了つたな。」と、彼は腹の中で私語した。

「近頃はどんな物を書いて居らつしやるんです。暫く何も執筆なさらなかつたやうですね。」

青年の言葉はいかにも自分の崇拜する先輩に向つて話されるやうな、敬虔な、慇懃なものであつた。

「ふうん。」と、饒太郎は肩を聳やかして自ら嘲るやうに、「ほんたうに暫く書かなかつた。今書いて居るものだつて、いつ出來上るか判りやしないさ。」

「しかし、一體どう云ふ事を書かうとなすつて居らつしやんです。」

此の青年は、まさか自分の尊敬する饒太郎が、からつぽの頭を所持して居ようとは夢にも知らなかつた。原稿はいつ出來上るか判らないにせよ、定めし其の腦髓には美しい思想や文章が、繚亂たる花園のやうに咲き綻びて居るのだらうと信じて居た。けれども事實は全く反對で、毎日筆を執つて居ながら、何を書いていゝか未だにハツキリ極まらないのである。

「…やつぱり小説なんですか。」

「うん、論文のやうな小説を書くつもりなんだ。」

疾うから決定して居た事のやうに、彼は言下に答へた。が、云ふまでもなく其れは出鱈目なのである。

「はあ、其れは面白いでせうな。一體どう云ふ論文なんです。」

「君はワイルドの言葉を知つて居るだらう。――" Vice and virtue are to the artist materials of his art. " と云ふ事を。――ところが僕はそれよりもモッと進んだ意見を持つて居るんだ。つまり、" Vice " を材料にしたのでなければ、決して優秀な文學は出來ないと云ふんだ。」

饒太郎は我ながら當意即妙の思ひ付きに感心せざるを得なかつた。正直の所、彼は今までこんな意見を抱いた事も夢みた事もありはしない。たッた今しがた、せッぱつまつてふと考へ出したばかりなのである。

「…換言すれば『美』は『善』よりも餘計『惡』と一致する。――ねえ君、それに違ひないだらう。此れが必ずしも僕の獨斷でない事は、古典文學を調べて見れば直ぐに判るよ。たとへばあのダンテの神曲だね、あの中で一番詩的な部分は何處かと云へばどうしても地獄(インフエルノ)ぢやないか。あの大作の中から、天國(パラダイス)や淨罪界(プルガトリイ)を除いたところでそれ程の價値を減ずるとは思はれないが、若しもインフエルノがなかつたとしたらどうだらう? 恐らく世界の傑作として賞讚される事はむづかしかつたに違ひない。それから更に適切な例は、ミルトンのパラダイス、ロストとパラダイス、リゲインドとを比較して見る事だ。何故

にパラダイス、ロストは成功したか、何故にパラダイス、リゲインドは失敗したか。と云へば、即ち前者は『惡』の勝利を描き、後者は『善』の勝利を描いたからなのだ。凡べて此れ等の事實は『美』と『惡』とに對する人間の感情が、どれ程相類似して居るかと云ふ事を證明するものぢやないか。」

話をして居るうちに饒太郎は得意になつた。最初は相手を感服させる爲めに出鱈目を並べて居たのだが、いつしか自分までが出鱈目である事を忘れて、全く平素から介抱して居た主張であるかのやうに感じつゝ、頗る熱心に眞面目に說きすゝめる。

「…かう云ふ例は文學以外にも澤山あるよ。今かりに二人の美人があつて、一人は善人の性格を持ち、一人は惡人の性格を持つとするね。其の場合に孰方が餘計美人に見えるかと云へば、必ず後者――惡人の方が遙かに立ち勝つて見えるものなんだ。つまり善人よりも惡人の性格の方が、『美』を遺憾なく發揮するのに適當して居る譯なんだ。…」

それから引き續いて、饒太郎は一時間以上も獨りでしやべつたが、相手は唯「はあ、はあ、」と手ごたへのない返辭をするばかりであつた。其のおツとりとした、陰險なのか遲鈍なのかわからないやうな青年の態度は、折角機嫌のよくなつた彼の氣分を再びいらいらさせた。彼は一時間ばかりの間に、幾度となく此の青年を憎んで見たり愛して見たりした。

「庄司君、此の頃君はどうしたんだかさつぱり元氣がないぢやないか。ねえ、どうしたんだい。」

突然、彼は今までの話題を轉じてさも不平らしくかう詰つた。

「いゝえ、そんな事はありやしません。今のお說は大變面白いと思つて居ます。」

から云つて、青年は頬のあたりを紅くしながら、にやりにやりと二度ばかり笑つて見せた。人に依つては横面を張り撲つてやりたくなる程、妙に取り澄ました上品ぶつた風つきである。

蓋し、此の庄司と云ふ青年と饒太郎との交際は今日や昨日に始まつた事ではないのだから、もう少し親しみがなくてはならない。何でも彼が或る人の紹介で、始めて饒太郎を訪れたのは一年半ばかり前の事である。其の頃から文壇に盛名を馳せて居た饒太郎の風貌を慕つて、彼は是非とも弟子にしてくれと云つてやつて來たのである。饒太郎は元來他人の世話をするやうな面倒な事は嫌ひであつたが、女にしても見まほしい青年の美貌に接すると、にべもなく拒絶するのが便りなく感ぜられた。それで師弟の關係と云ふ事でなく、たゞ趣味を同じうする友人として交際する事に話をきめた。饒太郎は其の當時から庄司の行く末に對して少なからぬ興味を抱いて居た。と云ふのは、彼が將來光彩ある藝術的生活を送る爲めに、彼の凡べての境遇が極めて都合よく出來上つて居たからである。第一彼は生れつきの美貌を持つて居る上に、下町の或る大きな料理屋の息子であつた。家には相當の財産もあり、兩親からは非常に可愛がられて居て、將來如何なる方面に身を立てようと全く彼の自由になつた。それから、斯かる社會の人間に似合はず、頭腦が緻密で擧動が沈着で早熟な生意氣らしい所がなかつた。饒太郎は彼の文學的才能よりも、彼の繪のやうな詩人的生活の發展を見るのが樂しみであつた。

然し此の頃になつて、饒太郎は多少自分の豫想に欺かれた事を憾むで居る。だんだん日を經るに從ひ、庄司はたゞ一介の溫順な憶病な、頭の堅い模範學生となつて了つた。學校の課業の修得にこそ忠實であれ、彼は格別の趣味も天分もなく、純然たる學者肌の人間であるらしかつた。さう云ふ風であつた

から、二人の交情はいつまで立つても打ち解けて來ない。たま〳〵訪問しても、互ひに遠慮がちで好い加減な談話を交換する。此の傾向で進んだら、遠からず彼等の往復は絶えて了ふかも知れないのであるが、さすがに未だ其處迄には至らなかつた。最初の惰勢がある爲めに、庄司の方でも、やはり饒太郎は少しはえらい人間なのだらうと信じて居る。又一方では此の青年の美貌を尊重する情が頭の中を離れないで、「兎に角あの希臘式な輪廓を見るだけでも、附き合つて置く直打はある。」と思つて居る。さうして、成る可くならその容貌に適しい慾求が芽を吹き出して、いつか一度は無味乾燥な青年の性格を根底より一變させる機會の來る事を祈つて居る。庄司は饒太郎に會ふ度毎に、何だか自分が「墮落せよ。」と唆かされて居るやうに感じた。

「あまり學問にばかり凝つて居ると、『美』はいつの間にかお前の肉體を振り捨てゝ了ふだらう。」――殊に今日は、それとなくこんな警告を與へられて居るやうに庄司は思つた。

二時間ばかり活氣のない對談をして、青年が歸つて行つたのは六時頃であつた。饒太郎はもう再び原稿の筆を續ける勇氣はなかつた。やうやううす暗くなつた庭の夕闇を眺めながら、獨りぼんやりとして今別れた庄司の事を考へて居た。

「世間では己の作る小説が、あまり美し過ぎて夢のやうだと云ふけれど、決して夢ぢやないんだ。あのやうな青年の命を一つ犧牲にすればいくらでも實行出來る事なんだ。」

と、彼は、妖魔のやうに囁いた。さうして、自分も當分創作の方を斷念した上、明日から又暫く行かなかつた花やかな雰圍氣に身を投じて、生活の美酒に酔はうと決心した。

二

寢坊の饒太郎は次ぎの日の朝十一時まで、死んだやうに睡つて居た。さうして、午砲が鳴る頃漸くムックリ起き上つたが、飯を濟ませると書齋に立て籠つて、又しても原稿用紙を視つめたまゝ一時間ばかり考へて見た。しかし例に依つて一行も捗りはしないのである。

「やつぱり當分斷念する方がいゝんだ。」

彼は再びきのふの決心に立ち戻つて、腹立たしげに机の上を片附けて了ふと、忽ちいそいそと入浴に行つたり髯を剃つたり、一時間の後にはスッカリ身綺麗になつて、いかにも遊冶郎然とした衣類に着換へるや否や「おい、俥を一臺呼んで來てくれ。」と、威勢の好い聲で下女に命じた。

此の十日ばかり、空は曇ると云ふ事を忘れたやうに毎日毎日痛快に晴れて居る。爽やかな五月の風に夏外套の袂を吹かせながら、車上の彼は何か知らぬが頻りに愉快である。子供のやうな無邪氣な歡びのために胸騷ぎがして、身も心も輕々と何處かへ飛んで行きさうである。ひとりでに體がぞくぞくして、馬鹿に嬉しさうな薄笑ひが唇に浮かんだりする。……己は實際妙な男だ。今日始めての事でもないのに、遊びに行くとなると何てこんなにうれしいのだらう。原稿の執筆と云ふ事があれ程苦痛であると反對に、「遊び」の愉快さは己に取つて常にフレッシュなのはおかしい。殊にその嬉しさがまるで一人前の大人の感情とは思はれない程馬鹿げたもので、すでに出掛けて行く途中から斯く〻有頂天に浮かれて居るとは、まあ我ながら呆れたもんだ。……そんな事を思ひながら、彼はやつぱり自分の心の浮かれるまゝに自分を委

ねて、ひとりひそかに嬉しがつて居る。

三十分ばかり走つた後、俥は或る事務所風の西洋館の前に停まつたが、其處は中央郵便局の四つ辻に近い、幾筋かの繁華な横町が縦横に入り亂れて居る地所の一廓で、「○○信託會社」と云ふやうな看板の懸つた玄關であつた。饒太郎は歡樂の巷を訪れる前に、或る必要があつて人知れずこんな所へやつて來たのである。

「S君はおいでゞすか？是非共至急にお目に懸りたいのですが、……」

差し出した名刺を見るまでもなく給仕は彼の顏をよく覺えて居た。さうして慇懃に禮をしながら、

「唯今伺つて參りますから、此方でお待ちを願ひます。」と、上草履を彼の足許に揃へた。

饒太郎は二階の應接間の椅子に凭れて、少し落ち着かぬやうに兩脚を搖す振りながら、窓の外の、鎧橋から江戸橋へ續く川筋の船の景色を瞰下ろして居た。時計を見ると二時半である。まだ時刻は大分早い。……世間一般の人達は今頃一生懸命に働いて居る最中であらう。此の殷賑な株式市場の周圍に住む相場師連中は勿論の事、小學校の子供と雖も日中の二時半からブラブラして居る者は一人もない。あつたら其れは病人か白痴か貴族ののら息子ぐらゐなものである。……女のやうにぞろりとしたお召しづくめの衣類を纏つて、今から遊びに出掛けようとする饒太郎は、活氣に充ちた四邊の空氣と懶惰な自分とを對照して、圖らずも妙な不安に襲はれるのを覺えた。

殆んど一時間近く待たされた後、漸くSは忙がしさうな足取りで階段を駈け上つて來た。

「失敬、々々。ちよいと用事があつて餘所へ出て居たものだから、ほんとにお待たせてして了つた。ど

うですか近頃は？」
と、彼はチヨツキ一つになつて片手のハンケチで額の汗を拭き、片手の扇子で激しく襟頸を煽ぎながら云つた。三十五六のでつぷりと太つた、欲張りてはあるが人の好ささうな、狡猾ではあるが精力のありさうな容貌と態度とを持つて居る。
「近頃は相變らず遊んで居ますよ。それに就いて今日もあなたにお願ひがあつて來たんです。」
鐃太郎はさも譯のない話のやうな口振りで言葉を續けた。
「……如何でせう？　實は至急に今日中に三百圓程都合して頂きたいのですが、……」
「今日中とはあんまり急な話だなあ。しかし次第に依つたら都合出來ない事もありませんがね。……それよりか君、先月の利息を入れて下さらんぢや困るぢやないか。あの方は一體どうするのか、此れが先決問題ですよ。」
今まで愛嬌よく笑つて居たSの眼は急にぎろりと輝いて、扇子を頻りにパチパチと鳴らしながら、詰問するやうに云つた。
「あれはいつでも拂ひますよ。ついての時でいゝと思つて居たものですから、氣に懸けながら遲れて了つたんです。」
「さうですか。まああなたの事だから何時でもいゝやうなものゝ、毎月の利息だけはあんまり遲れるとキマリが付かないで困るんです。それぢや早速屆けて頂きませうかな。」
「そんなら甚だ勝手ですが、今日拜借する金額のうちから差引いて貰ひませう。」

「まあ待ち給へ。あなたのやうにさう何も彼も獨り極めにされちや弱りますな。まだ借すとも借さんとも御返事した譯ぢやないんだから。」

「いや、御返事はどうでも僕の方ではさう云ふ手筈にきめてあるんです。是非共あなたに承知して頂かなけりや、今夜直ぐに差し支へるんです。」

「さう自分の事ばかり考へないで、ちつとは借す身になつても見給へ。今來て今都合しろと云つたつて、まさかおいそれとも行かないからなあ。」

「しかし現在三百圓の金が此の會社にない事はありますまい。」

「勿論あるにはありますがね。」

「あつたら借した方がいゝでせう。利息を取つて金を借すのがあなたの方の商賣なんだから。」

「あはゝゝゝ僕だつて此れでも高利貸とは譯が違ひます。」

「月五分と云ふ利息を取ればまあ高利貸に似たもんだな。」

　饒太郎はまるで相手の氣を吞んだやうな大膽な句調で、自由自在に賴んだり嘲つたりした。……かう云ふ掛け引きになると彼はなか〳〵うまいもので、別人のやうに活氣に充ち機略を弄し、動ともすれば拳を堅め眼を光らせる。其の淺ましい下品な態度には何處を押しても文學者らしい所はなかつた。

「成る程高利と云へば高利かも知れませんが、馬鹿々々しいと思つたら、借りない方が悧巧ですよ。殊にあなたなんぞ何不足のない御身分で、立派な腕前を持つて居らッしやる癖に、全く氣が知れないぢやありませんか。」

「何不足のない御身分とは驚いたな。」

かう云つたが、其の實彼は自分の信用の落ちない事を訴つて居るのである。

「そんな事はありますまい。僕には文學の方は解らんけれど、あなたなんか現今の文壇に錚々たる者て、書きさへすれば一枚いくらと云ふ大金が取れるんださうてすぜ。」

「誰がそんな事を云ふんてす？」

「誰と云つて、それはちやんと僕の方て調べてあるんてす。あなたにそれだけの實力があると突き止めなければ、無闇に金を借す筈はないんてす。」

「そいつは有り難い仕合せだ。」

「だから僕はほんたうにあなたに忠告しますよ。利息のついた金を借りて遊ぶ事だけはお止しなさい。此れが何か已むを得ない事情とか、有利な事業に投資するとか云ふのなら格別、あなたのは全く放蕩の費用に金を借りるのだから溜らない。それ程金が欲しければチョッと一と筆小説を書いたら何でもないてせう。」

「ふふん、さう雜作なく書けるものぢやないんてす。あなた方のやうに働きさへすれば儲かるのとは譯が違ひますからね。」

彼はいかにも文學者が俗人を輕侮するやうな調子て云つた。

「今迄ても可なりな所へ、また三百圓ふえて御覽なさい。毎月の利息だけても大したもんてすぜ。」

「兎に角あなたの御親切は解りましたから此れから大いに愼むとして今日だけは是非都合して頂きませ

ですよ。」
「仕方がない。あなたに懸つちや抗はないから何とかまあ考へるとして、一體いつまでに返して下さる？」
「來月一杯。」
「では斯うしようぢやありませんか、利息の高い方が結局あなたも早く返濟する氣になるんだから、今度の分だけ六分と云ふ事にきめて下さい。」
「冗談ぢやない！　高利貸と云つたのは取り消しにするから、そいつばかりは勘忍してくれ給へ。」
「しかしあなたが必ず來月返す積りなら、一分の違ひぐらゐ何でもないでせう。慾張る譯ぢやないけれど、今日のやうな無理な金は全く六分の値打があるんですよ。若しもそれでお嫌なら殘念ながら破談にするより仕方がない。」
「よろしい、よろしい。さう足元を見られたのでは仕樣がないから降參します。其の代り今すぐに頂けるでせうな。」
「承知しましたが、銀行から持つて來るまで二十分程お待ち下さい。」
Ｓは鈴を鳴らして給仕に硯箱と用箋とを持つて來させて、
「それでは此れへいつもの通りにちよいと一と筆お願ひします。」斯う云ひ置いて座を立つて行つた。
未拂の利息だの手數料だのいろ〳〵のものを差引かれた末、二百五十圓足らずの金を漸く受け取つた饒太郎は、再び會社の門前から俥に乘つた。

「旦那、此れからどちらへお出てになります。」

車夫に突然から尋ねられた時、彼は自分の眼の前にあまり多くの美しい幻影が横はつて居るやうに覺えて、何處へ行くとも急に返辭が出來なかつた。此れまでさまざまな Folly を盡した女たちの棲み家が二つ三つ彼の考慮に上つたが、そんなものより何か新らしい、潑溂とした希望の光が、前途に充ち充ちて、自分の來るのを待つて居るやうに感ぜられる。金はあるし時間は早いし、別段急ぐ必要はない。兎に角何處かの劇場へ行つて、花やかな色彩と音樂とに宵の間を送りながら、ゆつくりと Destination を定める事にしよう。……彼はさう氣が付いて、

「帝劇まで」と車夫に命じた。

わづか半時間前まで一文なしであつた自分が、忽ち二百五十圓と云ふ大金を懷ろにして居る事を思ふと、饒太郎は我ながら不思議であつた。彼はその金を得る爲めに何等の勞力をも費しては居ない。金が欲しいと思ひ出してからほんの一時間以内に、俥に乘つて會社に駈け付けて、二た言三言しやべつただけて、縁もゆかりもないあかの他人の金を、自己の放蕩費に供すべく即座に引き出して來たのである。世間にこのくらゐ奇妙な滑稽なさうして便利な事があらうか? あまりに手續きが簡單な爲め、彼には其の金が他日相當の利息を以て返濟さる可き性質のものとは考へられないで、何だか道ならぬ方法に依つて盜んで來たものゝやうに恐ろしかつた。

正直を云ふと、饒太郎は「帝劇」と云ふところを劇場としては餘り好んで居ないのであるが、餘興の澤山あるカフエのやうな意味で、夜の宴樂の門出に一二時間立ち寄るには、至極適當だと思つて居る。尤も演劇として面白くないのは強ち帝劇ばかりではない、都下一流の芝居と云ふ芝居は何處を見ても、何等の刺戟をも與へてくれるものではないのである。西洋の事は知らず、此の國の舞臺には、グロテスクな容貌と窮屈な姿態と虛僞な音聲の外に、自然のまゝに伸んびりとした、強烈な彈力に富む若い美しい肉體を見る事が出來ない。一流になればなる程內容が乏しく色彩が稀薄になつて、深刻な人生の歡喜と云ふものからは恐ろしく遠い、氣障淺薄な妙にトゲトゲした技巧ばかりになつて了ふ。それ故此の國の演劇と云ふものは多大な費用と人數から構成されて居るにも拘らず、獨立した藝術としての價値に乏しいやうである。唯劇場と云ふ所は、金と戀とを持つて居る人々が自己の行樂の背景として、屛風や幔幕の代りに自分達の周圍に繞らす可く、まことに花やかな恰好な道具立てである。此の大都會のあらゆる方面の榮華と奢侈との集注して居る建築の中で、舞臺や觀客席や廊下や食堂に充ち溢れたる人々を仕出しに使ひながら、自分が或るロオマンスの主人公となつてプロットの發展を待ちつゝあるのだと感じた時、劇場の空氣は始めて其の人の胸に絕好の伴奏を奏でるであらう。

饒太郎は序幕から二幕目の中程まで靜かに見物して居たが、舞臺の上にどのやうな事件が進行しつゝあるのか、一向注意して居なかつた。何でも高麗藏の扮する或る英雄と梅幸の扮する或る婦人とが主人公となつた史劇風の物語らしいけれど、幕が締まると直ぐに何も彼も忘れられて了ふやうな空虛な場面て、彼の頭は何等の拘束も受けずに全然芝居とは沒交渉な途方もない事を考へたりした。有體に云ふと

彼はこんな高尙な干涸らびた「名優」の藝よりも、無邪氣な素直な女優達ちのキャッキャッと跳ねたり騷いたりする野蠻な喜劇の方が見たかつたのである。あのぎごちない「名優」の史劇と此の放縱な女優達ちの喜劇と、孰方が餘計に「人生の歡び」を現はして居るかと云へば、誰にしたつて其れは後者であると答へるに相違あるまい。……

そんな事を思つて居るうちに彼は頻りに渴を覺えたので、席を立ち上つて二階の廊下を食堂の方へ步いて行つた。窓の外には夜がいつの間にか靑黑い翼を擴げて、星の多い空の下に三菱原の空地が意味有り氣に茫々と橫はり、何だか汽船に乘つて大洋のまん中を走つて居るやうなうら淋しい心持ちを起させる。饒太郎の外に一人の客もない食堂の廣間は森閑として、純白なテエブル掛けの上に伏せてある無數のコップが、漲るやうな電燈の光線の海に海月の如くぎらぎらと輝くばかり、用を聞きに來るウェイタアの忍びやかな靴音が天井に反響する程の靜かさである。彼は引き入れられるやうな沈默の底に頰杖を衝いて、頻りに酒を呷りながら「醉」と云ふ曲者の次第々々に自分の心身へ這ひ上つて來るのを待つた。

丁度その時、

「泉君、泉君。」

と、廊下を通りかゝつた一人の男が彼の名前を呼んで、妙ににや〳〵笑ひながら食堂の中へ這入つて來た。其の男は少し古ぼけた霜降の背廣を着て、ひよろ長く瘦せた體格と、出齒で色の黑い、恐ろしく凹凸のある容貌を持つて居たが、饒太郎には誰であつたか思ひ出せないらしく、いつも知らない人に對する時の癖のやうに、さも無愛想な風をして見せた。

「おい泉君、冗談ぢやない君僕を忘れたのかい。僕は松村だよ。いやだぜ〳〵。」

相手は委細構はず同じテエブルの椅子に腰かけて、馴れ馴れしさうに云つた。

「うんさうか。珍らしく洋服なんか着込んで居るもんだから、ちよいと見違へて失敬した。ほんとに暫く會はなかつたな。」

「なあに僅か一年ばかりさ。けれども其の一年間に君はどえらく出世して文名を天下に馳せたが、我が輩は相變らずの松村だよ。さう澄ましたりなんかしないで、まあ昔のやうに附き合つてくれ給へ。」

何か知らぬが饒太郎は胸がぎくりとするやうに覺えて、變に凄味のある、薄氣味の惡い相手の顏を覗き込んだが、やがてわざとらしく快活に笑つて、

「あはゝゝゝ、何も澄まし込んだ譯ぢやないんだが、頭を分けたり洋服を着たりして居るから全く判らなかつたんだ。やつぱり君はお召しのどてらでも引掛けて長火鉢の向うにあぐらを掻いて居る方がよく似合うな。」

「さうかも知れないが、實は此の頃ひどく不景氣で戸外へ着て出る着物もないのさ。……どうだい君久し振りで一杯奢り給へ。芝居なんぞどうでもいゝから、飲みながらゆつくり話さうぢやないか。」

「よからう。」と、饒太郎は元氣よく卓を叩いてヰスキイの杯を呼んだ。

「ほんたうに今日君に會つたと云ふのは神樣のお引き合はせだな。」松村はコップを一と息きに飲み乾すや否や、直ぐその後を催促して、卑しげに舌なめずりをしながら言葉をつゞける。

「……僕は疾うから君に會いたいと思つて居たんだが、肝腎の居所が判らないので弱り切つて居たんだ

よ。‥‥何しろまあ此の頃の僕の窮境と云ふものを打ち明けた上て、是非とも一つ救つて貰はんけりや始末に終へないんだ。」

「そりやほんたうの話かい？　君は實際口がうまいからウッカリ信用出來やしない。」

「實際にも何にも全く閉口しちまつて手も足も出ない始末さ。ねえ君、久し振りて會つたのに面目次第もない話だが是非とも一つどうにかしてくれ給へ。君なんぞは近頃日の出の勢ひだから金に不自由する事なんかありやしないだらう。」

「まさかさうでもないよ。」かうは云つたが、決して饒太郎は得意でない事はなかつた。少くとも松村に對して今迄密かに抱いて居た恐怖の情が、だんだん輕蔑と憐愍の方へ移動すると共に、果てはスッカリ安心して傲慢になつて了つた。‥‥どうだ、この饒太郎はえらいものだらう。己だつてもとはお前と同様にのらくら者の不良學生だつたのが、いつの間にか立派な詩人になつて了つたんだ。お互ひに大學を放逐されて、お前がだんだん社會の下層へ墮落して行く間に、己はどんどん出世して有名な文學者になつちまつたんだ。同じデカダンスの泥の中からお前のやうな石ころも出れば己のやうな寶玉も出る。さすがに此の饒太郎は違つたもんだらう。考へて見るとお前はほんとに可哀さうな人間だ。それ程金に困つて居るなら、昔の誼みもある事だから少しは惠んでやつてもよろしい。‥‥彼は知らず識らずに大分醉拂つて了つた。

「なにも泉君そんなに隱すには及ばんぢやないか。此の際僕は食堂てキスキイを御馳走になつたぐらゐぢや滿足出來んのだから。」かう云つて松村は一段聲を低めながら、「‥‥君、君、ほんとに頼むから僕に

少しばかり融通してくれ給へ。ナニほんの僅かでいゝんだ。百と纏まつたものでなくつても、都合に依つたら其の半分でもいゝんだよ。お耻かしい話だが、實際明日が日の小遣ひにも差し支へてる譯なんだから、一時の凌ぎがつくだけでも非常に有難く思ふんだ。ねえいゝだらう。苟くも天下の文豪たる者に其のくらゐの都合が付かない筈はないだらう。勿論今直ぐと云ふのは無理な話だから二三日待つても構はないんだ。」

「さうさなあ。五十圓ぐらゐなら今此處に持つては居るんだが、……」饒太郎はわざと懷ろから紙入を出して縮緬の袱紗を解いて見せた。「今直ぐと云ふのは無理な話だ」と云はれたのが、彼には妙に癪に觸つて見くびられたやうに感じたのである。

「そ、そんなら猶更有り難い。後生だから君其れを借してくれ給へ。そんなに持つて居るのに何も考へる事はないぢやないか。」

「けれど此方にも入用があるから、斯うやつて持つて歩いて居るのさ。」

「さう云つちや濟まないが、入用と云つたつてどうせ君のは遊びに使ふ金なんだらう。第一その中から五拾圓ばかりなくなつたつて何でもありやしない。ヘッ、實際金と云ふものは有る所には有るもんだなあ。」松村は伸び上るやうに紙入の中を覗き込んだ。

「見られた以上は借さなけりやならんが、兎に角今日は此れだけ持つて行き給へ。殘りはまた二三日のうちに屆ける。」

彼は一杯に詰まつた財布の中から十圓札を三枚抽き出して、惜し氣もなくそれを相手の掌に載せた。

さうして、珍しくも任俠に富んだ、高潔なる自己の行爲に對して、不思議な程道德的の愉快と誇とを覺えたのである。

けれどもよく〳〵前後の事情を調べて見ると、鏡太郎が今此處で道德的の愉快を覺えると云ふのは、頗る矛盾した話のやうである。彼は全然成功者が失敗者に對するやうな、乃至は貴族が乞食に對するやうな心持ちで松村を見下して居るけれど、實際兩者の境遇はそれ程隔たつて居るのだらうか？ 彼を赤裸々にして松村と比べて見たところで、どれだけ勝れた點があるだらう？彼は松村よりも高尙な品性を持つて居るだらうか、該博な知識を所有して居るだらうか、或は立派な仕事でも成し遂げたらうか、否々何一つとして彼の方に長所を見出だす事は出來ない。そんならせめて金でもあるのか？公平に判斷して見て、彼は自分自身の金と云ふものを少しでも所持して居るのか？ 現在彼の懷ろにある二百五拾圓と云ふものは、緣もゆかりもないあかの他人の金庫から引き出して來たものではないか。さうして見れば彼は松村を侮辱する資格がないばかりか、却つて自分の方が卑しむ可き人間なのである。既に自分が他人の惠みを受けて居ながら、松村に多少の金を貸し與へて得意がるとはおかしな事である。それはまだいゝとしても、道德的の愉快を感ずると云ふに至つては己惚れも亦甚しい。彼が松村に金を與へたのは、任俠だの友愛だのと云ふ高尙な道德から割り出した行爲では決してない。一つには自分の虛榮心を滿足させる爲め、一つには强請されるだけの弱點を握られて居る爲めに、寧ろ當然與ふ可き義理があつたのである。

鏡太郎は自分でもよく其の道理に心付いて居たのだが、それにも拘らず、何事か偉大なる犧牲的精神

を發揮した後のやうに、云ふに云はれぬ良心の歡びを感じた。かうなつて來ると古來の聖人や哲學者に有難がられた良心と云ふものは、極めて盲目的な出鱈目な作用を有するに過ぎないらしい。つまり良心の歡びと云ふものは、動機の如何を問ふ事なく、唯外面に表はれた道德的行動の後に機械的に起るものなのである。彼の惠んだ金は自分のものでなかつたかも知れない、彼の行爲は僞善的であつたかも知れない、然しながら彼の誇りと歡びとは全く眞實で、少しも前後の事情に拘束されて居なかつた。

「一體君は困る困ると云つて居るが、此の頃どんな事をしてゐるんだね。」

金の遣り取りがあつてからの饒太郎の言葉遣ひは、稍横柄な度を加へた。

「どんな事と云つて、やつぱり御承知の明治座の後ろの方に巢を作つて居るのさ。尤も内の方は女まかせて、僕は用なしだから始終此の通りごろごろして居るんだよ。あんまり退屈だから一としきりは兜町へ手を出して見たが、斯う世間が不景氣ぢや何處へ行つてもロクな事はありやしないやね。」

惠まれた三拾圓を内隱袋に收めて大事さうに上衣の釦を締めて了ふと、安心したせゐか醉が一度に發して來て、松村は全く人の好さゝうな、柔順なだらしのない人間に變つて了つた。

「だが商賣か商賣だからいろ〳〵面白い事があるだらう。君の今の女と云ふのはやつぱり先の女かい?」

「なあに彼れからモウ二人目さ。ホラいつか君に話をした事があるだらう? 二の腕に錨の刺靑のあるおせんと云ふ女さ。彼奴がとうたう先の奴を逐ひ出して、今ぢや内の大將になつて辣腕を揮つて居るから妙だらう。」

「成る程そいつは妙だな。君のやうな男にさう幾人も女が惚れると云ふのは實際妙な話だな。」

「えへゝゝゝッ君と逢つて男は惡いし金はないが、それて女を自由にする所を見ると全く腕がいゝんだね。嘘だと思ふなら是非一遍遊び旁々樣子を見に來てくれ給へ。待合とは云ひ條一方が主だから好い藝者はあんまり這入らないけれど、穢い所もたまには參考になるだらうぜ。」

「うん有り難う。君の向うを張る譯ぢやないが、僕も女の一人や二人はあるんだけれど、實はもう其奴等には飽き飽きして了つて居るんだ。どうだらう君、近頃に新しいのを捜し出したいと思つてるんだが、あんまり汚れて居ない、成る可くなら白人に近いところて、僕の好奇心を挑發するやうなのは居ないか知らん。」

「そりや面白い！」と、松村は膝を叩いて獨りで乘り氣になり、「君がほんたうにさう云ふ氣ならば僕はいくらでも捜して來るぜ。實を云ふと今迄君に隱して居たが、僕は此の頃片手間に周旋屋見たいな事を始めて居るんだ。それて時に依ると隨分變つた奴に出會すから、近いうちに是非一人世話をしようぢやないか。」

「はゝゝ其いつはまあよく考へて見てからにしようかな。ウッカリ君の口車に乘せられて、厄介物を背負された上に高い口錢を取られた日にや、ほんとに馬鹿を見るからな。」

今の饒太郎は金もあるし地位もあるのだ、女に關する贅澤と云ふ贅澤は大概し盡して來た人間だ。憚りながら貴樣なんぞの世話をする女が己樣の口に合ふと思つて居るのか？——さう云はんばかりに饒太郎は嘲笑つた。

「いやところが決して君のやうにケナシたもんぢやないんだよ。僕には大凡そ君の好きさうな女と云ふ

のは解つて居るが、彼れなら誰に見せても耻かしくないと云ふやうなのが、どうかすると奉公の口を捜しにやつて來るものなんだ。現に二三日前にも一人あつたが、その娘なんざ器量はよし大人しいし、年が若いだけに初心な可愛らしい所があつて、新橋邊へ持つて行つてお雛妓にさせても決してヒケを取らないと云ふ、まあ今迄に珍らしい玉だつたね。」

「どうも君の話はアテにならない。年が若くてそれ程器量が好かつたら、藝者になりさうなもんぢやないか。」

「うん、僕も少々變だと思つてだんだん調べて見ると驚いたね、その女と云ふのは八丁堀邊の車夫の娘で子供の時から手癖が惡くて評判の奴なんださうだ。何しろ泥坊をするくらゐだから悧巧ではあるし、様子が如何にも大人しさうだもんだから、誰でもちよいと欺されるよ。どうして君、下膨れのしたあどけない目鼻立ちと云ひ、色白の水々しい體つきと云ひ、せい〳〵十六七の世間知らずとしきや思はれないが、ほんたうの歳は何でも十九か二十なんださうだ。」

「ふうん。さうして其の女はモウ何處かへ口がきまつたのかい。」

饒太郎の眼はいつか怪しい好奇心に輝いて居た。彼は昨日庄司に對して物語つた自分の言葉を想ひ出したのである。

「なあに未だなか〳〵極まりやしないだらう。さう云ふ風だから今迄隨分いゝ所へも奉公したり、一流の藝者屋へ買はれて行つたりしたんだけれど大概一と月か二た月で出て來るんだ。たしか去年の夏時分にも或る湯治場で紳士の紙入を盗んだとか云ふので、檢事局へ擧げられた事が新聞に出て居たさうだ。

まあ此の儘捨てゝ置けばいづれ其處邊の白首にでも成り下るより仕方がないが、それにしちやあんまり勿體ない器量だから、一番何とかして金儲けをしてやらうと思つて居るのさ。」

「どうだらう君、事に依つたら僕がその女を物にして見たいんだが、兎に角會はして貰はうぢやないか。」

「えッ」と松村は眼を圓くして、「そりや君ほんたうの話かい？　何ぼ君が物好きだつて、刑狀持ちと知りながら、そんな女と關係せんてもいゝぢやないか。ぬすッとだけなら未だしもだけれど、あゝ云ふ奴は此の先どんな恐ろしい眞似をするか解りやしないぜ。用心しないとそれこそ命までも取られちまふぜ。」

「もと〳〵承知の上なんだから、僕が命を取られたところで君の迷惑にやならんだらう。」

「それ程の御執心なら世話をしないとも限らないが、全體〇の方はどのくらゐまで奮發するんだね。先も云つた通り、僕もあの女では一と儲けする積りで、相當に金を懸けてあるんだから、……」

「あはゝゝゝ、いやに商賣氣を出して此方の足元を見るぢやないか。本人に會つた上で、氣に入りさへすれば金はいくらでも出すんだ。」

どう云ふ譯で彼が此れ程惚れ込んだのか、相手の松村には全く理由が解らなかつたが何にせよ端の見る眼もおかしいくらゐ鏡太郎は有頂天になつて居た。勿論「刑狀持ちの若い娘」と云ふ言葉が果てしもない美しい聯想を生んで、氣紛れな彼の好奇心を唆かしたには違ひなからうが、その外にも何か秘密な、極めて秘密な或る原因が彼の胸中に潜んで居たらしかつた。それに又、今夜は家を出る時から何か新し

い歡樂が自分を待ち構へて居るやうな氣がしたのに、ブラリと帝劇へやつて來て偶然にも斯かる話を耳にしたと云ふ因縁じみた事情が、大いに彼の迷信を煽つたにも相違なからう。

「さう極まつたら早い方がいゝんだけれど、何日頃女に會ひに來るね。」

「今夜此れから會ひに行かう。」

「ヘッ、そいつはまことに有り難い。どう云ふ風の吹き廻しか、今夜は非常にうまい話にばかり有り附くぞ。――それぢや前祝ひにモウ一杯引つ掛けて行くかな。」

松村は眞黑な顏をつや〳〵と光らせて、酒毒の爲めに始終顫へて居る、鐵火箸のやうに痩せた右手の指をわな〳〵させながら、丁度五杯目のコップを乾した。

折柄舞臺には幕が下りたと見えて、多勢の觀客が諸方のドーアを一齊に排して、ぞろぞろと細長い廊下に雪崩を打つて充滿した。白人とも黑人とも判らない美しい衣裳の婦人達が、馬鹿ではあるが禮儀作法をよく心得て居るらしい男どもと入り交つて、露臺の椅子や、休憩室のソオファや、階段の中途などに花やかな話聲をさゞめかせて居る幕間の光景は、女優諸君の喜劇よりも何よりも最も「人生の歡び」を表現して居る藝術的な場面のやうに思はれる。今迄靜かであつた食堂も俄かに沸き返る混雜を呈して、白く濛々たる煙草の煙が電燈の周圍へ海藻のたゞよふやうな大圈を描き、蒸し暑く濁つた場内の空氣に壁畫の美女も汗を掻くかと疑はれる。

「おいおい、彼處に立つて居る女を見給へ。何者だか判らないか、あの眞紅な唇はいやに男を惹き付けるぢやないか。」

から云つて松村が酔眼を見据ゑながら顋で指したところに、恰も食堂の内部を覗き込むやうにして入口の傍の廊下に佇んで居る艶麗な婦人があつた。多勢の男女の右往左往する流れのなかに、彼の女は身動きもしないで大理石の柱に凭れたまゝ、毒ある菌の人知れず生え出てた如く爍然として立ち停まつて居る。袷には遅く羅衣(うすもの)には早い初夏の夜の水際立つた派手な衣裳と、飴のやうにしつとりと粘(ねば)り固まつて居る束髪の毛の豊かな爲めに、年は非常に若く見えるが實際は二十五六を下らないらしい。なよ〳〵と痩せた背恰好と、高く細い鼻つきと、心持ち肉の落ちた兩頰の割合ひに少しも淋しく思はれないのは、恐ろしく表情に富んだ、子供のやうに愛くるしい大きな瞳の力であらう。さうして、その瞳よりも更に非凡な魔力を以て、顔全體に不思議な潤ほひを及ばして居るのは、誰が見ても直ぐに氣が付く異常に眞紅な厚味のある唇であつた。若しも其の莓色をした、刺身(さしみ)の魚肉の一塊にも喩へつべき紅い唇がなかつたならば、恐らく純白過ぎる皮膚の色つやが生氣を失つて石膏のやうに見えたであらう。

「成る程、大した美人でもなささうだが、服裝(なり)がいゝせゐか妙に惹き付ける所があるね。——あの女と君が今話をした女と、器量は孰方がいゝと思ふ？」

饒太郎は廊下の方にそつと眄を與へながら云つた。

「左樣さ、此の女の方が品はあるけれど、妖艶と云ふ點になつたら僕の話の女の方が遙かに立ち優つて居ると思ふね。何しろ年が違ふから體も此れよりはズッと水々して居らあね。それに君、此の女はいづれ相當な身分の婦人らしいけれど、いやに澄まし込んで居るぢやないか。」

「うん、大さう澄まし込んで居る。……けれども僕は澄ました女が大好きだよ。凡べて目鼻立ちの整つた

顏は濟まして込んで居る時が一番立派で鮮明て、實際は馬鹿な女てあつても、始終何か知ら考へに耽つて居るやうに見える。…見給へ、あの女にしてもﾞ濟まし込んで居る爲めに、こぼれるやうな眼元の愛嬌と神秘的な唇の色が一番引き立つて見えるぢやないか。」

女は二人の樣子に心付いたのか、ちらりと饒太郎の横顏を一瞥して、やがて徐かに群衆の中に歩を移しつゝ姿を隱した。丁度その時次ぎの幕が始まらうとする知らせの鈴が鳴り響いたので、廊下や食堂の人々は又少しづゝ潮の退くやうに舞臺の方へ動き始めた。

一人は色慾のため一人は金錢の爲め、お互ひにもう芝居なんか見たくもなくなつて居る饒太郎と松村とは、勘定を濟ませてテエブルから立ち上ると、舞臺の方を尻目にかけながら威勢よく玄關へ下りて行つた。

「おい、此れから直ぐに日比谷の四つ角へ出て自働車へ乘つて行かう。」

「よし、僕は戸外で待つて居る。」

こんな事を囁き合つて、洋服の松村は一と足先に正面の出口の方へ歩み去つた。

彼の姿が全く見えなくなつた時、饒太郎は極めて露骨な胡散臭い眼つきをして、盗賊の如く自分の周圍を見廻したが、晝を欺く明るい廊下には既に一人の客も徘徊して居なかつた。彼はほッと安心したやうに、パナマの帽子の鍔を引き下げ外套の襟を立てゝ、稍急ぎ足に南側の下足口へ廻らうとする。

其の刹那、今しも彼が曲り角の化粧室の前を通り過ぎようとすると、其處の扉を細目に開いて靜かに室内から呼び止めた者がある。

「泉さん、お待ちなさい。」
と、落ち着き拂つた、低い調子の女の聲に彼はぴたりと立ち停まつたが、女は再び、「話があるから、まあ此の中へお這入なさい。」
と、今度はやゝ激しい語勢で、扉の隙から人形のやうな手をさし伸べつゝ外套の袖を握るや否や、いきなりぐいぐいと室の内部へ引き擦り込んだ。
二人は扉を固く締めて、劇場の空氣から掛け離れた狹隘な四壁の中に、互ひにひつそりと寄り添うて立つて居る自分達ちの姿を鏡の面に認めたのである。
「あなた、今夜何處へいらッしやるお積りなの？」
から云つて詰るやうに打ち囁いたのは、先の紅い唇の女であつた。
「……あなたは先食堂であたしを見たに違ひないでせう。それだのに何故空惚けて居らッしやるの？」
「いゝえ、そんな覺えはありません。私の方ぢや全く氣が付きませんでした。」
「嘘つき！」
女はか弱い力でどんと男の肩をついた。
「全く嘘ぢやないんです。……あなたの方で氣が付いて居らしつたら、なぜ聲をかけて下さいません？」
「ごまかしても駄目よ〳〵。」焦れッたさうに外套の釦をいぢくり廻して、だゞッ兒の如く頭を振りながら、女は瞳をヂッと男の胸のあたりに注いて云つた。「……あたしの方から聲を掛けようと思つても、あんな嫌らしい、人相の惡いお連れが居た日には、どうする事も出來やしないぢやありませんか。そのく

らぬ事は知つて居ながら、あなたはわざと空惚けて居らしつたのね。第一此の間から何本手紙を差し上げても忙しいとばかり書いて寄越したのに、どうしてこんなに閑があるの？今夜はうんといぢめて上げるからあたしと一緒に來るんですよ。いやだと云つても許さなくつてよ。」

彼の女の言葉は火の雨が降るやうに熱した舌先から迸つた。饒太郎は稍暫く驚き惑うて呆然として居たが、やがて愛想のよい作り笑ひと共に女の右手の指先を捕へて、柔軟な腕を縄の如く打ち振りながら、

「まあ兎ゝ角もそんなに怒らないで下さいよ。ねえ蘭子さん、……實は今夜はあの男と約束があつて是非とも或る所へ行かなきやならないんです。その代り明日の晩、必ず何處かて落ち合ふ事にしようぢやありませんか。」

「それぢやどうしても今夜は來られないの？」

「えゝ、」

「どうしても？」

「えゝ、……殘念ですが何しろ約束があるんですから、……」

「あなた、此れてもいや？」

いきなり女は飛鳥の如く躍り上つて男の耳朶を引き裂かんばかりに摑んだ。さうして顔全體をぐいぐいと自分の胸の邊へ引き寄せたかと思ふと、いつの間にか右手に隱し持つて居たピストルを其の蟀谷へ突き付けたまゝ、

「さあ來るか來ないか返辭をして頂戴な。」

から云つて、二三度激しくこづき廻したが、眞劍なのか惡戯なのか、其の唇には腕白盛りの子供のやうな無邪氣な微笑が漂うて居た。

「泉さん、今夜はほんたうに決心して居るんですから、いつもの冗談とは譯が違ふんです。もうこの頃のあなたの本心は大概解つて居るのだから、どうかした拍子には全くあなたを殺さないとも限らなくつてよ。今にもたッた一と打ちてあなたの命は頂けるのよ。」

「御免なさい、御免なさい。」饒太郎は急に意氣地のない泣き聲を出して顏を歪めながら云つた。「もうかうなつちや仕方がないからあなたの仰せ通りになります。しかし戸外の友達に斷つて來る間、ちよつと待つて居て下さいませんか。」

「そんな事を云つて逃げようと云ふ氣なんでせう。どうせあたしも出るんだから一緒に何處までても附いて行くわ。」

饒太郎は袂の端をシッカリと摑まれたまゝ女の後から下足口を出た。時刻はもう八時過ぎてある。月のない、限なく晴れ渡つた莊嚴な空には、自分の立つて居る頭の眞上から遙かに神田日本橋の方へ無數の星が一面に散らばつて、視詰めて居ると眼が暈るやうにぎらぎらして居る。高い劇場の軒先から降注ぐシャンデリヤの光線を避けながら、女は尙も男を離さじと闇に紛れて寄り添うて居たが、その右の手に嵌められた二箇の指輪が痛い程自分の腕の肉に嚙み付いて居るのを男は感じた。

「どうしたんだい、ひどく待たせたぢやないか。」

二人の顏の間へ割り込むやうにして後ろから聲を掛けたのは松村であつた。

「うん、君濟まないが一と足先へ行つてくれ給へ。僕は用事が出來たから、どうしても今夜は遲くなるだらう。」

「成る程」と云つて、松村は二人の樣子を闇に透かして見較べて居たが、その間に何事をか考案したらしく、「先へ行けなら行つてもいゝが君にちよいと話があるんだ。ちよいと、ちよいとまあ此方へやつて來たまへ。」

　彼は鏡太郎の肩へ手を掛けて、女の手元から二三間引き離すと、やがてひそひそと詰りかゝつた。

「おいおい冗談ぢやないぜ。暗くつてよく判らないがあの女は先食堂で見た女ぢやないか。ほんたうに此れだから君はアテにならないと云ふんだ。」

「見附かつたら白狀するが、あの女がいつか君に話をしたRと云ふ未亡人さ。何と云つてもあの通り捉へて放さないんだから全く仕樣がないぢやないか。折角約束をしたのに申譯がないけれど、今夜の十二時か一時頃までには必ず行くからまあ了見して一と足先へ歸つてくれ給へ。」

「なあに一日や二日おくれたつて來てさへくれゝば差支へないんだが、君は實際その邊の所がアテにならないから嫌だと云ふのさ。いくら豪勢な言を云つたつて、君のは大概一時の氣紛れで直ぐに忘れて了ふんだからな。今夜は運よく捉へたから是非ともどうにかして貰ふ積りで居たら、又このまんま逃げられて了ふなんかあんまり氣の利かない話ぢやないか。」

「そりや大丈夫だよ。さうどうも信用がなくつちや困つちまふな。」

「信用のないのは當り前さ。金は有つても其の點になつたら君は僕よりアテにならない。」

「しかし今夜は特に大丈夫だよ。あの女にも實は飽き飽きしちまつたから、もう今夜限りてそろ／＼關係を絕たうかと思ふんだ。」

「絕たうと絕つまいとそんな事は君の勝手にするがいゝさ。……僕の話の女にしたつて、嫌なものなら無理にどうしろと云ふんぢやないんだが、もと／＼君の方から乘り氣になつて堅い約束をしたんぢやないか。」

「だから約束は履行するよ。たゞ今夜のところだけ見逃がしてくれろと賴むんだ。」

「よろしい。それぢや斯うしよう。僕は唯君が此のまゝどろんを極められるのが心配なんだから、此の際いくらか手附け金を貰つて置かう。さうだ、まあ默つて三十圓ばかり僕に預けて行き給へ。」

「三十圓の手附け金は少し高からう。先も取つて置きながら、……」

「少し高いかも知れないが、此れには手附け金以外にいろ／＼今夜の惚け賃や目こぼし料が這入つて居らあね。第一君藝者買ひをするんぢやなし、そんなに金を持つて居たつて使ひ道がないぢやないか。」

「兎に角半分に負けて置き給へ。」

「いけない、いけない。一文も負けられない。二百兩も持つて居ながらそんなにケチケチするもすぢやない。」

「あはゝゝゝ、どうも懷を見られて居るんだから仕方がないナ。」

饒太郎は洒々落々と笑つて見せたが、その實今度の三十圓と云ふ金は馬鹿に惜しくて溜らなかつた。折角大金を懷中したのにまだ此れぞと云ふ面白い目も見ないうちから、此奴の爲めに旣にムザムザ六十

圓と云ふものをしてやられる。ロクロク腹もくちくならないのに、いつの間にか二百五十圓の四分の一は消えてなくなつて了つて居る。何と云ふアッケない、興のさめた話だらう。――こんな愚痴ッぽい心細い考へがしみ〴〵と胸に湧いて來たが、金を受け取つた松村の方はホクホクしながら肩を聳やかして、

「此れさへ貰へばいつでもいゝから、まあ暇な時にやつて來給へ。君の來るまで女は大事に收(しま)つて置くから。」

と、そのまゝ其處を駈け出して電車に飛び乘りして了つた。

二十

築地の海軍大學から程遠くない河岸通りの、とある淋しい家の藏坐敷が、一年も前から二人の落ち合ふ場所になつて居る。厚い土藏の壁の割(しき)りが内部の話し聲を包み隱してくれるので、今日此の頃の宵の蒸し暑さを堪(こら)へても、二人はやつぱり安心な此の一室を擇ぶのである。

「姐ざん、お宅へも隨分御無沙汰しましたわね。近頃はあたしスッカリ此の人に嫌はれちまつて、かうやつて一緒に遊ぶ事なんかめつたになくなつちまつたのよ。」

桑の食卓を中に置いて床の間に近い上席の坐蒲團に、柔かい餅のかたまりでも落としたやうにぐつたりと崩折(くづを)れて居る女は、其の服裝に不似合な蓮葉な調子で懇意な女中の顔を見るとさも馴れ馴れしく話しかける。

「ほんたうに暫くお見えになりませんので、どう遊ばしたかと存じて居りました。――ねえ東(ひがし)さん、なん

ぽあなたは男が好いからッてそんなに方々て浮氣をなすつたら、今に此方の罰が中りますよ。」

「東と云ふのは此の家へ來る時の饒太郎の僞名なのてある。蘭子の方は僞名を用ゐる必要さへなく唯「此方」「此方」と呼ばれて居る。二人の坐敷へ出て來るのはいつても此の女中に定まつて居て、二十八九のわりに正直らしい人柄な女てあつた。彼の女は去年の夏時分から大概月に五六度づゝ二人の戀の目擊者になつて居るうち、いつしか女客に心を許されて隨分立ち入つた打ち明け話を聞かされたり、包むに餘る嬉しさや遣る瀨なさを洩らす可きたッた獨の友達となつて了つたのだが、それても未だに實際の二人の素情を知らないのてある。唯二人の應對の樣子から、女の方が男よりも地位の高い、富裕な境遇にあるらしく判斷して、その積りて心を着けて居る。畢竟此の女客と此の女中とは廣い東京の一廓て時々顏を合はせるばかり、所も知らず名も知らずに親兄弟さへゝ及びも付かぬ間柄となつたのてある。

「それに姐さん今夜は少し譯があるんだから、あたしの加勢をしてうんといぢめてやつて下さいな。……帝劇の廊下て打つかつて置きながら、そつと拔け出さうとするなんて、隨分人を馬鹿にして居る話てすもの。」

蘭子は耻も外聞もなく大きな瞳を潤ませて、怨めしさうにテエブルぐるみ體を男の方へにじり寄せる。

「まあ、東さん、ほんとにあなたは罰中りて居らッしやる。此方のやうなお美しい方に可愛がられて居らしッたら、何も不足はないぢやござんせんか。」

「不足どころか勿體ないと思つてるのに邪推なすつちやいけませんな。先の廊下の一件だッて、たゞ友達と先約があつただけの話なんて、全く以て色つぽい筋ぢやないんてすからそんな恐い顏をなさらない

てどうぞ一つ御勘辨を願ひたいもんです。ねえ姐さん、お前さんだつてたまには私の味方になつて、共々にお詫びをしておくんなさいナ。」

かう云つて饒太郎はペコペコと二三度輕くお辭儀をしながら頭を掻いた。此の幇間的な下劣極まる彼の態度は皮肉でも冗談でもなく、かねてから蘭子に伴はれて此の一室に會談する時は、必ず斯かる言葉遣ひをする習慣となつて了つたのである。正直を云ふと彼は文學を談じたり、高利貸しを手古摺らせたりするよりも、實は扇子をパチパチやつて女の前で追從輕薄な言葉を並べるのが、一番柄に篏まつて居るらしい。男に對してあのくらゐ傲慢な饒太郎は、美しい女に對すると不思議にも心の調子がガラリと變つて、別人のやうにかひがひしく輕口になる。さうして、一生懸命に女の機嫌氣褄を取つたり、道化た風をして笑はせたり、甘ッたれて小遣ひ錢を貰つたり、わざと怒られて頭を打たれたり、そんな眞似をする事が凡そ世界の如何なる境遇に置かれたよりも有り難いくらゐに、非常な愉快を感ずるのである。こんな下らない事がどうしても斯くも愉快なのか彼自身ですら說明出來ないが、何しろ其の愉快さ加減はちよいと名狀し難いもので、自分の小說が世の中に認められたり、或は自分が日本一の文豪になつたりしても、到底これ程の嬉しさは覺えまいかと想像される。從つて、彼が僞らざる自己の本性を表はして最も眞面目に努力するのは、創作の時でも讀書の時でもなく今夜のやうな場合がそれなのである。彼の解釋する所に依れば、「幇間」といふ職業に從事して居る人々は、決して世人の考へるやうな卑屈な根性を持つ者ではない。彼等は利益を得んが爲め、若しくは嫖客を墮落せしめんが爲めに追從輕薄を試みるのではなく、全く饒太郎と同じやうに已むに已まれぬ愉快に驅られてお世辭を云つたり駄洒落をなら

べたり、ステヽコを踊つたり、有頂天になつて浮かれ廻る。その行爲の結果に就いての善惡や利害得失などは勿論始めから眼中にない。彼等の心事は無邪氣てこそあれ、少しも卑屈てはないのてある。饒太郎も生強ひに高等な敎育を受けたりしなかつたら、自然のまヽの性癖を發揮して幇間になつて居るかも知れなかつた。惜しい事に彼は幼少の時分から僅ばかりの才智が發達して居た爲め文學に浮き身を窶して、「多分己のやうなのがジニアスと云ふのだらう。」などヽ恐ろしく慢心した結果無闇矢鱈と人を馬鹿にするやうになつたが、流石に性分は爭はれないもので、惚れた女と二人きりになつて了へば憶面もなく下劣な調子を曝露するのてある。時々は自分ても淺ましいと心付きながら、此の坐敷へ這入ると知らず識らず釣り込まれて、いつか夢中になつて了ふ。

「女は女同士ッて云ふから、姐さんだつて此方の味方に附いてくれるわ。」男のすヽめる杯を二三度飮み干して居るうちに、蘭子の眼元はほんのりと櫻色に染まつて、汗に泥んだ前髮の毛のべつとりと額に附着して居るのを拂ひ除けつつ、美しい唇から暑苦しさうな腐つた息を吐きつヽける。

「……姐さんの前だけれどあたしや此の人の爲めには隨分苦勞させられたのよ。女だてらに恐ろしい墮落をしてこんな厚かましい人間になつて了つたのも、もとは云へばみんな此の人のお蔭なのよ。着物が着たいと云へば拵へてやるし、お金が欲しいと云へば出してやるし、此の人の事と云へばあたしや何も云ふ事を聞いてやつたのに、散々人を欺し拔いて今おやめつたに寄り附きもしない！モウあたしや懲り懲りしたから、今度からいくらせびつたつてお金なんか一文も出してやらない積りなの。」

「ほんたうに其れが宜しうございますとも。なあにあなた、いくら面倒を見てお遣り遊ばしても有り難

いとも思はなんぢや全く無駄でございますよ。その上着物なんぞが出來れば此れ幸ひにして、男が好い所へ又一段とめかし込んで、方々の女をたらしに出掛けるに極まつて居りますあね。」

嬉しいにつけ腹立たしいにつけ、男の器量を褒めてさへ居れば繭子の機嫌を損じない事を、女中はすつかり呑み込んで居た。

「アヽ情けないナ、情けないナ。お前さんまでが一緒になつて焚き附けたんぢや、私の寃罪の晴れる時がありやしませんぜ。かう申すと嘘のやうですが、全く私や自分程の果報者はないと思つてるんて、かりそめにもあなたの御恩を忘れた事なんかありやしませんよ。それこそほんとに、寢る時だつて御宅の方へ足を向けた事はないくらゐなんです。」

「まあ何て云ふそら〳〵しい事を云ふんでせう。此れだから、大概の女が欺されて了ふのも無理はないぢやありませんか。」

「全くでございますよ。あなたにしても東さんのやうな好い男に惚れたのが因果とあきらめて、少しぐらゐの氣苦勞は辛抱なさるのが當り前かも知れませんですよ。」

「えへヽヽヽ、どうも姐さんの口のうまいこと!」と云ひながら、饒太郎はぞくりぞくりと肩を搖す振つて、「さう仰つしやられるといくら鐵面皮の私でもちいッとばかり恐縮します。いゝえ、正直のお話が、そりや私のやうな男にだつて隨分惚れ手のない事はありませんが、ほんとに私の方からも心の底から焦がれ拔いて、死んでもいゝと迄思つて居るのは全く此處に一人しかないんです。しかし何にしろ此方が一文なしの貧乏書生と來て居るのに、先方の身分があまり立派過ぎて、私には少し不釣り合ひだもんだ

から、どうも萬事に氣怯れがして勢ひ控へ目になるんですね。云はば私の體と云ふものは金で買はれて居るのも同然なんて、いくらヤキモキしたところでどうせ一緒になれるんぢやなし、本氣になるだけ損だと思つて、此れてもぢいッと我慢をしてあきらめて居るんてさあね。其處を察しないて薄情だとか浮氣だとか仰つしやるなあ、實際聞えない話てすよ。」

「ああ云へば斯う云ふてあなたのやうな口の達者な人間はありやしない。薄情だか薄情てないかあたしの方にはちやんと覺えがあるんてすよ。この浮氣者め!」蘭子はかう云つて、手の甲て輕く男の横顏を刷いたが、丸々と膨れた頰の肉が思ひの外にも素晴らしい音を立てゝぴたりと鳴つた。

「あ痛い。」と、饒太郎は頭を衝かれた龜の子のやうに首をちゞめて、わざと仰山に頰の痺れを撫て廻す。「二た言目にはピタリと來るんだから溜らないな。私が口が達者な代りに、あなたは馬鹿に手が早いぢやありませんか。」

「おほゝゝゝ。まあお二人さんて喧嘩なりと何なりと、たんとおふざけなさいまし。」

おだてゝ置けばいゝ氣になつて、貴婦人に買はれて居る役者か何かの心持ちて際限もなく得意がつて居る饒太郎の氣障さ加減に、女中も內々恐れをなしたのか、こんな捨て臺辭を殘して早々に出つて行つて了ふ。

「ねえ泉さん、あたしや今日はほんたうに怒つて居るのよ。」二人きりになつて了ふと、待ち構へて居たやうに蘭子は云つた。

「……今夜友達と一緒に行かうとしたのは何處なんだか、白狀してお了ひなさいな。それを聞かしてく

れないうちは、今夜はどうしても歸さないから。」

「弱りましたなあ！　先も云つた通り全く噓ぢやないんですがなあ。此れ程可愛がつて頂きながら、そんな不心得が出來るかどうか、まあ私の身になつて考へても御覽なさいナ。」

「そんな出放題を云つたつて、あたしの方にやたしかな證據があるんだから。」

「證據ですつて？　ジロ、冗談仰つしやつちやいけません。」

「此處に證據があるぢやありませんか。」何と思つたか蘭子は油斷を窺つて片手を男の懷ろに捻ぢ込んだが、素早く紙入れを引き撈り出すと、其れを倒さに振つて見ながら、ばらばらと落ち散つた紙幣の束を尻目にかけて、「ねえ泉さん、このお金は一體誰から貰つて來たの？」と、少しく唇を顫はせて嚴然たる調子で云つた。

「そ、そ、そいつは何も胡亂な金ぢやございませんよ。」鏡太郎はぎくりとして、周章狼狽の樣子おかしく頻りに頭を撫で廻した。「可哀さうにあなた！　何ぼ私がしがない渡世をして居るからつて、小說家と銘を打つ以上はたまには自分で儲ける事もありますさあね。」

「いゝえいくら辯解したつてあたしにはちやんと解つて居ます。默つて居ればいゝ氣になつて小說家だとは聞いて呆れる。成る程世間ではあなたをえらい文學者だと信じて居るかも知れないけれど、失禮ながらあたしの眼からは三文の値打ちもありはしない。あなたが斯うやつて小遣ひ錢にも困らずに毎日のらくらして居られるのは一體誰のお蔭なの？　今迄人の厄介にならないで、自分の働きで一と月でも暮らせた事があると思ふの？」

「ま、さう仰つしやられると一言もございませんが、此の金ばかりは全く、‥‥」
「だつてあなたに此れだけのお金が稼げる筈はないぢやありませんか。それとも自分で儲けたと云ふなら、何處の本屋へ何を書いたんだか敎へて頂戴。」
「實はまだ書かないんですが、事情を話して前借りをして來たんで、‥‥」
「あなたなんぞにお金を借すやうな迂濶な本屋はありはしないわ。あなたに借すのは溝へ捨てるのも同然ぢやなくつて?」
「どうなすつたんです蘭子さん、今夜はひどく手酷しいぢやございませんか。‥‥お腹立ちは御尤もですが、何も彼も私が惡いんですから、モウ此の通り詫ります。此の通り此の通り。」饒太郎額をぴつたり疊へ擦りつけて、「此の通り兩手を合はせて拜んで居りますから、どうか一つ、御勘辨を願ひます。」
その時女は急に起き上つて据わり直すと、合掌して居る男の兩手を引き放させて、漸うに面を擡げたその目鼻立ちをうつとりと、さも惚れ惚れと眺め入りつゝ、今迄とは打つて變つた優しい調子に聲を潤ませて、訴へるやうに掻き口說いた。「あなた勘忍して下さいよ。腹立ち紛れに云ひ過ぎたかも知れないけれど、あたしは全くあなたを下らない人間だと思つて居ますの。怠け者で、うそつきで、何一つ取りゑのない人間に違ひないと知つて居ながら、どうしてもあなたを忘れる事が出來なくなつて了つたんですの。あなたが空々しいおべつかを使つて、へいへいするのがみんな鼻先のお世辭だと知りつゝ、それが可愛くて可愛くて溜らないんだから、あたしも餘程どうかして居る。‥‥ねえ泉さん、此れ程に迷はされた人間を可哀さうだと思つたら、後生だから浮氣を止めて一生あたしを見捨てないで下さいな。さうして、

此れからは幇間のやうな眞似をしないて、何卒立派に男らしく振る舞つて下さいまし。今迄のやうに頭を下げずに命令してさへ下すつたら、お金でも着物でもあたしの力の及ぶ限りはどんな事でもして上げるわ。あなたを玩具同然に取り扱ふ事は、もうあたしには勿體なくつて出來なくなつて了ひましたから。…‥」

女の言葉には初戀の惱みを語る生娘のそれのやうに、しみ〴〵とした眞情が溢れて居たにも拘らず、優しくされゝばされる程いよ〳〵饒太郎は恐れ入つて、

「さう仰つしやられると、今度は私の方でどうしていゝか解らなくなるぢやござんせんか。私はもうあなたの爲めなら、玩具にされようと、幇間にならうと、犬猫同樣に取り扱はれようと結句その方が本望なんでございますよ。」

と、いつ迄立つても同じ文句を繰り返すばかりであつた。

十一時が鳴ると女は早速身仕度を整へて、「殘りはあなたに上げるから、いゝやうにして頂戴な。」と、四五枚の十圓札を男に渡して一と足先へ歸つて行つた。蒸し暑い夜の空氣に饒太郎は一寸の身動きもならない程疲れ切つて大儀さうにぽつねんと臥そべつたまゝ、例の松村との約束を履行する元氣さへなくなつて居た。

「今夜は此の內へ泊まるとして、彼れは明日の事にしよう。まだ金は澤山あるから大丈夫だ。」

獨りてそんなことを思ひながら、彼は頻りに睡りを誘ふ可く眼を塞いだが、却つて容易に眠られないていろ〳〵の考へが頭の中に組んづ解れつし始めた。——

一體饒太郎は蘭子と彼自身との關係をどう解釋して居るのだらう。「飽き飽きしたからそろ〳〵手を切らうと思つて居る。」と、彼は先松村に口走つたが、果して飽き飽きして居るか知らん。それ程嫌な女ならば、何も折角の先約を破棄してわざ〳〵こんな所まで連れて來られる必要はなささうである。さうかと云つて、今夜のやうに彼の女が眞實を吐露して見せても、相變らず平氣の平三て輕口を叩いて居る樣子から推測すれば決して眞面目に戀ひ慕つては居ないらしい。或は單純な慾得づくて、いくらかの金になる所から云ふなり次第に身を任せて居るのだらうか。——ちよいと考へると、此の判斷は一番正鵠に庶幾いやうてあるが、彼と雖も文學者の片割れてある以上、美醜の趣味を度外視してまで金を貪らうとする勇氣はない。兎に角あのやうに附き合つて居るからは、多少なりとも蘭子の美貌を認めて居る事は確かてある。美貌を認めて居る上は、勿論相當の快感を抱いて居る事も爭はれない。之を要するに其の快感の如何なる程度まで達して居るかゞ問題なのだが、此の點になると本人の饒太郎にも實際ハツキリした返辭は出來ないのである。よくよく落ち着いて、前後の心理狀態を詳らかに反省して、さま〴〵に自問自答して見ると、隨分惚れて居るやうてもあり、また恐ろしく冷淡なやうてもあり、我ながらさつぱり自分の心をつき止める事が出來ない。けれども唯、今夜の如く彼の女が弱々しい風を見せて切ない心を打ち明けようとする場合には、彼はいつでも折角の快感が打ち毀されるやうな氣がして、一種の不滿足を覺える事だけは明かてあつた。畢竟それが戀愛てあるかないかは別として、彼は彼の女から幇間同

樣の待遇を受けて居なければ、何等の愉快をも感じないのであつた。

此の病的な彼の性癖に就いては、もつと根本に立ち入つて今少しく詳細に說明する必要があらう。尤も饒太郎自身は、此の性癖をひどく淺ましい、己れ獨りが天から授かつた不祥事であるかのやうに悲觀して、今迄めつたに人に洩らした事もなく、極く極く秘密に押し隱して居るが、何もそれ程にする必要はない。つまり正直に簡單に打ち明けて了へば、彼は生來の完全な立派な、さうして頗る猛烈な Masochisten なのである。――即ち彼は啻に異性から輕蔑される事を喜ぶのみならず、出來るだけ冷酷な殘忍な取り扱ひを受けて、寧ろ激烈な肉體的の痛苦を與へて貰ふ事を、人生最大の歡樂として生きて居る人間なのである。

斯かる奇怪な傾向が自分の頭に巣喰つて居る事をおぼろげながら自覺したのは、饒太郎がまだ六つか七つの幼年時分で、ろくろく西も東も解らない頃であつた。――此れに依つて見ると、恐らくその性癖は彼の生れない以前から、運命付けられて居たのかも知れない。――或る日彼は母に連れられて、歌舞伎座へ行つた事がある。もう二十四五年も前の話だから、もとよりハツキリと記憶して居る筈はないが、何でも一番目の出し物は、鎌倉時代を材料にした團十郎の活歷であつたやうに思ふ。さうして、彼がたつた一つ未だにまざ〳〵と覺えて居るのは、福助――今の歌右衛門の實朝が、鶴が岡八幡の社前で五代目の公曉に斬り殺れさる刹那の光景と、其の時其れを見物して居た彼自身の心持ちである。幼い、腕白盛りの男の兒の情として、若しも自分が芝居をするならば誰しも實朝よりは公曉に扮したいと考へるのが當然であるのに、何故か饒太郎は五代目よりも五代目に殺される福助の方が非常に羨しく感ぜられた。

彼は私かに自分の學校朋輩のうちから、腕力の強い容貌の美しい或る友達を擇び出して、それが公曉の役を勤め、自分は福助と同じく女のやうな優雅な實朝卿の姿にいでたち、此の芝居の通りに殺されて首を搔き斬られる光景を想像すると、今迄に嘗て經驗した事のない快感が、一種不思議な不可抗力を以て胸の奥にどよめくのを覺えた。それが何故に愉快なのか、その感情が抑も何處から湧いて來るのか、彼には一切不明であつたが、兎に角自分の力では到底制し切れない自分以外の或る者に支配されて居るやうな氣がして、少年の彼はその性癖の指揮するまゝに盲從するより外はなかつた。その後暫く饒太郎は芝居の事を忘れて了つて、友達の間にも負けず嫌ひの餓鬼大將として恐がられる程活潑になつたが、丁度十一二歳の頃から例の傾向が再び頭の中に芽を吹き始めた。さうして今度は以前よりももつと明瞭な形を取つて、朝に晩に彼の肉體を刺戟し腦髓を脅やかした。彼はもう自分が慘酷にいぢめられる聯想なしには生きて行く事が出來なくなつて、始終うとうとと荒唐無稽な芝居の筋書を胸に描いては人知れず恍惚（エクスタシイ）の境に入つた。その甘い聯想の世界に於いて、彼の崇拜の的となり、思ふがまゝに彼を虐待し鞭撻する人間の中には、種々雜多な階級の少年少女が含まれて居た。或る時は同級生の美少年が白井權八になつて、雲助に扮して居る彼の體へ馬乘りになり、唯一と衝きに喉頸を突き徹す光景もあつた。或る時は隣りの家の「お芳（よう）ちやん」と云ふ十四五になる娘のお供をして遠い無人島に流された揚句、一生自分は忠實な奴隷となつて娘の頤便に甘んじつゝ侍（かしづ）いて居る場面もあつた。又或る時は小間使ひのおせんの爲めに絞め殺されて、眼球を抉られ四肢を縛せられ、死體となつて斃れて居る自分の姿を想像した。初めのうちこそ身分の高い、美しい男女でなければ崇拜する氣にならなかつたが、しまひにはどうかすると

下女だの子僧だのが馬鹿に氣に入つて、さう云ふ下賤な人間にいぢめられる方が却つて餘計面白いやうにもなつた。

しかし、悲しい事に此れ程愉快な心持ちを解する者が、彼を除いて世の中には一人も居ないやうであつた。彼はいつまで立つても其の性癖を人に打ち明けて、平生の聯想を此の世に實現する事は出來なかつた。たゞ折々、芝居ごつこをする時などに自分が進んで殺され役になつたりして、僅かに淡い刺戟を喜んで居た。爾來饒太郎は小學校を卒業して、中學から高等學校、大學と進んで來たが年を經るまゝに此の傾向はますます著しく、だんだん彼の頭の働きの全部を占領するやうになつた。子供の時代には男女の區別なく崇拜の的にしたものが、大人になるに從つて女性ばかりを尊敬するやうになつただけの相違であつた。

同性の愛をすてゝ異性を戀ひしなければならなくなつたと云ふ事は、彼に取つてもう一つの悲しい矛盾であつた。なぜと云ふのに、金で買はれる女はもとより、たとへ白人の女でも、自分に對して眞の愛情を抱くやうになればなる程、いくら戀人の頼みであつても、いとしい男を慘酷に取り扱うなどゝは思ひも寄らない話だからである。

「どうぞ私をひどい目に遇はせて下さい。蹴らうと擲らうとふん縛らうと勝手にして、死ぬやうな目に遇はせて下さい。」

醉に紛れて彼は屢〻そんな事を頼んで見たが、可笑しがつたり氣味惡がつたりして眞に受ける者は一人もなく、折角愛し合つて居た女までも興を覺まして振り棄てゝ了ふ者が多かつた。彼は見す〳〵女か

ら輕蔑されると知りながら、どうしてもその性癖を統制する事が出來ないばかりに、大事な戀仲を滅茶々々にする事がたび／＼あつた。

「どうして己は斯う云ふ因果な性質に生れついたのだらう。己のやうな哀れな男がまたと世間にあるだらうか。」

彼は幾度となくかう嘆息した。

然るに、忘れもしない大學の文科の一年に居た折の事、彼はふとした機會からクラフトエビングの著書を繙いたのである。その時の鐃太郎の驚愕と喜悅と昂奮とはどのくらゐであつたらうか？　彼は自分と同じ人間の手になる書籍と云ふ物から、これ程恐ろしい、これ程力強いショックを受けたのは實にその時が始めてであつた。彼はペエヂを繰りながら讀んで行くうちに激しい身慄ひが體中に瀰漫するのを禁じ得なかつた。

何と云ふ物凄い、無氣味な事であらう！　さうして又、何と云ふなつかしい事であらう！　此の書籍の敎へる所に依れば、彼が今迄胸底深く隱しに隱して居た秘密な快樂を彼と同樣に感じつゝある者が、世界の到る所に何千人何萬人も居るのである！　それ等の人々のコンフェッションや、四方の國々の prostitute の報告を讀めば、彼等がどのくらゐ細かい點まで全然鐃太郎と同じやうな聯想に耽り、同じやうな矛盾に惱まされて居るかと云ふ事は、怪しくもまざまざと曝露されて居る。若しも此の世の中に自分と同一の容貌を持ち、同一の聲音を持ち、同一の服裝をした人間がたとへ一人でも現はれたならば、誰しも吃驚して、恐らくは竦然として卒倒しないものはないであらう。鐃太郎の驚愕と恐怖とはまさに

其れに近いものであつた。彼は其の音の到る處に自分の影を見、呻きを聞いた。知らないうちに自分の魂がいろ〳〵の人種に姿を換へて、世界の方々で生活して居るやうに感じた。

けれども亦、之と反對に一種の安心と喜悦と慰藉とが彼の心に生れ出たのも否定し難い事實であつた。彼はルウソオ、ボオドレエルを始めとして、自分と同じ Masochism の煩惱に囚はれた多くの天才者のある事を知つた。少しく嚴密な意味で調べたならば、ダンテ、シエクスピア、ゲエテの作物にも著しくその傾向のある事を教へられた。彼は文學者として世に立つのに、自分の性癖が少しも妨げにならないばかりか、自分は Masochisten の藝術家として立つより外、此の世に生きる術のない事を悟つた。——實際彼は始めから何等の喧傳す可き主義も哲學もなく、たゞ Masochisten であるが故に、他に使ひ道のない人間であるが故に今日の職業を擇んだのである。それだから彼の所謂文學なるものは、奇怪なる彼の性癖に基因する病的な快樂の記錄に過ぎない。彼の作物は彼に取つて絕對の價値を有するかも知れないが、一般の讀者からは何等の意味をも發見する事が出來ない。

彼がクラフトエビングの著書を讀んでもう一つ感動した事は、西洋の女性——殊に Prostitute の嫖客に接する態度がいかにも活潑で刺戟的で、微温的な婦人の夢想だもし難い强烈な色彩と、複雜な手段と進步した仕組みの下に、いろ〳〵の形式でありとあらゆる歡樂の注文に應ぜんとする露骨な氣風の存する事であつた。一體饒太郎に限らず、多くの Masochisten は殘酷な獸性を具備する婦人に邂逅する事を望んで居るのだが、そのやうな婦人は實際世の中に存在して居る筈はないので、つまり、成る可く鐵面皮な、利慾の爲めにはいかなる行爲も辭しないやうな Prostitute を手なづけた上、自分に對して能ふ限り

殘酷な擧動を演じてくれるやうに金を與へて注文するより外はないのである。然るに西洋の Masochisten はかゝる注文に應じるやうな Prostitute を搜し出すのに必ずしも困難を感じないらしい。維納でも巴里でも伯林でも歐洲の著名な大都の夜の巷に色を鬻ぐ娼婦の間には、Boot-fetichisno とか Flagellation とか、その外さま〴〵の Masochism に關する惡戲が、物好きな色戀の一種の形式として普通に行はれて居るらしく思はれる。之に反して不幸なのは日本の Masochisten である。東京に生れて東京に育つた饒太郎は、此の都の暗黑面の隅々までも可なり詳細に通曉して居る積りであるが、いまだいかなる階級の娼婦の間にも、Masochism を了解し、若しくは男の要求にまかせて殘忍な惡戲を演ぜんとする程の豪膽なる女を見ない。餘分な金を與へて賴んでも、「そんな恐ろしい事は出來ない。」と云つて、身慄ひをして逃げて了ふ。殊に彼等 Masochisten の要求する所は、精神的の苦痛よりも、寧ろ肉體上の桎梏を與へて貰ひたいのであるから、到底氣の弱い日本の女子の應じ難い所である。まだしも華魁と云ふものが極度に尊敬せられて居た德川時代に生れたならば、或は今少しアブノルマルな歡樂を翫味する事が出來たかも知れない。斯やうな始末で、饒太郎は自分が現在の日本に生れた事を時々後悔するのであつた。彼は纔かに自分の想像を小說に作つて、心密かに恍惚とするより外はなかつたが、勿論そのやうな手ぬるい刺戟でいつ迄も滿足すべき筈はない。何とかして一度はその想像を實際に經驗して見たい。美しい婦人の手に依つてならば、どのやうな殘忍な苦惱を享けても、或は人知れず殺されて了つても差支へないから、一生のうちに一度此の肉體を虐げて貰ひたい。そんな希望が年を經るまゝにだんだん急激になつて、しまひには彼の頭腦へ一杯に蔓つて了ひ、外の事には一切何等の趣味も緊張も感じないやうになつ

た。書物を讀んでも面白くない。芝居を見ても氣乘りがしない。藝者を買つても興味が起らない。うまい物を喰べても、美しい衣服を纏つても、常に物足らない心持ちが附き添うて居て、少しも充實した生の愉快に衝きあたる事が出來ない。彼はもう何をする元氣もなくなつて、せめてもの心遣りに「姐妃のお百」だの「あたりやおきん」だの「高橋おてん」だのと云ふ講談本を讀んで見たり、宮戶座や蓬萊座や、六區の活動寫動館などで演ずる俗惡な毒婦の芝居をこつそりと見に行つたり、そんな事をして自らます〳〵病的な方面へ墜落して行つた。

　そのうちに彼はいよ〳〵矢も楯もたまらないやうになつた。いつ迄もくよくよと頭の中で荒唐な妄想を描きながら、そのやうな女の出現するのを待つて居たところで、到底効のない話である。やつぱり此方から進んで、自分の氣に適つた女を搜し出して、次第々々に豪膽な、殘忍な性質を具備するやうに致育するのが一番捷徑であると考へ始めた。――女と云ふものは表面は非常に柔順に、非常にノルマルに見えて居るが、その實男よりも遙に野獸的な本性を持つて居るに違ひない。從つて彼等は外界から少しづゝ長い間に巧妙に指導されゝば案外容易く墜落して、今迄自分自身ですら意識して居なかつた猛惡な特徵を曝露するかも知れない。――と、饒太郎は自分の都合のいゝやうに解釋して、そろそろ實行に取りかゝつた。

　第一に彼は自分の相手とす可き女を如何なる階級に求めたらいゝかと云ふ事に就いて大いに迷つた。第一に、極めて無耻な階級の愚鈍な女を捉へて、自分の要求通りの事を自由自在に實行させながら、だんだん其れに興味を覺えさせて行くのも一法であるが、一面に虛榮心の强い饒太郎は實際此れを試驗し

て見ると、流石にやつぱり自己悔辱の淺ましさを感ぜずには居られなかつた。教育がない迄もせめて悧巧な、上品でない迄も素性の判つた女であつて、誰に見せても耻かしくないやうな美貌を持つて居なければ、折角教育したところで面白味がない。結局彼の希望する所は相應な價値のある女と戀に落ちて、甘い言葉で媚び諂ひながら、知らず識らずの間に相手の性格を非常識に、獰猛に、タイラニカルに變化させて行く事であつた。

斯う云ふ彼の計畫がなり立つた際に、首尾よく彼の網の中へ這入つて來たのが蘭子である。丁度今から一年ばかり前饒太郎が創作の稿を書き上げる爲め或る湘南の溫泉地に籠居した時、蘭子は一人の年の若い小間使ひを伴れて同じ旅館の隣りの部屋に逗留して居た。二人は間もなく懇意になつて、女は男の文學者である事を知り、男は女が某富豪の未亡人である事を知つた。初め女はこまやかな情愛を押し包んで居る、つゝましやかな、寧ろ陰鬱な婦人らしく見受けられたので、その容貌の秀でゝ居る割り合ひには男の心を惹き附けなかつたが、ふとした機會から饒太郎は自分が此の女に深くも戀ひ慕はれて居る事を知覺して、やがて自分の方からも思ひ憧れるやうになつた。さうして、二人は東京へ歸つて來た後までも密かに交際を繼續しつゝ今日に及んだのである。

蘭子は饒太郎と接近するまでに、良人と死に別れて既に二年あまりを經過して居たので、金に不自由のないところから藝人などとも內々不身持ちな噂を立てられ、見かけよりは思ひの外墮落して居たらしかつた。現に此處の待合なども以前に二三度遊んだ覺えがあると云つて、最初蘭子の方から饒太郎を伴れ込んだのである。そこで饒太郎は全力を盡して彼の女を自分の理想通りな、野獸的な人間に變化させ

る可く努めて見た。成る可く狂暴に我が儘に、蠻人の如く血を好み、小兒の如く惡戯を嗜む事を致へやうと試みた。此の試みは極めて氣長に、一年も前からそろ〳〵と實行されて大分効果を現はして來たやうてあつた。用もないのに始終ピストルを懷中して居て、動ともすると脅迫して見たり、無闇に男の耳を引張り頭を擲つて喜んだり、兎に角以前のしとやかな彼の女の樣子がガラリと變つて了つたのは事實てある。けれども此の頃になつて、彼の女はもう早やそれ以上如何に誘惑するも變化しないばかりか、どうかすれば今夜のやうに、優しい女の本性に立ち復らうとする傾向が見えて來た事も疑ひがない。有體に云へば、彼の女は今迄自分の戀ひして居る男の要求に逆ふのがいやさに、心にもない我が儘を振る舞つて、いろ〳〵の亂暴を面白さうにやつて見せただけなのてある。彼の女の饒太郎に對する戀愛の情が增せば增す程、漸く彼の女は眞劍になり正直になつて、とても今迄のやうな虛僞な芝居を演じて居る事が出來なくなつた。それと同時に饒太郎に對しても、上品な男らしい態度を取つて、眞實の戀愛に復歸せん事を、折々は訴へるやうになつて來た。此れは蘭子としては當然の成り行きてあつたが、折角今迄骨を折つて演劇的に作り上げた女の性癖が、再び平凡に戾つて行くのを見せられた饒太郎は、非常な不滿と落膽とを覺えたのてあつた。彼は再び自分の戀愛には深い矛盾の存する事をつく〴〵と悟らずには居られなかつた。即ち、彼は自分の戀慕して居る女から同じやうに戀慕され敬愛される事を忌み嫌ふのてある。饒太郎の戀と云ふものは、男女相愛の關係から發生するのてはなく、男は女を愛し敬ひ、女は男を虐げ卑しめる時に生ずるのてあつた。

蘭子の愛情がこまかになるにつれて、饒太郎はただんだん失望して了つたが、それてもう今日までのと

ころては、蘭子に代る可き、蘭子以上に訓練された女を見出す事は出來なかつた。彼は據んどころなく、輕口を叩いたり、おべつかを使つたり、小使を貰つたりする事ぐらゐを、生緩い樂しみにして兎も角も幾分の愛情を繋いて居たのてある。……しかし此の不自然な女と男とが互に反對の事を要求し合つて居る不合理な關係は、早晩斷絶するに極まつて居る。もと〳〵自分は蘭子のやうな優しい氣質の女に手を附けたのが間違ひなので、あのやうな婦人は何處まて行つても、たとへ表面がどれ程強さうに變化しても、やつぱり柔弱な本心だけは失はれないものと見える。……と彼は思つた。さうして、今夜松村から話のあつた娘の身の上に自ら彼の好奇心は飛んて行つた。

松村の吹聽に半分掛け値があるとしても、その娘は蘭子よりも遙かに彼の性癖に適當してゐるやうてある。就中外見が大人しくて盜癖のあると云ふ特徴が、何よりも彼の感興をそゝる點てあつた。その上噂の如く容貌が妖艶て性質が悧發陰險て、所謂「毒婦」の資格と云ふものを一と通り具へて居るならば、其の外の條件に缺點があつても、例へば敎育のない事や、身分の卑しい事などは一向差支へない。

「何にしても明日は早速松村を訪問してやらう。」

かう獨語すると、彼は何となく胸の中て心が跳躍するやうに覺えた。さうして、彼れかと此れかとさまざまに娘の姿態を想像しながら、始めて安心したやうに、うと〳〵と眠りに落ちた。

四

朝の十時ごろの事てある。饒太郎は蒲團の中て眼を覺ますと、直ぐに例の娘の事が氣に懸つた。――と云ふよりは、寧ろ眼を覺ます以前から、眠つて居ながら始終其の事を氣に懸けて居たらしかつた。て、

此のまゝ早速飛んで行きたかつたが、朝つぱらから急に押し掛けるのは何となく耻かしくもあり、足許を見られるやうな心地がして、いつそ晩まで待たうか知らんと思つて見たりした。あれ程一途にあこがれて居ながら、今更耻かしがるのは不思議なやうであるが、斯の如く頗る辻褄の合はないところが鐃太郎の持ち前なので、彼は例の娘が自分に取つていかに重大であるかと云ふ事を知ると同時に、自分は又どれ程情けない事に熱中しつゝあるかと云ふ點も、充分に意識して少からず不面目に感じて居るのである。蒲團の中で眼をさましたまゝ、孰方にしようかと三十分ばかり案じ煩つた揚句、とうたう彼の慾望は彼の名譽心に打ち克つたと見え、聊かきまりの惡いのを我慢して、やつぱり彼は此れから即坐に訪問す可く決心した。

「己が、この傲慢な、負けず嫌ひの己が、その賓淺ましい Masochisten であると云ふ事は、己以外の何人たりとも、勿論松村と雖知つて居る筈はない。此の秘密さへ悟られないやうに用心すれば朝ッぱらから夢中になつて騒いでも、唯物好きな行爲だと思はれるだけで、それ程己の威嚴に關する事ではなからう。さうだ、己はいかほど親密な友人に對してゞも、兎に角世界中の男子に對しては、自分の秘密を飽く迄嚴重に確守するとしよう。さうして居さへすれば少しも極りの惡い思ひをしないでも濟むのだ。」

——と、鐃太郎は自ら言譯をして、威勢よく寢床を跳ね起きた。「おい君、何でもいゝから大急ぎで朝飯の支度をしてくれ給へ。」

楊枝を咬へながら、湯殿へ行かうとする廊下の曲り角で昨夜の女中にぶつかると、彼はさも〳〵むづかしさうな顔をしてこんな言を云つた。その眉根を顰めた苦々しげな表情と云ひ、いやに横柄な物の言

ひ振りと云ひ、前の晩の幇間風と打つて變つた澄まし加減は、端から見ると餘程をかしなものであつたがそれでも本人は頗る眞面目腐つて居る。丁度醉に乘じて亂暴を働いた人が、酒が覺めると急に自分の顏を見られるのが耻かしくなるやうに、彼も今朝になつて昨夜の有樣を想ひ回すとさすがに自分の馬鹿々々しさが感ぜられ、何か知ら此の女中から冷かされるのを煙たがつて居るのである。尤も過去に於いてどんな下種張つた眞似をしようと、その後で澄し込んで了ひさへすれば自分の威嚴が保たれると思つて居るのなら、いかに「はにかみや」の饒太郎にしても、隨分おめでたい話である

飯を食つて、勘定を拂つて了ふまで、徹頭徹尾澄まし返つて、「どうぞ又お近いうちに、」と歸りしなに云はれた時だけ、「うふん、」と鼻の先で笑つて見せながら、饒太郎は其のまゝ木挽町の河岸通りを築地橋の方へ歩いて行つた。空は相變らず青々と機嫌よく晴れ渡つて、初夏らしい雲の白い塊がところ／＼に浮かび漂ひ、大分暑過ぎるくらひに日がきら／＼と照り輝いて、往來の人々はみんな少しづゝ汗を搔いて居るらしい。青葉の時候から霖雨の季節に代らうとする過渡期によくある一日で、今年初めてその新鮮な暑熱が地上に普く行き渡り却つて慵い體が引き締まるやうな心地のする天氣である。普通よりも稍丸々と肥え過ぎて居る饒太郎は、股擦れのする兩足をゆつたり／＼と大股に開いて、兩手を振りつゝ堂々たる姿勢で歩いて居たが、その樣子はたしかに請負師の親方か相場師上りの成金らしく、下品ではあるが腕力もあり金力もある立派な男子のやうであつた。丁度新富座の前へ來た時、彼はとうたう足疲れ切つて辻俥を呼んだ。さうして「明治座の傍まで」と云ひながら車上に腰かけて悠然と葉卷に火を點じた。

やがて彼はふと想ひ出して、煙草を唇の右の端に咬へたまゝ咽せつくやうな顔をしながら、その實兩手を內懷に挿し込んでそッと紙入の勘定を始めた。ゆふべ松村に締られた時は大分いまいましいと思つたが、後で蘭子から餘分に貰つたので、手觸りの具合では何でも亦二百圓ぐらゐになつて居るやうだ。彼は窮屈な懷ろの內で、何度も何度も札を彈いて數へて見たが、それでも安心が出來ないのか、とうとう膝掛の上へ紙入れを取り出してびら／＼と帛紗を風に吹かせながら念入りに內容の檢査を試みた。さうして、いよいよ二百圓に相違ない事をたしかめると非常に滿足して、其の金額が全部消費される迄の間に遭遇す可き歡樂の數々を、頗る昂奮した心持ちで想像した。

此の胸算用は割り合ひに手間が取れたと見えて、鐃太郎が帛紗包みを再びシッカリ懷中へ收ひ込みほッと一と息吐いて頭を擡げた時分には、俥は既に人形町通りを走つて居た。急に往來へ眼を轉じたせゐか、彼は其處の大道の地面がいつになく煉瓦色を呈して、一直線に赫々と反射して居るのを感じた。此の界隈に居住する多數の婬賣婦たちは、朝でも晩でも大概四五人ぐらゐづゝ蒼白い腐つたやうな顔を曝して徘徊して居るものだがそれでも今日はカラリとした日光が往來を舞臺の如く照らして居る爲め、派手なフランネルの單衣を着てぶらついて居る彼等の皮膚の色までが、妙に生き生きと際立つて見える。

「おい、此處でいゝんだ。」

久松橋を渡つて了ふと、彼はかう云つて俥を下りた。待合とは云へ、實はむさくろしい婬賣宿に過ぎない松村の家の前まで乗り付けるのは、少し仰山だと考へたのである。

明治座の裏通りから細い新路を二三度曲つた、汚い溝板のあるじめじめした路次の一隅に、「まつば

や」と云ふ曇硝子の軒燈を掲げた家が松村の巣てあつた。格子先に立つて樣子を覗ふと、土間も玄關も夕ぐれのやうに眞暗で其の中に人間が住んて居さうなけはひはなかつた。

饒太郎は微かな聲て「御免」と云ひながら格子をあけた。

「おう」

と、獸の呻るやうな返辭をして、ガラッと障子を開いたのは松村自身てあつた。今起きたばかりの脹れぼつたい顏に、手拭ひ浴衣の寢間着を纏つて、齒磨きだらけの口の端に楊枝を啣んて居る。

「や、此れはようこそ。まあお上り……」

と云つたが、どう云ふ譯か彼はぐるりと後ろ向きになつて、饒太郎の方へつんつるてんの寢間着の臀を見せたまゝ、暫くこそこそと家の中を指圖してから、再び正面へ向き直つて、

「さあどうぞ二階へお上り。……何しろ今しがた起きたところて、此の通り散らかつて居るんだから、君驚いちやいかんぜ。」

かう云つて、まだ夜具蒲團が敷き放しになつて居る奧の間の方を體て庇ひながら、直ぐ上り端の梯子段を指した、

饒太郎は默つて頷いて、獨りみしみしと狹い梯子段を上つて行つたが、

「ちよいと待つてくれ給へ。」

と松村は下から聲を掛けたきり、容易に姿を見せなかつた。其處は唐紙一重に劃られた六疊と四疊半の二た間があるばかりて、兩方ともガラ空きになつて居る。孰れにしても天井の低い、汚點だらけな疊の

見るから胸のつかへるやうな坐敷であるが、六疊の方が聊か小綺麗に思はれるので、饒太郎は外套のまゝ部屋のまん中のテエブルに腰掛けて、退屈まぎれにあたりの樣子を見廻して居た。正面の床の間に埃だらけの菊の造花が挿ん込んであつて、極彩色の美人畫の掛物が下つてゐる外には別段何の裝飾もない。一方の襖と反對の側は中硝子の四枚障子が篏まつて、小ひさな椽側に面して居るが、戶外に見えるのは一杯に押し詰まつた人家の裏側の二階坐敷や物干しなどで、せい〳〵した靑空なんかは殆んて望む事が出來ない。

「どうしたい君、大さう早くからやつて來たぢやないか。」

漸く二階へ上つて來た松村は、じろ〳〵と饒太郎の風采を見上げ見下ろして云つた。

「まあ君、そんな處へ腰掛けて居ないで、外套を脫いでチヤンと据わつてくれ給へな。それぢや挨拶も出來やしない。」

「据わつてもいゝが、いやに薄汚い疊ぢやないか。南京虫でも居やしないかな。」

「失禮な事を云ひなさんな。此れでも松葉家では一番上等の坐敷なんだから。……」

から云ひかけて急に松村は聲をひそめ、輕く相手の肩を叩きながら、

「……おい、おい、時にゆふべはどう云ふ譯なんだい。あれ程の女が附いて居るのにこんな所へ漁りに來るなんて、君も實際物好きな人間だぜ。」

「ふゝん、手附け金を取つたとなつたら、大變鼻息が荒いぢやないか。まあ何にしても、問題の代物を早速見せて貰ひたいな。」

「代物は今迎ひにやつたから直ぐに來るよ。……それよりか君、此處てちよいとゆうべのいきさつを話して了ひ給へ。モウ今夜ぎりて手を切るんだとか云つて居たが、一體全體首尾よく切れて了つたかね。」

「そんな事はどうでもいゝさ。…僕よりかゆふべは君の方が餘ッ程怪しいだらう。散々人の懐ろを搾つて置いてあれから何處へ出掛けたんだい。」

「あッ、其れ其れ、」松村は俄かに狼狽して、右手の小指を鼻の先に翳しながら、梯子段の方を覗き込んだ。「その話は實は此奴（こいつ）に内證なんだから、お手柔かに願ひたいんだ。今に婢が挨拶にやつて來るかも知れないが、何分祕密にして置いてくれ給へ。」

「だつて君、あとの三十圓は手附け金に渡したんだぜ。」

「しかしもと〳〵此いつは僕一人の仕事なんだから、婢がグヅグヅ云ふ權利はないんだよ。兎に角君に迷惑を掛けさへしなければいゝだらうぢやないか。」

丁度その時、「どうも暫く、ほんとにお珍しい。」と云つて、松村の家内が上つて來た。饒太郎は此の女から「どうも暫く」などゝ云はれる因縁はない。度び〳〵松村から惚けを聞かされた覺えはあるが、顔を見たのは一二年前にたつた一遍あるか無しである。從つて今日までどんな容貌の女であるかも知らなかつた。

「お珍しいにも何にも、文豪泉君ともあらうものが此方等（こちとら）風情の荒屋（あばらや）へお越しになるなんて、なか〳〵一と通りの事ぢやないさ。」

松村も今更改めて女房を紹介するやうな様子はなく、こんな事を云つてからからと笑つた。

「ほんたうにねえ、同じ學校朋輩ても、お前さんと此方とは雲泥の相違だねえ。」

かう云つて女房は恐ろしく感心したやうに饒太郎のめかし込んだ服裝を眺めて居る。年頃は三十前後てあらう、色白の、割合ひに水々した小柄な女で、顔に大變蕎麥滓はあるが、狡猾さうな敏活な瞳を持つた、かう云ふ待合の女將としては先づ上出來の部類である。

「だから人間は解らないものさ。此の先生だつて、つい此の間までは己と同樣のごろつき書生だつたのが、別段勉强した樣子もないのに、どうした彈みか一遍に出世しちまつたんだ。――ねえ君、此の頃ぢや少くとも月に四五百圓の收入はあるだらう。」

「さうさなあ。」と云つて頭を掻いた饒太郎は。包みきれない得意の色を面に浮べて、「どのくらゐあるか調べた事はないけれど、いつも不足がちで借金が殖えるばかりだ。」

「馬鹿を云ひなさい。君も以前は大借金を背負つて居たが、今ぢやみんなきれいになつて了つたらう。」

「だけどお前さん、さう一概に云つたもんでもありませんよ。」と、傍から女房が口を狹んだ。「……何しろ御商賣が御商賣だから、いくらお金が這入つたからつて、右から左へ拔けて了つて、なか〳〵追付きやしませんやね。ちよいとしたお話が、お召し物だつて、此の通り粋なお服裝をして居らつしやるんだもの、萬事が此の調子で贅を盡して居らしつた日には、山程有つても足りやしません。……しかし借金をするつたつて働きがなけりや駄目な話だから、其處がお前さんと違ふところさ。」

「成る程なあ、お說の通りに違ひないかも知れないなあ。」

松村は自分を嘲けるのか人を嘲けるのか判らないやうな薄笑ひをして、「何しろ泉君は我々に取つての福の神だよ。此れからせい〳〵惠んで貰ふ積りなんだから、お前なんぞも亭主の攻撃ばかりして居ないで、お午の御馳走でも考へたらどうだ。」

饒太郎は夫婦のお世辭を傲然として聞き流して居たが、御馳走と云はれると急に眉を顰めて

「いや眞つ平、〳〵。たつた今しがた朝飯を喰べたばかりだから、そんな心配は御無用だよ。……それよりかどうしたんだい例の代物は?、早く話を極めてから、ゆつくり何處かへ飲みに行くとしようじやないか。」と、少し癇癪を起して云つた。

代物がやつて來たのは、それから三十分程後であつた。

「おかみさん、こちらですか。」

と、低い、遠慮深い聲で、云つて娘はおづおづと二階へ上つて來た。さうして、松村と女房との間に据わらうとする時、ちらりと上眼づかひに饒太郎を見たが、直ぐ俯向いて膝の上に兩手を重ねた。けれどもその一と眼で、饒太郎は自分がすつかり見られて了つたやうに思つた。

「どうしたのお前さん、大さう遲かつたぢやありませんか。――頭でも結つて居たんだね。」から云つて、女房は据わりながら少し反り身に返つて、島田の髱の出し具合や、帶の結び方や、娘の後ろ姿を勞はるやうに視詰めて居る。

娘は何を云はれても「はい、はい」と答へるばかり、松村の吹聽した如くいかにも大人しさうであつた。男が女を評價する場合には、大概一と眼で善いとか惡いとか定まるものだが、饒太郎は最初の瞬間

に、此の娘なら兎に角善いと思つた事だけは確かである。「兎に角善い」と思ひさへすれば、それから後は氣の持ちやうで、どのやうな激しい戀にでも造作なく陷る事が出來る。もう本當に大丈夫である。

大丈夫なところで、彼は更に落ち着いて、詳細に娘の態度を見守り始めた。やゝお白粉が濃過ぎる爲に實際の地肌は判らないにしても、眞白な背筋や掌の樣子から直覺すれば、決して色の黒い方ではないらしい。ふつくらと下膨れのした、師宣の浮世繪に、でもありさうな圓形の、眼の細い眉の長い、可愛らしいと云ふよりは寧ろおつとりとした娘顏で、表情も甚だ鈍い方であるが、鼻の高さが心持ち嶮し過ぎるのと、折々上眼を使ふ癖のある爲めに、多少油斷のならないやうな感じを與へる。襟のかゝつた矢絣銘仙の袷の下に、骨組みのいゝ手足を縮めて無理に小さく畏つた體つきには、肥えては居るがまだ充分に發達しきれない趣もあつて、實際の年齒はどうであらうとも、全く十七ぐらゐとしか考へられない。

「どうだい泉君、あれならば僕の話も滿更嘘ぢやないだらう。」

娘を一旦梯子段の下まで引取らせてから、かう松村が口を切つた。

「名前は何と云ふんだい。」と、饒太郎は別の事を尋ねた。

「今ではお玉と云つてるが、本名はお縫と云ふんだよ。――生れは勿論東京の下町だから、その點はたしかに請け合つて置く。だうだいほんたうに、昨夜の今夜でもちよいと見劣りはしないだらう? 僕も此の商賣をやり始めてから、あればつかりは堀り出し物だと思つて居るんだ。」

「ほんとにあれは堀り出し物さ。お前さんのする事に碌な事はないけれど、今度のだけは望みがあるやうだよ。」かう云つて、女房は饒太郎の方を向き直つた。「ねえあなた、いくら好き好きがあるからと云つ

て、若しも彼の娘が御嫌だつたら、それこそちよいとお氣に召す女はありやしませんわ。成る程器量から云へば、新橋柳橋にはまだまだいくらも有るでせうけれど、彼の娘にしたつてチヤンと身裝を作らせて御覧なさいな、何處へ出しても全く立派なものですよ。それにあなた年は若いし、あの通りあどけなくつて、少しも擦れて居ないんですから、申し分がござんせんやね。」

「だけどおかみさん、手癖の惡いのはたしかだらうね。」

鐃太郎は何の氣なしに念を押した積りであつたが、忽ち女房は「えッ」と云つて眼を圓くした。

「あはゝゝゝ」と、松村は何だか獨りで可笑しがつて、「まだその話はお前にして置かなかつたが、泉君は何も彼も承知して居るんだよ。つまりあの娘の手癖の惡いのが、ひどく此の先生のお氣に召したところなんて、あれが唯大人しいだけの女なら、御免を蒙むると云ふ、隨分物好きな話なんだ。」

「へーえ、御冗談でせう。」

「冗談ぢやないさ。泥坊娘だから面白いのさ。」鐃太郎は眞面目に答へた。

「さうですかねえ。小説なんぞをお書きになる方はほんとに變つて居らつしやる。……」女房は俄かに松村の方を睨め付けながら、「そんならさうと前に話をしてくれれば、あたしにしたつて効能書の云ひやうもあつたんだけれど、お前さんが默つて居るから惡いぢやないか。」かう云つて笑ひ出したが、さすがに顔を赧らめて居る。

「己も今迄はすつかり忘れて居たんだから仕方がないさ。……それよりか泉君、肝腎の談判はどうなるんだか、早速こゝで極めて了はうぢやないか。」

「さうさなあ、之を要するに金次第だが、……」饒太郎はいかにも氣乘りのしない調子で、ちらりと妙な眼くばせをした。此れは先の手附け金の一件があるので、成る可くならば女房を退席させて貰ひたいと云ふ謎であつたが、其れが解つたのか解らないのか、松村は一向平氣で話を進める。

「そんな曖昧な事を云はないで、好ければ好いて、何とか一つ極めてくれ給へな。ゆふべもお話しした通り、實際此の頃は儲け口がなくつて困つて居るんだから。」

「ほんたうにいかゞでございませう。」女房も其の尾に附いて言葉を添へた。「……お氣に召さなければ仕方がございませんが、あれだけの器量で御注文通りに手癖の惡い娘なんぞは、そんなに度び度びあるもんぢやございませんよ。……あたくしどももあの娘には、大分無理な算段をしてお金を掛けたもんですから、唯今では退引ならないハメになつて居りますの。其處のところを御推量下すつて、何分どうかお助け下さいましな。」

「全體こゝにいくらあつたらば、あの女を自由にする事が出來ると云ふんだね。先づ君達の腹藏のないところを打ち明けて貰はうぢやないか。」

夫婦の者にお辭儀をされると饒太郎はつい釣り込まれて至極鷹揚な態度になる。

「まあ相手が君の事だから、駈け引きなしに相談するとして、君はあの娘を體ぐるみ引き取つて、年中自分の傍へ寄せ付けて置かうと云ふのかね、それとも月々いくらと云ふ極めにして僕の方へ預かつて置くのか、一體どうする積りなんだね。その邊の都合で、此方にも亦いろ〳〵考がある事だから、……」

「追つ付け僕の方へ引き取つて、何處かへ匿まつて置いてもいゝが、まあ當分は其方へ預かつて貰ふと

しよう。――しかし斷つて置くが、まさか內證で稼がせるんぢやないだらうな。」
「大丈夫だよ君、そんな眞似をさせる位ゐならもと〳〵こんな相談なんかしやしないんだ。君の代物として預かる以上はいつ何時でも御用は缺かさないんだから、毎日やつて來るがいゝさ。――ところでさうなると〇の問題だがね。」松村はちよいと女房を振り顧つて、
「さうさなあ、先づ月參拾圓も出して貰ふかなあ。」と云つた。
「いゝとも〳〵、それだけ出せば文句はないんだらう。」
鐃太郎は素的に氣前よく頷いて了つた。
「それから君、いよ〳〵話が極つたとなれば、多少なりとも支度金を奮發して貰ひたいんだよ。何しろ彼の娘の衣裳と云ふものは殘らず質に這入つてるんだから、差し當つて夏の物でも出してやらなけりや直ぐにも困る譯なんだ。」
「そいつはいくらあつたらいゝ。」
「さあ、其れも君の考へ次第だが、彼奴はなか〳〵持ち物でも何でも贅澤な方で、入れ質した夏物だけでも隨分な金になつて居るから、一と通り揃へてやるには大變な話だよ。それにまだ〳〵方々に借金もある樣子だから、不足を云つたら際限はないが、兎に角五拾圓だけ出してやり給へな。」
松村夫婦は頻りに鐃太郎の顏色を讀みながら、おど〳〵した調子で大分厚かましい事を切り出したが、相手は一向「高い」と云ふ事を云はなかつた。
「では支度金が五拾圓に月々參拾圓と、それだけあれば、今日からすぐでもいゝだらうな。」

「その外に手數料を貰はなければ合はない話だが、まあ負けて置くとしようか。」

「よろしい」と云つて、饒太郎は懷から紙入を出して、八拾圓の札の束を威勢よくテエブルの上に投げた。

其の金を見ると、女房はホツとしたやうに息を吐いて、

「私の方に頂くものは此れだけですが、女を一人を圍ふとなれば、それでもなかなか入費がかゝるもんですよ。――夏の着物は出來たとしても、だんだん可愛くなつて來れば、いろいろ買つてやりたいものが出來ますからねえ。」

「可愛くなれば仕方がない。何でもねだられ放題に買つてやるさ。」

此れて談判はバタバタと片附いて了つた。饒太郎はひどく機嫌がよくなつて、何だか自分が急に偉大なる人物になつたかのやうに感ぜられた。さうして、午砲が鳴ると同時に起ち上つて、

「おい松村、何處かへ晝飯でも喰ひに行かう。」と云つた。

五

饒太郎の住んで居る深川の邸といふのは、勿論彼自身の家ではなく、或る緋商の別業であるが、主人が、文學者を庇護する事を好むところから、當分彼の假寓を許して居るのであつた。どうかすると一と月に一二度ぐらゐ主人の泊りに來る事はあつても、平生は四五人の留守番が居るばかりで、廣々とした庭も座敷も凡べて饒太郎の使ひ放題になつて居る。現在彼の書齋に充てられて居る茶の間の外に、客間

として使用さる可き立派な座敷が二間程あつて、まだ其外に平屋作りの西洋館が、青々とした芝生に望んで建てられて居る。芝生の彼方には池もあり築山もありこんもりとした樹立もあり、長い煉瓦塀に圍まれた構への内は凡そ千五六百坪もあらう。兎に角、こんな宏壯な住宅に、何等自己の財嚢を費す事もなく主人顔をして生活して居る饒太郎は、實際幸福な人間と云はなければならない。

幸福な饒太郎は、今日は一層幸福であつた。彼は朝から書齋に臥そべつて、どんよりとした眼を据ゑながら、一生懸命に時計の針を視詰めて居る。松村と例の契約を整へてから、もう四日目になるのだが、其の間彼は毎日娘を伴れ出して、所々方々をうろつき廻つて遊んで居た。きのふは蒲田の菖蒲園へ行つて歸りに大森の海岸の旅館で夜を更かした。おとつひは宮戸座の夜芝居を見て、はねてから遲く竹屋の渡しを渡つた。その前の晩は初めて遇つた二人が馴れ馴れしく手を取り合つて、人形町の灯(ともしび)の街を散歩した後、中州の闇に姿を消した。或る時は彼の女を令嬢のやうに、或時は夫人のやうに、或る時は女中のやうに作らせて見たが、銀杏返しか島田に結つて、下町風のあどけない娘に装ふのが一番似合ふやうであつた。「あの娘(こ)にしたつてチヤンとした身装(みなり)をさせて御覧なさいな。」と、松村の女房が豫言した通り、娘の顔は一日一日に美しさを増して、今では何處へ出しても耻かしくないくらゐな、相當の品位さへ備はつて見えた。

彼が日々斯うやつて娘をつれて歩いて居るのは、一つには未だ懐ろに金の盡きない所以でもあるが、一つには又、一日も早く彼の女の獰惡な本性が曝露するのを見たいのであつた。彼はいろ〳〵にして彼の女の趣味や、性癖や、頭腦の程度を試(ため)さうとしたが、少し立ち入つた質問になると、娘はいつも顔を

赧らめて羞んで了ふ。此の四日間の交際で饒太郎が知り得たところは、相變らず極めて敏捷に上眼を遣ふ癖のある事と、何を云はれても唯はいはいと笑つて服從する事と、默つて居ながら恐ろしい程微妙な事に氣が廻つて、云はれぬ先から男の心に投ずるやうな振る舞ひをする事とであつた。饒太郎は以上の樣子から、娘が決して愚鈍な女でない事だけは判斷するに難くなかつた。成る程松村の云つたやうに、竊盜ぐらゐは働きかねない娘であると推量された。さうして、若しも自分の鑑定に誤りがないとしたならば、彼は相手が假面を脫ぐのを待つ迄もなく、此方から進んで、自分が憐む可き Masochisten であると云ふ祕密を了解させ、邪惡なる妖婦の本領を自分の前に發揮するやうに賴んで見るのが、最上の方法であらうと思ひ付いた。彼はゆふべ大森の旅館の座敷で、酒を飲みながらふとこんな事を娘に云つた。

「丁度今日で三日ばかり大分方々を出步いたが、お前は一體、かうやつて戶外を遊び廻るのと、靜かな一と間でしんみり話をして居ると、孰方が好きな方なんだね。」

「はい」と云つて、娘は俯向きがちに長い袂をだらりと口元にあてながら、「伴れて行つて頂くのなら孰方でも結構でございます。」と答へた。

「お前と僕とはまだお互ひによく知り合つて居ないのだが、いつか一度は双方の遠慮が取れて、何も彼も打ち明ける時節が來なければならない。僕はさう云ふ時節が成る可く早く來るやうにしたいと思ふんだ。」饒太郎はかう云つた時、いかにも自分の口のきゝやうが堅苦しい事を發見した。どうして自分は蘭子に對する時のやうに輕快になれないのか知らんと怪しんだ。松村に應對した時の尊大な態度が、此の娘に對してまでも附き纏はつて居るのであらうと考へても見た。彼は何とかして此のぎごちない話振り

を改良しようと努力したが、娘が耻かしさうにすればする程自分も妙に耻かしくなつて、知らず識らず例の澄まし返つた顔つきになる。醉に紛れて冗談を云はうとしても、一向酒が循つて來ない。娘の方も氣詰まりな面持ちをして、時々冷めたくなつた銚子、燗を氣にしながら、硝子障子の向うに登つた海の上のまんまるな月の光を眺めて居た。二人の周圍は水を打つたやうに靜かであつた。月と云ふものは美しいけれども、冷めたくて嫌なものだと、其の時饒太郎はつく〴〵思つた。それから又、いつ迄も斯かる淡泊な對談を續けて居ては際限がない。自分は勇氣を振つて、是非共この娘を積極的に動かしてやらなければならないと思つた。

「今夜はもう此れて歸らうぢやないか。」

と、突然彼はつまらなさうに口を切つた。

「さやうでございますか。」かう云つて、さすがに娘は愕然として男の樣子を打ち仰いだが、緣側を照らして居る月明りのせゐか、豐な頰が燐のやうに靑く輝いて、細い眸には少しく露を帶びて居た。

「今夜は歸つて、あした改めて遇ふ事にしよう。僕はお前にちッと話があるんだから、明日の午後の一時ごろに、深川の僕の所まで尋ねて來ておくれ。」

饒太郎はいよ〳〵堅苦しくなつて、切なさうな作り笑ひを泛べながらこんな事を云つた。

娘は又「はあ」と云つて畏まつた。が、ふと心着いておづおづ頭を擡げ、

「やつぱり此の服裝で宜しうございますか。」かう訊ねた。

饒太郎は輕くうなづいて、「それて構はないから、僕の從妹だと云つてお出て。」と云つた。さうして二

人は、一泊の豫定を變更して、夜の十一時近くに大森を引き揚げたのである。

ゆふべの始末を想ひ出すと、鐃太郎は又しても、いつもの矛盾から來る悲哀と不滿足とをそゞろに感じさせられた。彼は彼の女に對して、再び蘭子との關係のやうな、齒痒い行き違ひを生じさせたくない。二人の間に妙な行き掛りや習慣が出來ないうちに、いかにもして彼は彼の女と自分とを赤裸々にして了はなければならない。――かう云ふ決心の下に、彼は先づ自分が赤裸々になつて見せようとして、或る便宜上から今日の會合を自分の住居に擇んだのである。

鐃太郎の胸の中には、今日の手筈が既に順序よく定められて居た。今日こそ長い間虚空に描いて居た幻の影を、實際に摑む事が出來るのだと思つた。彼は昨夜の夜半のうち人知れず西洋館の室內へいろいろな品物を取り揃へ、其處へ彼の女を連れ込むやうに用意を整へて、約束の時間の來るのを待つて居た。

一時が鳴ると娘は刻限を違へずにやつて來たらしい。鐃太郎を訪れるものは、誰しも表門から下駄穿きの儘案內されて、茶の間の庭の枝折戸口まで導かれるのが例になつて居る。

「どうぞあちらへ。」

と云つて、其處から引き返して行く取り次ぎの女中に慇懃な會釋をしながら、彼の女は徐々と例の南天の葉蔭に現はれた。女を取り卷く綠蔭の錯雜した梢の中に、クリーム色の琥珀の日傘が怪蝶の翅の如く華やかに泛かんで、白つぽい鹽瀬の帶の透いて見える薄紫のサマムアコオトに、裾模樣と見紛ふばかりな草葉 影がくつきりと動いて居る。滿目の草いきれと暑熱の爲めに彼の女は少し上氣せたらしく襟元から耳の附け根を紅らめて、

「昨晩は失禮いたしました。」とばかり、奥深い、薄暗い庇の中に獸の如く臥ころんで居る男の姿を覗き込んだ。

鐃太郎はやをらむつくり起き上つたが、沓脱ぎに揃へてある庭下駄を穿きながら、「さあ、此方へお出て。」と云つて娘の手を執ると、再びこんもりした植え込みの間を分けて、芝生の彼方の、西洋館の石階の前に來て立ち停まつた。

どしんと强く扉をハタいて、追ひ込むやうに娘を中へ引き入れた後、彼は内部から堅く戸口の錠を卸した。部屋の廣さは凡そ二十疊もあらうかと思はれる。以前此の家の主人が寫眞と油繪に凝つて居た時分、いろ〳〵の製作に耽つたアトリエの跡であるだけに、其の頃の設備や裝飾がいまだに俤を留めて、寫眞機械や、大小種々の衝立(スクリーン)や、書き損ねの油繪や、捏(こ)ねかへされた石膏の彫刻などが隅々に秩序なく放棄され、一方に垂れさがつた重い草色の帷(まく)のあなたにはさゝやかな暗室が附いて居た。此の著いのに、何故か四方の窓は締め切られて、うすいオリーブ色の窓掛が下ろされて居るので、室内には晝とも夜とも判らない、綠がゝつた光線が謎のやうに漂うて居る。

「此處へお掛け」

と云つて指されゝるまゝに、娘は柔かいソオフアの蓐に腰を下ろしたが、其の後方に引き廻された刺繡の屛風の、孔雀と鳳凰の飛翔して居る絢爛な構圖が美しい背景を作つて、彼の女の姿は呉服店のびら繪などを見る如くに燃え立つやうな艶麗な感じを與へた。男はその傍らの安樂椅子に膝を組んで、卓上の銀盆に列べられた數本の洋酒のうちから、ペパアミントの罎を取つて、二つのコップへ注ぎ入れた。

「僕はお前に話があつて、わざ〳〵此處へ呼び込んだのだが、實は少しばかりお前にお願ひがあるんだよ。」

靑い酒のしたゝりに唇を濕ほして、饒太郎は薄氣味惡くにやにやと笑ひながら云つた。――

「お前は大變大人しい娘だ。何を云はれてもハイハイと云つて人に逆つた事がない。……しかし正直を云ふと僕はお前のその大人しいのが氣に入らないのだ。……」

「お氣に召さない事がございましたら、どうぞ御遠慮なく仰つしやつて下さいまし。あたくしには唯はいはいとお言葉に從つて居るより外、どうしていゝのやら一向判りませんものですから……」

娘の言葉は弱々しい調子で、消え入るやうに微かであつた。

「判らない事はなからう。お前はお前の好きなやうに我が儘自由に振る舞ふがいゝ。お喋舌りをしたり、噓をついたり、酒を飮んだり、博賭を打つたり、善い事でも惡い事でも思ふ通りな眞似をして面白がつてくれさへすれば結構なんだ。」

「でもまだあたくしは十七の娘でございますもの。……敎へてさへ頂けば此れから何でもいたしますけれど。」

「おい、おい、お前ももう好い加減にするがいゝぜ。」グッとコップを飮み干して了ふと、饒太郎は立ち上つて、不安らしくテエブルの周圍を行つたり來たりし始めた。「僕はお前がどんな素情の、どんな經歷の女だと云ふ事をよく知つて居るんだぜ。去年の夏お前が新聞に書かれた事も、檢事局へ擧げられた事も、それから其の後到る所でお前が行つた犯罪に就いても、すつかり種は上つて居るんだ。今年十七に

なる初心娘のやうに見せても、實際の年がいくつになるかは疾うからちやんと判つて居るんだ。」
さう云はれて居る間、娘は此の臺辭が聞えるのか聞えないのか、相變らずぼんやりした顔つきをして、折々例の上眼を使ひながら饒太郎の歩く姿を窃み視るのみであつた。
「……だからもう猫を被つても仕樣がないんだ。ねえ、さうだらう。」
云ひ終ると同時に彼は娘の前に歩み寄つて、急にやさしさうな、劬はるやうな眸をした。
「御存知で居らッしやるならもう何も申しません。」俯向いて居た娘は更に低く頭を垂れて、いよ〳〵微かな聲で云つた。「……どうぞ私のやうな人間を可愛さうだと思召して、憐んでやつて下さいまし。もう此れからは心を入れ換へて、きッと善人になつて御覧に入れます。何卒お見捨てなさらないで可愛がつて下さいまし。」
「あはゝゝゝ。まさか本氣でもないだらうが、何もそんなに殊勝らしくして見せる必要はないよ。女の癖に大それた罪を犯す程の悧巧なお前だ。――それ程にして頼まなくつても、僕がお前をどれ程可愛がつて居るか、實は可愛がり過ぎるくらゐ可愛がつて居る事を、ちやんと見抜いて居るんだらう。そのくらゐの事が悧巧なお前に判らない筈はないんだ。」
「それはあなた餘りでございます。」
「しかし、いくらお前が悧巧な女でも、僕がどうして此れ程お前を可愛がつて居るのか、その理由がわかる筈はない。――僕はお前の器量よりお何よりも、お前が大膽な惡黨女であると云ふ事に惚れ込んで居るんだ。」

話す方も聽いて居る方も、二人の顏はだんだん青くなつて、互ひに重い溜息を吐いて居る。饒太郎は轟く胸を鎮めながら、卓上の酒を手あたり次第に續けざまに呷つて、濡れた唇を拭ひ〳〵尙も熱心に口說き立てる。

「僕がお前に賴みがあると云ふのは此處の事なんだ。お前は今、此れから心を改めて善人になると云つた。それは勿論一時の氣休めて、僕を欺さうとしたのに違ひない。欺して置いて、又何か惡事を働かうとする了見に違ひない。……」

「飛んでもない事を仰つしやいます。たとへ私が今迄にどんな惡事を働きましても、此ればつかりは決して僞りてはございません。」

娘は急にはら〳〵と淚をこぼして、ソオファから轉げ落ちるやうに彼の足元に跪いた。

「お前がどんなに哀れつぽくして見せても、僕にはお前の本心がよく判つて居る。萬一お前がほんたうに改心する積りなら、それは一時の氣紛れて、直ぐに又もとの惡黨になる事は見えて居るんだ。――僕は今お前に耻をかゝせたり、改心をさせたりしようとは思つて居ない。それよりかお前が立派な惡黨になつて、僕に對して出來るだけの罪惡を働いて見せて貰ひたいんだ。此の方がお前に取つても、どのくらゐ容易(やさし)くて、どのくらゐ面白い仕事だか解らないぢやないか。」

男の言葉は冗談なのか皮肉なのか。冗談とするにはあまり眞面目て、皮肉とするにはあまり熱心なやうてある。娘は呆れて饒太郎の瞳の色を視詰めて居たが、少しく醉つては居るものゝ、彼の態度は氣が狂つたかと思はれる程嚴然たるものであつた。

「お前は今迄にいろ〳〵の男と知り合ひになつた筈だが、いつも此のやうに大人しくして居た譯でもあるまい。お前が惡事を働いた時、お前の手先に使はれて、一緒にいろ〳〵の仕事をした相棒の男が澤山あつたらう。さう云ふ男たちにお前は定めし姐御と呼ばれて、隨分權威を振つたに違ひない。どうぞお願ひだから、僕をお前の乾分のやうに取り扱つておくれ。乾分で惡ければ奴隷でもいゝ。飼ひ犬でもいい。餌食でもいゝ。……身代りが欲しいと思つたら、僕を身代りに使つておくれ。金が盗みたいと思つたら僕の金を盗んでおくれ。人を殺したいと思つたら僕の命を取つておくれ。此れが僕のお願ひなんだ。」

かう云ひながら、饒太郎は室の一隅にある大きな戸棚の抽き出しを開けて、その中に忍ばせてあつた奇怪な品物を一つ一つ卓上に運び始めた。

「さあ、此處にいろ〳〵の兇器がある。ピストルでも、匕首(あひくち)でも、魔藥でも、細引でも、鞭でも鎖でも、お前の仕事に必要な道具は一と通り此處に揃つて居るんだ。……どうだ、お前は斯う云ふ物を見せられたら、嘸かし何か一と仕事やつて見たいと思ふだらう。此のピストルで誰かを脅迫して見たくないか。」

男はいきなりピストルを摑んで女の鼻先に突き付けたが、彼の女はいつか再びぼんやりとした面持ちて、唯じろ〳〵と其の筒口を眺めて居る。

「此の匕首で誰かを殺して見たくはないか。此の魔睡藥で誰かを眠らせて見たくはないか。それとも此の細引だの鎖だので人間をふん縛るのも面白いだらう。――若しもお前が、法律を恐れて居る爲にやりたい惡事をやらずに居ると云ふのなら、それこそほんとに下らぬ遠慮と云ふものだぞ。成る程世間の奴等

はお前の惡事を許しはしないが、僕はお前に許して居るんだ。此の部屋の中には法律はないんだ。お前は僕に對してどんな惡事を働かうとも、誰にも罰せられる氣遣ひはない。……たとへば僕を殺すにしても、此の室内て人知れずやつて了へば、證據の殘らない方法はいくらでもある。それとも亦、お前が自分の手を下さずに誰かに危害を加へたいと思ふやうな事があつたら、いつでも僕が乾分になつてお前の代りを勤めてやる。……どうだ、此れ程に云つたらお前もそろ〳〵惡黨の本性を露はしたがいゝだらう。」

「おほゝゝゝ」娘は何と思つたか急に聲高く笑ひ出した。「いくら本性を露はせと仰つしやつてゝ其れは御無理てございます。あたくしはあなたの考へて居らつしやるやうなそんな大それた惡黨てもなし、それに第一、こゝてあなたをどうしたところて、私に何の利得もないてはございませんか。」

「ふんさうか、利得がなければ惡い事は出來ないと云ふのか。……だがよく考へて見るがいゝぜ。利得を得るのと、惡事をするのと、どつちがお前には餘計面白いんだ。お前は若しも刑罰さへ受ける恐れがなかつたら、利得がなくても、惡事をするのは面白いと思はないかね。」

「御冗談を仰つしやつては困ります。……」

「よろしい、それては斯うしやう。」彼は懐ろから紙入を出して、娘の膝の上に投げた。

「此の中に五拾圓程這入つて居る。此れを殘らずお前にやらう。此れがお前の利得になるのだ。――その代りお前は、僕の要求通りの惡事を働いて、毒婦になつてくれるだらうな。」

「惡事と申しますと?」

「なにも大した惡事ではないんだよ。」饒太郎の眼は物凄くぎろりと光つたが、それでも顏全體は妙ににや〳〵笑つて居る。……ほんとうの毒婦ではなくても、唯毒婦らしい眞似をして見せて貰へば澤山なんだ。……たとへばこゝに麻繩と鞭があるね。一番僕を赤裸にして、此の麻繩でふん縛つて、鞭でピシ〳〵打つて貰ひたいんだ。ねえ、唯其れだけで五十圓になるんだから、何でもない事だらう。まだ此の外にも、お前がいろ〳〵僕の頼みを聞いてさへくれゝば、金はいくらでもやるんだぜ。」

二人は暫く默り合つて、お互ひに穴の明く程其の表情を睨み詰めて居た。いつ迄立つても、娘は唇を堅く閉ぢて、驚いたのか恐れたのか其れとも何か考へて居るのか、瞬きばかり續けて居る。

「おい、後生だから返辭をしてくれ。さうして勇ましく『うん』と云つてくれ。此の願ひさへかなへてくれゝば、僕はお前にどんなお禮でもしてやるから。……」饒太郎は先娘がやつたやうに、相手の足元に跪いて泣き聲を立てゝ賴んで見ようと思つたが、何故かさうする事が出來なかつた。そんな芝居を演ずる餘裕のないくらゐ、彼は夢中で眞劍になつて居た。そこで彼は更に堅苦しい、更に事務的な、どちらかと云へば、甚だ間の拔けた口吻で、無味乾燥な談判でもすゝめるやうに言葉を續けた。「事に依つたら、お前は僕を氣が狂つたと思つて居るのだらう。見やうに依つては勿論僕は氣狂ひに相違ないんだ。今となればもう何も彼も白狀するが、僕は性來、女に可愛がられるよりも、いぢめれるのを樂しみにする人間なんだ。お前のやうな若い美しい女たちに、打たれたり蹴られたり欺されたりするのが、何よりも嬉しい。出來るだけ殘忍な、半死半生な目に遇はされて、血だらけになつて、呻つたり悶えたりさせてくれれば、世の中にこれ程有り難い事はないんだ。かう云ふと嘸かし不思議に思ふかも知れないが、僕

のやうな氣狂ひじみた人間は、世間にまだ〳〵澤山居ると云ふ事を、いづれお前も氣が附く時が來るだらう。——さう云ふ人たちは、みんな僕と同じやうに一度は殘酷な毒婦に出遇ふ事を願つて居ながら、大概望みを達する事が出來ないで死んで了ふ。僕もお前に打つかるまでは、一人として此の願をかなへてくれさうな大膽な女を見附る事は出來なかつた。しかしお前はそれが出來る女だ。お前は男をいぢめたり、泣かせたり、斬つたり、張つたりする事の出來る女に違ひない。今迄にさう云ふ經驗がないと云ふなら、此れからさう云ふ血醒い仕事をいくらでもやるやうになる女なんだ。ねえさうだらう。」

喋舌つて居る間に、彼は散々呷り付けたさま〴〵の洋酒の酔が漸く滿身に瀰蔓して、頭の中を暴風のやうに搔き廻し始めた事を感じた。彼は體の節々が痛んで、限がくるめくやうなのを無理やりに堪へながら、徐かに椅子を立ち上つて堅く娘の兩手を把つた。

「さあ、後生だから僕の望みをかなへておくれ。僕はお前に無理を頼んでは居ないつもりだ。お前が僕に惚れてくれろと頼むのではない。僕を僕の望み通りに苦しめてくれろと頼んで居るんだ。——金はお前にいくらでもやるよ。五拾圓で足りなければまだいくらでも出してやるよ。兎に角此れはお前の懷ろへ收つて置いたらいゝだらう。」

「有り難う存じます。」娘は押し付けられた紙幣の束を其の儘素直に受け取つて、帶の間へ入れながら、

「ではどうしたら宜ろしいのでございます。」と云つた。

「さつき云つた通りにするのだ。面倒な事でも何でもない。僕を赤裸にして、此の細引で手足を滅茶滅茶に縛つてくれればそれでいゝんだ。」

「そんなら裸におなんなさいまし。」

娘は自分のする仕事が、不思議だとも奇怪だとも感じて居ないやうであつた。彼の女は平然として、大根のやうに太つて居る男の兩腕を逆捻ぢにすると、麻繩でぐるぐるとからげて了つた。やがて饒太郎の肥滿した肉體は、毬の如くに床上へ俯向きに臥かされた。見る見るうちに其の兩脚は背後へ高く折り曲げられて、腰のあたりで手頸と一緒に縛り上げられた。彼は手も足もない人間のやうに、膨れた腹ばかりが殘つて居た。

「此れがあなたに面白いのですか。」

かう云つて、淺ましい男の姿を見おろして居る娘の眼つきには、其の時始めて毒婦らしい、冷酷な邪惡な色が動いて居た。

「うん、面白いんだ。」と、饒太郎は切なさうな聲で答へた。

「此れ程嚴重に縛られて居たら、それでも隨分苦しいでせう。」

「苦しいところが面白いんだよ。だけどまだ此の位の苦しさでは飽き足らない。――濟まないが、僕を仰向けに直しておくれ。僕は縛られて居ながらお前の美しい顏が見たいんだ。」

娘は兩手を繩にかけたが、男は又「手をかけるには及ばない。足で蹴返してくれゝば澤山だ。」と云つた。娘は云はれる通りにした。彼の體は酒樽のやうに、ごろりと轉がつて仰向きになつた。

――己はいよ／＼氣が狂つたな。――ふと、饒太郎はそんな事を考へたが、其れがいつものやうに恐ろしくも何ともなく、却つて彼は喜び勇んで此の愉快なる Madness の境界へ突進して行きたかつた。

體中の關節がメリメリと鳴つて、どうかしたらポキリと骨が折れて了ひさうな辛辣な疼痛を味ひながら、此の儘死んで了つたつて構ふもんかと思つたりした。

「さあ、もう僕は何をされても抵抗する事が出來ないんだ。此れから先はお前の好きな眞似をしておくれ。」

「おほゝゝゝ」娘はおかしさを堪へ切れずに、氣の毒さうな顏をして突然笑つた。「だけど何だかお可哀さうて、あたしにはどうしていゝのか判りませんわ。あなたの方から仰つしやつてさへ下されば、お望み通りにして上げませう。」

「それでは僕の方から注文しよう。今度はどうして貰はうかな。」饒太郎はちよいと眼を閉ぢて考へて居たが、恰も遊戲に耽つて居る子供等が面白いいたづらなどを發見した時のやうに、忽ち嬉しさうな聲を發して、

「うん、さうだ。そこに魔藥の罎があるだらう。その藥をハンケチに滴らして、僕の鼻先にあてがつてくれないか。ほんの一と臭を吸ひ込めば、僕は直ぐ死んだやうになつちまふんだ。面白いからやつて見て御覽。」

「やつて見ても宜しうございますが、いつになつたらお眼覺めになるんでせう。あんまり長いと、あたくし獨りで此の部屋に居るのは淋しうございますもの。」

「なあに一時間ぐらゐなもんだよ。退屈ならば僕の袂に鍵があるから、戸外を散歩して來るがいゝ。」

娘は自分の袖の中から絹ハンケチを取り出して、それへ一滴の藥を點じると、やがて男の顏のところ

へ蹲踞りながら、

「それでは薬を嗅がせますよ。よろしうございますか。」と云つた。

「さあやつてくれ。お前は今、僕を本式に殺すつもりでやるんだぜ。首尾よく殺して了つたら、屍骸はふん縛つたまゝ棄てゝ置いて、何處へでも遊びに行つて來るがいゝ。――だが出入りには嚴重に鍵をかつて、外の者に部屋の樣子を見られないやうにしておくれよ。」

「よろしうございます。外に言ひ遺す事はございませんか。」

「うんもうない。」

同時に彼の鼻と口とは、柔かい絹の布で力強く壓塞された。娘は男の顏の下半部へ兩手を重ねて、一生懸命に床の上へ抑へ付けて居た。酒の醉よりも更に重苦しい塊のやうなものが、腦髓の組織の中をガンガン打壞し始めたなと思つて居る瞬間に、彼は刻々意識が不明になり、ズーンと千仭の谷底へ沈むが如く昏惑して行つた。異常に肥滿した彼の筋肉が、袋の中で水が暴れて居るやうにモクモクと痙攣を起した。二三度唇を蠢めかして何か譫語を云ふらしかつたが、ハンケチで塞がれて居るために、ふうふうと云ふ世にも哀しげな呻り聲が聞えた。

其の呻り聲がパッタリ止んだ時分に、「もう眠ましたか。」と、娘は念を押して見て、徐かにハンケチを取り除けた。饒太郎は大きな口を開いて居た。

脫ぎ捨てゝある男の衣類の袂から鍵を搜つて、娘が出て行つた後の室內に、手足を結ばれた饒太郎は、奇怪至極な恰好をして昏々と倒れて居た。その邊に飾つてある石膏の彫像のうちには、いろ〱の姿勢

を示した男女の立像があつたけれども、饒太郎程不思議な恰好をして居る者は一つもなかつた。彼のスヤスヤと睡つて居る顏の上には、折々窓掛けの隙間を洩れる午後三時頃の日光がさも熱さうに照り付けて居た。仰向きに、天井の方を向いて膨れ上つて居る彼の腹部は、臍のあたりを中心として海のやうな動き方をした。

六

五月が暮れてほんたうの夏が來た。もう十日ばかりて、入梅と云ふ季節になつた。

饒太郎は入梅が大嫌ひであつた。一年中て一番恐ろしいのは入梅の時候てある。入梅になれば必ず神經がおかしくなる。自分は結局或る年の入梅に發狂して死にはしまいかと考へられる。其の「或る年」が多分今年てはあるまいかなどゝ想像した。

どうせ彼は長壽(ながいき)の出來る人間てはない。さうして、あの娘のやうな婦人がそんなに度び度び出現する筈はない。今度のやうな快樂は一生に一度の快樂である。──そこて饒太郎は夢中になつて了つた。

もう此れで十日ばかり、毎日〳〵二人は西洋館に這入り込んで居る。どうかすると女中に飯を運ばせて朝から日の暮れるまで何かして居る。何かが始まる時には、必ず四方の窓掛けが下がつて、扉の錠が卸されるので、外から樣子は解らないが、或る時石階のほとりの芝草を苅つて居た植木屋は、突然室内から不思議な音響……ぴしり、ぴしり、と、恰も鞭で擲つて居るやうな音響が洩れる事に氣が付いた。すると翌日また二人が、ちやりん、ちやりんと鎖を引き擦るやうな響きがして、同時に床板をどたんばたん

と激しく何者かゞ轉がり廻つて居る音を聞いた。家中の者はみんな其の噂を傳へて、ひそひそと語り合つた。しかし饒太郎が恐ろしく澄まし返つて居るのと、その外に別段變つた事もないので、誰も深くは搜つて見ようとしなかつた。

或る晩の事であつた。彼が入浴して居る際に、風呂番がいつものやうに背中を流してやるつもりで、何氣なく湯殿の戸を開けると、饒太郎はあはてふためいて、「いや澤山、澤山」と云つて湯船の中へ飛び込んで了つた。何でも其の時、湯氣の爲めにハッキリとは判らなかつたが、彼の腰の邊から太股へかけて、物凄い大痣の斑點のあるのを確かに見たと、風呂番は眞しやかに女中達に話した。けれども其の後饒太郎が、成る可く自分の肉體を人に見られぬやうにし始めた事は事實であつた。

秘密は當分誰にも觀破される心配がなく、彼は最初に豫期した通り、昂奮の極狂ひ死に死んで了ふまでどんどん進んで行けさうであつた。彼の歡樂の邪魔をするやうな訪問者も稀であつた。彼は其の頃親友と云ふ者を持つて居ない。……と云ふよりは、傲慢と不正直の爲めに親友の方から愛憎をつかされて、相手にされて居なかつたので、たま〳〵尋ねる者があつても、大概は留守を遣つて追ひ返される連中であつた。然るに或る日の事――それは丁度娘が邸へ通ひ始めてから十二日目の午後である。――ひよつこり庄司がやつて來て、少し饒太郎に話があると云つた。

彼は娘を西洋館に匿して置いて、何喰はぬ顏で書齋に現はれた。さうして、青年の姿を見るや否や、さも懷しさうに、

「やあ暫く。大分久しく來なかつたなあ。」と云つた。其の日は非常に熱い天氣で、庭は全然眞夏の如く

きら／＼と日に照され、青年の顔は漆のやうに緑色の反射を受けて輝いた居た。土塀の屋根を蔽うて居る鬱蒼とした椎の樹の枝の中に、時々あはたゞしい蟬がぢいぢいと啼いた。

「いかゞです。もう小説はお出來になりましたか。」

庄司は極く慇懃な、穏かな調子でかう尋ねたが、その穏かなのが却つて皮肉のやうに聞えない事もなかつた。

「うん、君はよく覺えて居るな。僕はそんなことなんか、とうに忘れて了つたよ。」

「それでは遊んで居らつしやるんですか。」

「まあさうだ。」と云つたが、饒太郎は相手に長々と話し込まれるのを懸念して、わざと用ありげな、落ち着かない風を示した。

「實は今日、少し眞面目なお話しがあつてお伺ひしたんです。」庄司は相手のモヂモヂする樣子に構はず、いつになく屹然とした態度で言つた。

「ふうん、どんな事たい？」饒太郎もよんどころなささうに開き直つて、徐かに煙草を吸ひ始める。

「妙な事をお尋ねするやうで失禮ですが、あなたは此の頃、お玉と云ふ女と往復して居らつしやりはしないでせうか。いづれお話し致しますけれど、此れにはいろ／＼深い仔細のある事ですから、何卒一つ、非常に勝手なお願ひですが本當の事を打ち明けて頂きたいんです。」

「そんな女は知らんねえ。」

「はあさうですか。お玉でお判りにならなければお縫と云ふのが本名なんです。――本名をお聞きにな

つたら、多分御承知の筈だと思ひますが、……」

「お縫と云ふのなら知つて居るよ。」饒太郎は譯なく降參して了つた。考へて見るといつの間に自分の秘密が洩れて居ないとも限らないので、急に恐ち氣が附いたのである。「さうして、お縫がどうしたと云ふんだね？」

「實はそのお縫を僕に會はして頂きたいと思ふんてす。」かう云つて青年は膝を進めた。彼の眉宇には犯し難い熱心の色が泛んで居る。

「…突然こんな事をお頼みしたら、或は不審に思召すかも知れませんが、あのお縫と云ふ女は以前僕の内に奉公して居た事があるんです。僕は今あなたに正直な事を申します。其の時分、僕とあの女とは人知れず初戀の仲になつて居りました。」

饒太郎はまあ好かつたと云ふやうな氣がした。彼は何よりも此の青年に自分の秘密を握られる事を心配して居たのだが、相手は反對に先方の秘密を此方へ知らせに來たのである。

「成る程其れは意外な話だ。あの女が君のところへ奉公して居たのも不思議な緣だが、しかし、一番意外なのは君の初戀と云ふ事だよ。僕は今まで、全然君が學者肌な人間で、そんな經驗のあるんだらうとは夢にも思つて居なかつたんだ。寧ろ僕は、今までその話を隱して居た君の心事を怨みに思ふくらひだよ。」

「さう仰つしられると、僕は猶更話しづらいひんですが、お縫はその後或る事情があつて、三月ばかりで暇を出されて了ひました。けれども暇を出される時まで、僕とあの女との愛情は少しも變化して居な

かつたのです。『もう私はお宅に居る事は出來ません。しかし必らず若旦那とは何處かでお目にかゝりませう。』――さう云ふ約束をして、お縫は僕と別れたんです。するとそれから半年ばかり、どうしたものかパッタリ音沙汰がありませんでしたが、一昨日の晩、思ひがけなくもあの女から僕の所へ一通の手紙が屆きました。それを讀んで見ると……」

さては彼の女め、きつと手紙の中へ己の秘密を書き込んだのに違ひない。――饒太郎は見る見る顔が眞紅になつて、かあッと上氣せて來た。恥かしいやうな面目ないやうな、溜らない不安に追ひ立てられて、彼は無理やりに靑年の言葉を遮つた。

「わかつた、わかつた。それで大概話は解つたが、君はお縫に會つた上でどうしようと云ふのだね。」

「さあ其處で僕はお願があるんです。戀愛と云ふものに同情のあるあなただと思つて、僕は實に云ひ難い、勝手極まるお願を致します。どうぞ二人を可哀さうだと思召して、お縫を僕に讓つて下さる譯には參りませんか。――妙なお話をするやうですが、若しもあなたがあの女に餘計な入費をかけて居らつしやるやうな事がありましたら、それは勿論僕の方で辨償しても宜ろしうございます。」

「まあ金の事なんかはどうでもいゝさ。たゞ此の際豫め質して置きたいのは、今の相談が君一人の考へから出た事なのか、それともお縫の意向なのかと云ふ事だね。」

「あの女を讓つて頂きたいと云ふのは僕がお縫の手紙を讀んで考へ附いた事なのです。女の方からは唯どうにかしてお目に懸りたいと云つて寄越したゞけでした。」

「はゝあ、それぢや手紙の文句と云ふのは唯それだけの事だつたのか。」

饒太郎はその手紙の中に、自分の秘密が發かれてあつたか否かと云ふ事を、內々たしかめて見る爲めにかう尋ねたのだが、どうやら相手を輕蔑するやうな意味に聞えたのは是非もない。

「しかし」と、庄司は一段と語氣を强めて、

「文句は簡單でしたけれど、あの女が昔に變らない愛情を持つて居る事は明かなんです。かう云ふと何だか可笑しうございますが、其點に就いては少しも疑の餘地がないと信じて居るんです。」

「成る程、そんならば宜からう。それさへ確かだと信じて居るのなら、君があの女を引き取る事に何等の異議もないよ。だがこゝに、僕は一言君のために注意して置きたいと思ふのは、君はあの女の素情だの性質だのを本當によく知つて居るのだらうか。」

「あなたの仰つしやる意味は大概わかつて居るつもりです。――つまり、あの女の經歷にいかゞはしい點があると云ふ事でせう。」

「さうだ。君はそれを知つて居ながらあの女と戀に落ちたのかね。」

「僕がその話を聞き込んだのはズッと後の事でした。實を云ふと、お縫が暇を出されたのは、さう云ふ噂が家の中に廣まつた結果でしたが、僕はその噂を聞いた時に、どうしてもあの女を憎む譯に行きませんでした。さうして又、その噂が果して眞實であるかどうか、誰も證據を見た者はなかつたんです。」

「いや、證據どころか、あの女は新聞に出されたり、檢事局へ擧げられたりして、モウ立派な刑狀持ちになつて居るんだ。――僕は勿論一時の慰みで弄んで居るのだからどうでもいゝが、君が眞面目にあの女を愛して居るのだとすると、隨分ディグニティーにも關係する事だからな。」

「御親切は有り難うございます。けれども僕はどう云ふものか、たとへあの女が惡人であらうとも此れ迄の約束を忘れて了ふ氣になれないんです。あの女と一緒になつて居れば、先方が僕の感化を受けて善人になるか、僕が先方の感化を受けて惡人になるか、いづれかの結果になる事は覺悟して居りますが、それさへ僕はよんどころないと思ふんです。」

「若しもあの女を引き取つたとして、君は全體どうするんだ。兩親の許しを受けて内へ連れ込まうとでも云ふのかい。」

鐃太部の言葉はだんだん荒くなつたが、庄司は飽く迄も落ち着き拂つて、時々にたにたと笑ふばかりであつた。柔順な、純潔な青年であるとのみ思つて居た人間に、彼は全然欺かれて、背負ひ投げを喰はされたやうに感じた。飼ひ犬に手を咬まれるとは此の事を云ふのだ。憎い奴だ。と、彼は心の底で呟いた。

「その事に就いても、僕はあなたにどうしたら宜いか御相談したいと思つて居ります。兩親が許してくれる筈はありませんから、當分二人で何處かへ逃げようかとも考へて居るんです。尤も金は僕の名前で銀行から引き出せるものがありますから、當分困る事はありません。――何かいゝ方法はないでせうか。」

何事も獨りで極めて了つたやうな青年の口吻が、相手には又恐ろしく癪に觸つた。

「金さへあれば、心配な事はないだらうよ。――」鐃太郎は至極冷淡な調子で云つた。自分が目下いかに不愉快を感じて居るかを、成る可く相手が氣が付いてくれるやうに祈りながら。……

「それでは甚だ性急のやうですが、今日兎も角もお縫に會はせて頂きませう。會つて話をした上で、二

人て共々にお願ひする事に致しますから。」

「うん」いやだ〳〵と思つて居るのに、何となくヂリヂリと壓し付けられて承諾を餘儀なくされたので、彼は一層面を膨らせながら、ふと、或る奸計を胸に疊んだ。「…會はせるのは差支へないが、生憎今日は用事があつてね。……」

「はあさうですか。ては又ゆそくり會ふ事にしても、ちよいと今日會はせて下さる譯に行きますまいか毎日お宅の西洋館へ來て居ると云ふ手紙の文言だつたものですから、……」

最後の言葉を聞くと同時に、さながら霹靂に打たれた如く饒太郎の體はブルブルと顫へた。あまり顫へ方が激しいので、却つて庄司の方がきまりの惡ひ位てあつた。あの女が手紙の中に彼の秘密をすつぱ拔いた事は、もう略疑がない。……

「毎日來る筈にはなつて居るのだが、どうしたものか今日はまだ見えないよ。」

「それては甚だ恐れ入りますが、あの女の住所と云ふのは何處でございませう。それを敎へて頂きたいもんですが……」

「住所は僕もよく知らないんだ。僕の方からは一遍も行つた事がないもんだからねえ。――手紙に書いてありさうなもんぢやないか。」

「手紙には毎日此處の御邸に來て居ると書いてあるんてす。――僕の方にも、非常に急ぐ事情がありますから、斯うやつて御無理をお願ひするんてす。」

「だから二三日中にもう一遍來たらいゝぢやないか。何だか君は疑ぐつて居るやうだけれど、僕は先か

ら誠意を以て話をして居るんだぜ。」

から云つたら一と溜りもなく閉口するであらうと思ひの外、其の時まで優和な態度を裝つて居た青年は、忽ち唇を尖らせた。

「しかし斯うなれば、旣に誠意があるなしの問題ではないと存じます。僕はあなたを先輩として今日まで尊敬もし、信用もして居りましたが、あなたが如何なる心事を抱いて居らつしやるか、此れで大概解つてしまひました。――實はあなたにあまりお氣の毒ですから、成る可く隱して居る積でしたが、まあ此の手紙を御覽下さい。或は此の手紙を持ち出すのは、あなたに匕首を突き付けるのと同然かも知れません。」

庄司はいよ〳〵懷ろから娘の手紙を取り出す事になつた。一枚の半紙へ鉛筆でこまごまと走り書きした物を、封筒の中から引き出すと、其れを饒太郎の前に擴げて一々指摘しながら讀み始める。

「……此れを御覽になれば、あなたが噓を仰つしやつた事がよく判るのです。こゝにこんな事が書いてあります。――『わたくしは毎日〳〵邸の西洋館へ這入り込んで一日その男の相手を勤めて居ります。明後日も午後の一時から夕方の六時ごろまで其處へ參りますから、歸りに是非〳〵お目にかゝりたう存じます。どうぞ午後の七時ごろまでに兩國の停車場へ來て待つて居て下さいまし。』――御覽なさい。此れは一昨日の日附けですから今日はどうしても來て居る筈です。それから又こんな事も書いてあります。『此の男は少し氣違ひじみた人間で何でもわたくしの云ふなり次第になるんです。お金でも着物でも、寄こせと云へばいくらでも寄越すのです。一日でも顏を見せてやらないと、すぐにわたくしの所まで迎ひ

に來るくらゐ夢中になつて居ります。』――此れで見ると、あなたがお縫の住所を知らないと云ふのは、全く出鱈目に違ひない。それからまだ此の先を五六行お讀みになつて御覽なさい。」

溫厚な庄司が、何故突然こんなに激しく腹を立てたのかあまり不思議で饒太郎は暫くアッケに取られて居た。やがて彼の顏色は再び充血し始めて、髮の毛までも染まりさうに眞紅になつた。彼の瞳はおづおづと手紙の文句に注がれて居たのである。所謂匕首を突き付けられたも同然と云ふ部分には、下のやうな事柄が書かれて居る。――

此の泉と云ふ人はほんとに奇妙な男でございます。何でもわたくしにひどい目に遇はして貰へば其れが嬉しいさうで、毎日〱たゝわたくしに打たれたり蹴られたりして喜んで居ります。それ故わたくしは此の人にどんな無理な事でも命令することが出來るのでございます。……ですから此の男に痲藥を嗅がせて眠らせて置けば、毎日でもあなたとゆつくり御話をする時間がございます。……今に此の人は私のために裸になつて了ふかも知れません。……若旦那樣、私がこんな惡魔になつて了つた事をお許し下さいまし。でも私は惡い周旋屋に引かゝつてお金を絞られて居る爲めにこんな眞似をしなければならなくなりました。お前がどんなに墮落しても、決して僕を忘れるなと仰つしやつて下すつたお言葉をおもひ出して、厚かましくもこんな手紙を差上げる氣になりました。どうぞ私の胸の中をくんで、願をかなへてやつて下さいまし。もう此の頃は毎日毎晩、あなたのお美しい、繪のやうなお顏が眼の前にちらちらして居りますのよ。及ばぬ戀とは思ひながら……

「あなたは先(さつき)、僕のディグニティーに就いて御心配下すつたやうでしたが、僕は寧ろあなた御自身のディグ

ニティーが氣がゝりであらうと思ふんです。あなたが强ひてあの女を隱さうとなすつても、僕の決心次第で奪ひ取る事は何でもございません。あなたの名譽を思へばこそ、あなたの人格を尊重すればこそ、斯うやつて事情を打ち明けて御頼み申して居るんです。――いかゞでせう。今一度考へ直して下さる譯には參りませんか知ら。」

饒太郎は憎い憎いと思ひながら、かう云つて威丈高になつた青年の容貌の、世にも勝れた美しさを感服せずには居られなくなつた。彼は此れ迄幾度か、女を愛するやうに此の青年を愛しようとして失敗して居たが、今や突然、名狀し難い愛着と崇拜の情が次第々々に憎惡の情に打ち克つて來た事を意識した。青年が强者の形を備へれば備へる程、彼はますます Masochism の原則に從つて壓倒される事を喜ぶやうに傾き始めたのである。

「庄司君、成る程此れは僕が惡かつた。勘忍してくれ給へ。」と、彼は快い調子で云つた。

「實は君の推察通りあの女は隱してあるんだ。會はせて上げるから一緒に來たまへ。」

饒太郎は青年を案内して西洋館へ這入つて行つた。彼の胸の中には、或る新しい樂しみが密かに計劃されて居た。

饒太郎はふと眼を覺ました。彼はいつもの通り自分の四肢を縛られて、仰向けに臥かされて居る事に心付いた。我に復つた一二分間、頻りにぱちぱちと眼を瞬いて居たが、やがてぱつちり瞳を据えると、

殆んど自分の顔の眞上に二つの顏があるのを見た。あの青年と娘とが睦じさうにソオファへ腰掛けて、自分達の足元に打ち倒された彼の姿を眺めて居る。

「御覧なさい。眼がさめたらしいから……」

娘は靑年の肩を叩いて、饒太郎の眩しさうな表情を指した。とたんに彼は朦朧とした意識が蘇つて來るのを感じた。先庄司を此の部屋へ連れ込んでから間もなく、自分は不意に娘のために痲藥を嗅がされて了つた事を想ひ出した。

「あなたもう氣が付いたの。其の恰好を若旦那に見せて上げたかつたもんだから、實はちよいといたづらをして見たのよ。」

かう云つて、娘は面白さうに笑つた。

「庄司君、僕は每日斯う云ふ目に會はされて居るんだよ。どうだい、僕の氣違ひだと云ふ事が解つたかい。」

饒太郎は鼻の頭に汗を搔きながらこんな事を云つた。

「うん解つたとも。」と、庄司は傲然として答へた。「僕は君の非常な秘密を知り得たと云ふ事が愉快で溜らない。此の恰好は是非とも今度寫眞に撮つて置くつもりだ。」

「寫眞にでも何でもお撮るがいゝ。君とお縫のためならば、僕はどんなに侮辱されても平氣なもんだ。だから其の代り、二人とも僕を捨てないでくれ給へ。僕は君たちの奴隷となつて使つて貰へれば結構なんだから。」

「お金があるうちだけは、奴隷にでも何でもして上げてよ。それから後は知らないけれども。」娘は庄司を顧みて、「ねえあなた、さうぢやなくつて？」と云つた。

「僕はお前のやうな惡黨ぢやないよ。」

庄司は立ち上つて、部屋の中を行つたり來たりし始めた。面白さうに足拍子をつけて、……

七

その年の十月の末、寒い風の吹く秋の夜の十一時ごろであつた。源之助が「切られお富」を演じて居る宮戶座の夜芝居がはねて、一幕見の梯子段をドカドカと降りて來た群集の中に一人の紳士が交つて居た。山高帽だの、二重廻しだの、蠟虎の襟卷だの、いろ〳〵の物で暖かさうに面體を押し包み、黑繻子の足袋に細鼻緖の雪駄を穿いて、すた〳〵と「松島」の角まで步いて來たが、暫く立ち停まつて考へた末、繪看板を照らして居る電燈の光を避けながら、其の儘公園へは這入らずに、薄暗い溝に添うた「大金」の前の往來を馬道の方へ辿つて行つた。

丁度彼が電車通りへ出ようとする五六軒手前まで來た時分、突然後ろから、

「おい待ち給へ。」と、聲をかけた黑い人影があつた。紳士は無言の儘ちよいと後ろを振り返つたが、またすた〳〵と足を早めて行き過ぎようとした。

「おい、おい、待つてくれ給へ。君は泉君ぢやないか。」

かう云つて、黑い影は小刻みに駈けて來て追ひ縋つた。

「おう」と答へた紳士の聲は例の襟巻に妨げられて、極めて曖昧に微かに響く。
「なあんだ、やつぱり君ぢやないか。……僕は松村だよ。隨分御無沙汰しちまつたなあ。」
「いやどうも暫く。しかしよく僕だと云ふ事がわかつたね。」
饒太郎はしやべりながら勝手にどんどん歩き始めた。
「君は先宮戸座の立ち見をして居たらう。彼處で僕は氣が付いたんだが、あんまり顔を隱して居るので、どうもハッキリ判らなかつたんだ。此れから何處へ行くんだい。」
「何處へ行くつて……內へ歸るのさ。」
「それにしてはいやに急いで歩くぢやないか。此の頃君は何處に住んで居るんだ。」
「此の頃か？——此の頃はやつぱり深川に居る。」
饒太郎は袂から葉巻を出してマッチを擦つた。甘い、上品な匂のする煙が松村の鼻先を撫でるやうに流れて行く。
「噓をつき給へ。何遍僕が尋ねて行つて留守だと云ふし、手紙を出しても返辭をよこさないし、かいくれ姿を見せないぢやないか。」
「どうも濟まなかつた。實はつい面倒臭かつたものだから、いつもの無精をきめ込んぢまつて……」
「ふうん、さうかい。……まあいゝや、いろ〳〵此方に云ひたい事もあるんだが、何しろ往來ぢや話が出來ない、何處か其處いらで一杯飲みながら話すとしよう。」
「歩きながらだつて話は出來るさ。それに今夜は遲いから、又明日あたりゆつくり會ふ事にしたいなあ。」

「駄目だよ、駄目だよ。捕へた時に話をしなけりや、君は到底埒が明かない人間なんだから。……ねえ君、ほんとに何處かへ這入らうぢやないか。君は大さう暖かさうな外套を着込んで居るが、僕は御覧の通りの恰好で、寒くつて寒くつてやり切れやしない。」

成る程松村は縞の着物に縮緬の兵兒帶を卷きつけたきり、帽子も冠らず羽織も纏はず見るから寒さうな形である。

「しかしお氣の毒だが僕は今夜は持ち合はせがないんだ。何しろ宮戶座の立ち見をする位だから、大概不景氣はわかつて居るだらう。……君の話と云ふのは聞かないでもお察し申すが、今も云ふ通りの始末で、まことに重々申し譯がない。」

「ふざけちやいけないぜ君。重々申し譯のないのは當然の事だが、唯口先であやまつたゞけで濟むと思ふのかね。」

松村はよんどころなく肩を並べて歩きながら、大分甲高い調子で云つた。

「……あんまり仕打ちが癪に觸るから、一層警察へでも訴へてやらうかと思つたんだけれど、兎に角君は名もあり地位もある人間だから、まあまあ今日まで虫を殺して居た譯なんだ。ほんとに君考へても見給へな。あの女なら金はいくらでも出すとか、己は天下の文豪だとか、えらさうな事ばかり並べて置いて、最初に八拾圓よこしたつきり、その後一文も出さないばかりか、あの女の居所さへも知らせないなんて、全くかたりも同然ぢやないか。實際に君が申譯ないと考へて居るなら、明日にも早速解決を附けてくれ給へ。僕は今度こそもう容赦はしないぜ。君の出やうに依つちや如何なる非常手段でも取る積り

だから。」

「あはゝゝゝ。まあそんなに云はんでも、話の附けようはあるだらうぢやないか。全體君は、僕がその後一遍も金を拂はんと云ふけれど、それは非常な間違ひなんだよ。拂はないどころか僕は月々百圓以上もあの女に渡して居たんだぜ。」

「今になつてそんな出鱈目を云つたところで何の役にも立ちはしないよ。よしんば君があの女に何百圓渡した事があるとしたつて、僕は一文も受け取つて居やしないんだ。……」

「けれどもさうなると大變話が違ふやうだぜ。僕は金を出して居るのに、あの女が君に渡さなかつたと云ふ事になるんだぜ。其れて僕が攻撃されるのは少しひどいな。」

「いゝや、君がいくら辯解したところて、誰が眞に受ける奴があるもんか。大方君はあの女と、結托してそんな芝居を仕組んだのだらう。」

「こいつは驚いた。僕を攻撃するのもいゝが、血迷つちやいかんよ。」

「此のくらゐ馬鹿にされゝば、ちッたあ血迷ふかも知れないさ。――結托したのが嘘だと云ふなら、あの女の居所を知らせ給へ。丁度此れて三月と云ふもの、てんで彼奴は僕の内へ寄り附きもしないんだ。」

「僕にしたつて同じ事さ。散々金を捲き上げられて逃げられて了つたきり、何の便りもありやしないんだ。僕の方こそ邪推をすれば、君があの女とグルになつてやつた仕事のやうにも取れるぢやないか。」

「惡黨！　君はほんとにえらい惡黨だな。それだけの奸智があれば立派なもんだ。文士なんぞにさせて置くのは勿體ないや。」

松村は憤怒を通り越して、寧ろ呆れ返つたやうに眼を見張つた。

「お前に預かつて忝けないが、惡黨の資格には孰方が餘計適當して居るかちよいと解らんよ………まあ兎に角、今云つたやうな事情だから宜しく御推察を願ひたい。いくら君が急き込んだところで結局無駄な話だから、又明日でもゆつくり御相談に應ずるとして、今夜は此の儘失敬しよう。ねえ君、――それぢや左樣なら。」

饒太郎は惡黨と云はれたので少し圖に乘つたらしく、わざとからかひ半分に逃げ支度をして見せる。

「おい〳〵待つてくれ給へ。」松村は狼狽して相手の外套の袖を摑んだ。「それなら君はどうしても居所を教へてくれないんだな。」

「だつて知らない者は仕方がないやね。」

「それから損害賠償の方はどうしてくれるんだ。六月以來五ヶ月分の拂が溜つて居るんだから、少くとも百五六拾圓は貰はなけりやならないんだぜ。」

「先も云つた通り僕の方では金を拂つて居るんだから、此の上拂ふ必要はない筈なんだ。けれども君が折角さう云ふもんだしするから、百五拾圓は別問題として、全然出さないと云ふ譯にも行くまい。……何しろ今夜は遲くなつたから、明日深川へやつて來給へ。なあに大丈夫だよ。きつと留守なんか使やしないよ。」

「あぶない、あぶない。一旦逃げられたが最後、容易に君は捕まらないんだからなあ。――ではかうしよう。今夜一緒に僕の内へ泊りに來給へ。さうして明日の朝君の行くところへくツ附いて行かう。」

「恐ろしく執念深い人間だな。大丈夫だと云ふのに安心したらいゝぢやないか。」
「そんなら例に依つて手附金を貰つて置かうか。五圓でも十圓でもいゝ。」
から云つて松村は乞食のやうに兩手を出した。
「今夜はその五圓すら持ち合はせがない。いゝぢやないか明日だつて。」
「その鹽梅ぢや、明日もどうだかむづかしいもんだな。」
「ふん、落ちぶれても僕は僕だ。五十や百の金が出來ないで溜るもんか。」
饒太郎はとうたう何とか誤魔化して、松村を讓歩させて了つた。二人は明くる日の朝の八時を約束して、吾妻橋の袂で別れた。そこから松村は千住行の電車に乘つたらしかつた。
獨りになつた饒太郎は、今度はとぼとぼとした力のない足どりで、心細さうに雷門の方へ歩いて行つた。もう十二時近くであつた。今夜は何處へ泊まらうか知らん、一層夜の明けるまで東京市中を歩いて居ようか知らんなどゝ思つた。彼は松村に話した通り、服裝ばかりいやに立派でも、懷ろには既に三圓の金すらなかつた。
そればかりではない。彼は全くお縫のために「散々金を捲き上げられて逃げられて了つた」のである。お縫は饒太郎に接近してから一と月程の間に、最初の注文の如くすつかり毒婦の本性に復つて、饒太郎を勝手氣儘に繰つた揚句、出來るだけ多額の金を搾り取つた。彼はお縫に命令せられるまゝにあらん限りの手段を盡して、殆んど竊盜しないばかりにして金を作つた。高利の金は勿論借りた。着物は大概質に入れた。書籍は悉く賣飛ばした。殘つて居るのは「生ける屍」ばかりである。

さすがに庄司は饒太郎程愚かではなかつた。墮落した先輩に導かれ、墮落した婦女子に惑はされて、暫くの間「惡」に親しんで居た青年は、やがて自己の周圍を反省して竦然とした。さうして今から二た月ばかり前に饒太郎とお縫とに絶交狀を送つたきり、再びもとの模範學生に復つて了つたのである。庄司に捨てられたお縫は一層自暴になつて、今度はほんたうに饒太郎を打つたり蹴たりした。それからいよ〳〵饒太郎に一文の金を才覺する能力もなくなつた時、外の男を拵へて早速何處かへ逃げて了つた。

けれども亦、一方から觀察すれば松村の憤慨するのも無理はない。「そんなものを松村にやる必要はないのだから、みんな私におよこしなさい。彼奴がいくら怒つたところで何が出來るもんですか。」かう云ふ事をお縫に云はれて、饒太郎は其の通りにして居たのである。その結果、松村が再三再四深川へ尋ねて來ても、二人は逃げて廻つて一度も會つてやらなかつた。

惡い事、耻かしい事、恐ろしい事が、四方八方から一度に饒太郎の一身へ降つて懸つた。最後の最後まで我慢して居た高利貸、連帶債務者、待合の帳場、――あらゆる種類の人々が、初めは笑ひ顏をして、だんだんしまひには喧嘩腰になつて、每日のやうに彼の住所へ談判に行つたり、催促狀を送つたりした。書齋に蟄居して縮み上つて居た彼は、電話のベルのちりちりと鳴る音を聞いても、胸を轟かせた。

彼は遂に居たゝまれなくなつて、十圓ばかりの小遣ひを懷ろにして三日程前に深川から姿を消したのである。其れ以來、何處で夜を明かすものか晝間になれば必ず淺草公園に現はれ、成る可く殘忍な毒婦物や探偵物の看板を捜して活動寫眞だの緞帳芝居だのを一生懸命に見物して廻つて居る。目下の彼には此のくらゐ面白いものはないのである。殊に西洋のすつきりした、立派な肉體を持つた婦人達が出て來

る寫眞を見ると、彼は溜らなく愉快になつて、現在の窮境などはすつかり忘れ果てゝ了ふ。

——あゝ己は西洋へ行きたいな。あんな莊嚴な、堂々とした婦人の肉體を見る事の出來ない國に生れたのは己の不幸だ。藝術が何だ、文學が何だ。こんなちぼけな體格と、ぼんやりした色彩と、淺薄な刺戟しかない日本に居ながら、立派な藝術なんか出來るもんか。——

どうかすると、彼はこんな事を考へて、遙かに歐洲の花の都の巴里の夜を憧れたりする。さうかと思へば、宮戸座や常盤座あたりの人殺し芝居を熱心に拳を固めて見物して居る。彼の解釋に從ふと、日本でどうやら藝術の本旨に一番近いものは、此れ等の慘酷な、肉感的な人殺し芝居なのである。

さう云ふ驥梅て、晝間から宵のうちまでは彼も非常に愉快てあるが、夜更けになつて宿を求める刻限になると、だんだん哀愁に襲はれて來る。おまけに今夜は三日に亘る見物の後、財嚢が盡きて、體が綿のやうに疲れて、よんどころなく深川へ舞ひ戻らうかと思つて居たところを、運惡く松村に捕まつたのである。あしたの朝彼奴が來るとすれば、今夜はどうしても深川へ歸る譯に行かない。折角欺して逃れたものを、又捕まつたら大變である。……今夜一と晩、何處か泊めて貰ふ家はないか知らん。……さう考へたが、それでなくとも此の夜更けに、借金だらけの饒太郞が宿を求めに行くやうな友達もなければ待ち合もない。

ふと彼は、たつた一軒、而も此の雷門から直き近いところに、たしかに泊めて貰へる家のある事を想ひ出した。其處の家ならば、金は一文も費さず、別段いやな顏もされずに泊まれる事はたしかであつた。唯あんまり長い間、殆んど一年間も無沙汰をして居たので、聊かきまりが惡いだけの話である。こんな

い〻家のある事を彼はどうして今迄考へ附かなかつたのか實際不思議な譯である。其の家と云ふのは外でもない。此の饒太郎を生んでくれた「親」の家なのである。換言すれば此れこそほんたうの「自分の家」なのである。彼は今迄、自分の眞實の母親が失くなつた父の恩給を便りにして鳥越の町にさ〻やかな家計を營んで居る事を忘れて居た。其の家には二年前まで自分も育てられて居た事を忘れて居た。其處へ行けば、母の外に十九になる妹も居れば十一になる弟も居る。それだのに彼は、將來父の家を繼ぐ可き總領の彼は、年中方々を飛び歩きつ〻、一年近くも母の家を訪れなかつた。何と云ふ忙しい事であつたらう！

饒太郎が鳥越の家の前まで着いた時はもう十二時過ぎであつた。寢靜まつた家の雨戸をとんとんと叩くのにも、彼はさすがに心が怯えた。

「誰方でございます。」

眼敏い母はすぐに氣が付いて中から聲をかけた。

「僕ですよお母さん。饒太郎ですよ。」

彼の氣持ちは故郷へ逃げ歸つた落人のやうに悲しかつた。

言葉を聞いて母と妹とはなつかしさうに起きて來た。玄關の次ぎの六疊の間に、臥て居た夜具蒲團を片寄せて、親子三人は睦しげに据わつた。末の弟は何も知らずにすや〳〵と寢て居た。

「お前はまあ、全體どうしたと云ふのだえ。いくら深川へ手紙をやつても、尋ねても來ないし、返辭もよこしてくれないぢやないか。時々お前の事が新聞に出て居るので、まあ安心はして居るけれど……」

母は薄暗いランプの下で、伜の顏を眺めながらしみ〴〵と愚痴をこぼした。それでも彼の女は、自分の伜はえらい藝術家だと信じて居た。

「だつてお母さん仕方がないさ。」饒太郎は元氣のいゝ調子で云つた。「……何しろ學生時分と違つて、ほんとに此の頃は忙しいんだから、手紙一本書く間もないんだ。新聞や雜誌からは始終原稿を賴まれるし、其の間に勉强もしなければならず、……」

「まあ、それもさうだらうがねえ。」

かう云つて母は喜ばしさうに笑つた。饒太郎の噓つきも此の時ばかりは孝行の役目をするのである。

「あゝ兄さんが來た！」

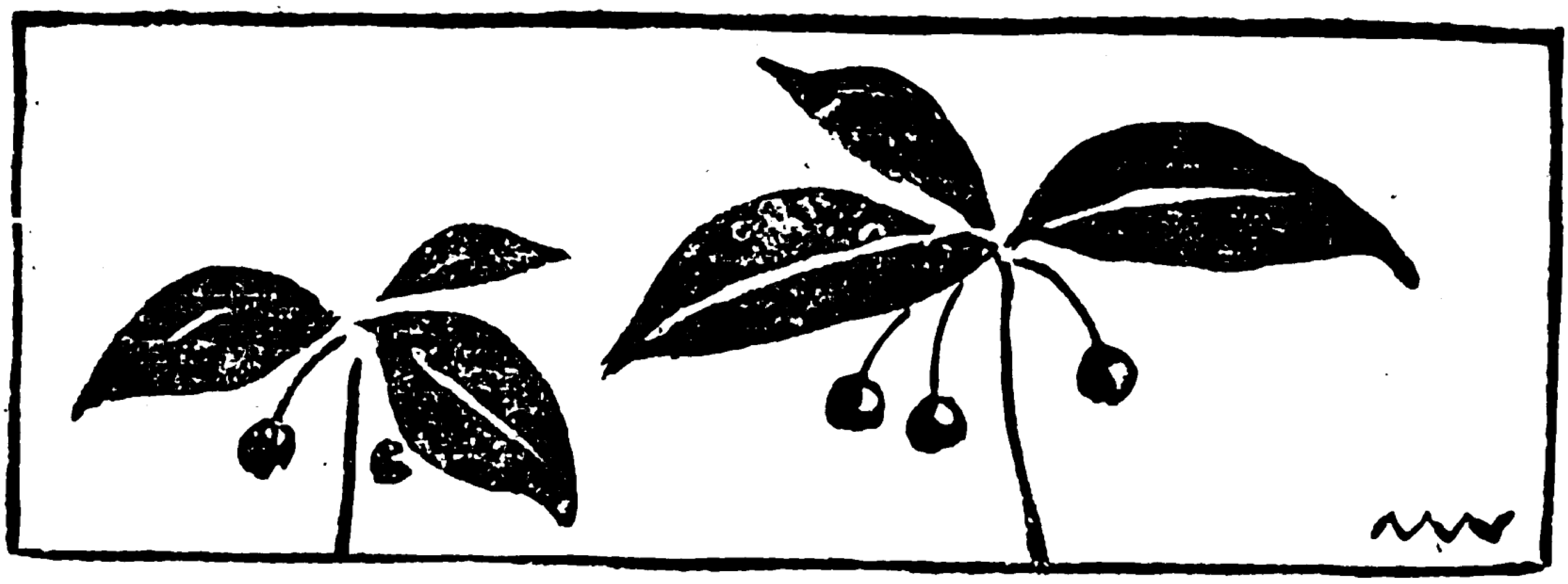
と、寢て居た弟は俄に眼ざめて、蒲團を蹴返して飛んで來た。「兄さん、兄さん、隨分暫く來なかつたねえ！」

「おゝ、ほんと暫く會はなかつたな。どうだい此の頃は勉强して居るかい。……明日兄さんが淺草へ伴れて行つてやらうか。」

饒太郎は體がふるえて、何だか腦髓が凍るやうな嬉しさを覺えた。突然彼は良心の襲撃に會つてぽたり、ぽたり、と淚をこぼし始めた。

人間の感情と云ふものはどうしてこんなにいろいろの、馬鹿に異つた方面が澤山あるんだらう、と彼は思つた。同時に松村だの庄司だのお縫だのゝ顏がごちや〳〵と彼の頭の中に泛かんだ。

（大正三、八、廿、作）



天満宮

上司小剣

一

府立病院の二等室は、其の頃疊が敷いてあつた。竹丸の母は其の二等室に入つてからもう四ヶ月の餘にもなる。一度竹丸をよこして吳れと、度々父への便りに言つて來たけれど、父は取り合ひもしなかつた。

千代松といふ子供のやうな名を有つて居る人があつた。四十二の厄年が七年前に濟んだ未の八白で、「あんたのお父ッつあんと同い年や」と言つてゐるが、父に聞くと「いや乃公は亥の四綠で千代さんより四つ下や」と首を振つてゐた。けれども竹丸の眼には却つて父の方が老人に見えた。竹丸は今年十二で、二十歳ぐらゐの人はもう年寄のやうに思つてゐた。

千代松といふ人は頭髮を丁髷に結つてゐた。幾ら其の頃でも、村中で丁髷はたゞこの千代松の頭の上に見らるゝだけてあつた。年に比べて髷が大きいとい

ふことで、人々はよく千代松の髷のことを『穢多の金槌』と呼んでゐた。

其の千代松のところへ病院の母から、是非竹丸を連れて來て呉れといふ手紙があつたさうで、千代松は其の手紙を懷中にして竹丸の家へ來た。

竹丸の家は、天滿宮の別當筋で、別當は僧體であつたから、血脉は續いてゐないが、第四十五世別當尊祐の代になつて、國の政事に改革が起り、封建が廢れたので、別當の名で支配してゐた天滿宮の領地二ヶ村半、五百石を上地し、別當は還俗して神主になり、名も前田道臣と改め、髮の伸びるまでを附髷にして、細身の大小を差し、頻りに女を買つて歩きなぞした。それが竹丸の父である。

『あんたの阿母の來やはつた時は、えらいこッちやッた。七荷の荷でなア。……今でも納戸におまッしやろ、あの簞笥や長持は皆阿母が持つて來やはつたんや。あの長押に掛けてある薙刀も。……嫁入りの荷の來る時、玄關で薙刀を受け取るのが難かしい云ふて、わたへや忠兵衞はんが竹竿で稽古したもんや。』

丁ど道臣が朝の日供に拜殿へ出てゐたので、千代松は竹丸を相手にして、社務所を兼ねた家の勝手口でこんなことを喋舌つてゐた。

『あんた、まア一つおあがりやす。直ッきに戻つて來やはりますさかい。』

女中のお駒が、かう言つて番茶を汲んで出した。煙草を吸はぬ千代松は、手持無沙汰で丁髷の鬢を撫でたり、出もせぬ咳をしたりしてゐたが、

『相變らず別嬪やなア、お前幾つや。』と、竹丸を棄てゝお駒の方へ向き直つた。お駒はたゞ笑つてゐた

けれど、

『ほんまに幾つや。』と、千代松が重ねて問ふたので、

『六ておます。』と羞かしさうに、袖で口を掩ふた。

『二十六？』

笑ひながら千代松の嘲弄ふのを、お駒は眞面目に受けて首を振つてゐた。

『けんど十六とは見えんなア、十八九、二十歳に見る人もあるやろ、大柄やさかい。』と、千代松はまじ〳〵と、お駒の眞ん圓い、色の白い顔の、眼のパッチリとした、睫毛の長いのに見入つてゐた。

もうそろ〳〵春先きで、逸早く這ひ出した蟻が、黑光りになつた臺所の大黑柱の根方の穴へ歸つて行くのを見て、

『あゝ蟻さんのお歸り〳〵。』などと、お駒は他愛もないことを言つた。

『お前も家の旦那と定はんと兩方では、骨が折れるなア。』と、千代松は丁髷頭を掉り〳〵、にや〳〵して言つた。

『知らん、嫌ひ。』と、お駒は長い袂を振つて立ち上つた。

『けんど用心せんといかんて、旦那は好きやさかいなア。お前も奥さんみたいな病氣になるで。……』

『へえ――。』とお駒は中腰になつてゐた。

『眞言律で、魚は喰へず、牝猫も飼へなんだのが、還俗したんやもん。張りきつた馬の手綱を切つたやうなもんや。……平野屋のお源を手始めに、方々撫で斬りや。』

「家には昔し馬がゐたんだすてなア。」と、お駒は珍らしさうにして聞いた。
「さうや、あの納屋の横に馬小屋があつて、旦那が馬に乘つて平野屋へ散財に行かはつたんや、お源に惚れはつてな。……もう十七八年も昔しのこッちや。」
かう言つて千代松は、チヅと考へ込む風をした。
「わたへのまだ生れん前のことだすな。……妙なもんや。」と、お駒も何か考へ出したやうで、また其處の板の間に坐つた。
「何が妙や。……お前がまだ生れん先きから女子狂ひしてた人と、何んするのが妙やちうんかいな。」
と、千代松は元の笑顏になつた。
「またあんなこと言やはる。嫌ひ。」
お駒はさッと紅を刷いたやうな顏色になつて、俯ぶいてゐた。
「まッさら嫌ひでもあるまい。頭が禿げてゝも、旦那は親切やろ。」
「うだ〱いふとくなはんな。あんたとこのお時はんに恨まれまんがな。」
お時といふ名を聞くと、千代松は忽ち急所でも突かれたやうに默つて了つた。
「あんた、ちよッとも白髮がおまへんな、毛も多いし、入れ毛してなはるんか、眞ン中は禿げてまッしやろ。」
やゝ暫くしてから、お駒は罪もない物の言ひ樣をして、千代松の丁髷を見詰めた。
「何んの禿げたるもんか、入れ毛なんぞしてえへん。」と、千代松は頭の秘密を押し隱すやうに、右の手

て月代の邊りを押へた。

『嘘や。禿げたるさかい、そんなわけ（醫の事）に結ふてはるのや。』

『禿げたるも糸瓜もあるもんか。』と、千代松は周章てたやうにして言つた。

『それ、言やはつた。』と、お駒は崩れんばかりに笑つた。千代松も氣が付いて共に笑つた。

言葉の間に『糸瓜』といふことを挾むのが千代松の癖で、村の人々は『糸瓜の千代さん』といふ綽名を命けてゐるのである。

二人て笑つてゐる最中に、道臣が拜殿から歸つて來た。風折烏帽子に淨衣、利休を穿いて、右の手に笏を持つてゐる。出入の度に門の敷居ヶ跨く時、『えへん、えへん』と空咳をするのが、この人の癖であつた。

二

勝手口から上りながら、道臣は臺所の千代松をチラと見て、輕く會釋をすると、次の室に入つて、柱の折れ釘に烏帽子を掛け、淨衣は衝立の前に脫ぎ棄てた。表に陵王の舞樂を極彩色にかき、裏に罫綃の野馬が三頭遊んでゐる衝立の上には、お駒のヨソイキの晝夜帶が眞ッ赤なハギを見せてかゝつてゐた。

白衣に淺黃の袴の平服になつて、居室の爐の前に坐つた道臣は、ポン〱と快い音のする手を二つ鳴らしてお駒を呼んだ。

『お駒どんお召しだすて。』と千代松は莞爾した。

『千代さんを此方へ呼んどいて。』と、道臣は、四疊半の居室の入口に手を支へてゐるお駒に言つた。

茶室がゝつた四疊半に爐を隔てて對座してゐる主客の姿が、勝手の方から見えてゐた。薄い毛を總髮のやうに撫であげた道臣の頭と、千代松の丁髷とが、かたみに少しづゝ搖いて、ねち〳〵とした話聲が、途切れ〳〵に聞えた。

この家は昔しの六坊の一つであつた梅の坊といふのゝ建物である。東の坊に中の坊に梅の坊に西の坊に北の坊に知足坊の六坊の中で、西、北、知足の三坊は疾くに廢絶して、其の跡は竹籔になつてゐるが、東、中、梅の三坊だけが上地の時まで殘つて、村の人々は東さん、中さん、西さんと呼んでゐた。西さんといふのは梅の坊のことで、ズッと昔の西の坊のあつた時は、梅さんと呼ばれてゐたさうである。

別當の館は、この六坊をば、たとへば堵列した兵士のやうに見て、それに號令してゐる指揮官といつたやうな前面の地位にあつて、天滿宮の本殿、拜殿と並んでゐた。其の館のことを昔しは役所と言ひ、別當の旨を受けて狹いながらも獨立した領地の裁判をする代官が詰めてゐた。其の北には祭事を扱ふ御供所があり、其の東には形ばかりの空濠に臨んで、小ひさな牢屋があつた。

接近した他領の民が、或る惡事をして捕へられさうになると、よく天滿宮の領地へ逃げて來て、別當に縋つてこの牢屋に入れて貰つたといふやうな昔話も殘つてゐる。高が五百石でも、何分幕府の直轄であるから、かうなると他領の役人は手が出せない。人を助けるのが出家の役とでもいふのであらう、別當はこの牢屋に入つたものに自由を與へて、三度の食事は總門前の水茶屋を兼ねた小料理屋から取り寄せることを許し、夜は外出をさせなどした。

罪人に篏める手錠は、自分に拔き差しの出來る緩いもので、牢屋の入口には締りをしてないから、土地の者でこの牢屋へ入れられた男なぞは、晝間でもブラ〱家へ歸つて、月代をしたり、酒を飮んだりした。月代のしたてに代官から呼び出しがあると、流石に青々と剃り立ての頭では白洲へ出られない。そこで月代をした上へ引火奴を黑々と糊で貼り付けて出ると、一通りの調べが濟んでから、代官が繼ぎ裃の衣紋を正して、

『こりや源六……面を上げい。』と叫ぶので、恐る〱顏を上ると、代官はにこりともしないで、

『頭の火の用心をせい。』と言つたといふやうな昔話もある。

其の牢屋の跡には雜草が生ひ茂つて、春は村の子供等が土筆を摘んでゐる。役所と御供所との建物は一時小學校になつて、渡邊といふ漢學の老先生が來てゐたが、學校は別に新らしく建てられ、老先生はます〱老いて往く處を知らずになつた。罪人の寢た牢屋の跡にも別當の住んだ館の跡にも、代官の坐つた白洲の跡にも、同じ雜草が生へてゐた。昔しわざ〱都の槖駝師を連れて來て造らせたといふ遠州流の前栽も殘らず草に埋れて、大きな石の頭だけがニヨツキと見えてゐた。土地の槖駝師が昔しの名匠の苦心を雜草の中に學ばうとして、新らしい草鞋を朝露にじと〱させながら、埋れた泉石を探り歩いてゐることもあつた。

東の坊も中の坊も皆知足坊、北の坊、西の坊の後を追ふて竹籔になつた。還俗して神主になつた別當は、たゞ一つ取り殘された梅の坊に移り住んで、『西さん』と呼ばれてゐた。

『西さんそこへと飛んで來て、何をするかと見てあれば、高天原に神ずまり、婢の腹に子がやどる。：

…』などと、村の子守等は大きな聲で唄つた。

梅の坊は六坊の中で一番小ひさかつたけれど、天滿宮の廣い境内の南の端の崖の上にあつて、岩を嚙む水の美しい山川が其の下を流れ、川邊には春の花、秋の紅葉と、とり〴〵に良い樹が生へてゐた。庭には裏表とも梅の木が多くて、生活の叫びを立てるチヨン〳〵のさゝ鳴きが、竹籔を出て、ホーホケキヨと戀愛の歌をうたふ頃になると、あの黃色い小鳥は、二羽も三羽もこの閑寂な梅林へ來て遊んだ。『梅に鶯』と繪にある通りのものを竹丸はよく雪隱の窓から見た。

川を距てゝ、廣い靑々とした昔しの領地を望みながら、道臣は千代松と稍暫く語つてゐた。茶室がゝつた居室の庭先きには、八つ手なぞを植ゑ込んで眺めを妨げてあるけれど、大きな葉の間から麥畑や草の家がチラ〳〵と見えた。鍬を擔いで野路を行く人が誰れてあるかと、千代松は若い時から自慢の眼の強い視力のまだ衰へぬのを試めすやうにしてゐた。野路の彼方には低い小松山が枕屛風のやうに昔しの領地を取り卷いてゐて、其の上の方には秋の頃を思はせるやうな白雲が、ふわりと浮んでゐた。

『お駒もよいゲンサイやけんど、奥さんは品がおますさかいな。……長いこと煩らうて、あんなになりやはつたけど、品はなア身に備はつてゐますわい。』

煙草を吞まぬので兩手を持ちあつかつて、兩の肩を橫に搖り動かしながら、千代松はこんなことを言つた。

『ふゝん。』と道臣は吸ひ飽きた煙管を弄びつゝ、たゞ笑つてゐた。

『此方へ來やはつてから、何んぼにもならん中や、そいても三四年してからやつたかなア、孃やんが生

れて直き死にやはつて、奥さんが墓參りに行きやはると、何んても寒い時て、雪が散ら〳〵降つて來ましてなア、お供のお鶴どんが家へ傘を借りに來ましたんて、家内が嫁入りの時に持つて來た柄の長い蛇の目を袋から出してお借し申すと、お鶴どんが其の傘を後から翳しかけて去なはつたのを、わたへは山から戻りに見ましたけど、それや上品て、思はず頭が下がりました。』

ねち〳〵として千代松はかういふ話をした。お駒と暫く遊んてゐた竹丸は何時の間にか父の背後の方へ來て、千代松の言ふことを芝居の話のやうに思つて小耳に挾んてゐた。

『何んしよまア、たッた一人の坊んちやもん、奥さんも久し振りに會ひたいのは、無理ごわへん。わたへが連れて行きますさかい、一寸だけても會はしたげなはれ。』と、千代松は先刻から幾度も說いたらしいことを根氣よく言つた。

『會はしても仕樣がないやないか。』

舌の爛れるまで吸ふた煙管にまた煙草を詰めながら、道臣は冷かに言つた。

『そら仕樣がないと言や仕樣がないが、さう言ふたもんやおまへん。なア坊んち、……阿母さんに會ひとおますッしやろ。』と、千代松は微笑みながら竹丸の顏を見詰めた。竹丸は父の氣を兼ねて首を振つてゐた。

『そんなら、あんたに任しますよつて、一寸連れていてやつとくなはれ、連れて行くと屹と「一晩だけ竹々病院へ泊らして吳れ」と京子が言ひますやろが、それは金輪際いきまへんよつて、泣いても何うしても構はずに、引き離して他へ泊つとくなはれ。』と、道臣は到頭千代松の根氣に負けた。

『何もおまへんけど、時分どきだすよつて千代さん。』と、お駒が低い足附きの膳を持つて來て千代松の前に据ゑた。

『もう正午だすかいな。』と、千代松は自分の長尻と長話とに驚いたやうな顔をした。

三

其の晩、道臣は千代松の家へ行つた。酒がなくては食事の出來ぬ道臣は、朝飯にも晝飯にも一本づゝお駒に燗をつけさせるのであるが、夕飯には二本飮んで少し醉つたやうな風で、羽織も着ずに出て行つた。家の門を出て、隨神門と總門との間の石の鳥居の前を通つて、廣い境内を東門から出ると、左へ曲つてだら〳〵坂を、天滿宮の空濠に沿ふて登つた右側に千代松の家はあつた。

近頃建てた武家造りの門は、往來から少し引つ込んだところに、木の香がまだ新らしかつた。二つの扉は固く閉つて、少し手前には砂利が盛り上げてあつた。横手の潜り戸を押すと、鎖の付いた重い分銅が、グワラ〳〵と音を立てゝ、戸は一文字に開いた。門の内は稻を扱いだり、籾を乾したりするのに使はれる庭で、隅の方に柿の木が一二本立つてゐる外には、納家と土藏と塀と門と、それから藁葺きの屋根が小山のやうに高い母家とに取り圍まれたこの眞四角な廣場が、百姓の閑な此頃はガランとしてゐた。盆になるとこの廣場でよく踊りがある。天滿宮の境内で催される定例の盆踊は、場所がだゝッ廣くて、若い衆と娘たちとが押し合ふのに工合がわるいさうで、毎も餘りはずまずに流れて了ふが、其の流れの一部がこの廣場を借りて淨瑠璃音頭で、『お染は覺悟の以前の剃刀、おゝ』などと初めると、歸りかかつた近まはりの村々の男女までが引き返へして來て、晨の白くなる夜明け頃まで踊りつゞける。秋は

また村第一の山持ちと呼ばれるこの家の松茸が、其處の土間に堆く積まれて、廣場にも新らしい山の薫りが漂ふ。

「お家はん、西さんの旦那がお越しだすて。」と、晩くなつてから廣場を掃いてゐた下男の治郎作が言つた。

千代松夫婦は、臺所の嚴畳な長火鉢に對ひ合つてゐたが、妻のお安は治郎作の聲を聞くと、立つて自分の坐つてゐた場所を道臣の席にするやう座蒲團を敷いたりした。

法事か何かで特別に招いだ人の外は、どんな客とても長火鉢の前で應接するのが、この邊の農家の習慣であつた。客座敷なぞは疊がへをした上へ莚を敷いて、其の上へまた澁紙を敷いて、乾餅が干し並べてあつたりした。

道臣は暗い土間を通つて、中戸を越えて、中の口から長火鉢の前へ上り込んだ。娘のお時は座敷の書院から石ボヤのかゝつた丸ジンの臺ランプを持つて來て、黒柿の燭架のまゝ長火鉢の側に置いた。燐丁を擠つてパットと灯を點けると、お時の白い手が先づ眩しいほどに光つて見えた。青い色の臺の裾を掩ふほどに房々と編まれた毛糸のラムプ敷の赤いのが、ケバ〱しかつた。

其處に先刻から點いたゐた五分ジンの煤けた吊りラムプを持つて、お時は何も言はずに勝手へ引き下つた。母のお安はカチャ〱と音を立てゝ、勝手で酒の支度を始めてゐた。

「明日何時頃に行きなはる。お駒に竹を送らしておこしますわい。」

「八時頃から行きまへうかい。わたへが行きにお家へ寄つて、竹さんを連れて行きますさかい、竹さん

に支度さして待つてゝ貰ろとくなはれ。』

こんなことを話し合つてゐる中に、千代松は莖ばかりの雁が音といふ煎茶を丁寧に入れて、酒の出るまでと道臣に進めた。

『あんたんとこみたいな薄茶はごわへんのて。』と千代松は、稍亂れかけた丁髷を氣にするやうに撫でながら言つた。

チャン〳〵と盃の搖れる音がして、茹玉子と香の物とてお時が酒を運んて來た。此家へ來れば酒を飲むものと極めてゐるらしい道臣は、直ぐ盃を取り上げたが、燗が微温さうなので、長火鉢の鐵瓶の中へ自分に德利を浸けた。

『わたへが不調法だすよつて、お合ひはてけまへんが、御酒は樽て取つておますよつて、何んぼてもあがつとくなはれ。……お安お前一つお合ひをしたらどうや。』

二十一になるお時を頭に、まだ乳房を探りたがる義之助まて、男女七人の子を生んだお安は取つて三十七て、道臣の妻と同い年てあるが、ズッと老けて見える。一日を子供の世話と雇人等の指揮とに疲れ切つて、夕暮のゴタ〳〵した勝手元て、大きな戸棚の中へ首を突ッ込んて、『白鹿』と銘のある大樽の呑口から茶漬茶碗に一杯注いだ冷酒をグッと呷ることもある。それを千代松が薄々知つてゐるのてある。

『へゝゝえ。』と、お安はたゞ笑つてゐるより外はなかつた。

十五の年に赤い振り袖てこの家へ片付いて來たといふことは、村の一つ話になつてゐる。其の時はもうお時が腹の中に居たのだとは、お時自身にもよく人に話してゐる。隣り村の豪農て、天滿宮の御家人

といふものになつてゐる家に生れたのを、同じ村の若い衆さへまだ餘り眼を注けぬ蕾の中に、千代松が頬冠り姿で、高塀を乘り越え、廣い庭先きから忍び込んで、其の蕾を毟り取つたので、村の若い衆は他所の者に第一指を染められては顏が立たぬと騷ぎ出し、暗に紛れて千代松を袋叩きにしやうとしたこともあつたのを、お安の父が事面倒と見て、可愛い一人娘を棄てるやうにして千代松に呉れたのである。

天滿宮には別當、六坊、社家の外に八十人の御家人と、六十人の長谷川組といふものとが、近郷近在に散らばつてゐた。御家人といふのは天滿宮の祭神の家來筋といふことで、昔しから苗字帶刀を許されて、郷士のやうな格になつてゐた。長谷川組といふのは別當の家來で、儀式の時だけは帶刀を許される武士格てはあるが、御家人に比べると一段劣るのてある。千代松の家は長谷川組で、お安の實家は御家人の筆頭てあつたから、この緣は不釣合と、人々に評判されてゐた。けれども千代松のねち〳〵した根氣は、お安といふ戀女房を得てから、一生懸命に稼ぎ溜めて山や田地を殖やしたので、今ては村一二の物持ちになつて、家柄なぞといふものゝ光のだん〳〵薄くなるとゝもに、鷹揚な好人物の主人を有つたお安の實家が、村に唯一つの瓦葺きの大きな家と、立派な長屋門とを殘して、財産は何時の間にかタバコの烟のやうにして了つたのに比べると、今ては提燈と釣鐘の地位が反對になつたやうにも思はれて來た。

『一つ何うや。』と、道臣はお安に盃を獻したけれど、お安は相變らず笑つて受けなかつた。杯洗の水に三つ浮んで來た盃は、一つだけが絕えず道臣の手から口へ運ばれてゐて、他の二つは寂しさうに取り殘されてゐた。

『時やん、此處へ來て金毘羅參りの話でもしいんかいな。』
家から下地のあるところへ、また二本ほど飲んだので、道臣はだいぶ醉つて、舌が少し縺れかゝつた。
『へえ。』とお時は素直に答へて、道臣の側に坐つた。
一昨年頃は、お時が毎日風呂敷包を抱へて、道臣の家へ京子に裁縫を習ひに來てゐた。京子が墓參りに出た後に、道臣がお時の側へ寄り過ぎてゐたとかいふことで、一寸した騷ぎが起りかけたけれど、昔の領主といふ地位がこの片田舍では今もなほ後光が射して、箏黨の旗頭と呼ばれてゐる道臣には、こんなことがよくあるので、京子も諦めて了つた。老いて醜男の道臣も、この村では第一の色師のやうに見られてゐた。
其の一昨年の春のことである。道臣は突然お時を連れて金毘羅參りに行くと言ひ出した。昔の主人筋の言ふことであるから、千代松夫婦は寧ろ喜んで承知した。もとより義理一遍ではあらうが、道臣は京子をも連れて行かうと言つた。京子は一寸考へて、それでは一所に行かうと言つて、一行は其の頃十歲の竹丸をも加へて四人になつた。
道臣等の親子三人が支度を調へ、留守を昔の社家の長老に賴んで東の門まで出かけた時、お時の裾端折つて緋縮緬の湯もじを精一杯見せた旅姿は、左の方のだら〳〵坂の半腹に見えた。丁ど舊曆の三月の半ばであつた。
四人は先づ大阪へ出て、船の出る川口に近い博多山といふ家で、道臣の好物の鰻で飯を喰べた。道臣は嬉しさうにして何時までもチビ〳〵飲んでゐた。これから船に乗るのだといふことを聞いて竹丸は、

丁ど博多山の奥座敷の前を通る荷舟を指さしつゝ、『あれより大きい舟』などと問いた。

川口から亀鶴丸といふ芽出たい名の汽船に乗つたのは、其の日の夕景であつた。ボウーと厭やな響の笛が鳴つて、家も岸も橋も皆後(あと)へ走つて行くやうに竹丸には思はれた。お時さへ一寸さう思つた。船は間もなく廣い海の中へ出てゐた。

多度津へ着いて、金毘羅へ參つて、其處で二晩泊つて、鞘橋の上で魚の廉(やす)いのに驚いたりして、善通寺から丸龜へ出(で)て、其處から便所のない和船に乗つて、通じを催したのを堪へ〳〵て備中へ渡つた。

『あの時ばッかりは、男に生れて來ると好(よ)かつたと思ひました。』と、今でもお時は言つてゐる。

備中から備前、それから播州巡りをして、石の寶殿や高砂の松を見て歩く中に、道臣はお時と、京子は竹丸と、別々の旅人のやうになつて歩いたこともあつた。兵庫へ着いて福原の清盛の墓の前で、四人はまた落ち合つた。

大阪へ戻つて、二三日道頓堀の宿屋に泊つてゐる中に、芝居見物をしたが、狂言は不破伴左衛門、名古屋山三の鞘當てであつた。花盛りの太い櫻の幹を山三が刀で切り開くと、女の生首が現はれた。其の芝居を見て戻つた晩に、京子は宿屋で逆上して卒倒した。顔へ水を吹きかけたり、氣附藥を口に含ましたりして、やつと回復はしたが、それからは餘り物も言はぬやうになつて、皆(みん)なが出かけて行く時にも、獨りで宿屋に閉ぢ籠つてゐた。竹丸も母と一所に殘つてゐることがあつた。大阪には伯父もあり叔母もあるのに、何故(なぜ)こんな家に泊るのかと竹丸は思つてゐた。

一月半ほどを旅に暮らして、道臣の一行は財布を空(から)にして村に歸つて來ると、天満宮の木立は見違へ

るほど繁つてゐた。出立の時には蕾の脹みかけてゐた櫻が、すッかり若葉になつて、花吹雪の名殘りが少し見られるばかりであつた。鳥居前の老木の櫻に今年はまだ枯枝が多くなつたのを見た時、京子もお時も、名古屋山三の引き出した女の生首のことを思ひ出した。道臣は出立の時にしたやうに、拜殿の方に向つて祈念を凝らしてゐた。

其の後道臣とお時とは、寄ると障ると金毘羅參りの話ばかりしてゐた。千代松夫婦は二人の話を傍で聽いてゐるだけで、自分たちも金毘羅參りをしたのかと思ふほどに、讃岐から播州へかけての名所を知つた。

『いゝ、あんたみたいに、神さんの守りをしてる人は、他のお宮へ參つても、まッさら他人のやうな氣がしましよまい。』と、酒も煙草も呑まぬ千代松は、三度目の急須の茶を入れかへながら言つた。

『さいやなア。……』と道臣もこの答へには窮してゐた。

『金毘羅はんでも、吉備津ッあんでも、參る〳〵いふてやはつて、ちよつとも拜みやはれへんのや。可笑しい人。』

お時は滴るやうな色氣を眼元に含ませて、こんなことを言つた。お時の妹のお今といふ十一になるのが、宵張りをして起きてゐるだけで　他の子供等は皆寢て了つた。子供の巣のやうなこの家も稍靜かになつた。

四

其の頃まだこの村へは汽車が通じてゐなかつた。電車なぞは何處にもなかつた。竹丸は千代松に連れ

られて村から一里あまり距つた小ひさな町まで、水の美しい山川に添ひつゝ歩いて、其處から人力車で五里の道を大阪へ行つた。

『北野まで何んぼで行く。』と、千代松は小ひさな町の坂の下のところで路傍に客待ちしてゐた車夫の群に聲をかけた。合乘り一臺の賃錢が折れ合はずに、千代松は坂の半腹までさッさと歩いたが、竹丸の歩き澁るのに足元を見込んだ車夫は、冷笑ひつゝ二人の後姿を見送つてゐた。此處を外れるともう車がないので、千代松は殘念さうにしながら振り返つて車夫へ手招きした。

一人乘りでも結構やと千代松の言つただけに、合乘りではゆッくりし過ぎるほどであつた。一面に麥畑の眞青な中を白くうねうねとして行く平ひな國道を、圓顏に頰髯を剃つた痕の青々とした車夫は、風を切つて駈け出した。尊鉢といつて釋迦の鐵鉢とかを藏してゐる白壁の寺のある村を過ぐる頃には、もう先きへ行く人力車を二臺も追ひ拔いた。こッてりと油を付けて結び上げた千代松の丁髷に、車夫の蹴立てる白い砂埃りが烟のやうに掩ひかゝつた。

もつと背後へ凭れかゝつて呉れとか、足を踏ん張つて呉れとか言つて、五月蠅い車夫であつたが、中肉中脊の屈強な足つきは、北野へ着くまでに、十臺からの車を拔いて、正午少し前に千代松と竹丸とは鶴の茶屋の前へ下り立つた。

『よッぽど早うおましたて。ちいと增してやつとくなはれ。』と、碌に汗もかゝねば疲れた風もなくて、車夫は腿引の塵埃を拂ひ拂ひ言つたが、

『一時間や二時間早う着いても仕樣がない。先きい行く車追ひ拔いたかて、乘つてる客の手柄になら

ん。』と、千代松は冷やかに言つて、定めただけの賃錢をやると竹丸を連れてずん／＼歩き出した。

『あれが阿母さんの入つてはる病院や。』と大川の長い橋の上から指さしておいて、千代松はもう歩くのが厭やさうな竹丸を笑顔で引き摺るやうにして、だいぶ長いこと歩かした。また橋を二つも渡つて、川沿ひの赤い軒燈の出た宿屋に入つた時、稍拗ねてゐた竹丸の機嫌も直つた。其の宿屋は竹丸が父母やお時と一所に金毘羅參りの時に泊つた宿屋らしくて、母が卒倒した時の怖ろしさを竹丸は思ひ出してゐた。二階座敷の欄干に凭れて、川の中を往來する小舟を見たり、小旗の立つた蠣舟に出入りする人を數へたりして、竹丸は物珍らしい半日を送つた。對ふ岸の家で欄干に赤い裏の蒲團を干してゐる女は、白い顏に笑ひを浮べて、竹丸に小手招きなぞした。背後の賑やかな通りでは、人音がざわ／＼聞えて、太鼓の響や喇叭の聲が絶えずしてゐた。

『さアこれから阿母さんとこへ行くんや、嬉れしおますやろ。』と、夕飯を喰べてから、千代松は竹丸を連れ出した。また歩かせられることかと、竹丸は稍拗ねかけて見たが、千代松は直ぐ其處の橋の詰から、今度は値切りをせずに合乘りの人力車を呼んだ。車の上から飽かぬ街景色を見て行く中に、長い橋を渡つて、車は病院の鐵門の前に着いた。

病院の玄關には薄暗い灯が點いてゐた。胡麻鹽の腮鬚の長い受付の老爺の顏を、半圓形の硝子窓の中に、覗きカラクリのやうに見て、右へ曲つて行くと、白い壁の長い廊下が續いて、其の片側には、下駄箱を横にしたやうに、一つ／＼扉の附いた入口が幾つも並んでゐた。其の扉の一つの横の方に、黒い板へ白く『前田京子』と門の標札のやうに書いてあるのを、薄暗い中に目早く見付けた竹丸が、

『此處や、此處や。』と叫ぶと、千代松は喫驚した顏をして、竹丸と同じやうに其の白い字の標札を仰いだ。
『さアお入りなはれ。』と千代松は標札の文字を確めてから言つたが、竹丸は俄に尻込みして、扉の白い把手を握ることが出來なかつた。
『早う入りなはれな。』と、千代松はニヤ〳〵して言つた。さうして自分に把手に手をかけてギユッと押すと、扉が一尺ほど開いた。
『誰れや。』と中から久し振りで聞く母の聲がしたので、竹丸はいよ〳〵尻込みして、廊下を一間ほども隣りの扉の前あたりまで逃げて行つた。千代松は笑ひながらそれを追ふて、引つ捕へると、容赦なく母の病室の中へ押し込み、自分も引き添ふて入つた。
寢臺から下りて、疊の上に坐蒲團もなく坐つてゐた京子は、薄暗いランプの下で短刀を拔いて見てゐた。瘦せこけた頰へ櫛巻きにした髮の後れ毛が振りかゝつて、大きな圓い眼は血走つてゐるやうに思はれた。
『怖い。』と竹丸は覺えず叫んで、また逃げ出さうとするのを、千代松は抑へて放さなかつた。
『あゝ竹ちやんか、千代さんに連れて來て貰うたのやなア。』
短刀を持つたまゝではあるが、京子の物の言ひ振りは、物靜かに優しかつた。さうして短刀の刃先きを改めては、少しばかり銹の出かゝつたのを文錢でゴシ〳〵擦ることを止めなかつた。
今までニヤ〳〵してゐた千代松も少し眉を顰めて、京子の容子を見詰めつゝ、竹丸を庇ふやうにして、

短刀の切先を避ける風にしながら、黄色くなつた疊の上に坐つた。

俄に氣がついたといふ狀で、京子は短刀を鞘に納めた。其の短刀は鎧通しといふ鋭いもので、彼女の父がこればかりは一生肌身を離すなと言つて、道臣に嫁する日に彼女の手匣の中に入れてやつたもので、無銘ではあるが相州もの丶古いところらしく、作りは父の好みで、彼女の爲めに酉の歲に因んで金無垢の雞の高彫りを目貫に浮き出させ、鞘は梨子地で、黑に金糸を混ぜた總付きの下げ緒が長く垂れ、赤地金襴の袋に入つてゐる。金で大きく蓋の上に定紋の折鶴を現はした手匣と丶もに、今は亡き父の記念品となつて、病院の枕元に置かれてある。

竹丸はよくお駒から怪猫の話を聽かされてゐたので、自分の母は疾くに何處かの古猫に喰ひ殺されて、猫が母の姿になつてゐるのではあるまいかと思つてゐた。この床下に母の白骨がごろ〳〵してゐるのではあるまいかと思ふと、身體中がぞく〳〵して來て、ザラ〳〵した坊主疊に氷のやうな冷めたさを感じて來た。

『書置の事』とでもしてある封狀が、其處らにありさうな光景だと千代松は考へて、京子と一通りの挨拶を交した後は、打ち解けた話をしにくいので、ツイ默つてゐた。京子も默つてゐた。

金毘羅參りから歸つた年の夏、修驗者のやうな姿をした眼のよく光る男――其の男の眼を見てゐると自然に氣が遠くなる――が自分の家へ尋ねて來たことを竹丸は思ひ出した。其の時丁ど父はお宮の用事で四五日泊りがけに他へ行つてゐたが、母は忽ち其の見も知りもしなかつた修驗者と懇ろになつて、金毘羅このかた起りかけてゐた今の病氣を癒して貰ふ御祈禱だと言つては、まだ暑いのに室を閉め切つ

て、修驗者と二人で二時間も三時間も出て來なかつたことがあつた。夜になると修驗者は竹丸に向つていろ〳〵面白い話をしたが、竹丸は何んだか其の男が氣味わるくて、其の異樣に輝く眼の光に打たれると、氣が遠くなつて、死ぬとはこんなになるのではあるまいかと思はれてならなかつた。修驗者は日本國中を大抵巡つたさうで、いろ〳〵の面白い事や怖い話を知つてゐた。

もう明日あたりは父が歸るであらうといふ日、母はまた修驗者と二人で納戸へ入つたまゝ戸を閉め切つて、夕方になつても出て來なかつた。其の頃居たお鶴といふ下女は何も知らぬ顏をして、せッせと臺所を働いてゐた。餘り氣にかゝるので、竹丸は納戸の前まで忍び足で行つて、幾度か躊躇ひつゝ、靑地に金粉で龍の丸をおいた襖を細目に開けて內を覗いた。

昔し內佛の安置してあつたこの室は、この家へ女氣が入るやうになつてから、納戸に用ゐられて、紅白粉の匂ひで一杯になつてゐるが、竹丸の怖々覗いた時、修驗者の姿は見えないで、母がたゞ一人衣裳簞笥の前に坐つてゐた。竹丸の覗いたのを直ぐそれと氣付いた母は、意外にも莞爾々々として手招きしたので、二三日母に疎くされてゐた竹丸は喜んで襖を開け、驅け込むやうにして母に近づいた。母は直ぐと立つて、襖の開かぬやうに竹丸の手の屆かぬところへ、しんばり棒をしてから、靜かに竹丸の側へ寄ると、他所の家へでも行つた風に、ちよこなんとしてゐた竹丸に向つて、『見に來ては可かんといふたるのに、何んで見に來た』と急に怖い顏をして叱つてから、あの金の雛の目貫の光る短刀を引き寄せながら、『お父つあんが戾つてから、あの小父さんの來たことをいふと、斬つて了ふよつて、よう覺えてゐや』と短刀を半分ほど拔きかけた。其の形相の物凄さに、竹丸は椽へ上つて泣き出した。

それから竹丸は其の修驗者の姿を一度も見なかつたが、近頃お駒に教はつた怪猫の話から、若しやあの修驗者が古猫で、母を喰ひ殺して母の姿になつてゐるのではあるまいかと、時折り考へることもあつた。

そんなことを思ひ出しながら、今かうやつて病院で母の姿を見てゐると、病み窶れた顏から眼付きが、何時かの修驗者に似て來たやうに考へられ、ぼんやりと射すラムプの光に、耳の尖つた口の裂けた髯の長い大猫の影法師が映るやうな氣がして、竹丸は眞ともに母の方を見ることが出來なくなつた。

『もう去なう。』と、竹丸は小ひさな聲で言つて、千代松の背後へ隱れるやうに膝行り寄つた。例もの低い聲でねち〳〵と話し始めてゐた千代松は、

『癒る癒らんも、糸瓜もおまへん。癒つて見せうちう氣一つだす、病ひは。……』などと元氣よく言つて病人を勵ましつゝ、竹丸には頓着しなかつた。

『ずッと前に診てもろた醫者が、リョーマチやいふて、其の藥ばかり吳れてたんが惡るおましたんや。子宮だしたんやもんなア、此處の院長さんが診やはつて、餘ッぽどわるなつたるいふて、喫驚してゐやはつた。』

『前に診てもろた醫者て、片岡だッしやろ、片岡なら確かだす。日本人の身體には矢ッ張り漢法醫がよいので、西洋醫者はあきまへんわい。』

西洋醫者を信じてゐる京子と、漢法醫者を尊んでゐる千代松とは、互ひに堅く執つて動かぬといふ風を見せたが、

『わたし御免蒙つて。』と、京子の方が先きに閉口して、大儀さうに寢臺の上へ這ひ上つた。

『ぼち〳〵行きまへうかな。』と、千代松は初めて竹丸の居るのに氣がついたやうな風をして、背後を顧みた。

『竹はへ夜泊つて行くなア。』と京子は寢臺の上から言つて、自分の身體を少し片わきに寄せつゝ、白い蒲團の上に自分と並んで竹丸の寢る場所を拵へた。

『泊つて行きなはるか。……久し振りや、阿母さんの乳汁可味しおますて。』と千代松は微笑みつゝ言つて、背後に竦くんでゐる竹丸を母の前へ引き出さうとした。

『厭や。』と首を振つて竹丸はシク〳〵泣き出してゐた。

『前には阿母さんと一所に寢たいちうて泣いたもんやが、今は阿母さんがそないに厭やになつたんか。そんなら早う去に。……もう來いてもえゝ。』

不機嫌な顏をして京子は寢臺から下りた。千代松の横手から頭を出してゐた竹丸は、また後ずさりして其の背後に隱れ、千代松の一帳羅の紋付羽織の脊筋を見てゐた。

『あんたがそんな高いとこで寢なはるさかい、竹さんは怖いだすやろ、なア竹さん。』と、千代松は氣の毒さうにした。

『高いとこで寢るのが厭やなら、あの蒲團を下へ敷いて貰ろたげるよつて、今夜は阿母さんと一所に寢やう、なア竹。』

また優しい顏になつて、京子は竹丸を引き留めやうとした。

『さう〳〵忘れてた、竹さん今夜善哉喰べに行くんだしたな。そんならぼし〳〵行きまへう。』と、千代松は村でどうせ夜に入る見込みの外出には必ず懐中に入れて行く小ひさな小田原提灯を取り出して、用意のマッチをパッと擦つた。竹丸は早や立ち上つて出口の扉に手をかけた。

『そんならもう去んでだすか。』

何もかも諦めたといつた風で、京子は苦しさうな笑顔をしたが、

『蠟燭がそれでは短いやろ、竹ちやんこれ持つといて。』と、床頭臺の抽斗から十本ばかりの蠟燭を取り出し、白紙に包んで、竹丸の方へ手を差し伸した。竹丸は千代松の顔を見い〳〵母の側へ寄つて、其の蠟燭を受け取つた。

『それだけ蠟燭があると、江戸までても行かれる。』と、千代松は笑つた。

五

千代松と竹丸とは、其の翌くる日の朝早く宿を立つて、北野からまた合乗りの人力車に乗つて歸つたが、丁ど半分道ほど來た時、向ふから若い男と女とを乗せた車夫が、『買るか』と聲をかけて、車夫同士で客の取り替へッこの相談を始めた。梶棒と梶棒とを離れ〳〵にして何か知ら符牒で暫く話し合つてゐる中に、忽ち纒りが付いて、千代松と竹丸とは向ふから來た車に乗せられ、若い男と女とは此方の車に乗つて、車夫は互ひに別れの懸け聲をして、各々の來た道を引き返へした。

來る時に千代松が車賃を値切つた小ひさな町の坂の下で、二人は車から下りて、其處から村まで山川に添ふて歩いた。竹丸は千代松に尻を端折つて貰つて、元氣よく先きに立つて歩いた。山川の美しい流

れは、底の小石までを透き通して見せてゐた。西の方の小山の裾に、お寺の大きな屋根を眞ん中にして、富んでゐるらしい瓦葺きの家や藁葺きの家や白壁の光る土藏などが、ごちや〳〵と一塊りになつてゐるのは、穢多の部落て、其處の男女が三人五人、剝いだ獸皮の眞白に見えるのをこの川原に持ち出して、淸らかな水に晒してゐた。雪のやうな肌をした女が、新らしい手拭を被り眞赤な襷をかけて、白い足を膝のあたりまで水の中に漬しつゝ、皮を引つ張つてゐるのも見えてゐた。春らしい風がそよ〳〵と吹いて、午後の太陽はどんよりと、大きな暈をかぶつてゐた。

山川の曲つて流れてゐるところまで來ると、其處からが天滿宮の昔しの領地で、『殺生禁斷』と深く刻つた大きな石標が川端に苔むして、倒れさうになつたまゝ立つてゐた。竹丸は後をも見ずに駈け出して、二三丁續いた松原を一散に、風の如く天滿宮の境内に歸つて行つた。

家では父がまた千代松の家へ行つたさうで、お駒は昨夕泊つたまゝ歸らぬといふ從兄の定吉と話してゐた。

『坊んち戻りなはつたか。』と、定吉はお駒の背中にかけてゐた手を離して、竹丸を迎へた。

『今夜も泊つといて、休みやさかい、えゝやらう。家の肾張さんが五月蠅いよつて。』

お駒は、ほんのり紅をさしたやうな圓い顏に笑みを浮べて、後の半分は聞えぬほどの小ひさい聲て、定吉を流盻に見ながら言つてから、竹丸に、

『さあ、着りもん着更へて。……』と早口をして、白メリンスの兵兒帶に手をかけると、追ひ剝ぎのやうに竹丸のヨソイキの着物を脫がしかけた。

『鹿島一日、下はん半日。休み嫌ひの仙藏はん、なほも嫌ひの糸瓜はん。』と定吉は、村の草刈童のよく唄ふ歌を高い聲で唄つた。今日は久し振りに降つた雨を喜ぶ『あまよろこび』の休みが一日村の若い衆や草刈童や雇人たちに與へられて、農作物のよく實るのを祝つてゐるが、近頃は頓とこの種の休みが尠くなつて、昔し鹿島大盡が庄屋であつたり、下はんと呼ばるゝ好人物の旦那が村の支配者であつたりした時、一日或は半日の休みが始終貰へた時代を謳歌する聲が、今の若者たちの間にまで響いてゐる。

『この人は何を持つてゐやはるんやなア、ほところ（懷中）膨らかして。』と、お駒は竹丸の附け紐を解きながら言つて、懷中を押さへてゐる兩手を引き退けると、嵩張つた紙包みがバタリと疊の上に落ちた。

『定はん貰ひや、大阪の土産やて。可味しいもんやろ。……飴……猫の糞（菓子の名）……羊羹……。』

半分は定吉に、半分は竹丸に言つて、お駒は樂しさうに紙包みを開けて見た。

『何んや阿呆らしい、蠟燭や。』とお駒は吐き出すやうに言つて、紙のまゝ其處に放り出した。

『蠟燭の形に拵へたかしん（菓子の事）や知れんて。』と定吉は、自分の前にころ／＼轉げて來た一本の蠟燭を取り上げて、頻りに匂ひを嗅いでみたりした。

『きりもん着んとお父つあんに叱られる。ぽん／＼になるのはまだ早い。おゝ寒い／＼。』と、お駒は竹丸が裸體のまゝ板の間を駈け廻はるのを追ひ廻はして、ふだん着を着せた。さうして、

『今日でもう五日も學校を休んで、……落第しますて。』と、母のやうな顏をして竹丸を睨んで、直ぐに噴き出して笑つた。竹丸も共に笑つた。

『お駒ちやん、矢ッ張り蠟燭やなア。』と定吉は匂ひを嗅いだゝけては諦められぬらしく、マッチを擦つて火を點けてみて、板の間へ一たらし滴した熱い蠟て其の蠟燭の尻を据ゑて、ジイ〱と燃ゑるを見ながら言つた。

『わかつてるやないか。一寸見たゞけて。』と、お駒は笑つて、定吉の顏を見詰めた。

『さうかいなア。』と、定吉はまだ白晝にとぼつてゐる蠟燭の赤い火から眼を離さずに、腰から新らしい革の煙草入れを拔き取つて、ツイ昨日から始めた煙草を其の蠟燭の火て吸ひ付けた。

『あゝ可笑し、定はん煙草呑むん。何時から。』とお駒は大變なことを見付けたやうに、頓狂な聲て言つた。

『きんの(昨日)から。』と定吉はキマリのわるさうな顏をして、白い煙をブーッとお駒の顏に吹きかけた。

『あゝ臭い。』と、お駒は長い袂て其の煙を拂ひながら、定吉の新らしい煙草入れを引き寄せて、緒締めの赤い玉なぞを捻くつてゐた。

『お父つあんが十七から煙草呑んだちうさかい、俺も十七て呑むんや。』

かう言つて定吉は二服目の火をつけた。

『二十歳から呑んだらえゝ、十七てはまだ早い。』と、お駒は圓い眼に媚を湛へて嘲弄ふやうに言つた。

『煙草呑むんと、五斗俵持つんと、……ほえから、……色事するんと、この三つは一所に始まるもんやげな。』

にや〳〵と笑ひ〳〵、言ひにくさうにして定吉は言つた。

『定はんが、……嫌ひ。……』とお駒は一寸横を向いて見せた。

『何が嫌ひや、誰れでもさういふやないか。』と、定吉はお駒の側へ摺り寄つて背中を撫でるやうにした。

『定はんはもう五斗俵が持てるのん。』

『やいや、まだ持てん。膝まで來るが腰が切れん。あかん。』

『それみい、煙草と……それから……其の……何……はしても、五斗俵が持ていては一人前やないやないか。』と、お駒はツンとして言つた。

『お駒ちやん、怒つたんかい。怒らんかてえゝやないか。』と、定吉も稍改まつた調子で言つた。

『怒れへん、ちよつとも怒つてやへん。』とお駒はまた滴るやうな笑顔になつた。

『坊んち、こんな蠟燭どうしなはつたんや。』と定吉は、裏の梅林の方へ遊びに出て直ぐ戻つて來た竹丸を見つゝ言つた。まだ核子の固まらぬ梅の實を取つて來て、掌に載せた鹽を附け〳〵、コリ〳〵嚙り始めてゐた竹丸は、

『病院て阿母さんに貰ろたんや、十二本貰ろたんを糸瓜はんと半ぼん分けにしたん。』と、竹丸は板の間に腰をかけて短い着物からニユッと出た二本の足を振つてゐた。

『蠟燭の土產て、妙やなア。香奠の返禮みたいやないか。』

變な顏をしてお駒は言つたが、何と思つたか、定吉の煙草入れと煙管とを引き寄せ、一服詰めてまだ

燃えてゐる蠟燭の火につけ、苦さうに顏を顰めて烟を吐くと、コン〳〵と咳をして板の間に顏を摺り付けつゝ咽せ入つた。

『お駒ちやん、もうこの頭は白い丈長懸けんのかい。』と、定吉は、俯向いて咽せてゐるお駒の島田髷の捲いてゐるのを見ながら言つた。

『旦さんが、そんなものを懸けるな言やはるよつて。……』

漸く咳を止めて、眞ッ赤な顏に苦し涙さへ浮べたお駒は、かう答へて笑つた。

『さうかい。』と定吉がなほもお駒の頭に見入つてゐる時、竹丸はまた何か思ひ付いた風で、鐵砲丸のやうに裏口から駈けて出た。

稍暫くしてから、竹丸の聲で何か知ら『わアい〳〵』と囃し立てるのが聞えたので、若い二人は其の囃し聲に引かれて、裏口へ出て見ると、竹丸の姿は見えないで、突き當りの鍛に近い土藏の白壁へ、大きく消炭で、無恰好な相合傘と其の下へ、握り飯に箸を突き差したやうな人の形とを書いて、上の方には、『大仲よし、定吉とお駒』と下手な字が行を並べて出來てゐた。若い二人は其の新らしい樂書の傍に寄り、ニヤ〳〵笑つて見てゐたが、軈て定吉は下に落ちてゐた消炭を拾ふと、相合傘の側の『定吉』といふ字を消して、其の跡へ『道臣』と小ひさく書き、ペロリと舌を出して首を縮めた。するとお駒はまた自分の名を消して、定吉の棄てた消炭を拾ふと、『お時』の二字を大きく書いた。

『叱られるて。』と言ひながら、定吉は軈て其の樂書を悉皆消して了つた。

六

この村へは一年に一度か二度ほどしか來ることのない、變な帽子を被つた電報配達人が、松原の入口を小走りに入つて來たので、村の人達は皆目を欹てた。

『何家やろ。』

『誰れが死んだんやろ。』

人の死んだことを知らせることより外には、電報といふものゝ使ひ途のあることを知らぬ村人たちは、配達人の提げた赤い印の付いた小鞄を恐怖の征矢として、其の飛んで行く先きを見極はめやうとした。家の奥の方にゐた人は戸口まで出た見てゐた。自分の家の前をば無事に通り過ぎた赤い小鞄を見送つては、ほッとして、死神の來訪を免れた喜びを顔一面に浮べた。

『俺んとこは今親類に病人もなかつたんぢや。心配することはない。』

『けんど、急病頓ころちうこともあるさかいなア。きんのまでピチ／＼してゝ、ケンピキが肩越して死ぬ人もあるやないか。』

配達人の行き過ぎてから、こんなことを語り合ふ人々もあつた。

電報配達人は、兩側に並んだ五六軒の家の何處へも入らずに走つて、天滿宮の東門前の水茶屋の前に立ち止まつた。

『梅鉢屋さんや、梅鉢屋さんや。』と人々は騒ぎ出した。武士が帶刀のまゝ天滿宮の境内に入ることの出來なかつた時代には、梅鉢屋の女將が赤毛氈を敷いた店頭に立つて、

『御門内はお腰の物が許りまへん。……息んでおゐてやす。……お腰の物を預けておゐてやす。』と叫ん

て、店を繁昌さしてゐた。殊に先々代の女將は聲が美しく、天滿村のきりぎりすと呼ばれて、村の老人の中には今でも其の美しい聲色をつかふものがある。

店頭に立ち止まつた配達人の姿を見ると、きりぎりすの孫に當る蝗のやうに痩せた今の若い女將が飛んで出て、配達人に何か言つてゐた。配達人は何事をか敎はつた樣子で、きりぎりすの代に建てた水茶屋の大きな土藏に添ふて眞ッ直ぐに、天滿宮の東門の石段を登つて行つた。

『西さんや、西さんや。』

『西さんの奥さんが死なはつたんや。』と、人々はまた騷ぎ出した。

道臣は其の時丁どお時とお駒とを相手にして、居室で酒を呑んでゐた。この二ヶ月ばかり、月日は目にも止まらぬほど早く經つて、麥の穗は黄色く、四邊は若葉の匂ひに埋れた。もう少しすると鮎が捕れる山川は、此頃引き續いて雨が多いので、水が濁つて瀨も隱れた。眺望が佳いからと言つてこの梅の坊を擇んで住居にした道臣も、此頃では、景色などはどうでも可い、といつた風で、毎日お駒やお時を相手にして酒ばかり飲んでゐた。

『かんのし（神主）て、えゝ商賣やなア。』と、毎晩のやうに來る定吉は羨ましさうにして言つた。

お駒が酒のお酌か何かに道臣の居室へ入つて、長いこと密々話などしてゐる時、定吉は別に何事をも感ぜぬらしく、竹丸を嘲弄つたりして面白さうにしながら、何時までも根氣よくお駒の出て來るのを待つてゐた。夜晩くなつてもまだお駒と道臣とが居室から出ないと、竹丸はよく定吉の膝に凭れて眠つた。

お駒は定吉の來て待つてゐるのを知つてゐながら、別に氣の毒がるといふことはなく、憚るといふ風も

見せずに、四時間も經つてから、のッそりとして出て來ると、定吉と顏を見合つて互ひにニヤリと笑つた。其の後から道臣が大手を振り〳〵、煙草盆を片手にノッシ〳〵と疊を踏んで出て來て、定吉とお駒とが睦まじさうに膝突き合はしながら話してゐる仲間へ入つて三人で嬉れしさうに笑ひ興じた。

お時が絶えず出入りするやうになつてからも、男と女、女と女との間に、かういふことで互ひに遠慮し合ふといふやうな樣子は見えなかつた。これがこの村の一般の氣風であつた。武家に育つて、こんな氣風に慣れぬことから起つた京子の惱みが、其の不治の病に罹る因であるといふ噂もあつた。

『お時さんは飮けるんやよつて。』とお駒は道臣が自分に献した盃をお時の前へ置いて、波々と注いだ。

『あゝお駒ちやんあんたの貰ろたお盃やないしか。一人で飮めんのなら、定はん呼んで來て助けてお貰ひやす。』とお時は笑つて、注がれた盃をお駒の前へ戻さうとすると、お駒がまた笑ひながら押し戻したので、酒はだら〳〵と疊の上に溢れた。

『勿體ない〳〵。』と道臣も菊石のある赭顏を酒にほてらしつゝ、兩手に櫻と桃とを騎した喜びの色を漲らした。

『電報ッ。』といふ叫びは、この時玄關に響いた。

お駒が顏の色を變へて、立つて行かうとすると、お時も續いて立つた。

『わたへが行きます。』

『いゝえ、わたへが。』

二人の女の先きを爭つてゐるのを、道臣は細い下り目を溶けさうにして見やりつゝ、電報といふ恐ろ

しいものゝ來たことを氣にもかけぬ狀であつた。其處へ、何處かで遊んでゐた竹丸が、素早く電報を受取つて持つて來た。先きを爭つてゐた二人の女は笑ひながら坐つて、電報の封を切る道臣の手を見詰めた。顏に比べて手の綺麗な道臣は、右の紅さし指に嵌めた細い金の指輪を光らしつゝ、馬鹿丁寧に電報を披いて讀むと、一寸考へる風をして、また元の通り電報を丁寧に疊んで、側の小机の上に置いた。

「何んの電信だす。……病院から。……」と、お時は膝推し進めて問ふたが、道臣は默つて盃を差し出した。

德利はまたお駒の手で熱いのに取り代へられたが、酒はもうはずまなかつた。

「一寸大阪へいて來んならん。」

かう言つて道臣は、盃を足附きの高膳の上に伏せた。

「お父つあんに知らして來まへうか。」とお時は心配さうな顏をして、小机の上の電報送達紙から眼を離さなかつた。

「さいやなア。これ持つて去んで見せとくれ。」と、道臣は赤い封紙の正しく切られた電報をお時の白い手に握らせた。

七

千代松は大阪行の支度をして、あたふたと出て來た。竹丸が電報を受け取つた時のまゝ、珍らしく大玄關が開け放しになつてゐるので、砂利を敷いた其處の敷臺の前から、

「えらいことになりましたなア。これから行きまへう。」と千代松は滅多には出さぬ高聲をして言つた。

『あんたもいて呉れはるか。』と、道臣は酔つた顔に笑を浮べて答へた。

『ハッキョウちうんやさかい、どッち道輕いこッちやおますまいと思ひまして、金もちいと用意して來ました。』と、千代松はまだ少し早いが輕いからよいので着て來た紺飛白の單衣の裾を捲くつて、式臺に腰を下ろした。

『えへん、えへん、えへん。』と續けさまに咳をして道臣は、千代松が喋舌る電報の中味を、竹丸やお駒に聞かせぬやうにしやうとした。お駒は聞く耳を立てつゝ、道臣の外出の着物を簞笥から出した。

ちやんと紋服に袴を着けて玄關に現はれた道臣の姿は、流石に昔が偲ばれた。其處へ定吉が來て、『留守を頼む』なぞと道臣に言はれてゐた。

『火の用心に氣を付けて。……』と、道臣は繰り返へしく\お駒に言つて、千代松を後に門を出た。

『猿にも衣裳や。』

お駒は定吉と二人で玄關横の連子窓から、伸び上つて道臣の後姿を見送りながら、こんなことを言つて笑つた。

『千代さんは仲間みたいやなア。村一番の良い衆(金持ちの事)とは見えん。』と定吉は、油のコテく\した千代松の丁髷が、午後の日影に光るのを見てゐた。

『竹にも見せて。』と背後へ竹丸が來て、定吉の帶に取り付いたので、定吉は重さうに竹丸を抱き上げてやつた。道臣と千代松とは鳥居の前で丁寧に天滿宮を拜禮して、東の門の方へ、葉の繁つた櫻の老木の陰に姿を消した。

『奥さん死なはつたのん。』

『まだ生きてやはるんやらう。……狂氣にならはつたんらしい。』

『狂氣。……』と定吉は眼を圓くした。

『奥さんも氣の小ひさい人。……胸の狹い人や。』と、お駒は平氣な顏をしてゐた。

『お駒ちやん、奥さんに喰ひ殺されるて。』と定吉は恐ろし氣な身振りをして見せた。

『わたへよりお時さんが危ない。』と、お駒は矢張り平氣で笑顏を續けた。

『けんどお前は常時此處に居るんやし、お時さんは自分の家に居るんやさかい、どうしてもお前の方が憎まれる。……寢てるとこ咽喉笛に喰ひ付かれたら、南まん陀佛や。』と定吉は氣味わるさうに言つた。

『負けるもんか、長いこと病み呆けた人に。……出て來たらギユウと押へ付けてあげる。健康な時でもわたへの方が强い。』

『どうや知らん。』

定吉は不安さうに言つて、腰の煙草入れを弄つてゐたが、

『其の時は俺が毎晩泊つたろ。』とさも名案を思ひ付いたやうに言つた。

『さうしとくれ、そんなら安心や。』とお駒は臺所の方へ行つた。

『坊んち、阿母さんが死んだら踊りまへうか。』と、定吉は手に唾を付けて、竹丸に相撲を挑む狀をしながら言つた。

『ふん踊らう。』と竹丸は妙な手付きと足踏みとて座敷中を踊り廻はつた。定吉もそれに連れて盆踊りの形をして靜かに踊つた。

『何んや定はん、置いとくれんか。子供みたいに、阿呆らしい。』

臺所から箒を持つて來て、掃除を始めやうとしたお駒は、かう言つて箒で一つ定吉の臀をどやし付けた。定吉は竹丸と一所に道臣の居室に逃げ込んだ。後を追つて來たお駒は、其處に飲み荒らし喰ひ荒らしたまゝ殘つてゐた杯盤を見ると、箒を棄てゝ、

『あゝ定はん、一杯飲みんか。わたへが酌するよつて。』と取り上げた德利の尻を撫てゝみて、夏になつても爐塞ぎをせぬ煮立つた釜の湯に漬けて燗をしなほした。

それからお駒は、定吉を道臣の座蒲團の上へ坐らして、

『さア旦さん、一つお喫りやしとくれやす。』と恭しく盃を進めた。

『うん、駒、燗はよいか。……えへん。』と定吉は道臣の眞似をしたが、どうも耐らへ切れぬといふ風で、其の眞面目腐つた顏を崩して、大きな聲で笑つて了つた。お駒も共に笑ひ轉げた。竹丸も變な顏をしながら笑つた。

八

其の翌日の午後、京子は駕籠に乘つて大阪の病院から歸つて來た。

お駒と定吉とは、正午少し前頃まで寢てゐて、門も雨戸も閉め切りになつてゐた。節穴や隙間から日の光が白く射し込んで、サーチライトのやうにお駒と定吉との枕元を照らした。前の晩獨り寂しく眠つ

た竹丸は、朝早く飯も喰べずに裏口から出て、遊び廻はつてゐた。だいぶ熟しかけた梅の實を取つては鹽を付けてボリ／＼喰べた。

巡禮や參詣人が二三人も來て、神名帳や神符を頂きに社務所へ來たけれど、門が閉まつてゐるので、暫く扉を叩いてはブツ／＼言ひながら立ち去つた。

漸く眼を覺まして、餘りに日の高いのに驚きつゝ、定吉は起き上つて雨戸を繰り開けた。それに續いて、お駒も眼を擦り／＼起きて、よた／＼しながら便所へ行つた。二人は緣側で眩しさうな眼をして、顏を見合つたまゝ默つて突つ立つてゐた。白日は容赦なく二人のしどけない姿を照らし付けた。

雨戸を開け、門を開け、掃除を濟まして、やつと人心地が付いた時、川向ふの潮音寺の鐘がゴーンと耳を刺すやうに響いた。

『やアい、正午ぢやぞ。』と叫ぶ農夫の濁聲が何處からか聞える。眠さうな牛の鳴き聲もしてゐた。

急いて炊き付けた釜の中の米が、漸く飯にならうとする時、『えへん、えへん』と道臣の咳が先づ聞えて、京子の乘つた駕籠が嫁入りの時のやうに玄關へ乘り付けたのである。

股立を取つた道臣の袴にも、尻端折つた千代松の腿引にも砂埃りが付いてゐた。駕籠舁夫が二人、車夫が二人、ドヤ／＼として井戸端で水を飲んだりするので、周圍が俄に混雜をして、お駒はたゞ茫然としてゐた。

客座敷と道臣の居室との間の六疊に、千代松の手で蒲團を敷いて病人を寢さした。ツイ二三ケ月前までは、瘠せて行くばかりであつた京子の身體に、甚だしい水腫が來て、角力取りのやうになつてゐた。

眼が細く顔が大きくなつて、昔の面影は何處にもなかつた。

それを襖の隙間から覗いた竹丸は、慄然として、お駒から聽いた化猫の話が、いよ〳〵確められるやうな氣がした。道臣は袴も脱がずに窃と竹丸を小手招きして、便所の横の戸棚の前へ連れて行き、

「阿母さんは無茶いふよつて、あんまり側へ寄らんやうにしいや。竹、竹いふて呼んでも、聞えん風してるのやで。」と小ひさい聲で言つた。

「疲勞れたと見えて、スヤ〳〵寢てはります。あの分ならまアちよいと安心だすなア。」と、何時の間にか千代松が足音も立てずに背後へ來てゐた。

「さうだすか、わたへ等も確乎り疲勞れましたなア。まア緩然一服しまへう。」と、道臣は稍どぎまぎしながら言つて、先きに立つて居室へ入つた。

「三月に病院へいた時、蠟燭を十二本も呉れはつたので、可笑しいとおもてましたんやが、あの時から少し變つてましたのやなア。」と、千代松は例も自分の坐るところへ例ものやうな形に、版こて捺した如くキチンと坐つて、肩を搖り〳〵低い聲で言つた。

「刄物弄りさへせんと、まだ置いといてもよいのやが、と院長がいふてました。初め剃刀を弄つてゐたのを看護婦が騙して取り上げたんやが、其の次ぎにまた匕首を弄つてたのを見付けたんて、取り上げて了ふとそれから暴れ出したんだすな。……院長もさうは言ひよらんけど、さうらしいと思はれますなア。」と、道臣は京子の短刀を懷中から出して机の上に置いた。

「其の匕首はあの人の寶物や。肌身離さず持つてゐやはつたんやさかい、それを取り上げると氣も狂ひ

まへう。……拔けんやうにして持たしとかはつたら、よろしいやろ。」

「拔けんやうにちうても、狂人力で拔くかも知れんなア。」道臣は首を傾けた。

「あんたも疲勞ぶれなはつたやろ、六里の道歩きなはつたのは近年ないこつちや。わたへもたいぶ疲勞ぶれましたわい。……駕籠屋と車屋去なして來て、ちいと息まして貰ひまへう。あんたも息みなはれ、定はんが居るらしいよつて、あの子に病人を番して貰ろたらえゝ。」

かう言つて千代松は靜かに立ち上つたが、

「乘らん車屋に、空車曳かして連れて來たんやもん、阿呆らしい話や、錢只取られて、……けんどわたへは一里も乘つたかいなア、あんたは全て乘りなはれへなんだなア。」と、物惜しさうな顏をして道臣の顏を見た。

「わしも一丁や二丁、あれで乘りましたやろ、駕籠の側離れると病人が喚き出して轉げ出さうとするもんやよつて、到頭駕籠脇の武士みたいなことを初めて勤めて了うた。」と、續けさまに煙草ばかり吸つてゐた道臣は、プッと細長く煙を吐き出してから言つた。

「天下茶屋の芝居の元右衞門みたいに、駕籠から太い腿を出して、バタ／＼暴れられた時は、往來のもんが立ち止まつて見るし、わたへも氣が氣やおまへなんだ。」と、千代松は言つて、臺所の方へ出て行つた。

道臣はポン／＼と手を鳴らしてお駒を呼ばうとすると、次の室で病人が健康であつた時のやうに、「かイー」といふ返辭をしたので、氣味わるがつて首を縮めつゝ、病室を覗いたが、京子はまた眼を閉ぢて

スヤ〳〵眠つてゐた。其處へお駒が來たので、

『酒を持つて來て呉れ、酒を。』と言ひ付けて、漸く氣が付いたやうに袴、羽織を脱ぎ棄て、襟垢の付いた平常の白衣を引ッ掛け、白い帶をグル〳〵卷きにして、コロリと横になると、手枕をして、

『チヤンヤリホイロ……』などと、輕く疊を叩きつゝ、手拍子を取つて、篳篥の樂譜をやり出した。

其處へ千代松がまた猫のやうに、足音もなく入つて來て小ひさな帳面に細かく書き付けたのを見てゐたが、軈て懐中から玉の大きい老眼鏡を取り出し、道臣の枕元に坐つて、委しく昨日からの入費を說明した、道臣はそれを碌に聞かないで、たゞ『ふん、ふん』と點頭いてゐた。五百石を上地した公債證書を千代松が預つて、道臣の家の不時の物入りを辨ずることになつてゐるので、綿密で周到な千代松は、一厘一毛までも誤りのないやうにしやうとするのである。果ては懐中から小ひさな算盤を取り出し、節くれ立つた指で、やりにくさうに彈き出した。

お駒が酒を持つて來たので、道臣は起き直つて膳の上でチビリ〳〵始めた。千代松はそれに構はないで、算盤と帳面とを睨んでばかりゐた。道臣も千代松には頓着なく、忽ち一本を傾け盡した。

『お父さん、お父さん。』と、次の室で病人が途方もない大きな聲を出したので、道臣と千代松とは驚いて顏を見合はした。お駒は顏の色を蒼くした。

『お父さん、早うおいなはれ。……あゝ天神樣も御一所に。……齋世親王樣もお姫樣も。……』

一向に分らぬことを、病人はいよ〳〵高聲で叫び出した。

道臣は盃を下に置き、千代松は眼鏡も帳面も算盤も一所に懐中へ捻ぢ込んで、京子の枕元へと急い

だ。お駒は立つたり坐つたり、たゞ周章てゝゐた。

『京子、氣を確かに持ちんか。……お前のお父つあんは、もう故人になられたやないか。』と道臣は、動もすれば歩き出しさうな京子を押へながら言つた。

『あれあこへお父さんが來る。』と、京子は半ば起き返へつて障子のガラス越しに川向ふを指さした。其のガラス障子は、何事にも珍らし物喰ひの道臣が、まだガラス障子といふものゝ出來たてに大阪へ註文して、この室の四枚だけを昔から篏まつてゐた黒塗り腰高のと取り替へたのである。其の頃は京子の實家も全盛で、河から河へ廣い地面を貫いた網島の邸に贅澤をしてゐた。たま〳〵道臣が其の邸へ行つても、出入りの骨董屋以上の待遇は受けられなかつた。『昔は五百石の御朱印で』などと言つても、『乃公の家の糊米だ』と京子の父は高を括つて道臣を見下げた。腹が妾だといふので、長女には生れてゐても、京子は弟や妹ほど父に重んぜられなかつた。廣い家には道臣も昔から慣れてゐたけれど、網島の邸の内部の數寄を凝らしたのと、美しい小間使たちの多いのとには、キヨロ〳〵して京子に窘められることも多かつた。其處の三階の小座敷で、鼎形の瓶かけに銀瓶の湯のたぎる音を聽きつゝ、前面の淀川からお城の角櫓の白壁までを見渡したガラス障子越しの眺めに感心して、道臣は直ぐ自分の家にもガラス障子を篏めたのである。馬も網島の義父の眞似をして飼つてみたけれど、庭の泉水に羽を切つて放してあつた丹頂の鶴は、羨しがるだけで眞似がしきれなかつた。

『あゝ孫一が來る。』と病人はまたガラス障子越しに指さしたので、道臣も千代松も前と同じやうにツイ其の方角を振り返へつたが、川向ふの縣道には人ッ子一人通らないで、里道との辻に立つた自然石の常

夜燈が、寂しく夕陽を浴びてゐた。

『孫一大けなつたなア。』と病人はまた叫んだ。孫一といふのは、竹丸の兄で、生れて一ヶ月經たぬ中に亡なつた稚子である。其の次ぎに産れた竹丸の姉は、一年ほど生きてゐたが、この二人の子は村の北山の別當代々の大きな五輪の並んだ後に二つの小ひさな石碑となつてゐる。孫一の生れた時は、京子の父が初めての孫だと言つて、自分に孫一といふ名を撰び、舊藩主から拜領の、欅の紋を散らした金作りの大小を幼い孫へ贈り物にして喜んだ。

『あゝ西郷樣が。……西郷隆盛が。……』と、病人は今までよりもまた大きな聲で、殆んど怒鳴るやうに叫んだ。

『これ〳〵、氣を確かに持ちんか。』と道臣は、當惑の色を浮べて言つたが、ズツトと前に網島の邸へ西郷隆盛といふ大入道が、粗末な飛白の着物に白い兵兒帶をだらしなく結んで、『居るか』と太い聲をして來たことのあるのを思ひ出してゐた。鳥羽繪の西郷隆盛といつたやうな人相をしてゐるので、多分さうした綽名のある何處かの奇人でゝもあらうと思つてゐると、それが眞個の陸軍大將西郷隆盛であつたのに驚いたことは、今でも半月に一度ぐらゐ思ひ出してゐる。京子の兄の一郎といふのは西郷戰爭の時賊軍に味方して、『勝てば官軍……』と歌つたが、其の後アメリカに逃げたとか聞いてゐる。この亂暴者が曾つて父の愛馬を廐から盗み出し、網島から一鞭あてゝ、六里の道を天滿宮まで乘り切り、汗塗れになつた馬を繋ぎもせずに、道臣を相手に大杯を傾けたことなぞが、次々に思ひ出された。病人がこの次ぎには必ず『一郎さん』と叫ぶてあらうと、道臣は考へたが、今度は、

『竹ちやん、竹ちやん。』と優しく竹丸の名を呼んだ。

『竹さん、竹さん。』と、千代松は聽き取れぬほどの低い聲で、次の室の方に向つて呼んだ。今まで何故竹丸の名を呼ばぬのかと、不思議に思つてゐたのであらう。この場合病人の心を和げて、幾分でも落ち付かせるのは、竹丸を呼んで來るに限ると、千代松は遂に立ち上つて竹丸を探さうとした。

母の側へ行くのに怖氣をふるつてゐた竹丸は、お駒に引ッ張られ、定吉に押されて、病室の入口の襖の蔭まで來てゐたので、それを見た千代松は否應なしに連れ込んで、京子の枕頭に坐らした。

『竹ちやん、遠いとこをよう來たな。しんどかつたやろ。』と、京子はちやんと起き上つて、舐め付かんばかりの嬉れしさを湛へた。竹丸は木像のやうに四角張つて、眞正面を向いたまゝ、瞬きもすることが出來ぬらしかつた。

『竹ちやん、お前も十二やよつてな。櫻井の驛子別れの時の正行と同い年や。阿母さんのいふことを、よう覺えときや。……この匕首はなア、阿母さんのお父さん……竹ちやんの祖父さんの記念や、これをお前にあげるよつてなア、……阿母さんが死んだら、これを阿母さんやと思ふて、大事にするんやで。……阿母さんの顏が見たうなつたら、これを拔いて見るのや、さうするとこの白刃の中に阿母さんの顏が映つてる。……若し阿母さんの惡口をいふ奴があつたら、こいで斬るんや。』

眼も何も腫れふさがりさうな顏に、涙の露をたらして、京子はヂッと竹丸の顏に眼を注ぎながら、右の空手で大事な物を握つてゐるやうにして、恭しく前に差し出した。

『竹さん、阿母さんが刀をあげると言やはるんだす。お辭儀して頂きなはれ。』と千代松は竹丸に言つ

て、眼配ばせをしたけれど、竹丸は何が何やら分らぬので、腕まで腫れて來た母の拳を見詰めてゐた。
「そんなら、わたへが取り次いであげまへう。」と言つて千代松は、兩手で京子から物を受ける眞似をして、一寸押し戴くと、更にそれを竹丸の懷中へ入れてやる眞似をした。竹丸は擽つたさうな顏をして、母の身體から眼を離さなかつた。
「竹ちやんも大けなると、腎張りになるんやろ。……親に肖ぬ子は鬼子や。」と言ふかと思ふと、大きな聲でゲラ／＼と笑ひ續けた。
「其處に居るんは誰れや。」
急に笑ひを止めて、京子は次の室の敷居際に坐つてゐたお駒に眼を付けると、かう言つて屹と睨めた。お駒が顏を赧らめて尻込みするのを、千代松が取り成す風にして、
「駒だす。あんたのお留守に一人で竹さんのお世話をしてゐました。」と言つた。
「駒……駒……駒鳥……將棋の駒……此處へお出で。」
また笑顏になつた京子は、ます／＼尻込みしやうとするお駒を腫れた二重腮で磨いた。道臣とそれから次の室の襖に半分顏を現はした定吉とは、冷水でも浴せられたやうな狀をした。
「お駒ちやん、お召しや。」と、千代松は目顏で知らして、病人に逆ふなと注意したので、お駒は澁々病床近く膝行り寄つてお辭儀をした。
「お駒ちやん。……ハヽヽヽ。可愛らしい名やなア。」と、京子は眞向から大きな聲を浴せて、綺麗に結つたお駒の頭髮と愛くるしい頸筋のあたりとを見た。

『お駒ちやん、お前は何や。……此處の家で何んしてるんや。……お前に竹ちやんは與らん。欲しいやろ竹ちやんが。……何んぼ欲しがつても與らん、與らん、與れへん。』と京子は鋭く首を振つた。

『駒は内方の召使やおまへんか。女衆だすで、女中さんだツせ。』と、千代松は低い聲をして噛んで含めるやうに言つた。

『女中。……家の女中は代々「鶴」だす。駒といふ女中はおまへん。……駒はてかけ（妾の事）はんだすやろ。……女中なら白丈長を掛けますが、てかけはんだすよつて、赤い鹿の子掛けてます。』と、京子は悄々し氣にお駒の頭髪を見入つた。

『てかけでも足かけでもおまへん。わたへが請け合ひますさかい、安心しなはれ。』と千代松は微笑んだ。

居たゝまらぬ風で、冷汗を流しつゝ居室へ入つた道臣は、燗冷ましの酒を手酌でグイ〳〵飲んだ。

九

子宮病から劇しいヒステリーになつて、それから心臓をわるくしたといふ病院の見立てゞあつたから、かゝり付けの醫者もそれによつて投薬したけれど、京子の病氣は日増しに惡くなるばかりであつた。何をするか少しも油斷がならぬので、道臣と千代松と定吉とが代り合つて日夜病床に附き切つてゐた。

『大事の〳〵匕首がない。腎張りさんが盜んだんやろ、お父さんに申譯おまへん。』と、京子は突然泣き聲を出して敷蒲團の下などを探ぐつた。

『あんたあの匕首はこないだ竹さんにあげはつたやないか。』

『いゝえ、竹には與れしまへん。竹が持てよるんなら、盜みよつたのや。……竹……竹……竹。』と、京

子は大きな聲で呼んだ。其の聲を聞くと、竹丸は驚いて表門の外へ逃げ出して了つた。

お時が厚化粧を凝らして病氣見舞に來た。

「あんたは何處のお方や。えらう綺麗にしてはるなア。」と、先刻から蒲團の上に起き返つて坐つてゐた京子は、ケロリとした顔をした。

「まア奥さんとしたことが。」と、お時は情なさゝうな顔に涙を浮べて俯向いた。

「まア奥さんとしたことが。……」と、京子は嘲笑ひながら、お時の聲色を使つた。

「奥さん、ほんまに、わたへがお分りになりまへんか。」と、お時はハンケチで涙を拭き〳〵顔を上げて言つた。

「奥さん、ほんまに、……わたへがお分りになりまへんか。」と、京子はまた口眞似をして、有り合はした手拭で涙を拭く形までして見せた。

「奥さん、氣を確かに持つて、ようわたしを思ひ出しとおくれやす。」

お時は絞り出すやうな聲で、かう言つて、また溢れ落つる涙を拭いた。

「奥さん、氣を確かに持つて、……」と、今度は京子があかんべえをした。

何とも物の言ひやうがないので、お時はたゞ呆れた顔をしてゐると、京子の方から意地わるさうな聲を出して、

「奥さん。……」とやり始めた。お時は堪らないほど悲しい顔をして、わッと泣き伏した。

「何んぼ何んても、お時さんを忘れるちうことがあるか。……千代さんとこのお時さんやないか、お前

がお針を敎へたし、金毘羅さんへも一所に參つたやないか。』と、道臣はお時の方を見い〳〵、氣の毒さうな顔をして言つた。
『またあんなこといふて騙すのや。……千代さんとこのお時さんは天神さんのお姫さんになつて、齋世親王と牛車の中でな、……ほゝゝゝ。』と、若い娘のするやうに、科を作つて、寢衣の袖で羞かしさうに、眠れた顔を掩ふた。
『何いふてるんや。……京子、お前氣を確かに持つて、ゆッくり考へてみいや。お前は夢でも見てるんやらう。』
道臣は物靜かに、よく分らせるやうとして言つたけれど、京子は劇しく首を振つて、
『阿呆らしい、そんな勿體ないこと考へてるよつて、天滿宮さんの罰が當るんや。道眞公の臣やいふて、道臣ちう名つけたかてあかんなア。』と道臣を尻目にかけて言つた。
道臣は差し俯向きつゝ、頻りに考へてゐた。お時は顔を上げて、泣き腫らした眼をしばたゝきながら、ニヤリと笑つて道臣の方を見た。
『空涙溢したかてあかん。』といふかと思ふと、京子はすッくと立ち上つて、次の室から臺所の方へ歩き出したので、道臣もお時も周章た風で其の後に隨いた。
臺所の板の間に居たお駒は、京子の姿を見ると逸早く裏口へ逃げ出した。竹丸も續いて逃げたが、定吉だけは、今まで自分に並んで腰をかけてゐたお駒の尻の跡の暖かくなつてゐるところを撫でつゝ、獨りだけ逃げずにゐた。

「あゝ櫻丸がゐた。……お前の嫁はんはお八重ちうんやろ。……何處へ逃げた。」と、京子は定吉の前に立つて言つたが、何か急に思ひ出した風で、土間からお駒の古い利休を穿いて、キユー〳〵と厭やな響をさせながら、裏の井戸端へ行つて、深い井戸の中を覗き込んだ。

十

其の夜千代松が來て、例もの通り足音も立てずに、猫の如く臺所から上つたが、誰れも居ないので、其處の圓形の大火鉢の前に座つて、何うかすると薄ら寒い初夏の夜を、眞黑に煤けた藥鑵の上に兩手を翳しつゝ、半時ばかり默つて過した。大きな古家の内は死に絶えたやうに靜かで、奥の方にも咳拂ひ一つ聞えなかつた。横の方の柱には珍らしく物喰ひの道臣が、網島の邸の廊下にあつたのを見て、直ぐ同じ物を買ひ調へた反射器附きの掛けラムプが、此頃はもう煤つたまゝぼんやり光つて、だゝつ廣い臺所の隅々までを塵一本も殘さずに照らした昔の面影は見えなかつた。千代松は火鉢に翳してゐた兩手を懐に收めて、首を傾けつゝ、傍の俎板の上に澤庵漬けの黄色い大根が半分だけ切り殘されて、庖丁とゝもに置きつ放しにしてあるのを見詰めてゐた。

奥の方に足音がして、大黑柱の横に寂しく姿を現はしたのは定吉であつた。

「あゝ千代さんが來てなはつたんだすか。」と定吉は、稍安心した容子であつた。見れば顔の色は蒼くなつてゐる。

「狂人さんは何うしてはる。」と千代松は何氣なく問ふた。

「寢てやはる。……それよりわたへ今しよんべんに上の雪隱へ行くと、戸の中で柏手が三つなつた。あ

れは一體何んやらう。」と、定吉の顏色はまだ元の通りにならない。

「レコが入つてたんやろ。……あの人も雪隱て柏手を叩くなんて、少し傳染つて來たかなア、おさちが。」と千代松は微笑んだ。

「旦那は納家でお駒ちやんと飲んでやはる。」と定吉は首を振つて、千代松の側へ摺り寄つた。

「納家て酒飲んではる。……」と、千代松は變な顏をして裏口の方を見た。

「上の雪隱には怪しいものが居るに違ひない。俺アしよんべんしたいんだが、怖うてもう中の雪隱へも下の雪隱へも行かれん。」と、定吉は千代松にくつ付くやうにして、兩手を火鉢に翳した。

「わしが代りにいてこうか。」と、千代松は冷かしたが、心の中では初代の梅の坊が女犯の罪を自ら責めて、別當への申譯にあの上の雪隱て舌を嚙み切つて死んだといふ話に就いて考へてゐた。

梅の坊の幽靈なら柏手は打つまい。鍾を叩くか珠數を揉むかするてあらう。狸が腹鼓を打つたのが、柏手のやうに聞えたのてはあるまいかとも思つた。

いつの頃てあつたか、ズッと前の或る晩に、お時がこの家へ手傳ひに來た時、上の雪隱はお客用としてこの家の人が少しも入らないのを知らずに、あの暗い廊下を行くと、便所の中にあか〳〵と燈火が點いてゐるので、此方から聲をかけたが、答へはなくて燈火がふつと消えて了つたといふことをも思ひ出した。梅の坊へ入る人が代々色好みなのも、初代の祟りてあらうといふ村人の噂さも考へられた。

「上の雪隱と言ひ、風呂場の踏石と言ひ、この家には祟り氣のあるもんが多い。」

千代松も覺えず心細さうな獨り言をした。定吉は氣味わるさうに千代松の顏を見て、

『風呂場の踏石で何んだす。あの四角い大けな踏石が祟るんだすか。』と慄へ聲をして言つた。

『祟るも糸瓜もあるもんかこ』と、千代松は俄に態とらしく笑つた。

『先刻お時さんが來やはつたけど、奥さんは分りまへんのや。あんた何處の人やちうて問やはりました。それから妙なことばかり言やはりますのや。……お時さん泣いてはつた。』と、定吉は少しく落付いた狀をして言つた。

『さうやつたてな。けんどそれやわしに言はすと嘘や。何んぼ氣がちごたかて、わしを知つてゝ、お時を知らんちうことがあるかんか。其處んとこは作り狂氣や。……何んぼ何んても、菅原の芝居やおまへんて、櫻丸や菅秀才が出て來て耐るもんか。……わたへは憎まれ役やさかい、差し當り時平公か松王ちうとこや。』と、千代松は何處までも粘り强さうな顔に、太い皺の波を打たせた。

『わたへらのまだ生れん前に、村で狂言(素人芝居の事)があつた時、あんたは近江源氏の花賣佐々木を演なはつたさうだすな。……今ならわたへが盛綱を演て、あんたに時政を演て貰ひますなア。』

『そんな臆病な盛綱では、和田兵衞の鐵砲の音で眼を廻はすやろ。』

二人は相顧みて笑つた。其の時外の濡れ緣の横にある物置きの邊で、ガチャンといふ大きな音がしたので、定吉は忽ち顔の色を變へた、

『猫やろ。……シイッ〱。』と言つた。

『猫にしては、ちいと音が大け過ぎるなア。』と言ひ〱、千代松は立ち上つて靜かに障子を開けると、外は星月夜で、濡れ緣の前の御所柿の黑い幹は人の姿のやうであつた。眼を据ゑてヂッと横の方を見る

と、何やら動いてゐるものがある。

千代松は後を振り返へつて、一寸定吉の頸筋を見てから、外へ出て音のせぬやうに障子を閉めると、抜き足て濡れ縁から物置の前へ行つて、逃げやうとする影のやうなものを中の便所に追ひ詰めた。逃げ場所がなくなつて後を向きつゝ、

『今晩は。……』と言つたのは京子であつた。寝衣も何もはだけ放題にはだけて、太腿までもあらはに、口の邊りには、鐵漿のやうなものがベタ〳〵附いてゐる。千代松は先づ無言のまゝ京子を伴ふて、中の便所へ通ふ開き戸から、飯玉和歌集が披かれたまゝ唐机の上に載つてゐる道臣の居室を經て、行燈の薄暗い病室に送り込み、轉がすやうにして蒲團の上へ横にした。

裏口の戸を閉め切つて、納家の蓆の上て、京子に知れぬやうに、お駒の酌て酒を飲んでゐた道臣は、腰の邊りに藁屑の附いたまゝ、微醉で病室に入つて來て、何も知らずに、

『京子、加減はどうやなア。』と言つた。

漸く放たれたお駒は、臺所て千代松の坐つてゐた跡へ、定吉に寄り添ふて座りながら、二三杯無理に飲まされた酒臭い息を吐いた。

『風呂場の踏石なア、あれが祟つてるんやさうな。……千代さんがさういふてた。』と、定吉はお駒の顔を覗きながら言つた。

『さうやあの踏石は、旦さんが裏の籔にあつたんを運ばして据ゑたんやが、何んても昔のえらい大將の石塔の臺やといふ話や。それが祟つて奥さんが病氣にならはつたんやろ。』とお駒は事もなげに言つて

退けた。
『千代さんがそんなこと知つてるんなら、なんて旦那に、あの臺石を元の籔へ戻しなはれて言はんのやろ。……お駒ちやんも、なんて默つてるんやなア。』と定吉は不思議さうな容子をした。
『千代さんが、そんなこと旦那にいふもんか。……千代さんは奥さんの死なはるのを待つてるんやないか。お時さんを二度目の奥さんにしやうとおもて。……それからお時さんの妹がゐるやろ、あの子は十一かなア、あれを坊んちの嫁はんにしやうとおもてるんや、よう分つたる。……今に天滿宮さんを皆な千代さんが取つて了うんやろ。』
聲は低いけれど、お駒は言葉に力を入れて、定吉に敎へ込むやうにした。
『そんならお前も奥さんが死なはるやうに、風呂の踏石のことを旦那に言はんのやなア、あゝさうか。』
と定吉は厭や味らしく言つて横を向いた。
病室では千代松が道臣に默つて、京子の口の邊りに附いてゐる汚れを拭き取つて見ると、何か知ら青い色をしてゐるので、立つて元の物置を調べて見た。
物置の中には、いろ／＼の物がゴチャ／＼してゐて、綠礬の入れてあつた大きな茶碗へ新らしく水を盛つたのが、マッチの灯でありあり／＼と見られた。京子は綠礬を呑めば死ねると思つたのらしかつた。

十一

其の翌日の夕方、道臣が風呂へ入つて、お駒に背中を流さしてゐるところへ、定吉が來て、
『お加減はどうだす。ぬるけれや焚きまへうか。』と言つた。

『焚いて好けれや、わたへが焚くし、定はん放つといて。……それよりお前は奥さんとこへ附いてんと、またよんべのみたいなことがあるよつて。』

お駒は道臣の背中へ小桶て湯をかけながら、素氣なく言つた。

『お駒ちやんに言ふてるんやない、旦那に言ふてるんや。直さに口出すんやなアお前は。』と定吉はブリ〳〵した。

『もうえゝ、結構、それてえゝ。』

上機嫌の道臣はかう言つて、湯桶に漬りながら、

『風呂場で夫婦喧嘩すると、乃公が困るやないか。……駒、お前一寸京子の番してゝ呉れ。定はんそんなら一つ焚いてんか、賴む。』と、仲裁顔をした。

『よろしおます。』と、定吉は勝利を誇り顔に、出て行くお駒の帶のハギの赤いのを見送つてから、風呂柴を折りくべて、ドン〳〵と釜の下を焚いた。

『ぬるい中に入つて、後からだん〳〵熱うして貰うのが一番やなア。大名風呂ちうのはこれや。』と、道臣はざぶ〳〵やつて、いよ〳〵上機嫌てあつた。

『旦那、この踏石をどけて了うて、他のもんに代へたらどうだす。』と、定吉は火氣と烟とに額から汗をたらしながら言つた。

『お前もこの石が祟つてるちうんか。そんな阿呆らしいことがあるもんか。……よしんば祟つてたかて、えゝやないか。あんな病人早う片付いた方が好いもんなア。……それてもまだ祟りさうやつたら、其の

時元の鞘へ戻しとこ。……それてよいやないか。」と、道臣は小ひさい聲て、奥座敷へ氣を兼ねるらしい狀をしつゝ、洒々として言つた。

それから道臣は、風呂の流し場て、お駒の鏡臺を据ゑて、髯の多い顏を綺麗に剃り、まだ時候には早い浴衣を輕さうに引つかけて、京子の病室に入つて行つた。

「えらうやつしてなはるな。……若いのんが出けると、自分も若うなるもんやなア。」と、京子は殆んど正氣の人のやうな物の言ひ様をして、道臣を冷かした。

其處へお駒が出て來て、何やら角張つたものが新しい風呂敷に包まれたのを差し出し、

「これを大工さんとこから旦那に上げて呉れちうて、三ちやんが持つて來ました。」と道臣に渡さうとした。道臣は不思議さうな顏をして、それを受け取りかけたが、ハッと氣が付いた狀て手を引つ込め、

「何んやこんなもん、こんなとこへ持つて來るんやない、彼方へ置いといて、阿呆んだら。」と稀らしくお駒を叱つて、眼に角立てた。

「さいだすか、そんなこと知りまへんもんやよつて。」と、お駒がぷッと膨れて、風呂敷包みを片手に立ち去らうとするのを、

「それ何や、わしに見せとくれ。」と京子は手を差し延べて、お駒から風呂敷包みを取らうとした。

「早う持つて行きさんか。何グッ〳〵してるんや。」と、道臣は周章てふためいて、お駒の手から風呂敷包みを引ッたくると、急いて玄關の方へ立つた。風呂敷の結び目が解けて、衝立の陵王の舞樂の繪の前にころりと落ちたのは、刻み立ての白木の位牌てあつた。お駒は凄い眼付てそれを見てゐた。

神道葬祭記といふ本を取り寄せて、この間中から道臣は頻りに研究してゐたが、位牌だけは直ぐ間に合はぬので、出入りの大工を呼び寄せ、本に書いてある雛形を見せて造らしたのである。今風呂敷から拔け落ちた位牌を拾つて納戸へ入ると、内から締りをして、本の繪と引き合はせた上、位牌をば片隅の人の氣付かぬところへ押し隱した。

『あれ何んやろ、ごツつおう（御馳走）か。』と、病室では京子がお駒に言つてゐた。

十二

其の夜丑三つの頃に、道臣は京子の枕元で看病をしながら、ツイうと〳〵と居睡りをしてゐたが、蚊帳越しに颯と吹き込む夜露を含んだ冷たい風に顏を撫でられ、驚いて眼を覺ますと、京子の寢床は空になつて、緣側の雨戸は人の出入りの出來るほどだけ繰り開かれ、山川の瀨の音が琴々と聞えて、行燈の灯は今にも消えさうにチラ〳〵搖いてゐた。

道臣は青い蚊帳を撥ねて立ち上ると、帶締め直して、上の便所と中の便所とを見て廻はつたが、京子の姿は何處にも見えぬので、臺所の次ぎの六疊に寢てゐるお駒と定吉とを蚊帳の外から起さうとした。二人とも看病疲れでグツスリ寢込んで、定吉の足は二本ともニユーと長く蚊帳の外に出てゐた。

道臣は二人を起さなければならぬ急場の用をも忘れて、窓から射し込む星明りをたよりに、顏を蚊帳に押し付けて覗き込んだ。

『うん。』と叫んで定吉が寢返へりを打つたので、それに誘はれたやうに道臣は、

『定はアん。』と大きな聲を出すと、定吉は漸く眼を覺まして、むく〳〵と起き上つた。お駒も殆んど同

時に蒲團の上へ起き直つて、眼を擦り〳〵、キョロ〳〵してゐた。

「二人ながら一寸起きてんか。」

から言ひ棄てゝ、道臣は病室に引き返へした。定吉とお駒とは、手や顔を掻き〳〵、後から病室へ入つて見て、病床の空なのに、初めてハッキリと眼の覺めた容子になつた。

道臣と定吉とは手分けして、京子の行く方を探しに出ることにした。定吉は道臣が「そんなもの持つて行かいでもよいやないか」といふのを無理に頼んで、脇差しを一本腰にぶち込み、喜み勇んで、搦手の大將といつたやうな顔をしながら、西の門の方へ出て行つた。道臣はマッチを一つ袂に入れて、東の門の方へ行つた。

お駒は唯一人怖々て病室に座つてゐたが、兎ても堪らぬといふ顔をして、玄關に廣い蚊帳を吊つて寢てゐる竹丸の蒲團に這ひ込んだ。

道臣は先づ東の門前の水茶屋の軒下に立つて、何方へ行つたものかと考へた。水茶屋の戸は堅く締つて、雨風に晒された黒い板のところ〳〵に新らしく繕はれた痕が、白く浮き上つて見えてゐた。夜の匂ひは薄暗に漂ふて、戸の隙間から若い女將の細い寢息が聞かれるかと思はれた。松原の方へ長く續いた里道の砂塵は、しッとりと露に濡れて、其間は氣の付かぬ凸凹したところが、一目にずうッと見られた。

水茶屋の横から川端へ下りて、猫柳の繁つた岸の上から水の中を覗くと、星影が魚の目のやうに映つて、淸らかな水垢の香が、今年ゝ鮎の豐漁を思はせた。杭に繋いで錠をおろした水茶屋の魚槽には、鯉の跳ねる音がした。

川沿ひに猫柳を分けて、南隣りの村へ渡る長い丸木橋の袂まで來ると、其處は淵になつてゐて、黒ずんだ水の底には、鐘が沈んでゐると傳へられてゐる。牛の寢たやうな岩の上に立つて、夜目の屆く限り見渡したけれど、兩岸には人らしいものゝ影もない。小石を一つ拾つて投げ込むと、水音とゝもに緩く波紋を起して、黒い淵は微笑してゐる巨人の唇のやうに見えた。

この底に京子は早や冷たくなつて吸ひ込まれてゐるのではあるまいかとも思つて、道臣は岩の周圍を探し廻はつたが、冷かな岩は何事をも語らない。

引き返へして、水茶屋の前に、また女將の寢息が漏れるかと立ち止り、それから東の門を入つて行くと、隨神門の內にマッチでも摺つたらしい光がチラと見えた。道臣は神殿の銅の擬寶珠でも盜みに來たものがあるのではなからうかと思ひつゝ、隨神門の扉を押し開いて、兩側に並んだ石燈籠の蔭や、中をくり拔けば大きな水風呂の幾つも出來さうな太い幹の松杉の根方などに眼を配りつゝ、拜殿へ昇つて行つた。

結界を越えて廣い板の間を歩くと、參詣人の投げた文久錢が足の裏に冷やりとした。常に下ろしてある簾をかゝげて、東の局に入つたが、古臭い空氣が鼻を衝いて、自分の姿さへ見られぬ暗黒である。袂からマッチを出して摺ると、今の先きまで人が居たやうで、神殿の遷座式の時に使ふ手燭の雪洞には、蠟燭が半分ほど燃えさして、吹き消した後の暖みがありさうに見えた。道臣は二度目に摺つたマッチの火を其の雪洞の蠟燭に移して、よく四邊を見ると、食物を包んで來たらしい竹の皮などもあつて、疊に薄く積つた塵埃の上の足跡や膝の跡から見て、三四人の者が車座で賭博でもしてゐたらしかつた。白に黒の紋を置いた縁の上には、煙草の吸ひ殻の生々しい燒け焦げも見えた。

京子が此處へ來たので、賭博を打つてゐた者共が驚いて逃げたのではあるまいか。――と道臣は考へて、雪洞に暗を照らしつゝ、西の局から神饌所などを見て廻はつた。西の局には、この天滿宮の神體になつてゐる菅公自作の木像を絹地に模寫したといふ、極彩色の衣冠束帶の軸物が掛かつてゐる。道臣は雪洞を傍に置いて、其の軸物の前に拜伏し、稍暫く祈念を凝らした。神饌所では俯伏せにした黑塗りの高坏に雪洞の光と自分の顏とが映つたが、道臣は恐ろしいやうに思つて、映つた自分の顏を正視することが出來なかつた。

雪洞を吹き消して拜殿を下りると、夜はもう曉に近くて、星の影も薄くなつた。拜殿の横から、ぐるりと神殿の後に廻はると、こんもりとした神域の木立は、紫の雲が垂れ下がつたやうで、梟が一聲けたたましく啼いた。

横の方の玉垣の側で、何やら白いものがチラと動いたやうなので、道臣は足音を偸んで近づいて行くと、其處の大きな杉の幹へ、蟬のやうにピタリとくツ付いてゐるのは、寢衣姿の京子であつたから、道臣は慄然として棒のやうに突つ立つた。

よく見ると、何時の間に持ち出したのか、だらりと垂れた手には金槌を持つてゐる。勇氣を出した道臣が息を吹きかけても分るほどの近さに進んでゐるのに、京子は少しも氣付かぬ風で、身動きをしなかつた。

よく見ると、杉の幹には丁ど京子の頭の届く高さに、二つの小ひさな市松人形が、釘で打ち付けてあつた。京子が婚禮の時桐の箱に入れて持つて來た上製の京人形で、二つとも女であるが、一つは緋縮緬の着物を着せ、一つは紫縮緬の着物を着せ、腰に下げた將棊の駒の形の迷子札には、麗はしい墨色で名前まで書いてあるのだ。

この二つの人形は、京子が手匣に入れて病院まで持つて行つてゐたのであるが、今夜金槌とゝもに持ち出したのであらう。暗黒に慣れた道臣の眼には、杉の大木へ釘付けにされた二つの人形の白い顔から眼鼻立ちまでが、鮮かに見えた。

「京子、何してるのや。‥‥丑の時參りか。」と、力を込めた聲で言ふとゝもに、道臣は躍りかゝつて、金槌を持つた京子の腕を引つ攫んだ。

十三

この事があつてから、道臣の家は千代松の工夫で、雨戸も門も總べて內から嚴重に締りの出來るやうにした。井戸には蓋をして、夜は錠を下ろした。刄物といふ刄物は、小ひさな錐まで皆片付けた。けれども、半月ほどする間に京子の容態は、もう起き上ることも出來ぬほど惡くなつた。

「起してえ。」

「寢さしてえ。」

半時おきほどつゝに、から極つたやうに言つて、看病人に扶けられつゝ、半身を起き上らして貰つたり、寢さして貰つたりした。今はもうお時に對してもお駒に對しても、たゞ自分の全身を寄せかけ、靠れかゝつて、少しでも苦痛を忘れさして貰ふといふことより外には、何事も考へてゐない容子であつた。

竹丸なぞは、もう見るのも五月蠅さうであつた。

次の居室で道臣がお時やお駒を相對にして、面白さうに酒を飲んでゐても、氣持ちを惡くするといふ風はなくなつた。

「其處開けて見せてえ――。」と子供のやうに語尾を長く引いて言つた。

隔ての襖を開けて貰つて、道臣の酒を飮んでゐるのを、高枕の上から糸のやうに細く眼れ塞さがつた眼て、樂しさうに見てゐた。

道臣等は初めそれを氣味わるがつたけれど、慣れて來ると、お時やお駒が此方から聲をかけて、「奥さん、御酒が始りますよつて、御覧なはれ。」と、襖を引き開けながら言ふやうになつた。すると京子は、うつら〳〵眠りかけてゐる時ても、分らんことを引つ切りなしに言つて、看病人を困り拔かしてゐる時てゞ、默つて一心に、道臣の盃の上げ下ろしに、自分の眼の球をも上げ下ろして見てゐた。

昔し自分が酌をして、この四疊半て樂しい晩餐を取つたことが、幻のやうに京子の頭に浮かんでゐるらしかつた。其の頃は京子ゝ若かつた。十二違ひて少し年を取り過ぎてゐるが、道臣もまだ男盛りてあつた。京子が二十一て、道臣が三十三の新婚の當夜も思ひ出されてゐるらしかつた。銀の燭臺に百匁蠟燭が白晝のやうて、この病室も其の夜は光り輝いてゐた。この村始まつて以來、まだ見たことのない、上品な、氣高い、芝居に見る奥方のやうな花嫁の姿、それは今でも村人の語り草になつてゐる。明日をも知れぬ今のやうな淺ましい身體になつて、自分の決つた世界といふものゝない、紊れた神經にても、昔しの折りの鮮かな花嫁姿の誇りは、ハッキリと刻み込まれてゐるてあらうか。――病ひの枕から道臣の晩酌を見てゐる京子の顏には、絶えず微笑があつた。

「皆んな其處て御膳喰べてえ――。」と、京子は自分の枕から見えるところに、一同の膳を持ち出さして、可味さうに喰べるのを喜ばし氣に見てゐた。半月前の狂暴を思ふと、同じ水眼れのやうな身體から、どうしてこんな人を泣かせる優しい味が出るのてあらうかと、流石に道臣は鼻を詰まらして、折角の醉を内攻させることもあつた。

『竹ッ、退けッ。』と、京子が突然大きな聲を出すので、一同は驚いて箸を止めたが、それは竹丸が一番先きに食事を濟まして、母の眼界から遁れ去らうとする時、自分の身體で母の眼と一同の食膳との間を遮つたのであつた。

　母に叱られた竹丸は、風呂場へ行つて丁ど沸きかけた風呂へ入り、手拭で泡沫玉を拵へて遊んでゐると、お時が顏色を變へて走つて來た。

『竹さん、一寸早うおいなはれ。裸體のなりてよいさかい。早う／＼。』

　口早やにかういふと、お時は直ぐ引き返へして行つた。けれど竹丸は矢つ張り風呂の中でジャブ／＼やつてゐた。

『竹さん、ほんまに早うおいなはらんか。……阿母さんが今落ち入らはりますんやがな。』と、お時はまた呼びに來たが、今度は其の圓い眼が涙に濡れてゐた。『女といふものは何時でも直き泣けるもんやなア』と竹丸は思ひながら、濡れた身體を碌に拭かずに着物を引ッかけて、母の病室へ來て見ると、一同が枕元を取り卷いて、事あり氣に坐つてゐた。

『何んぢや立つたなりて。』と父は背後を顧みて、竹丸を叱つた。手にはおろし立ての筆を持つて、茶碗の水を含ませ／＼、幾度も母の唇に塗つた。

『さア次は坊んちだす。たんと塗つてあげなはれ。』と、お駒も眼の縁を赤く泣き脹らして、背後を向いた。

『末期の水だす。……なんでもつと早うおいなはれへんのや。』と、お時は道臣の持つてゐる筆を取つて、竹丸に渡した。

　京子はもう石像のやうになつて、眼を瞑つてゐた。竹丸はおづ／＼しながら進み寄つて、教へられる

まゝに、慄ふ手て、紫色の硬さうな唇へ水を塗つた。今にもわッと口を開いて筆を持つた手に喰ひ付かれはせぬかと竹丸は思つた。

一同が順々に京子の唇へ水を濡つてから、顏へ白い布片を掛け、白い屛風を立て廻らして、枕元の小机には、水と鹽と洗米とを盛つた土器を置き、細い燈明の火がチラ〳〵してゐた。

「午後三時三十分だしたなア。」と、道臣は大きな銀側時計を弄りつゝ言つたが、軈て居室へ退いてまた酒を始めた。京子の枕元には、お時が一人團扇を持つて附いてゐた。

千代松が周章てた狀もなくやつて來て、お時の渡す水筆て末期の水を塗つてから、道臣の居室へ入つて、

「遲かれ早やかれ、かうならはるには極つてるやさかい、どうやつてもいかんのなら、早い方がなア。」と、例もの通り兩方の肩を搖り〳〵言つた。

「さいや。……早い方がなア、本人にも、はたのもんにも。……」と、道臣は溢れるほどに注いだ盃をグッと呑み干したが、

「あゝさうや。」と俄に氣が付いた容子て、盃を置いて立ち上り、押入れの小簞笥から京子の大事にしてゐた短刀を取り出して、死骸の側へ置きに行つた。

「定はん、約束や。さア踊らう。」と竹丸は臺所の板の間へ駈けて行つて、其處に不安さうな顏を二つ並べてゐるお駒と定吉との前て、盆踊りの眞似をした。二人は顏を見合はせて苦笑してゐた。

「さアお駒ちやん、お時さんを奧さんて言はんならん日が來たて。」

定吉はかう言つて、太い息を吐いたが、

「天滿宮さんも、いよ〳〵千代さんが占めるんかなア。……」と言ひ足した。(完)



夕凪

正宗白鳥

（一）

「何だか見たことのあるやうな顏だ」

私は長野から乘込んだ多人數を何氣なく見てゐる中、ふとある女の顏に目を留めながら、かう思つた。

この三等室の女客の中では色の白い垢拔けのした方だつた。側にゐる古ぼけた脊廣に赤靴を穿いた男が亭主らしかつた。私は思出せさうで思出せないのを暫らく氣にして、せめて一言でも話聲を聞取つたらばと耳を澄ましたが、左右の客がガヤ〳〵聲高に話合つてゐるので、かの夫婦の話はどうしてもはつきり耳に留まらなかつた。

私は高田で下りて、暑さを犯して大急ぎで市中を見物して、

次の汽車に乘つた。これから先の海や陸は今度初めて見るのだから、私は新しい乘合ひの客の方へは目を留めないで、地圖を手に持つて、一圖に窓の外をのみ眺めてゐた。烈しい土用の日は波の立たぬ日本海にきら／＼光つて、佐渡の島は朧ろげに霞んでゐた。私の貧しい歴史上の智識から、文覺とか日蓮とか阿新丸の父とか、かの島へ流された人々の名前がごた／＼と浮び出た。芝居で觀たり講釋で聞いたりした佐渡破りの罪人が、彼處から小舟に乘つて逃出して、彌彦山のほとりの親分を手頼つて行く有様をもいろ／＼に考へた。

　私は調子の狂ひかけた頭を休めるために努めて過去に生きやうとしてゐる。今の自分の身の上など考へてゐたくはない。今の社會の事件や今の親類縁者の事には尚更心を配りたくはない。で、若しも、凡ての思ひ凡ての感じを斷去つて頭を空にして、日を送ることが出來ないとするならば、可成過去の夢を見てゐやうと思つてゐる。旅へ出て歴史の跡を訪ねるのも、宿屋で退屈醒ましに昔の自分の經驗を書き記してゐるのも、只ともすると目の前に立ちたがる今の自分の顏形や心持を忘れやうと思ふからである。この頃の知人との交渉を忘れやうと思ふからである。

　壁を立てたやうな山と石ころの濱との間に繩のやうな道が只一筋通つてゐるばかりの所が多かつた。海が荒れるか山が崩れるかしたなら、其處等の人家は一溜りもなく亡んでしまひさうだ。寶暦の大地震には名立の村は凡て埋沒して、數百の男女、牛馬雞犬の類ゐに至るまで生き物で死を免かれた者は一つもなかつたさうである。よくこんな土地に安んじて世が送られることゝ、私は板屋根に一面石を載せた小さい家の中から顏を出してゐる男女を顧み／＼通つた。

親不知を通過ぎると、私は最早單調な左右の眺めに飽いて、車窓に脊を凭らせ足を伸して目を瞑つた。そして、今まで目に觸れてゐた光景を頭の中で繰返してゐたが、すると、ふと長野から乘つたあの女が昔の記憶に觸れたので、思はず獨り笑ひをした。……あれはおしなに違ひない。十年前に田舍の中學を卒業して、初めて東京へ出た時分、暫く下宿してゐた横寺町の△△の下女だつたおしなに違ひない。十八九であつたあの頃とは、見違へるほど顏形が異つたのは當然だが、しかし、以前よりも却つて女振りがよくなつて、垢染みてゐないのを見ると、あれから田舍へは歸らないで、東京で世帶を持つてゐるのだらう。

先方では私を忘れてゐたのか知らん。一二度私の方へ目を着けたのに、何とも感じない樣子だつた。おしなにさへ氣付かれぬほどに、私の人相は少年時代とは變つて來たのだらうか。

（二）

あの下宿には同郷の友人が三四人泊つてゐた。私はその中の一人を手賴つて行つたので、大阪から私と一緒になつて上京した從姉も暫く同じ宿にゐた。從姉は私とたつた一つ違ひだつたが、幼い時分に兩親に死別れて、叔父や姉婿の家の厄介になつたり、知人の家で女中代りに働いたりして、いろ〳〵の苦勞を經て來たゝめに、私などよりは餘程世間馴れてゐた。一二年刺繍の稽古をして自活したいといふのがかねての望みで、私の上京を機會に、叔父に歎願して學資を出して貰ふことになつたのだつた。

「若い女を知る邊のない東京のやうな所へ出しとくのは心配だから、お前がよく氣をつけて力になつてやつて呉れ」と、出立前に叔父は私にくれ〴〵も賴んだ。

が、この顆みはあべこべのやうだつた。汽車の中で辨當を買つて呉れたり、窓に凭れて假寢してゐる間に風引かぬやうに毛布を掛けて呉れたり、從姉はこま〳〵したことによく氣をつけた。下宿へ着いてからも友人や主婦に向つて、行屆いた挨拶をして、下女へも幾らか紙に包んでやつた。私は二階從姉は階下の部屋と離れて住んで、日に一度ぐらゐ何方からか顏出しする外には、滅多に話をすることはなかつた。二人とも下宿の主人を保證人にして、それ〴〵入學屆を出して、學校へ通ふやうになつてからは、尙更打解けた話をする折が稀れになつた。

都會の學校で新しい敎科書を學んだり、東京言葉を習覺えたり、新しい友人に接したりしてゐるのが、私には何よりも悅しくつて、學資の不自由は少しも苦にならなかつた。宿料や月謝など必要な物だけ鄕里から送つて貰へれば、それ以外に求むる所はなかつた。同宿の友人のやうに寄席這入りをしやうとは思はないし、牛肉を喰ひたいとか蕎麥屋へ寄りたいとか云ふやうな慾望も起さなかつた。三度々々宿て出す物を甘しく食べて、それで滿足してゐた。

私はさうだつたが、從姉は最初の一月から學資の不足を訴へた。「足らない筈はないだらう」と、私が荒ましの費費を計算して訊くと、「女は男とは違ふ。足袋だつてあなたのやうに穴の明いたのは穿いてゐられないわ」と云つた。そして、お互ひに打合せをして故鄕の方へ學資の增額を求めやうてはないかと云つた。が、私は同意しなかつた。

「だけど、あなただつて次第に足らなくつて困るやうになるよ。後で增して呉れつて云ふよりは最初から尤分に送らせるやうにしとく方がいゝのよ。そして今の間お金が餘つたら少しづゝても溜めなさい

な。見ず知らずの他人の間にゐるんだから、不意に病氣になつたりした時の用意はしとく方がいゝの」

「なに、不意に入用の事が出來れば、電報て家へ云つてやつたつていゝさ。」

「そりやさうだけど。」と、從姉は言淀んで、「あなたは兩親とも丈夫てゐるんだからいいけど、私は困つた時にも何處へも云つてやる所がないですからね」

「本當に困つた時にや、大阪の叔父さんだつて僕の家にだつて助けて呉れるてせう。そんな取越苦勞をしなくつてもいゝさ。」

「私、叔父さんなんかにさう〳〵迷惑を掛けたくないの。今度一年あまり學資を出して貰ふことにしたのも、後で自分で稼いでちやんと拂ふつもりなのよ。それほどに思つてゐるんだから、決して無駄なお錢は使はないんだけどね。……その中東京の樣子がよく分つたら、室借りをして自炊しやうと思つてるんだけど、……」

「そりやいゝ。こんな男ばかり泊つてる下宿に永くゐちやよくないだらうから。若し臨時に止むを得ない金が入るやうだつたら、僕の方から叔父さんに手紙をやつて送つて貰ふことにしたつていゝんだ」

「有難う。健さんが保證して呉れゝば叔父さんも疑ぐらないで私の賴みを聞いて呉れるよ。あの人は大變あなたを信用してゐるんだから。」

從姉はこんな話をした後、間もなく私に二圓だけ立替へさせた。健次は將來立派な人間になるつて以前からよく云つてゐたの」

箱との外には、部屋の飾りになるやうな者は一つも持つてゐなかつたが、從姉は何か知らこま〳〵した者を買つて來て、永くはゐない筈の部屋を小奇麗にしてゐた。一輪挿しに花を差したり、寫眞立てを小

机の上に置いたり、座蒲團を拵へたりした。私にも毛糸の肱突やランプ敷を編んでやると云つて材料を買つて來た。

「これまでは私の居間は何處にもなかつたんだけど、これからは自分の居間は自分の好きなやうに飾ることが出來る」と云つて喜んでゐた。

「御覽なさい。こんな部屋でも私が來てから拭掃除をよくするから、見違へるほど奇麗になつたでせう。下女に任せとくとそりや存在て仕方がないけど」

　從姉も他郷にゐる淋しさは少しも感じないで、自由の身になつて、人並に學校へ通へるのをどれほど樂んでゐたか知れなかつた。臺所に近い薄暗い四疊半でも、從姉の身に取つては、兩親に別れて以來初めての氣儘に起臥しの出來る所であつた。

　私は故郷の父母や大阪の叔父に近況を報ずる次手には從姉の樣子をも書添へた。成べく從姉のために都合のいゝやうに書いてやつた。實際惡く云ふやうな點は些とも見當らなかつた。

　ところが、膳を運んで來る女としてのみ、私の目に存在を認められてゐた下女のおしなが、ふと私の心に纏はり出したのは、この從姉の事についてゞあつた。

(三)

「太田さん」と、懷かしさうに呼んでは、おしなは手の隙いた時には從姉の部屋へ入つてゐた。從姉もいゝ話相手にして、內輪の事や客の氣風などは、おしなの口を通して詳しく知つてゐた。

「何でもよく喋舌る女だよ。下宿屋奉公なんかするつもりで東京へ來たんぢやないけど、此處の主婦と

は遠い親類になつてゐるし、頼まれるからゐてやるだつて威張つてるの。あれで中々容色自慢なのよ。そして、私の持つてる着物を見ちや羨ましがつて、そりや可笑しいほどだよ」と笑つてゐた從姉が、ある日私に向つて、「あの女は性質がよくないのよ。白ばくれてるけど、方々を渡歩いた女らしいの。私の留守の間に机の引出を開けて見たりね。いろんな事を外のお客に告口したり、油斷のならない女だ。健さんもこれから氣を付けて、あの女に餘計なことを云はないやうになさいな」と注意した。

が、私は「さうかな」と、輕く答へて、殆んど念頭に置かなかつた。友人などはよくおしなを捉まへて無駄口を叩いてゐたが、私一人は用事以外には殆んど口を利かないし、向うから馴々しく話しかけてもあまり相手にしなかつた。時々は箒を置いて、机の側へ來て、「筆を貸して頂戴な」と、云つて、紙片へ惡戲書をしたり、火鉢で龜かんだ手を温めたりした。私は東京の下宿屋の下女は皆んなこんなに不作法なのだらうと、別に咎立てはしないで、爲すまゝに打遣つて置いて、自分は傍ら人なきが如く自分の勉强を續けてゐた。ある晩も友人が散歩に誘ふのを斷はつて、明日の課目の下調べをしてゐると、ばたばたおしなの草履の音がして、私の部屋の障子が開いた。

「小泉さん。太田さんのお使ひ物ですよ」と云つて、盆に載せた竹の皮包を置いた。湯沸しをも持つて來てゐた。

私は書物から目を放して、直に竹の皮を開けて、十ばかり入つてゐる餅菓子の甘さうなのを一つ頬張りながら、「このお菓子はどうしたんかね」と、生眞面目な顏して聞いた。

「太田さんとこへお客樣があつたんですよ。今一緒に出て行つちやつた」

「何といふ人？」
「うん。男の人。先日も來たの。」
「さうかね」
私は只聞流して、何とも問返さないで、茶を飲んで菓子を食つてゐたが、おしなは私の口の動くのを見守りながら、「守口さんと云ふんだよ。あなた知つてますか。同じお國の方なんでせう」
「僕は知らん」
「飯田町の空間を敎へに來たんですつて。あの人も太田さんと一緒の家を借りるんでせう。話の樣子が何だかそんならしかつたよ」
私は食べたいだけ食べて、「これは君に上げるから持つといで」と云つて、竹の皮包を押やつて、机に向つた。
「どうも有難う」おしなは無遠慮に私の前で一つ抓んだ。そして、「小泉さんほど勉强する人を私見たことはないよ。大野さんや枝元さんなんか駄目さ、遊んでばかりゐて。悪口が上手になるだけで、學問は出來やしないわね。」
「さうだね」
私は小聲で英書の音讀をはじめて、おしなが傍でまだ何やら云つてゐるに耳を貸さなかつたが、ふと、おしなが驚いたやうな聲を出したので、振返ると、從姉が何時の間にか入口に立つてゐた。
「外へ出掛たのかと思つてたのに」と、私が云つた。

「いゝえ。何處へお行きやしないわ」と、從姉は嶮しい目付をして私達を見ながら、火鉢の側へ坐つた。それと同時におしなは竹の皮包の載せられた盆を持つて座を立つて、階下へ驅け下りた。

「厭な奴……」從姉はかう呟いて、「健さんは何故あんな女を懇意にするの」

「別に懇意にしてやしないさ。……何故そんな事を聞くんです」

「だつて、あの女はよくこの部屋へ來ちやべちやくく話込んでるぢやないの。」

「僕は煩くつて厭だけど仕方がないもの。用事もあるんだから來るなとは云へないしね。……つゆさんがそんな下らん事を彼此云ふのは可笑しいな」私は從姉の言葉を縒に感じながら、話を替へて、「今あなたの所へ誰れか來てたんですか」

「矢張おしなが何か喋舌くつたんだわね」從姉は口を尖らせて、「あの人は大阪て叔父さんの家へよく來てゐたんだわ。先日ひよくり道て會つたから、その時に空間の事を訊いて見たら、搜しといてやらうと云つて、今日もそのために來たんだわ。それがどうして?。素性の知れない家て間借りをするよりや、知つた人に賴んだ方が安心だから」

「それはさうさ。て、いゝ家が見つかつたんですか」

「まだよく極らないけど、私一日も早くこんな下宿を出ることにしやうと思つてるの。厭だからね。いろんな男の客に顏を見られるのも厭だし、家の人も女一人だと思つて馬鹿にするんだもの。東京の人は輕薄だよ。健さんはさう思はなくつて?」

「僕にやよく分らないな。しかし輕薄だらうが何だらうが構はないさ。飯が食べられて寢る所さへありや

いゝんだから。同級の者で寺の一室を借りて自炊してる者があるから、僕もさうしたら下宿にゐるよりや經濟だし、靜かでいゝだらうと思つたけど、そんな事をして、勉强時間を減らしても詰らないし、僕はまあ當分此處に落着いてることにする」

「あなたは男だから何處にゐたつていゝわ。だけどおしなには氣をおつけなさい。」

從姉の口調が意味ありげだつたので、私は「手癖でも惡いんか知らん」と訊返したが、すると、從姉は薄笑ひをして暫らく默つてゐた。

「健さんは吞氣だね。それだから心配だよ。おしなのやうな女はあなたぐらゐ騙すのは譯はないよ。……健さんはあんな女が好きなの嫌ひなの。大野さんはおしなが氣に入つてるのか、いやに機嫌を取つたりしてるわね」

「なあに、大野は毒口を利いて揶揄つてばかりゐるんだ」

「毒口を利いてるやうだけど、それが腹の中で思つてる證據なのよ。おしなだつて揄揶つて貰ひたいんだわね。これからよく氣をつけて閱いてゝ御覧なさい」

「そんな事を聞いたつて詰らないさ」

私は冷淡に答へた。從姉は火鉢に炭をついだり、押入から汚れ物を撰出したりして、廊下へ出て、「燈火の點いてるのはこの部屋だけなのね。あなたも少し散歩して來るといゝわ。私もこれから神樂坂まで買物に行くんだから、一緒に行つちやどう？」

「僕は大儀だ」

私は從姉と連立つて町を歩くことを好まなかつたので、大抵は體よく斷つてゐた。今夜は隣の部屋が靜かなのを幸はひに、一層讀書に耽らうとして、從姉が出て行つた後て、座直して書物に目を注いて、二三行讀下したが、何時の間にか我知らず心が外へ移つてゐた。從姉の言葉て刺激されたのか、今まて只目や耳を掠めて通つたに過ぎなかつたおしなの顏形や平生の擧動や言語が次第に記憶に浮んて來た。……紙片へ書いてゐた幼稚な唄の文句や、紅い襷掛けて紙箒を使つてゐる後姿が目の前に動いて來た。むつちり太つた腕や、裾を端折つて出した柔かい脛を、大野などが蔭て冷かしてゐたやうに、「ぶく〳〵肥つた小汚い身體をしてやがる」と一圖に卑しめる氣になれなかつた。

「貴樣は何時も小泉の肩を持つてやがるな」と、ある日大野がふと聲高く云つたのが壁越しに聞えた。

「さうですとも、小泉さんはあなたなんかのやうに亂暴ぢやないもの。……大野さんの惚け者。試驗に落第してべそを掻かんやうになさいよ」

さう云つて逃げて出やうとするのを大野に握まつて擽られてゐたやうだつた。二人の笑ひ聲が相和して聞えた。

「さあ此處て一休みしよう。三番の禿さんの氣六ヶ敷しいのにや往生だ」と呟いて、窓の閾に腰を掛けて、「また手を叩いてるよ。いくら叩いたつて行つてやらないからいゝ。……ね、小泉さん。下宿屋て女中見たいなことをしてちや、人が馬鹿にするわね。あなたゞつてさうてせう。私口惜しくつて仕樣がない。見てゝ御覽なさい。今に此處を出ちやつてもつと氣の利いたことをしますよ」と云つてゐたこともあつた。

成ほど今、同窓の友人のゐる二三の下宿屋の下女に比べると、おしなは色も白いし愛らしい。拙いながらも字を書くによつて見ると、多少の教育があるのであらうし、世間を知つてゐるのか中々利口さうなことを云つてゐる。下女なんかで甘んじてゐるやうな女ではないかも知れない、と、私は東京で近づきになつた最初のこの女に、云はゞ仰見るやうな氣持で對し出した。從姉の云つたやうに、男などを何とも思はない腹の中にいろんな企らみのある女かも知れないと、恐ろしくも感ぜられた。

(四)

それから二三日立つて、從姉は飯田町で二階借りをすることに極つた。引越の雜費や自炊道具の買入れに費用がかゝるので、下宿屋への支拂の半ばは私を保證に立てゝ待つて貰ふことにした。引越には私も隨いて行つて、掃除やら買物やらいろ〳〵と手傳ひをした。「これが私の家だ」と從姉は喜びながら、一通り部屋を片付けて、晩餐を拵へた。私は引留められて一緒に箸を執つたが、上京後この時ほど染々と從姉の話を聞いて懷かしい思ひをしたことはなかつた。

一露さんも一生懸命に勉强して早く身に藝をつけなくちやいけないね。自分で自分の結婚費を拵へなきやならんのだらうから。僕は五六年は學資を出して貰へるんだが、その間は學問以外の事は何も考へんつもりだ。新聞さへ僕は讀んでゐないよ」と云ふと、

「健さんはこれまで奇麗に育つて來たんだから、間違ひはないだらうけど、お友達にはよく氣をおつけなさいよ。あれで枝元さんだの石井さんだのはもう惡い遊びを覺えてるらしいから。」

「まさか。口では下らないことを面白がつて云つてるけど、實際は何でもないんさ牛屋へ酒を飲みにぐ

らゐは行くだらうけど、遊廓なんかへは足踏みすりやしないさ」

「さう思つてるのはあなたばかりよ。主婦さんもよく氣がついてるわ」

「さうか知らん」

私は信じもしないし、こんな風に友人を見るのを好まなかつたので、「まあ僕等は他人の事に關つてゐないて、自分の事だけに注意してりやいゝんさ」と云つたが、それが從姉の耳には不愉快に響いたらしかつた。

「私何も好きて人の惡口を云つてやしないわ。あなたのためを思へばこそ餘計な口も利いてるのに」と、人並より反つてゐる脣を尖らせた。

私は笑つてゐた。

歸りがけに、「僕も時々此處へ御飯を呼ばれに來ようかな、牛肉か豚か買つて持つて來て」と云ふと、「一週に一度ぐらゐは是非遊びに來て頂戴な。私の方からあの下宿へあまり行きたくないから」と云つて、從姉は通りまで送つて出て、二三日中に屹度訪ねて呉れと念を押した。

私は堅く約束して別れた。借部屋とはいへ自分が遊びに行ける親類同樣の家が東京に出來たのを喜んだ。そして從姉が同じ下宿にゐると、外の下宿人の噂に上つて、時々私の耳にも觸れて、云ひやうのない不快を覺えてゐたのを、今日から免かれることが出來るので、世間が廣くなつたやうな氣がした。……何氣なく廊下を通つてゐる時、法律學生の部屋から從姉に對する侮蔑の言葉がふと洩れて來て、私の胸を轟かせ耳を蔽はせるやうなことが屢々あつたのである。田舍の若い漁夫や百姓が村の娘について云ふ

やうな卑しい言葉が都會の學生の口から出るのを私は奇怪に感じてゐた。それもおしななど下女に向つて云ふのなら兎に角、自分の肉身の者を侮辱の的とされるのは耐へられなかつたのである。

宿へ歸ると、火種を持つておしなは、いきなり「太田さんの借りた部屋はどんな所ですか」と訊いた。

「いゝ所だ」と私は打切棒に答へて、火を移してゐる女の顔を竊見してゐたが、この女の方が皮膚の萎びた顔立の嚴つい從姉よりはどれほど美しいか知れないと思はれた。

「へえ。太田さん洒落れてるわね。そんないゝ家へ移つて」おしなはふと眞面目になつて、「太田さんの學校へ行くのは月にいくらお金がかゝつて？」

「知れたものさ」私は正直に月謝やら雜費やら、從姉の費してゐる金高を明かして、「おしなさんも學校へでも通つて行くつもりなんかい」

「行きたくつても誰れもお金を出して呉れる者がないぢやありませんか。私なんか仕方がないわね」

おしなの樣子は不斷になくしほらしかつたので、私は妙に可愛相な氣がした。從姉だつて叔父に助けられなければ、下女奉公でもするか貧しい家へ緣付くかしなければならんのにと、いゝ親類を持たないおしなを不運な女のやうに思込んで、「でも、君は字をよく知つてるぢやないか。小學校ぐらゐ卒業したのだらう」

「そりやしましたとも」おしなは得意げに云つたが、急に蓮葉な口調で、「裁縫や刺繡は面倒臭いわね。私、太田さんのを見てゐても頭がむしやくしやとして來るよ。あんな事をしてどつさりお金が取れるんか知らん」

「女一人の口過ぎぐらゐは出來るんだらうね。割のいゝ商賣ださうだよ」
「自分一人御飯食べて行くぐらゐは誰れにだつて出來るぢやありませんか。それぢや詰らないわね」
大野の部屋で手が鳴つたので、おしなはつと座を立つた。私はこの女の聲のする方へは自から耳を留めるやうになつてゐた。
おしなが掃除しながら時々唄ふ流行唄に聞惚れてゐた。

（五）

私はその後を心に浮べるに堪へられなかつた。日は暮れて涼しい野風が吹通つてゐた。私は今度の宿を何處と明かに極めてはゐなかつたが、富山で乘客が粗方下車したので、私もそれに隨いて下りた。電車はあつたけれど乘らないで、廣い通りを當てもなく歩いた。自から神通川の橋まで來られた。橋の欄干には團扇を持つた納涼客が寄りかゝつてゐた。が、幅の廣い川にも水は片隅をちよろ〳〵流れてゐるばかりで、橋の下は畝になつて茄子や瓜がつくられてゐた。見るから暑苦しさうで足を留める氣にはなれなかつた。橋を渡ると、玄關の小奇麗な洋館まがひの宿屋が目についたので、急に汗を流して休息したくなつて、其處へ入つて、涼しい部屋に泊めて貰ふやうに賴んだ。
擇ばれた座敷からは板塀越しに斜めに橋が見えて、庭には地を匐つて伸びた松や、大きな石や、石燈籠などが巧みに配置されてあつて、あたりは打水で濕つてゐた。私は湯から出ると、電燈の下に腹匐ひになつて、蚊遣香を燻ぶらせながら、旅へ出て初めての手紙を書いた。それは從姉に宛てたのだつた。
「……私は獨りでこんな遠方へ來て居ります。あなたには五年もの間一枚の端書さへ差上げなか

つたのに、今日は偶然あなたに宛てゝ筆を採る氣になりました。それは今朝汽車の中で思ひがけなく××の下女だつたおしなに會つたからです。あるひは人違ひてしたかも知れませんが、兎に角その女を見てから昔の事を思出しました。あなたの事もさま／＼に念頭に浮びました。あの時分から今までに私は隨分變りましたが、あなたもさぞ變つてゐなさるでせう。何時か姫路で一寸お目に掛つた時にも、痛々しいほど窶れて老けたと思ひましたが、今ごろはます／＼年寄り染みてゐるでせう。あなたが私を見ても屹度さう感ぜられるだらうと信じます。顏ばかりではない、心持も根が盡きたのか年寄り染みて來たのか變挺になりました。が、兎に角苦勞して勉强をしてえらくならうなどゝ焦立つては居りません。あの後の私の噂は時々あなたの耳にも入つてゐるでせうが、どうせ本當の事は傳はつてはゐますまい。今の私は今のあなたにならば何もかも打明けてお話したつていゝんですが。田舍で子供を抱いて無事に暮してゐるあなたの前に寢ころんで、十年間の經歷を涼み臺の世間噺のやうにして話して見たいんですが……」

私は懷かしげにかう書きかけたが、筆が進むにつれて從姉の面影や生活の樣が濃い色で目に浮んで來たので、自から筆が運ばなくなつた。あの人も打解けて話をするのに相應はしい女ではない。……で、私は書をかきかけた手紙は破り棄てゝ、只繪端書に簡單な文句を認めて送ることに止めた。

從姉はバサ／＼した髮を亂れるがまゝに亂して肩で息をしてゐた。世間知らずの私にさへその大きな腹が目についた。重い身體を動かして買つて來た林檎を食べながら、私は亞鉛屋根の照返しの暑苦しい飯田町の二階で、心細げな不愉快な話ばかり聞かされた。言葉その者には不快な意味が含まれてゐなくつても、久振りで訪ねて行つて不意に淺間しい姿を見せられた私は一種異樣な戰きを覺えた。從姉の目

も口も鼻も皆んな忌はしく汚らしく見えた。憐れみを求めるやうに訴へてゐる相手の言葉が、凡て私をして侮蔑の念を起させて、思遣りのある返事は一つも口から出なかつた。

「來年になつたら學資は資はなくつてもいゝから、この二三ヶ月の間だけ少しづゝ増して貰ふやうに、健さんから叔父さんに願つて下さいな。後生だから」と、從姉は明ら樣に理由は云はなかつたけれど、手を合はさぬばかりにして私に頼んだ。窪んだ濁つた目には涙を浮べてゐた。

「そりや僕から云つてやつてもいゝけど、とても駄目だらうな」

「私が叔父さんに惡く思はれないやうに、ようく書いてやつて頂戴な。今度こそ健さんに助けて貰へれば、一生恩は忘れないわ。私だつて健さんのために力になつて上げることがないとは限らないんだしね。」

「えゝ」

　私は思つてゐる事を口に出さないで、微笑してゐた。そして、相手が何時までも〳〵引留めたがつてゐるのに當惑した。ともすると泣言を云つて、「健さんの外には私の味方がないんだから」と云つたりするのが聞づらかつた。

　宿へ歸ると、私は直ぐに大阪の叔父に宛てゝ筆を採つたが、從姉が望んでゐるやうには決して手紙を書かなかつた。それどころか從姉の不身持を多少微めかさずには居られなかつた。おしなどがいくら意地の惡い噂を立てやうとも、私は從姉に對して四月も五月もの間些しも疑ひを抱いてはゐなかつたのだが、否應なしにそれに氣付いてからは、平氣では見過ごされなかつた。從姉と差向ひでゐる間はまだし

も氣が紛れてゐたが、机に向つてじつとしてゐると、從姉の所行にのみ心が注がれて、いろ〳〵の想像が渦卷いた。そして、知らず〳〵蓄はへられてゐる男女間の智識がその想像を刺激した。私は身内の者の見苦しい姿を描いてゐると、自分の身體までも穢はしい卑しい者のやうに見え出して、情けない氣がした。

無論人間が木の股から生まれると信じてゐる年齡ではなかつたが、何氣なしに見過ごしてゐたことが妙に深入りして考へられた。……「身に藝をさへつけて置けば、一生獨身で通れるんだ」と云つてゐた癖にと、私や叔父叔母や身内の者を欺いたことも憎々しく思はれた。

で、私は叔父に宛てた生温い手紙だけでは飽足らなくて、故郷の父母に宛てて明ら樣に從姉を罵つて、さも墮落して人非人になつてゐるやうに書いてやつた。そして、從姉が學資の途を絶たれて餓死をしやうとも、どんな慘い目に會はうとも、自業自得だと思つてゐた。

田舍からの手嚴しい手紙を持つて、俥で私の宿へ驅けつけて、嶮しい顏をして泣崩れた從姉を私は只微笑して迎へた。自分のした事を悔いたり相手を憫んだりする氣にはならなかつた。が、同宿の友人やおしなどに醜い樣を見られるのが堪へがたい苦痛だつたので、間に合はせの言譯をして一先づ宥め返した。

「明日の晩にでも來て頂戴な」と云つて、從姉は歸つて行つたが、私は一日延しに延して容易に近づかなかつた。

（六）

疲れてゐたゝめ私は朝までぐつすりと眠つた。昨日と同じやうに空には雲の跟もなく晝間の暑さが思ひやられた。あたりの大通りを少し歩いて來て、進まない朝餐をしるしだけ食べてから停車場へ行つた。七尾までの切符を持つてゐるので、其方の汽車を待合せて乘つた。連日の照込みで左右に見える富山平野の稻は勢よく伸びてゐた。笠を被つたり日除けの莫蓙を脊に垂れたりした農夫が田の草を取つてゐた。

初めての土地だけれど、このあたりの眺めには何の奇も認められなかつた。高岡の停車場で茶を買つた釣錢で買つた大阪の新聞を披いて、避暑地の消息や活字の大きな外國電報を一わたり讀通した。四五日離れてゐた世間の出來事で頭に響くやうな事は幸ひに何一つ目に留まらなかつた。自分を引擢んで底の知れない淵へ連れて行きさうな事件はなかつた。

私に煙草の火を借りた白い洋服を着た男は、私の新聞をも手に執つたが、やがて、「戰爭になりさうですね」と、話しかけた。

「さうですか」と、私は答へたが、相手の言葉の意味はよく分らなかつた。先方でもそれきり話を進めないで、新聞を疊んで私に返してから、頻りに扇子を使つた。

七尾線に乘替へるために津幡で下りたが、この小さい驛は上り下りの乘客で埋まつてゐた。白衣を着けて草鞋を穿いた立山歸りらしい一團が杖を突いて憩うてゐたが、汗臭い群集（ひとごみ）の間にその人達のみが凉しげに見えた。互ひに語合つてゐる登山の話も快活であつた。

動搖の激しい粗末な七尾行の汽車には、煤煙が絶間なく舞込んだ。白衣の人々の膝や肩は見る〳〵黒

い紛て汚された。その一人は私に行先を訊いて、「和倉はいゝ所だ。彼處へ行けば金の使ひ榮えがする。磯て蛸を攫へて湯に漬けるといゝ工合に煮えらあ。甘い物はあるし景はいゝし、この近場の溫泉で和倉ほど長遊びの出來る所はない」と云つた。

「宿屋は隨分いゝのがあるんでせうね」と訊くと、

「そりや幾軒もあります。××と××が一等の宿だが、△△くらゐが宿代が廉くつて割に待遇もいゝかし、あなたは其處へ行つて御覧なさい。尤もこの頃は客が立込んでるだらうから、運が悪いと明いた座敷はないかも知れません」

「そりや困つた……」私は其處でゆつくり落着いてゐられさうでなければ、またこの不快な汽車で、後戻りしなければならんと弱つて、地誌を出して近場の溫泉を調べた。私に和倉の話をしてゐた人は、何時の間にか首垂れて假寢をしてゐた。

七尾の停車場から棧橋までの途中は到る所生臭い臭ひを嗅かされた。棧橋へ出ると、身體中黑光のしてゐる子供等が海へ飛込んだり匍上つたりしてゐて、潮の雫は私の顔にまでも散りかゝつた。波は靜かだつたが、風はそよ〳〵と吹いてゐた。くら〳〵してゐた私の頭も稍々鎭まつて、眠いやうな氣持になつた。熱い陸地へ上るよりはかうして何處までも運んで行つて貰ひたかつた。土用の丑の日の湯治に來たと云ふ越中の老農夫が二三人、腰に携えた握飯を出して、頂いて食べてゐるのが夢のやうな私の目に映つた。その一人は梅干の種を何時までも啣んでゐたが、船が和倉の棧橋に横付けになつた時に、海の中へそれを吐出して座を立つた。

一目で見渡される狹い村は西日で燒付けられて、どの宿屋も庇へ日避けの幕を垂れてゐた。私は汽車で聞いた△△を捜して、玄關へ荷物を卸したが、女中や男衆は廊下にばた／＼寢倒れて、二三度聲を掛けても起きて來なかつた。横道へ出て格子の間から覗くと、帳場にも客間にも寢姿が見えた。私は諦めて其處を出て、また荷物を脊負つて外の宿を訪ねた。その宿では座敷へ通して吳れたが、座敷には先客が毛脛を出して鼾を掻いて眠つてゐた。

「相客は困るね」と私は嚴しく言張つたが、女中は、「私の家は貧乏宿やさかいお一人はお泊め申されません」と苦なく斥けた。

私は休息を望みながらも、その毛脛の男と寢起きを共にすると思ふと、どうしても我慢が出來なかつた。で、再び其處を出て村中の宿を見て歩いた。丑の日の湯治は萬病に利くといふので、共同湯のあたり大勢の田舎客がぞろ／＼集まつてゐた。銅色をした男女の間を白粉をつけた女が伊達卷を纒付けたしどけない姿で通つてゐた。

ふと紅殼で入口の柱を塗つた品のいゝ宿が目についた。軒には燕の巢が二つ並んで危げに架かれてゐた。その口から垂れた藁を汐風に嬲られてゐた。私は奥床しい氣がして其處の閾を跨いだ。部屋々々の障子は取拂はれてあつて奥まで見透かされたが、あたりはひつそりしてゐた。

私は强いて賴んで、海に面した座敷へ入れて貰つた。汗みどろの着物を脱棄てて、溫泉へ入つて來て、糊の利いた宿の浴衣を着て橫になると、五體に溜つてゐる毒が流れ出て身が輕くなつたやうだつた。

襖を隔てた右隣の廣い座敷には若い男女の客がゐた。後隣りの座敷には髮を長く伸した若い男が一人

てゐた。が、私の心はまだ外の客の方へは注がれないで、昨日から心に纏はつてゐた從姉やおしなの面影がちらついた。……

「夜が明けなきやいゝわ」ある夜のおしなの泣聲は私の耳に殘つてゐる。從姉の注意を思合せて、あの女の甘つ垂れた素振りや言葉を無慙に斥けて耻をかゝせてやつたのだつた。女の方ではさして深い考へがあつたのぢやなかつたか知れぬが、私は從姉の言葉を信じて一圖に女に對して警戒してゐたのだつた。

二三日立つと、おしなはけろりと忘れたやうに、平氣で私の部屋へ出入りしたが、私は最早その宿では落着いて勉强してゐられなくなつて、間もなく外の宿へ移つた。でも、移つた後にも屢々友人訪問に託(かこ)つけては元の宿へ行つて、おしなに目をつけた。たまに話掛けられるのを樂んだ。そして、矢張此處に居た方がよかつたのにと後悔された。

今從姉にこの話をしたら笑はれるだらう。これが私の初戀だと思ふと、私自身も可笑しい。……が、從姉が乳呑子を抱へて苦勞してゐる間に、私はおしなの事は何時か忘れるともなく忘れて、書物にのみ親しんでゐた。

（七）

日避けの幕が取られると、寢ながらに海が見渡された。沖には鷗が鳴いて、欄干の側には燕が飛んでゐる。私はむつくり起上つて廊下の長椅子に凭れた。凪は死んで小波も立つてゐなかつた。埃だの魚の油だのが濁つた岸邊に漂うてゐる。夏の夕凪のドロリとした海面(うなづら)は私の故郷を思起させた。紅い雲に映

る入日の影は美しかつたけれど、藻の臭ひや腐つた魚や薬物の臭ひが鼻につくたびに逆突きさうな氣持がした。そして、自分の追憶もこのむか〳〵つとした氣持の中に包まれた。自分と關連した人々や事件はこのドロッとした夕凪の濁つた海面のやうに私の頭の中に淀んだ。

私はまた藥の强い溫泉に入つて、効能書に從つて苦鹹い湯を我慢して飲んでから、近所の商店で案内記を需めて來た。型通りに土地の風景をも激賞してあつたが、その實遊覽地には乏しかつた。で、私は何も見て步く望みは起さないで、只溫泉にのみ親まうと心掛けた。私よりも年上の女中は無作法な調子で、湯の効能を述べて、「××さんの中風には何處の湯でも利かなんだのが、此處の湯に入ると、十日も立たん中に杖に縋つて五六丁も步けるやうになつた。」とか、「陸軍大佐の××さんの身體に入つとつた鐵砲の玉が湯の力で出て來た」とか、「柔い者を食べとつた人も湯に入ると、硬い御飯が食べられるやうになる」とか、いろ〳〵の事實を擧げて證明した。私はこの湯が私の身體にも奇蹟のやうな利き目を見せるやうにと、今まで豫期しなかつた望みを掛け出した。その望みさへあれば旅程を變へて十日でも二十日でも此處にゐたつていゝんだから。…

「暑いですね」ふと後隣の若い男の聲がした。顧ると私に向つて云つたのだつた。間の襖は、「書生さん同士だから開け放しといた方がいゝてせう。お互ひに涼しくつて」と、先つき女中が開けて行つたのだつた。

「暑いですね」私は相手の顏を初めてよく見詰めた。眼鏡の奥に白い目が動いてゐた。

「どうぞお遊びに入しつて下さい。退屈で困つてゐますよ」

「えゝ伺ひます」

二三口近付きの言葉を交はした後て、その男は散歩に出て行つた。私は襖を少し締めて、自分の身體だけは外から見られないやうにして、心を休めてゐた。が、從姉についての追憶はまだ絡みついて離れなかつた。ページからページが取留めもなくまくられた。

二三年後のある春花見歸りに、車坂の裏長屋にゐた從姉を久振りて訪ねた。先の乳呑見には死別れたのだつたが、腹はまた大きくなつてゐた。

「お國から音信(たより)があつて？」と、從姉は先づ訊いた。

「國からは金を送つて吳れるだけさ」

「私、年始狀を遣取りしたきり何方からも音沙汰なしだわ。どうせ私の事は惡く思はれてるんだからいゝけど」

「しかし、あなたは今親類の世話にならないて、一軒持つてちやんとして、世を渡つてるんだから言分ないさ」

「健さんはさう思つて吳れて」從姉は悅しさうな顏して、「だけど、こんな長屋住ひしてちや威張れもしないわね」

「長屋だつて何だつていゝさ。些とも恥かしかあないさ」

從姉は私の言葉に力を得たやうに、自分と夫との將來を望みありげに話出したが、其處へふと長沼が歸つて來た。目が黃ろくて色の赤い角張つた顏だが、言葉は柔しかつた。私には一二度會つてゐるので

「小泉君か」と馴々しく聲を掛けて、長火鉢の側に胡座を搔いたが、すると、酒臭い息が私の鼻を衝いた。酒嫌ひな私は厭な氣持がして顏を背けた。

「小泉君に御馳走しろ。おれも一杯やりたいよ」

「甘いこと云つてるわね」從姉は鼻の先で笑つたが、でも座を立つた。

私が堅く斷つて歸らうとするのを、長沼は逞ましい腕で抱留めて、「君と僕は兄弟ぢやないか。」と笑つて頰を摩付けるやうにした。そして、從姉が出て行つた後で、眞面目と戲談と取交ぜたやうな話に獨りで興がつてゐたが、

「僕は君を怨んでたことがあつたよ。……だけど今はさうぢやない。僕のやうな無學な者でも一生君の親友として交合つて貰はうと思ふんだ。いゝかい。自分の嗅あの自慢するぢやないが、露だつて決して性質の惡い女ぢやないよ」

「さうですとも」と私は心から同意して、「しかしあなたに怨まれるつてどんなことです」と、詰めかけた。

「なあに怨むつてほどのことぢやないがね」長沼は笑ひ〳〵、「實は飯田町にゐた時分、君が露の親類へ宛てゝ僕等のことを思切り罵倒してやつたことがあるだらう。あれや場合が場合だから僕等にや應へたね。何しろ僕は職に離れてゐたんだし、他人の家で室借りをしてゐたんだもの」

「しかし僕もあんな手紙を出すより外仕方がなかつたんです」私は二三年後のこの時にも自分のあの所爲を後悔する氣にはなれなかつた。どう見ても私の目には醜いとしか映らない從姉の所行を庇つて私生

兒をつくらせて甘んじてゐられなかつた。

「私は世間を知りませんが、あんな時には露ちやんが僕に賴んだ通りにするのが本當なんですかね」と、私は重ねて云つた。

「本當も虛言もないがね」と云ひかけて、長沼は「まあ過去のことはいゝさ。今の僕は君に對して好意を以つて突合つて貰ひたいばかりだよ」

そこへ從姉が歸つて來て御馳走を並べた。長沼は從姉とも猪口の遣取りをした。私は猪口は受けたばかりで、鮨や菓物を食べながら、二人の話に言葉尠なに受答へした。

飯田町で生んだ從姉の子供はその年の內に死んだのだけれど、車坂で生んだ子供は無事に育つてゐる。

私の寂しい學生々活の間に關係した世間的事件といへば、この從姉の身の上ぐらゐだつたかも知れない。

從姉夫婦の間にはどんな苦勞があつたのか、どんな樂みがあつたのか、三十幾つの今までそんな經驗のない私にはまだ確かりした推察が出來ないが、私の頭は學校卒業當時、從姉夫婦がある職を得て地方へ出掛ける當時に既に傷つけられてゐた。勉强に疲れた頭は何物にも慰められないので硬張つてゐた。運動もした。冷水摩擦もした。あるひは郊外散步もした。が、しかしそんな者も一種の努力たるに過ぎなかつた。澄切つた秋の空も草花の色や香も、私のためには赤の他人だつた。

從姉夫婦の出發の際には先方に依賴されて止むを得ず、泊りがけて手傳ひに行つたが、その晚別れの

小酒盛りをやつた時、從姉は私の顏を見詰めながら、「健さんは何だかお爺さん染みたわね」と不思議さうに云つた。

「そんな事はないさ」と、長沼は直ぐに打消して、「若くつて可愛らしいぢやないか。これからだよ。女を拵えたり、面白い目が見られるのは」

「馬鹿仰有い、健さんはそんな人ぢやありませんよ。……だけどよく見てゝ御覧なさい。健さんは以前から見ると何處かお爺さん染みててよ」

あの時私は只他人事のやうに聞流してゐたのだつた。

（八）

「暑い〳〵。今日は些とも風がない」女中は勝手に入つて來て、「煙草一本呼んで吳れんかい」と云ひ様、敷島の袋から一本拔いて火を點けた。

「今日は暇なのかい」と、私は氣を紛らすために、この無遠慮な女中を相手にしやうとして、身を起して煙草を手に取つた。

「うん。この二三日はお客が少い。こんな時に身體を安ませとかにや命が續かん。宿屋つて妙な商賣だ。今にもどや〳〵大勢がやつて來て部屋が一杯にならんとも限らんからな」

「此處のお客樣は馬鹿に靜かだね。滅多に聲も聞えないよ」

「うん。今は一寸靜かだ」女中は次の間を覗いて、「お隣りの旦那さんは散步にでも出なさつたかい。あの人は神經病みだ。隨分變つとる。私、氣味が惡いことがあるよ」

「さうは思へないがね。おれの方が却つてさう見やあしないか」
「うんにや。此方の旦那さんは異つた所はないけど、あの書生さんは間がな隙がな鏡を見ちや獨言を言つとる」
「そんな人と隣合せぢや厭だね」
「暑いね。厭だね」ふと、隣の男の聲が向ひの廊下から聞えた。
「此處へ來てお話なさいな」女中は笑ひ〳〵その男を招いた。
その男は懐かしさうにやつて來て、閾の側に蹲んだ。昨日近所の旅舘へ泥棒の入つたことから話が賑つて、女中は二三年前に二度も客の中に泥棒が交つてゐたことを手真似つきで話した。私は話を聽きながらも、隣の客の様子に目を留めてゐた。が、强い近視で突出た目付と、口元を引釣る癖との外には、別に調子外れの様子は見えなかつた。
女中が立つと共に隣の客も立つたが、顏は見せないで暫らく話だけしかけた。療養のために既に十日あまりも滯在してゐるので、歸り途に立寄る筈の名所を想像しては、毎日無聊を慰めてゐるのださうだ。
「家からは成べく長くゐろと云つて來るんですけど、私は此處へ來てから瘦せましたよ。これで三度部屋を變りました。魚は鯛づくめて飽々するし、話相手はないし、あなたが入しつたので助かりますよ」などゝ云つた。
私は聞厭いたので、話を外して薄暗い中庭の方へ下りて行つた。冠木門の側に置かれた椅子に腰掛けて、周圍の部屋々々を見廻はした。夜目には美しい浴衣掛の男女の姿が上下の廊下にちらほら見えた。

離れに白い髯の長く伸びた福相の老人が若い女の酌で酒を飲んでゐるのが繪のやうに見えた。三味線は女の側に置かれてあつたが、彈きさうな風はなかつた。

私は團扇で足許の蚊を拂ひながら、初めてゞ物珍らしい湯の宿の夜景色を樂しまうと努めてゐた。女中は庭を橫切つては銚子や膳を運んでゐた。暗い沖からは船頭唄が幽かに響いた。

私は椅子に凭れたまゝ暫くうと／＼してゐた。夜が更けても何處も雨戸は鎖されなかつた。部屋每の蚊帳は見ると涼しさうで、ところ／＼電氣は消されてゐた。私は人の氣のない溫泉に漬つてから寢床へ入つたが、蚊帳の中は蒸暑くつて團扇は手放せなかつた。左右の客もまだ眠つてはゐないらしかつた。男女のひそ／＼話や獨り客の團扇使ひや寢返りや、蚊の唸り聲が、私の寢づらい夢に忍込んだ。

朝少し寢過して、火鉢に湯の滾つてゐる時分に私は目を醒した。直ぐに溫泉へ出掛けると、聲ばかりでまだよく顏を知らない右隣の女連れの客が、口端に齒磨粉の泡を垂らしながら、後から隨いて來た。一緒に湯に入つて、向合つて湯桁に頭を載せたが、互ひに默つてゐた。私は澄んだ湯に透徹つて見える相手の白い肉付を見てゐると、昨夜の閨のさゝめ言が夢のやうに思起された。寢耳に觸れたきれ／＼の言葉が毒々しい現實の響きを帶びて來た。……これまでの生涯に嘗て私が口に出しもせず耳に觸れもしなかつた言葉がその男と連れの女との間に頻りにやり取りされてゐた。侮りたい嘲りたいやうな氣持の間に、羨ましがるやうな氣持も、われ知らず私の心に起つた。相手の女は賣女だか何だか私などには分らないが、甘へた言葉や誓ひの言葉や疑ぐつたり拗ねたりした言葉が、蜘蛛の糸のやうにその男にまつはつてゐた。

「何が面白くつて何時までも愚図々々してるんだらう」私は友人に誘はれて遊びに行つてゐた時にもよくさう思つては一人先きに歸つてゐたのだつた。

その癖私はよく一人の女の所へ通つてゐた。好かれもせず嫌はれもせずに四五年もつゞいた。彼奴が身を堅めさへしなければ、私は今もなほ關係を絶つてゐなかつたかも知れない。

私はお稻と暮の町を見て歩いて二人の手套を買つたことや、洋食を食べたことなどを興ありげに思出しだが、そんな思出の中味はあまりに貧しかつた。で、私は二人のさゝめ言を自分達の者のやうにして空想の興をまさうとした。

部屋へ歸つて朝餐を食べてから、廊下の長椅子に凭れてゐると、隣の男女も閾の外へ出て、海を眺めながらいろんな話に耽つてゐた。

「お前は僕が云はんと藥を飮まんからいかん」と男が責めると、

「私、藥嫌ひや」と女は眉を顰めたが、男が瓶を取つて口元に押付けると、顔中に皺をつくりながら飮んだ。

「おゝ苦い」と身震ひして、「私口直しに何か甘い物を食べたい」

「ぢや、カステラでも持つて來さゝうか」

「また私よりあなた一人で食べやうと思ふて」

「嘘を吐け」

男は後の呼鈴を押して女中を呼んで吩けた。

「カステラとサイダ」

その聲を聞いた後隣りの近眼の一人の客は、寢ながら女中を呼留めて、「僕にもカステラを下さいな」と云つた。

「僕も貰はうかな」私は襖の側へ出て、女中に云つた。女中は微笑した。

「カステラの後では三味線が鳴出した。「傘持つほどぢやなけれども曇勝ちなるわが思ひ……」と、男は低い聲で唄つた。

「えゝ、新聞はいかゞ様」

廊下に新聞を抱へた男が現はれた。近眼の客だけが二三枚買つた。

煙を噴いて小さい汽船が通つてゐる。鷗は赤兒の聲のやうに鳴いてゐる。べたべたした汐風が頭を興奮させるやうに吹出した。

かうして何の務めも持つてゐないで、只自然に耳目に觸れる物を觸れさせてゐるのさへ、私には一種の努力であつた。鉛の板で頭をへし潰されさうに重苦しかつた。この座から辷り出て自由な天地に遊びたかつた。三味線が止むと、隣の男は枕を引寄せてだらしなく横になつた。

「獨逸と露西亞と戰爭を初めさうですね」近眼の客は話題を持出しながら、新聞を持つて私の部屋の方へ近づいた。

(九)

私は終日一歩も家の外へ出なかつた。そして、折々机に向つて日記など書いてゐた。挨拶に來た主婦は、

「せめて二週間は御辛抱なさいまし。さうでないとお湯の利目が見えませんから」と云つて、此處は近國のいろ〳〵の温泉とは比べ者にならないと說立てた。

「しかしこの土地に二週間もゐやうとすると、病院に入つたつもりにならなきや駄目ですね。晝間はまだしも風が吹いて涼しいけど、夕方になると風が凪いで暑いし……」

「舟に乘つて遊びにお出てになれば涼しう御座いますよ。お隣のお客樣と御一緒にお出でなさつちや如何です。あの方もお一人でお寂しいから丁度よろしいぢや御座いませんか」

「いや、僕は船は怖いから御免だ」ふと隣から聲がした。

「海はこんなに穩かなんですもの。些とも危くはないぢやありませんか」

主婦は笑ひながら次の間へ挨拶に行つたが、客はこれを機會に私に付纏ふやうに話を進めた。が、その客は次の朝私がまだ眠つてゐる間に部屋を替えて、その跡へは老人夫婦が入つて來た。私のためにはこの方が却つて氣詰りがしなくつてよかつた。

私は顏や手足を襲ふ蠅を追拂ふと共に、頭の中でぶつ〳〵唸つてゐる蠅を追拂はうとしながら、また一日を過した。



アイヌの子

長田幹彦

一

昨夜から降りだした雪は到頭晴れ間さへ見せずにその日も終日しとしとゝ降り暮らしてしまつた。この四五日眼にたつやうに淺くなつた根雪はまた急にもとの深さに歸つて、見渡す限り山腹の傾斜地にも、森林にも、原野にも再び冬の威力に脅かされたやうな荒寥としたうら寂しい色が一面に掩ひかゝつて來た。夜に入ると、山の方からはいつもの凄まじい北風が斜に吹き落として來て、砂粒のやうな細かい粉雪をさつさつと四邊へ吹きつける。薄暗い雪明りのなかには濛々と舞ひ上る雪烟りが物の怪のやうに渦巻いて、ひと揉みもんでは押寄せる毎に一帶の防雪林は今にも枝を吹きちぎられさうに悲鳴をあげる。もう何處をみても、春を芽含んでゐた自然の生氣は僅かこの一晝夜の間に大地の面から根こそぎに奪ひ去

られてしまつたのである。

小倉の農場では晝間からすつかり戸を閉めきつて、灯が點くと同時に、家ぢうのものはみんな母家の廣間へ集まつて來た。半ば西洋風を加味した天井のない大部屋で、そこに敷きつめてある疊などはもう大分古びて、處々に摺り切れた穴を見せてゐた。眞中に仕切つた一間四方の大爐にはイタヤの薪が山のやうに焼べてあるので、烟は眞暗な屋根裏から土間の出口の方まで息づまるやうにもく／＼立罩めてゐる。隅の方に片寄せて釣つてある洋燈は板壁にかけたモッペや、外套などを薄暗く照らしてゐるばかりで、その光は水場や爐傍の方までは殆んど届いて來ない。勢よく燃えあがる爐の焰が却つてそこらへ集まつた人達の顏を眞紅に照らし出してゐるのである。

雪國の冬に馴染んだ人々はかうした晩の寂しさをよく知つてゐる筈である。戸外では風に吹捲られる雪の音がさらさらと聞えてゐるばかりで、家のなかには湯の煮えたつ微かな音さへもはつきりと聞き分けられるやうな靜けさが漲り渡つてゐる。時折ごうつと軒先に吹きつけて來る風が笛のやうな異様な絶叫を殘していつてしまうと、跡には何とも名狀することの出來ぬ寂しい沈默がじいつと襲ひかゝつてくる。殊に農場では主人の孝治が神經衰弱で二月の末からずつと登別の温泉へ出養生に行つてゐるので、跡には妻のお峯と、まだ年端のいかない二人の小供と、甥の寅吉と、それに農場の監理のやうなことをしてゐる伊藤と小婢とたつたそれだけなので、その寂しさは又ひとしほだつた。農期に入ると數多い出面（勞働者）が方々から入り込んで來るが、地面に雪のある今はいくら寂しくても、それだけの小人數でこの農場を維持してゆかなければならないのであつた。

妻のお峯は小婢のおもとゝ一緒に水場の處でごとごと夕飯の跡始末をしてゐたが、それが濟むと、「あゝ、冷めた。今夜はほんとにひどく凍れるぢやないか。」と、呟きながら、さも精根が盡き果てたといふやうに嘆息をつきつき爐傍へやつて來た。そしてその儘そこへべたりと横坐りに坐ると、餓えてゐたやうにいきなり煙管をとりあげて、

「今日は馬はどうだね、お前達小舍を見て吳れたかね？」

「あゝ、今此方へ來しなによくしといたよ。寢藁が濡れとつたから換へといた。」爐傍で膝を抱きながら何事か考へ耽つてゐた甥の寅吉はもちまへの無愛想な聲で答へる。

「まゝ、さうかい、そんならいゝが、さつきおもとが馬糧を取込む時にごとごとやつてゐたから、又戶でも開けつ放しにしてありやしねえかと思つてね。」

寅吉の向ふに坐つてゐた伊藤はその時ふいに戶外の凄まじい風雪の音に氣をとられて、手に持つてゐた大火箸を置きながら、

「どうだい、おつかねえ音ぢやありませんか。今年やまあどうしたと云ふんてせう。今頃になつてこんなに吹雪くやうぢや春から先の畑が思ひやられますだね。」

「ほんとにさ。これて秋になつて霜が早く來りや畑は又わやさ。去年のやうに役場の厄介にならなきや始末におへねえやうなことになるかも知んねえね。」お峯はやけに煙管を拂きながら相槌を打つ。

「全く去年は酷うがしたね。何しろ大豆と二番蒔きの燕麥とが一緒に芽を出しやがつた時にやさすがの私も魂消たかんね。內地ぢやとてもあんなこたあねえてす。」

「此地だつてあんなこたあ珍らしいやね。私なんざ此地へ渡つてからもう五年にもなるけど、今迄たつた一遍だつてあんな莫迦々々しいこたあなかつたよ。あれで向山の畑なんざすつかり荒れちやつたかんねえ。」

「さうですとも。これて今年やまあどうかお天道樣にお願ひ申して、畑のよくなるやうにし度えもんですな。それてねえとフシコナイの方の畑なんざとても手が廻りやしねえ。彼處なんざやつと切株を起こしたばかりですからなあ。」

寅吉はお峯の置いた煙管をとつて烟を吐きながら、

「なあに、今年や何を云つても大丈夫だよ。こんなに遲くなつて雪のある年はきつといゝもんだ。この雪だつてどうせ長くは降りやしねえ。」さう云ひながら二三服悠長に煙草を吸つたが、やがて又ぼんやり考へ込むやうな眼つきになつて、

「そりやいゝが、叔父さんは一體どうしなすつたんだらう。一昨日の手紙ぢやあの日にも歸るやうな騷ぎだつたが、又この寒さが病氣に障つたんぢやねえかな。」

「さうさねえ。さう云やあの手紙にやあの日のお午から發つやうに書いてあつたねえ。」お峯は急に良人のことを思ひ出したと云ふやうに寅吉の方へ振顧りながら云つたが、「だが呑氣な叔父さんのこつたもの。あゝ云つてたつて何時歸るこつたか分りやしないよ。歸る歸るつて云ひ出してからもう半月にもなるかんね。」

事實、主人の孝治が溫泉から歸ると云つて寄越しだしてからもう二週間の餘になるのである。農場て

もそろそろ春の準備にも取懸らなければならないし、それに支廳長の巡回や、凶作地の跡始末を講ずる爲めに產業講習會も開かなければならない事になつてゐるので、此の附近の千葉縣からの移民部落では兎に角口きゝの一人になつてゐる彼はどうしても一應は歸場しなければならないのであつた。それにどうしたものか歸場をしらせる手紙はもう度々來てゐながら當人は今日に至るまで到頭歸つて來ないのであつた。さうしてその後送金も餘分なものをもう二十五六圓も送つてゐる、彼が最初から豫定して行つた金額は疾うの昔費ひ果たしてしまつてゐたのであつた。

「ほんとに歸るなら歸るて早くどうにかかたをつけて呉れりやいゝに。お金だつてやつと遣繰りをつけてゐるんだから、困るのは私ひとりだあね。呑氣もいゝけど、あの人はあんな癖性てゐて呑氣なんだから始末にいけないよ。」

爐傍の人達はそれなりふつりと口を噤んでしまつた。家の内外はそれと一緒に俄かに雪の音ばかりになつて、薪が息をする音が勢よくしゆつと響きあがる、そしてこれだけ火氣がありながら寒氣は何處からともなく針のやうに銳く忍び入つて來る。

「ほんとにえらい吹雪になつちまつたな。ほ、御覽なせえ、戶の隙間からあんなに吹き込んで來やがつた。」伊藤は所在なさに間內をみまわしてゐたが、ふと硝子窓の隅の處へ粉雪がぼうつと吹き込んでゐるのをみると大きな聲を出してこんな事を云つた。よく眼を留めてみると、粉雪はいつの間にか疊の上へ扇の地紙なりに薄く散り敷いてゐるのである。

「仕樣がないねえ、これぢやまるて冬に逆戻りをしちまつたやうなもんだ。」お峯は眉を顰めながら呟い

て、「あゝ、こんな晩にやつくづく厭になるねえ。もとや、洋燈をもう少し明るくおしよ。何んだか馬鹿に陰氣臭くつて私や氣が滅入つちまう。」

上框の處で向ふをむいたまゝ居眠りをしてゐたおもとはふらふらと立上つて洋燈の方へ行つた。そして脊延びをしながら心をかきたてゝみたが、石油が惡いせいか明りは一向明るくならない。ぢりぢりと焦りつくやうな音をたてゝは、油煙ばかりが却つてほやを暗くするのである。

その途端に戶外からはふいに或る異樣なものの音が聞えてきた。呻めくやうに遠くへ吹き落ちてゆく風のどよみのなかに、からんからんときれぎれな律を刻みながら思ひもがけぬ不思議なものゝ音がかすかに聞えてくる。或ときは何かに遮られてばつたり聞えなくなるが、ふいに何處かで思ひ出したやうに續けさまに響き渡る。

「おや、何處かを馬橇が通つてゐるな。」伊藤は眞先にその音を聞分けてから云つた。

「馬橇かしら。馬橇の鈴にしちや音が變ぢやないか。それにこの吹雪だもの、馬が動きやしまい。」お峯は遠くを見るやうな眼つきをしながら半信半疑て云つた。

伊藤は默つて耳を峙てゝゐたが、やがて、

「いや、確かに馬橇ですよ。ほれ、あの音を聞いて御覽なせえ。どうも漸次此方へ近くなつて來るやうだ。」

「あゝ、馬橇だ。馬橇だ。何んだつて今頃あんな處を乘りまわしてるんだらうね。さう云やあ昨日佐々木の農場のが三臺ばかり山へ入つて行つたからきつとそれが歸つていくんだらう。薪が足りないさうて、

五シヶばかし取つて來るんだなんて云つてたから。」

そんな話をしてゐるうちにその異様なもの音は漸次と農場の方へ近寄つて來た。それと同時に音の正體もはつきりして來て、それは疑ゝなく馬橇の鈴であることが分つた。吹き荒ぶ吹雪に悄えてゐるやうに斷續しながら益々近く聞えてくる。

爐傍の人達はその鈴音の行衞にすつかり氣ヶとられてぼんやり押默つてゐた。と、間もなくその鈴音は一旦止んで、今度は農場のすぐ下へ來て再びがらんがらんと鳴り初めた。そして街道から母家へ通ふだらだら登りの畑道を一歩一歩此方へ上つて來るらしかつた。

それ迄默つてゐた寅吉はその時何と思つたかふいに起ち上つて慌てゝ土間へ降りて行つた。土間の出口は藁で圍つた雪圍ひになつてゐるので、彼はそこから半身突き出して少時の間戸外を眴はしてゐたが、やがて彼には似氣ない頓狂な聲を揚げて、

「やあ、叔父さんだ。叔父さんが歸つて來たんだよ。」

その聲が切れるか切れないうちに馬橇は到頭母家の處まで上つて來たと見えて、そこでぱつたり止まつた。そして寅吉が風の音の合間に何事か叫びながら後へ體を引くと、雪圍ひの陰からは全身雪に塗れた眞黑な人影がさつと吹き込む粉雪と一緒についと飛び込んで來た。

「えつ、お歸り。」お峯は餘りの事に眞疑を危ぶみながらも吸ひかけてゐた煙管を投げだしていきなり上框へ飛び出した。

歸つて來たのは思ひがけもない主人の孝治だつた。外套の上から毛布をまるまると被つて、それでも

寒いのかがたがた肩を慄はせながら突立つてゐる。

「まあ、こんな吹雪にどうしてまあ、……私やほんとに吃驚した。何よりも早くお上んなさいよ。さぞ寒かつたてせう。」お峯は嬉れしさうに叫んて、良人の後へ廻つて甲斐々々しく毛布や外套ヶ脱がせてやつた。

孝治はやつと人心地に返つたと云ふやうにその時になつて初めて眞蒼な顏に笑を含んて、

「やあ、どうも實に酷いめに逢つた。えらい吹雪ぢやないか。」と、きれぎれに云つて、今度は出口の方を振顧りながら、

「おい、寅吉。皆に此方へ入れと云つてくれ。」

その聲と一緒に戶外から見馴れぬ十三四の男の子と、橇挽きの親爺が雪に塗れた行李やら毛布包みやらを擔ぎながら入つて來た。

「おや、源さんぢやないか。ほんとにまあ此の降りに氣の毒だつたねえ。まあ、早く雪靴をぬいて、爐へ來ておあたりよ。」お峯は取るものも取り敢へぬやうにいそいそしながら橇挽きにまて愛想を云つた。

そして今迄火ハ消えたやうだつた家のなかゞ急に湧たつてきた。

孝治は靴をぬぐと突如爐傍へ上つてそのなかへ兩足とも踏み込みながら、膝揚に伊藤の挨拶を受け流して、

「どうもえらい天氣だ。此方がこんなに荒れてゐると知つたら、もう二三日延ばす筈たつたが、何しろ彼方は冬知らずてなあ。降つたと云つてもたつた三寸か四寸のこつたから、昨日になつて到頭思ひ切つ

て發つたのよ。すると今日下富良野へ來るとこの吹雪だ。實に弱つたね。」

「さうしたらうとも。實はたつた今しがたも旦那のお噂をしてたんですが、何しろこの天氣だからまあ今夜はまさかお歸えりになりやしめえと思ひましてねえ。……だがよくお歸りになれましたなあ。」伊藤は人の好さゝうな髭面に嬉しげな微笑を浮べながら幾度か合點いてみせた。

「ほんとにまあよかつた。これでもかうして家まで歸つてみると夢のやうな氣がするよ。なあ、源。シユプカ川の近邊なんざとても酷かつたなあ。」

雪靴をぬいて爐傍へやつて來た橇挽きの親爺はこれもやつと安心したといふやうに、伊藤の顏を見て、

「ほんとさ。なにしろ馬の腹まで踏ん込むんで、私や此れだあばはあもうとても命がねえと思ひましたさ。」

「ほんとに源にや氣の毒した。今日は橇を出したつて動きやしねえつて止めたんだけど、俺も停車場まて來て家へ歸れねえのも殘念だと思つて無理に出さしたんだ。」孝治はお峯と、源の顏を見ながら云つて、「もうどうせ今夜は歸れやしねえんだから、早く馬を小舍へ入れてやつて今夜はゆつくり泊つて行きな。」

「さうおしよ。旦那が歸つて來られたのもお前のお庇護なんだから、お酒でも御馳走しやうぢやないか。」お峯は孝治の方を振顧りながら云つた。

「へえ、難有う。そんだらさうして貰つて、私やちよつくら馬の世話してやりますぺ。」源はよく溫まりもしないうちに又そゝくさ戸外へ出て行つた。

孝治は漸う落着いたやうに四邊を見まわしながら、
「随分長く家をあけたが、別に變つたこともなかつたらうな。」
「別に何もなかつたけど、今日歸るの明日歸るのつてあんたもいゝ加減私に氣を揉ましたぢやないか。」
お峯は恨みがましく云つた。
「俺も歸らう歸らうと思つてたんだが、手紙でも云つてやつたとほり温泉で余市の農場にゐた時分の友達に出逢はしちやつたもんだからなあ。」
「そうだつてねえ。それで病氣の方はどうですね。餘り肥つても來ないやうぢやないか。」
「はゝゝ。温泉へ行つてたつて肉は附きやしねえよ。だけど頭の方はすつかりよくなつた。痛みもとれたし、物覺えもひどくよくなつたからなあ。」孝治は頭を振つてみながら云つて急に思ひついたやうに、
「そりやいゝが、小供達はどうした。もう寝たか?」
「もう夕飯をたべるとすぐ寝ちやつたよ。此間から父さんが歸えつて來ねえつて毎日々々氣にしてゐましたよ。」
「さうだらうとも。寝たんなら起こして來い。土産を買つて來たから呉れてやらう。」孝治は起ち上つて、上框にある行李の繩を性急に解きだした。
「よく寝てるから今夜は起こさなくつたつていゝぢやないか。」お峯は今夜だけは良人を自分ひとりでもてなし度いやうな口振りで云つた。
「まあ、起こして來いよ。寂しがつてゐたんだあな。土産でも見せて喜ぶ顔が見度いぢやないか。」

お峯はしぶしぶ起つて隣りの間へ入つて行つた。そして何か小聲で呟いてゐたが、やがて五つばかりの男の子を先に立てゝ、自分はまだ乳離れのしないやうな女の子を抱いて出て來た。

「ほれ、安。ほんとうにお父つちやんが歸つたらう。そんな變な顏をしてないで、早くお父つちやんの傍へ行きな。」

男の子は兩手で眼々擦りながら今にも泣き出しさうなべそをかけてゐたが、孝治の顏をみると急に怪訝な眼つきになつてをづをづ彼の方へ步み寄つて行つた。

「おう、安か。お父さんは歸つて來たぞ。さあ、一寸來い。抱いてやらう。」孝治はさも子煩惱らしく笑み崩れながら突如安を抱きあげてみて「こりや大きくなつた。重いぞ、重いぞ。まあ待てお父さんがいいお土產を持つて來たからな。」

孝治はいそいそしながら伊藤や寅吉にも手傳つて貰つてやつと行李を開けた。着換へやら、丹前やらの間からは繪はがきや、紅や靑の繪の具で塗つた田舍らしい玩具がいくつともなく現はれて來た。それても態々室蘭まで出て買つて來たものと見えて、此邊の小供はついぞ見たことのないやうなものばかりだつた。孝治は安が一々それを手に持つてみては嬉しさうに笑ふのを、自分でも心底から嬉しさうに瞻つてゐた。

その暇にお峯は抱いてゐた女の子を良人に預けて自分はそのまゝ水場の方へ出て行つた。そして別に洋燈を點けてうぢうぢしてゐるおもとを急き立てながら酒の仕度に取懸つた。

源が馬の始末をして再び爐傍へ歸つて來た頃には、もうそこへ餉臺が持ち出されて、その上には香の

ものや鰊の燻製なぞが山のやうに皿へ盛られて並べてあつた。鐵の大自由鍵に懸けた鐵瓶の湯はぐらぐら煮たつて、そのなかへ注けられた燗徳利は甘い酒の香を四邊に濃く漂はせてゐた。伊藤も寅吉も皆飼臺の周圍へ寄集まつて來た。

お峯は支度が濟むと自分もその座へ來て加はつたが、その時ふつと上框の隅へ小さくなつて蹲まつてゐる先刻の見覺えのない男の子に氣がついて、いきなり吃驚したやうに、良人の方へ向きながら

「あれ、あんた。あの子は何處の子だね。」

「おう、さうだ。餘りごたごたしてゐて、俺りやすつかり忘れてゐた。」孝治は急に男の子の方を向いて、「おい、音。そんな處へすつ込んでゐねえて、此方へ來てあたんな。誰れも恐え人はゐやしねえ。さあずつと此方へ來な。」

男の子は眞黑な顏をふつと此方へ振り上げたが、人に怯えてゐるやうにおろおろ四邊を眴はすばかりて上框から離れやうともしない。そして一座の眼がそつちへ向くと益々堅くなつて、又低く俯向いてしまつた。

孝治は起ち上つて自分から態々そつちへ出て行つた。そして手を執らんばかりにしてやつとその子を爐傍へ連れて來て、

「お前はもう今日から此處の家の者になるんだから、何も遠慮をするんぢやねえ。今何んか食べるものをやるからそこであたつてゐな。」と云つて伊藤の處へ坐らした。そして今度は得意らしく皆の方を眴はしながら、

「此奴あね、かうみえてもアイヌの子なんだ。實は此間友達と一緒に幌別へ遊びに行つたら、あそこの宣敎師の家へ此の子がゐたんでね、到頭話をつけて貰つて來たんだ。日本語も可成分るしそれに細工物が上手で、えらく働くつてえから都合がいゝと思つてね、どうせ今年は山の方でも入手がいるから此奴をよく仕込んで使つてみやうぢやねえか。」

「まあ、アイヌですつて? お前さんも隨分物好きだねえ。」お峯は呆れたやうに云つて、

「食物なんぞは何うするんだね?」

「そりや出面達にやるやうなものを食はせときやそれて澤山さ。此奴等の部落ぢやどうせ人間の食ふやうなものを食つちやゐねえんだから。」

皆は今更らのやうに好奇心に充ちた眼つきて髮の毛を長く延ばしたそのアイヌの子の顏をじろじろ眺めた。そして盃をあげながら彼等の部落や習慣に就いて云ひ古された荒唐無稽な話をしはじめたが、彼はまるて他の事を話されてゞもゐるやうにけろりとした顏附をして燃えさかる爐の火をみつめてゐた。

「一體アイヌつて奴は上手に使ふと調法なもんさ。木村の牧場てもいつか二三人出面に使つたが、唯數を知らねえんて、これが困るつて云つてましたゞ。はゝゝ。」源がこんなことを云ひ出す頃にはもうそろそろ皆顏にも酒の氣が出て、話は漸次と別な方へ移つて行つた。アイヌの子の音はお峯が吳れた餘を幾疋も幾疋も片手に持つて、妙な光のある眼て皆の顏を順々に偸みゝながらさも旨さうにむしやむしや食つてゐた。

吹雪は少しも勢を落とさずに益々激しく防雪林や原野の面に荒れ狂つてきた。屋根から雪塊を吹き落

とすどよみが重々しく響いて、夜は知らず識らずのうちに漸次と更けて行つた。

孝治は酒が廻つてくるに從つて元氣づいて、溫泉場で起つたさまざまの出來事や、自分の耕地や造林に對する今年の計劃などをいかにも空想らしい誇大な調子で語り續けた。そしていつか彼の膝を枕にしてすやすやと寢入つてしまつた安の頭を無意識に撫で廻しながらいつまでも自分ひとりで氣焰を吐いてゐた。

二

アイヌの子の音はそれから四五日も經ないうちにもう家のものとすつかり馴染みになつてしまつた。出面を多く使ふ農場では諸國から年毎に種々さまざまな人間が入り込んで來るので、家のものは外來者と云ふものに對して悉く馴れきつてゐた。それに音の方も隨分長らく宣敎師の家に厄介になつてゐたものと見えて、日本人には極めてよく昵んでゐた。譬へ彼の胸の底に波打つ血潮にはアイヌの魂が響いてゐても、日本人をシャモなど丶敬遠して內心では狡猾な敵意を含んでゐるやうなそんな子には育てられてゐなかつた。

彼は日本語もなかなかよく喋言つた。從順であつた。衣食住も總て日本人化されてゐて、打ち見たところこの附近の部落に遊んでゐる移民達の小兒と少しも變らなかつた。農場では馬小舍と穀倉の間にある出面達の小舍をあてがはれて、彼はそこでたつたひとり寂しく寐起した。そしてまだ農期に入らない間は、彼の仕事は繩をなつたり、馬糧を刻んだりすることであつた。それが暇な時は大方藁や莚を敷いた土間へ坐つて薄暗いなかで木片や、板片を集めては頻りに何かこつこつやつてゐた。時々は母家の方

へも出て來て、爐傍で安の相手になつて遊んでやつたりしてゐた。
根雪が日に日に薄くなつてゆく或日のことであつた。主人の孝治もやつと落着いたのでその日は皆して山廻りをやることになつた。朝まだ薄暗いうちから農場ではその支度に追はれて、橇の用意をするやら辨當をこしらへるやらで爐傍はいつになく賑やかだつた。
六時を打つと彼等は雪鬪ひの外に來て待つてゐる馬橇へ打連れて乘つた。伊藤が馭者臺に坐つて、孝治と寅吉とは橇のなかへ對向ひに坐つた。監理票や辨當やその他山廻はりに必要な小道具の類は二人の足元へ堆く積まれて、防寒帽で顏を包んだ孝治は厚外套の上から亞米利加の民兵のやうに獵銃と彈丸帶を十文字にかけてゐた。
橇が出やうとする間際になつて出面小舍の方から音がひよつくら出て來た。
孝治はその薄寒むさうな格好をみると、急に彼も連れていく氣になつて、
「おい、音。お前も山へ連れていつてやるから、橇へ乘れ。フシコナイから奧の方の模樣を敎へとかなくちや、雪解けになつてから役に立たねえからな。」
音はそれを聞くとさも嬉れしさうに笑つた。そして突如小舍へとつて返して、お峯から貰つた毛布の外套を引掛けて、雪の上をよちよちしながら驅けて來た。山へ行くことが餘程嬉れしいと見えて、橇へ乘つて寅吉の隣へ坐るまで彼はにこにこ無邪氣な顏をしながら微笑みつゞけてゐた。
橇はやがてお峯の聲に送られてするすると心持ちよく滑りだした。馬の蹄と橇の刄で蹴られる粉雪は阪路の兩側へぱつぱつと飛散つて、防雪林の陰を出ると、彼等の眼の前には際涯もない十勝原野がまる

で海のやうに漂渺と展開して來た。まだ夜の眠りから覺めない大空には星の影が冷たく殘つて、一帶の枯林には薄紫の薄明りが一面に立罩めてゐる。曉方の立澱んだ根雪の面は北の國でなければ到底みられない寂しさを漲らせて、遠く近く四五戶づゝ飛びとびに建つてゐる開墾小舍が却つて人住まぬ岩塊か何ぞのやうに極めて不自然にみえてゐる。

橇は街道を眞蕊に駛つて、やがてシュブカ川の河原へ出た。雪の崩れた間からは骸骨のやうな色をした砂利があらはに露出して、その間を澄んだ水が咽びながら勢よく奔流してゐる。

「おう、此處邊も大分雪が薄くなつてるな。此の樣子ぢやもう半月も經たねえうちに土が出るぜ。」孝治は氣分が輕さうなはきはきした聲で云つた。

伊藤はせつせと駛つてゐる二頭の馬の手綱をゆるめながら、

「さうですな。もうそろそろ何處でも忙がしくなりますさあ。今年は此處邊もすつかり燕麥の畑になつてしまうんだから、とても變つたもんですなあ。」

「ほんとにさ。人間が數入つて來りや開けるのは早えもんだ。俺達が此處邊へ來た時分にやまだ手の附けられねえ森林だつたがなあ。かうしてみると全く早く開けたもんだ。」

こんな話をしてゐるうちに河原は漸次と兩岸から迫つて來て、行手には楢や白樺の疎らに生へ續いた山々が幾つとなく立重なつて來た。橇はその山裾を縫ふやうにして登つていつたが、やがて一つの傾斜を登りきると、そこからはまるで豫期しなかつた高原が大きな谿谷をつくつて展がつて來た。國境のメムオロ、ピバイ、キウサンの雪峰はその果てに銀のやうに輝いて、蝦夷松やオンコの密林はその麓を城

壁のやうに巍乎と取圍んでゐる。そしてもうその頃には遠いシユプカトウシヌプリの連山の彼方から眞紅な朝日が眞向に射し渡つて來たので、起伏の多い雪原の面にはほの紅い太陽の反映と、薄紫の陰影とが何とも云へぬ微妙な斑紋と交錯させながら一面に浮き上つてみえた。そして今迄は音も立てなかつた橇の双が急にばりばり異樣な響を立てはじめて、人の足痕さへない高原の雪が橇の動搖につれて細かく斷れぎれに龜裂してゆく。小倉の農場で持つてゐるフシコナイの開墾地はまだかうした深い雪に埋もれてゐたのであつた。

　橇が深林帶へ入ると間もなくシユプカペツの小舍へ着いた。そこは千葉縣移民團の共有になつてゐる材木切出處で、農場からはシユプカ河に沿はずに裏山を三つほど越えると眞直に來られるやうな地點なのであつた。雪が止むと一緒に材木を切り出す人夫が四五人づゝは必ず入つてゐるので、小舍の傍には乘り捨てた馬橇もみえる、焚火から立騰る烟は龜縮んだやうにゆらゆらと森を掠めて谿流の方へ低くゝ垂れ下つてゐた。

　一同は橇から下りて小舍へ入つて行つた。ほんの丸木を組み立てたばかりの小舍なので周圍には古莚を張りつめてやつと風雪を凌げるだけにしてあつた。入口の莚をあけて入ると、なかには雪靴を穿いた三人の出面が大割りの薪を焚いてしよんぼり暖をとつてゐた。彼等が入つて行くのをみると、皆は吃驚して一齊に起ち上つた。なかでも一番年の老つたひとりは孝治の顏を見知つてゐると見えて、

「まあ、誰れだかと思つたら小倉の旦那でがしたな。大層早く、山廻りだね。」

「お前達は何處だね？　山田かい？」孝治は氣のさくい調子で彼等の所屬してゐる農場の名を訊ねなが

ら焚火の傍へ寄つて行つた。

「いゝえ、山田でありましねえ。佐々木でがすよ。」その親爺は素朴な挨拶をして、「だがまあよく此處まで來られましたねえ。ほんとに危ねえこんだ。」皆と顔を見合はせながら何か危難が迫つてゞもゐいやうに云ふ。

伊藤はそれを聞くと變な顔をして、

「何うしたと云ふんだ。何かあつたのかね？」

「そんだらあんた方は知らねえな。實は昨日からこのシエプカベツに熊が出てね、それがいかい大けえので三疋は確かにゐるだあね。私等それをみつけた譯でねえが、ピバイの方へ入つて行つた測量の人から聞きました。何んでもすぐ上の谿でのそのそ歩いてるやつを確かに見たてえます。あの人達や鐵砲は持つてゐるけんど、彈丸のいけえのがねえからちつて、今朝この小舍へ遁げて來ましただ。今日あたりやもうフシコナイの原へ出てるだんべえに。あんた方は足痕も何にも見懸けなかつたかね。」

「いや、何にも見やしなかつたよ。フシコナイはまるで新雪（あらゆき）のやうに穴ひとつ明いてなかつた。」伊藤は腰から煙草入れを拔いて、薪の火を借りながら「だが熊が出るにしちやちつとべえ時節が早過ぎるでねえか。まあだ木の芽も何にも出てゐやしねえによ。」

「きつと山から迷つて來た奴だんべね。はゝゝゝ。」親爺は急に人數が殖えたので勢ひづいたやうな聲で笑つて、「旦那方は此れから何方へお入りになるだあね？」

「今日はどうしてもピリカベツの官林まで行かうと思つてるんだ。」孝治はこれも煙草を出して吸ひなが

ら云つた。

「いかねえ、いかねえ。そりや危うがすよ。フシコナイから彼方なら大丈夫だけんど、これから奧へ行つたらどんな目に逢ふか分りましねえ。私らもう今日はこれで仕事を休んで農場へ歸えらうかと思つてるんだから、あんた方もさうおしなせえ。山廻りや今日に限つたこつでもねえし。……」

「なあに、大丈夫さ。熊ぐれえ恐がつてゐて山廻りが出來るもんかな。」孝治は氣にも懸けてゐないやうに昂然と云ひ放つた。

親爺達が止めるのも聞かないで、暫らく休息すると彼等は又再び橇に乘つた。今度は深林のなかの小徑を右左に縫つていくので普通の山地と違つてまるで道が捗らなかつた。ともする切り倒され腐木が道を塞いでゐて、それを避けて通るだけでも思はぬ時間がかゝつた。そして熊の話を聞いてゐるので氣は張詰めてゐながら何處か云ふに云はれぬ恐ろしさが皆の心に宿つて、樹立の薄明りを差覗く眼にも妙に警戒の色が浮いてゐた。或傾斜を越える時なぞは孝治は肩から銃を降ろして、熊とダムダムの彈丸を裝めてみたりした。

ピリカベツへ着いたのはもう午過ぎだつた。そこの小舍へはまだ樵夫もなにも入つてゐないので、彼等は自分達で火を起したり、湯を湧かしたりしなければならなかつた。そこで彼等は晝飯を食べて、一亘り近邊の山を見て歩いた。そこらはまだ雪が深いので、雪靴を穿いた足はともすると股の邊まですぶりずぶりとぬかるやうなことがあつた。日は向山の頂にかげつて、官林との地境の谿谷なぞはまるで冬のさなかのやうな寒氣に閉ざゝれてゐた。

去年用材のなかの四分の一ほどは伐截してしまつたので、見て歩く處は案外少なかつた。樹木の雪害も思つた程ではなく、殊にトヾの林などは最も完全に發育してゐるので、彼等は何とも云はれぬ滿足を覺えた。垂れ下がつた濶達な枝振りをみせて、天を摩するやうにすくすく青空を劃つてゐる針葉樹林の姿は何ものにも譬へられぬ美觀だつた。

幌別あたりの海岸で育つた音にはかうした山林の光景が餘程もの珍らしく映つたものと見えて、彼は初めの間は元氣よく皆の先頭に立つて跳びまわつてゐた。それが小舍へ引歸す頃にはもう全く疲れきつて、時々は雪の上へ打倒れて眼ばかりぎろぎろさせてゐた。瘦せた小さな顏なので、そんな風に疲れて來ると妙に險相な色を帶びてくるのであつた。平常は日本人と少しも變らないやうに思つてゐても、かうした時にはいかにも未開の蠻地を横行して歩いてゐた彼等の祖先の風丰をまざまざと思ひ起こさせられるのであつた。

「おい、音。そんな處へ打倒れてゐると置いて行つてしまうぞ。後で熊が出て來てお前を喰つちまうんだ。」孝治はこんな事を云つては彼を揶揄つた。

熊と云ふ聲を聞くと、彼は小供らしい恐怖をみせて、忽ちついと起ち上つた。そして兩手で膝頭を抑へては匍ふやうにして歩いて行つた。

小舍へ歸つて橇の支度が出來ると愈々彼等は歸場の途についた。歸りにはピリカペッから谿流に沿つて別な道をとつてシュブヵ川へ出やうとした。農場の裏からその川のすぐ上の山までは一面に落葉松の試植林になつてゐるので、ついでにそつちの方も見廻つて行かうとした。

丁度シュプカペッの小舍から山ひとつ越えた凹地の邊まで來かゝると、その時突然思ひもかけぬ椿事が勃發した。そこは兩側から下つて來た山がS字形の原をなしてゐて、楢や樺が疎らに繁つてゐるので、開濶な地でありながら全く展望がきかなかつた。そこへ來るとゝある小流れの岸で今迄勢よく駛つてゐた馬がふいに一聲高く嘶いてばつたり立悚んでしまつた。それと同時に馭者臺にゐた伊藤は「あれ、熊だッ。」と息のつまるやうな聲で叫んでいきなり手綱を投げ捨てゝ雪の上へ跳び降りだ。その樣をみると橇に乘つてゐた三人はぎくりとして我勝ちにどやどやと立ち上つた。

とみると、丁度橇の止まつた處から四五十間先の熊笹の間に眞黑な異樣なものがじつとして踞つてゐる。

「あゝ、熊だ。熊だ。おい寅。馬をしつかり押へてゐろ。」孝治は突如銃を取り上げて雪の上へ跳び降りた。そして顏ぢうの筋肉が一時に拘直したやうに眞蒼になつて、注意深く二三歩前へ進み出た。馬はもう熊をみたゞけて悩えて、互ひに激しく啣を嚙み合ひながら音と、寅吉とを乘せたまゝずるずる谿川の方へ後退りしてゆく。

孝治は射擊にかけては近邊でも熟練家のひとりだつた。獵期の間は山へ入るのを唯一の樂しみにしてゐる位ではあるし、それに熊狩りにも經驗をもつてゐるので、此場合執る可き手段は充分腹にあつた。うつかり發射して熊の急所をはづれた處でも傷をつけたら、それこそ此方の命が危いことをよく知つてゐるので、彼はその儘雪の上へ身を伏せて、氣を落ち着けながらじつと狙ひを定めた。

凄まじい響きが谿々に反響を呼びながら一聲鋭く鳴り渡つた。銃口から烟りが消え去つた後でみると、

そこにゐた黒い姿はいつの間にか見えなくなつて、やがてそこから右の方に聳えたつてゐる丘陵の山腹の處で熊笹をやたらと掻き倒す音が激しく聞えて來た。

孝治は又狙ひをつけなほして二發目の彈丸を發射した。それと同時に笹のざわめきはばつたり止んで、今度は牙を鳴らすやうな呻めくやうな不思議な唸り聲が引續いて聞えて來た。孝治はそれを聞くと居ても立つても耐らないやうな顔つきになつて、伊藤が手で制するのもきかずに疎らな枯林の間を見え隱れに縫ひながら一歩一歩その聲の方へ忍び寄つて行つた。伊藤は仕方なしに大きな山銃を取つてその後から恐る恐るついて行つた。

緊張しきつた沈默がほんの僅かな間人氣のない山林の間に立澱んで來た。そして三發目の銃聲が鋭く響きあがつて來たかと思ふと、間もなく嬉れしさうな孝治の叫び聲が、

「おい、伊藤ッ、早く來い。早く來い。」遠い樹陰から慌たゞしく聞えて來た。

熊は到頭その三發目の彈丸で見事に仕留められたのであつた。孝治は伊藤と力を合はせて、やがて眞黒な怪物の脚を持つて雪の上をずるずる橇の方へ引摺つて來た。まだやつと三歳位な小熊で、横鼻のところから頭へ貫通した彈丸によつて脆くも息の根を留められてゐた。そして死んでから間もないので眞紅な血が傷口から滴々と滴り落ちて雪の上へ漸次と廣く滲んで行つた。

孝治は銃を置いて汗ばむだ額を拭きながら、

「いや、どうも實に驚いたね。まさかこんな處をうろうろしてゐやうとは思はなかつたもんだから、到頭二發まで空彈を打つちやつた。」

伊藤はまだ胸の動悸が靜まらないやうに息を彈ませながらぼんやり突立つてゐる。寅吉は初めて橇から降りて來て、熊の死體をいぢつてみながら、

「これでも十貫ぐらゐはあるでせう。えらいものを打つたもんだ。」

「ほんとに思ひ懸けねえ獲物さ。俺やこの二三年熊なんぞ打つたことはねえんだからね。」

「さうでせうとも。何しろピリカベツから此方へは滅多なことぢや出て來ねえんですからなあ。」寅吉は熊の口を引開けて牙を覗いてみたり、足の爪を開いてみたりしながら云つた。

「兎に角橇へ乘つけて早く村へ持つてかうぢやねえか。村でも珍らしいからどんなに驚ろくかしれねえ。又新聞へ出るぜ。」孝治は嬉れしさうに云ひながら、伊藤と寅吉に兩脚を抱へて貰つて、熊の死骸をそのまゝ、橇へ乘せた。その時、初めて氣付いてみると、橇の隅には音がまるで打踏めされでもしたやうな意氣地のない格好をしながら唇の色まで失くなしてぶるぶる慄へてゐる。熊の出現が餘程恐かつたものと見えて、彼はその騷ぎの最中毛布を引被つたまゝ橇の底へへばりついてゐたものらしかつた。

それを見ると孝治は噴笑して、

「おい、音。そんなに恐えのか。はゝゝ。もうかう打ち殺ろしてしまやあどうもしねえよ。ちよいとこの剛い毛に觸つてみな。」と、云ひながら、熊と揶揄ふつもりで熊の脚を彼の方へにうつと突き出した。

音はそれをみると、熊に縱けられた馬のやうに身動きさへ出來ずにじつと眼を瞑つた。そして軆ぢうの筋肉をぶるぶる慄はしてゐてゐたが、次の瞬間には殆んど反射的に、

「あッ。」と、異様な恐怖の呻めき聲を發して、いきなり檻から外へ跳び出してしまつた。そして此方を眺める眼は憤怒と絶望とで全く据わつてゐた。

「はゝゝ。弱え奴だな。アイヌでゐながら熊ぐらゐが恐くつちやしやうがねえぢやねえか。お前達の部落ぢや親代々熊を手捕りにしたり、メノコが自分の乳で育てたりまるで飼猫かなんぞのやうに扱つてゐるんぢやねえか。お前は耶蘇なんかに入えつてゐたからそんな弱虫のハイカラになつちまつたんだ。はゝゝ。意氣地のねえ野郎だな。」と、云ひいひ孝治は笑ひながら出立の用意をした。

檻はこの豫期もしない恐ろしい獲ものを積んで再び駛り出した。今度は馬の方が恐怖に驅られてゐるので、ひと鞭くれると、忽ち狂奔するやうに駛りだして、凹凸の激しい山裾の道を眞驀に盲進して行つた。ともすると檻が顚覆しさうに動搖するので、伊藤はその都度口を鳴らしながら手綱を控へたが、馬は一刻も早く危地を脱しやうとするやうに逸りに逸つてどうしても云ふことを聞かなかつた。

音はそれなり口を喋んで、寅吉の傍へ小さくなつて坐つたきり一言も口をきかなかつた。足先に熊の剛い毛並が觸るので、恐ろしさの餘り氣が變になつてゐるとみえて、妙にいこぢな顏つきをしては頼りなげにしよんぼりしてゐた。孝治もそれをみると、しまひには何だか可哀想になつて來て、漸次と滅亡してゆく憐れなアイヌといふものゝ一族を思ひ出しながらなだめるやうに、

「お前のお父さんやお母さんはまだ生きてゐるのかね。」などゝつかぬことを聞きだした。

音は默つて頸を横に振つた。

「よむ、二人ともゐないのか。ぢや兄弟は？」

「姉えがひとりあるけんど、漁場へいつちまつた。」音は何處やら悲しげに初めて口をきつた。

橇が二里に餘る雪路を駛つて、落葉松の試植林へ着いた頃には、足の早い冬の日がもうとつぷりと暮れかゝつてゐた。河岸からすこし上つた處には五年生、十年生の樹林が今にも芽含みさうに何處となくぼうつと色づいて、傾斜から傾斜へ幾十町歩と沒く規則正しく續いてゐた。彼等は一巡見廻はると、珍らしい土産の方に氣を急かれて、直ぐさま又橇へ乘つた。そしてまるで凱旋の將士のやうな得意な氣持ちて、凍々かゝる黄昏のなかを揚々と農場の方へ歸つて行つた。

三

解雪期が來た。

執念深い根雪は人通りの多い街道や、小流れの縁から少しづゝ融け初めて、そこから現はれる黒い地肌にはさも待ち兼ねてゐたやうにもう青草が細かい芽をふいてゐた。毎日毎日澄み渡つた朗らかな天氣が續いて、雪の下からやつと頭を擡げたばかりの枯草や落葉を蓬々と吹き卷きながら春を呼びさまして歩く空ッ風が夜となく晝となく吹き荒んだ。日のあるうちは氣溫もめつきり高くなつて、彼方此方の樹陰や傾斜地では雪解の水音と聲を爭ひながら飛雀が嬉れしさうに高啼した。さうかうするうちに畑の雪もすつかり消えて、落葉松の梢や牧草地にはまるで嘘のやうな柔らかな綠が青々と萠えたつて來た。慌たゞしい春は朝夕の間にも眩るしい變化を示しながら天地の間に汪洋と漲り渡つて來たのであつた。

小倉の農場も今が一年中で一番忙がしい季節であつた。今まで眠つてゐた小舍々々は俄かにざわめき渡つて、二十里も三十里も先から集めて來た出面は農具の手入れやら、播種の準備やら、牧場を開く手

笞に追はれて、彼方でも此方でも眞黑になつて働いてゐた。シュプカの下流に沿つた一帶の畑地では牛の唸る聲や、人の喚く聲が明るい空氣に傳つて、既に第一の鋤は大地の面に打込まれてゐた。

出面達は一日の勞働を終はると汗みづくになつて小舍へ歸つて來た。母家の方では一農期ぎめで傭はれた女達が炊煙の渦巻くなかで麥を炊いたり、汁を煮たり一心になつて立働いてゐる。やがて二棟の小舍には三分心の薄暗い灯が點されて、騷々しい夕餐が初まる。それが濟むと藁を打つもの、草鞋を編むもの、それぞれ自分の仕事に就いて、眞紅な星が十勝原野の彼方を彩る頃にはもう小舍の彼方此方では健やかな鼾聲が聞えはじめるのであつた。

音も矢張りさうした出面達に立混つて朝早くから晩寢るまで畑の勞働に從つた。牛を追ふことにも、馬を使ふことにも馴れてゐないので彼は大方堀り返された土塊に塗れて、あれをしろ此れをしろとまるで機械のやうにこき使はれた。なにを云つても年端のいかない小供なので、初めのうちは皆の云ふことを聞いて無理にも一心になつて立働いてゐたが、そのうち漸次と體力が衰へてきて、ともすると苦しげに喘ぎながら肥料桶の上に打倒れてしまうやうなことなどもあつた。

「こらッ音。手前は何にしてるだあ。俺らちが動げえてるのが見えねえのか。さあ、立てッ。仕様のねえわらしだ。」そんなことを云ひながら荒くれた出面達は突如彼の髮の毛を攫んで引起した。彼は泣き顏をしながらもよろよろ起ち上つて、そこらの畝から畝を力なげにうろついて廻つた。

昔は賃金を取つてしまうと汽車の窓から飛んで逃げてしまつたりした狂暴な氣風は今でも下等な出面達の間には殘つてゐた。漁場が濟むと漸次と未墾地の方へ流れていつて、此處かしこと處定めず漂泊し

て歩く彼等の群はまるで野獸のやうなものであつた。弱いものと見れば必ず頭から踏付けてかゝる、强いものは强いもの同志で自分達の分け前を一握りでも餘分に取らうとしては互に相喰む、どこの農場でも彼等の使役法にはひどく弱らせられたものであつた。

そんな出面達の群によつてなされる音の逆待は日に日に加はつて來た。或者なぞは面白半分に彼をつかまへては窘めた。重い鋤を曳かして到頭倒れるのを見ると、彼等は何の所謂もなく彼を打つたり叩いたりした。そして彼が大聲を揚げて泣き出すのを見ると皆で手を叩いて笑つた。それには無論年弱といふせいもあつたが、重な源因は彼がアイヌであると云ふことからであつた。アイヌは犬と同じ臭氣がするから自分達よりも劣等な人種だ、そんなことが常に無智な彼等の頭腦を支配してゐるのであつた。

或時なぞは畑で使ふ鍬の折れで打たれて、彼は傷いた犬のやうに力なく呻めきながら畑から留つて歸つて來た。誰れに訴へる術もないので、小舍の裏へ行つて馬糧を干してある地面へ打倒れて頻りに啜泣いてゐた。丁度馬を見に行つて歸つて來た主人の孝治はそれを見附けるとかつとして彼の傍へ步寄つた。仕事の忙かしさと、時候のせいで彼はひどく興奮してゐたので、

「音。手前は何にを怠けてゐやがるんだ。此の忙がしさにそんな處へ寢てゐる奴があるか。手前は人の眼を偸んで隱れてゐやがるんだな。」

音は何か云はうとしたが脚の痛さに堪えかねてその儘俯伏してしまつた。主人はそれを一圖に怠けてゐるのだと思ひ込んで、突如そばへ寄つて引起こしてみた。と、左の足が大きく膨れ上つて眞黑な血が一面に滲んでゐるので、今更らのやうに吃驚しながら初めてその譯を詰問した。

音は涙を呑みながら畑での始末を斷れぎれに訴へた。孝治はそれを聞くと、彼が皆から窘められてゐる容子がやつとそれとなく分つたので、何だか急に可哀想になつて來た。と云つて出面達を集めてこの憐れなアイヌの子を窘めないやうに云ひ聞かせるなぞと云ふことは到底出來ない話なので、彼は處分に困つて、お峯を呼んだ。そしてそつと裏の納屋へ連れていつてそこへ寢かせた。お峯はアイヌ、アイヌと一口に卑しんではゐるものゝ、かういふ場合にはこの醜怪な顏をした子供がいぢらしくなつて自分の財布のなかゝら十錢玉をひとつ取出して、そつと彼に呉れた。彼は痛みを押し耐えながら、嬉れじさうにいつまでもその銀貨を弄んでゐた。

そんなことゝて宣敎師の手て折角素直に育て上げられた音も漸次と氣質が拗けていかずにはゐなかつた。農期に入らない前は從順だつた心もそのうちに妙に頑固になつて、一度吩咐けたことも三度命ずるまでは容易に動かないやうになつた。そして彼は日に日に自分の體を我から苦痛の方へ追ひ落としていつた。元來が無智なので、その間に處して少しでも自分の位置を利益な方へ引上げてゆかうなどゝ云ふ悧巧氣な努力は彼にはまるで望まれないのであつた。

耕地も漸次と整理されて農場の母家から見渡すと原野の面が日に增し眞黑になつて來る頃であつた。支廳長の巡視、農事の講習會、そんなものが煩さく續いたので孝治は又少しづゝ神經の健康を害して、その日は爐傍て鉢卷をしたまゝ一日ぶらぶら寢たり起きたりしてゐた。

日が入つて出面達がそろそろ小舍へ歸つて來る頃になると、もう小舍の周圍はいつものやうな賑やかな喧囂に取卷かれた。夕餐が配ばられると間もなく、彼はふと小舍の方で恐ろしい騷ぎが勃發したのに

驚ろかされた。そこでは十人よりも多い出面達ががやがや云ひながら、うわづつた聲で何事か頻りに云ひ罵つてゐる。互に浴びせ合ふ怒罵の聲も聞える。何かで擲り合ふやうな荒らあらしい音も聞える。

そこへ突然、伊藤が顔色を變へて飛び込んで來た。

「旦那、旦那。大事がおつぱじまりました。出面達が喧嘩をはじめやがつて、……早くお出でなすつて下せえ。私達だけぢやとても手におへねえから。……」と、上框のところで彼は息を彈ませながら叫ぶ。

家の女達はその聲を聞いたゞけで慄えあがつてしまつた。

孝治はやがて奥の間からいつもするやうに短銃を取つてきて革袋のまゝ懐中へ押し込んで舌打ちをしながら伊藤の後へついて戸外へ出ていつた。見渡すかぎり一點の雲翳もない晴夜で、空には寂しげな星だけが降るやうに輝いてゐる。終日吹きとほした風は防雪林の梢に騒いで、もう方々の山々では山焼きが初まつたとみえて眞紅な焔が山の襞に沿ふてくつきりと夜の空を劃つてゐる。

孝治は態々表口から小舍の方へ廻つて行つた。小舍の前の廣庭には十五六人の出面が寄り集まつて、薄暗がりのなかで頻りに野獸のやうに揉み合つてゐる。孝治は四五歩離れた處まで歩み寄つて、突如後から、

「手前達あ何をしてゐるんだ。此處は喧嘩なんぞする場所ぢやねえ。擲り合ひがしたけりや河原へ出てやれ。」と、恐ろしい權幕で怒鳴りつけた。

その聲で周圍を取卷いた十人ばかりはやつとその場に開いたが、なかで夢中になつて揉み合つてゐる者共はその聲が耳に入らないのか凄まじい呻めき聲を放つては盛んに組んずほぐれつしてゐる。そして

棒切れで擲り合ふ度に「うむッ。」と、絶叫する聲が聞えて、止めやうにも殆んど手がつけられないやうな有様だつた。

孝治はいらいらして懷中から短銃を取出して、だしぬけに空へ向つて一發切つて放した。帛を裂くやうな銃音は小舍の軒先から防雪林の方まで重々しい反響を呼びながら響いて行つた。

「さあ、靜かにしねえと、片つ端から打殺ろすぞ。さあ、どうだ。」さう叫びながら孝治は伊藤と寅吉とを勵ましてぢりぢり前へ進んで行つた。

思ひがけもない銃聲に驚ろかされて、取組み合つてゐた者共も一時ふつと力を拔いた。その隙に三人はやつと皆のなかへ割り込んで行つて、一心になつて双方の間を引分けた。なかにはまだ猛り立つて誰れ彼れの見境ひもなく打ちかゝらうとするものもあつたが、小舍の方から射して來る薄暗い灯の光を受けてちろちろ冷たく光る短銃をみるとさすがに怖れて、ぶつぶつ口小言を言ひながらそのまゝ後退りをしていつた。

「一體手前達や何んだつてこんな馬鹿な騷ぎをおつぱじめやかつたんだ。人騷がせにも程があるぢやねえか。」孝治は四邊がやつと靜かになると怒りに慄へながら云つた。

「何故もかぜもねえ。餘り酷えことをしやがるから、俺やとめてやつたゞ。すると金田の野郎いきなり……。」群集のなかの誰れかゞ辯解するやうに叫ぶと、又一人が、

「何にを云ふだあ、手前は止めるだあちつて俺を擲つたでねえか。ぐずぐずぬかすと顎を打ちはづして呉れるぞッ。」

その二人は又も攫みかゝらうとした。

「止せと云ふに。手前達あ俺の云ふことを聞かねえか。」孝治は短銃を擬しながらついとその二人のなかへ突き入つた。

やつとの事で双方をなだめて聞いてみるとその喧嘩の起りは音のことからだつた。金田と云ふのが酒の上で音を擲つたのを、誰れかゞ留めたと云ふのでふいにこんな騒ぎが持上つたのであつた。それも夕餐の時に音が椀を取違へたとかで、畜生同然な人間と一緒に飯は食はれないと云ひ出したのがもとで、金田は音をひどく擲つたのださうである。

皆はそれから打連れて小舍へ引上げた。明るみへ入つてみると、眼を擲り膨らされたり、腕から血を流したりしてゐるものなどもゐて、激しい爭鬪の後の敵愾心に充ちた沈默がいつとはなく薄暗い小舍のなかへ漲つて來た。藁床の上へアンペラを敷いた穢ろしい床には汁やら麥飯やらが方々へ飛び散つて、もとより膳も何も置いてはないので汁鍋や鐵瓶を置き散らした四邊が慘として狼藉を極めてゐた。そして爭鬪に加はらない手合ひは飯を鱈腹食つて隅の方の穴のやうな處へもぐり込んで眼ばかりばちくりさせながら豚のやうに寢そべつてゐた。

孝治は皆がどやどやと座に就くと、自分は入口の土間へ突立つたまゝ懇々と說きさとした。初めのうちは俯向いたり、そつぽを向いたりしながらも皆默つて聞いてゐたが、しばらく經つと誰れからともなく欠伸をしたり、隣り同志で煩さいやうに話をしだしたりして座が漸次と亂れて來た。なかには自分の茶椀を引寄せてむしやむしや飯を食ひ出すやうな者もゐた。

興奮しきつた孝治は寅吉に注意されてやつと口を噤んだ。そして今更威嚴を示すやうに、
「今度又こんな騷を初めやがつたら唯は置かねえぞ。」と怒鳴りつけてさつと一座を睨み廻しながら戶外へ引揚げやうとすると、その時、眞暗な土間の隅で誰かゞ苦しげに呻めく聲がふと起つて來た。傍へ寄つてみると、それは音だつた。餘程酷く擲られたものと見えて、體を海老のやうに丸く悚めて、ぶるぶる慄へながら頻りに啜り泣いてゐる。
引起こして覗いてみると、彼の鼻からは眞紅に鼻血が流れてゝ、頰から耳の邊まで血糊が物凄くべつとりと粘りついてゐる。眼の周圍には涙が光つて、總ての人に對して慴えてゐるやうに薄く瞬いた瞳の底にまでおどおどした色が動いてゐる。
「酷えめに逢はせやがつたもんだ。アイヌだつて手前達と同じ人間ぢやねえか。」孝治もさすがに呆れて二の句がつけないやうに憐れな音の顏を瞻つた。
彼等はやがて音を連れて小舍を出た。そとへ出てみると、原野の彼方には眞紅な盆のやうな大月が浮び出て、物の陰が薄く地に敷いてゐる。小舍の側に積み重ねた空俵の上にはさつきの金田が長々と寢そべつてゐて、彼等が通り過ぎるのを見ると、呂律の廻らない口で聞くに耐えないやうな惡罵を浴びせかけた。
「旦那が何てえ。鐵砲なんか打放しやがつたつて俺ちつとも恐かあねえだ。譯の分らねえことぬかすだら、あべこべに打殺ろしてくれるだあ。」その聲はまるで譫語のやうに叫んでゐる。
孝治はそれを聞くと又かつとしてつかつかそつちへ詰め寄つて行つた。後から來た寅吉は音の體を支

へながら片手でそれを遮つた。

「叔父さん。まあいゝぢやねえか。酔つぱらつてゐるんだから。」と云つて彼はそのまゝ無理に孝治を引立てゝ母家へ歸つて行つた。

音はその晩皆に介抱されて傭女達と一緒に裏の納屋へ寢かされた。

その翌日になると、農場は又思ひもかけない出來事で湧き返つた。出面達は昨夜のことなどけろりと忘れてしまつたやうに、朝早くからぞろぞろ耕地の方へ出て行つたが、午頃になると誰れからともなく音の姿が見えないのに氣がついた。

「彼奴め、昨夜擲られたのが骨にこたへて、どつかの隅へでも隱れてゐやがるんだらう。」などゝ云つて皆は笑ひながらせつせと鋤を動かしてゐた。

母家の方で最初に音のゐないのを感づいたのは伊藤だつた。昨夜のことが氣に懸つてゐるので、馬で耕作地を見廻つて歩く間にも彼はそれとなく氣を留めて音の姿を探してゐた。何處の耕地へいつて見てもぼろぼろになつた赤毛布の外套を着て汗みづくになつて働いてゐる彼の姿はみえなかつた。最後に彼が行きつけてゐるシュプカの耕地へも廻つてみたが、そこにも彼はゐなかつた。

母家へ歸つて來ると伊藤は奥の間へ寢てゐる孝治の處へ上つて行つて、すぐさまその話しをした。それを聞くと孝治は眉を顰めて、

「ゐねえとは不思議だな。あんな氣の弱え小供のこつだから、辛い辛いて滅多な眞似でもしやしねえかな。」などゝ云つて、突如起き上つた。

「さうでがすとも。あいつだつて人間なんだから、ひよつとしたことでもあると可哀さうですかんな。」

伊藤も心配さうな顏をした。

やがて傭女達は上框の處へ呼び集められた。一緒の家へ寢てゐたからといふので、伊藤は前夜來のことを根掘り葉ほり訊ねてみたが、誰れひとり音の樣子を氣に留めてゐたものはなく、一向に要領を得なかつた。

「さう云やあ今朝あのわらしの影も見えなかつたでねえか。」などゝ思ひ出したやうにがやがや云ひながら皆は顏を見合はせてゐるばかりだつた。

それから騷ぎが大きくなつて、女達は孝治の命令で農場の小舍といふ小舍は殘らず探させられた。馬小舍にも、牛舍にも、出面小舍にも、穀倉にも、それから馬糧を積んだバラックのなかまでも探して廻つたが、何處にも彼の姿はなかつた。彼等は到頭探しあぐねて、附近の山や森林の方まで探しに行つたが、夕方になるといづれも空しく手をつがねて歸つて來た。

その晩、爐傍は音の噂で持切つた。

その翌日も掛家では今にもひよつこり歸つて來るかと心待ちに待ちながら何となない不安の裡に時を過ごした。晝間のうちは忙がしさに紛れて誰も音のことを口にするものはなかつたが、夜になると傭女達は爐傍へ集まつて來て、お峯を相手にさまざまな臆測を語り合つた。と、その晩の九時過ぎになつて、思ひもかけない時に停車場の町の源爺が音を馬に乗せて、三里の夜道を息せき農場へ驅けつけて來た。

源爺の話によると、その日の夕方に音は町へやつて來て、いつの間にか停車場の構内へ忍び込んで折

柄回避線に停つてゐた無蓋車のなかへしよんぼり寢てゐたのだと云ふ。驛員達が見つけ出して、やつと引摺り降ろして譯を糺してみると、彼は唯泣きながら幌別へ歸して呉れと云つてきかなかつた。驛員達は音がアイヌであることを知らないので、一圖に發狂者と斷定して駐在所へ引渡さうとした。そこへ折よく源爺が通り合はせて、ふとみると見覺えのある音なので、彼はその儘驛員の手から引取つて自分の家へ連れて來た。そしていろいろなだめつ慊しつして事情を聞いてはみたが、唯幌別へ連れて行つてくれと云ふばかりで一向譯が分らないので、兎に角何か伏在した理屈があるものとして、歸らないと云ふ奴を無理やりに農場へ連れ歸つたのであつた。

源爺は伊藤から前後の話しを聞くと

「はゝあ。ぢや此奴そのもとの主人の處へ歸へるつもりで停車場へ來やがつたんだね。それにしてもよく汽車へ乘つかる智慧があつたもんだ。汽車だけははつきり覺えてゐやがつたとね。」と云つて、やつと合點がいつたやうに笑つた。

源爺は禮がはりに酒を御馳走になつて、夜が更けてから吹荒ぶ風のなかを月光を踏んで又町へ歸つて行つた。

源が歸つてしまうと、孝治は不思議さうに音の顏を覗きに來る傭女達を追拂つて、音を爐の向ふへ坐らせた。そして伊藤と二人て物靜かに彼の不心得を訓して聞かせた。

「お前達の部落ぢやどうか知らねえが、一旦かうして俺んとこへ連れて來られた以上は、もう死ぬまで此處にゐてしつかり働かなくつちや可けねえ。生れは何んでも、お前はもう立派な日本人なんぢやねえ

か。」などゝ云つて孝治は眉をぴりぴりさせながら嚙んでくゝめるやうに云つて聞かせた。

音はそれを聞き分けたのか、聞き分けないのか、その時になつても幌別へ歸してくれと云つて聞かなかつた。そし　力なげに啜泣きながらふとこんなことを云ひ出した。

「私、きのふ私のお父つさんに逢ひました。お父つさんはどうしても幌別の先生のとけえ歸えれつて、私を連れてつてくれたてすよ。」

「嘘を云つちやいけねえ。お前にやお父つあんがゐる譯はねえ。お父つあんはとうの昔死んぢまつたと云つたぢやねえか。」孝治はいたしめるやうに鋭く云つた。

「いゝえ。死んぢまつてもお父つあんはゐるてす。ゆふべ私を連れに來て吳れたてす。」音はさう云ひながら眼を据ゑて恨めしさうにじつと孝治の方を瞻めた。

孝治は荒れ狂ふ風の音に氣を取られながらいつまでも音の顏を眺めてゐたが、その不思議な言葉と云ひ、妙に引緊つた物凄い顏つきといひ、いつもの音とはまるで違つてゐるて、何といふ所因もなく彼はぞつとした。ひよつとしたら餘り窘められたので氣が觸れて、死んだ父親の幻影でもまざまざと見てゐるのではあるまいかと思ふと、自分等とはまるで血の違つてゐる人種だけに彼は身の毛のよだつやうな恐怖に襲はれずにゐられなかつた。

何事も明日のことにして、その晩はそれて話をきつてしまつた。腹が空いてゐるだらうと云ふので、お峯はお櫃に殘つてゐた飯をすつかり拂つて彼に與へたが、彼は昨日から一物も口にしなかつたものと見えてまるて餓えた犬のやうに歯を鳴らしながら貪り食つた。そしてその儘又納屋へ連れてゆかれて、

そこで傭女達の見張つてゐるなかへ無理やりに寢せられた。初めの間はなかなか寢つかれないかして、頻りに敷蒹をがさがさ云はせてゐたが、そのうちいつともなくやつとぐつすり寢ついてしまつた。

四

その翌日から音は餘儀なくまるつきり生活法を變へさせられてしまつた。荒くれた耕作地の勞働には到底續きさうな見込みもないので、今度は母家の方へ呼ばれて、そこで傭女達と一緒に家のなかの用事に追ひ使はれた。主な役目は子供達の守りで、その暇々には繩なひやら、家具の掃除やら、解きものゝやうなものまでさせられた。そんな仕事をさせてみると。彼は女のやうに小器用で、どんな面倒なことでも倦まず撓まず丹念にやり續けた。殊に薪を割つたり、木を削つたりすることには特別の技能を持つてゐて、女達で出來ないやうなことは皆彼がひとりで引受けてやつた。

「こんな事なら、早くから此方の仕事ばかりさせときやよかつた。」お峯は今更のやうに孝治の顏をみながらこんなことを云つたりした。事實、狂暴な出面達から遠ざかるにつれて、彼は漸次と又もとの音に歸つて行つたのであつた。

その日、孝治はもうそろそろ馬の交尾期になるのでその用務を帶びて農場から四里ばかり離れたサンネップの牧場へ出懸けて行つた。耕作地の方では二三日前から草拔きが初まつてゐるので、伊藤も寅吉も朝早くから馬で驅け步いてゐる。傭女達も大きな布袋を首へかけて、がやがや騷々しく喋舌り合ひながら近まわりの麥圃の方へ手傳ひに出て行つてしまつたので、母家ではお峯と、おもとと、音とこの三人が寂しく留守をまもつてゐた。

お峯は間もなくやつて來る衣更への準備をする爲めに、午過ぎになると爐傍へ行李や針箱を持ち出してせつせと縫ひものをしはじめた。總領の安治は庭へ出て晉を相手に土いぢりをしながら温なしく遊んでゐたが、まだ乳離れのしない娘のおかねの方は健めにそこらを匍ひ廻つて少しの間も油斷が出來ないので、到頭お峯は晉を呼んでその子を背負ぶせて戸外へ出してやつた。

晉は泣き喚くおかねをあやしながらそこらをぶらぶら歩いてゐたが、いつまでたつても泣き止まないので、安治の方はおもとに任せて、自分はその儘ぶらりと街道の方へ降りて行つた。

かうして日に一度づゝ赤兒を負ぶいながら山野の間をあてもなくさまよひ歩くのが彼にとつては最も樂しく、そして最も自由な時なのであつた。二六時中、他人の手で制縛され、驅使されてゐる體にも、かう云ふ時には何とも云へない輕い、安らか氣持ちが胸一杯に流れてきた。彼は我を忘れて、ついうかうか一里も二里も先の方まで歩いて行つてしまうことなどもあつた。そして耕作地に近い方へ行くと、ともすると近邊の農場の惡たれ共や出面などが石を投げつけたり窘めたりするので、彼はその危險を避けて態と人氣離れた山地の方へ入つてゆくのを常とした。落葉松の試植林や、サルマナイの放牧地や、それからシユブカからメムオロ嶽の方へ展がつてゆく曠漠とした大傾斜地などは彼が最も好んでさまよひ歩く處になつてゐた。

その日も彼はシユブカの河盂から熊笹の生ひ繁つた山裾を落葉松の試植林の方へ登つていつた。薄寒い山陰から縞めをたてゝ規律正しく植え込まれたその林のなかへ入つてゆくと、青々と芽含んだ嫩葉の匂ひが俄かに息づまるやうに流れて來て、鱗だつた樹木の肌にも、葉陰を洩れる細かい日光の斑にも、

それから思ひ出したやうに起る枝摺れの音にも、眞實春らしい力が生々と動いてゐた。音は伸々した無邪氣な顏をして、節面白い鼻唄を唄ひながら樹から樹の間をぶらついて歩いてゐたが、そのうちに今迄脊なかでぐづつてゐたおかねもいつともなくすやすやと寐入つてしまつた。そして彼は知らず識らずの間にひとつの試植林を出はづれて、とある小高い展望の廣い丘陵の頂に出てゐた。

黃がゝつた明るい午後の日光はメムオロ嶽の中腹から一氣に流れ下つてゐる大傾斜の面にも、それを越えて遠く地平線の彼方まで廣がつた原野の面にも燃えるやうにぎらぎら輝きながら照り渡つてゐた。空は飴色に淡く霞んで、此頃は殆んど毎日のやうに吹き續けてゐる烈風が去年のまゝの枯茅や、雜草の叢を縱横に蹴散らしながら颼々と暴れ狂つてゐる。すぐ眼の下に展がつた耕作地には唯一筋シユブカの流れが銀蛇のやうに幾曲りか迂曲しながら遠白く地を劃つて、ぽうつと立騰る土煙りのなかには彼方でも此方でも忙はしげに立働く出面の群が蟻のやうに點々と蠢めいてゐる。人聲や馬の嘶きは聞えなくても、野の勞働の激しさは時折きらりきらりと細かく光つてみえる農具の刄でそれと知られた。

振顧つて奧谷にあるサルマナイの放牧地の方を眺めると、そこには未開地らしい荒寥とした高原が續いて、山の突角から斜に吹き上げてゆく風がもくもくと叢をなした雜草の葉裏を眞白に吹き返してゐる。針葉樹林の方へのぼつてゆく青草の原には幾條となく眞黑な地隙が割れ込んで、見るから寂しげな牛の群がまるで自然そのものゝやうに三々五々動きもしずにじつと點在してゐる。つい此間までは積雪に埋もれてゐた國境の連嶺にもう黑紫色の地膚が透いて、唯シユブカトウシヌプリだけが今猶ほ二つの峯に永遠の雪冠を頂きながら聳然として雲烟の彼方に屹立してゐるのである。

音は少時するとまたそこを下りて、今度は谿をひつと越えて放牧地の方へ入つて行つた。相變らず鼻唄のやうな、子守唄のやうな妙な唄を低聲に唄ひつゞけながら白樺の疎林を横ぎつたり、狹い地隙の間を縫つて歩いたりしてゐたが、とある丘陵の裾まで來かゝると彼は突然、何ものとも知れぬ凄まじい物音にはつと度膽ァ拔かれた。まるで傷ついた野猪でも暴れ廻つてゐるやうに行手の凹地では灌木の叢をびしりびしりと蹴散らし踏みにじる恐ろしい響きが聞えてゐる。そしてその響は刻一刻に彼の方へ近づいて來るのであつた。

音は蒼くなつてその儘そこへ立ち悚んでしまつた。と、その途端にすぐ鼻先の高い草叢から突如一頭の大牛が眞驀にぬつと跳び出して來た。續いて又一頭、今度のは前のよりも更らに大きい黒斑の獰惡な顏をした奴で鬪ひを挑むやうに大角を振り立てながら勢込んで躍り出して來た。

音は魂消るやうに

「ウヽッ。」と叫んで、無我夢中で後へ道を開いた。そして一瞬の猶豫もなく殆んど無意識的に身を飜して起伏のゆるやかな高原の方へ逼げやうとした。と、その時、後から出て來た方の牛は何と思つたか、ついと方向をかへて、前の牛はその儘放置つて置いて、今度は音の後を追驅けはじめた。

音はそれをみるともう生きた心地もなくなつて、ともすると足に搦みつく草に躓きがら夢中になつて逼げだした。小一町も逼げてからそつと振顧つてみると、牛は全身の肉を水袋のやうによたよたゆるがせながら少し首を下げ加減に角だけを眞向に振り立てて猶ほも執念く後を追つて來た。

音はぞつとして泣聲を揚げながら又一生懸命に驅けだした。もう眼先もなにも見えなくなつて道も撰

ばず力の限り駈けに駈けたが、そのうちにふと何かに足を取られてふいに體が宙に浮いだかと思ふと、彼はその儘何處とも知れぬ高い崖からくるりと眞逆樣に轉落ちてしまつた。そして强たゝか何かにづしんと打突かつたやうな感じがして、それつきり彼は氣が遠くなつてしまつた。…

耳の傍で焦りつくやうに激しく泣き叫ぶ赤兒に呼び生けられて、ふつと我れに歸ると、彼は深い地隙の底の熊笹のなかへ横たはつてゐるのであつた。初めは身動きも出來ないやうな窘迫した苦痛が體ぢうに掩ひかゝつてゐたが、そのうちに漸次と明瞭な意識が歸つて來て、彼は手足の痛さを耐えながらそつと半身起き上つてみた。不思議に大した怪我も受けなかつたものと見えて、體は彼の思ひ通りに自由に動いた。

彼はやがて自分では無意識に兩手で負ぶい帶を解いて、泣き喚くおかねをそこへ降ろした。そして半纏のまゝ引寄せて膝の上へ抱き上げてみると、その突差、彼は懼えたやうに突如聲を放つて思はず抱いた手をゆるめた。

おかねは見るも傷ましい姿になつてゐた。轉げ落ちた際に岩角へでも打突けたものと見えて薄い毛の生へた彼女の蟀谷の處には親指ほどな裂傷が出來てゐて、そこからは血潮が脈打ちながらむくむくと流れて出てゐる。そしてその血は半纏の襟を傳つて、彼の二の腕から手の甲へ生温くねとねとゝ流れ落ちて來る。そのほかにも體の何處かに傷が出來てゐると見えて、おかねは小さな手を細かく拘攣させながら今にも息が絶えさうに聲の限り泣き續けるのであつた。

音は喪心したやうに眼を据えて途方に暮れながらぼんやりおかねの顏を眺めてゐた。と、その時、崖

の上にはまださつきの牛がゐるらしく、焦だゝしげに草を踏みにじる音と、唸る聲が風のどよみの合間にきれぎれに聞えて來た。音はそれを聞くと又慄へ上つて、何を考へる餘裕もなく唯泣き聲をたてさせ度くない一心に、いきなり血を土で汚れた手の掌でおかねの口をしつかり壓し塞いだ。おかねは手足を力なく悶えながら頻りに彼の膝の上で蠢めいてゐたが、やがて顏ぢうの肉をぴりぴりひきつらせて、そのまゝ息を引くやうに漸次と泣き聲をひそめた行つた。そして再び音が手を退けた時にはもうまるで動かなつなつて、彼の膝へぐつたりと仰向けに首を垂れてしまつてゐた。

彼は崖の上の方へ氣を取られておどおどしてゐたが、その時ふと自分のしたことに氣が付いて、いきなりおかねの體を抱き起こしてみた。眼は宙にひきつて、口を斜めにだらりと引開けて、頰には血みどれな手形のついたその顏がまるで惡鬼のやうに見えた。音はひと眼みると絕望的な泣き聲を振絞りながら、おかねをそのまゝ鞠のやうに傍へ抛出して、突如立ち上つた。そして夢中で熊笹の間を這ひぬけて、やつと袋の口のやうになつた處から高原の面へ這ひ出してきた。

さつきの牛はもうそこいらにはゐなかつた。夕陽はいつか落林に包まれた山の一角に近づいて、陰になつた草原には底寒い風が颯々と吹きみちてゐる、遠い原野の果てはもうそろそろ紅い黃昏に色づいて來た。

音は何もかも打忘れて、夢遊病者のやうにふらふら步いていつた。橫幅の廣い愚鈍な顏も蒼く緊縮して、耳の下まで垂れ下つた穢らしい髮の毛は蓬々と風の吹くに任せてゐた。時々反射的に肩をふるはせながら力なく啜泣いたが、その聲の底には無智な恐怖と絕望が響いてゐるばかりであつた。彼はどうし

やうと云ふ考へなどはまるでなく、寒い風に追ひまわされながら人氣のない高原の面を矢鱈と彷徨して歩いてゐた。

もう日も全く落ちて、暗い夜の翼が山地にも原野にも一面に掩ひかゝつてから後のことである。音の姿は突然農場のすぐ下の芥捨て場のところへ現はれた。彼はそこから防雪林のなかへ忍び込んで、大きな水楢の樹陰に身を隠しながら一心に農場のなかの様子を覗つてゐた。出面達はもう悉く畑から引上げて來たので、ぼやけたやうな小暗い光のながれ出た小舍々々のなかにはいつものやうな騒々しい笑ひ聲や、怒罵の聲が溢れてゐた。

音は少時經つと何と思つたか樹陰を出て、こつそり這ふやうにしながら農場のなかへ入つて行つた。そして納屋の陰から態々遠廻りをして、穀倉と農具小舍との庇間のやうな處をぬけて、やつと厩舍の裏のところまで忍び込んだ。そこは彼が毎朝日が出るまへにひとしきり薪を割る處になつてゐるので、厩舍の軒下に釣つた小棚の上には鋸や鉈や古繩などが一杯にのせてあつた。彼はなるべく音をたてないやうに古繩のなかを手探りに掻き探つて、やつとその下からマッチの箱をとりだした。それを懷へ入れると、その儘又もと來た道を穀倉の方へ引返して、四邊の氣勢ひを伺ひうかがひさつきの防雪林の方へ出てゆかうとした。

納屋の裏へかゝると突然眞闇なゝかゝら

「誰だッ?」といふ聲が訝しむやうに叫んだ。それは聞き覺えのある傭女の聲だつた。深夜になると、毎夜のやうに彼等が男の出面達と出逢ひをする場所になつてゐるので、そこらには二シヶ位づゝ積んだ

薪の蔭に藁の束や、古俵などが置いてあつた。

音は思ひがけない叫び聲を聞くと、はつとしてそのまゝそこへ立悚んだ。そしてじつと闇のなかを瞻めながら様子を伺つてゐたが、がさごそと藁を踏む足音が此方へ近づいて來るやうなので、彼は突如ばたばたと驅け出した。そして廣庭を斜に突切つて、後をも振顧らずに一目散に防雪林のなかへ遁げ込んでしまつた。

それから一時間ばかりたつと、音は再びさつきの高原へ引返して、闇に吹き荒ぶ物凄い風に揉まれながらおかねの死體を置いた地隙を探して歩いてゐた。それと思ふ邊まで辿りつくと、彼はきよろきよろ四邊を眴はしながら少時の間ぼんやり踞んでゐたが、やがて意を決したやうに地に伏してそつと懐からマッチを取出して突如さつと摩つた。第一の火は空しく風に呑まれてしまつた。第二の火も危く消えさうにふらふら紅くたゆたつてゐたが、彼はそれを兩手の掌で庇びながら、叢だつた枯茅のなかへもつて行つた。枯れきつた茅は火を吸ふやうにめらめらと燃え上つたが、ひと吹きさつと吹きつける風に弄ばれて云ひ甲斐もなくまたふすりと消えてしまつた。何度試みても無駄だつた。しまひには彼も焦れだして一束の枯れ草を引抜いて炬火のやうに幾捻りにも捻つてそれへ點火した。そして今度は一瞬の猶豫もなく四邊に動いてゐる枯茅の根から根へその火を移して廻つた。

火はやがて嵐のやうにぱつと勢よく燃えあがつた。風が吹きつける度に火先は却つて低く地の面を嘗めて、乾きゝつた草叢は瞬くうちに先から先へと燃え廣がつて行つた。それと同時に四邊は俄かに眞晝のやうに明るくなつて、バリバリと燒け落ちる物音が靜かな高原の夜氣の底に物凄く響いて行つた。

音はその凄まじい焔をみると却つて恐ろしさに慄へ上つた。突如そこらにあつた脊丈の高い一莖の枯草を引抜いて、その火先を遮るつもりで夢中なつて煙のなかを叩いて廻つた。火の粉は忽ち枯草の先から煙花のやうに舞ひ上つて、渦巻く風にあほられながら彼方此方へ飛び散つて行つた。もう消さうにも手のつけやうがないのを見ると、彼はいきなり身を飜へして何處へともなく闇のなかへ姿を隱してしまつた。

五

サンネップの牧場へ行つた孝治はその時牧場主の家の奥座敷で五六人の人達と圓坐になつて酒を飲みながら雜談に耽つてゐた。折よくそこへは山林の境界爭ひで町から見知り越しの辯護士が來合はせてゐたので、近邊の飲み仲間は忽ち呼び集められる、製材所の技手、巡査、牧場づきの獸醫、そんな手合が集まつて來たので、酒宴はいつになく彈んで、孝治も思はず歸る時を忘れてしまつたのであつた。

話題はそれからそれへと移つていつか山火のことに落ちて行つた。

製材所の技手は自分の壇場へ入つたといふやうに得意らしく手を振りながら、

「いや、山火と云へば全く思ひ出すよ。えらかつたのはそれ一昨年の今頃、幾春別の奥で起つた奴ちや。あの時分僕はまだこの商賣を初めんで、あそこの炭坑のこつぱ技手をやつとつたんだ。ぢやからあの山火に就いちやすつかり知つとるさ。」と、云つて、その凄まじい山火の様を物語り出した。

三晝夜の間に廣袤十四里に亘る森林が燃えつくしてしまつた悽慘な光景はやがて皆の眼の前に異常な興味をもつて喚び返されたのであつた。山番の小舍で親子三人の樵夫が悲慘な最後を遂げた話、烈風に

あほられて高空へ舞ひ上つた灰が札幌から遠く日本海の海上まで天日を晦くした話、附近の村の者がその山火のために到頭二人まで發狂してしまつた話、そうした話の數々は技手の口から今みるやうにまざまざと語り出されたのであつた。

話半ばに便所へ立つた巡査は何をしてゐるのか暫らく坐へ歸へつて來なかつたが、やがて土間つゞきになつた蒸乳所の方で突然、

「あゝ、山火だ。山火だ。」と、叫ぶ彼の聲が聞えた。

一座のものは話の腰を折られて、思はず顔をみあはせながら口を噤んだ。

「山火だちうぜ。ツケが惡いな。」牧場主は耳早く巡査の聲を聞きつけて肥つた腹を重さうに突き出しながらやをら起ち上つた。皆もそれをきつかけに

「どれ、どれ。」と云ひながら我勝ちに窓際へ立ち集まつた。

西洋風の硝子戸を上げてみると、丁度そこからは眞西に當つた空が一帶にぼうつと紅るんでゐる。火元の上と思はれる邊の雲は紅蓮のやうに物凄く燒け爛れて、眞黑に描き出された山の頂線の彼方には火先は見えずに烟だけが濛々と立騰つてゐる。

「こりやえらい山火だ。何處ら邊だらう。ひよつとしたら俺の農場の近邊ぢやねえかしら。」孝治は稍不安らしく呟いた。

「笑談云つちやいけねえ。シユプカよりずつと北へ寄つてゐらあ。ピリカベツの官林のあたりかな。」牧場主は事もなげに云つた。

「さうさね、まあその見當だね。」技手もその言葉に相槌を打つて、「なにしろ風が東へふれてるんぢやからあなたの農場の方は安全ですよ。」

「併しこの風ぢや油斷が出來ねえ。ほんとによく燒けてゐやがるなあ。」孝治は家の方のことを考へながら益々不安らしく云つた。

「この風ぢやひと山やふた山ぢや收まらねぇね。惡い時に燃え出したもんだ。」牧場主はその儘坐に歸つて、「さあ、もうちつと飮まうぢやねぇか。自分達の持ち山が燒けるんぢやあるまいし、はゝゝ、そんなに心配することは要らねぇ。」

「はゝゝ。おほきにさうぢやね。他の山なら燒けるだけ燒けたがえゝさ。材木が高くなるのぢやからね。」技手も笑ひながら座についた。

孝治は一番あとまで窓際に立つてゐたが、やがて

「五月にもなつてゐながら今夜はまたえらく冷えるぢやねえか。」と、つかぬ事を云ひながら落着かない樣子をして自分の席へ歸つた。

そこへ巡査が戶外から慌たゞしく驅け込んで來て、座敷の入口へ突立つたまゝ、

「小倉さん。大變ですぜ。あの山火はシユプカださうですぜ。」と、息を彈ませながら云つた。

「えッ、シユプカだ。」孝治はまるで電氣にでも打たれたやうについと起ち上つた。

「今裏山から歸つて來た牧夫の話ぢや何んでもサルマナイの谿が燒けてゐるさうです。裏山の頂邊からよく見えるさうですよ。」

「そりや大變だ。かうしちや居られん。」孝治は眞蒼になつて脣の色まで變へながらいきなり傍に置いてあつた外套を取つて背廣の上へ着た。

皆はそれでもシユブガが燒けてゐると信じなかつた。方角が北へ寄り過ぎてゐることを楯にとつて孝治を引留めてみたが、彼はどうしても聞かなかつた。

「私はちつと氣がゝりなことがあるから、兎に角これで失敬します。」と云ひ捨てて、その儘挨拶もそこそこにして戶外へ飛びだして行つた。そして廣庭の隅の廐舍へ行つてそこに繫いである自分の馬の口綱を解くと、ひらりとその脊へ跨つて、慌だゞしい鞭の音を殘しながら砂塵の舞ひ狂ふ眞闇な街道を農場の方へ眞毿に飛ばして行つた。……

四里の夜道をひた驅けさせてゆくうちにも彼の不安は刻々に增大して行つた。やつとサオロの峠に差懸つて、とある山角を越えると、彼は思はず絕望の聲をあげない譯にはいかなかつた。今まで心に描いてゐたいろいろな空賴みはその一瞬の間に消え崩れて、恐ろしい事實は今更ながら酷薄な脅威をもつて彼の眼前に展がつて來た。そこからひと眼に見渡たされるシユブカの耕地は山火のために眞晝を欺くやうに明々と照らし出されて、シユブカ川がまるで熖の河のやうに一線くつきりと地を劃いて流れてゐる。巡査が告げたやうにサルマナイの谿間から燒けはじめたものと見えて、そこらは眞紅な殘火に掩はれ、落葉松の試植林は今物凄い猛火の海と化して、火先はもはやビリカベツの裏山の方へ向つて炎々と燃え登つてゐるのである。

農場近くなると異樣な物音がばちばちと聞えて、灰と煙は容赦もなく渦卷きながら眞向に吹きつけて

來る。馬は妙に神經的になつて、鬣までびつしより汗に濡れながら逸りに逸つて行つたが、しまいには煙が咽を塞いで息苦しくて到底先へは進めなくなつて來たので、彼は已を得ず手綱を控へてもと來た道へ引返した。そしてシユプカの河畔からはるかに遠廻りをして、やうやくのことで農場まで辿りついた。

母家へあがつてみると、廣庭にも煙が薄く立迷つて、山火の餘映を受けた氣味の惡いそこらの明るみは人の氣勢ひもなくがらんと靜まり返つてゐる。彼は戸口のところで馬から跳び降りて、そこから、

「おい、誰れも居らんのか。」と、焦だゝしげな大聲で怒鳴つた。

と、次の間の板戸がさつと開いて、いつになく數多いお燈明を上げた佛壇が見えたかと思ふと、その蔭からは氣を取亂したやうなお峯がおろおろしながら飛び出して來て、

「まあ、あんた。大變な事になつちまつて、……今出面の彌一が馬で迎ひに行つたんだが、途中で逢やしねえかね。」

「逢はねえ、そんな事はどうでもいゝ。伊藤や寅は何處へ行つてるんだ?」孝治は急ぎ込んで云つた。

「あの人達やさつきから出面達を連れてシユプカベツの小舍へ行つてます。……ほんとに私やまあ何うしやうねえ。あんたの留守にこんな事になつちまつて。……」お峯は意氣地なく涙含みながら、良人の顏を見たので急に氣がゆるんだやうにぐとぐとゝ訴へはじめた。

「今そんな泣言を云つてゐ場合ぢやねえぞ。馬鹿な阿魔だなあ。俺あこれから山へ行つて來るから、家の方を氣を注けて、子供達に怪我でもねえやうにしつかり留守をしてゐろよ。」彼はかう云ひ捨てゝ突如裏口から納屋の方へ馳けて行つた。そしてそこにあつた手斧をとつて手早く腰へぶらさげながら、門口

に放してある先刻の馬に跳び乘つて、再び煙に包まれた街道をシユブカベツの小舍の方へ一散に駆らせて行つた。

ビリカベツへ入る間道のところまでやつて來ると、もうそれから先は到底馬を入れる見込みがなかつた。狭い谿間は一面に熱した煙に包まれて、獰猛な火焔は奔馬のやうに荒れ狂ひながら峯から峯へ傳つてゐる。そこらは晝猶ほ暗い蝦夷松の密林なので、下草の上を這つてゆく火先はあとからあとから樹脂の多い枝葉に燃え移つて、狂風が吹き誘ふ度に、凄まじい轟音をたてながら右往左往に燃え廣がつてゆく。樹木の節の彈ぢける音、大枝小枝の燃え落ちる音はさながら激烈な銃戰のやうで、狂暴な自然力は人間の力の果敢なさを嘲笑ふかのやうにいかにも豪放に思ふさまその手を廣げてゆくのであつた。

孝治は恐ろしげに嘶く馬の轡を取つて、樹の燒ける匂ひに咽せながら道もない山腹の傾斜を大急ぎで小舍の方へ登つて行つた。唯もう無我夢中で、死を怖れるなどゝ云ふ觀念は殆んど彼の胸奥には蟠つてゐなかつた。そしてやつとのことで小舍から半里ほど手前の平地まで辿りつくと、さすがの彼ももう渾身綿のごとく疲れ果てゝ突如手綱を投げ棄てゝ草の上へばたりと腰を下ろしてしまつた。

谿間から吹き上げて來る焔はもうその平地の草にも燃え移つてゐた。風に追はれる儘に火先は地面に伏してべろべろとそこいらの草を嘗め盡くしながら又先の谿谷の方へ瀧津瀬のやうに勢よく流れ落ちてゆく。草叢に巣くつた小禽は慌てふためきながら思ひがけない處からばたばたと舞ひ上つて、明るい火光に羽裏の白毛を照らされたかと思ふと、忽ち火の粉や煙に紛れて何處へともなく消え去つてしまう。

そこへふとすぐ間近の森林の中から魂消るやうな人間の叫喚が起つて來た。その聲には今にも火焔の

うちに卷き込まれさうな危險を豫知させる激越な調子があつて、三聲ほど續けさまに聞えたかと、思ふと、とある森蔭から明るい平地の面へ十人ばかりの人影がばらばら跳び出して來た。

「おうい、早く遁げろうい。風が變つたぞ。」と、死物狂ひになつて絶叫しながら眞先に此方へ驅け出して來るのは紛れもない伊藤だつた。あとは出面達らしく手に手に鋸や斧を引摺りながら息せき遁げだして來る。

その人影が近づくと、孝治は我れを忘れて起き上りながら、

「おい、伊藤。伊藤ぢやねえか。」と叫んでみた。

その聲は火の叫びと、風どよみに掻き消されて、彼等の耳には入らないらしかつたが、やがて四五歩の間に迫ると、今度は伊藤の方から孝治の姿を見出して、

「おう、旦那。旦那。」と、嬉れしさうに叫びながらいきなり彼の前へ飛んで來てすつくと立止まつた。

「まあ、旦那。ど、どうして此樣な處へ……。」さう云ふ彼の聲は激しく彈んでゐた。

「おい、伊藤。飛んでもねえことになつちやつたぢやねえか。何んだつて又こんな日に山へ火を入れたんだな。」孝治は憤怒と絶望に慄へながら突如彼を詰問した。

伊藤はそれを聞くと全く思ひもかけないことを云ふやうに慌てゝ、

「いや、旦那。笑談を仰有つちや可けねえ。私達だつてこんな日に何で山燒なんかするもんか。皆に聞いてみたつて分りますさあ。全くひとりでに起つた山火事なんで、……」

「手前こそ笑談云ふねえ。山林なら兎も角、サルマナイからひとりでに火が起る筈があるもんけえ。」孝

治は語氣鋭く云つて、「とにかくそんなことは後にして、シュプカベッツの小舍はどうした?」

「もうとつくの昔燒けつちめえました。御覽なせえ、もうピリカベッツの官林の方まで火が廻つてるんですもの。」

孝治は遠い峯の方を眺めながらぼんやりしてゐたが、氣ぬけのした聲で、

「さうして寅吉はどうした?」

「今迄一緒にゐやしたけど、ばらばらになつて遁げ出したんで何方へ行つたか分りません。何しろあの通り風が變りだしたんで、此方の命が危ぶねえ始末なんですからね。多分下の道からシュプカの方へ遁げたんべね。」

孝治はもう一言も口をきかなかつた。

伊藤の云ふ通り一帶の平地には風が變り出したので、火先は漸次と此方へ向つて吹きつけて來た。熱を含んだ烟は灰と一緒に濛々と渦卷いて、とても眞正面に向いては立つてゐられない。今しがた伊藤達が跳び出して來た森林にももう火が入つたと見えて、黑い樹蔭からは焔が低くめらめらとほの見えて來た。今迄じつとしてゐた馬はその時突然一聲高く嘶いて、棒立ちに立ちながら眞闇な後の樹立の方へ眞驀に遁げて行つた。

「旦那。旦那。何をしてるんです。早く遁げないと危うがすぜ。」伊藤はうつとりしてゐる孝治の肩を突いて、その儘後を振顧りふり顧り一足先に驅け出した。出面達も生命が惜しいと云ふやうに我勝ちにその後を追つた。

孝治は一番後まで殘つて、何と云ふ考へもなく唯ぼんやり火の勢を凝視してゐたが、やがて耐らなくなつて到頭ばたばたと足に任せて遁げ出した。

フシコナイの高原まで來ると、彼等はやつと安心して、互に名を呼び合ひながら一團に落ち合つた。そして誰も彼も自分の體を持て扱つてゐるやうに苦しげに喘ぎながら薄闇い草原を辿つてゆくと、先に立つたひとりの出面は突然、

「何かゐるぞッ。」と、叫んで、慴えたやうにばつたりと立止まつた。

皆はそれと一緒にそこへ立悚んで、胸を躍らせながらおづおづ行手の原を透してみた。空から反射して來る薄紅い山火の光のなかには草原の葉といふ葉が波のやうにざわざわと動いて、彼等から一町ばかり離れた處に何者か異樣な怪物の姿が黒く影のやうに佇立してゐる。

「旦那の馬ぢやねえか。」誰れかゞ半信半疑で呟いたが、それに答へるものはひとりもなかつた。そしてじつと眼を据ゑてみると、黒影は三つにも四つにも重つてゐて、それが漸次と此方へ蠢めいて來るにつれてしまひには夥たゞしい數になつていつた。

皆は默つて息をつめてその姿を凝視してゐた。漸次と近寄つて來るのを見ると、それは思ひもつかぬ牛の群だつた。山火に追はれて、サルマナイの放牧地の方から路づたひに遁げて來たものと見えて、いづれも呑氣さうに草を食みながらのそりのそりそこらを彷徨して歩いてゐるのであつた。

「何だ、馬鹿々々しい。牛つこでねえか。」眞先に立つたさつきの出面は忌々しさうに叫んだ。それを聞くと、皆は期せずしてくすくす笑ひ出したが、その聲は恐怖に張詰めた彼等の胸へ一味の安慰を與へる

光明のやうなものであつた。

彼等は又道を急いだ。小倉の農場に屬する山林はもう燒けるだけ燒けてしまつたので、彼等はそこから空しく農場へ引上げるより外はなかつた。出面達はやつと自分の體に歸つたやうに平常の調子に返つて、火の見えるシュプカベッの谿間の方を振顧りながら荒々しい土語で喧しく話をしはじめた。「山燒きもやんねえのに、あんだつてこんなええれえ山火事がおつぱじまつたんべねえ。」皆は異口同音にそれを訝しんだ。いろいろな臆測は出たが、遂にその怪火の原因は誰れにも分らなかつた。

シュプカの河盂へ下る急坂の頂へ來ると、そこから見える一望の耕地は山火が遠く裏山の彼方へ廻つたゝめにもう眞闇になつて、吹き荒ぶ烈風の音ばかりが闇い原野の方から蓬々と吹き上つて來た。孝治と伊藤とはもう一度後を振顧つて、メムオロの方へ燃えひろがつてゆく猛火を眺めながら少時のそこへ佇んでゐた。疲勞の後の行き端のない絶望は彼等の顏を物凄く染めてゐた。

六

農場へ歸つて來ると、孝治は何よりも先づそこで起つてゐる異變に驚かされた。

爐端にはいつになく四五人の出面が上り込んで、何事か聲高に云ひ罵つてゐる。お峯は頻りに啜り泣きながら甲高な聲でそれに答へてゐて、戶口にも裏口の棧窓の處にも傭女や出面達が打群れて家のなかを覗き込みながらひそひそと耳打ちをしあつてゐるのである。

彼等が歸つてくるのを見ると、戶口にゐた出面達はものをも云はずにすつと路を開いた。孝治はそのたゞならぬ有樣を訝しみながら伊藤と一緒に急いて家のなかへ入つて行つたが、彼の姿が見えるとお峯

はいきなり上框へ飛び出して來て、
「あんた、大變なことが出來たよ。おかねがゐなくなつちまつたんだ、おかねが燒け死んぢまつたんだよ。」と、まるで狂氣のやうに叫んで、その儘わつと人目も恥ぢずに泣き沈んでしまつた。
「えッおかねがどうしたと？」孝治は忽ち釘づけにされたやうにそこへ突立つて、自分の耳を疑ふやうにきよとりとした顏になつた。
「おかねが燒け死んぢまつたんだよう。」お峯は嗚咽を噛みしめながら同じことを幾度となく繰り返すばかりだつた。
　孝治はやつと我に返つてじつとお峯の方を睨みつけながら立悚んでゐたが、忽ち今にも打つてかゝりさうな物凄い形相になつて、
「だから云はねえこつちやねえぢやねえか。あれほど云ひ置いたのにうかうかしてゐやがつて、つッ、仕樣のねえ阿魔だッ。」と怒鳴りまわして、いきなりづかづかお峯の方へにじり寄つて行つた。
　その時、薄暗い隅の方から顏一面に白い布を卷きつけた男がむくむくと起きあがつて來た。よく見ると、それは寅吉だつた。
「叔父さん、叔父さん。」と、呼びかける聲もまるで別人のやうに嗄れ果てゝゐる。
「や、寅だな。お前どうしたんだ？」孝治はひどく吃驚して叫んだ。
「どうもかうもない、私やこんなに燒傷をしてしまつただ。」彼は眼も鼻も見えぬその顏を右左に動かしながら云つて、「そんなことよりおかねが大變なことになつちまつたんだ。叔父さん、俺もう何んて云つ

ていゝか、……。」と、云ひ澁りながら手探りにのそのそ上框の方へ這ひ出して來た。山火の灰て汚れた彼の體からは藥のかはりにつけた味噌の匂ひがぷんと匂つてきた。

それをきつかけに爐傍へ集まつた出面達は各自我れ勝ちに口をきつた。皆の云ふ處を綜合してみると、その出來事はかうなのてあつた。彼等はシュプカペッの小舍から遁げ出して伊藤達の一連れにはぐれてしまうと、間もなくとある谿間て四方から猛火に取圍まれてしまつた。寅吉が火傷をしたのはその時のことて、燃え落ちる大木の枝に顏を打たれたのださうて、彼の他にも今ひとり出面が足に火傷をしたのてあつた。彼等は殆んど決死の覺悟をして長いこと火焔と惡鬪したが、そのうちにどうした風の工合てか一方に血路が開けたので、やつと命からがらそこから遁れてゝ來た。そして彼等は再生の歡びに雀躍りしながらシュプカの河畔まで來かゝと、そこてばつたり音に出逢はした。音は山火の物凄さに發狂したものと見えて、薄暗い河原に蹲まつてぼんやり山の方を眺めてゐたが、彼等が近寄るのをみると何と思つたか突如河を渡つて脫兎のやうに遁げだした。漸う捕へて農場へ連れ歸つてみると、そこて端なくも悽慘な事實が確められた。音がその日の午後におかねを負ぶつて遊びに出たきり、その時まてまだ農場へ歸つてゐないことが初めて皆に知れたのてあつた。おかねはどうなつたらうといふ疑問は忽ち皆の間に湧き起つた。お峯はもう半狂亂になつて、いろいろ手を盡くして詰問してみたが、音はたゞ山へ置いて來たといふばかりて一向に埒がない。今その騷ぎて農場は湧き返へつてゐる最中だといふのてあつた。

孝治はその話を聞くとぶるぶる慄へだして、

「音は何處にゐる。音は何處にゐる。」叫びながらそこらをうろうろしてまわつた。

「旦那、音は納屋にゐるだあよ。どうも氣が狂つてるやうだから、少しの間靜かにさせとくべえと思つて、納屋へ寢させてあるだあ。」

孝治は直ぐさま納屋へ驅け込んで行つた。そこには隅の方に三分心の豆洋燈が點してあつて、その火陰の藁床の上には音が三人ばかりの傭女に圍遶されながら仰向けに寢てゐる。薄暗い火光に照らしだされた彼の顏は煤に塗みれて、蓬々と亂れた髮毛には穢らしい枯草の殘灰が處きらはず縺れついてゐる。だらしなく披げた着物にはおかねの血や土がどす黑くべつとり膠(こび)りついて、もうみるから野獸のやうな凄まじい形相になつてゐるのである。

孝治はひと眼みるとぎよつとして後から隨いて來た伊藤と思はず顏を見合はせた。

「おい、音ッ。起きろ。」彼はやがて息をつめて鋭く呼びかけた。

その聲を聞きつけると音はぽつかり眼を睜いた。異樣な輝きのある瞳でぢろぢろ彼の方を瞻つてゐたが、突如、がばとはね起きて、その憔悴えたやうな顏つきをしながら今にも遁げ出しさうな身構へをした。

孝治は我を忘れてその襟髮を捕へながら、

「こら、音。手前はおかねを何處へ置いて來たんだ？　さあ、それをぬかせ。嘘をつくとこの儘絞め殺ろしてしまふぞ」と、恐ろしい權幕で威嚇かしつけた。

音は息も出ないやうに押默つてゐたが、ふいにわつと絶泣しだした。

「こん畜生ッいくら泣きやがつたつて離しやしねえぞ。さあ、ぬかせ。おかねを何處へ置いて來た？」

孝治の眼もそれと一緒に恐ろしく据わつて、額には脂汗が流れて來た。そして頰の肉をぴちぴちひきつらせながら、頻りに返答を迫つてゐたが、音が唯泣くばかりでどうしても口をきかないので、到頭かつとなつていきなり彼の頰桁を續けさまに亂打した。

「旦那、旦那。そんなに手荒なことをしちや却つて云ひますめえ。私に貸して下せえ。私が上手に聞き出して見ますべえから。」伊藤はさすがに見るに見兼ねて二人の中へ割り込みながら前から孝治の腕を抑へた。そして強ゐて振り拂らうとするのをしつかりと抑へつけて、

「まあ、俺あに任せて下せえ。きつと聞き出してみせますから。」と、云つて、やつとのことで彼をなだめた。

伊藤はそれから長いことかゝつて諄々と音に說いて聞かせた。音も初めのうちは火がつくやうにひいひい泣くばかりで、彼の云ふ事などはまるで耳にもかけずに身を悶えてゐたが、そのうちに泣聲は漸次と弱つて、いつか力ない嗚咽に陷つていつた。伊藤は親爺のやうな口調でさまざまに說き慊かして、到頭彼がおかねをサルマナイの地隙に置いて來たことだけを確めた。

孝治は時を移さず農場に有りたけの提灯やら角燈やらを點させて、サルマナイへおかねを探しにゆく用意をさせた。農場はそれと同時に潮のやうに湧き立つて、好奇心に充ちた出面等は我れもわれもと廣庭へ集まつて來た。孝治はそのなかへ飛び込んでいつて、もしおかねを探しあてたものには幾らでも金を遣ると大聲で怒鳴り廻つた。

用意が整ふと、彼等はやがて音を先にたてゝぞろぞろ農場を出て行つた。お峯はどうしても一緒についてゆくと云つて聞かなかつたが、孝治はやつと寅吉に跡を引受け貰つて、息せき先へ立つた者共のあとを追つた。そして屠所の羊のやうにともすると力なく歩み澁ぶる音を怒鳴りつけながら彼等の先頭に立つて足早に歩いて行つた。提灯や角燈の光の瞬く異樣な行列はがやがや騷々しく喚めきながら街道から耕地の間を突切つて漸次とサルマナイの放牧地の方へ動いて行つた。

山地に沿つた道はどれもこれも山火の爲めに塞げられてゐるので、彼等は一旦シユブカの河原へ出て、そこから河に沿つて廻りに廻つて山へ入るより外には仕方がなかつた。で、殆んど一里に近い廻道をして、ごろごろ石の出た河原から漸う傾斜地へかゝらうとすると、今迄薄曇りにくもつてゐた空には怪しげな雲が何處からともなく低く垂下つて來て、ぱつたり風が死んでしまうと同時に大粒の雨がぽつりぽつりと落として來た。初めのうちはさして大降りになりさうでもなかつたが、暫らく歩いてゐるとやがて雨の脚はみるみる激しくなつて、四邊の草叢を打つもの音は刻々に物凄くなつて來た。

灯は腋の下へ抱へられたり、外套の裾へ隱されたりしたが、いつのまにか一つ消え、二つ消えして、到頭行列は全く夜の闇の底に呑まれてしまつた。それとゝもに四邊は俄かに流れ落ちる小流れの音や、雨の音ばかりになつて、身の毛もよだつような凄氣が惻々として迫つてくる。それでも彼等はサルマナイの方で明々と燃えてゐる殘火をめあてに、互に聲をかけ合ひながら一團になつて登つては行つたが、その殘火も全く消え落ちてしまうと、もうまるで方角さへ分らなくなつてしまつた。

さすがに勢ひ込んでゐた出面達もそろそろ不平を云ひ出した。しまひには暗闇のなかで諜しあひなが

ら孝治や伊藤に向つて激しい惡罵を加へはじめたが、と云つて今更一人二人づゝ群を離れて引返す譯にはいかないので、彼等は詮方つきて一歩一歩足さぐりに登つて行つた。そしてやつとのことで白樺の林を探しあてゝ、そのなかで一時雨宿をすることになつた。

沛然とした豪雨は一時間あまりも降りしきつてゐた。それが少しづゝ小降りになりはじめる頃にはいつかもう東の空にはほんのり曉が白みそめてゐた。白樺の樹膚はだんだんと明るんで來る、四邊の物の影は陰欝な灰色のなかやから刻一刻に朦朧と浮き上つて、間もなく人顔も見分けられるほどの朝になつてきた。

彼等は濡れしほれた着物の滴をきりながらやがて又林を出た。曉方の寒氣は腹の底まで浸み入つて、昨夜からの疲勞と空腹とが云ひ甲斐もなく足先へ搦んで來た。

サルマナイへ着いてみると凄まじい山火の勢ひは四邊一面にぞつとするやうな痕跡を殘してゐる。高原から山の絶巓に至るまで密林も草地も悉く眞黒な焦土と化して、地形までが昨日に變る著しい變動を示してゐる。夜來の雨で火はすつかり消えてゐたが、それでも生温いやうな焦げ臭い匂ひは雨後の大氣のなかにむしむしと立騰つてゐた。

彼等は一團になつて恐るをそるその焦土の面へ足を踏み入れた。まだ三丁と歩まない前に彼等はとある崖の下で忌はしいものゝ姿を見た。それは燒死した三頭の牛の死體で、いづれも毛皮は赤白く燒け爛れて、破裂した腹部からはまだ生々しい臟腑がべろべろ露出してゐる。さすがに荒くれた出面達も、その無殘な死態をみると胸がむかむかすると云つて、鼻を掩ひながら小走りに驅けぬけて行つた。

音はまるで喪心したやうな眞蒼な顏つきをしながら無理に引立てられて彼方此方と歩き廻はつてゐたが、そのうちにやつと見覺えのある昨日の地隙を發見して、袋のやうに廣がつたその入口のところへ立止つた。そしてこのなかだと云ふやうに默つて眼顏でみんなにおかねの處在を知らせた。

孝治は絶望を眼に現はしながらその入口の處へ突立つたが、やがて何を聞きとつたのかいきなり、「あゝ、おかねが泣いてゐる。ありや確かにあの子の聲だ。」と、うわの空でぶつぶつ呟いて、泳ぐやうな妙な手つきをしながら薄暗い地隙のなかへ入つて行つた。皆もそれに續いて入つたが、劫火はこんな狹い罅隙さへも見逭がさなかつたものと見えて、そこいらの熊笹や雜草の叢は大方燒け落ちて、その底には黑味を帶びた雨水がちよろちよろ音をたてゝ流れてゐる。

慘劇の行はれた場處まで來ると、孝治は矢庭にはたと歩を止めた。おかねの死體は昨日と少しも違はぬ位置に横たはつてゐて、眞黑に焦げた半軀の間から赤剝げになつた頭だけ現はしながら見るも酸鼻な姿になつてゐた。孝治は大きな眼を瞬いてじつとその死體を覗き込んでゐたが、ふいに唇をへの字なりに曲げたかとみるとそれなりぐたぐたと膝を折つて、激しく喉を鳴らしながらその場へ悶絶してしまつた。……

それから一時間ばかり經つと孝治は出面達の肩に擔がれておかねの死體と一緒にやつと農場へ歸つて來た。その時までは精神がまだ朦朧としてゐて、眼を空にさまよはせながら何を云ふのだかぶつぶつ埒もない事を呟きつゞけてゐた。使は直ぐさま馬で町の醫師の家へとんでゆく、お峯は前後不覺に泣き喚く、農場には再び嵐のやうな混亂が起つて來た。

七

悲慘な死態を遂げたおかねの亡骸はその翌日農場の裏山で燒かれて、遺骨は小さな壺へ入れられたまゝ佛壇の隅へ納められた。この附近には寺もなければ僧侶もゐないので、葬式といつても讀經などをするではなく、粗末な箱のやうな佛壇の前で至極簡單に執行はれてしまつた。小倉一家はかうして北海道へ移住はしてゐるものゝ一度は是非とも故鄕の千葉へ歸り住む希望をもつてゐるので、おかねの遺骨もいつかは鄕里の菩提所へ收めるつもりでそのまゝ佛壇の奧へ殘されたのであつた。

その騷ぎのなかにも山火の損害を視察する爲めに支廳からは態々林務官が出張してくる、町からは警官がやつて來る、それに附近の農場や、牧場からは見舞がてらに久濶を叙しやうとするやうな客達や、又燃え殘つた用材を買占めに來る怪しげな土地師などが續々と押しかけて來るので、農場は五月の耕作にさへ手の廻らぬやうな忙がしさに追はれてゐた。伊藤は耕地の方はもう出面達のなすがまゝに任せて、山の整理ゝ接客に殆んど夜の眼も眠らないやうな有樣だつた。孝治もお峯もその四五日は唯おろおろするばかりでまるで役には立たず、それに働き手の寅吉までが火傷のために戶外へ出ることも出來ないやうな始末なので、總ての責任は悉く伊藤ひとりの肩へ懸かつて來た。

山の方の損害は調査が進行するにつれて恐ろしい結果を現はして來た。なにしろ三日三晩も燃え續いたので一部の山林を殘してあとは殆んど全部烏有に歸してしまつてゐた。用材のなかには既に賣買の契約が成立つてゐたものもあつたし、今年の冬は十五年生の落葉松が三山ほども賣れる時期に達してゐたので、その損害は金に積もつてみても莫大な高に上つてゐるのであつた。これから先幾年も山を寢せて

置かなければならぬ苦痛や、當分は放牧地の方へも牛を入れることが出來ぬ損害などを勘定に入れてみると、小倉の農場にとつては今度の山火が殆んど致命の大打擊を與へたといつてもいゝのてあつた。固よりかうした農事本位の資産てあつてみれば、その打擊が今直ちに農場を破産させるやうなことはないかも知れないが、差しづめ此の夏、フシコナイを開墾する資金は塞がる、秋の收穫の時期になつても少なからぬ手違ひが起るに定まつてゐるので、今迄も大して好望てはなかつた小倉農場の前途が年々と暗雲に閉ざゝれてゆくのは火を睹るよりも明かてあつた。そして個人經營とは云ふものゝ、周圍を包む同縣人の共有林も悉く燒けてしまつたので、それから割りあてられる損害の負擔などもこの小倉農場の運命を左右する鍵になるかも知れないのてあつた。

農場ては每夜のやうにその善後策が相談された。根本的に農場を救濟しやうとするには此際莫大な努力と決心を要するので、絶望の底に沈淪した孝治には到底そんな大きな經綸などを立てることは出來なかつた。初めのうちはいろいろな空想らしい强い事も云ふが、しばらくすると直ぐに力なく語調を落として

「俺はもう駄目だ。もう到底こんな地方て成功する見込みはない。」などと、云ひながら眞蒼になつて涙含んてしまふのてあつた。そして孝治の頰には日に日に深い皺が刻まれてゆくばかりてあつた。

山火の原因についてはその後も幾度となく調査されたが、到頭誰れにも分らなくて、自然發火といふやうな取留めのない名義て官廳への屆けは無事に濟んだ。農場ては不思議にも音の方へ疑惑の眼を投げる者はひとりもなく、世間てありうちな牧夫の過失、出面の惡戯といつたやうな方面へばかり氣を配つ

てゐたので、これほど見易い犯罪が却つて露現しずに濟んだのであつた。それと同時におかねのことも矢張りそんな風でずるずるに解決してしまつた。山火に追はれて地隙へ遁げ込んでゐた處へ上から急に火が入つて來たので、恐ろしさ紛れに彼女をその儘放置つて遁げだしたのだと云ふ音自身の簡單な辯解を皆は默つて承認してゐた。あの氣の弱いアイヌがと思ふと、誰しも音の平常を知つてゐるだけに何等の疑ひを起す餘地もなかつた。殊にシユプカの河原で音を捕へた寅吉はその時の狂ほしい音の姿を思ひ出しながら、

「あれほど恐がつてゐやがつた處をみると、それ位なことをするのも無理はねえ、まるで氣狂ひだつたからなあ。」などゝ云つてその辯解に裏書きをしたのであつた。

音は大切な子を見殺ろしにしたと云ふので家ぢうのものからそれとなく敵意を示されてはゐたが、それでも以前のやうに矢張母家へ使はれ、晩は傭女達の納屋へ寐ながら犬のやうなその日その日を送つてゐた。さう思つてみると、彼の體にも、心にも格別眼にたつやうな變化はないやうであつた。唯人前へ出るのを厭がつて、暇な時には大方廐舍の裏の薪を割るところへ隱れて、一時間でも二時間でもそこでごろごろ寢そべつてゐるのが以前と異るぐらゐのことであつた。

八

それから十日ほど經つた或晩のことであつた。

その日は二里ばかり離れた佐々木の農場で山火の跡始末を講ずる寄合ひが催されたので、孝治は伊藤をつれて午後から馬でそつちへ出向いてゐた。と、夜に入ると間もなく彼は同縣人達と共有山林の處分

法に就いて恐ろしい激論を闘はしたと云つて、ひどく激昂しながらたつたひとりひよつくり歸つて來た。そして家へ歸ると直ぐ頭痛がするといふのでその儘臥床へ入つてしまつた。

お峯は格別氣にもかけなかつたが、後から大急ぎで歸つて來た伊藤の話に依ると孝治はその日どうしたものか云ふことが皆辻褄が合はなくて、さんざそこにゐた連中と爭論をした揚句、到頭山田農場の主人と掛り合ひまでしてふいと中坐してしまつたのだと云ふ。

「どうも俺も隨分旦那の肩を持つてみましたゞが、餘り云ふことが無茶なんて、しめえにはほんとにどうしやうかと思ひましたですよ。何しろ今度のことぢや旦那もえらく頭を使つたゞから、無理もねえでがすが、山田の旦那と立廻りを始めるんなんか餘りでがすかんな。次第に依つちや山田の方でも事をむづかしくしやしめえかとそれが俺心配でなんねえですよ。」伊藤はほとほと困つたと云ふやうに眉を顰めながら、お峯に訴へた。

お峯はその話をきくと今更らのやうに驚いて、こつそり良人の枕許へ行つて、それとなく容子を覗つてみた。此頃になつて滅切り窶れた彼の顔には薄暗い洋燈の光が集まつて、蟀谷や頰のあたりには何とも云へない陰鬱な影が澱んでゐる。それでも彼は何事もなくすやすやと安眠してゐるのであつた。

丁度眞夜中と思ふ頃であつた。遠くへ吹き落ちてゆく風の音もひそやかに更け靜まつて、四邊には未開の山野を掩ふ荒寥とした夜氣がひたと迫つて來るなかに、お峯は突如枕を並べた良人の臥床の方で異様な叫び聲を聞いた。吃驚して眼を瞬くと、良人はいつの間にか臥床の上にがばと刎ね起きて、油煙で燻ぶつた洋燈をきつと見据ゑながら

「音ッ。音ッ。音ぢやねえか。」と、腹の底から絞り出すやうな聲で叫んでゐる。
「まあ、あんた。どうしたゞあね。」お峯はそれをみると自分も起き上りながら云つた。
「音ッ。音がゐるだらう。」孝治は同じことを繰り返して今度はお峯の方へ眼をやつた。
「まあ、あんた。何にを云つてるだあね。音なんかゐやあしねえよ。音は納屋へ寢てゐるぢやないか。」
「嘘を云ふねえ。確かにあの障子の向ふにゐるんだ。そんな處へ隱れてゐやがつたつて今にみろ。引摺り出して打殺ろして吳れるからな。」
さう云ふうちにも彼の顏は鳥肌だつて、ぶるぶる蠢めく筋肉の上には脂汗がじたじた滲んで來た。
お峯はぞうつとした。
孝治は荒々しく言葉をつゞけて、
「お峯。手前にはまだ分るめえが、あの音つてえ奴あ實におつかねえ奴なんだぜ。彼奴め今迄散々皆にいぢめられたもんだから、我々日本人に恨みをもつてゐやがつて、いつか讐を打たう打たうと思つてゐるんだぜ。此間から頻りに俺あをつけ狙つてゐやがつて、夜になるときまつてあそこの障子のところから覘きやがつる。こんなことをしてゐりや家の者は皆殺ろされちまう。家の者ばかりぢやねえ、日本國中の人間は殘らず彼奴の手に懸つて殺ろされちまうんだ。それをちつとも知らねえて、うかうかしてゐやがる奴の氣が知れねえ。俺あもう歯痒くつて歯痒くつて耐らねえんだ。」
孝治は眞顏で云つて、じつとお峯い顏を見入つた。お峯は、その刹那、長年連れそつた良人の顏がまるで別人に變つてしまつたやうに見えて、突如立ち上りざま寅吉の寢てゐる先隣の間へ驅け込んで行つ

た。

「寅さん、寅公。早く起きてお呉れよ、叔父さんが變だから。」お峯はおろおろ聲を慄はしながらよく寢入つてゐる寅吉を搖り起した。そして彼が恢復期に入つた火傷の膏藥を氣にしながらむつくり起き上つて來るのをみると、いきなりその肩を攫んでものをも云はず寢間の方へ引立てゝ行つた。

二人はそこの唐襖の陰へ身を潛めて少時の間息を凝らしながら内の樣子を覗つてゐた。孝治は誰れか相手でもゐるやうなしかりした聲で、頻りに獨語を云つてゐる。

「……いや、お前は何んにも知らねえんだ。何にも知らねえんだよ。此間おかねを殺ろしやがつたのは何を云つたつて彼奴の仕業に違えねえさ。彼奴はあん時おかねの手や足を捥ぎつちや山火の中へ抛り込んでゐやがつた。俺あよく見て知つてるんだけど、今迄態と默つてゐてやつたんだ。……おや、おかねがひどく泣いてゐやがるな。あんなに泣かせると又疳が起るがなあ。」さういふ聲も平常のやうに落着いてゐて、煙草をとつて火をつける格好などはちつとも變てはなかつた。そして餘程疲れきつてゐると見えて、そんなことを云つてゐながら眼を瞑ぶつてこくりこくり居眠をしてゐた。

「あゝ、とうとう氣が狂つちやつたゞね。」お峯は傷ましさうに寅吉の耳へ呀いて、聲を呑みながらしくしく泣きだした。

或日の午後であつた。

山火、愛兒の死、主人の發狂と打續く凶變に日一日と四邊の樣子が暗く寂しく沈んでゆく小倉農場の

母家では、突然、眞晝の靜けさを劈いて一發の銃聲が響き渡つた。主人の孝治はその時見張りにつけてあつた寅吉が便所へ入つた留守に隱してあつた短銃をこつそり盜みだして、折柄すぐ窓の下で馬鈴薯を干してゐた音の後頭部を眞向から狙擊したのであつた。射界が餘りに近過ぎたので、憐れなアイヌの子は頭蓋骨をぐづぐづに擊碎かれ、石榴のやうに破裂した前額から腦漿を迸らせながら乾きゝつた明るい五月の土の上へ倒れた。そしてお峯や伊藤が集まつて來た頃には、孝治はさも氣がのびのびしたやうにけろりとして、窓枠へ頰杖をつきながらぷかりぷかりと煙草の烟を吐いてゐた。(をわり)